

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第98集

郷上遺跡

2002

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県豊田市は、県のほぼ中央に位置します。市域は三河山地から平野部にかけて広がり、西三河随一の大河である矢作川の流れる自然豊かな地です。また、近代的な各種産業の発達している東海地方においてその中心となる地域であり、自動車産業などはとりわけ隆盛を極めています。

近年、産業の発達によりますます開発が進み、これにともなう埋蔵文化財の調査が増えています。今回の郷上遺跡の調査は第二東海自動車道(第二東名)にともなうものであり、産業の発達と軌を一にする交通の増加を因とするものです。この調査により矢作川中流域の古代の人々の生活、中世から近世にかけての村の様子の一端が明らかになってきたと思われます。本書はその成果をまとめたもので、この地域の歴史を考える上での一助となることができましたなら幸いです。

最後に、発掘調査にあたりまして御理解、御協力をいただきました地元住民の方々をはじめ、関係者並びに関係各機関に厚く御礼を申し上げます。

平成14年8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター
理事長 久留宮泰啓

例　言

1. 本書は、愛知県豊田市大字鶯鶯地内に所在する郷上遺跡（遺跡番号 63-430）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第二東海自動車道の建設に伴うもので日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて委託され、財團法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。整理作業および報告書作成は、事業を引き継いだ財團法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査期間は平成9年4月から同10年9月までである。
4. 調査は、赤塚次郎、伊藤秀紀（現大府養護学校教諭）、伊藤太佳彦（現知多東高校教諭）、春日井毅（現一宮市立西小学校教諭）、加藤博紀（現蟹江高校教諭）、川井啓介、木下一（現西尾市立西尾中学校教諭）、後藤英史（現名古屋西高校教諭）、鈴木正貴、永井邦仁、樋上昇、酒井俊彦が担当した。
5. 調査に際して以下の関係機関から指導・協力を受けた。
愛知県教育委員会文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・豊田市教育委員会・日本道路公団
名古屋建設局及び豊田工事事務所
6. 遺物整理、図版作成については以下の方々の協力を得た。
調査研究補助員 小嶋そのみ、水野多栄、整理補助員 伊藤友子、川名詳子、近藤文子、園部朋子、
手嶋悦子、長谷川ゆかり（敬称略）
7. 出土遺物の自然科学的分析について以下のように外部委託を行い、その結果を掲載した。

戦国時代土師器鍋胎土分析	（株）パリノ・サーベイ
山茶椀胎土分析	（株）第四紀地質研究所
金属関連遺物分析	（株）川崎テクノリサーチ

戦国時代・近世の漆器の漆分析は、北野信彦氏（くらしき作陽大学）に依頼した。
8. 本書執筆は、鬼頭剛、鈴木正貴、永井邦仁、堀木真美子、水野多栄、酒井俊彦が行った。文責は文頭または文末に記す。編集は、酒井俊彦が行った。
9. 今回の調査に使用した方位・座標は建設省（現国土交通省）の定めた平面直角座標第VII系に基づくものであり、海拔座標はT.P.（東京湾平均海面高度）による。表記は、旧基準「日本測地系」とした。
10. 調査及び本書の作成にあたり、次の諸氏及び関係機関に御指導・御協力を頂いた。
増山祐之、鈴木昭彦、立松彰、森達也、藤澤良祐、北村和宏、城ヶ谷和広、鶯鶯公民館（順不同、敬称略）

目 次

第1章 調査の概要

第1節	調査の経緯と経過	1
第2節	遺跡の立地と環境	4

第2章 遺構

第1節	基本層序と時期区分	8
第2節	古墳時代の遺構	13
第3節	古代の遺構	27
第4節	中世の遺構	37
第5節	戦国時代・近世の遺構	40
第6節	中世・近世の井戸	66

第3章 遺物

第1節	土器・陶磁器	100
第2節	石製品	221
第3節	木製品	229
第4節	金属製品	256
第5節	その他の遺物	260

第4章 自然科学的分析

第1節	郷上遺跡出土山茶椀の胎土分析	283
第2節	戦国時代土師器鍋の胎土分析	292
第3節	郷上遺跡出土の鉄器・鉄滓および羽口等の分析・調査	309
第4節	郷上遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	317
第5節	郷上遺跡出土井戸材の樹種同定	327
第6節	矢作川沖積低地北部、郷上遺跡における古環境解析	333
第5章	まとめ	339

挿図目次

第 1 図 調査区位置図	3	第 46 図 屋敷地区画(7)	59
第 2 図 遺跡位置	5	第 47 図 区画溝断面図(6-1)	60
第 3 図 遺跡立地	6	第 48 図 区画溝断面図(6-2)	61
第 4 図 周辺遺跡	7	第 49 図 区画溝断面図(7)	61
第 5 図 基本縦序	9	第 50 図 SB112 平面図・断面図	62
第 6-1 図 古墳時代竪穴住居址群(1)	14	第 51 図 SB113 平面図・断面図	62
第 6-2 図 古墳時代竪穴住居址群(2)	15	第 52 図 SB114 平面図・断面図	63
第 7 図 SB18 土坑平面図・断面図	16	第 53 図 SB116 平面図・断面図	63
第 8 図 SB30 土坑平面図・断面図	16	第 54 図 97F 区柱根石出土状態図	64
第 9 図 SB22 竪平面図・断面図	16	第 55 国 97D 区柱根石出土状態図	64
第 10 国 SB31 竪平面図・断面図	17	第 56 国 97A 区柱根石出土状態図	65
第 11 国 SB25 竪平面図・断面図(1)	17	第 57 国 97D 区 SK154・SX38	65
第 12 国 SB25 竪平面図・断面図(2)	17	第 58 国 井戸平面図・断面図(1)	76
第 13 国 SD208 平面図・断面図	19	第 59 国 井戸平面図・断面図(2)	77
第 14-1 国 古墳時代溝群平面図・断面図(1)	20	第 60 国 井戸平面図・断面図(3)	78
第 14-2 国 古墳時代溝群平面図・断面図(2)	21	第 61 国 井戸平面図・断面図(4)	79
第 15-1 国 SD201 平面図・断面図(1)	22	第 62 国 井戸平面図・断面図(5)	80
第 15-2 国 SD201 平面図・断面図(2)	23	第 63 国 井戸平面図・断面図(6)	81
第 16 国 SD209 平面図・断面図	25	第 64 国 井戸平面図・断面図(7)	82
第 17 国 SD210 平面図・断面図	26	第 65 国 井戸平面図・断面図(8)	83
第 18 国 SB11 平面図・断面図	27	第 66 国 井戸平面図・断面図(9)	84
第 19 国 SB10 平面図・断面図	29	第 67 国 井戸平面図・断面図(10)	85
第 20 国 SB01 平面図・断面図	30	第 68 国 井戸平面図・断面図(11)	86
第 21 国 SB02 平面図・断面図	30	第 69 国 井戸平面図・断面図(12)	87
第 22 国 SB12 平面図・断面図	30	第 70 国 井戸平面図・断面図(13)	88
第 23 国 SB13 平面図・断面図	30	第 71 国 井戸平面図・断面図(14)	89
第 24 国 竪穴住居址北群平面図・断面図	31	第 72 国 井戸平面図・断面図(15)	90
第 25-1 国 竪穴住居址南群平面図・断面図(1)	32	第 73 国 井戸平面図・断面図(16)	91
第 25-2 国 竪穴住居址南群平面図・断面図(2)	33	第 74 国 井戸平面図・断面図(17)	92
第 26 国 97F 区 SK843 遺物出土状態図	35	第 75 国 井戸平面図・断面図(18)	93
第 27 国 SD211 平面図・断面図	35	第 76 国 井戸平面図・断面図(19)	94
第 28 国 SB16 平面図・断面図	36	第 77 国 井戸平面図・断面図(20)	95
第 29 国 97F 区 SK304 遺物出土状態図	37	第 78 国 井戸平面図・断面図(21)	96
第 30 国 SX22 平面図・断面図	37	第 79 国 井戸平面図・断面図(22)	97
第 31-1 国 中世小土坑分布(1)	38	第 80 国 井戸平面図・断面図(23)	98
第 31-2 国 中世小土坑分布(2)	39	第 81 国 井戸平面図・断面図(24)	99
第 32 国 屋敷地区画(1)	45	第 82 国 古墳時代の遺物(1)	103
第 33 国 区画溝断面図(1-1)	46	第 83 国 古墳時代の遺物(2)	104
第 34 国 区画溝断面図(1-2)	47	第 84 国 古墳時代の遺物(3)	105
第 35 国 屋敷地区画(2)	48	第 85 国 古墳時代の遺物(4)	106
第 36 国 区画溝断面図(2-1)	49	第 86 国 古墳時代の遺物(5)	107
第 37 国 区画溝断面図(2-2)	50	第 87 国 古墳時代の遺物(6)	108
第 38 国 屋敷地区画(3)	51	第 88 国 古墳時代の遺物(7)	109
第 39 国 区画溝断面図(3-1)	52	第 89 国 古墳時代の遺物(8)	110
第 40 国 区画溝断面図(3-2)	53	第 90 国 古墳時代の遺物(9)	111
第 41 国 屋敷地区画(4)	54	第 91 国 古墳時代の遺物(10)	112
第 42 国 区画溝断面図(4)	55	第 92 国 古墳時代の遺物(11)	113
第 43 国 屋敷地区画(5)	56	第 93 国 古代の遺物(1)	121
第 44 国 区画溝断面図(5)	57	第 94 国 古代の遺物(2)	122
第 45 国 屋敷地区画(6)	58	第 95 国 古代の遺物(3)	123

第 96 図	古代の遺物(4)	124
第 97 図	古代の遺物(5)	125
第 98 図	古代の遺物(6)	126
第 99 図	古代の遺物(7)	127
第 100 図	古代の遺物(8)	128
第 101 図	古代の遺物(9)	129
第 102 図	中世の遺物(1)	132
第 103 図	中世の遺物(2)	133
第 104 図	中世の遺物(3)	134
第 105 図	戦国時代・近世の遺物(1)	150
第 106 図	戦国時代・近世の遺物(2)	151
第 107 図	戦国時代・近世の遺物(3)	152
第 108 図	戦国時代・近世の遺物(4)	153
第 109 図	戦国時代・近世の遺物(5)	154
第 110 図	戦国時代・近世の遺物(6)	155
第 111 図	戦国時代・近世の遺物(7)	156
第 112 図	戦国時代・近世の遺物(8)	157
第 113 図	戦国時代・近世の遺物(9)	158
第 114 図	戦国時代・近世の遺物(10)	159
第 115 図	戦国時代・近世の遺物(11)	160
第 116 図	戦国時代・近世の遺物(12)	161
第 117 図	戦国時代・近世の遺物(13)	162
第 118 図	戦国時代・近世の遺物(14)	163
第 119 図	戦国時代・近世の遺物(15)	164
第 120 図	戦国時代・近世の遺物(16)	165
第 121 図	戦国時代・近世の遺物(17)	166
第 122 図	戦国時代・近世の遺物(18)	167
第 123 図	戦国時代・近世の遺物(19)	168
第 124 図	戦国時代・近世の遺物(20)	169
第 125 図	戦国時代・近世の遺物(21)	170
第 126 図	戦国時代・近世の遺物(22)	171
第 127 図	戦国時代・近世の遺物(23)	172
第 128 図	戦国時代・近世の遺物(24)	173
第 129 図	戦国時代・近世の遺物(25)	174
第 130 図	戦国時代・近世の遺物(26)	175
第 131 図	戦国時代・近世の遺物(27)	176
第 132 図	戦国時代・近世の遺物(28)	177
第 133 図	戦国時代・近世の遺物(29)	178
第 134 図	戦国時代・近世の遺物(30)	179
第 135 図	戦国時代・近世の遺物(31)	180
第 136 図	戦国時代・近世の遺物(32)	181
第 137 図	戦国時代・近世の遺物(33)	182
第 138 図	戦国時代・近世の遺物(34)	183
第 139 図	戦国時代・近世の遺物(35)	184
第 140 図	戦国時代・近世の遺物(36)	185
第 141 図	戦国時代・近世の遺物(37)	186
第 142 図	戦国時代・近世の遺物(38)	187
第 143 図	戦国時代・近世の遺物(39)	188
第 144 図	戦国時代・近世の遺物(40)	189
第 145 図	戦国時代・近世の遺物(41)	190
第 146 図	戦国時代・近世の遺物(42)	191
第 147 図	戦国時代・近世の遺物(43)	192
第 148 図	戦国時代・近世の遺物(44)	193
第 149 図	戦国時代・近世の遺物(45)	194
第 150 図	戦国時代・近世の遺物(46)	195
第 151 図	戦国時代・近世の遺物(47)	196
第 152 図	戦国時代・近世の遺物(48)	197
第 153 図	戦国時代・近世の遺物(49)	198
第 154 図	戦国時代・近世の遺物(50)	199
第 155 図	戦国時代・近世の遺物(51)	200
第 156 図	戦国時代・近世の遺物(52)	201
第 157 図	戦国時代・近世の遺物(53)	202
第 158 図	戦国時代・近世の遺物(54)	203
第 159 図	戦国時代・近世の遺物(55)	204
第 160 図	戦国時代・近世の遺物(56)	205
第 161 図	戦国時代・近世の遺物(57)	206
第 162 図	戦国時代・近世の遺物(58)	207
第 163 図	戦国時代・近世の遺物(59)	208
第 164 図	戦国時代・近世の遺物(60)	209
第 165 図	戦国時代・近世の遺物(61)	210
第 166 図	戦国時代・近世の遺物(62)	211
第 167 図	戦国時代・近世の遺物(63)	212
第 168 図	戦国時代・近世の遺物(64)	213
第 169 図	戦国時代・近世の遺物(65)	214
第 170 図	戦国時代・近世の遺物(66)	215
第 171 図	戦国時代・近世の遺物(67)	216
第 172 図	戦国時代・近世の遺物(68)	217
第 173 図	戦国時代・近世の遺物(69)	218
第 174 図	戦国時代・近世の遺物(70)	219
第 175 図	戦国時代・近世の遺物(71)	220
第 176 図	石製品(1)	223
第 177 図	石製品(2)	224
第 178 図	石製品(3)	225
第 179 図	石製品(4)	226
第 180 図	石製品(5)	227
第 181 図	石製品(6)	228
第 182 図	木器類(1)	239
第 183 図	木器類(2)	240
第 184 図	木器類(3)	241
第 185 図	木器類(4)	242
第 186 図	木器類(5)	243
第 187 図	木器類(6)	244
第 188 図	木器類(7)	245
第 189 図	井戸材(1)	246
第 190 図	井戸材(2)	247
第 191 図	井戸材(3)	248
第 192 図	井戸材(4)	249
第 193 図	井戸材(5)	250
第 194 図	井戸材(6)	251
第 195 図	井戸材(7)	252

第 196 図 井戸材(8)	253
第 197 図 井戸材(9)	254
第 198 図 井戸材(10)	255
第 199 図 金属器(1)	257
第 200 図 金属器(2)	258
第 201 図 銭貨	259
第 202 図 貿易陶磁(1)	261
第 203 図 貿易陶磁(2)	262
第 204 図 墨書き、刻書のある土器・陶器	264
第 205 図 製塙土器	265
第 206 図 土鍤・陶鍤	267
第 207 図 金属関連遺物(1)	272
第 208 図 金属関連遺物(2)	273
第 209 図 金属関連遺物(3)	274
第 210 図 瓦(1)	278
第 211 図 瓦(2)	279
第 212 図 瓦塔(1)	280
第 213 図 瓦塔(2)	281
第 214 図 墓輪	282
第 215 図 三角形ダイヤグラム位置分類図	286
第 216 図 菱形ダイヤグラム位置分類図	286
第 217 図 Qt - PI 図(郷上遺跡 + 潬戸窯跡)	288
第 218 図 Qt - PI 図(郷上遺跡 + 水無瀬窯跡)	288
第 219 図 SiO ₂ - Al ₂ O ₃ 図(郷上遺跡 + 潬戸窯跡)	289
第 220 図 SiO ₂ - Al ₂ O ₃ 図(郷上遺跡 + 水無瀬窯跡)	289
第 221 図 Fe ₂ O ₃ - MgO 図(郷上遺跡 + 潬戸窯跡)	290
第 222 図 Fe ₂ O ₃ - MgO 図(郷上遺跡 + 水無瀬窯跡)	290
第 223 図 K ₂ O - CaO 図(郷上遺跡 + 潬戸窯跡)	291
第 224 図 K ₂ O - CaO 図(郷上遺跡 + 水無瀬窯跡)	291
第 225 図 胎土重鉱物組成(1)	299
第 226 図 胎土重鉱物組成(2)	300
第 227 図 胎土中の重鉱物	301
第 228 図 胎土重鉱物組成	307
第 229 図 胎土中の重鉱物	308
第 230 図 近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法	323
第 231 図 漆塗り構造の分類	323
第 232 図 電子マイクロアナライザー(EPMA)分析結果	324
第 233 図 年代別蒔絵材料の変遷(集計例)	325
第 234 図 本遺跡を含む在郷性の強いと考えられる一括出土漆器資料の組成の傾向(集計例)	325
第 235 図 代表的な樹種同定写真	326
第 236 図 漆塗り構造の分類(断面観察写真)	326
第 237 図 木材組織顕微鏡写真	332
第 238 図 97C区疊層の疊径分布	337
第 239 図 97C区疊の形状分類	337
第 240 図 97C区疊の円周度	337
第 241 図 97C区疊の衝撃痕跡の有無	337
第 242 図 97C区疊層の個数百分率で表した疊構成	337
第 243 図 97C区 SD201 の珪藻化石群集	338
第 244 図 97A区 SD201 の植物珪酸化体化石群集	338
第 245 図 97A区 SD201 の珪酸化石群集	338

表目次

第 1 表 調査工程	1
第 2 表 石製品組成	222
第 3 表 胎土性状表	286
第 4 表 化学分析表	287
第 5 表 土器分類表	287
第 6 表 胎土重鉱物分析結果(1)	296
第 7 表 胎土重鉱物分析結果(2)	297
第 8 表 胎土重鉱物分析結果(分類別)(1)	298
第 9 表 胎土重鉱物分析結果(分類別)(2)	298
第 10 表 各器種の胎土	305
第 11 表 胎土中の重鉱物	306
第 12 表 化学成分分析結果	316
第 13 表 出土漆器資料観察表	322
第 14 表 ろくろ挽き物の用材分類一覧表	323
第 15 表 井戸材に利用された樹種	328
第 16 表 井戸毎の樹種構成	329
第 17 表 分析試料一覧	331
第 18 表 郷上遺跡における放射性炭素年代 ..	334

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯

今回の本遺跡の調査は、第二東海自動車道（第二東名）の建設に伴うもので、愛知県教育委員会を通じて日本道路公団名古屋建設局の委託を受けて（財）愛知県埋蔵文化財センター（当時）が実施したものである。

工事開始に先立って、平成8年度に当地域の建設用地内において遺跡の範囲確認のための試掘調査を行い、平成9年度から10年度にかけて本調査を実施した。

郷上遺跡は愛知県豊田市鶯鴨町郷上地内に所在する。この地域は矢作川流域に沿った沖積地であり、大部分が水田耕作地あるいは畑作地として利用されている。地域周辺は、耕地整理により整備された耕作地となっており、近世以前の土地割りなどの旧来の土地景観は全く失われている。遺跡の北西側の台地上には、現在の鶯鴨の集落が所在している。

今回の調査以前には、郷上地内の遺跡については遺跡の東側に所在する弥生時代の遺物散布地について若干の知見があるのみで、本遺跡に対しては考古学的な調査の対象となる遺跡としての認識はなかった。しかし、現在の台地上の集落は近世前半までは郷上地内に展開し、18世紀後半遭構に移転してきたことが周知されており、戦国時代から近世の陶磁器類が採取されることが一部で認識されていた。移転以前は鶯鴨には東西の2集落が存在し、郷上地内を東辺として矢作川に近い地域一帯に広がっていたことが、集落に残されている古文書などに記載されている。試掘調査の結果遭構、遺物が認められ、戦国期から近世の遺物の検出されたことによりこのことが再確認され、遺跡として調査の対象となった。

調査区	調査面積 (m ²)	1997				1998				調査担当者
		4	6	8	10	12	2	4	6	
97A	3100									鈴木 加藤
97B	2200									植上 木下
97C	4000									植上 木下
97D	3800									酒井 伊藤（秀）
97E	3600									酒井 伊藤（秀）
97F	3650									酒井 伊藤（秀）
98A	3250									伊藤（太）春日井 川井
98B	2500									酒井 伊藤（秀）
98C	900									水井 順藤

第1表 調査工程

2. 調査の経過

平成8年度の試掘調査では、北東から南西にのびる道路用地内中央に、試掘トレンチ(65ヶ所480m²)を設定し、遺跡の範囲を確認する作業を行った。その結果、北東側は国道248号線付近から南西側は東名高速道と第二東海自動車道のインターチェンジ用地付近までのほぼ800m間に遺跡が展開することが明らかになった。

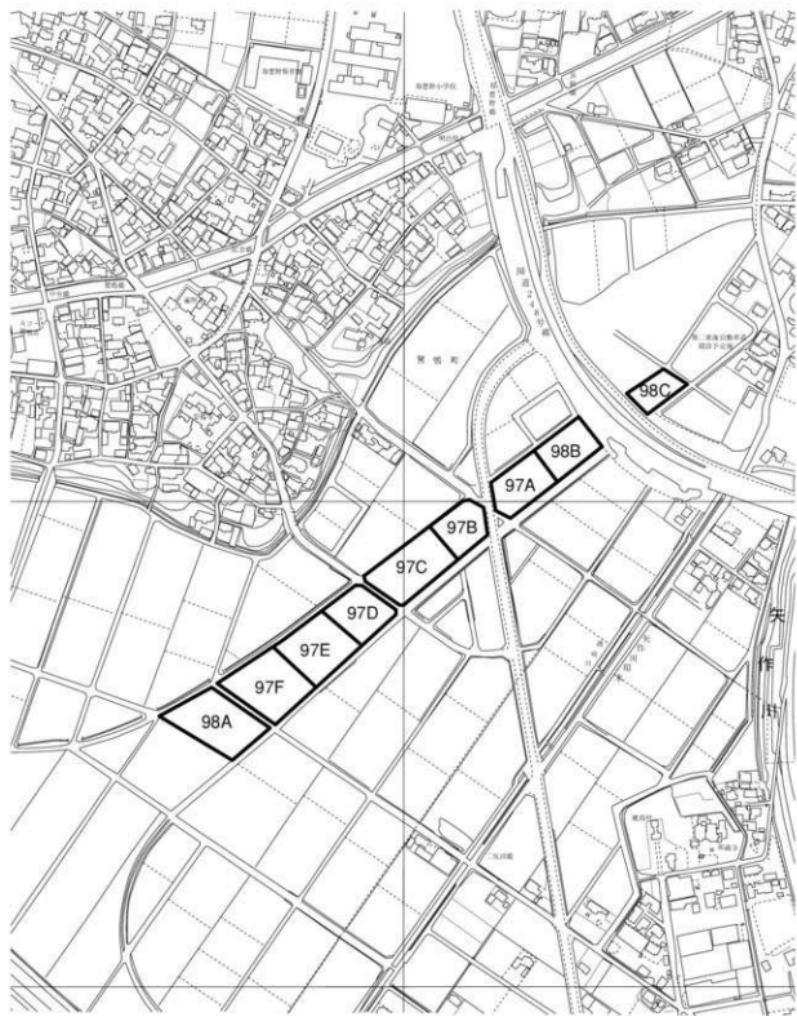
平成9年度は、前年度結果に基づいて、遺跡の中央部分に北東から南西にかけて97A～97Fの6調査区を設定した。総調査面積は、20350m²である。調査体制として、同時に最大3調査区を並行して調査を行った。

平成10年度は、遺跡の北東端と南西端の調査を行った。97Aの北側に接して98B区を設定し、さらにその北東に国道248号線を挟んで98C区を設定した。また、97F区の北側に98A区を設定した。総調査面積は、6650m²である。3調査区は同時並行で調査を行った。平成9・10年度の調査面積は、総計27000m²である。

調査の方法としては、基本的に中世から近世にかけての時期を中心とする遺構を同一面で調査する1面の調査であるが、97A区は間層を挟んで下面に古墳時代から平安時代の遺構が確認され、2面の調査を行った。遺構面上には現在の水田あるいは畑の耕作土がのり、これを重機等で掘り下げる遺構面を露出させた。97D・E区などでは、三河西岸地震などの影響で埴砂による遺構面の破壊が著しい部分や、近年の砂の採取による搅乱が激しい調査区も存在した。また、沖積地の湧水が多い部分があり、ウェルポイントによって地下水を組み上げながら調査を行い、比較的深い掘り込みの遺構、特に井戸の調査に威力を発揮した。

調査終了後、平成12年度から13年度にかけて本センターの豊田事務所において出土した遺物、および資料の整理を行った。出土遺物は、土器、陶磁器類に関しては、本センターが標準的に使用している、容積27Lのコンテナで約600箱であり、その他、井戸材などの木製品数千点などが出土した。

(酒井俊彦)



第1図 調査区位置図

第2節 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の地理的環境

郷上遺跡は、愛知県のほぼ中央を流れる矢作川中流域の右岸に位置する。標高は約20mを測る。愛知県の北部の山地から流れ出した矢作川は南流し、豊田市域で台地部を流れ、その南部で沖積平野に移行する。三河平野をさらに30Kmほど南下した矢作川は、やや東に方向を変えて三河湾に注ぐ。

遺跡は、この台地部から平野部に移行する地点に所在する。矢作川の右岸は北部の猿投山を起点とする北東から南西に方向に下る洪積台地となっている。台地は6面にわけて考えられているが、遺跡の北西に近接する段丘は平野部に大きく広がる最下面の碧海面にあたり、その北辺部である。遺跡の対岸は、狭い段丘面を挟んで三河高原の山地帯である。矢作川は、ここまで洪積台地部を流下してきたが、これより下流部では平野部の沖積地を形成しながら海岸部に達する。

碧海台地の東側縁辺は遺跡付近で南流する矢作川より離れて北東から南西方向に延びていく。遺跡の位置する沖積地はこの南東側に広がり、比高差は8~10数mである。遺跡は、この台地の縁辺に近接してこれに平行する形で矢作川に挟まれた地域の沖積地に広がる。調査範囲の制約により、遺跡の東限は確認することはできなかったが、近世の古文書及び、地名などから郷上遺跡を北西辺として近世の居住域が矢作川側に数百mにわたって展開するものと推測される。

遺跡の周囲は、大部分は区画された平坦な水田地帯となっており、近世以前の細かい地形を推測させるものはほとんど存在しない。矢作川は現在天井川化しており、高い堤防によって川岸を囲まれている。18世紀以降は氾濫を繰り返しているが、それ以前は恒常に居住域が存在することから、このような景観は近世後半以降の築堤など人工的な作業によって形成されたものである。

2. 遺跡の歴史的環境

郷上遺跡近辺は、碧海台地上を中心に各時代の遺跡が展開する。

矢作川右岸の遺跡数は少ないが、旧石器時代の遺跡としては、大明神B遺跡があげられる。後期旧石器時代の細石刃などを出土している。近年本センターがかかわった調査として、水入遺跡で後期旧石器時代のナイフ形石器、彫器や原石が出土し、当時の礫群が検出されている。両遺跡とも、碧海台地上に所在する。また、対岸の矢作川左岸の台地上および山間地の遺跡などでも、後期旧石器時代のナイフ形石器などが出土してする石田東遺跡、岩御堂遺跡、干地遺跡、八反田遺跡等が分布する。

縄文時代は、中期から晩期の遺物が出土している。発掘調査によるものはあまりなく、いずれも表面採取などで確認されている。矢作川右岸では大部分の遺跡は碧海台地縁辺に近い部分に立地する。中期の遺物が検出された例として、西轟目遺跡がある。晩期は比較的多く、高岡遺跡、大明神A遺跡、矢追B遺跡、神明A遺跡、大清水遺跡などがある。本センターが調査した今町遺跡では、少量ながら中期中葉～後葉、後期前葉および晩期中葉の土器が検出され、後期と考えられる円形堅穴住居1棟が検出された。同じく、水入遺跡では、中期の円形堅穴住居4棟が検出され、比較まとまって中期中葉から後葉の時期の遺物が出土している。左岸は、

時期は不明であるが、石田東遺跡、年重遺跡、車塚遺跡などの遺物散布地が、段丘上に分布している。

弥生時代の遺跡は、中期の遺跡が右岸の碧海台地縁辺部に点在する。神明遺跡では、1966年に中期の竪穴住居が6棟検出されている。本センターが、1997～98年にかけて調査した川原遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居200棟以上、大規模な方形周溝墓などが検出されている。川原遺跡は、從来台地上のみに分布していたこの時期の遺跡が、沖積地にも分布していることを示し、今後の調査の対象を示唆するものである。

古墳時代の遺跡は、それまでの各時代に比べ増大する。碧海台地上には高岡古墳群、西轟古墳、鳥狩塚古墳、三味線塚古墳、車塚古墳などの後期古墳が分布する。左岸には、石田古墳群、車塚古墳群、岩津古墳群など後期古墳が多く分布する。集落址としては1966年および1992～1993年に調査された神明遺跡がある。竪穴住居70棟以上、掘立柱建物、溝、土坑などが確認され、この地域の古墳時代の指標となる遺跡である。本センターが1997年に調査した矢追遺跡は5世紀代の大墓建物3棟を検出した全国的に貴重な遺跡である。また、同じく本センターが調査した同時期の遺跡として本川遺跡が存在する。矢作川の沖積地上に立地しており、5世紀代の竪穴住居100棟以上が検出され、この時期の集落についても沖積地の調査の今後のあり方を示すものと考えられる。水入遺跡でもこの時期の竪穴住居が数棟検出され、本遺跡に関連するものと考えられる5世紀代の大溝が台地上に掘削されている。



第2図 遺跡位置(1/500000)

※この図は、国土地理院発行の1/50万地図
「名古屋」・「豊橋」を使用したものである。

古代の遺跡としては、神明瓦窯がある。岡崎市北野庵寺で採取された素弁六弁蓮華文軒丸瓦を出土しており、同庵寺の瓦窯の1つであったと推定されている。郷上遺跡の今回の調査以前に、調査域の東側近辺に須恵器、灰釉陶器が出土する地点が存在し、郷上遺跡とされていても、土地整備のために消失したとされている。奈良・平安時代の遺跡はこの地域ではあまり認知されていない。

中世の遺跡としては、城館が多くを占める。鶴鶴城跡は碧海台地の舌状の先端部に位置する15世紀後半から16世紀中葉の城館とされる。中世の城館とされるものは、ほとんどが15・16世紀の時期のものであり、矢作川右岸では上野城跡、下村城跡、左岸では細川城山城跡、細川城跡、岩津新城跡、岩津大膳城跡など流域の軍事的拠点に立地する。この時期の集落としては水入遺跡が存在する。中世前半は土坑墓が密集し、墓域の性格が強いが、後半から近世初頭にかけては区画溝を有する居住域が形成され、台地上の集落が成立する。郷上遺跡と同時期であり、関連が注目される。

近世の遺跡として認識されている遺跡はあまり存在しない。水入遺跡は近世初頭に廃絶する。鶴鶴集落は18世紀前半まで沖積低地上に立地し、江戸時代中期の度重なる矢作川の洪水によって洪積台地上の現在の位置に移動したが、このような動きはこの地域の一般的な集落の様相とされる。現在は遺跡と認識されていないが、今後の調査によってこれと同様の近世遺跡の事例が増えることが予想される。

(酒井俊彦)



第3図 遺跡立地

- 1 郡上遺跡
 2 天神前遺跡
 3 水入遺跡
 4 川原遺跡
 5 本川遺跡
 6 矢追遺跡
 7 今町遺跡
 8 大谷古墳
 9 池ノ表古墳
 10 菊師山古墳
 11 小坂田遺跡
 12 河合遺跡
 13 高岡遺跡
 14 高岡第1号墳
 15 高岡第2号墳
 16 高岡第3号墳
 17 横戸遺跡
 18 鳥狩塚古墳
 19 大明神A遺跡
 20 大明神B遺跡
 21 西禮目古墳
 22 西禮目遺跡
 23 北田遺跡
 24 小浜間遺跡
 25 神明A遺跡
 26 神明瓦窯跡
 27 六木未遺跡
 28 矢追A遺跡
 29 矢追B遺跡
 30 三塚城塚古墳
 31 神明B遺跡
 32 鶴鶴城跡
 33 大清水遺跡
 34 上野城跡
 35 下村城跡
 36 福川城山城跡
 37 墓水城跡
 38 竹門前遺跡
 39 石田前2号墳
 40 岩津堂遺跡
 41 上古墳
 42 瀬川城跡
 43 しんぞう塚古墳
 44 仁木八幡宮遺跡
 45 干地遺跡
 46 八反田遺跡
 47 年重遺跡
 48 年重遺跡
 49 東堀跡
 50 車塚跡
 51 斎御所遺跡
 52 車塚第1号墳
 53 斎御所南遺跡
 54 岩津第1号墳
 55 岩津第2号墳
 56 岩津第3号墳
 57 岩津第4号墳
 58 岩津第5号墳
 59 岩津第6号墳
 60 岩津城跡
 61 岩津大塚古墳
 62 龍田大塚古墳



第4図 周辺遺跡(1/50000)

※この図は、国土地理院発行 1/25000 地形図
「豊田南部」を使用したものである。

第2章 遺構

第1節 基本層序と時期区分

1. 基本層序

郷上遺跡は、矢作川の氾濫原および自然堤防上に立地する。旧地形としては多少の起伏があつたものと考えられるが、現在の区画整理された耕作地の状況からはほとんど推測することはできない。遺跡の基本層序について調査区のまとまりの単位で概観する。

(1) 98C区

他の調査区から距離をおいて東北端に位置する。現表土は、厚さ30~40cmの黒褐色の水田耕作土及び床土で、その下部に厚さ40cmの中粒~粗粒砂の堆積層を挟んで基盤の灰色シルトに達する。検出は主にシルト面で行った。検出面の標高は21.1~21.4mである。矢作川に近接した調査区であり、基盤全面に白~灰白色の中粒~粗粒砂の洪水性の堆積層がのる。1940年代の地震で基盤の液状化現象がおこり、その影響で下層からの粗粒砂の噴出している部分が調査区のかなりの割合の面積で認められる。このため、検出面は不安定で遺構も地震の影響で変形を受け、検出が難しい状況であった。

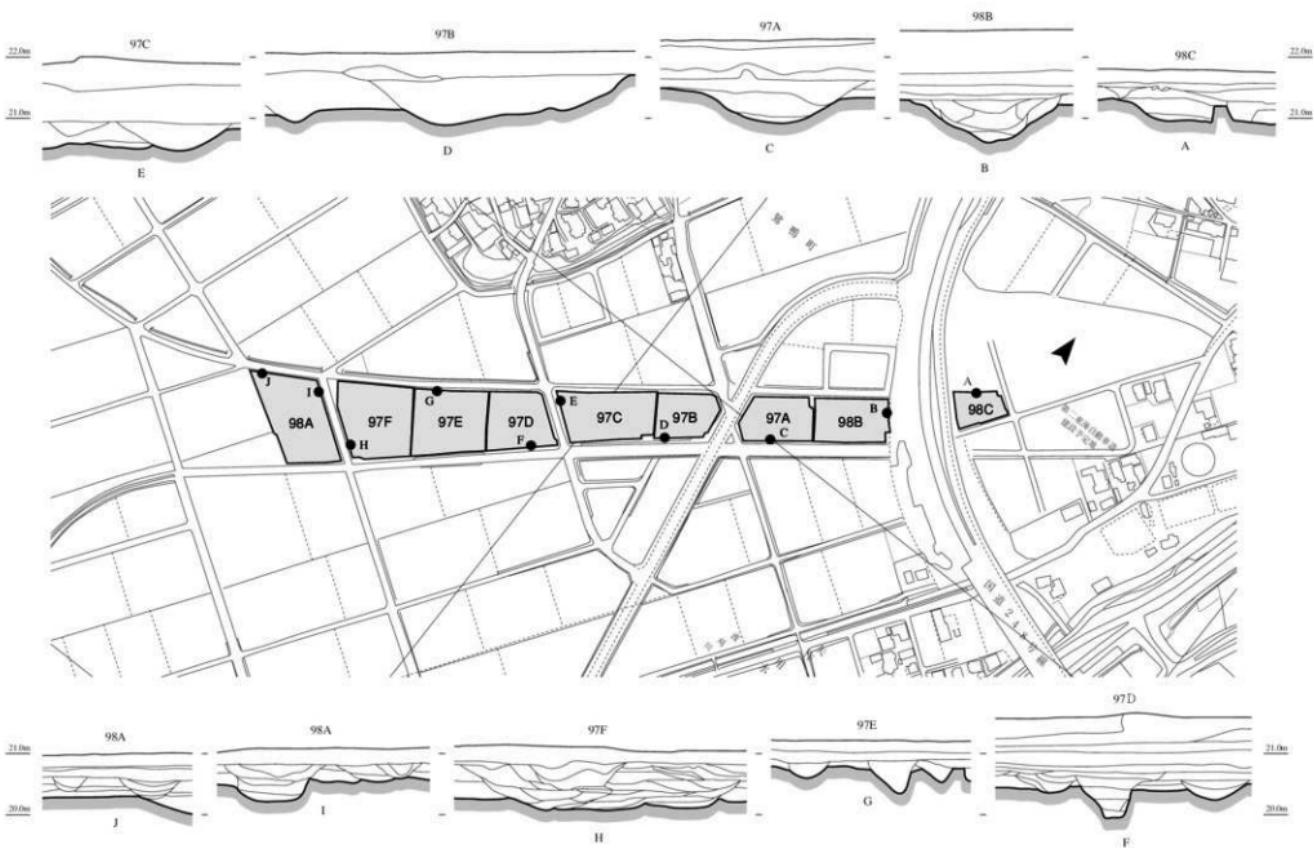
(2) 97A・98B区

遺跡の北部に位置する。同一の区画内であるが、98C区の北東部と98A区で層序が異なる。98A区から98C区南西部は、50~60cmの表土及び旧耕作土下で上面の中世以降の遺構面の赤褐色シルト層上面に達する。その下部20~30cmの赤褐色シルト層および黄褐色シルト層を挟んで下面の遺構面である黄朱色細粒砂層面となる。下面では、古墳時代から古代の遺構を検出した。98C区北東側約8割は細かい時期は特定できないが、近世以降に造成されたと考えられる水田によって98A区の中世以降の遺構面が削平されている。現在の約80cmの表土及び耕作土下に近世以降の水田耕作土である40~50cmの褐灰色及び黒褐色シルト層を挟んで基盤面である灰色シルトあるいは灰白色シルト、細粒砂層に達する。この基盤面で古墳時代から近世の遺構を検出した。遺構面は98A区の第1面は標高約21.5m、第2面は標高約21.2m、98B区北東側は標高21~21.2mである。

地震による液状化現象は98B区でやや強く、調査区全体でも遺構に影響が認められる。98B区では道路用地買収後の搅乱坑が数ヶ所存在する。97A区及び98C区南西部は、上面である第1面で中世および戦国・近世の遺構を調査し、第2面で古墳時代及び奈良時代から平安時代の遺構を調査した。98C区北東端から中央部は基盤面直上部で古墳時代から近世までの遺構を検出した。

(3) 97C・97B区

遺跡の中央北半部に位置する。0.4~0.5mの現表土の黄褐色シルトと近世以降の水田の耕作土である厚さ0.3から0.4mの黄灰色シルトを挟んで基盤の明黄褐色のシルトあるいは細粒砂層に達する。近世の耕作土によって基盤面近くまで削平が行われており、その直上で、古墳時代から近世の遺構を検出した。基盤面は砂質の強い層であり、近年の地震による影響が強い。全体的に近世およびそれ以降の時期に大きく削平を受けている。遺構検出面は、標高約21.0mである。



第5図 基本層序

(4) 97D・97E・97F区

遺跡の中央南半部に位置する。北東に位置する97D区では60～70cmの現表土あるいは耕作土である黄灰色シルト層と近世以降の耕作土の暗黄灰色シルト層を挟んで中世から近世の遺構検出面である灰緑色シルト層に達する。中央部の97E区では60～80cmの現耕作土の暗黄灰色シルト層を挟んで中世の遺構検出面である灰黄褐色シルト層に達する。南西側の97F区では40～50cmの現耕作土及び近世以降の耕作土である褐色シルトおよび黄褐色シルトの下に中世から近世の基盤面である暗灰黄色シルト層に達する。3調査区とも北西の碧海台地側は遺構面が高く、30～40cmの現表土である黄灰色シルトあるいは褐色シルトを挟んで基盤面の白色細粒砂層に達する。遺構検出面である基盤面は3調査区とも、調査区縁辺に平行して台地側である北西側2/3～3/4は白色の細粒砂から中粒砂である。矢作川側の南東側1/3～1/4はシルト層となり、台地側の砂層はシルト層下に入り込む。遺構検出面の標高は97D区では約21m、97F区で20.6～20.7mである。北西側は全体として0.1～0.2mほど標高が高い。

3調査区とも近年の地震による影響を強く受けている。97E区の北西半は液状化現象による噴砂によって遺構面が大きく破壊されており、遺構検出が困難な部分が存在した。また、遺構の変形も全体に及んでおり、砂層面で検出された遺構に変形が著しい。97D区では調査区はば中央に近年の構造物の跡と考えられる方形の擾乱坑が存在する。97E区の北東部には砂採取によると考えられる深さ4mほどに達する擾乱坑が存在する。

(5) 98A区

遺跡の南西端に位置する。50～60cmの現耕作土の灰黄褐色シルトと近世以降の旧耕作土である暗黄灰色シルト層下で、中世から近世の遺構を検出した。遺構検出面の基盤面は暗灰黄色シルトあるいは部分的には灰黄色細砂層である。基盤面は南東に向かって下がり、調査区南東側1/4では近世以前の集落に関する遺構は検出されなかった。水田あるいは湿地であったと推定される。地震による影響が認められ、液状化現象で噴砂による砂の堆積層が遺構面上に堆積している。遺構検出面の標高は20.5～20.6mである。旧地形および遺構の検出状況から遺跡の南西縁辺と考えられる。

2. 時期区分

調査において検出された遺構は古墳時代から近世にまでわたる広い時期のものである。これらは以下の5時期に区分される。

(1) 古墳時代

5世紀中葉から6世紀前半の遺構である。98B区から97C区にかけての調査区域の北半部分で検出される。

97A区の下面で5世紀後半から6世紀にはいるかと考えられる竪穴住居16棟が検出された。98B区から97A区にかけては、ほぼ同時期の北東から南西にはしる溝6条が検出されている。竪穴住居と切りあい関係にあるが、集落に関連するものと推測される。

98Bから97C区にかけて北東から南西にかけて走る5世紀後葉の大溝が検出されている。遺物としては5世紀後葉から奈良時代のものを含み、最終末には最上層から平安時代の遺物を検出している。

97D区では、性格不明の溝状の遺構を検出している。5世紀中葉から後葉の遺物が比較的集中的に検出されている。

98C区では、5世紀古墳の周溝かと考えられる溝が検出されている。

(2) 古代

7世紀後半から10世紀にかけての時期の遺構をここに含める。古墳時代の集落と同じ区域に集落が存在するとともに、新たに集落が発生する。また、古墳時代の遺構・遺物がほぼ調査区全体のほぼ北半に集中するのに対して、遺構は南半にも広がり、遺物についても各調査区とも普遍的に検出される状況となる。時期を確定できる遺構は、3時期に細分される。

a期 7世紀後半の時期である。古墳時代に引き続く区域に竪穴住居が1棟検出された。これ以外に検出されていないため詳細は不明であるが、98B区の区域に調査区外を含めて集落が存在し、居住域が存続していることが予想される。

b期 8世紀後半から9世紀の時期である。97A区と98B区の古墳時代と7世紀後半の集落と同じ区域に引き続き集落が営まれるとともに、遺跡の南半の97E区にも集落が成立する。97F・98A区にもこの時期の遺物が検出され、遺構も若干検出されていることから、遺跡の全体が居住域に含まれることが考えられる。

c期 10世紀代の時期である。b期に広がった居住域が縮小する時期である。97A区の古墳時代からa・b期と続く区域にのみ竪穴住居が1棟検出された。調査区全体に認められた遺物もほとんど出土しなくなる。

(3) 中世

12世紀末から14世紀の遺構をここに含める。遺物に関しては全調査区にわたって灰釉系陶器(山茶碗)が相当量検出されている。しかし、遺構に伴うものはわずかで、若干の土坑と井戸からのみ出土している。この時期に属する溝は確定できず、また、土坑等は戦国時代・近世の遺構と混在するため建物等を抽出することはできなかった。検出された井戸のあり方から3時期に細分される。

a期 12世紀末から13世紀後葉の時期である。井戸がほぼ全域にわたって検出される。遺物がまとまって出土する土坑もわずかであるが存在する。集落の存在を想定できるが、掘立柱建

物を抽出できない。

b期 13世紀末から14世紀代である。井戸はa期に比較して若干少なくなるが、調査区全体に存在する。この時期と確定できる溝・土坑はほとんどない。

c期 15世紀前半である。この時期と考えられる井戸が数基存在する。

(4) 戦国時代・近世

遺跡の大部分を占める時期の遺構である。調査区全範囲にわたって遺構が認められる。この時期の屋敷地の区画溝と井戸の変遷より4時期に細分する。

a期 15世紀中葉から16世紀初頭。15世紀中葉に調査区全体にわたって屋敷地の区画溝が出現し、土坑などの遺構が増える時期である。この時期の遺物は遺跡全体にはば普遍的に相当量認められる。

b期 16世紀前葉から後葉。前時期に引き続き集落が存続する時期である。溝は部分的に掘り返しが行われているため、遺物の出土状況に格差が生じる。

c期 16世紀末から17世紀。前時期に引き続き溝の掘り返しが行われ、屋敷地の区画溝として機能が維持される部分が存在するとともに溝の掘り返しがなされず、区画溝が消滅する部分が多くなる。

d期 18世紀前半。区画溝の大部分が消滅し、区画溝から出土する遺物が少なくなる。その一方で集落の中央を走る道路に沿う溝が大きく掘り下げられ、これらの溝から比較的多量の遺物が出土する。

(5) 近世後半

集落の大部分が廃絶し、区画溝、土坑、井戸などの遺構が消滅する時期。近代まで存続する耕作地の用水路などが検出されるが、一部を除いて居住域としての遺構はほぼ消滅する。

(酒井俊彦)

第2節 古墳時代の遺構

1. 壊穴住居

97A区の下面で古墳時代5世紀中葉から6世紀前半の壊穴住居が集中して検出された。切りあいが多く、全形がわかるものは少ない。検出面から底面までの掘り込みが浅く、基盤面は砂質が強いため遺存状況はよくない。

SB17(第6図) 全形のわかる隅丸方形の小形の壊穴住居である。長軸3.7m短軸3.0m、長軸方位N-18°-Eである。柱穴を4基検出した。竈などの構造物は検出できなかった。遺構埋土は黄褐色細粒砂が主である。土師器壺と高杯など少量の遺物が出土しているが小片で時期を確定できるものはなかった。SD207などとの切りあいから6世紀前半と考えられる。

SB18(第6図) 全形のわかる隅丸方形の壊穴住居である。長軸4.5m短軸4.3m、長軸方位N-6°-Wである。中央に長軸2.4m短軸1.2m深さ0.2mの炉とも考えられる土坑が検出された。(第7図)遺構埋土は褐色砂を主とし、土坑の埋土は黄褐色砂である。柱穴は検出できなかった。土師器壺、高杯壺などが床面及び土坑内より出土している。切りあい関係及び出土遺物から、6世紀代と考えられる。

SB19(第6図) SB18に切られる壊穴住居である。長軸4.2m短軸4.0m、長軸方位N-6°-Eである。竈などの構造物及び柱穴は検出できなかった。遺構埋土は黄褐色細粒砂を主とする。土師器壺、須恵器杯蓋などが少量出土しているが、小片で時期は確定できない。

SB20(第6図) SB18・19に切られる。長軸不明、長軸方位は不明である。遺構埋土は黄褐色細粒砂を主とする。竈などの構造物及び柱穴は不明である。土師器壺口縁部など少量の遺物が検出されたが、小片で時期の詳細は不明である。

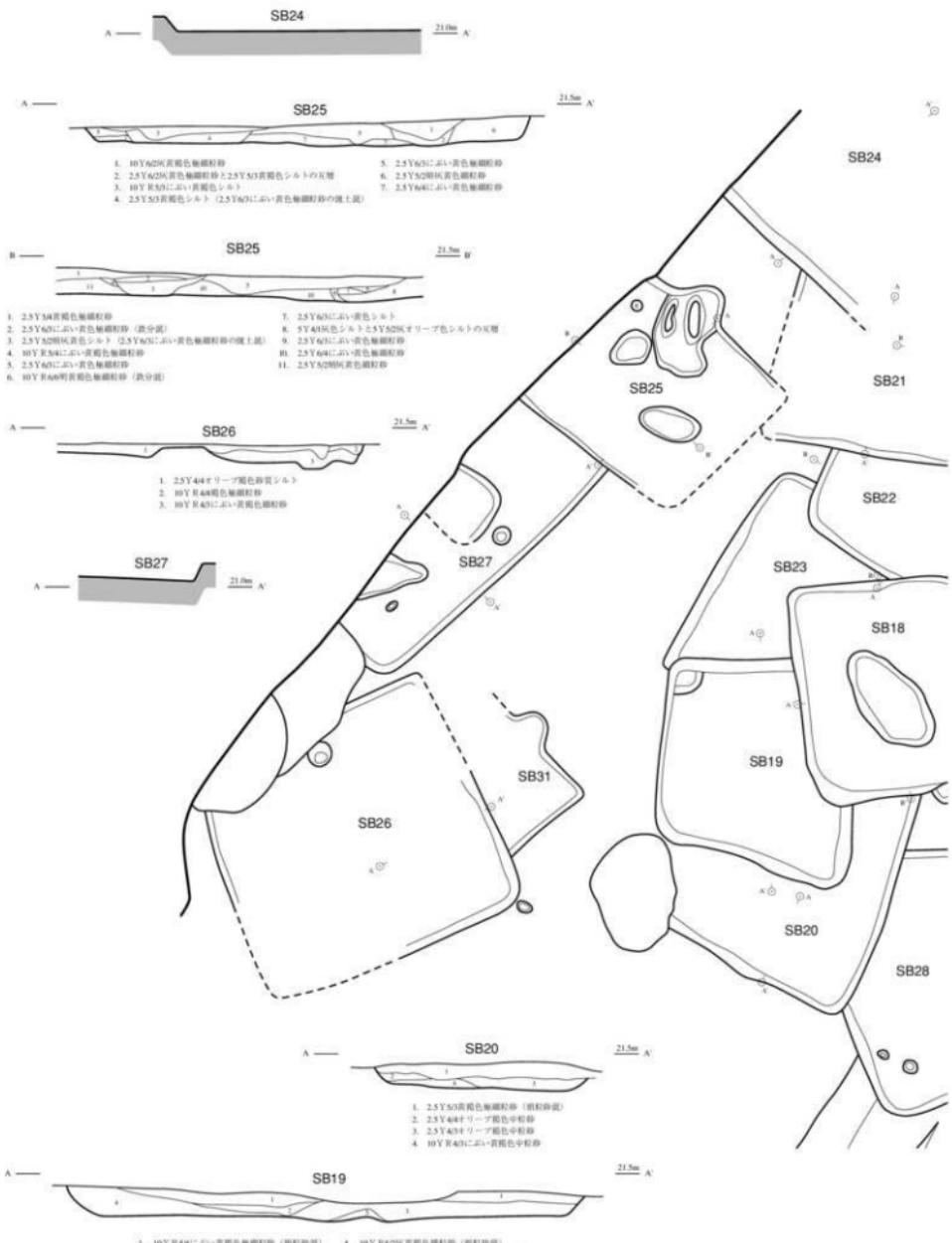
SB21(第6図) 西北半大部分を新しい溝に切られる。長軸不明、長軸方位N-9°-Eである。構造物および柱穴は確認できなかった。遺構埋土は黄褐色細粒砂を主とする。遺物はほとんど検出されなかった。切りあい関係および出土遺物から5世紀後半の時期と考えられる。

SB22(第6図) SB18・21に切られる壊穴住居である。長軸6.2m短軸不明、長軸方位N-33°-Eである。柱穴は確認できなかった。壊穴北東辺に竈をもつ。竈は比較的残りがよく、両袖と土師器の高杯を利用した支柱を検出した。(第9図) 竈内部などから、須恵器杯蓋・壺、土師器高杯・壺・壺などが出土した。切りあい関係および出土遺物から5世紀後半の時期と考えられる。

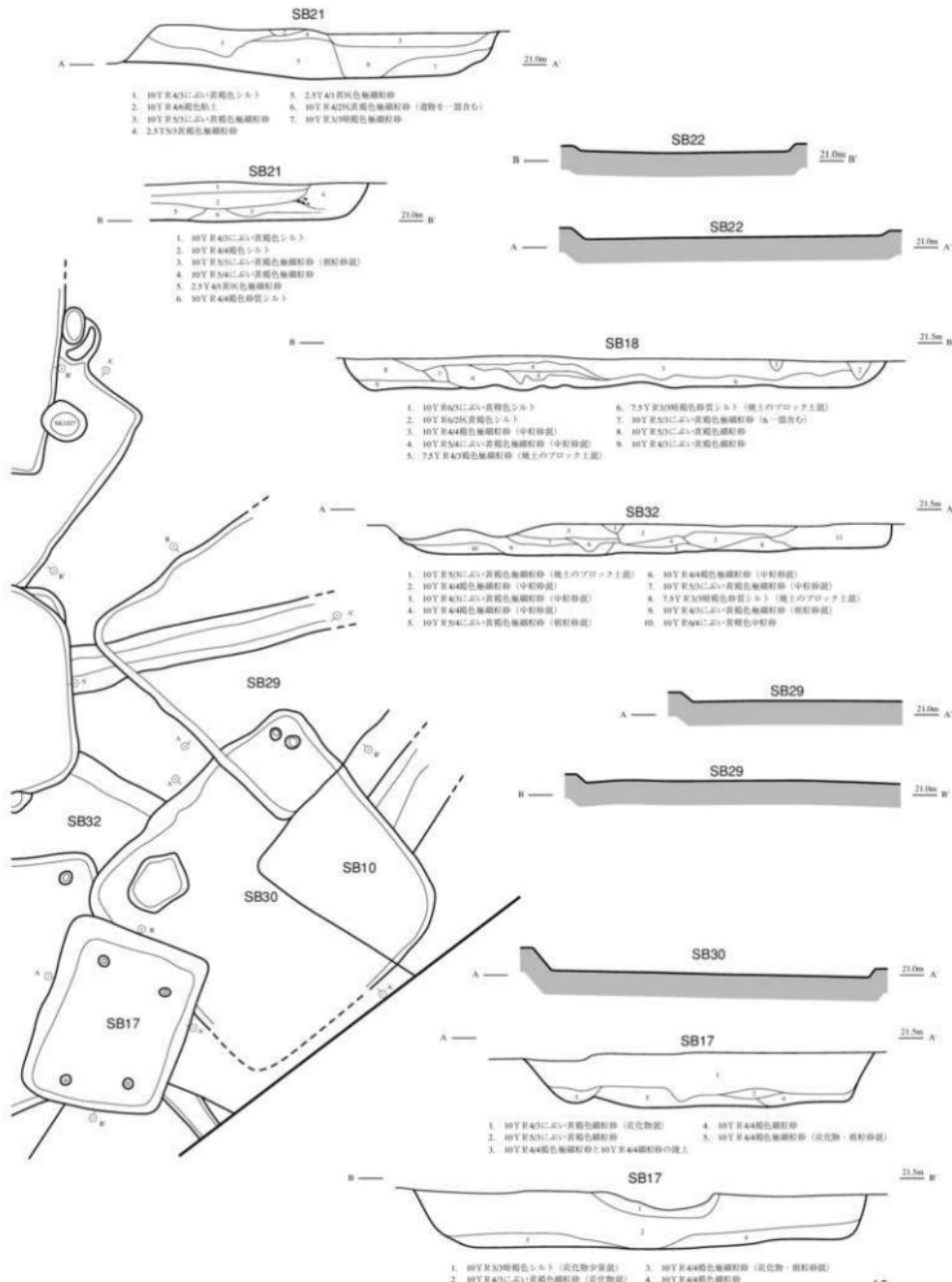
SB23(第6図) SB18・19・22によって大部分切られる壊穴住居である。長軸不明、長軸方位などは不明である。柱穴および竈は確認できなかった。須恵器高杯、土師器高杯・壺などが検出された。出土遺物、壊穴住居の切りあい関係より、5世紀後半の時期と考えられる。

SB24(第6図) 新しい遺構に切られるため、長軸および長軸方位は不明である。柱穴、竈などは検出できなかった。遺物はごくわずかの小片のみ出土した。遺構の切りあい関係から6世紀前半にはいる可能性が高い。

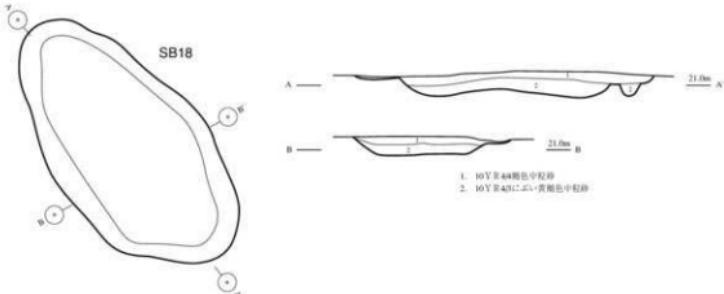
SB25(第6図) 新しい遺構で切られる壊穴住居で、長軸4.3m短軸不明、長軸方位N-44°-Eである。遺構埋土は、黄褐色細粒砂を主とする。柱穴は1基検出した。北東辺に竈をもつ。(第11・12図)竈の部分および床面上より須恵器杯身蓋、土師器壺などが出土した。出土遺物、



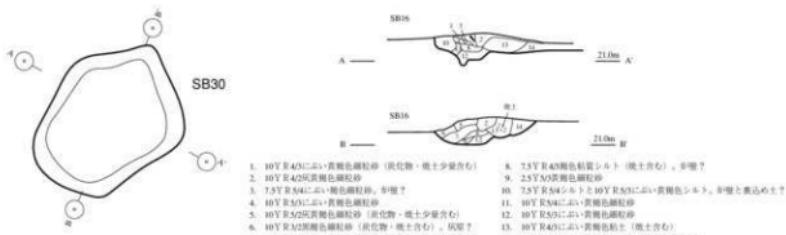
第6-1図 古墳時代竪穴住居址群平面図(1/100)・断面図(1/40) (1)



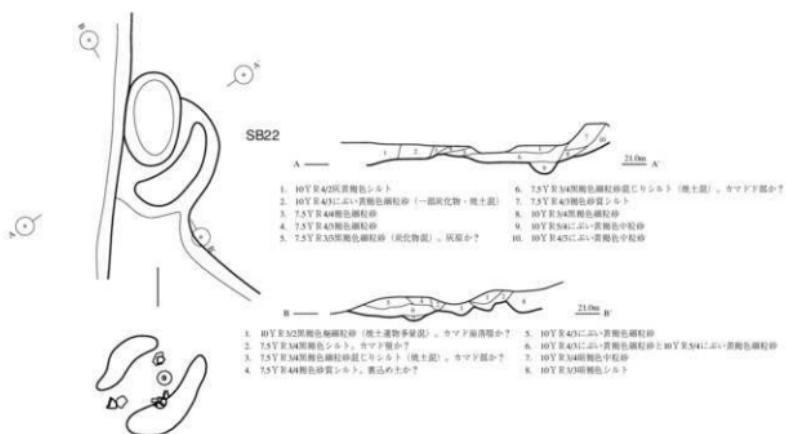
第6-2図 古墳時代竪穴住居址群平面図(1/100)・断面図(1/40) (2)



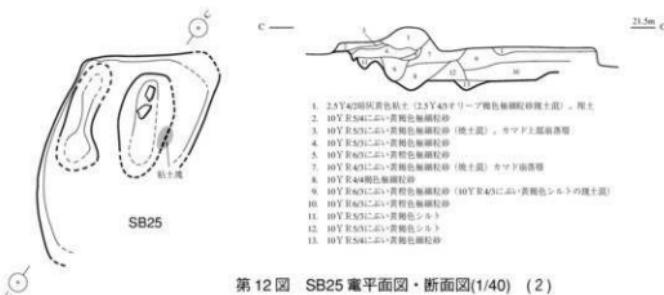
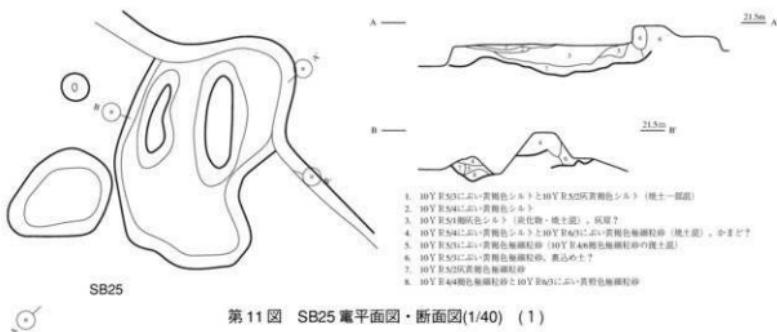
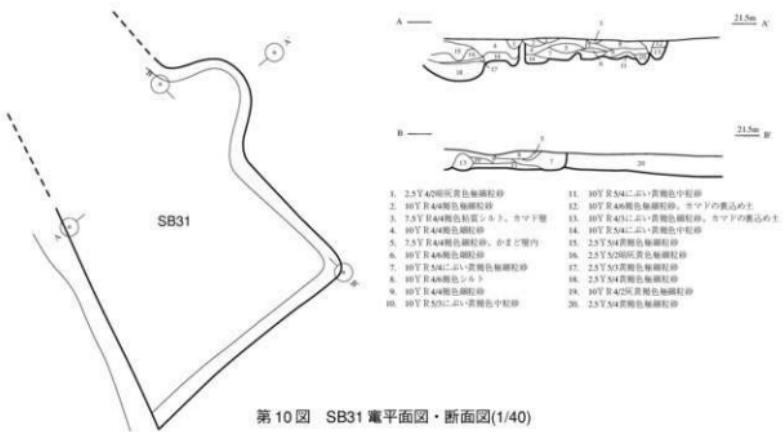
第7図 SB18 土坑平面図・断面図(1/40)



第8図 SB30 土坑平面図・断面図(1/40)



第9図 SB22 竈平面図・断面図(1/40)



遺構の切りあいから6世紀前半の時期と考えられる。

SB26(第6図) 新しい遺構に中央部などが切られる堅穴住居である。長軸5.6m短軸5.3m、長軸方位N-66°-Eである。柱穴は1基検出された。遺構埋土は、褐色細粒砂を主とする。土師器高杯・甌などが出土しているが、小片で詳細は不明である。切りあい関係より5世紀後半以降の時期と考えられる。

SB27(第6図) 近世の溝によって大部分切られる。長軸および長軸方位は不明である。柱穴と考えられる土坑が2基検出された。その他に同時期の土坑を床面で検出したが、遺構に伴うか不明である。少量の土師器甌などが出土している。切りあいから5世紀後半と考えられる。

SB28(第6図) SB17・20・31に大部分切られる。長軸5.0m短軸4.6m、長軸方位N-17°-Eである。柱穴の可能性のある小土坑が3基検出された。須恵器高杯、土師器高杯などが出土したが、小片で詳細は不明である。SD207との切りあいから6世紀前半と考えられる。

SB29(第6図) 古代の堅穴住居のSB10に切られ、北東が調査区外になるため長軸と長軸方位は不明である。柱穴および甌などの構造物は確認できない。須恵器杯身・蓋・高杯、土師器高杯・甌などが出土している。出土遺物、堅穴住居および溝との切りあい関係から6世紀前半の時期と考えられる。

SB30(第6図) SB17・30および古代のSB10に切られる。長軸5.8m短軸5.5m、長軸方位N-50°-Eである。北隅に柱穴の可能性のある小土坑2基、東隅にこの遺構にともなう土坑が検出された。(第8図)甌は検出されなかった。須恵器杯身・高杯、土師器甌・高杯などが検出されているが、小片で詳細は不明である。溝などの他の遺構との切りあいから6世紀前半の時期と考えられる。

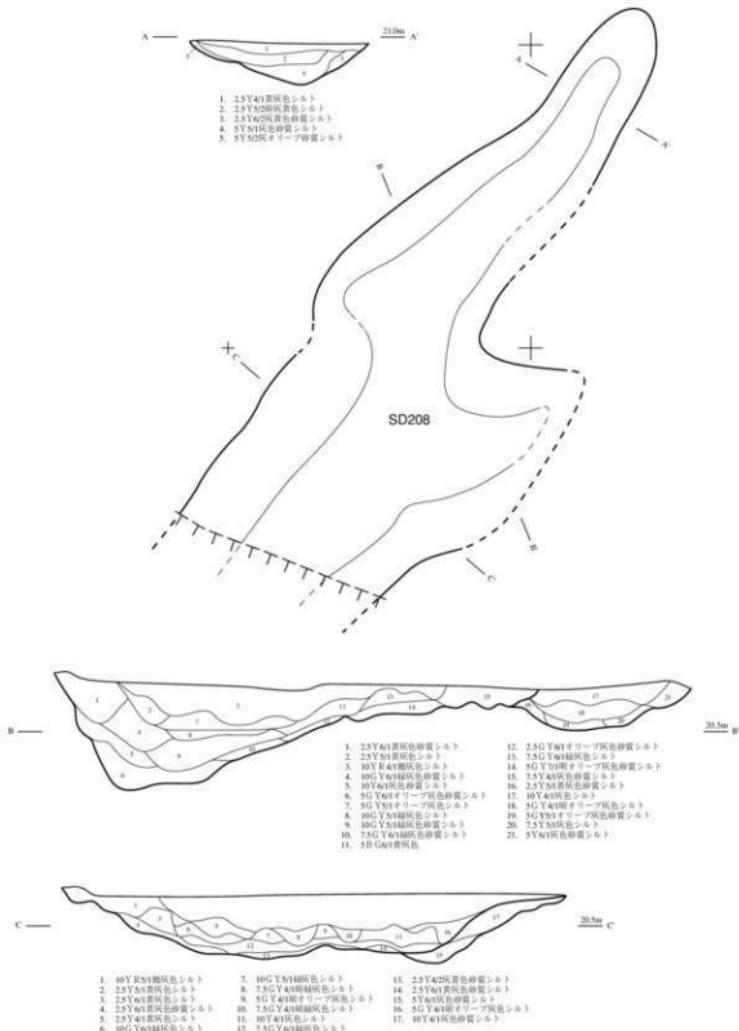
SB31(第6図) SB24によって切られる。近世の溝などによって大きく切られているため、長軸と長軸方位は不明である。柱穴は検出されなかった。北東辺の平面プランで甌の張り出しが認められる。(第10図)甌部の床面上より、土師器高杯・甌が出土した。出土遺物、遺構の切りあいから5世紀後半の時期と考えられる。

SB32(第6図) SB18・20・28・30に大部分切られる堅穴住居である。長軸、長軸方位は不明である。柱穴、構造物なども不明である。須恵器杯身、土師器高杯・甌などが出土している。出土遺物から6世紀前半と考えられる。

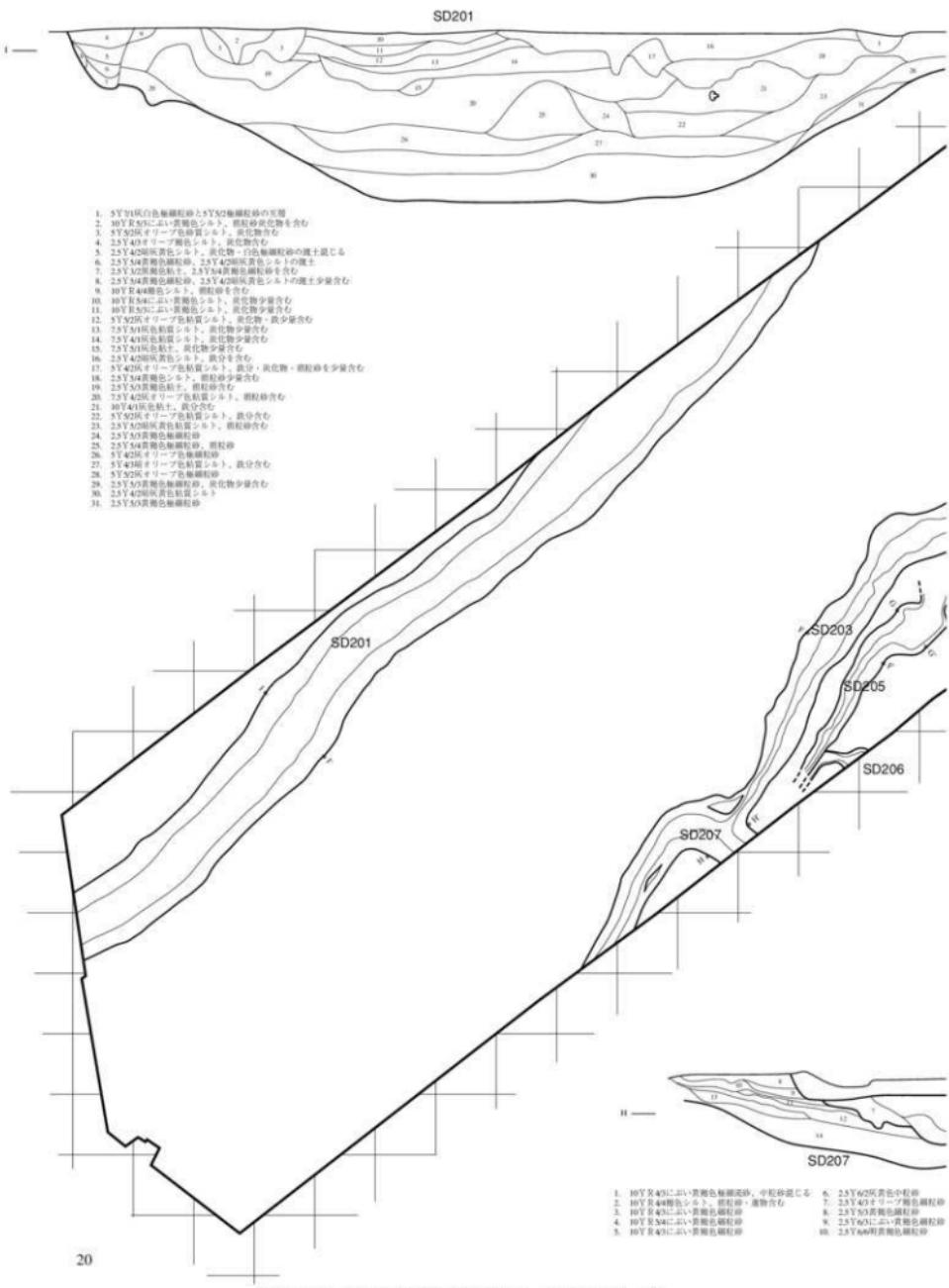
2. 溝

調査区域北半にはほぼ北東から南西方向に溝が数条走る。98B区から97C区にかけて他の溝群より離れた北西側に幅・深さとも比較的規模が大きい溝1条(SD201)が検出された。これにはほぼ平行して数条の溝が98B区・97A区にかけて検出された。また、調査区域中央部の97D区で不定形の溝状の落ち込みが検出され、これも溝に含める。

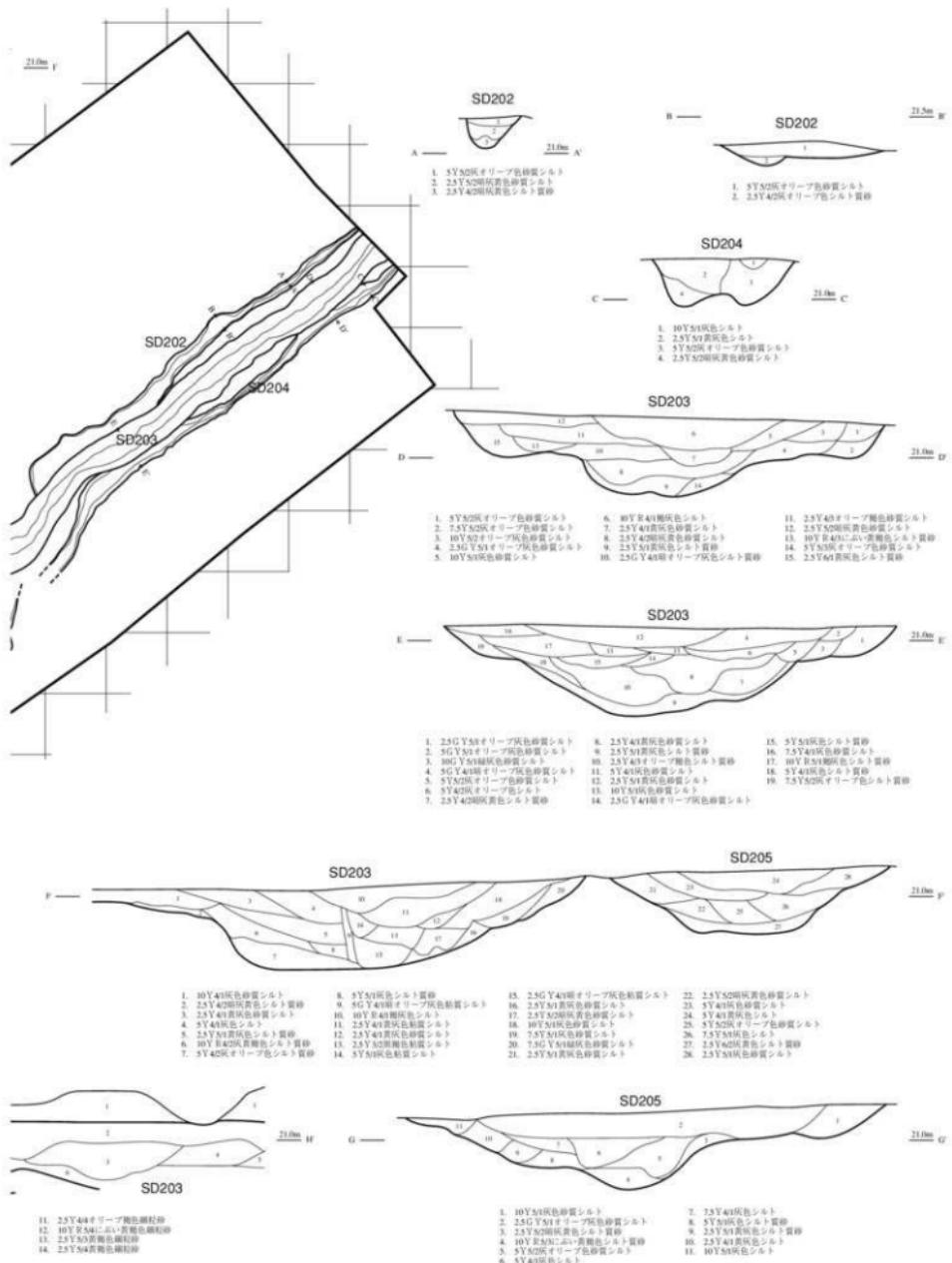
SD201(第14・15図) 98B区の北壁部分を北端として97C区西壁まではほぼ北東方向に走る溝である。97A区では若干曲折し、97B・C区では大きく弧を描いて方向が変化し、97C区を西方向にぬける。97C区で最大幅12.3m最小幅は97C区で5.6mを測る。深さは検出面より1.8~2.0mである。溝の両岸の大部分砂あるいは砂混じりのシルトであるために掘りかたは緩やかである。溝の底面は、標高は約19.5mで各調査区ともほぼ一定している。埋土は、97A区で下層は灰黄色シルトあるいは細粒砂、中層は灰緑色シルトあるいは細粒砂を主とし、上層は、黄



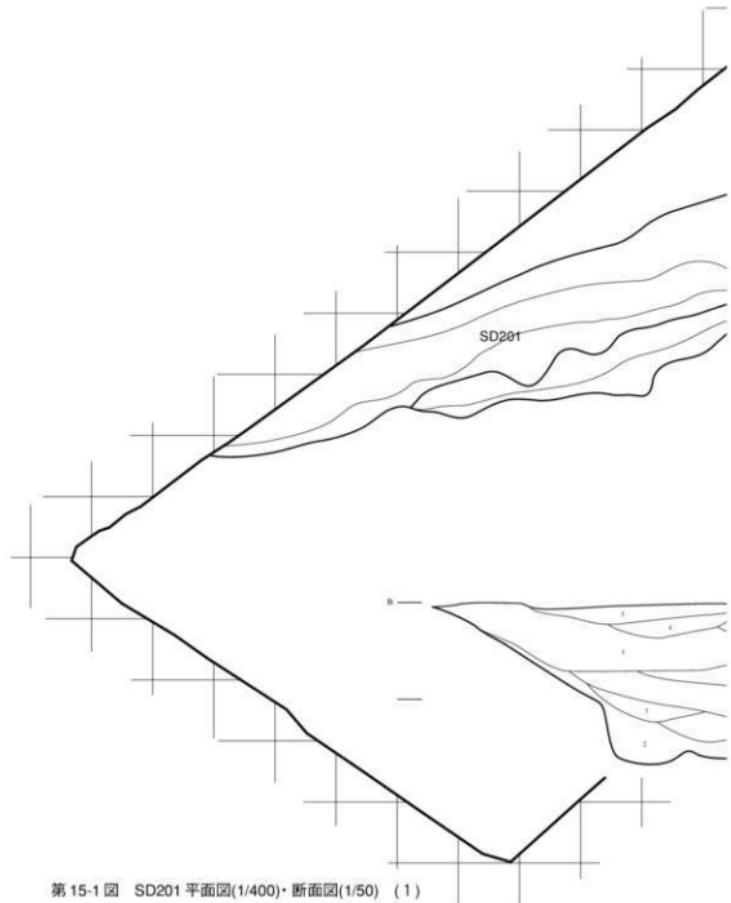
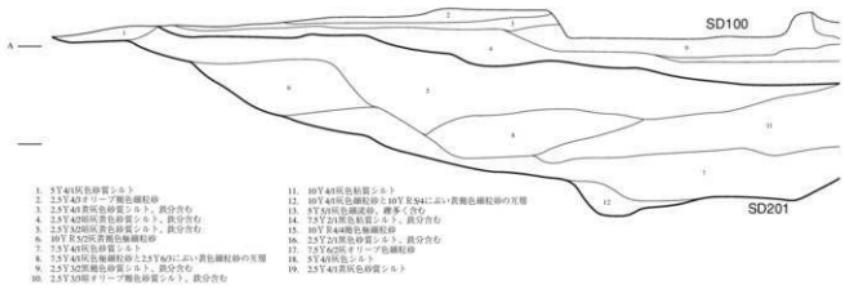
第13図 SD208 平面図(1/80)・断面図(1/40)

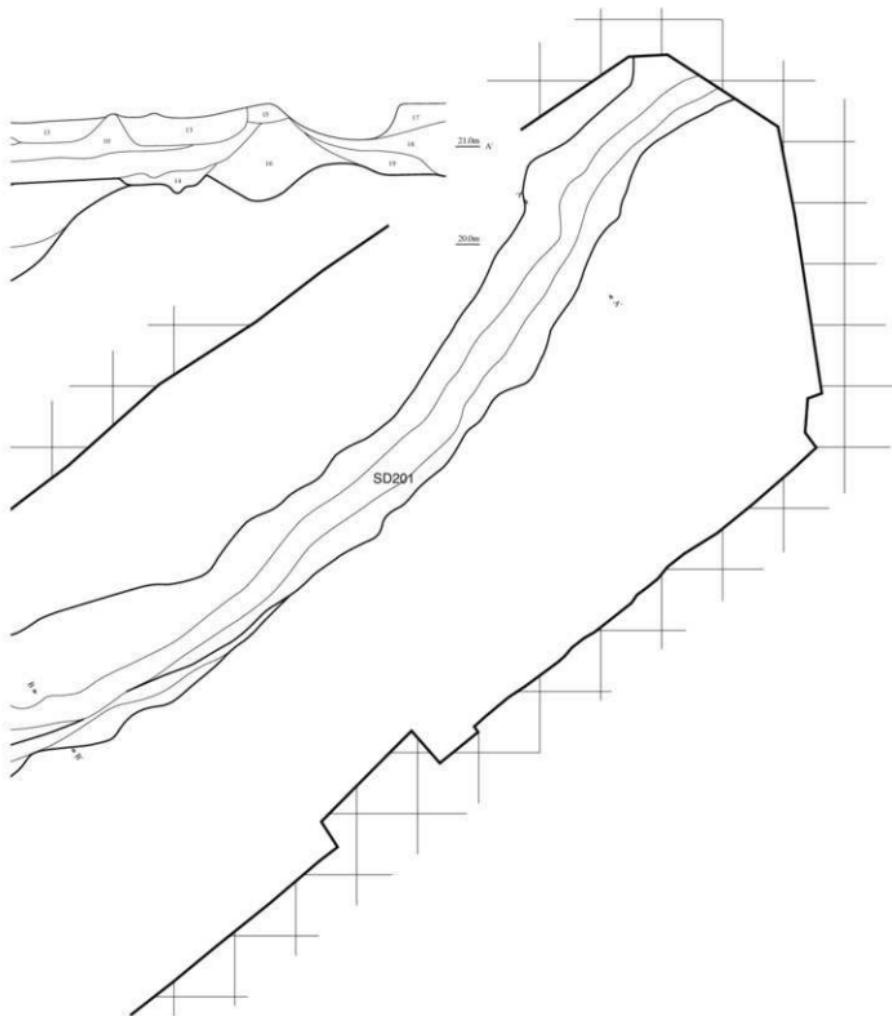


第14-1図 古墳時代溝群平面図(1/400)・断面図(1/40) (1)



第14-2図 古墳時代溝群平面図(1/400)・断面図(1/40) (2)





第15-2図 SD201 平面図(1/400)・断面図(1/50) (2)

褐色シルトが主である。97B・C区では下層は灰色シルト混じりの細粒砂、中層は灰黄色細粒砂混じりのシルト、上層は灰色シルトが主である。97B区を中心に最下層より5世紀代の遺物が検出されていることから、この時期に掘削されたと推定される。セクションの観察より掘り返しが行われていることが確認できるが、回数および時期については調査では明らかにできなかつた。出土遺物は古墳時代5世紀代から平安時代11世紀代に及ぶ。下層部分より古墳時代5世紀後葉から6世紀前半の遺物が出土する。中層では奈良時代の遺物の出土量が多い。98B区では下層に近い部分より8世紀代の遺物が検出されていることから、掘り返しが行われてこの時期まで溝が機能していた可能性がある。上層部分からは平安時代9・10世紀代と一部11世紀の遺物が検出されている。特殊なものとして97A区では瓦塔が出土している。奈良時代には本來の機能が失われていたと考えられるが、最終的な埋没は平安時代初期と推定される。

SD202(第14図) 98B区北東壁より調査区中央にかけて検出された。SD203に切られる。幅1.0～1.2m、深さ0.2～0.3mである。底面の標高はほぼ21.0mである。埋土は灰黄色シルトを主とする。遺物はほとんど検出されなかつた。方向、位置および切りあい関係から、6世紀以前の時期と考えられる。

SD203(第14図) 98B区の北東壁より97A区北東部まで南西方向にのびて、97A区で南東方向にほぼ直角に曲がる溝である。最大幅4.1m、深さ0.6mである。底面の標高は約20.6mである。98B区部分では若干蛇行しつつ、ほぼ直線的にはしむ。掘り込み面は砂質を基本とするため緩やかな掘り込み角度である。屈曲部分でSD207を切る形で重複してはしむ。埋土は、砂を多く含む黄灰色シルトを主とする。埋土中から比較的多量の遺物が検出され、6世紀代の須恵器、土師器類が出土した。

SD204(第14図) 98B区北東壁から調査区中央にかけて検出された。並行するSD203によって切られる。最大幅1.2m、深さ0.4mである。底面の標高は、ほぼ20.9mである。埋土は、黄灰色シルトを主とする。遺構にともなう遺物はほとんど検出されなかつた。方向、位置および切りあい関係よりSD202と同時期で、6世紀以前と考えられる。

SD205(第14図) SD203に平行して98B区の南部にのみ検出された溝である。最大幅3.9m深さ0.6mである。底面の標高は20.6～20.8mである。掘りかたは緩やかな傾斜である。埋土は、灰黄色シルトを主とする。遺物としては5世紀中葉から後葉にかけての須恵器、土師器類が出土している。

SD206(第14図) 98B区南隅で検出された。最大幅2.6m、深さ0.3mである。埋土は黄灰色シルトである。他の溝と異なって東西方向にはしり、SD205によって切られる。出土遺物はほとんどなく、性格等は不明である。切りあい関係より5世紀代の時期と考えられる。

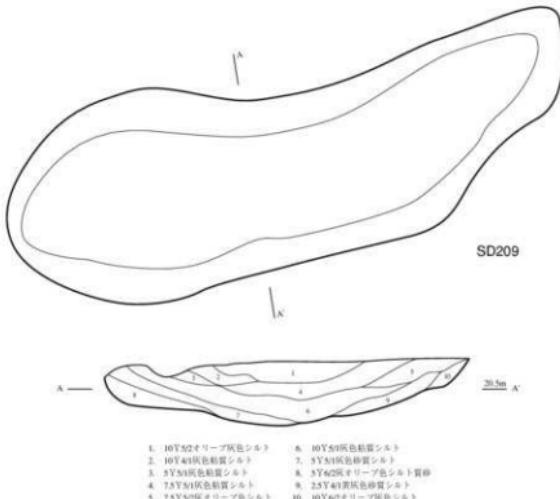
SD207(第14図) 他の溝と同様に北東から南西にはしむ溝であるが、97A区東隅で南東方向にほぼ直角に屈曲する。この部分はSD203によって切られる。最大幅3.0m、深さ0.8m、底面の標高は20.5mである。埋土は、黄褐色細粒砂を主とする。6世紀前半の須恵器、土師器類が出土している。

SD208(第13図) 97D区北半で検出された溝状の落ち込みである。北東から南西にはしむ部分と東に短く枝分かれする部分があるが、同一の遺構として扱う。遺構の南西半で最大幅4.2m、同深さ0.8mである。底面は、最低標高20.3mとなる。北東半は幅、深さとも小さくなる。遺

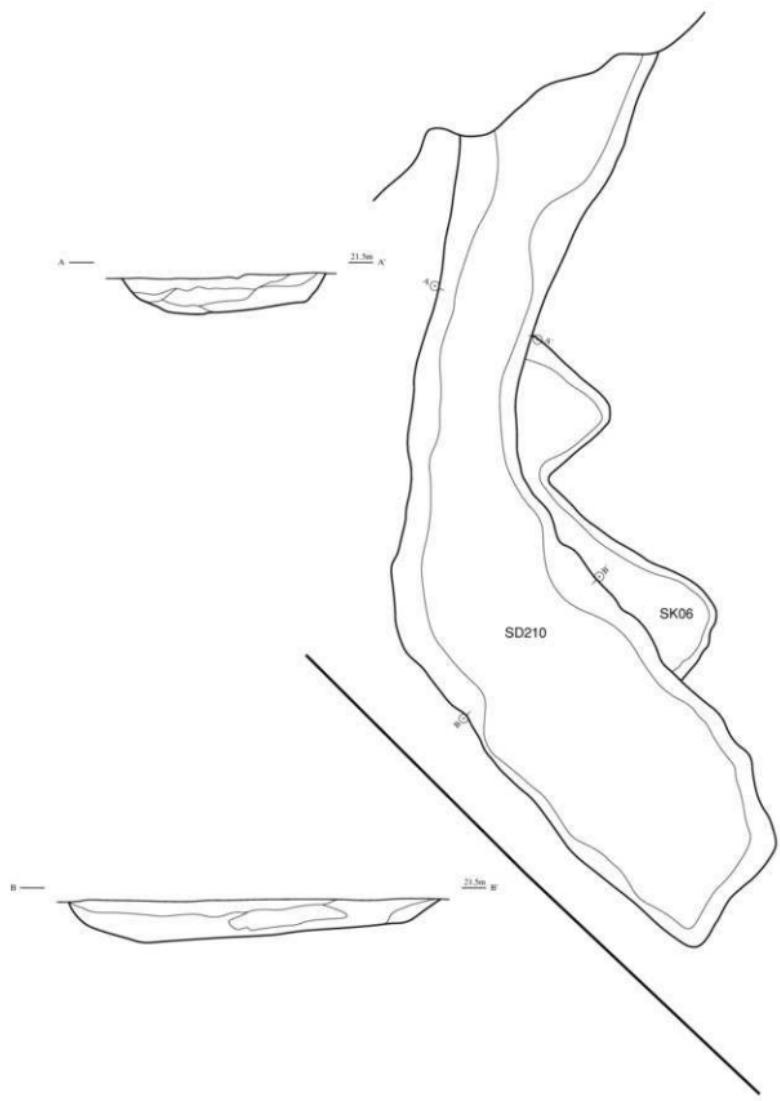
構の掘り込み面は細粒砂が主であるため、掘りかたは緩やかであるが、中央部の西側は急角度の掘り込みである。枝分かれする部分は短く張り出して終わる。近年の擾乱により南西側は切られるが、遺構は擾乱を越えて南西にはのびない。埋土は上層が褐灰色あるいは黄灰色シルト、下層が灰緑色シルトを主とする。遺構の下層、底面近くでまとまった状況で土師器壺・高杯・鉢と須恵器高杯1個体が出土した。遺物の出土状況は、遺構主要部と張り出し部分の差異はない。出土遺物から5世紀中葉の時期と考えられる。遺構の性格は不明である。

SD209(第16図) 落ち込み状の浅い溝である。連続する溝の深い部分が残存した状況と考えられる。他の溝とは異なり、東西方向に近い方位をとる。幅1.7m、深さ0.5mを測る。遺物は比較的集中し、土師器壺、高杯、鉢などがまとまって出土している。須恵器は検出されなかつた。遺物から5世紀後半の時期の遺構と考えられ、性格は不明である。

SD210(SZ01)(第17図) 98C区南東部で検出された南北方向にはしる溝である。北側は、中世以降の洪水性の堆積物によって切られる。溝の南半は、やや屈曲して南東に方向を変える。浅く不定形な溝である。最大幅3.1m、深さ0.4m、溝底面の標高は21.0mである。埋土は灰色中粒砂を主とする。溝の埋土より5世紀後半の須恵器杯身・壺、土師器高杯・壺などが検出されている。調査区内より家型埴輪、円形埴輪片が各1点出土している。移動による磨耗を受けていないことから付近に古墳が存在していたことが想定され、5世紀後半の古墳の周溝である可能性がある。
(酒井俊彦)



第16図 SD209 平面図(1/80)・断面図(1/40)



第17図 SD210 平面図(1/80)・断面図(1/40)

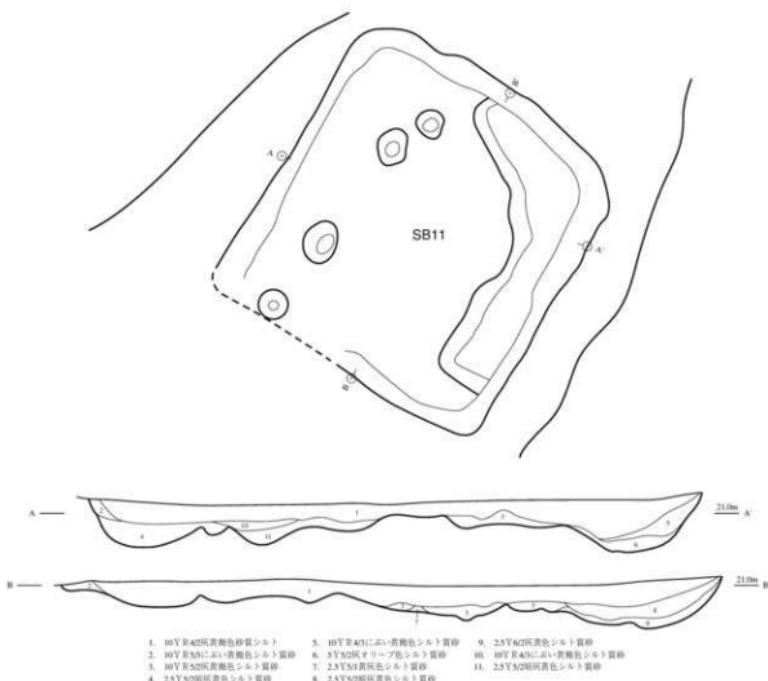
第3節 古代の遺構

1. a期の遺構

この時期の遺構は、堅穴住居1棟が検出されている。同時期の遺構は他に確認できなかった。SB11(第18図) 98B区南辺で検出された。長軸5.3m、短軸5.0mを測り、長軸方位はN-30°-Eである。柱穴と考えられる小土坑は、西半で4基検出されたが、住居にともなうものは確定できなかった。住居北辺の東半分から東辺にかけての壁際が深さ10数cm、幅1.0~1.2mの溝状になっている。この部分に特殊な構造物はなかったが、堅穴の北東隅の溝状の掘り下げ上部で炭化物、焼土が集中して検出されていて、竈部分と推定される。埋土はシルト混じりの灰黄褐色細粒砂を主とする。遺構埋土中より、須恵器杯身・横瓶、土師器甕・瓶などが検出されている。出土遺物から7世紀後半の時期と考えられる。

2. b期の遺構

この時期の遺構は、調査区域の北部である98B・97A区と南部の97E区の2つの部分で検出され、堅穴住居は南群と北群とに分けられる。



第18図 SB11 平面図(1/80)・断面図(1/40)

(1) 穫穴住居北群(98B・97A区)

SB01(第20図) 98B区南東壁際で確認され、検出された同時期の竪穴住居から離れた位置にある。長軸4.25m、短軸長不明、長軸方位N-48°-Eである。柱穴と推定される小土坑3基を検出する。北東辺中央にわずかな張り出しが認められるが、竈などの構造物は確認できなかった。埋土は暗黄灰色シルトが主である。須恵器杯身・鉢などが出土している。8世紀後半の時期と考えられる。

SB02(第21図) 戦国時代・近世の溝に南西半を切られる。長軸長不明、短軸3.8m、長軸方位不明である。埋土は、黄灰色シルトを主とする。柱穴および竈などの構造物は検出できなかつた。遺物はほとんど検出できなかつたが、遺構の切りあいと竪穴住居の位置関係よりb期の遺構と考える。

SB03(第24図) 98B区中央南東壁際に北西隅のみが検出され、SB04に切られる。長・短軸長、長軸方位とも不明である。柱穴、竈などは検出できなかつた。埋土は、灰色シルトを主とする。出土遺物はわずかであるが、b期の遺物が出土している。

SB04(第24図) 北東側を戦国時代以降の溝で切られる。長軸4.4m以上、短軸3.3m、長軸方位N-27°-Eである。柱穴2基を検出した。構造物は検出できなかつた。埋土は灰黄色シルトを主とする。遺物はわずかであるが、b期の遺物が出土している。

SB05(第24図) 南東壁際で北西半を検出した。SB07・09・14・15を切る。長軸5.0m以上、短軸3.5m以上、長軸方位N-22°-Eである。柱穴および竈は検出されなかつた。埋土は褐灰色シルトを主とする。遺物は少量であるが、8世紀後半の須恵器杯身・蓋などが出土している。

SB06(第24図) 98B区南東壁際で北西部が検出された。SB09を切る。長軸4.9m以上、短軸長不明、長軸方位N-45°-Eである。柱穴、竈などの構造物は確認できない。埋土は、暗黄灰色シルトを主とする。出土遺物としては、8世紀後半代の須恵器杯身・蓋・盤などが検出されている。

SB07(第24図) SB06に切られ、SB08・09・14より新しい時期の竪穴住居である。近年の搅乱で南西隅を欠失する。長軸4.5m、短軸3.7m、長軸方位N-45°-Eである。柱穴および竈などの構造物は検出されなかつた。埋土は、暗黄灰色シルトを主とする。出土遺物は少ないが、8世紀後半代の須恵器杯身などが出土している。

SB08(第24図) SB07によって切られ、西半を近年の搅乱によって欠失する。長軸4.2m、短軸長不明、長軸方位N-34°-Eである。柱穴および竈などの構造物は確認されなかつた。埋土は灰黄褐色シルトを主とする。出土遺物はわずかであるが、8世紀後半代の須恵器杯身などが検出されている。

SB09(第24図) 4辺をSB05・06・07によって切られる住居である。長軸長、長軸方位は不明で、柱穴、構造物も確認できない。土層の断面観察によってのみ確認できた。埋土は、灰黄色シルトを主とする。出土遺物はごく少量であるが、b期の竪穴住居と考える。

SB10(第19図) 98B区の南隅、97A区との境界で検出された。長軸5.8m、短軸長不明、長軸N-35°-Eである。柱穴および竈などの構造物は確認されなかつた。埋土は灰黄褐色シルトを主とする。遺物は、9世紀前半の時期の土師器甕などが出土している。

SB12(第22図) 西辺が検出されなかつた。長軸長不明、短軸2.5m、長軸方位N-56°-W

である。住居に伴う小土坑2基が検出された。竈は検出されなかった。埋土は灰黄色シルトを主とする。出土遺物はわずかであるが、8世紀代の須恵器杯蓋などが検出されている。

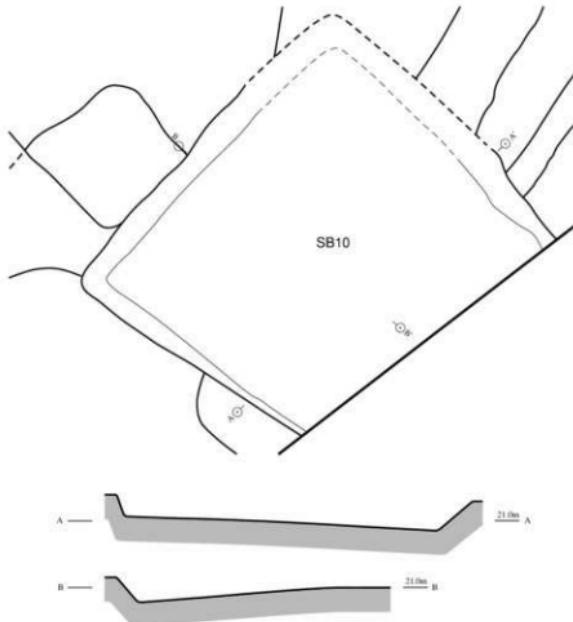
SB13(第23図) 98B区の中央で検出された。長短軸長、長軸方位不明である。柱穴および竈などの構造物は確認されなかった。新しい溝などで切られ、遺物はまったく出土しなかったため詳細は不明であるが、位置及び竪穴住居の方位からこの時期に含める。

SB14(第24図) SB06・07・09に切られ、これらの下層に検出された竪穴住居である。長軸4.3m以上、短軸3.8m、長軸方位N-61°-Wである。柱穴、竈などの構造物は不明である。埋土は、暗黄灰色シルトを主とする。須恵器杯身、蓋、土師器などが出土しており、8世紀後半の時期と考えられる。

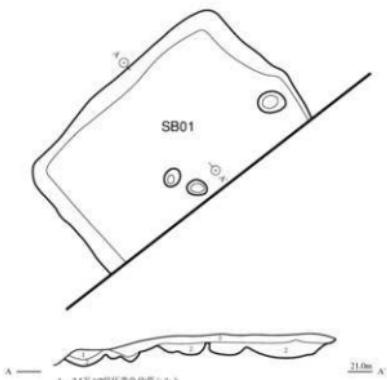
SB15(第24図) SB05・06に切られ、これらの下層に検出された遺構である。長短軸長不明、長軸方位不明である。柱穴、竈などの構造物は確認できなかった。埋土は、灰色シルトを主とする。遺物は少量であるが、8世紀後半の土師器甕などが出土している。

(2) 竪穴住居南群(97E区)

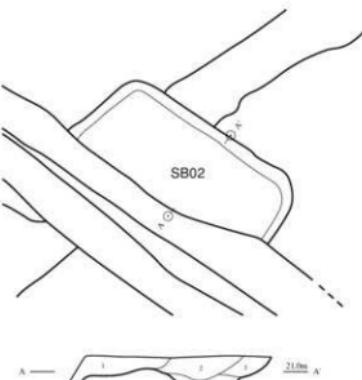
SB33(第25図) 調査区北部で検出された切りあい関係のない竪穴住居である。長軸4.2m、短軸3.3m、長軸方位N-51°-Wである。同時期の小土坑2基を検出したが、竪穴住居の柱穴ではないと考える。竈などの構造物は検出できなかったが、北西辺の壁際の床面に被熱し



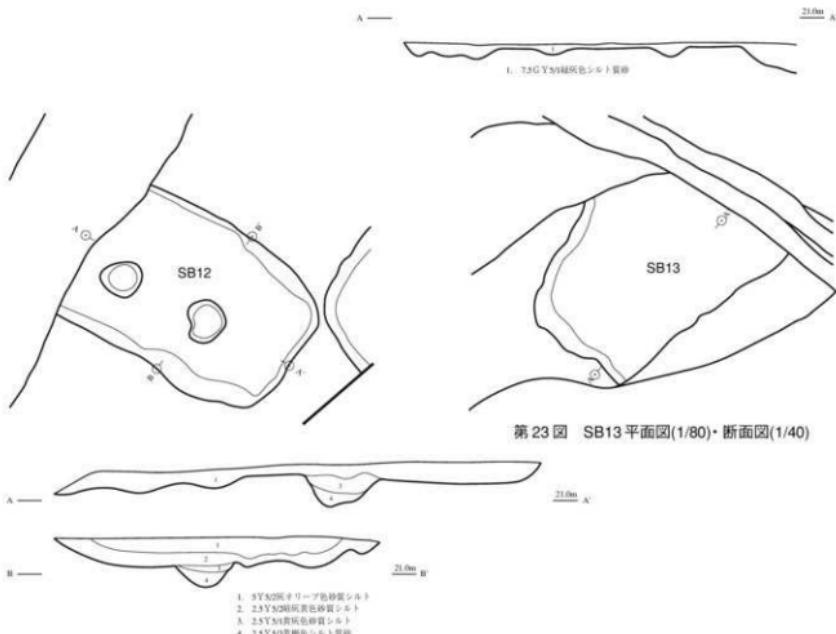
第19図 SB10 平面図(1/80)・断面図(1/80)



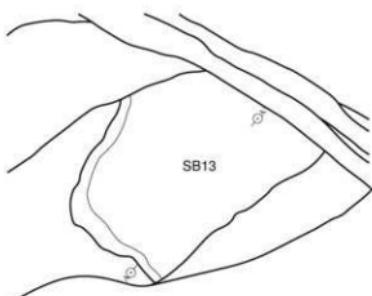
第20図 SB01 平面図(1/80)・断面図(1/40)



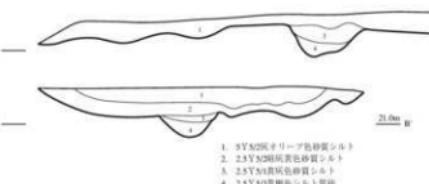
第21図 SB02 平面図(1/80)・断面図(1/40)



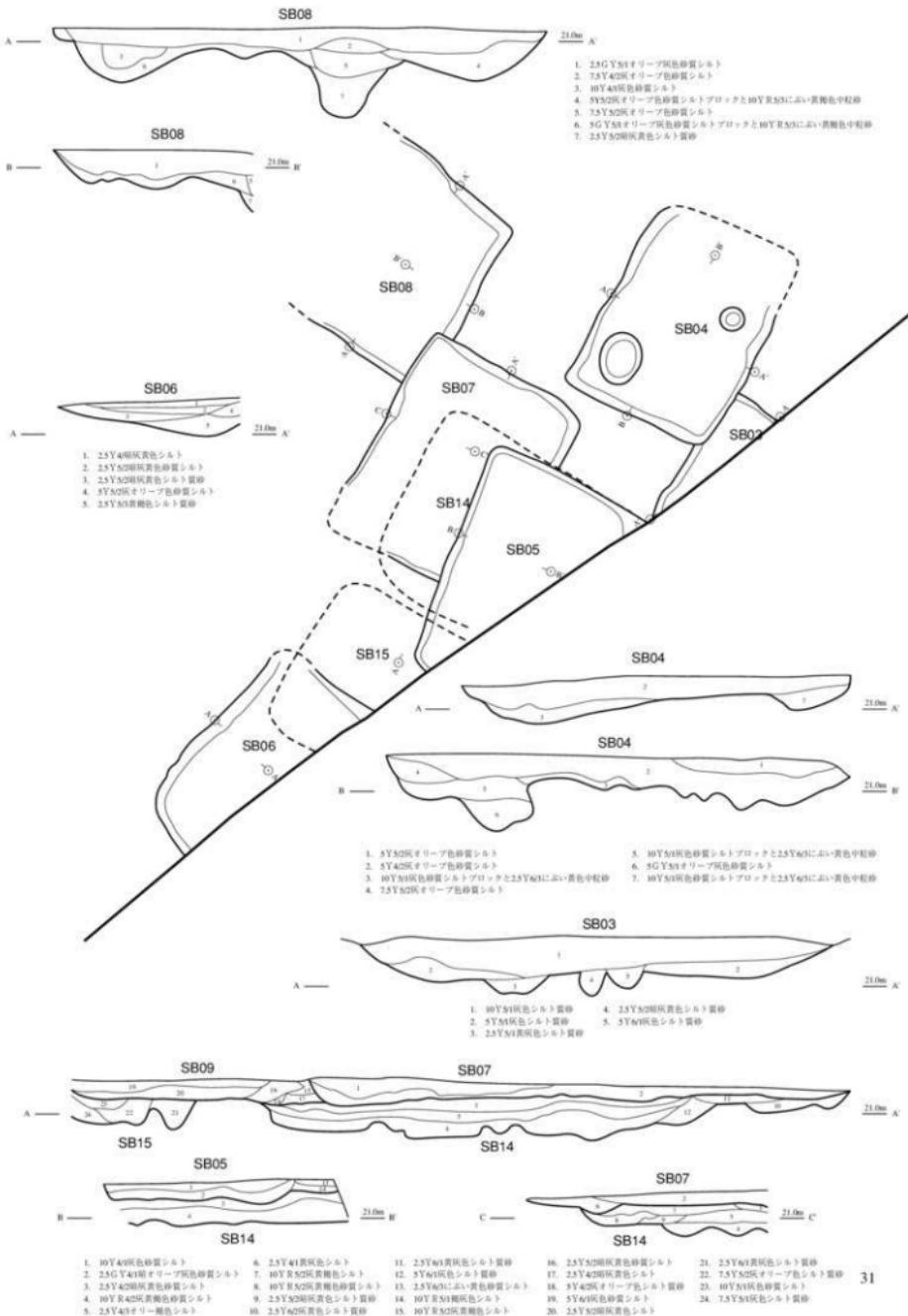
第22図 SB12 平面図(1/80)・断面図(1/40)



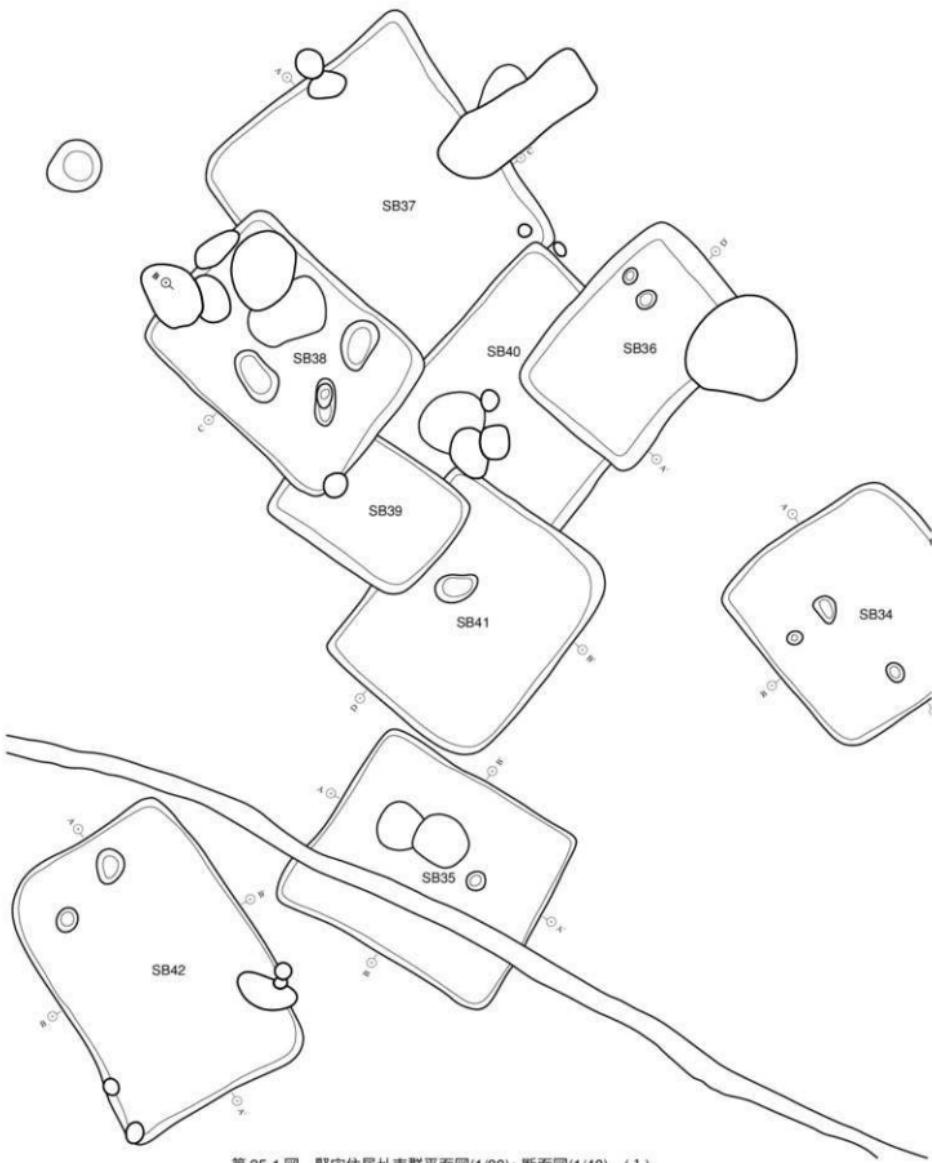
第23図 SB13 平面図(1/80)・断面図(1/40)



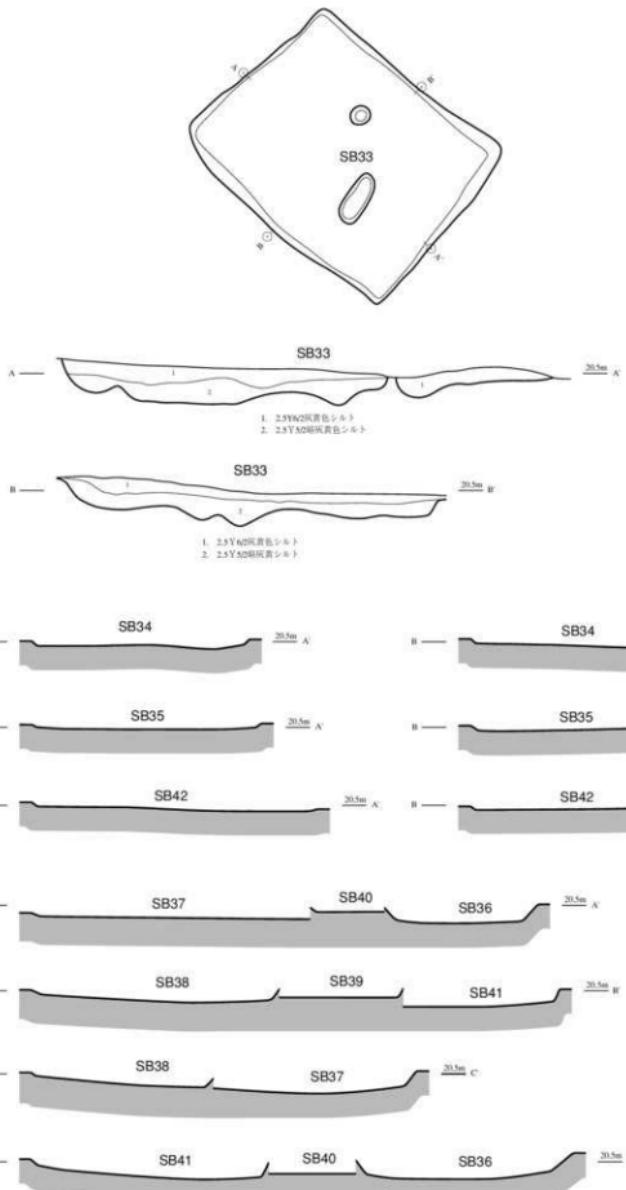
1. 2.5Y4/0暗灰青色砂質シート
2. 3Y4/0区オリーブ色砂質シートブロックと2.5Y6/0に近い青色細粒砂
3. 2.5YS1黄灰色砂質シート
4. 2.5YS3黄褐色シート質砂



第24図 竪穴住居址北群平面図(1/80)・断面図(1/40)



第25-1図 穫穴住居址南群平面図(1/80)・断面図(1/40) (1)



第25-2図 穫穴住居址南群平面図(1/80)・断面図(1/40) (2)

ている部分があり、この部分に竈の存在が予想される。埋土は、灰黄色シルトを主とする。遺構埋土中からの出土遺物としては、須恵器杯身・蓋・盤・鉢、灰釉陶器碗・皿、土師器甕などが検出されている。これらの遺物は、8世紀後半から9世紀前半の時期であるが、竪穴住居の時期として9世紀前半と考える。

SB34(第25図) 調査区中央部で検出された、切りあい関係のない竪穴住居である。長軸3.6m、短軸3.4m、長軸方位N-40°-Wである。柱穴と考えられる小土坑を床面上で2基検出した。竈などの構造物は検出されなかつたが、竪穴北西隅の床面が広く被熱しており、この部分に竈の存在が予想される。出土遺物は少量であるが、須恵器杯身・蓋、土師器甕などが検出されている。出土遺物から8世紀後半の時期と考えられる。

SB35(第25図) 他の竪穴住居と切りあい関係のない住居である。長軸4.0m、短軸3.3m、長軸方位N-57°-Wである。竪穴住居にともなう小土坑1基を検出した。竈などの構造物は確認できず、床面の被熱部分も検出できなかつた。須恵器杯身・蓋・盤、土師器甕などが出土した。出土遺物から、8世紀後半の時期と考えられる。

SB36(第25図) 調査区中央部で検出された一群の竪穴住居と切りあい関係にある竪穴住居である。SB06を切る。長軸3.6m、短軸2.5m、長軸方位N-36°-Eである。小形の遺構であり、竪穴住居ではない可能性がある。須恵器杯身・蓋、灰釉陶器碗、土師器甕などが検出されている。出土遺物から、9世紀代と考えられる。

SB37(第25図) SB38・40によって切られる比較的大形の竪穴住居である。長軸4.6m、短軸4.3m、長軸方位N-37°-Eである。遺構にともなう小土坑を1基のみ検出した。竈などの構造物は検出されなかつた。出土遺物は、須恵器杯身・蓋、土師器甕などが検出されている。出土遺物および遺構の新旧関係から、8世紀後半の時期と考えられる。

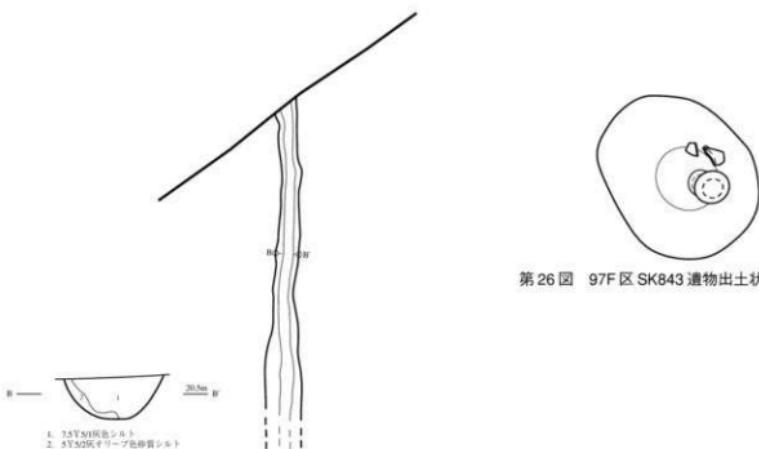
SB38(第25図) SB37・39・40を切る竪穴住居である。長軸4.0m、短軸3.1m、長軸方位N-48°-Wである。竪穴住居と同時期の土坑3基を遺構内で検出したが、柱穴は確定できない。竈などの構造物は検出できなかつた。遺物は須恵器杯身・蓋・盤、土師器甕などが出土している。出土遺物および切りあい関係から、8世紀後半の時期と考える。

SB39(第25図) SB40・41を切る竪穴である。長軸2.8m、短軸2.1m、長軸方位N-57°-Wである。遺構にともなう柱穴および竈などの構造物は検出されなかつた。遺構は、小形のため竪穴住居ではない可能性がある。出土遺物は須恵器盤などである。出土遺物、遺構の切りあい関係から8世紀後半の時期と考えられる。

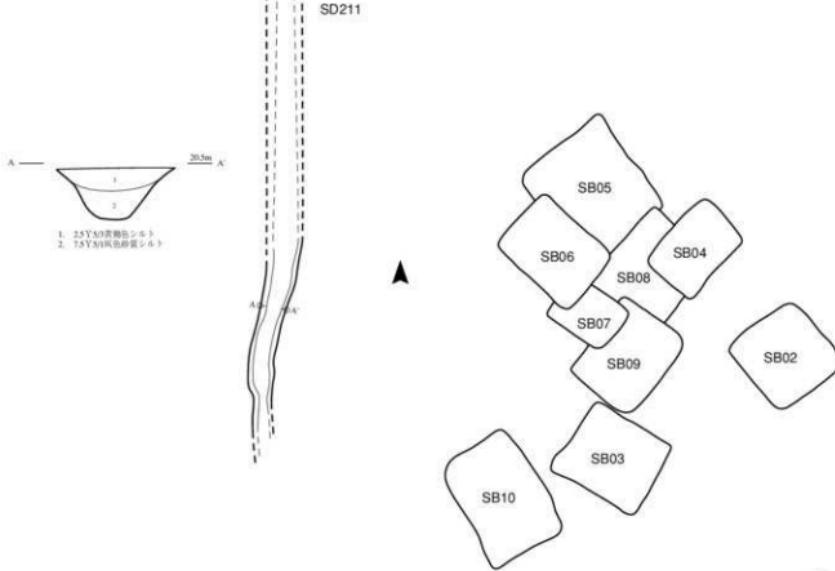
SB40(第25図) SB36・39・41に切られ、SB37を切る竪穴住居である。長軸不明、短軸3.5m、長軸方位N-37°-Eである。柱穴および竈などの構造物は確認できなかつた。出土遺物は須恵器杯身・蓋・盤、土師器甕などが検出された。出土遺物および切りあい関係より8世紀後半の時期と考える。

SB41(第25図) SB39に切られ、SB40を切る遺構である。長軸4.0m、短軸3.3m、長軸方位N-35°-Eである。竪穴にともなう土坑1基を検出したが、柱穴および竈などの構造物などは確認できない。出土遺物は須恵器杯身・蓋・盤、土師器甕などが検出された。出土遺物および切りあい関係より、8世紀後半の時期と考えられる。

SB42(第25図) 竪穴住居群の最も南に位置する切りあい関係のない竪穴住居である。長軸4.9



第26図 97F区 SK843 遺物出土状態図(1/20)



第27図 SD211 平面図(1/200)・断面図(1/40)

m、短軸3.5 m、長軸方位N-29°-Wである。遺構にともなう土坑1基、柱穴と考えられる小土坑1基を検出したが、竈などの構造物は確認できなかった。出土遺物は、須恵器杯身・蓋・盤、土師器甕などが検出された。出土遺物は8世紀後半から9世紀初頭の時期のものであり、9世紀初頭の時期と考える。

(3)溝

この時期の溝が97E区で1条検出されている。

SB211(第27図) 堪穴住居南群の西側に検出された溝である。最大幅2.1m、深さ0.4mを測る。溝の方向はN-2°-Eであり、ほぼ南北方向に走る。調査区中央部では近年の地震による液状化現象で消失する。南方向は調査区内途中まで確認されたが、地震の影響で南方向は検出できなかった。埋土は灰色シルトを主とする。遺構の埋土中より、8世紀後半代の須恵器杯身・蓋、土師器甕などが出土した。自然地形、及びほぼ同時期の堪穴住居の主軸とも異なる方向をとる溝であり、奈良時代の条里制などの人為的な強い規制によって形成されたと考えられる。

(4)土坑

数基であるが、この時期と考えられる小土坑が97E・F区で検出された。

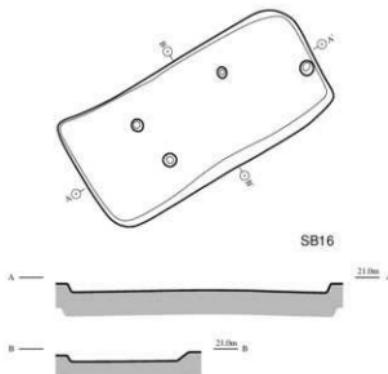
97F区 SK843(第26図) 97F区ほぼ中央で検出された。長軸0.7 m、短軸0.6 m、検出面からの深さ約0.2 mで、埋土は灰色砂質シルトである。須恵器杯身、土師器甕などが出土した。

3.c期の遺構

この時期の遺構は97A区で堪穴住居1棟が検出されている。

SB16(第28図) 97A区北西部の古墳時代大溝SD201上に検出された。長軸4.3 m、短軸2.0 m、長軸方位N-60°-Eである。遺構にともなう小土坑は床面で4基検出されたが、柱穴としては3基である。竈などの構造物は確認できなかった。灰釉陶器椀・皿、土師器甕などが検出された。出土遺物から10世紀代の遺構で、平安時代初期までにSD201が完全に埋没した後に形成されたと考えられる。

(酒井俊彦)



第28図 SB16 平面図・断面図(1/80)

第4節 中世の遺構

中世の遺構として13世紀から15世紀前半までのものがこの時期に属す。中世の遺物は各調査区で出土しているが、遺構に伴うものは少なく、中世として時期を確定できるものは井戸を除いてわずかである。屋敷地の区画溝などの溝は、戦国時代・近世の屋敷地区区画溝の掘削によって全て再掘削されていると考えられ、中世の時期に特定できるものはない。土坑についてはわずかであるがこの時期に属すと考えられるものが存在するが、掘立柱建物の柱穴などの小土坑は戦国時代以降の時期のものと混在し、遺物あるいは埋土から時期を確定できるものはない。

1. 土坑

97D区 SK304(第29図) 長軸0.41m、短軸0.33mである。検出面からの深さは0.24mを測る。灰釉系陶器の山茶椀(碗・皿)、常滑窯産陶器甕、伊勢型鍋、土師器皿などがまとまって出土した。山茶椀は、南部系で尾張第5型式から第7型式のものが検出され、遺構の時期としては13世紀代と考えられる。

2. 火葬施設

SX22(第30図) 長軸0.61m、短軸0.25mである。深さは0.25mを測る。埋土は、黄褐色細粒砂を基本として、炭化物・焼土などを多く含む。遺物及び骨片などの自然遺物は検出されていないが、遺構の平面形及び埋土より中世の火葬施設の可能性が高い。

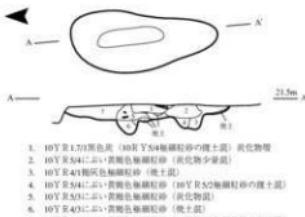
3. 小土坑

中世以後の掘立柱建物の柱穴の可能性のある小土坑は遺跡全体で7000基を越え、区画溝内の屋敷地において全時期にわたって混在する。屋敷地の小土坑及び区画溝内の出土遺物からそのほとんどは中世から近世前半(13世紀から18世紀前半)の時期に属すものである。中世の時期に属す遺構と戦国時代・近世の遺構とは埋土からは識別できないため遺物が検出されなかつた小土坑は所属時期が不明である。また、居住城は中世から近世までほぼ同地域に継続的に形成されるため、より古い時期の遺物が新しい時期の遺構の埋土に混入する。このため中世の遺物のみが検出された遺構が、戦国時代及び近世の遺構である可能性が大きい例が少なくない。このようなことから、中世の集落を構成する掘立柱建物を確定することは困難である。

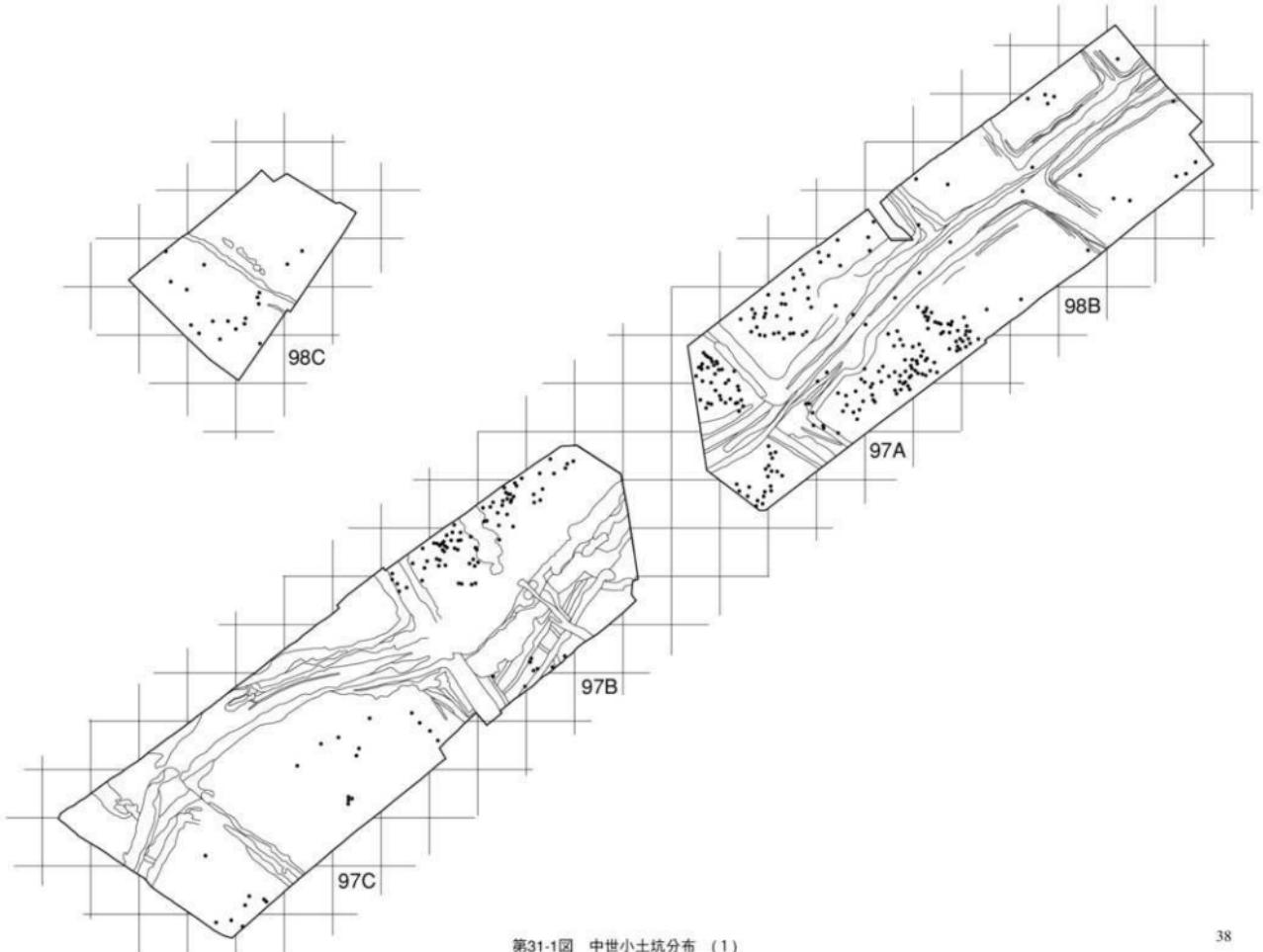
13世紀から15世紀前半の遺物のみを出土した遺構を中世の時期の可能性のあるものとして、中世の掘立柱建物を構成する柱穴と考えられる小土坑および土坑の分布を示す。(第31図) 調査区全体で中世の遺物のみを出土する小土坑、土坑は全体の約3割である。遺物が検出されない遺構でこの時期に属するものと戦国時代以後の遺構で中世の遺物のみを出土する遺構が存在することとを考慮すれば、これは中世の時期の遺構のおおよその割合を表すものと考える。また、その分布も中世の遺構の分布傾向を表すものと見なすことができる。 (酒井俊彦)



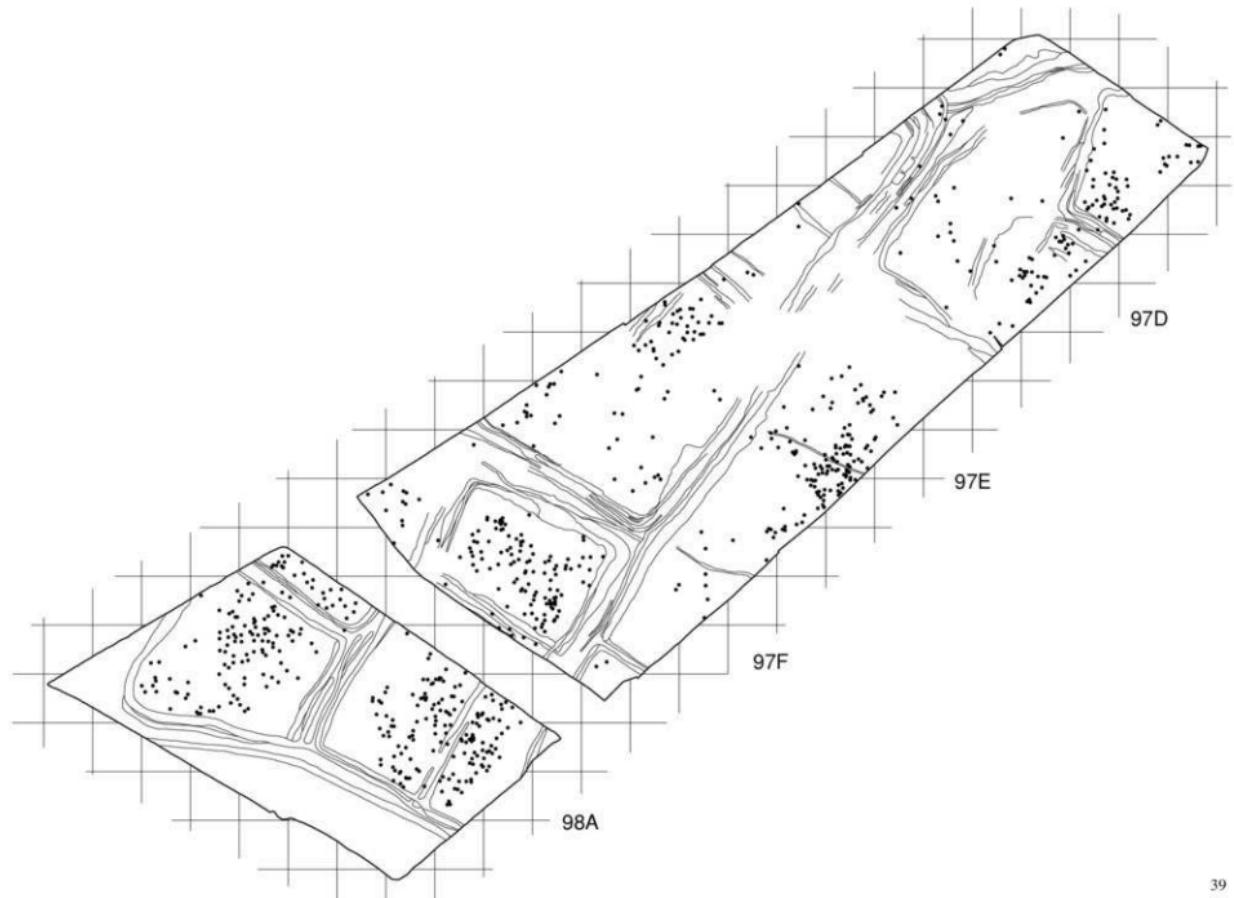
第29図 97F区 SK304 遺物出土状態図(1/20)



第30図 SX22 平面図・断面図(1/20)



第31-1図 中世小土坑分布 (1)



第31-2図 中世小土坑分布 (2)

第5節 戦国時代・近世の遺構

調査区域全体にわたって15世紀後半から18世紀前半の屋敷地が確認された。屋敷地は溝によって区画され、この区画単位に遺構を概観する。記述の都合上、区画溝の時期に関して以下のように区分する。註1)

I: 15世紀中葉～後葉の時期。2時期に細分される。

Ia: 15世紀中葉の時期。瀬戸窯産陶器類の編年で古瀬戸後IV期古に相当する。

Ib: 15世紀後葉の時期。瀬戸窯産陶器類の古瀬戸後IV期新に相当する。

II: 15世紀末から16世紀初頭。瀬戸窯産陶器類の大窯第1段階に相当する。

III: 16世紀前葉～後葉の時期。瀬戸窯産陶器類編年で大窯第2～3段階に相当する。

IV: 17世紀代。瀬戸窯産陶器類編年で登窯第1～4小期に相当する。

V: 18世紀代。瀬戸窯産陶器類編年で登窯第5～8小期に相当する。

区画01(第32図)

調査区南端に位置する。東西36.9m、南北37.1mを測る。東北隅は調査区外である。区画溝の時期関係は、南辺はSD002(I)→SD001(II～IV)である。西辺は、SD001によってSD002が切られるが同様である。東辺はSD005(Ia)→SD003・001(Ib)→SD006(II)→SD004(III)、北辺はSD004(I～III)である。南辺のさらに南側にSD007が走るが、19世紀代の水路であり、区画溝ではないと考える。

掘立柱建物3棟を確認した。(SB101～103)いずれも長軸は東西方向である。SB101は2×2間、SB102は2×3間、SB103は2×4間である。柱穴内の出土遺物および区画溝との方向性から16世紀代と考える。区画南東隅に15世紀後半から16世紀初頭にかけての方形井戸側の時期の井戸3基が切りあって存在する。また、西辺や南よりに16世紀代から17世紀初頭の桶組の井戸2基が切りあって存在する。

区画02・03(第32図)

区画01の東に接し、区画の中央の南北溝より西区画を02、東区画を03とする。区画02・03は溝によって完全には分断されておらず、時期的に一区画になる可能性があることから一括して取り扱う。区画は居住域の南端に位置する。東西42.4m、南北42.5mを測る。区画03部分の北辺の溝は確認していない。西辺はSD009(I)→SD008(II)→SD010(V)、南辺はSD012(I～IV)→SD013(V)、北辺はSD024(I)である。東辺は、SD017を確認するが、時期は不明である。北辺の部分は、調査区外となるために詳細は不明である。区画02、03の境界の区画溝はSD014(I)→SD016(II～IV)である。区画01と同じく南辺にはSD007が走る。

掘立柱建物SB104～111を検出した。区画02のSB105～107は東西方向に長軸をもち、SB104、108～111は南北方向に長軸をもつ。区画02の掘立柱建物については、SB104が2×2間、他は2×3間である。区画03については、SB108は2×2間、SB109～SB111は2×4間と考える。区画02の掘立柱建物は出土遺物から16世紀代である。区画03の掘立柱建物は、15世紀後半から16世紀代である。

井戸は、区画02南辺に中世から戦国時代初めの井戸が3基集中する。区画03の東辺には近世17世紀代の2基が存在する。また、区画02、03を分ける溝に重複して戦国時代以前と17世紀後半の井戸が検出された。

区画 04(第 32 図)

区画 03 の東側に位置するが、北西隅と西辺の一部のみで区画のはほとんどは調査区外にある。東西残長 11.6m、南北残長 31.7m を測る。区画溝は、近世のものしか確認されない。西辺および北辺は、SD035(IV)→ SD034(IV)である。

区画 05(第 32 図)

区画の西半など大部分は調査区外である。東西残長 26.8m、南北 43.9m を測る。南辺は、SD019(I～II)→ SD020(IV)、東辺は SD023(I～II)→ SD022(IV～V)である。北辺の溝は検出できなかつた。

井戸は、戦国時代の時期の 4 基が検出され、区画の北部に 15 世紀後半から 16 世紀初頭にかけて連続する 3 基が検出された。

区画 06(第 32 図)

区画全体が検出された。東西 36.6m、南北 26.8m を測る。区画溝については、西辺は SD025(I)→ SD027(II・III)、南辺 SD032(I)→ SD031(I・II)、東辺 SD030(I～III)→ SD029(IV)、北辺 SD026・030(I～III)→ SD029(IV・V)である。

掘立柱建物 2 棟(SB112・113)が検出された。いずれも長軸を東西方向にとり、SB112(第 50 図)は 2×5 間、SB113(第 51 図)は 2×4 間である。部分的に根石が置かれ、柱根が遺存する。出土遺物および遺構の切りあい関係より近世 17 世紀前半の時期と考える。区画内の小土坑はそのほとんどが掘立柱建物の柱穴であり、柱根が遺存するものがある。(第 54 図 97F 区 SK490 は、根石上に柱根がのった状態で検出された)。

井戸は、区画南東隅に中世 13～14 世紀代の 4 基が連続して形成される。切りあい関係のない単独の井戸が 5 基検出されたが、15 世紀後半から 16 世紀初頭が 3 基、16 世紀代 1 基、15 世紀代までのものが 1 基である。

区画 07(第 35 図)

区画 08 との境界が不明瞭であるが、一つの区画とする。東半は調査区外である。東西残長 27.7m、南北 53.2m を測る。区画溝は、西辺は SD037(I・II)→ SD038(III・IV)→ SD036(III・IV)、南辺は SD036(IV・V)、北辺は SD041(IV)である。区画内より井戸は検出されていない。

区画 08(第 35 図)

東部は調査区外である。東西残長 36.4m、南北 35.8m を測る。区画溝は、西辺 SD036(I・II)→ SD038(III・IV)、南辺 SD041(IV)、北辺 SD149(IV・V)である。井戸は単独で検出され、中世 13 世紀代 1 基が区画中央部に、近世 17 世紀代 2 基が北辺と西辺に確認された。

区画 09(第 35 図)

区画北西部が調査区外となる。東北部に小区画が形成される時期があるが、同一区画とする。東西残長 44.4m、南北 47.8m である。区画溝については、南辺 SD047(I)→ SD045(II・III)→ SD023・046(IV)、東辺は SD045(I～III)→ SD046(IV)、北辺は SD053(I)→ SD052(II)→ SD051(III)である。北東部の小区画は西辺の溝 SD049・050(IV)が検出された。

区画中央で掘立柱建物が 2 棟検出された。SB114(第 52 図)は、1×2 間であるが、短辺の柱間が大きい。根石は数個の石を敷き並べる。SB115 は、1×3 間で短辺の柱間が長い。いずれも東西方向に長軸をもつ。15 世紀後半から 16 世紀代の時期と考える。井戸は、中世 13 世紀代

1基、戦国時代7基、中世から戦国時代が2基、近世2期、戦国時代から近世が1基、時期不明1基である。井戸の切りあいは少なく、連続する時期で切りあうものはない。

区画10(第38図)

区画の北西半大部分が調査区外となる。区画を時期的に分ける溝が2条存在するが一区画として考える。東西残長21.5m、南北49.6mを測る。区画溝については、南辺はSD054(I)、東辺はSD059(I-II)→SD061・062(IV)→SD060(V)、北辺はSD059(I-II)→SD061・062(IV)→SD063(V)である。区画中央の東西溝については、SD056・067(II)である。

井戸については、中世14世紀代の井戸が2基近接して検出され、戦国時代1基、近世1基が検出された。

区画11(第38図)

区画10・12・13・14に囲まれた南北に長い、変則的な形態の区画である。東西18.9m、南北51.2mを測る。区画溝は、西辺SD068(III・IV)、南辺SD067(III)→SD066(IV)、東辺045(II・III)である。

掘立柱建物1棟が確認された。SB116(第53図)は、2×2(3)間で、根石を隅柱に有し、柱根が柱穴1基のみ遺存する。井戸は北部に戦国時代1基、南辺部分に集中して近世17世紀代の井戸が3基検出された。

区画12(第38図)

区画の西部のみが確認された。東西残長21.2m、南北27.8mを測る。区画溝は、西辺SD072(II・III)、南辺SD066(IV)、北辺SD073(II)→SD074(III)→SD075(IV)である。

井戸は区画中央で中世13世紀代の2基が検出された。

区画13(第38図)

区画東部、北辺が調査区外である。東西残長24.8m、南北30.9mを測る。西辺SD076(I～V)、南辺SD076・081(I-II)→SD076(III・IV)→SD076・077(V)、北辺SD076(I～V)である。

掘立柱建物の柱穴と考えられる小土坑が集中し、柱根、根石が遺存するものが確認された。(第55図)97D区SK85は、深さ0.7m、長軸2.2m、短軸1.7mを測る。底面に扁平な円礎が数個置かれ、径約30cmの柱根が検出された。同SK189は、底面に十数個の扁平な円礎と角礎が置かれ、径約20cmの柱根が検出された。また、鍛冶に関する遺構が検出された。(第57図)SX38は溝状の造構で、一端に柱の根石と考えられる集石が検出され、埋土中より鉄滓、焼土、炭化物がまとまって出土した。97D区SK154は、鉄滓が集中して検出された。井戸は、区画中央部に集中する。戦国時代4基、戦国時代以降2基、不明1基が検出された。

区画14(第38図)

南辺以外は調査区外となる。東西残長31.2m、南北残長8.6mである。南辺は、SD082・083(I)→SD082(II)である。井戸は、戦国時代16世紀代の1基が検出された。

区画15(第41図)

区画の北西部が確認された。東西残長28.4m、南北残長20.2mを測る。北辺はSD087(III・IV)、西辺SD086(II)→SD156(III)→SD086(IV)である。

井戸は、中世2基、戦国時代3基、近世1基、不明1基が区画の中央に検出された。

区画16・17(第41図)

区画16・17は大部分が調査区外であり、境界など区画の詳細は不明のため一括する。東西は

区画16で20.2mを測る。区画16が南北残長8.3m、区画17が南北残長27.6mである。区画16・17の境界はSD090(I)→SD089・090(II・III)である。同東辺はSD088・091(I・II)→SD088(III)である。

井戸は、区画17の南隅に中世13世紀後半から14世紀代の3基が検出された。

区画18(第41図)

南東半が調査区外となる。東西残長33.2m、南北54.2mである。南西辺SD092(I～V)、北辺SD093・094(I)→SD093(II～V)、北東辺SD096(I)→SD095(IV)である。

井戸は、中世13世紀中葉から14世紀代の時期のものが北東部に1基、中央部に2基、南東部に2基検出された。戦国時代初めの時期のものが北辺に1基、南西辺には戦国時代から近世初期、16世紀から17世紀代の4基が検出された。

区画19(第41図)

南部のみが確認され、大部分は調査区外となる。東西40.8m、南北残長18.1mを測る。南辺SD097(I・II)、SD097・098(III・IV)→SD097(V)、東辺SD097(I～V)である。

井戸は、南辺中央に戦国時代の1基と時期不明の1基が検出された。

区画20(第43図)

南東半が調査区外となる。南北24.4m、東西残長18.9mである。南辺SD101(II～IV)、西辺SD100(I・II)→SD102(III～V)、北辺SD106(IV)である。

井戸は戦国時代16世紀代の1基が南辺で検出された。

区画21(第43図)

区画の西半が検出された。東西残長24.6m、南北残長28.6mである。南辺SD107(I～III)、西辺SD100(I・II)→SD102(III)→SD100・102(IV・V)である。

井戸は、区画中央に近世18世紀代の1基を検出した。

区画22(第43図)

区画の南東半が検出された。東西残長18.8m、南北残長44.9mである。南辺SD101(II～IV)、東辺SD100(I～V)である。

井戸は、中世1基、戦国時代2基、近世2基が検出されている。

区画23(第43図)

北隅のみ検出され、大部分は調査区外である。東西残長13.5m、南北残長18.4mである。西辺SD118(II)→SD109・110(IV)→SD109(V)、北辺SD111(IV)である。

区画内では井戸は検出されなかった。

区画24(第43図)

区画の東隅が検出された。東西残長23.2m、南北残長18.5mを測る。北辺SD115(III・IV)、東辺SD113(III)→SD113・114(IV)→SD113(V)である。

井戸は、北辺に戦国時代15世紀代の1基が検出された。

区画25(第45図)

区画の北西部が検出された。南北64.7m、東西残長18.8mを測る。南辺はSD117(III・IV)、西辺はSD120(I・II)→SD119(III・IV)、北辺はSD120(I)→SD120・122(II)→SD122(III)である。井戸は、検出されなかった。

区画26(第45図)

区画の南東半が検出された。南北46.8m、東西残長23.0mを測る。南辺SD125(I～IV)、東辺SD126・128(I・II)→SD128(III)→SD162・126(IV・V)、北辺SD129(I)である。

掘立柱建物が1棟検出された。SB117は2×3間で17世紀以降の時期と考える。井戸は、戦国時代15世紀代後葉の1基が南辺で、16世紀代後半の1基が中央部で検出された。

区画27(第45図)

区画の南東半が検出された。南北22.2m、東西残長12.7mを測る。区画溝は、南辺SD128(III)、東辺SD128(III)→SD126(IV)、北辺SD134(I・II)である。井戸は検出されなかった。

区画28(第45図)

区画の南西部が検出された。東西残長24.0m、南北残長32.8mを測る。区画溝は、南辺SD137(I)→SD135(II・III)、西辺SD137(I)→SD135(II・III)→SD126(IV)である。井戸は検出されなかった。

区画29(第45図)

区画の南東半が検出された。南北26.0m、東西残長12.3mを測る。区画溝は、南辺、東辺及び北辺がSD141(I・II)→SD140である。

井戸は、中世13世紀代が南隅に1基、戦国時代の15世紀代1基、16世紀代1基が検出されている。

区画30(第45図)

南隅が検出されている。東西残長10.9m、南北残長6.9mである。区画溝は、南辺及び東辺SD139(I・II)である。井戸は、検出されなかった。

区画31(第46図)

区画の北東半が検出された。東西残長30.4m、南北残長21.2mを測る。区画溝は、北辺SD145(I)→SD146(II)である。

井戸は、区画検出部の南隅に戦国時代15世紀代1基を検出した。

区画32(第46図)

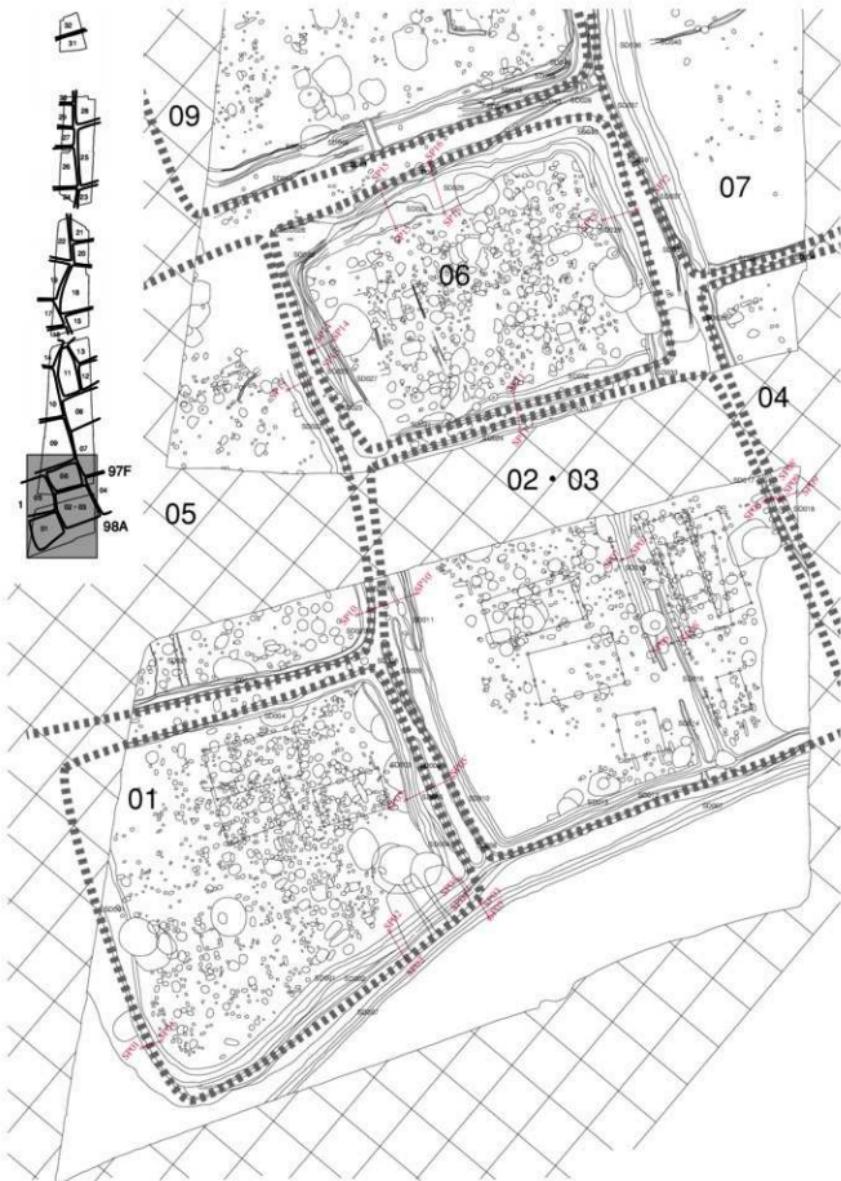
区画の南西半が検出された。東西残長26.4m、南北残長21.1mを測る。区画溝は、SD147(II・III)である。

井戸は、中世13世紀代及び戦国時代15世紀代の各1基が南西辺で検出された。

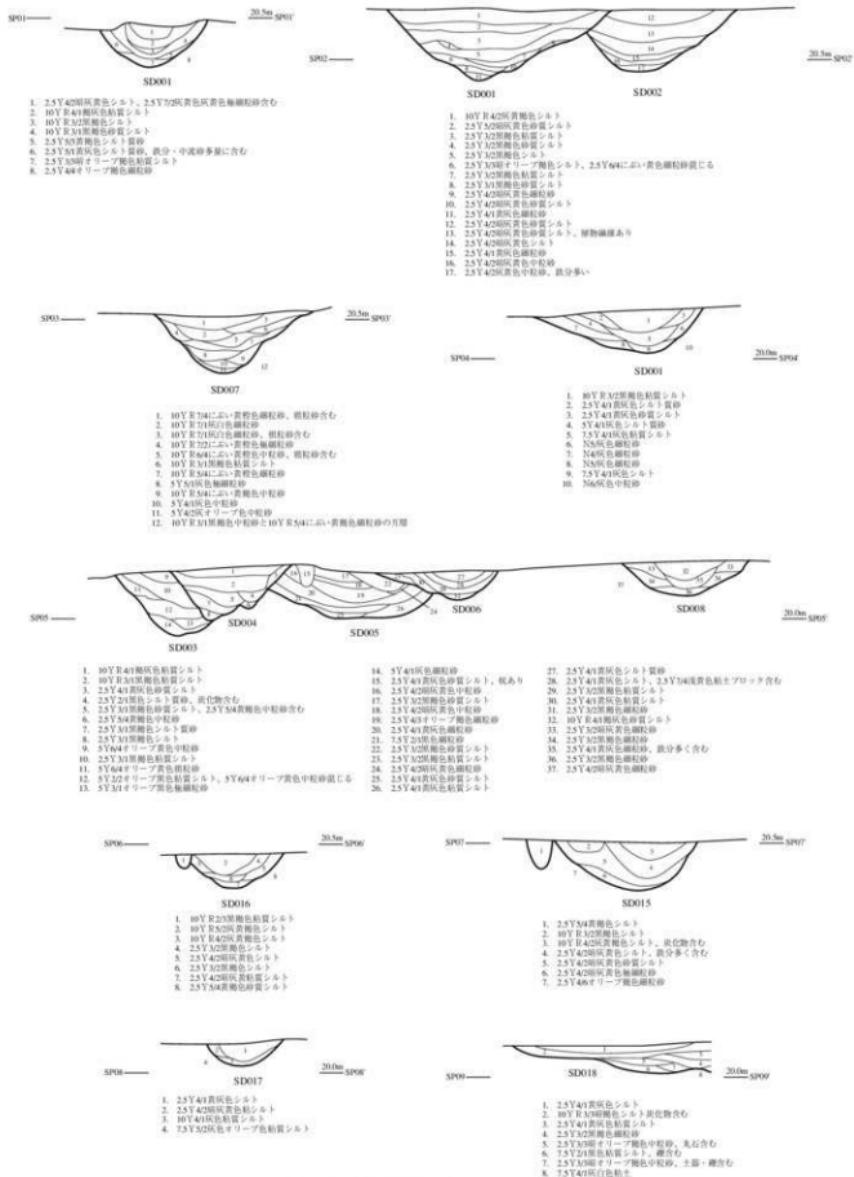
(酒井俊彦)

註

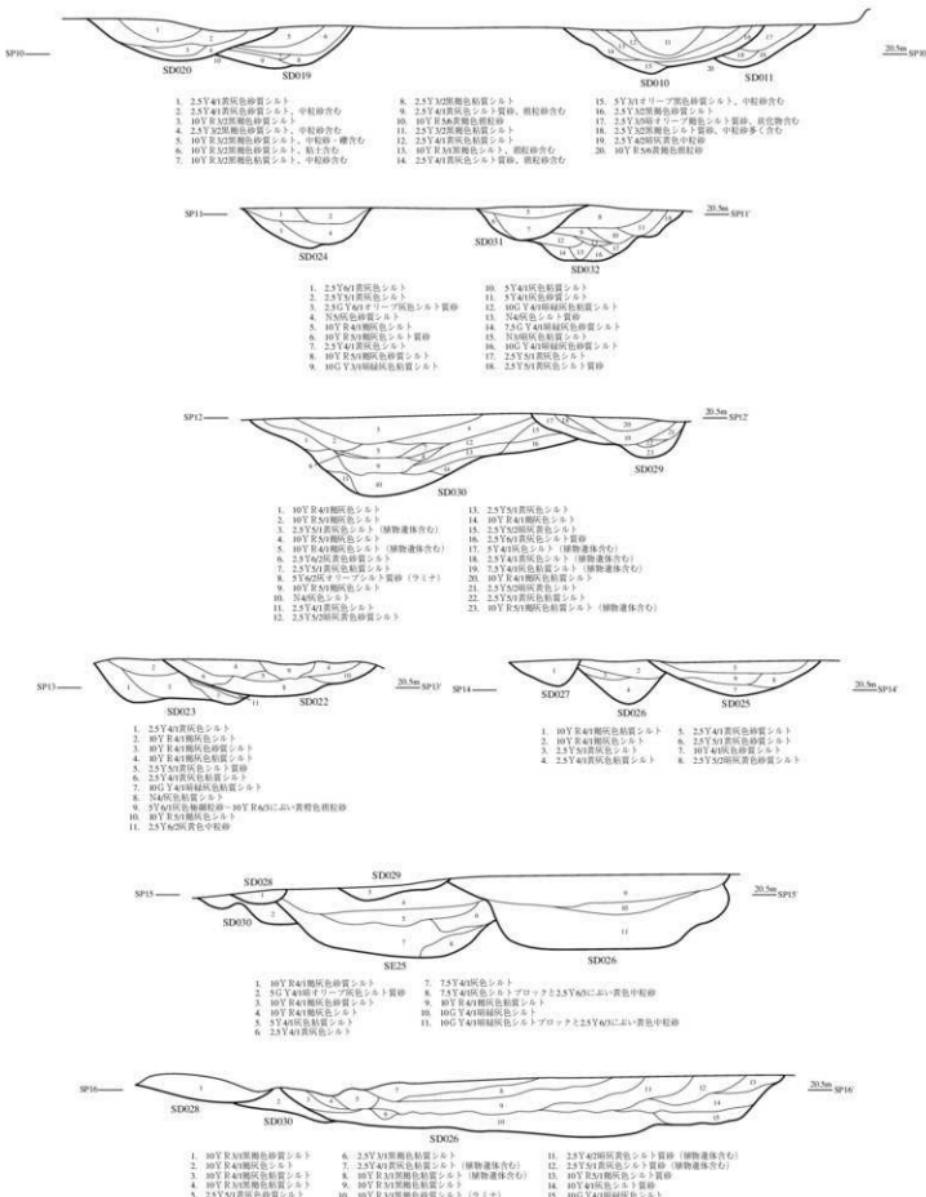
1)瀬戸窯産陶器類については、第3章第1節を参照。



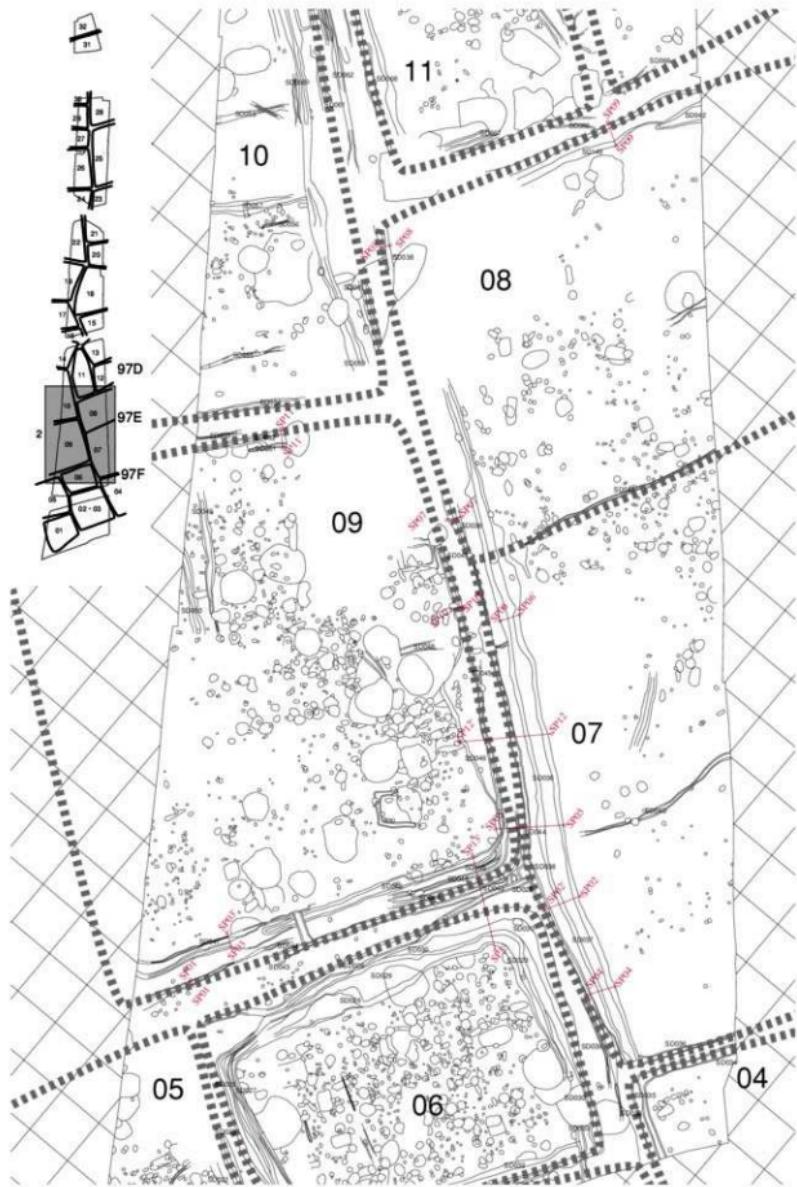
第32図 屋敷地区画(1/500) (1)



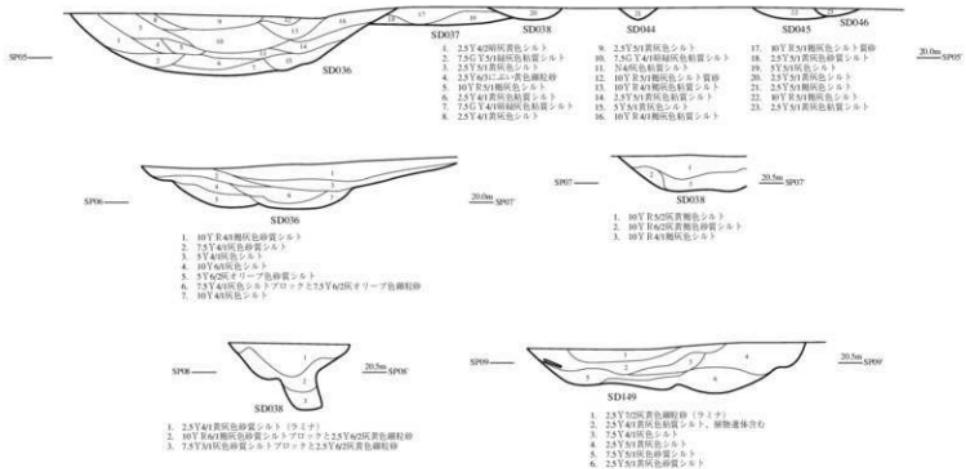
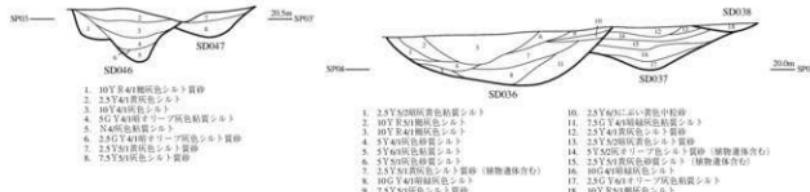
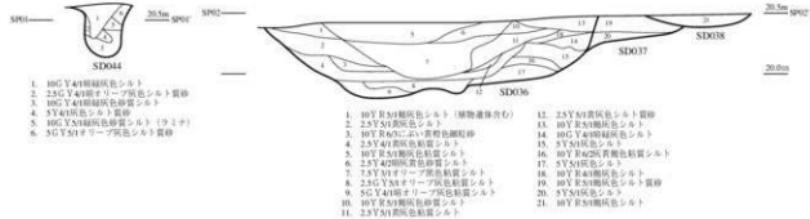
第33図 区画溝断面図(1/40) (1-1)



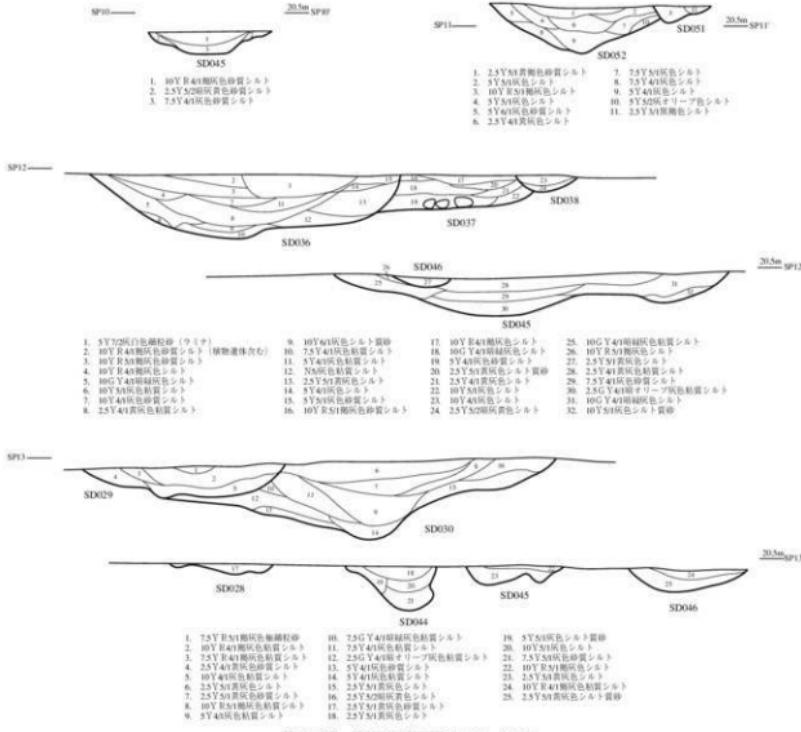
第34図 区画溝断面図(1/40) (1-2)



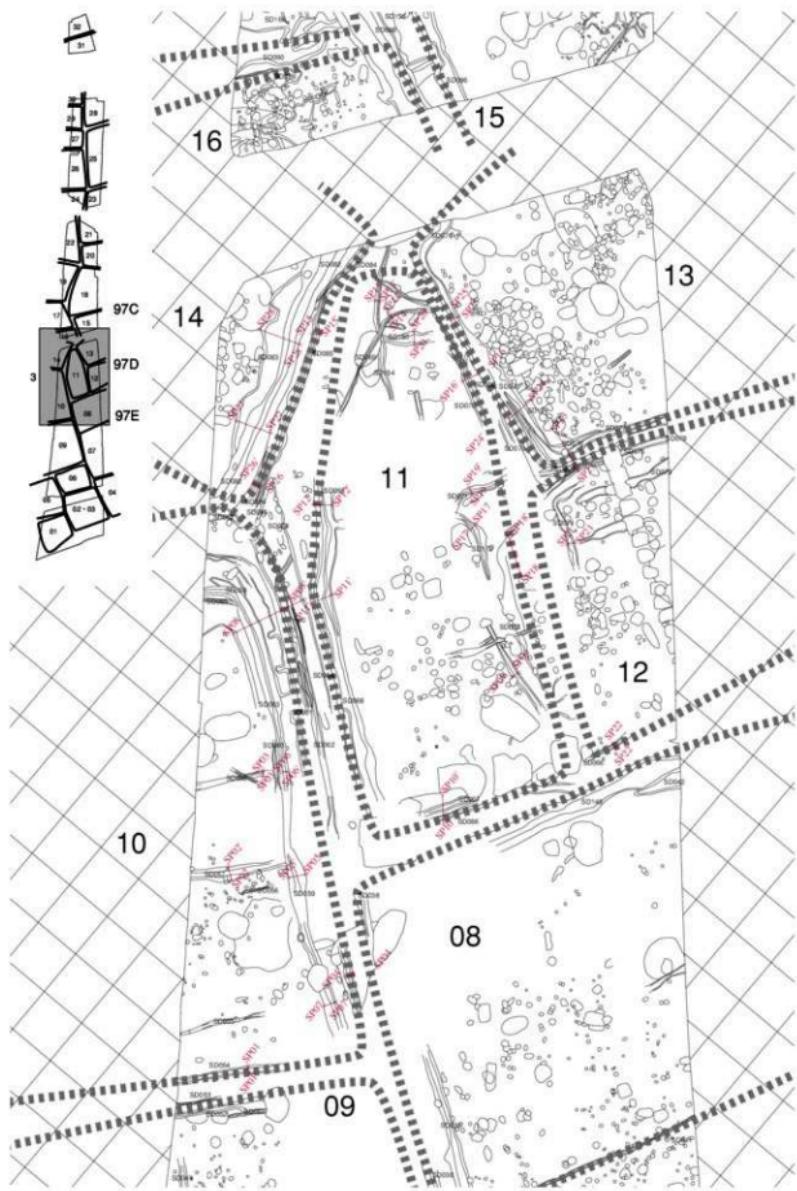
第35図 屋敷地区画(1/500) (2)



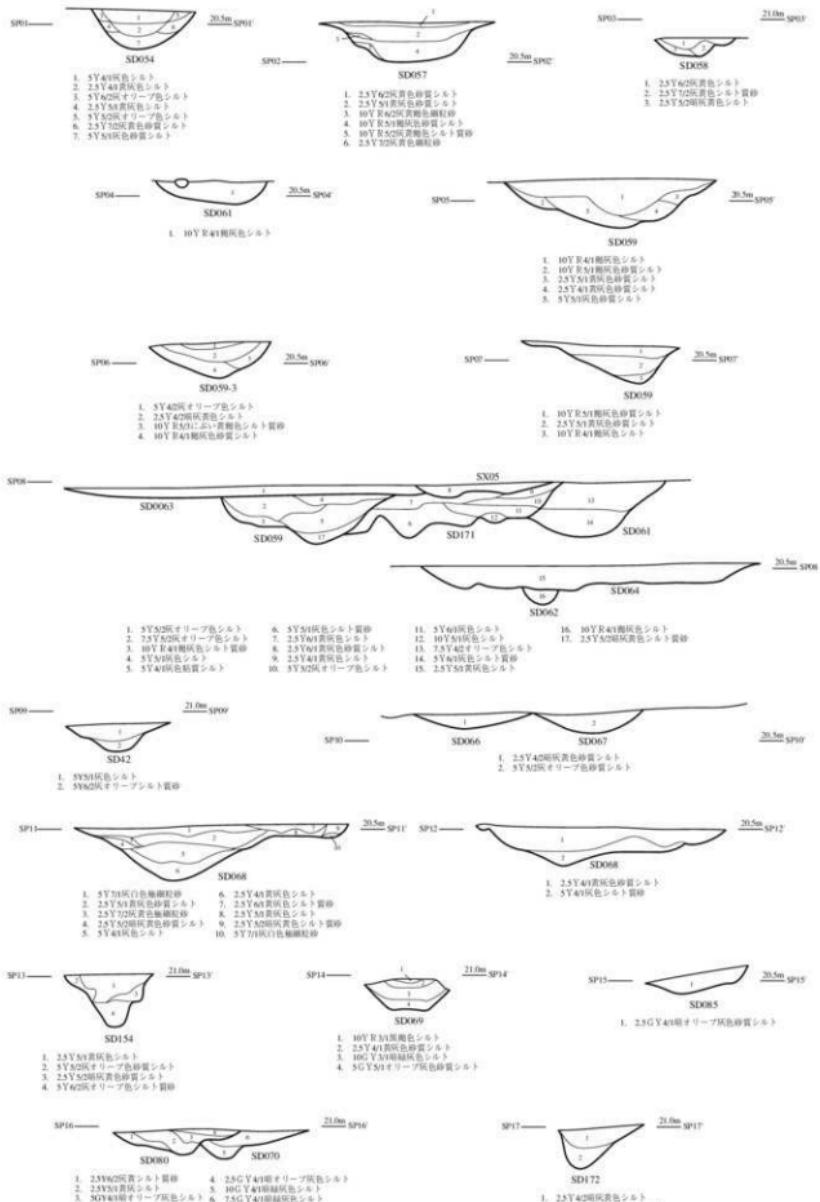
第36図 区画溝断面図(1/40) (2-1)



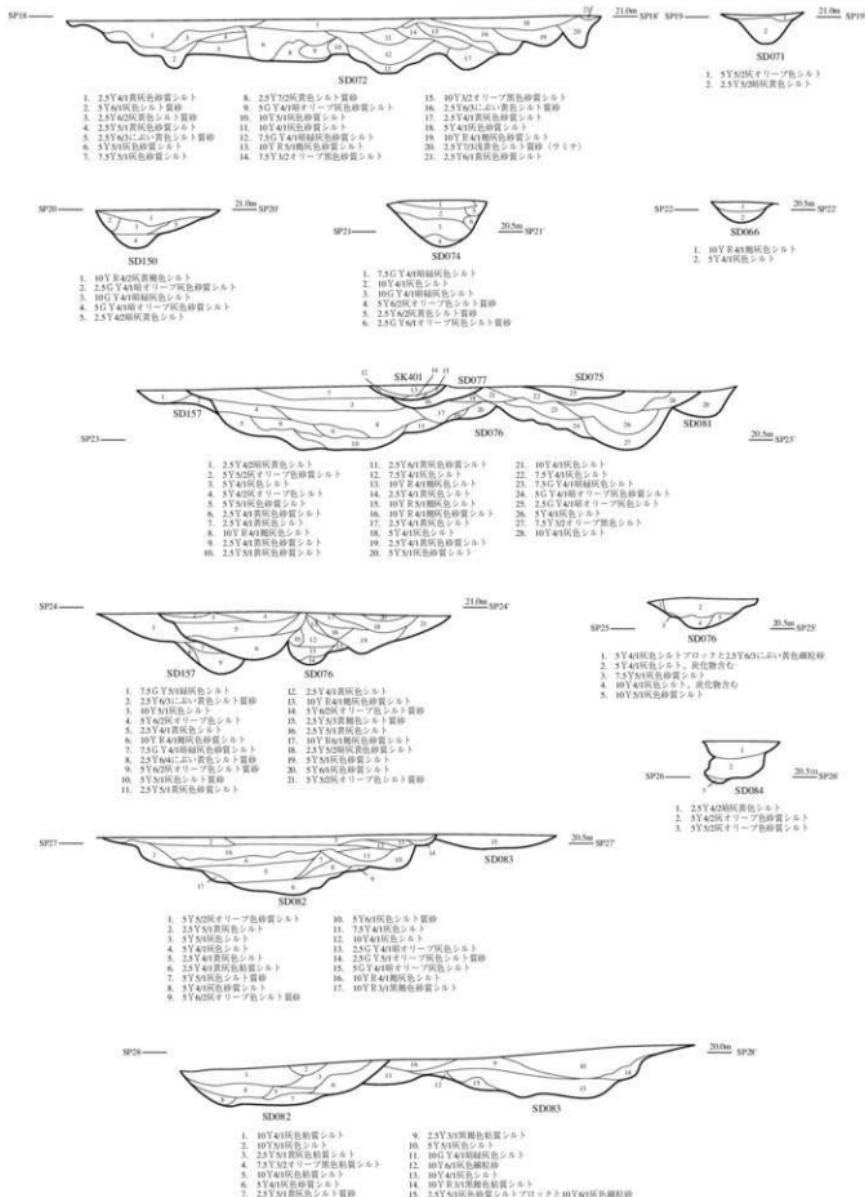
第37圖 圖圓滿斷面圖(1/40) (Z-Z)



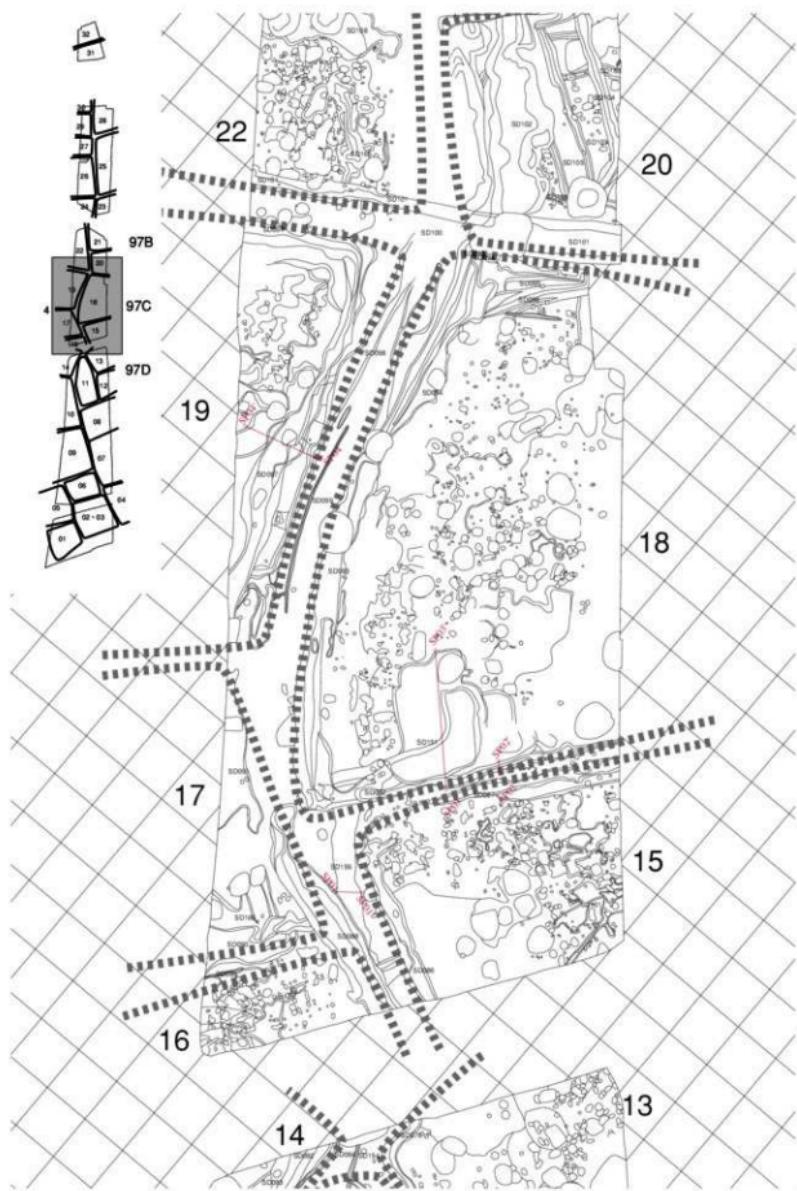
第38図 屋敷地区画(1/500) (3)



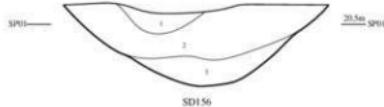
第39図 区画溝断面図(1/40) (3-1)



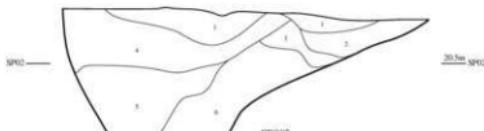
第40図 区画横断面図(1/40) (3-2)



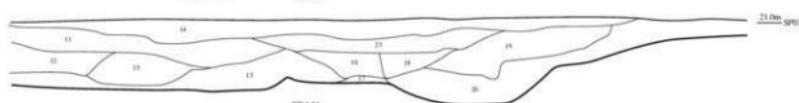
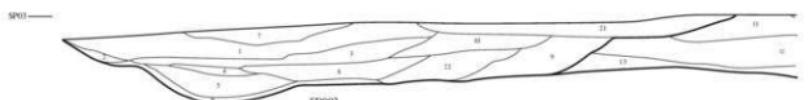
第41図 屋敷地区画(1/500) (4)



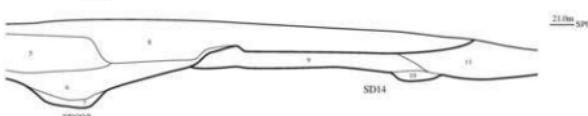
1. 5Y52Rオリーブ色紺質シルトとYS52Rオリーブ色粘質シルト。既分含む
2. 5Y5R灰色紺質シルト。既分含む
3. 2.5Y5R黄褐色紺質粘土。既分含む



1. 2.5Y5R黒褐色紺質シルト。既分含む
2. 5Y5R黑色紺質シルト。既分含む
3. 10YR64C.5R黑色紺質粘土
4. 2.5Y5R黒褐色紺質シルト。7.5YR44C.5R黑色紺質少量含む
5. 2.5Y5R黒褐色紺質シルト。10YR44C.5R黑色紺質を塊状に含む
6. 7.5Y5R黑色紺質。2.5Y5R黒褐色紺質シルトをプロフリに含む

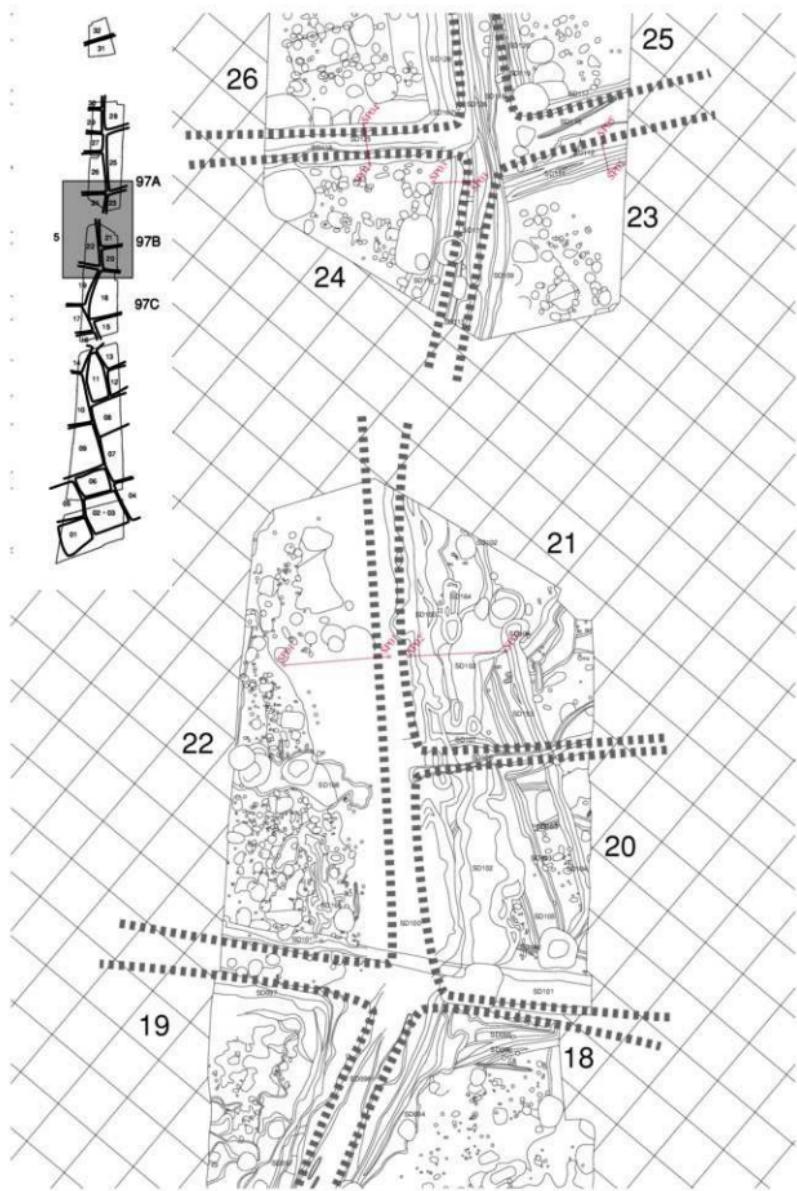


1. 2.5Y3R暗オリーブ褐色シルト。既分含む
2. 2.5Y4R褐色紺質シルト。既分含む
3. 5Y3R4R褐色紺質シルト。既分含む
4. 10YR10R褐色紺質シルト
5. 5Y5R7Rオリーブ褐色紺質シルト
6. 7.5Y4R褐色紺質シルト
7. 2.5Y5R褐色紺質シルト。既分含む
8. 2.5Y4R7R褐色紺質シルト。既分含む
9. 2.5Y5R3R褐色紺質シルト。既分含む
10. 2.5Y4R褐色紺質シルト。既分含む
11. 2.5Y4R褐色紺質シルト。既分含む
12. 2.5Y4R褐色紺質シルト。既分含む
13. 10YR54C.5R褐色紺質粘土
14. 10YR44C.5R褐色紺質シルト
15. 2.5Y4R褐色紺質シルト。既分含む
16. 2.5Y4R褐色紺質シルト。7.5YR44C褐色紺質少量含む
17. 2.5Y4R褐色紺質粘土
18. 2.5Y4R褐色紺質シルト
19. 3Y3R2オリーブ褐色シルト。
20. 2.5Y4R褐色紺質シルト。7.5YR44褐色紺質少量含む
21. 2.5Y4R褐色紺質シルト
22. 5Y5R褐色紺質粘土。既分含む
23. 5Y4R褐色紺質シルト

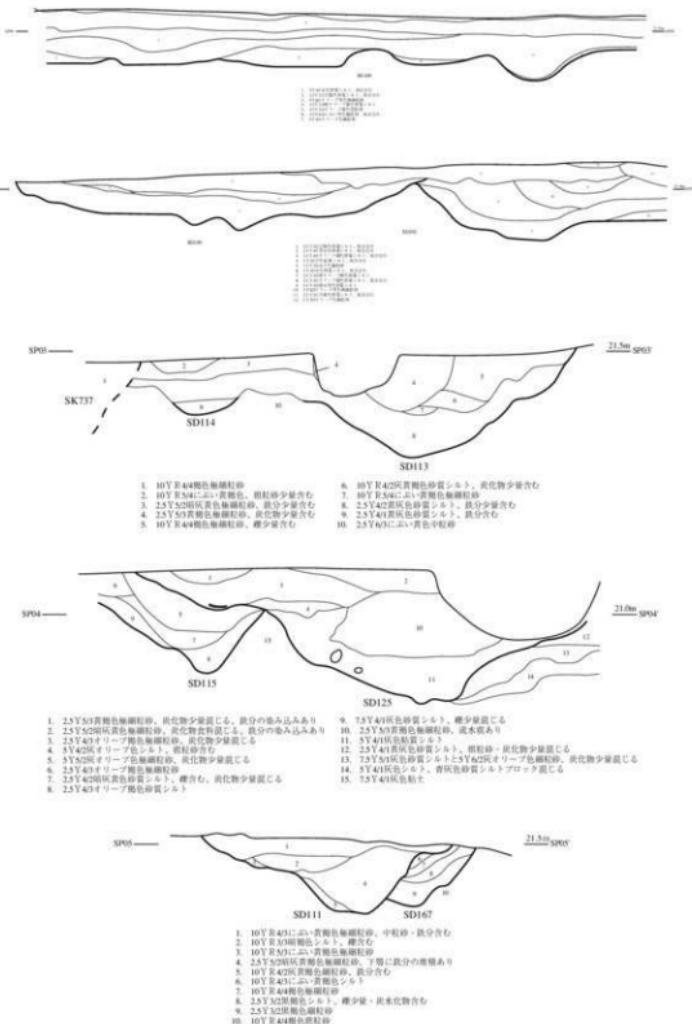


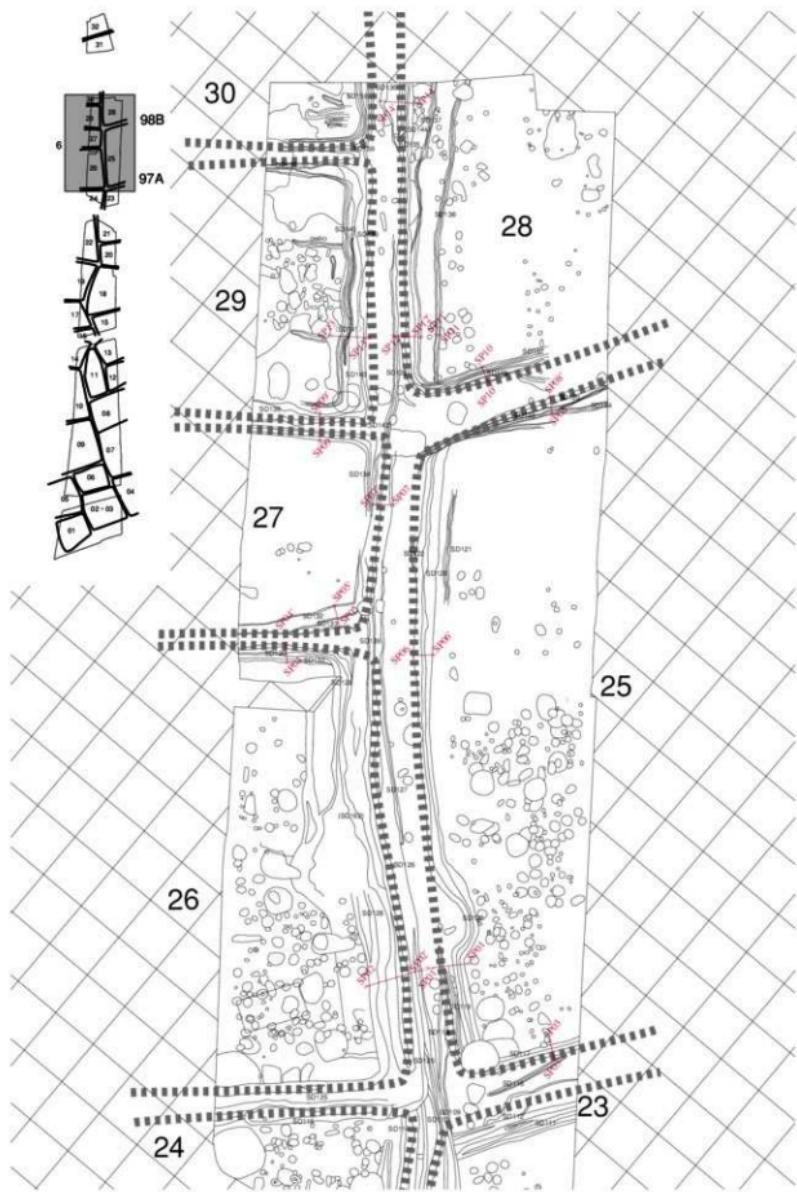
1. 2.5Y5R褐色紺質シルト。既分含む
2. 2.5Y4R褐色紺質シルト。既分含む
3. 5Y4R4Rオリーブ褐色紺質
4. 2.5Y5R褐色紺質シルト。既分含む
5. 2.5Y5R褐色紺質シルト。既分含む
6. 2.5Y2R褐色紺質シルト。既分含む
7. 2.5V5R褐色紺質粘土。
8. 5Y4R褐色シルト。既分含む
9. 5Y4R褐色紺質粘土。既多量に含む
10. 2.5Y5R褐色紺質シルト
11. 5Y4R褐色紺質シルト。既分含む

第42図 区画溝断面図(1/40) (4)

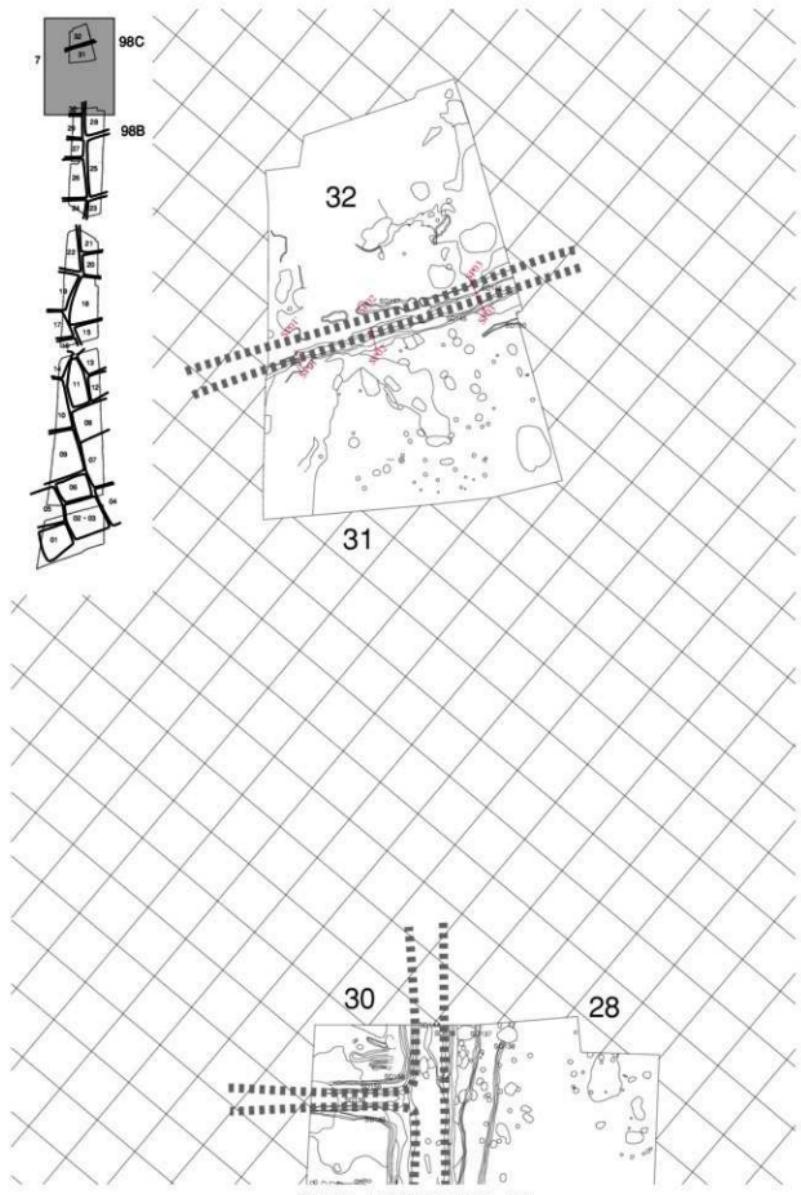


第43図 屋敷地区画(1/500) (5)

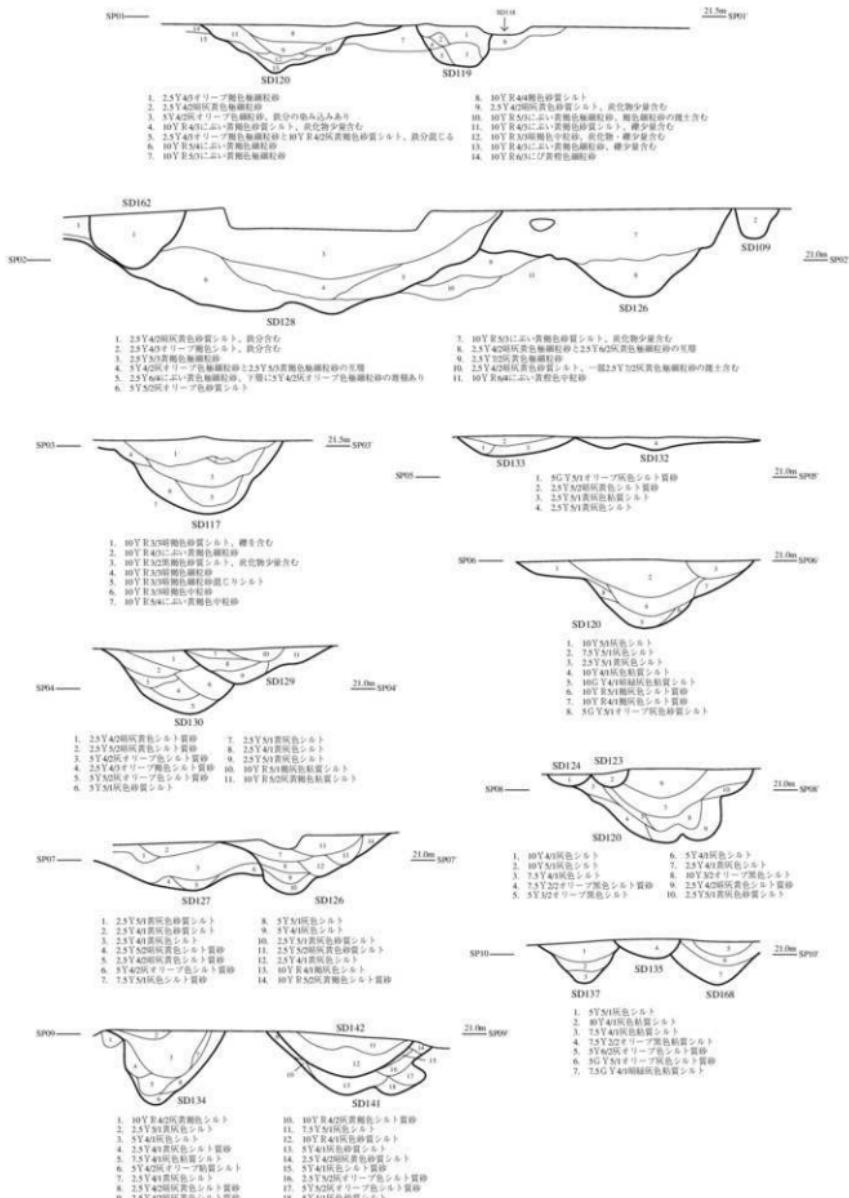




第45図 屋敷地区画(1/500) (6)



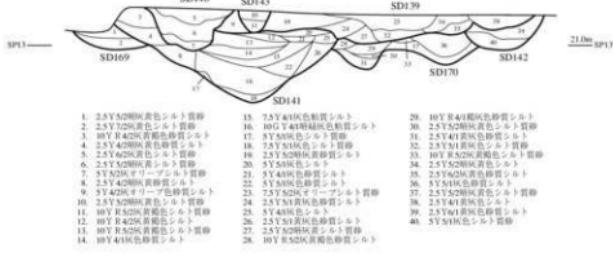
第46図 屋敷地区画(1/500) (7)



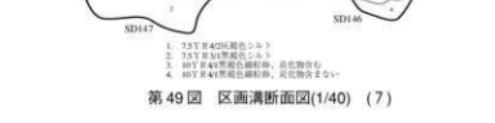
第47図 区画灌漑面図(1/40) (6-1)

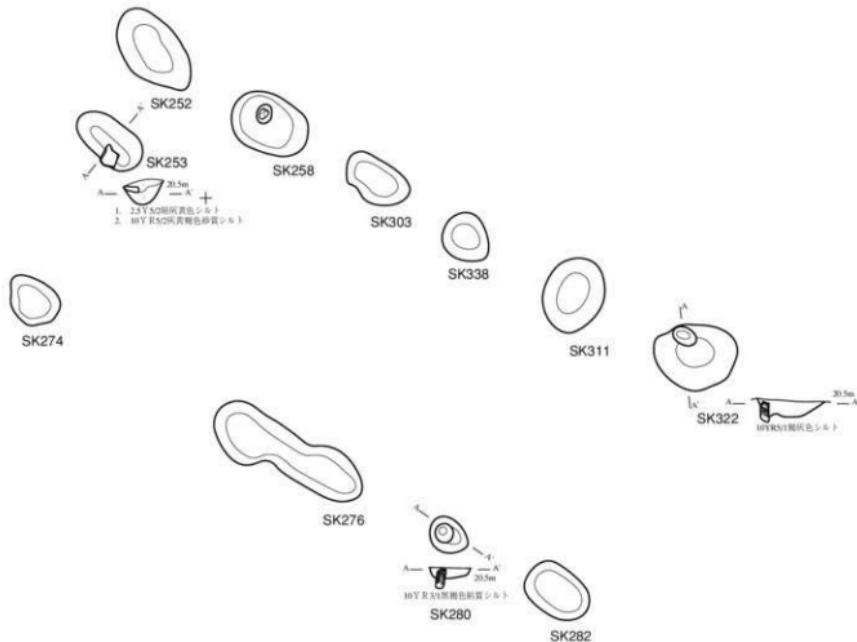


SD126	SD137
1. 2.5Y4/10赤黒シルク	8. 10Y3/10赤色シルク
2. 5T4/20オーバーブラック質面	9. 5Y3/20オーバーブラックシルク質面
3. 4T5/10オーバーブラックシルク	10. 3Y4/10オーバーブラック
4. 5T5/10オーバーブラックシルク	11. 5Y4/10オーバーブラック
5. 2.5Y1/10赤黒無地シルク	12. 2.5V5/10赤色シルク
	13. 5Y4/10オーバーブラック
	14. 2.5V5/10赤色シルク
	15. 5Y4/10オーバーブラックシルク
	16. 5Y4/10オーバーブラックシルク
	17. 2.5V5/10赤色シルク
	18. 5Y4/10オーバーブラックシルク

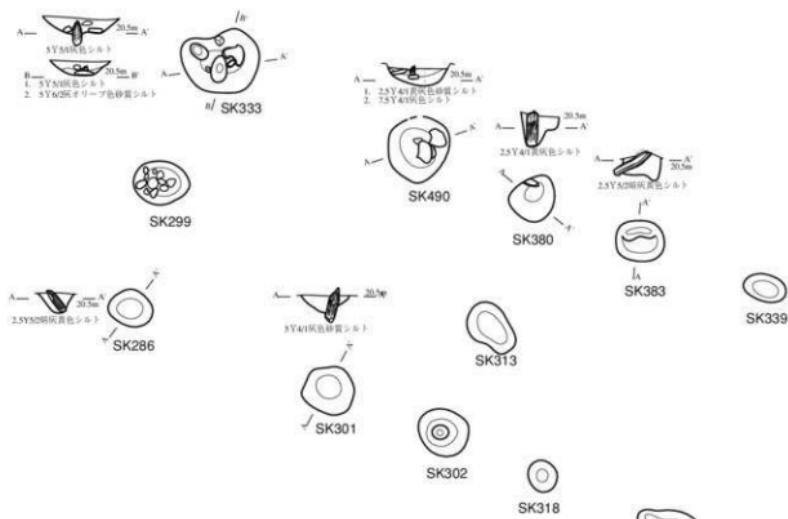


2. 2.5Y/7R/4W黑色シート販賣	16. 10G/7R/4W黑色シート販賣	30. 2.5Y/3W黑色シート販賣
3. 2.5Y/4R/3W黑色シート販賣	17. 2.5Y/3W黑色シート販賣	31. 2.5Y/3W黑色シート販賣
4. 2.5Y/4R/2W黑色シート販賣	18. 2.5Y/3W黑色シート販賣	32. 10Y/RS2W黑色シート販賣
5. 2.5Y/6R/2W黑色シート販賣	19. 2.5Y/3W黑色シート販賣	33. 10Y/RS2W黑色シート販賣
6. 2.5Y/6R/3W黑色シート販賣	20. 2.5Y/3W黑色シート販賣	34. 10Y/RS2W黑色シート販賣
7. 2.5Y/6R/4W黑色シート販賣	21. 2.5Y/3W黑色シート販賣	35. 10Y/RS2W黑色シート販賣
8. 2.5Y/6R/5W黑色シート販賣	22. 2.5Y/3W黑色シート販賣	36. 10Y/RS2W黑色シート販賣
9. 2.5Y/6R/6W黑色シート販賣	23. 2.5Y/3W黑色シート販賣	37. 10Y/RS2W黑色シート販賣
10. 2.5Y/6R/7W黑色シート販賣	24. 2.5Y/3W黑色シート販賣	38. 10Y/RS2W黑色シート販賣
11. 2.5Y/6R/8W黑色シート販賣	25. 2.5Y/3W黑色シート販賣	39. 10Y/RS2W黑色シート販賣
12. 2.5Y/6R/9W黑色シート販賣	26. 2.5Y/3W黑色シート販賣	40. 10Y/RS2W黑色シート販賣
13. 2.5Y/6R/10W黑色シート販賣	27. 2.5Y/3W黑色シート販賣	
14. 10Y/4R/10W黑色シート販賣	28. 2.5Y/3W黑色シート販賣	
	29. 2.5Y/3W黑色シート販賣	
	30. 2.5Y/3W黑色シート販賣	

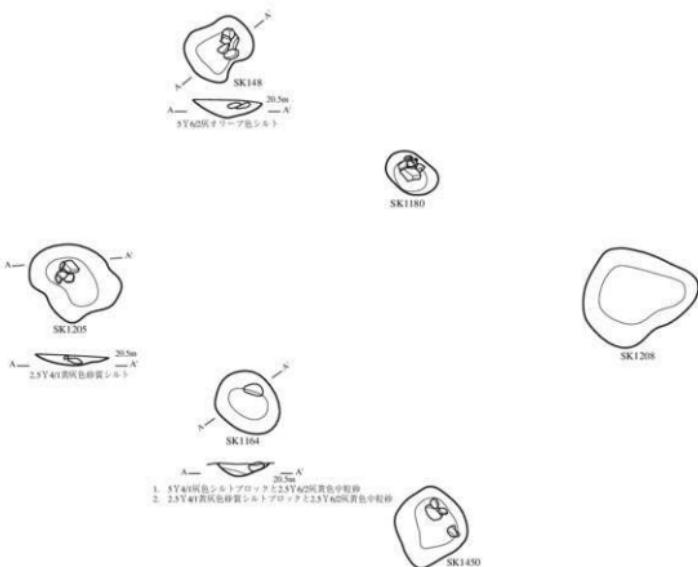




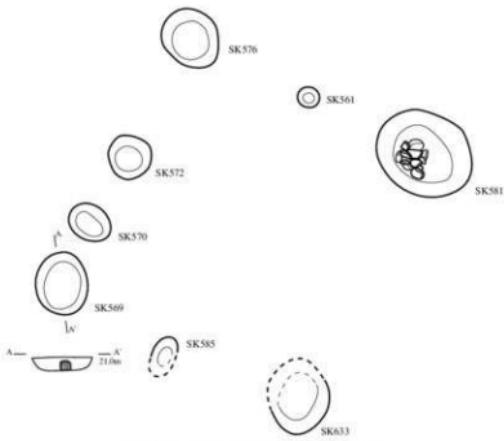
第50図 SB112平面図・断面図(1/40)



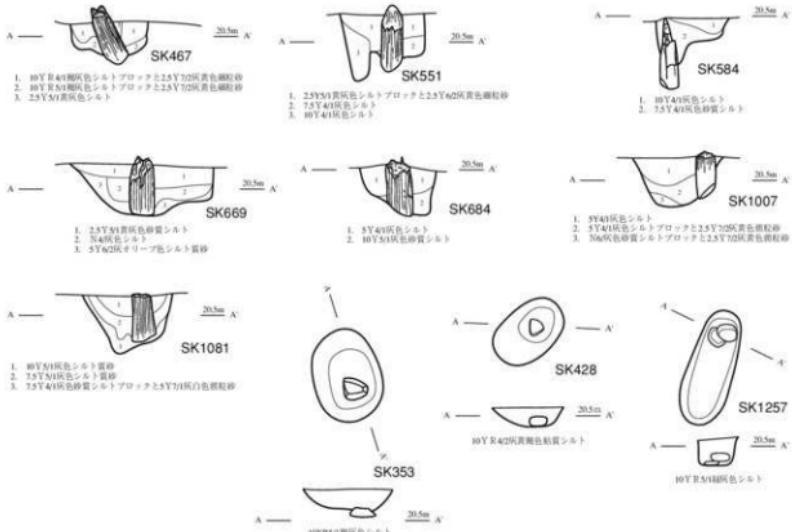
第51図 SB113平面図・断面図(1/40)



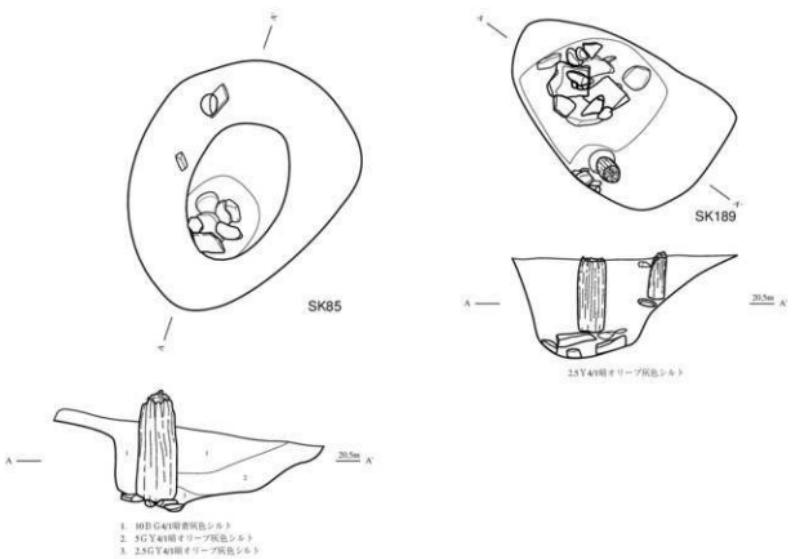
第52図 SB114 平面図・断面図(1/40)



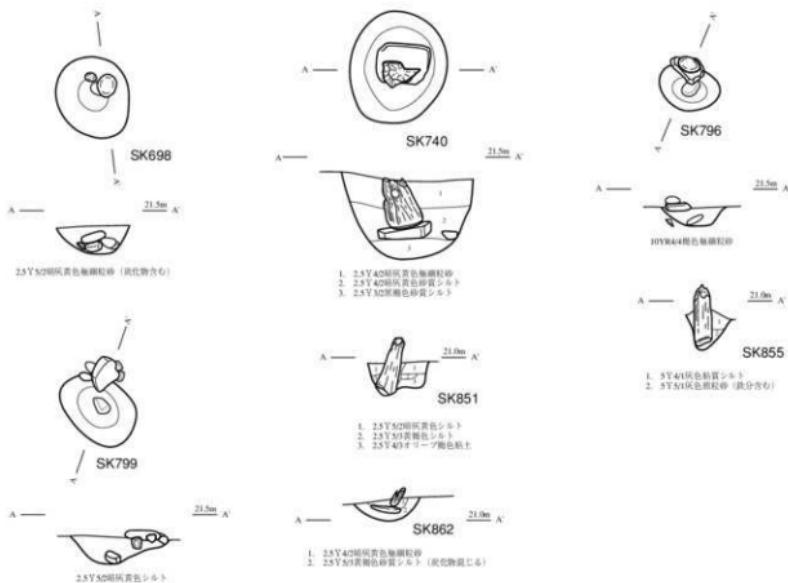
第53図 SB116 平面図・断面図(1/40)



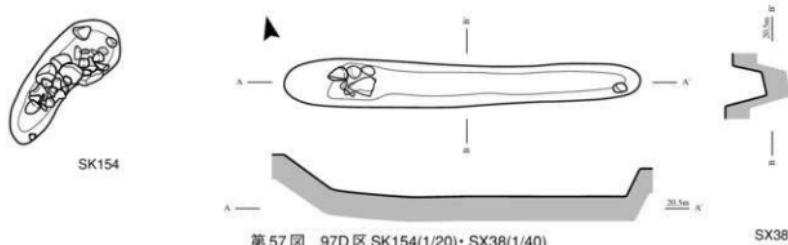
第54図 97F区柱根根石出土状態図(1/40)



第55図 97D区柱根根石出土状態図(1/40)



第56図 97A区柱根根石出土状態図(1/40)



第57図 97D区 SK154(1/20)・SX38(1/40)

第6節 中世・近世の井戸

1. 概要と分類

調査区のほぼ全域から、中世13世紀から近世18世紀にいたるまでの101基の井戸が検出された。時期区分としては他の遺構と同様に時代ごとに叙述するところであるが、同性格の遺構であること、中世から戦国時代および近世まで形態的な連続性を考慮する必要があることなどから一括して取り上げる。

井戸側の形態について以下のように分類する。

1類：円形曲物側式井戸

底板を抜いた円形の曲物を積み上げて井戸側とする構造の井戸である。井戸側の曲物が抜き取られ、水溜部分にのみ曲物が遺存するような出土状況の場合、次の2類方形縦板横桟式井戸などの井戸側の除去されたものとの識別ができる。この形態の確実な例は、検出できなかつた。

2類：方形縦板横桟式井戸

方形に組んだ横桟の外側に縦板を並べて側板とする構造の井戸である。横桟は上下2~3段であり、上段の横桟を支えるための四隅の支柱の存在によって

2a類：支柱を有するもの

2b類：支柱を有しないもの

に分類される。水溜には通例、底を抜いた円形曲物筒が用いられる。

3類：方形縦板側隅柱横桟式井戸

方形の四隅に配置した柱間に横桟を渡し、その外側に縦板を並べて側板とする構造の井戸である。水溜は、2類と同じく底を抜いた円形曲物筒が用いられる。

4類：方形横板側隅柱式井戸

方形の四隅に配置した柱の外側に、板材を横方向に方形に組みながら積み上げて井戸側とする構造の井戸である。

5類：方形竹側横桟式井戸

方形に組んだ横桟の外側に竹を並べて井戸側とした構造の井戸である。2類の縦板に竹を用いたものである。水溜についても、2類と同様に底を抜いた円形曲物を用いる。

6類：円形結物側式井戸

底板および蓋板のない結物筒を積み上げて井戸側とする構造の井戸である。桶を井戸側として用いる

7類：石組側式井戸

石を組んで井戸側とする構造の井戸である。水溜には、底板および蓋板のない桶、底を抜いた曲物が用いられる。

2. 時期区分

検出された井戸は中世、戦国時代および近世前半までにわたるが、井戸の形態を考慮して時期的な区分を設定する。

1a期：中世前半、13世紀前半～後業

1b期：中世後半、13世紀末～14世紀末

2a期：中世末、15世紀前半

2b期：戦国時代初期、15世紀中葉～16世紀初頭

3期：戦国時代後半、16世紀前葉～後葉

4a期：近世前半、16世紀末～17世紀

4b期：近世後半、18世紀以降

3. 各区画の井戸

区画01

区画の南東隅に2期の井戸が3基切りあった状態で検出された。新旧関係はSE04→SE03→SE02であり、15世紀後葉から16世紀初頭にかけて連続的に井戸が形成されている。西辺の中央には3期の井戸が2基切りあって検出され、新旧関係はSE13→SE10である。また、そのやや近い位置の区画中央に同期の井戸が1基検出されている。この区域に16世紀中～後葉の井戸が継続的に形成されている。

SE02(第58図) 2b期の2b類の井戸である。横桟は上下2段構成、井戸側の縦板の外側には竹を縦に並べている。井戸枠内で、釣瓶桶の小形曲物が2点出土した。大窯第1段階後半の瀬戸窯産陶器類より、16世紀初頭までの時期と考える。

SE03(第58図) 2b期の井戸である。構造物は未検出であり、水溜および井戸側の形態は不明である。新旧関係および出土遺物から大窯第1段階前半までの井戸と考える。2類あるいは3類の可能性が大きい。

SE04(第58図) 2b期の井戸である。水溜の曲物のみ検出され、井戸側は不明であるが、2類あるいは3類の可能性が大きい。土師器鍋などの出土遺物および切りあい関係から15世紀後葉までの時期の井戸と考える。

SE08(第59図) 3期の井戸である。水溜、井戸側が未検出のため、構造は不明である。時期および構造物が抜き取られた可能性から6類と考えられる。少量の土師器鍋が出土した。

SE09 4a期の6類の井戸である。出土した大窯第4段階の瀬戸窯産陶器類から16世紀末までの時期と考える。

SE10 3期の6類の井戸である。切りあい関係及び出土した大窯第3段階の陶器類から16世紀中葉の時期と考える。

区画02・03

区画02の南辺中央に中世の井戸2基(SE12・13)と戦国時代初期のSE11が近接して検出された。同区画中央に時期不明のSE14、区画02との境界の区画溝に重複して1あるいは2期のSE15、4a期のSE07を検出した。区画03の東辺に4a期の井戸2基を検出し、SE06→SE05の新旧関係である。

SE05(第60図) 4a期の6類の井戸である。水溜から井戸側下部は桶組み2段で構成されている。井戸側上半は石組で、桶組の上端部分から上部には人頭大までの円窓を円形に組み上げる。近世初期の瀬戸窯産陶器などが出土しており、17世紀前半の時期と考える。

SE06(第60図) 4a期の井戸である。SE05に大きく切られる形で検出されており、構造物等は遺存していないが、時期などから6類の可能性が大きい。近世初期の瀬戸窯産陶器から17世

紀前半の時期と考える。

SE07(第59図) 4a期の井戸である。区画02・03間の区画溝を切る形で検出された。構造物は遺存しなかつたが、井戸側の上部に不揃いな礫が多数検出された。井戸廃絶時の埋め立ての石固めと考えられる。6類の可能性が大きいと考える。近世初期の瀬戸窯産陶器類、常滑窯産陶器、戦国期の貿易陶磁器が比較的まとまって検出され、17世紀後半代の時期に属すと考えられる。

SE11(第59図) 2b期の2b類の井戸である。水溜は曲物1段が遺存する。井戸枠内がある程度埋積した廃絶時に釣瓶桶の小形曲物、羽付釜が廃棄された状態で検出された。古瀬戸後IV期新段階、15世紀後葉の時期と考えられる。

SE12(第59図) 1b期の井戸である。水溜、井戸側の構造物未検出である。南部系山茶椀7・8型式が出土し、13世紀後半から14世紀初頭の時期と考えられる。

SE13(第59図) 1期の構造不明の井戸である。構造物は完全に抜き去られていると考えられる。出土遺物は、山茶椀の細片が少量出土しているが、切りあいもなく詳細は不明である。

SE14 構造物未検出であり、遺物も出土していないため時期および形態不明である。

SE15 1または2a期の2または3類の井戸である。水溜の曲物、井戸側の継板を検出したが、時期決定の出土遺物がないことから遺構の切りあい関係から2a期以前の時期と考えられる。区画05

区画の南辺中央に2b期のSE01、北東隅に15世紀後葉から16世紀初頭の時期の3基を検出した。3基の新旧関係はSE16→SE17→SE18である。

SE01(第60図) 2b期の5類の井戸である。この形態の遺跡における唯一の例である。井戸側に径2~3cmの竹を一列横桟の外側にたて並べている。横桟の支柱は検出されていない。水溜の曲物は3個体検出された。古瀬戸後IV期新段階の瀬戸窯産陶器類の出土より、15世紀後葉の時期と考える。

SE16(第60図) 2b期の4類の井戸である。この形態の遺跡における唯一の例である。井戸側の横板組の最下段のみが検出されており、横桟の存在は不明である。水溜は曲物桶2段が出土した。古瀬戸後IV期新段階の瀬戸窯産陶器より、15世紀後葉の時期と考える。

SE17(第60図) 2b期の井戸である。構造物としては、水溜の曲物桶のみ検出した。井戸側は、2・3類あるいは4類などの可能性がある。新旧関係より古瀬戸後IV期新段階から大窯第1段階、15世紀末の時期と考える。

SE18(第60図) 2b期の井戸である。構造物は検出できなかった。遺構の新旧関係および瀬戸窯産陶器より、15世紀末から16世紀初頭の時期と考える。

区画06

区画の南東隅に1a・b期の4基を検出した。遺構はSE21→SE22→SE23→SE24の新旧関係である。時期的には連続して井戸が形成されている。区画中央に2b期のSE20、西辺に同期のSE19が切りあいなく検出されている。区画北辺には、区画溝に切りあって2・3期の3基が切りあい関係なく検出された。

SE19(第62図) 2b期の井戸である。構造物は水溜の曲物桶1段のみ検出されており、井戸側は不明である。2・3類の可能性がある。古瀬戸後IV期新段階の瀬戸窯産陶器類が検出されて

おり、15世紀後葉の時期と考える。

SE20(第63図) 2b期の井戸である。構造物は最下段の横桟と水溜の曲物桶4段が検出された。

2・3類の可能性が大きい。土師器鍋などから15世紀後葉から16世紀初期の時期と考える。

SE21(第62図) 1a期の2a類の井戸である。構造物は大部分抜き取られ、井戸側の横桟、縦板、支柱を部分的に残す。水溜の曲物桶等は検出されなかった。土師器、山茶碗などの出土遺物から南部系山茶碗6型式、13世紀中葉の時期と考えられる。

SE22(第63図) 1a期の2b類の井戸である。井戸側は横桟2段、水溜の曲物1段を検出する。出土遺物および切りあい関係から南部系山茶碗6型式、13世紀中葉の時期と考える。

SE23(第63図) 1b期の2a類の井戸である。井戸側の横桟は下2段が検出され、支柱は2段と3段の間にある。水溜の構造物は未検出である。出土遺物から南部系山茶碗8型式、14世紀前半とする。

SE24(第62図) 1b期の2a類の井戸である。井戸側の横桟は4段で支柱が間にすべて存在する。水溜の構造物は未検出である。南部系山茶碗、瀬戸窯産施釉陶器、常滑窯産陶器などが検出されており、14世紀中葉の時期と考える。

SE25(第61図) 3期の7類の井戸である。水溜に3段の桶組を用いる。石組みは人頭大までの円礫を用い、最下部のみ検出した。瀬戸窯産施釉陶器類が出土しており、大窯第2段階、16世紀中葉の時期と考える。

SE26(第61図) 2b期の2類の井戸である。水溜は曲物桶1段を検出する。井戸側の構造物は大部分抜き取られ、支柱の有無は不明である。出土した瀬戸窯産陶器類の時期から、15世紀末から16世紀初頭の時期と考える。

SE27(第60図) 1から2期の井戸である。井戸側は、最下段の横桟のみ検出する。水溜は曲物桶2段で、内部から釣瓶桶の小形曲物1個体を出土する。遺物が検出されなかったため時期は確定でないが、2期の2類の可能性が大きい。

区画08

区画の中央に1期の井戸、東辺と北辺に各1基の近世の井戸を検出した。

SE39(第64図) 4期の6類の井戸である。桶組みは最下段のみ遺存する。井戸側内部に廃絶時の円礫が埋設された状態で検出され、井戸の埋め戻しの石固めの石と考えられる。近世の土師器鍋が出土している。

SE44(第64図) 1a期の井戸である。水溜の曲物桶片が確認されたのみで、井戸側の構造は不明である。水溜部分内部に円礫が検出され、廃絶時に埋設された石固めの石と考えられる。出土遺物から、南部系山茶碗7型式、13世紀後葉の時期と考える。

SE45(第64図) 4a期の6類の井戸である。井戸側の桶組み2段を検出し、その上層に拳大の円礫が掘りかたの範囲に埋設されており、井戸廃絶時の石固めと考えられる。瀬戸窯産施釉陶器類より17世紀前半と考える。

区画09

区画南部に中世末期から戦国時代初期の井戸が6基、北部に4基いずれも切りあい関係がない状況で検出された。区画ほぼ中央には中世1基と、戦国期から近世3基が集中して検出され、その他、水溜に曲物と桶組を組み合わせて使用した16世紀初頭の井戸が検出された。

SE28(第64図) 2期の井戸である。水溜部分の曲物片を検出したのみで、井戸側の構造物等は不明である。出土遺物から、15世紀代とする。

SE29(第65図) 2b期の2a類の井戸である。水溜は曲物2段を検出す。出土した瀬戸窯産施釉陶器より古瀬戸後IV期新段階、15世紀後葉の時期と考えられる。

SE30(第66図) 2b期の2a類の井戸である。井戸側は横棟の支柱のみ検出された。水溜は曲物1段が出土する。瀬戸窯産陶器より、15世紀中葉の時期とえる。

SE31(第65図) 2b期の井戸である。構造物は、井戸側は遺存せず、水溜の曲物2段のみ検出した。2または3類の可能性がある。出土遺物より、15世紀中葉から後葉の時期と考える。

SE32(第66図) 2a期の3類の井戸である。井戸側は3類で上部は石組みとなっている。井戸側の縦板の上半の外側に部分的に石組みが存在する。水溜は、曲物1段を検出した。出土遺物から15世紀前半の時期と考える。

SE33(第66図) 1から2期の2b類の井戸である。井戸側の縦板の外側に径2~3cmの竹を縦板に沿って、1ないし2列にたて並べている。水溜は検出されなかった。遺物は未検出で時期の詳細は不明である。

SE34(第67図) 4a期の6類の井戸である。井戸側は桶1段を検出した。その上部に拳大の円礎を中心とする集積が存在するが、井戸廃絶時に埋置された石固めの石と考える。出土した瀬戸窯産施釉陶器より16世紀末から17世紀初頭の時期と考える。

SE35(第68図) 4a期の6類の井戸である。井戸側は桶1段を検出した。内部は粗砂が堆積し、中央より包丁が縫になった状態で出土した。瀬戸窯産陶器類などの出土遺物から17世紀前半の時期と考える。

SE36(第67図) 2b期の7類の井戸である。SE35によって井戸側のはば1/2が切られる。井戸側は、人頭大の円礎および一部角礎をほぼ鉛直方向に円形に組み上げている。石組みの下端には支えの横木が置かれている。石組みの下端より、約30cm下に水溜が検出された。水溜は、1段の曲物の上に薄い板材の結桶1段を組んだ状況で検出された。桶は小径で小形のもので、部分的にのみ遺存している。桶が石組みの下端まで1段以上存在したと推定される。出土遺物より15世紀末から16世紀初頭の時期と考える。

SE37(第64図) 1a期の2a類の井戸である。井戸側の大部分は遺存せず、最下段の横棟などが検出された。水溜は曲物1段を確認した。南部系山茶椀などにより、13世紀中葉から後葉の時期と考える。

SE38(第67図) 3期の6類の井戸である。構造物は桶1段のみが確認できた。出土した土師器鍋から、16世紀代の時期と考える。

SE40(第65図) 1または2期の2類の井戸である。水溜は不明である。遺物は検出できず、詳細は不明である。

SE41 3期の井戸である。構造物は遺存せず、井戸側等は不明であるが、時期的に6類の可能性が高い。出土した土師器鍋などより、16世紀代と考える。

SE42(第64図) 2b期の井戸である。構造物は水溜の曲物片のみ検出され、井戸側は遺存していない。2または3類の可能性があるが、詳細は不明である。出土した瀬戸窯産施釉陶器類より15世紀末から16世紀初頭の時期と考える。

SE43(第64図) 1あるいは2期の井戸である。構造物は水溜の曲物片のみ検出され、井戸側は遺存しない。2または3類の可能性がある。遺物は検出されず、時期は特定できない。

区画10

区画中央東部に近世のSE48、北部東辺に戦国期の1基と、中世の2基が近接して検出された。中世の2基は時期的に接近していて、遺構の切りあい関係からも新旧関係は確認できなかった。

SE48(第69図) 4a期の6類の井戸である。構造物は最下段の桶1段のみ確認した。井戸側より上部で半円形の集石が検出されたが、井戸廃絶時に埋置された石固めの集石と考えられる。瀬戸窯産陶器類より、16世紀末以降17世紀初頭の時期と考える。

SE49(第68図) 2b期の2類の井戸である。井戸側は、縦板の外側に沿って径2~3cmの竹を1列たて並べる。横桟の支柱の有無は不明である。水溜は曲物1段のみを確認する。出土遺物から、15世紀中葉の時期と考える。

SE50(第68図) 1b期の2a類の井戸である。構造物は、横桟と支柱、水溜の桶1段を確認する。南部系山茶椀8・9型式、14世紀代と考える。

SE51(第68図) 1b期の2a類の井戸である。水溜は確認できなかった。出土遺物から南部系山茶椀8・9型式、14世紀代の時期と考える。

区画11

区画南東隅に近世の井戸2基、同じく南西隅に1基、北端部に中世末の1基が検出された。

SE46(第69図) 4a期の6類の井戸である。井戸側は4段の桶組で、桶が良好に遺存している。井戸側内部は中央下半まで砂が埋積し、この直上に不揃いな人頭大までの礫が埋置されている。井戸廃絶時に石固めの礫が入れられたものと推測される。出土した瀬戸窯産陶器類より、17世紀前半の時期と考えられる。

SE47 4b期の井戸である。搅乱によって過半を消失しているため、構造物は遺存していない。時期的な面から6類の可能性が大きい。出土遺物から18世紀前半と考えられる。

SE52(第69図) 4a期の井戸である。構造物は、遺存していない。遺構中央に水溜の落込みが確認される。遺構の時期から6類の可能性が大きい。出土遺物から17世紀初頭の時期と考えられる。

SE62(第69図) 2a期の井戸である。構造物は、水溜部分の曲物片が検出されている。井戸側の構造は2あるいは3類などの可能性がある。瀬戸窯産陶器より、15世紀前半と考える。

区画12

区画中央やや北よりに中世の井戸2基を検出した。出土遺物からほぼ同時期の井戸であるが、構造物の遺存状況から、SE53→SE54の可能性がある。

SE53(第70図) 1a期の2a類の井戸である。構造物の大部分は検出できず、井戸側下部の横桟、支柱などが遺存する。出土した南部系山茶椀より、13世紀中葉の時期と考える。

SE54(第70図) 1a期の2a類の井戸である。水溜は曲物1段である。出土した南部系山茶椀より、13世紀中葉と考える。

区画13

区画ほぼ中央に3期の井戸3基、2b期の1基、時期不明の3基を集中して検出する。3期

の井戸については SE58 → SE59、時期不明の 2 基は SE61 → SE60 の新旧関係である。

SE55(第70図) 3 期の 6 類の井戸である。井戸側は桶 1 段のみ検出した。遺構はやや大形の掘りかたで、その一部に井戸より新しい時期の集石が認められた。出土遺物より 16 世紀代の時期と考えられる。

SE56(第72図) 1 あるいは 2 期の 2b 類の井戸である。井戸側は縦板 2 段組、水溜部分は曲物 3 段を検出する。遺物が検出されなかったため、詳細な時期は特定できない。

SE57(第72図) 2b 期の井戸である。構造物は、水溜部分の曲物片のみが検出された。2 あるいは 3 類の可能性がある。出土遺物より 15 世紀後葉から 16 世紀初頭の時期である。

SE58(第71図) 3 期の 6 類の井戸である。井戸側は、桶組 3 段が検出されたが、最上部の 3 段目は桶板材が部分的にのみ遺存する。遺構の掘りかたはやや大形で、井戸側の部分が深く掘り下げられている。出土遺物および切りあい関係より 16 世紀代の時期とする。

SE59(第71-72図) 3 期の 6 類の井戸である。井戸側は桶 2 段を検出したが、上下段とも部分的にのみ遺存している。掘りかた上部に拳大から人頭大の礫が出土しており、井戸廃絶時の石固めの礫と考えられる。瀬戸窯産陶器類より大窯第 3 段階、16 世紀後半の時期である。

SE60(第72図) 3 期あるいは 4 期の井戸である。遺構の掘りかたの一部を検出したのみで、井戸側は未検出である。

SE61(第72図) 3 期あるいは 4 期の井戸である。遺構の掘りかたの一部を検出したのみで、井戸側は未検出である。

区画 14

区画南辺に 3 期の井戸 1 基のみを検出する。

SE63(第73図) 3 期の 6 類の井戸である。構造物は桶 1 段のみを検出する。戦国時代前半の遺物を少量確認する。16 世紀代と考える。

区画 15

区画の西辺よりの部分で中世 2 基、戦国時代 2 基、近世 1 基、時期不明 1 基の井戸が近接して検出された。中世の井戸は **SE66 → SE67** の新旧関係である。

SE64(第72図) 構造物がほとんど遺存せず、遺物も検出されなかったため時期、井戸の形態は不明である。

SE65 4a 期の井戸である。構造物が検出されなかったが、6 類の可能性がある。出土する瀬戸窯産陶器類より、17 世紀前半の時期と考える。

SE66(第73図) 1b 期の 2 類の井戸である。井戸側の大部分は消失して、一部のみ検出された。水溜は、曲物である。出土した土師器類より 14 世紀代と考える。

SE67(第73図) 1b 期の 2a 類の井戸である。井戸側の大部分は消失し、一部のみ検出されている。水溜は、曲物である。出土した瀬戸窯産陶器類より 14 世紀後半から 15 世紀初頭までの時期と考える。

SE68(第73図) 2b 期の 3 類の井戸である。井戸側の縦板外側に人頭大、大形の礫を埋置している。水溜は曲物である。出土遺物から 15 世紀後半の時期と考える。

SE69(第73図) 3 期の 6 類の井戸である。構造物はほとんど遺存していないが、桶の板材の断片が検出された。掘りかた上部より礫がまとまって出土している。検出された瀬戸窯産陶器よ

り、16世紀前葉から中葉の時期と考える。

区画17

区画の南東隅に中世13世紀後半から14世紀中葉の井戸3基を検出した。

SE70(第74図) 1b期の2a類の井戸である。横桟は最下段のみ検出し、水溜は、曲物2段を検出した。出土した南部系山茶椀より、13世紀後葉から14世紀初頭の時期と考える。

SE71(第74図) 1b期の2a類の井戸である。横桟は最下段を検出した。水溜は曲物である。出土した南部系山茶椀より、13世紀末から14世紀中葉の時期と考える。

SE72(第74図) 1a期の2a類の井戸である。横桟は最下段を検出した。水溜は曲物である。出土した南部系山茶椀より13世紀後葉の時期と考える。

区画18

区画の南西部に戦国時代後半から近世初期の井戸が4基近接して検出された。切りあった3基についてはSE73→SE74→SE75の新旧関係である。中世の井戸は、南西部2基、中央部に2基、北東辺に1基が検出された。また、戦国時代初期の井戸はSE82が北西辺に1基のみ検出されている。

SE73(第75図) 3期の6類の井戸である。井戸側は、桶1段のみを検出した。出土遺物および遺構の切りあい関係から、16世紀前葉から中葉の時期と考える。

SE74(第75図) 3期の6類の井戸である。井戸側は、桶1段のみを検出した。出土した瀬戸窯産陶器類および遺構の切りあい関係より16世紀後葉の時期と考える。

SE75(第75図) 4a期の6類の井戸である。井戸側は、桶1段のみを検出した。埋土中より礫がまとまって出土し、廃絶時の石固めを行っている。出土した瀬戸窯産陶器類および遺構の切りあい関係から17世紀初頭の時期と考える。

SE76(第74図) 1a期の2a類の井戸である。横桟は最下段を検出す。水溜は、曲物2段を確認する。出土した南部系山茶椀の時期より14世紀中葉の時期とする。

SE77(第76図) 新旧2時期の井戸がほぼ同位置に構築されている。新時期の井戸は1a期の2a類である。横桟は最下段を検出した。水溜は曲物1段を確認する。旧い時期の遺構は最下段の横桟の一部のみが、新時期の井戸側より若干ずれた位置に検出された。同遺構として取り扱うが、出土した南部系山茶椀、常滑窯産陶器より13世紀後葉の時期と考える。

SE78(第76図) 3期の6類の井戸である。井戸側は、桶1段を検出す。埋土中より廃絶時の石固めの礫がやまとまって出土している。出土した土師器などから、16世紀代の時期と考えられる。

SE79(第75図) 1b期の2a類の井戸である。横桟は最下段を検出した。水溜は曲物1段のみを確認する。曲物内の埋土から、木製品櫛1点が出土した。瀬戸窯産陶器類から14世紀末から15世紀初頭の時期と考える。

SE80(第76図) 1a期の2a類の井戸である。横桟は最下段を検出し、水溜は曲物1段を確認した。井戸側縦板は下部のみが遺存する。出土した南部系山茶椀より、13世紀後半の時期と考える。

SE81(第74図) 1a期の2a類の井戸である。井戸側は下部が若干遺存している状況である。最下部の横桟、水溜の曲物1段を検出す。出土した南部系山茶椀より、13世紀後葉の時期と

考える。

SE82(第75図) 2b期の井戸である。構造物は、水溜の曲物片を検出したのみ井戸側は検出されなかった。2あるいは3類などの可能性がある。出土遺物から15世紀後葉から16世紀初頭の時期と考える。

SE83(第76図) 4a期の井戸である。構造物は検出されなかった。時期的に、6類の可能性が大きい。出土した瀬戸窯産陶器類より、17世紀前半の時期と考える。

区画19

区画南辺中央に4期の井戸が2基近接して検出されている。

SE84 4期の井戸である。構造物未検出であるが、6類の可能性が大きい。17世紀以降の瀬戸窯産陶器が少量出土している。

SE85(第76図) 4期の6類の井戸である。井戸側は、桶1段を検出する。掘りかたの上部に多量の礫が集中して出土した。規格的ではなく、石組みとなっていないことから井戸廃絶時の石固めとして埋置された礫と考える。近世の瀬戸窯産陶器が少量検出されている。

区画20

区画南西辺に3期の井戸1基を検出した。

SE86(第77図) 3期の6類の井戸である。井戸側は、桶1段を検出する。出土遺物から16世紀代と考える。

区画21

区画中央に近世井戸1基を検出した。

SE87(第78図) 4b期の6類の井戸である。井戸側は、近接した状況で桶組を2基検出したが、いずれも桶1段のみ遺存する。2基の桶組の新旧関係は不明である。検出された近世磁器、瀬戸窯産陶器より18世紀代と考える。

区画22

区画中央に中世1基、戦国時代2基の井戸が近接した状況で検出された。その他、南東辺に3期と4期の井戸が各1基検出された。

SE88(第78図) 2b期の井戸である。井戸側の下半は3類で、その上端四隅に板材をわたして結桶をのせ、上半を桶組としている。桶は1段のみ確認する。井戸側下半の横桟は3段、水溜は未検出である。3類の井戸を再構築した可能性がある。出土した瀬戸窯産陶器類より15世紀後葉の時期と考える。

SE89 1b期の井戸である。構造物は検出されなかった。出土した南部系山茶椀より13世紀末から14世紀初頭と考える。

SE90(第77図) 3あるいは4期の6類の井戸である。井戸側は、桶1段のみを確認する。出土遺物がわずかで時期の詳細は不明である。

SE91(第77図) 2a期の2a類の井戸である。横桟2段、水溜の曲物1段を確認する。出土した瀬戸窯産陶器より、15世紀前半と考える。

SE92(第78図) 4期の6類の井戸である。井戸側は、桶組2段を確認する。出土した近世常滑窯産陶器より17世紀以降の時期とする。

区画24

区画北東辺に中世末の時期の SE93 を検出する。

SE93(第77図) 2b期の3類の井戸である。構造物の大部分は消失し、井戸側が部分的に遺存する。竹材を検出したことから、3類の縦板の外側に竹材を縦に並べているものと推定される。出土した瀬戸窯産陶器より、15世紀中葉の時期と考える。

区画 26

区画南西辺と中央に戦国時代の井戸各1基が検出されている。

SE94(第79図) 2b期の3類の井戸である。井戸側は部分的に検出され、水溜は確認されなかった。掘りかた上部に円形の石組みが検出されたが、井戸側直上にも集石があり、井戸廃絶時の石固めを行っている。出土した瀬戸窯産陶器より、15世紀中葉から後葉の時期と考える。

SE95(第79図) 3期の7類の井戸である。井戸側は人頭大までの円縛を用いて水溜桶上端より円錐形に組み上げている。水溜は、桶1段を確認する。桶内には井戸廃絶時に埋置された礫が検出された。出土した瀬戸窯産陶器より16世紀後葉の時期と考える。

区画 29

区画の南隅に区画溝に重複して中世の井戸1基、区画南半・北半に各1基の戦国期の井戸を検出した。

SE96(第80図) 1a期の2類の井戸である。井戸側は遺存状況が悪く、下部のみ検出し、横桟支柱は確認できない。水溜は曲物1段が出土した。検出された瀬戸窯産陶器より、13世紀後半の時期と考える。

SE97(第80図) 3期の7類の井戸である。井戸側は、水溜の桶の上端より不揃いなやや角張った礫を円筒形に積み上げている。遺構の掘りかたは平面楕円形で、井戸側は楕円の偏った位置にある。水溜は、小形の桶1段を確認する。出土遺物より16世紀代の時期と考える。

SE98(第80図) 2b期の3類の井戸である。井戸側下部を検出した。水溜は、未検出である。出土遺物から15世紀後葉から16世紀初頭の時期と考える。

区画 31

区画南部に2期の井戸1基を検出した。

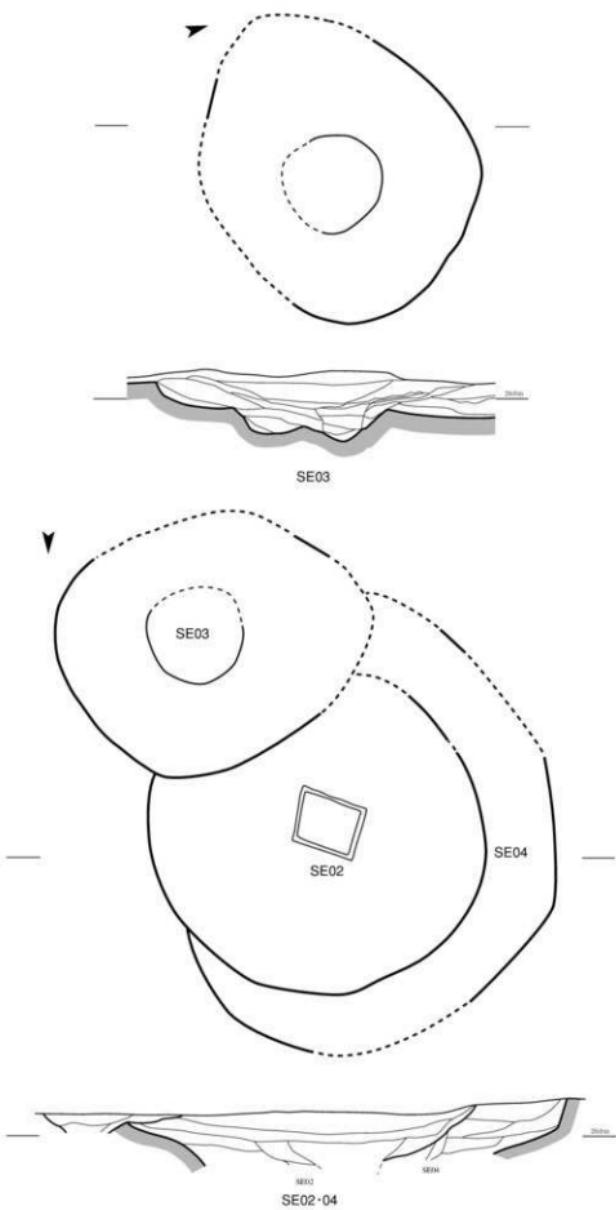
SE99(第81図) 2b期の3類の井戸である。井戸側は下端のみ遺存している。水溜は未検出である。出土した瀬戸窯産陶器類より15世紀中葉の時期と考える。

区画 32

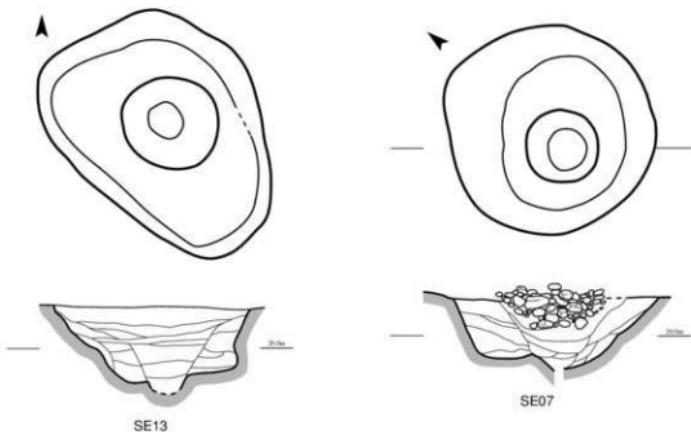
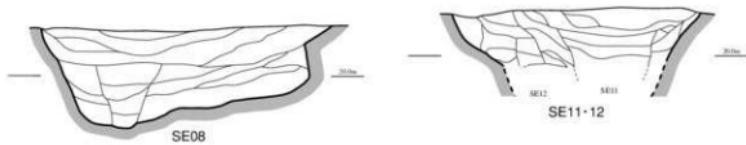
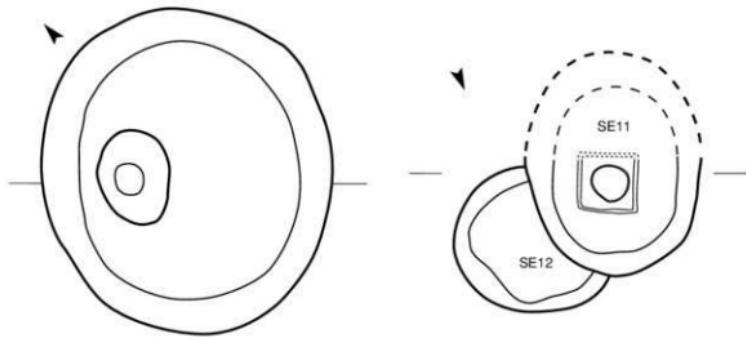
区画北辺に中世1基、戦国時代1基の井戸が検出された。

SE100(第81図) 1a期の2a類の井戸である。井戸側下部を検出す。水溜は、未検出である。出土した山茶椀より13世紀中葉から後葉の時期と考える。

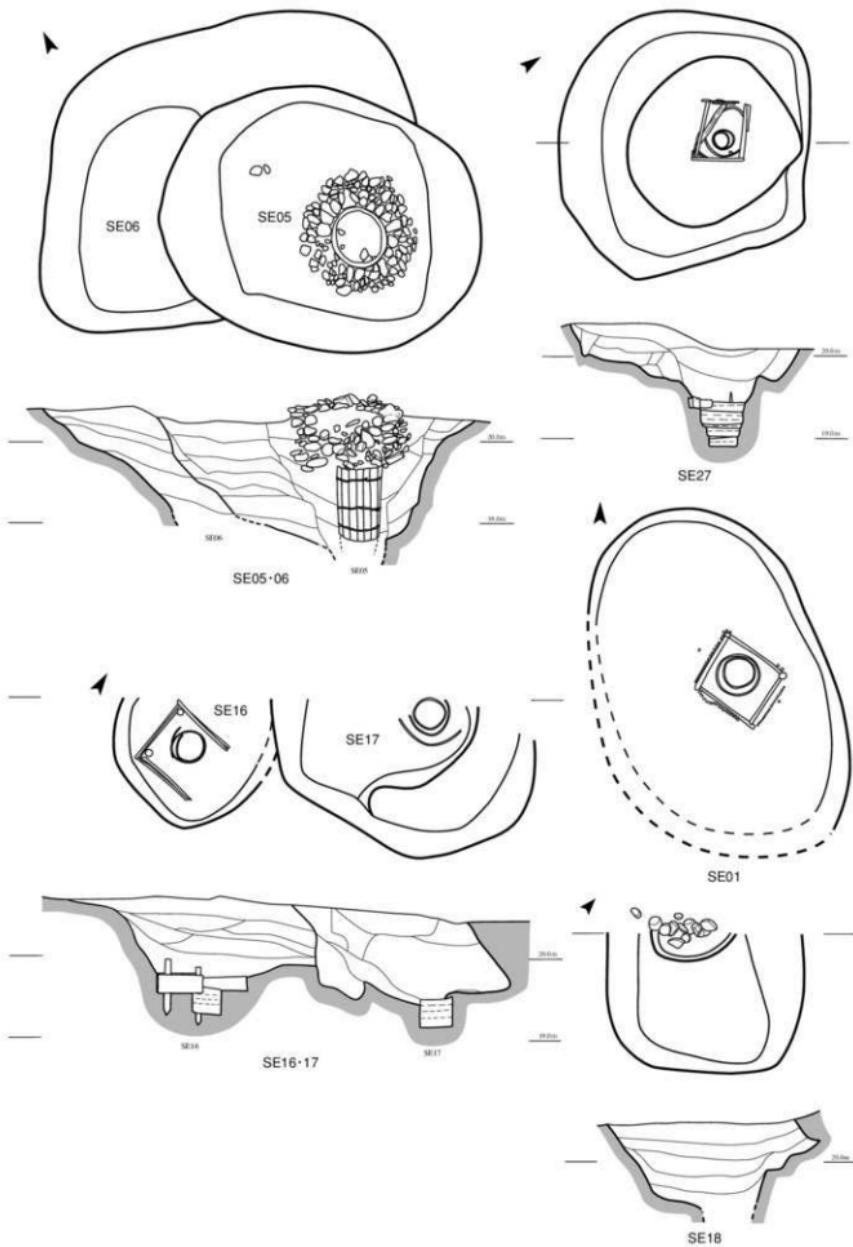
SE101(第81図) 2b期の2類の井戸である。井戸側は、最下段の横桟のみを検出した。水溜は、未検出である。出土遺物から15世紀中葉と考える。 (酒井俊彦)



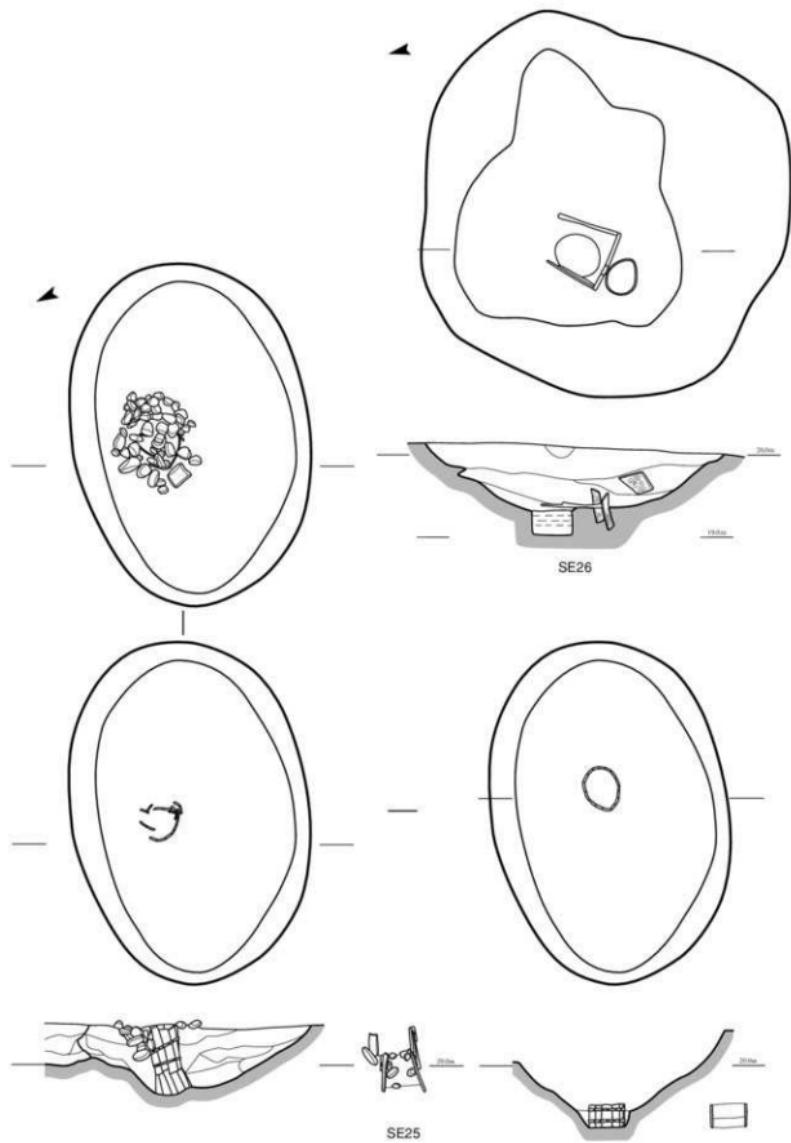
第58図 井戸平面図・断面図(1/60) (1)



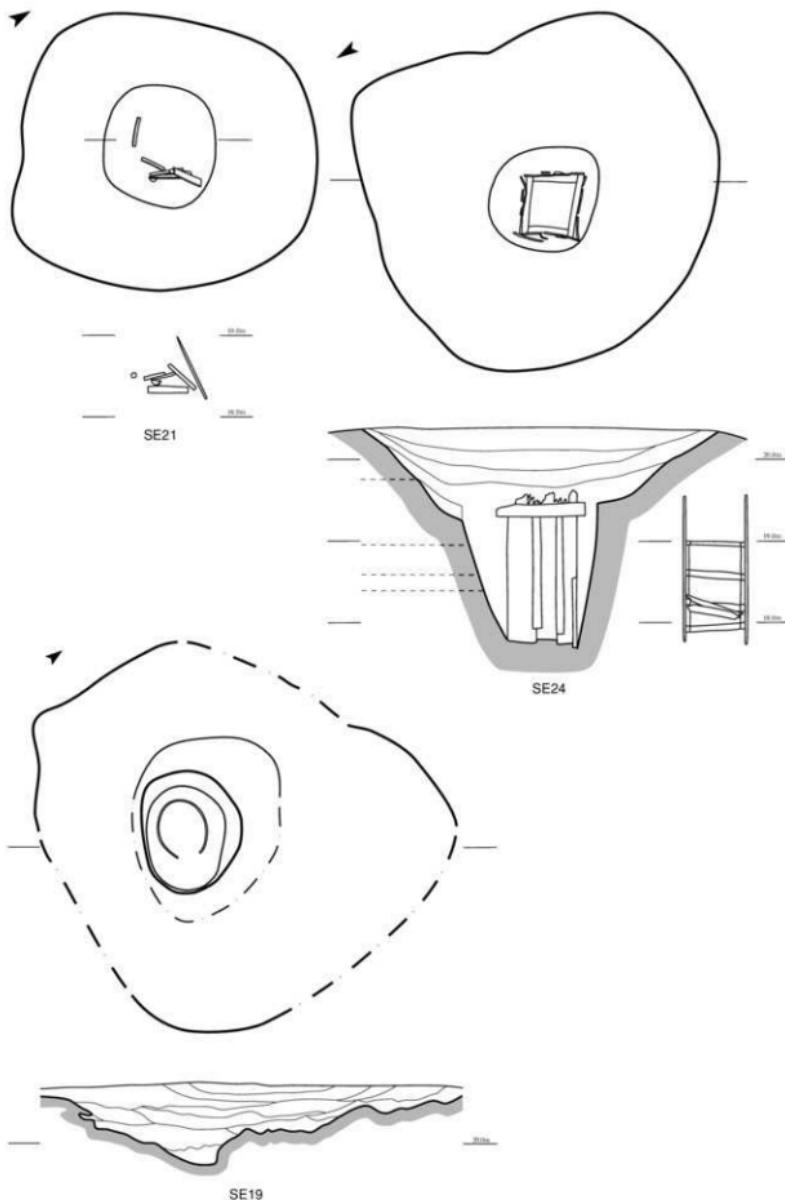
第59図 井戸平面図・断面図(1/60) (2)



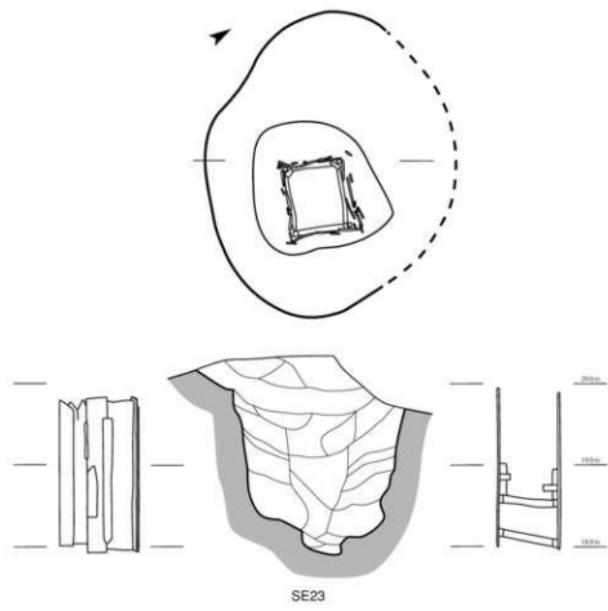
第60図 井戸平面図・断面図(1/60) (3)



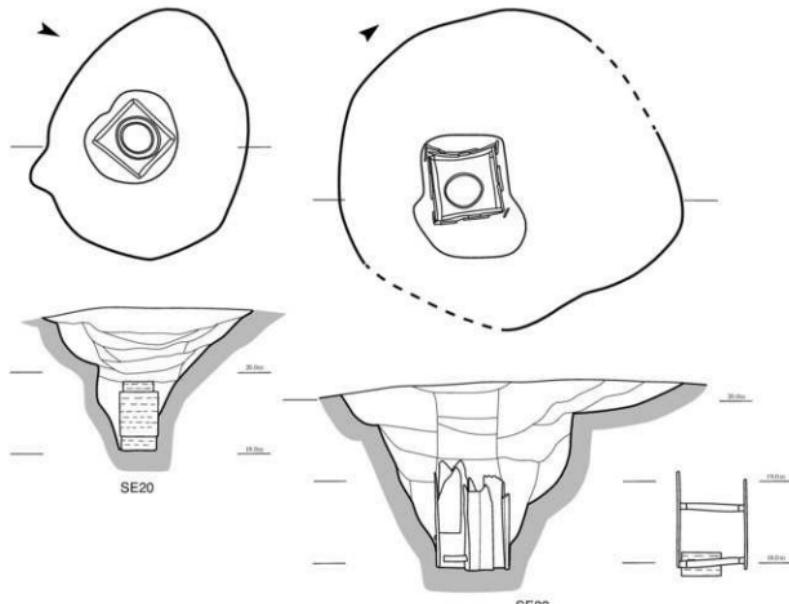
第61図 井戸平面図・断面図(1/60) (4)



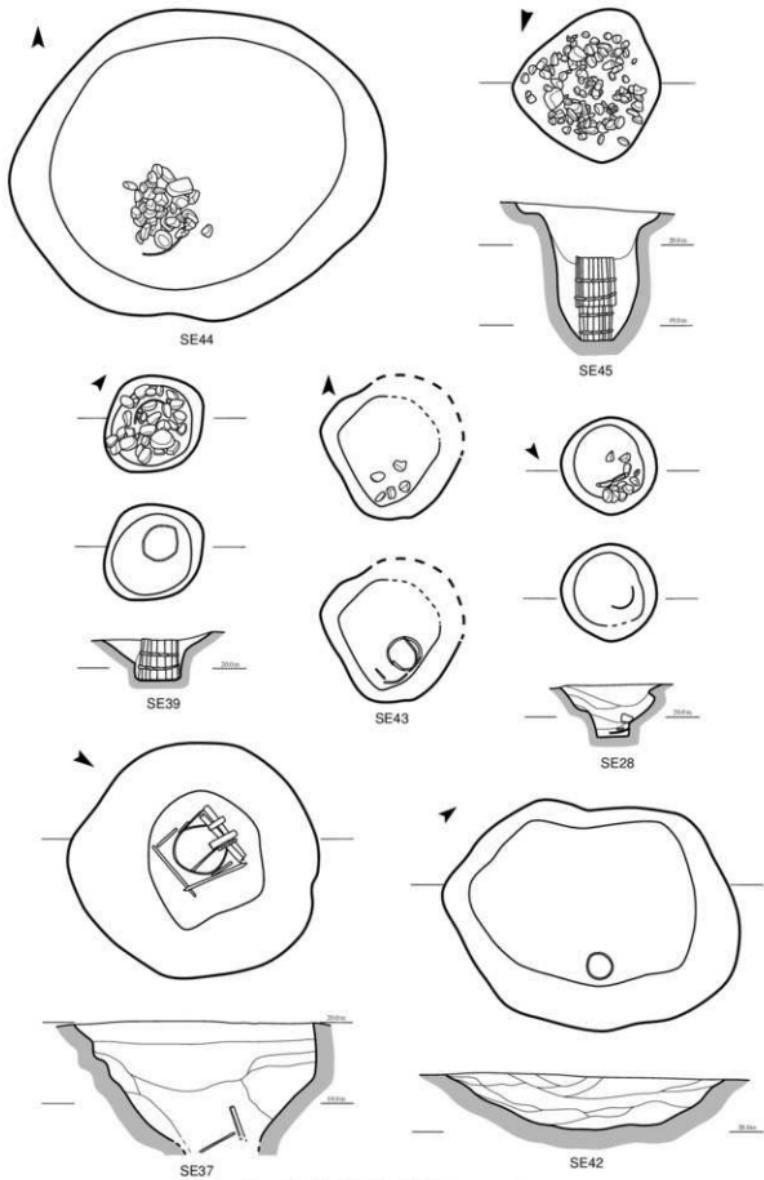
第62図 井戸平面図・断面図(1/60) (5)



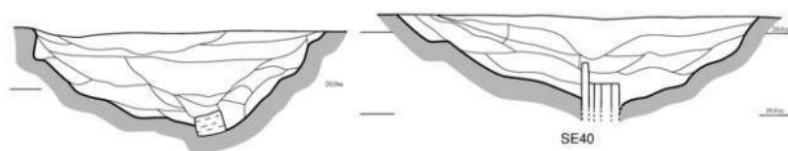
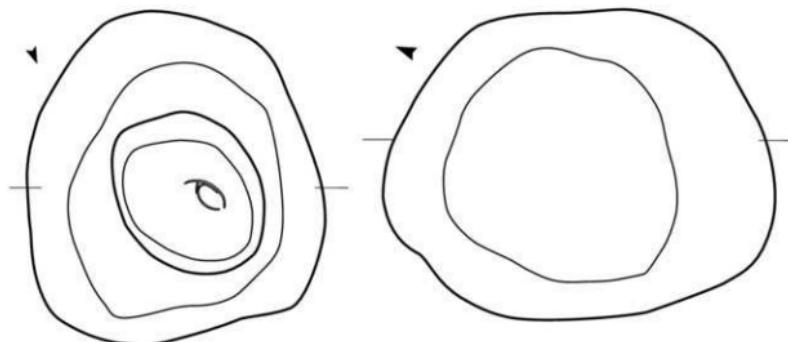
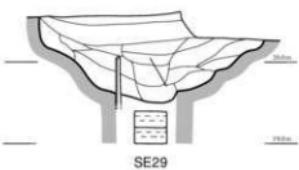
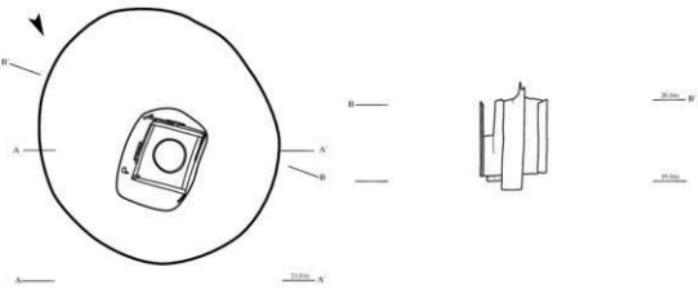
SE23



第63図 井戸平面図・断面図(1/60) (6)

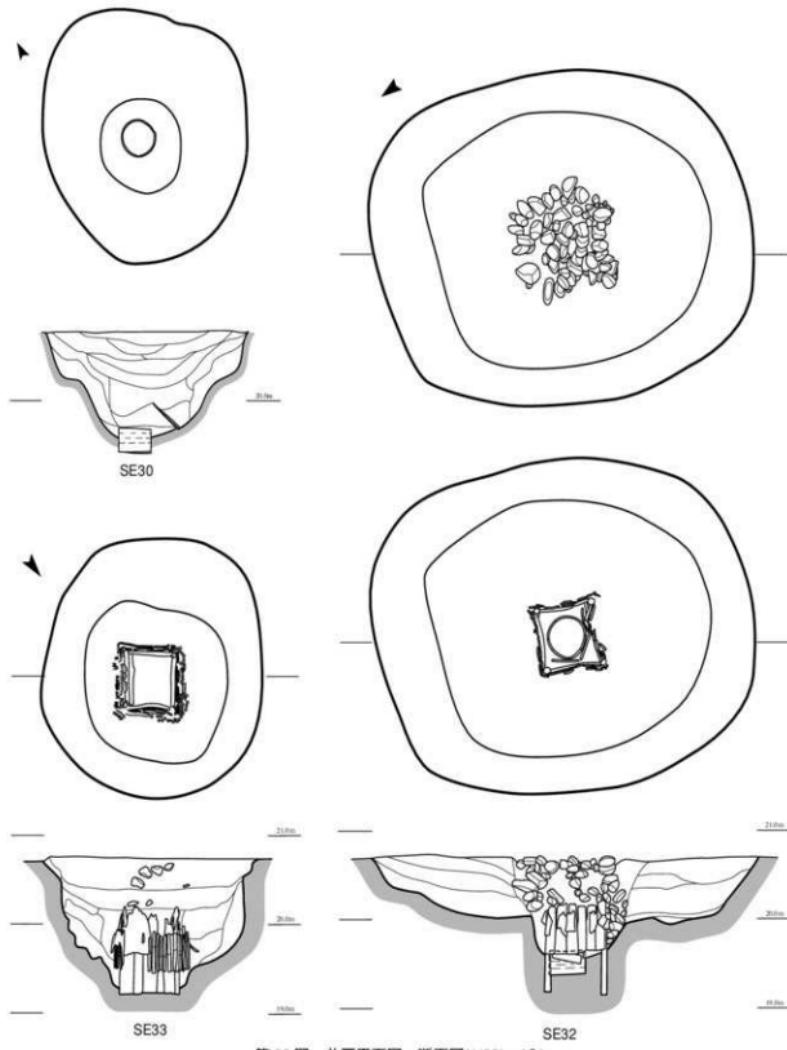


第64図 井戸平面図・断面図(1/60) (7)

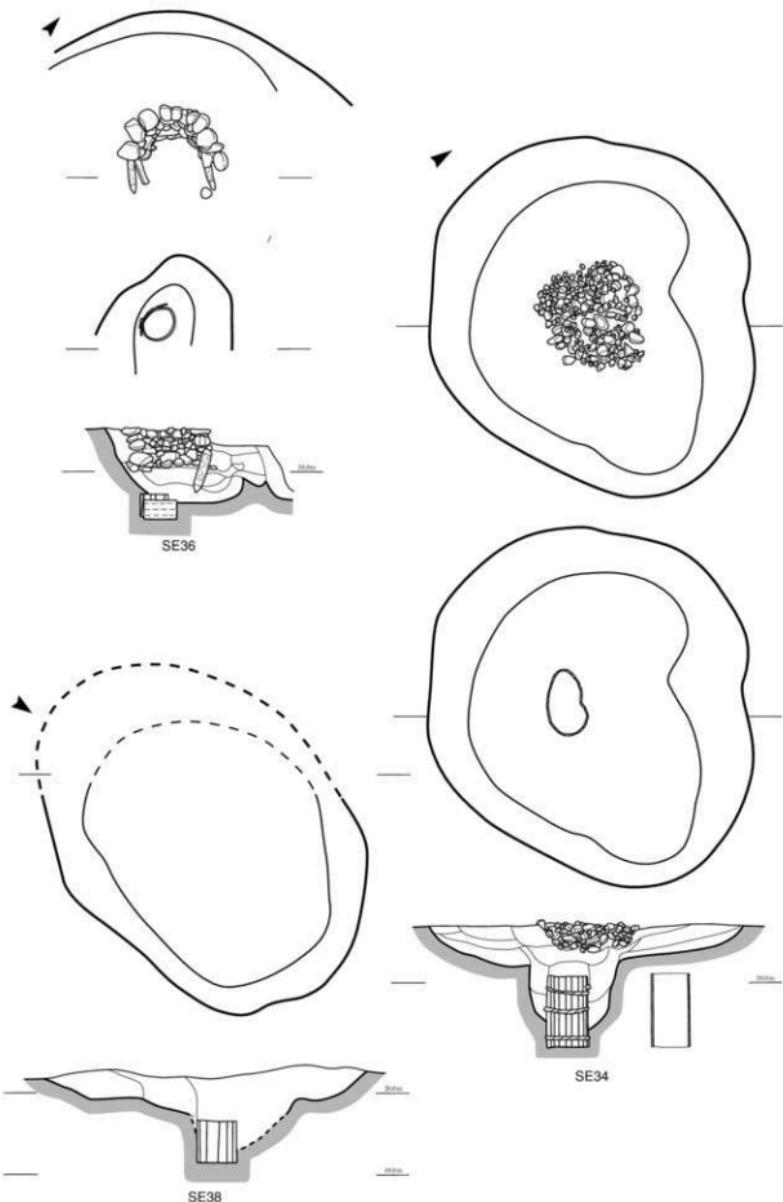


SE31

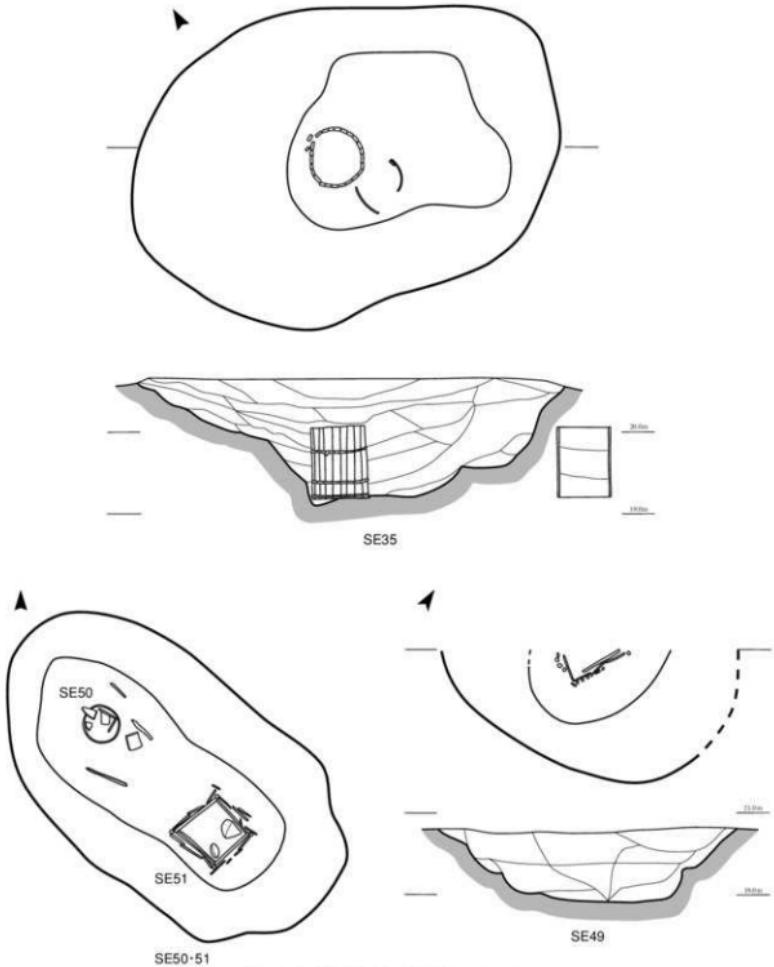
第65図 井戸平面図・断面図(1/60) (8)



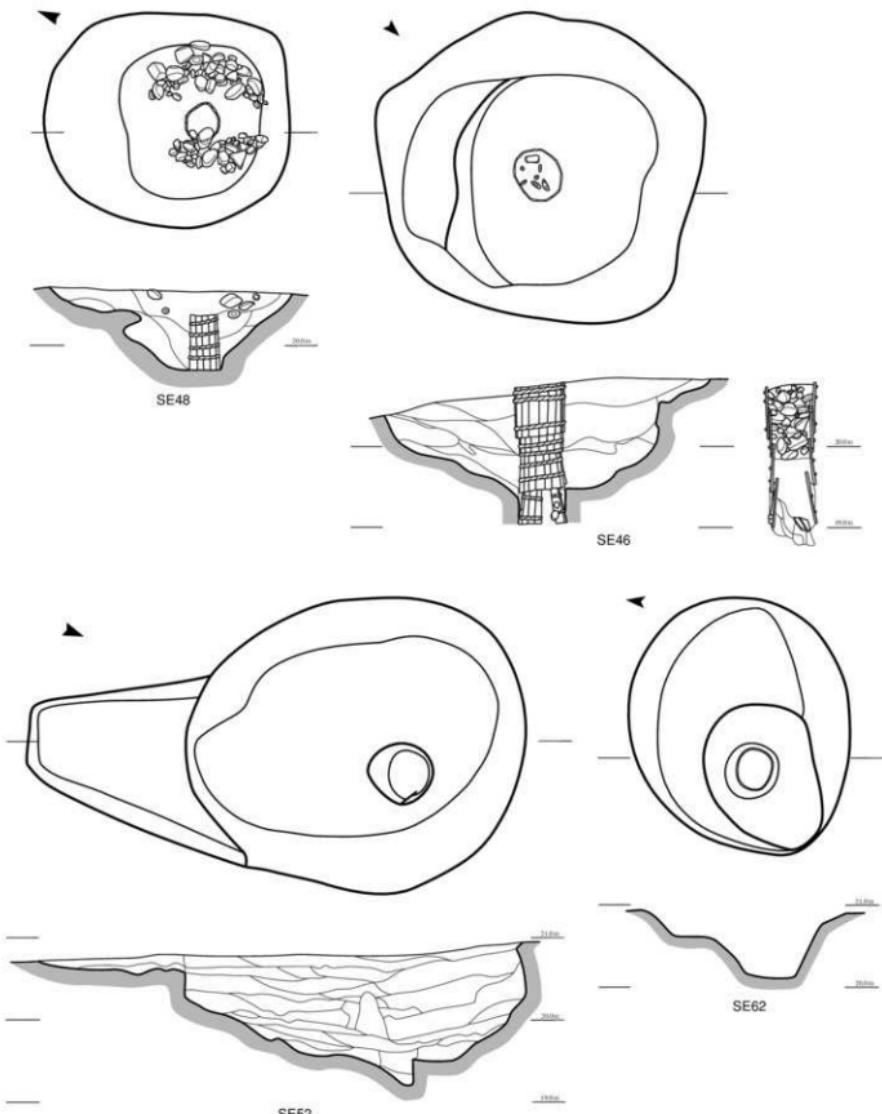
第66図 井戸平面図・断面図(1/60) (9)



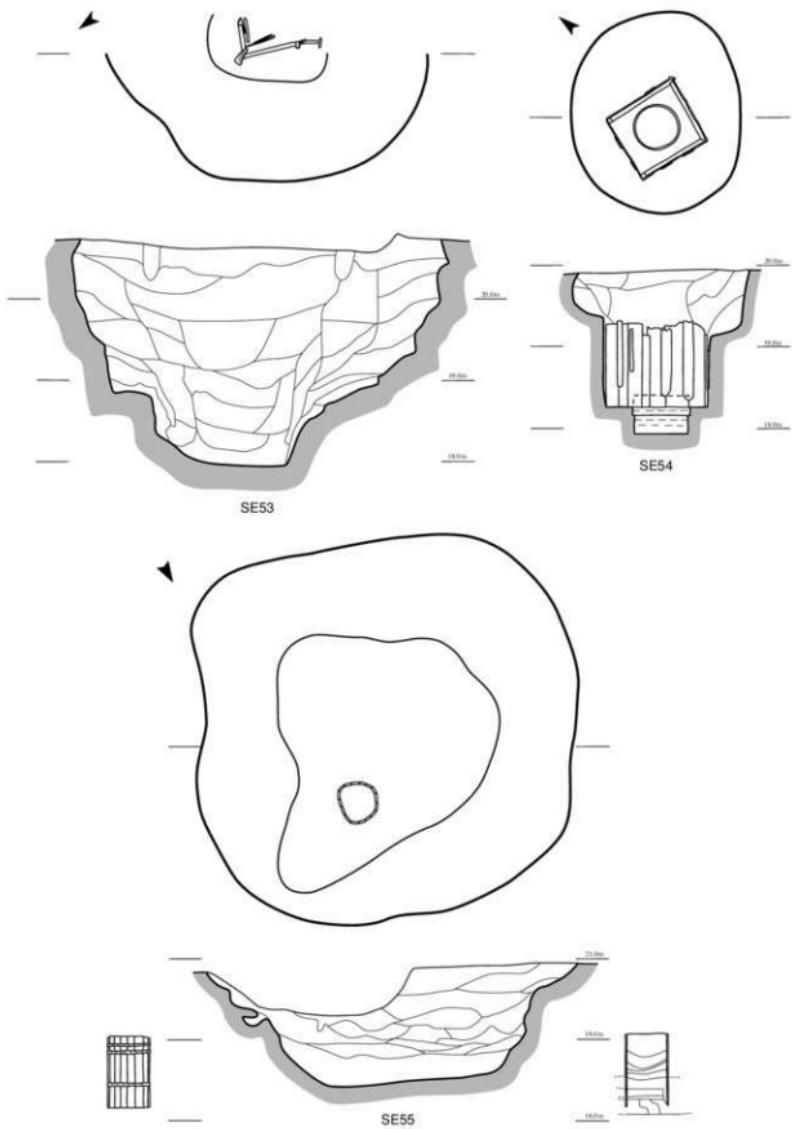
第67図 井戸平面図・断面図(1/60) (10)



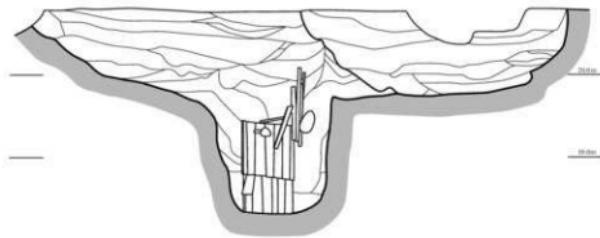
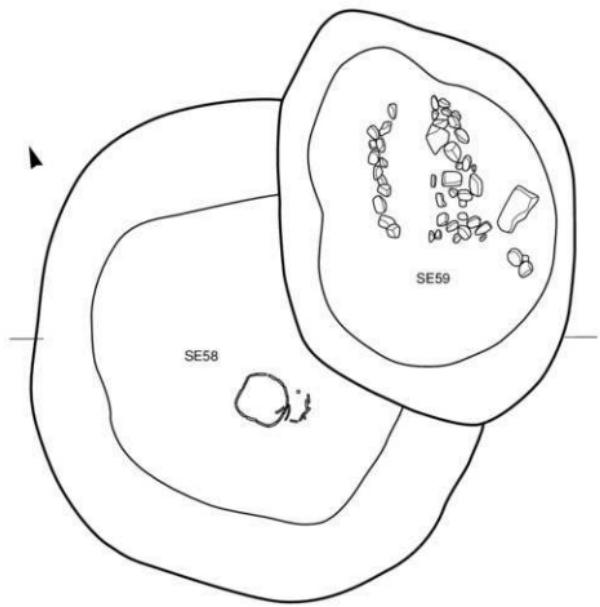
第68図 井戸平面図・断面図(1/60) (11)



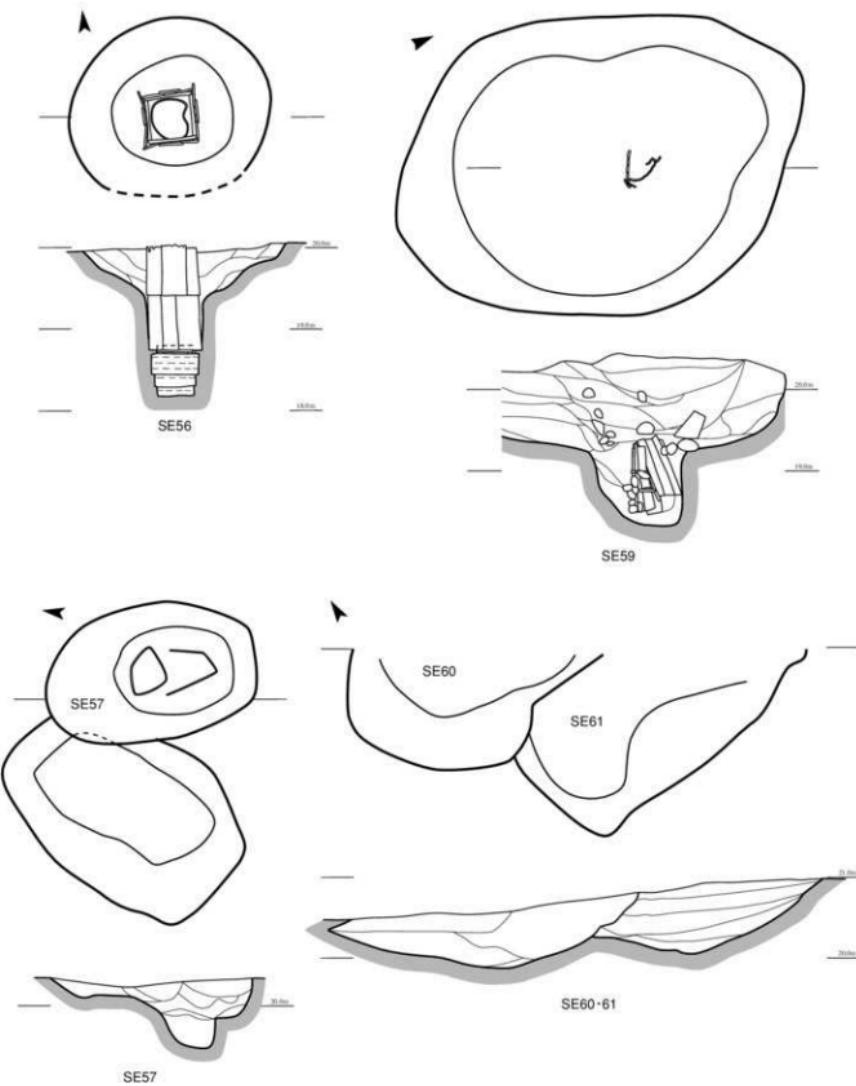
第69図 井戸平面図・断面図(1/60) (12)



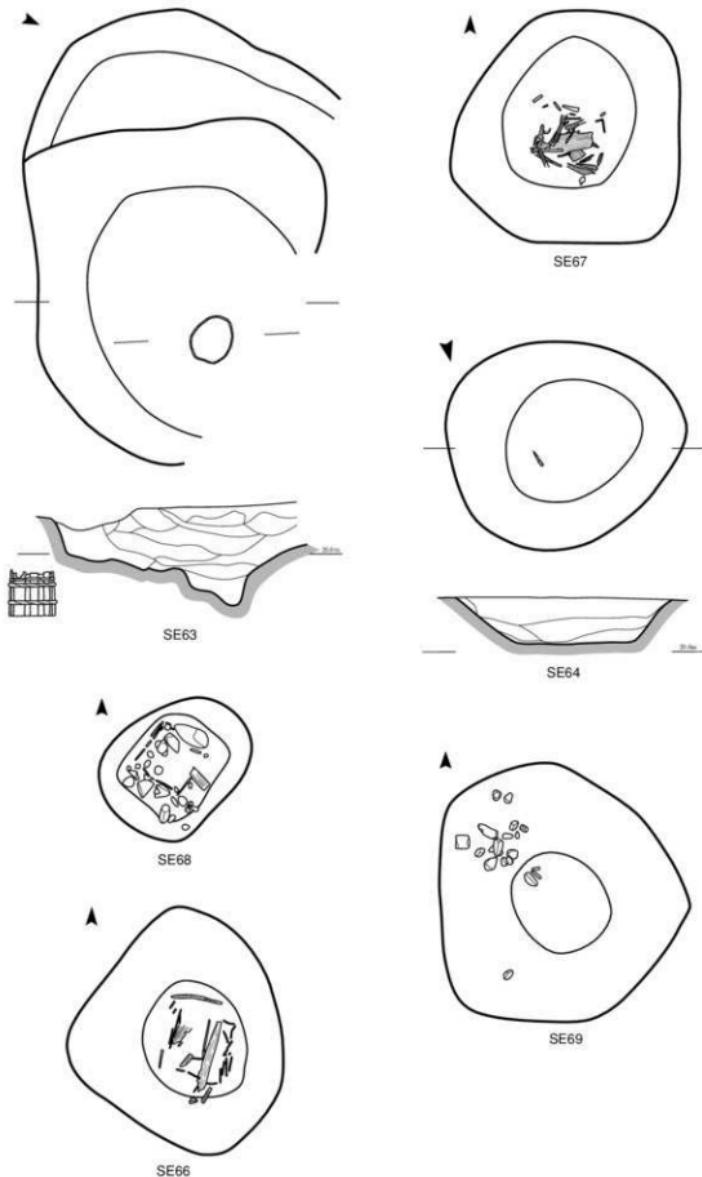
第70図 井戸平面図・断面図(1/60) (13)



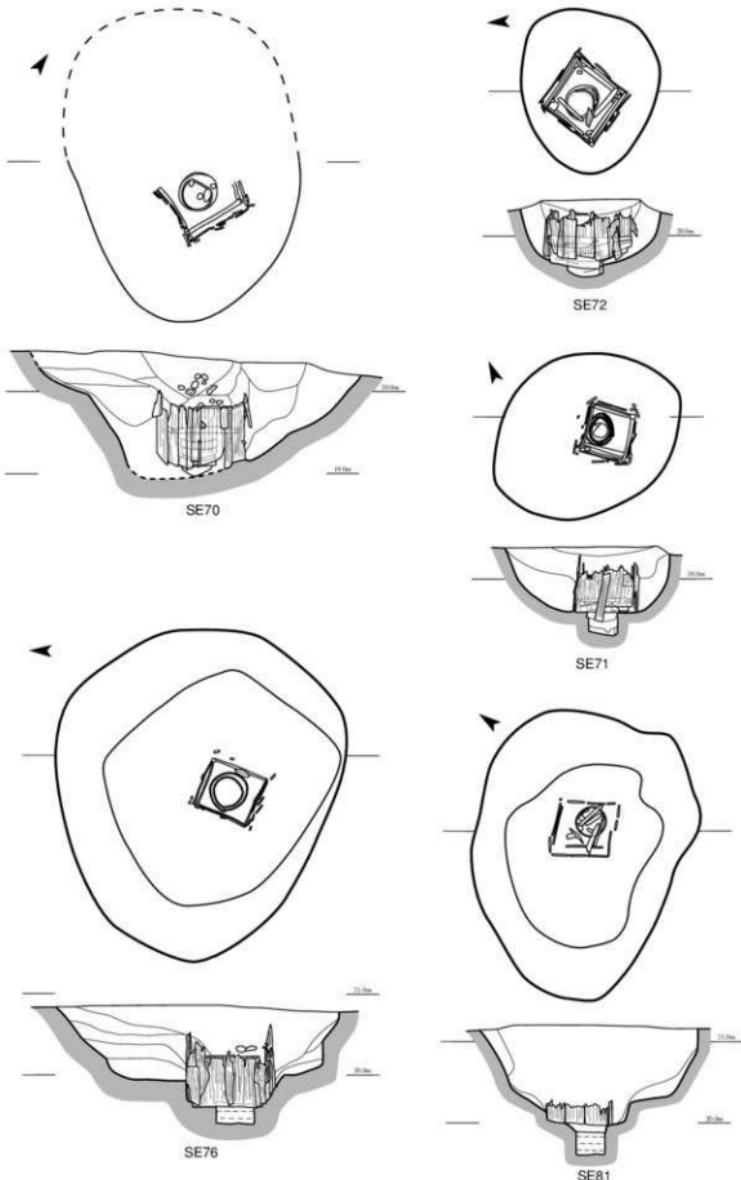
第71図 井戸平面図・断面図(1/60) (14)



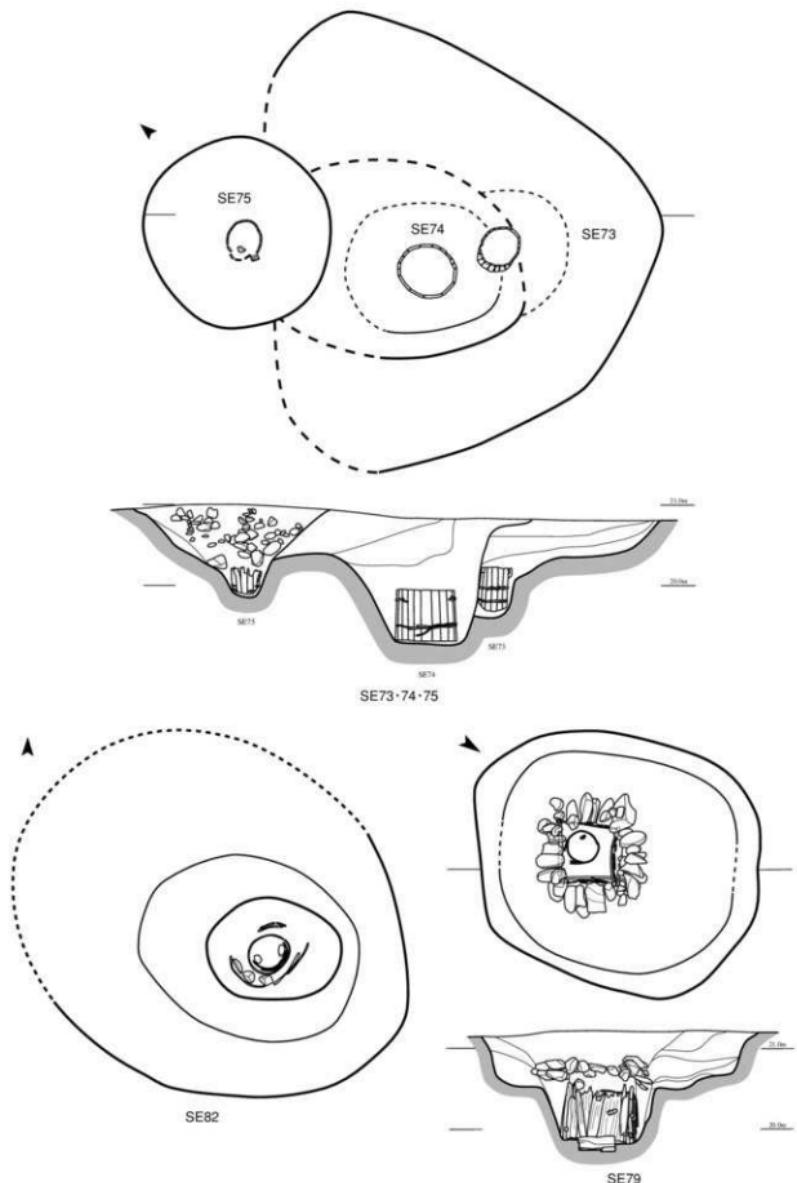
第72図 井戸平面図・断面図(1/60) (15)



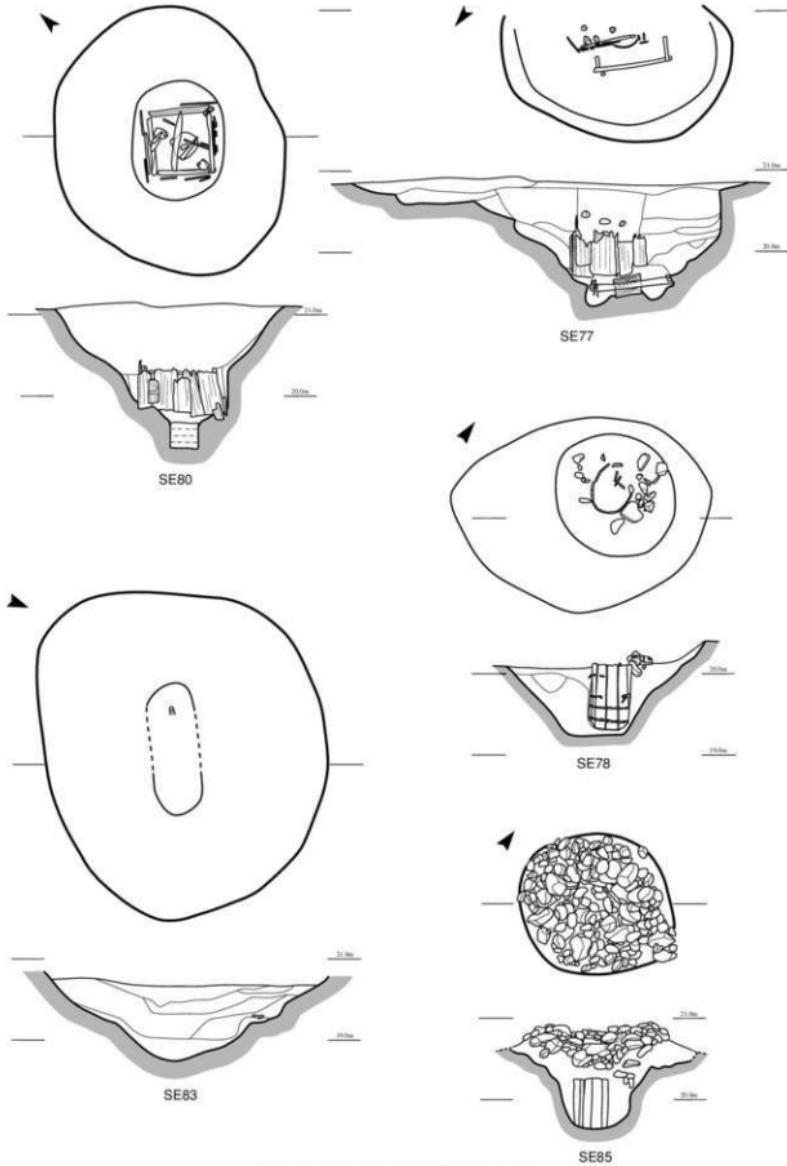
第73図 井戸平面図・断面図(1/60) (16)



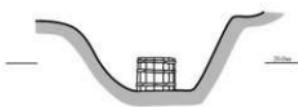
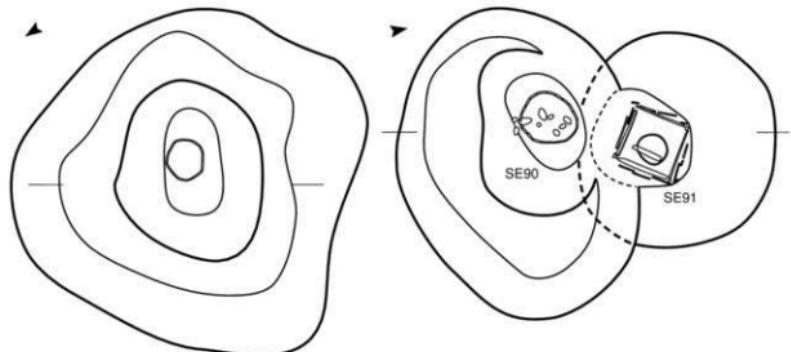
第74図 井戸平面図・断面図(1/60) (17)



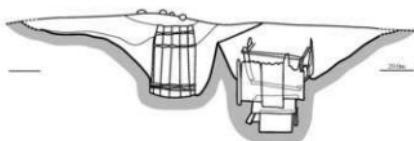
第75図 井戸平面図・断面図(1/60) (18)



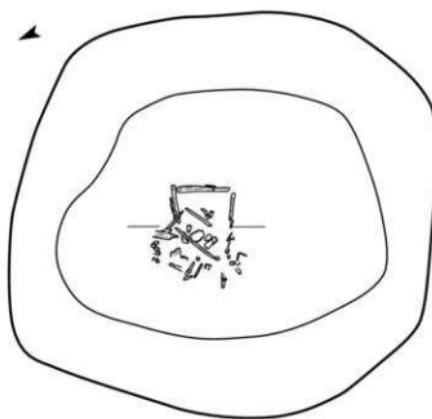
第76図 井戸平面図・断面図(1/60) (19)



SE86

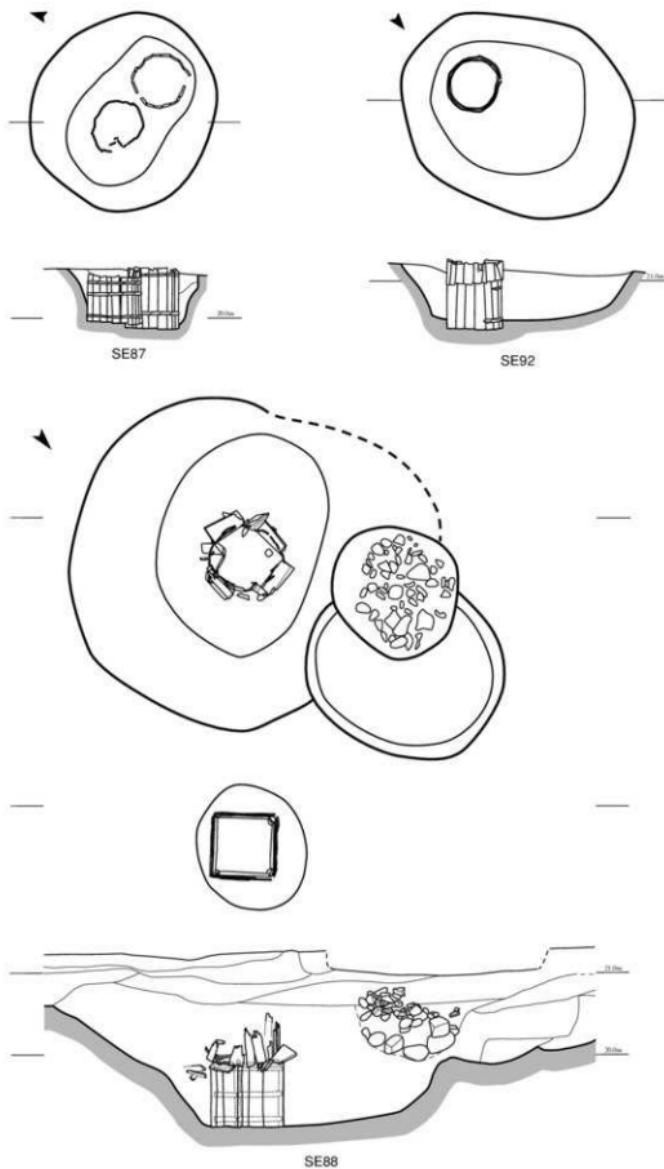


SE90・91

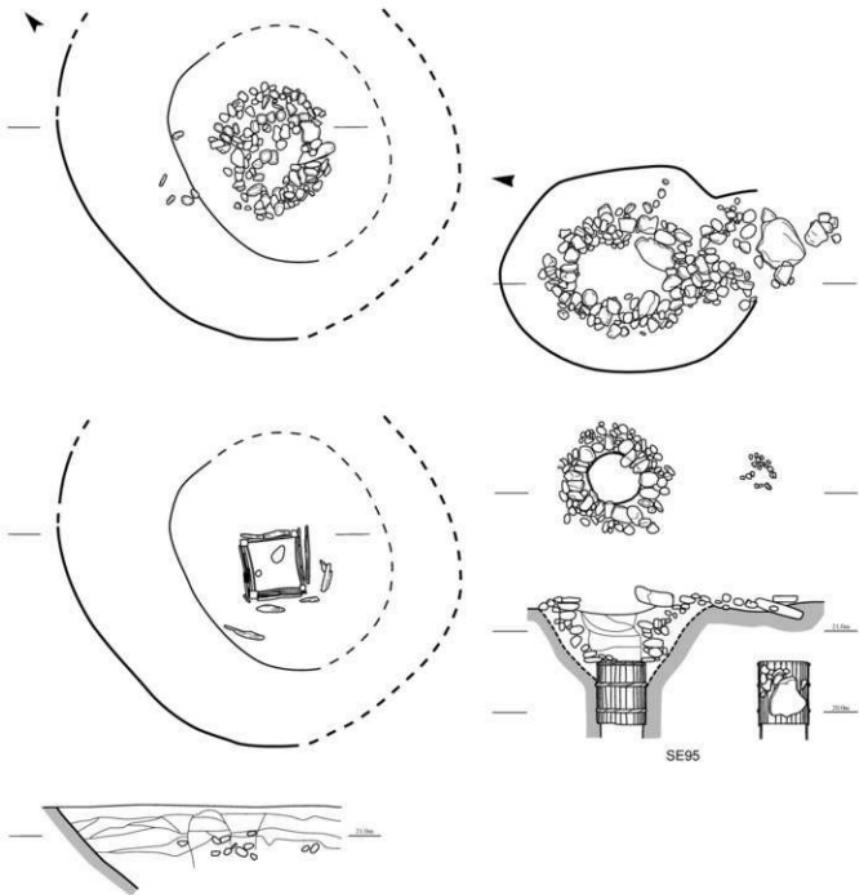


SE93

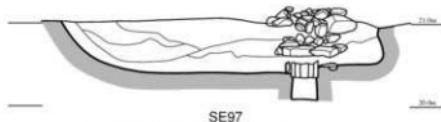
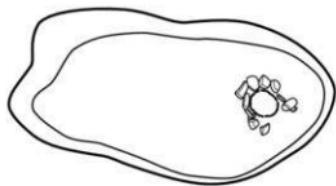
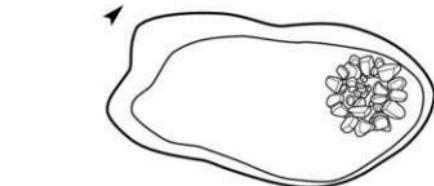
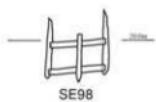
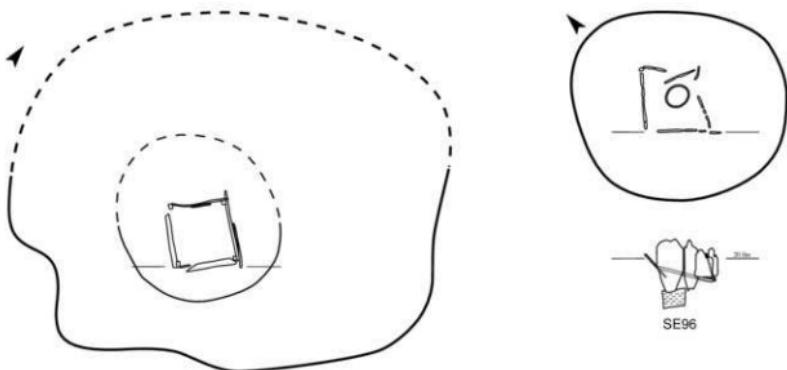
第77図 井戸平面図・断面図(1/60) (20)



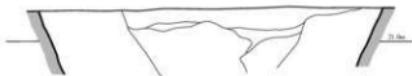
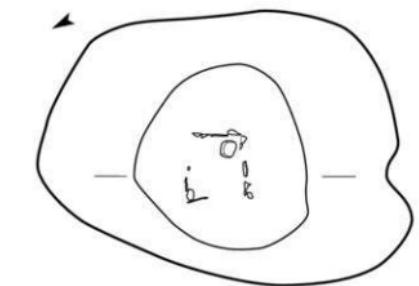
第78図 井戸平面図・断面図(1/60) (21)



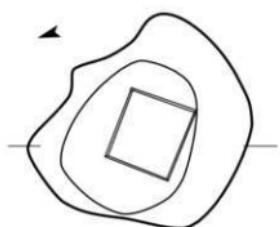
第79図 井戸平面図・断面図(1/60) (22)



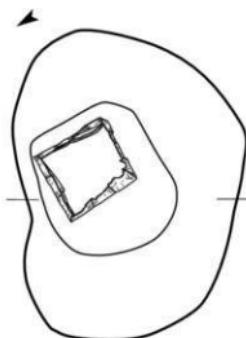
第 80 図 井戸平面図・断面図(1/60) (23)



SE99



SE100



SE101

第81図 井戸平面図・断面図(1/60) (24)

第3章 遺物

第1節 土器・陶磁器

出土遺物は、古墳時代から近世に至る時期のものが検出されている。土器・陶磁器に関して遺構の時期区分にしたがって叙述していく。

1. 古墳時代

郷上遺跡では、古墳時代前期に該当する土器はほとんどみられず、古墳時代中期に至ってようやく、遺構に伴う土器が確認できるようになる。古墳時代中・後期の土師器編年については、以前から尾張地方で松河戸式・宇田式が設定されている（赤塚1994）。これに併行する時期の西三河地方（矢作川中流域）の土師器については、川崎みどりの神明式の提唱（川崎1996）があり、最近では森泰通による神明遺跡土師器編年（森2001）がある。郷上遺跡出土の古墳時代土器は、これら編年の中でも須恵器の登場する後半部分が主体である。したがって猿投山西南麓古窯跡群出土須恵器編年（齊藤1995など）。以下、須恵器編年と略。なお、須恵器については城ヶ谷和広氏に御教示いただいた（註1）も併用することができる。

本項では上記の編年に導かれてながら、出土土器を遺構ごとに提示する。特に年代を考慮せずに溝・竪穴住居・土坑・その他の順に配列した。さらに遺構内では、須恵器・土師器の順、うち土師器は椀・高杯・壺・甕の順で配列した。高杯については杯部と脚部の接合方法による分類がある（森1996）が、明晰に観察できた例が多くないため、ここでは考慮していない。

(1) 遺物各説

SD201 (第82図1～21) その規模の大きさから大溝と呼んでいる、遺跡を南北に貫く溝である。出土土器全体に占める、古墳時代土器の量はさほど多くなく、提示資料も各調査区からの寄せ集めである。また、戦国時代の遺物が混入する上層からの出土資料（2・4・5・15）も含まれる。須恵器（1～11）は5世紀後葉～6世紀前半で6世紀前半が主体である。1・3・9・11・13・17・18・19・21は下層出土資料で、SD201開削時期に関わる可能性が高い。17は小型平底甕。21は把手付鍋。底部に成形時に付いた木の葉痕がある。表面のハケメは短かめである。

SD205 (第83・84図22～54) 後述のSD203と平行に伸びる溝で、同様の目的で掘られたのであろうか。須恵器（22）は東山111号窯式期で5世紀中葉。23は5世紀中葉～後半。椀（24・25）は口縁が外反するものと内湾志向の両者がある。高杯は杯部箱形（26）もあるが、主体は椀形高杯である。29は脚部に焼成前の穿孔があるが、貫通していない。土師器甕はく字口縁で球胴形が主体。52は台付甕で、口縁形状が宇田型台付甕を彷彿とさせる。しかし、胴部下方に横ハケメを入れるなど、宇田型甕にない作業工程がうかがえる。在地で作られた模倣品か。

SD203 (第85～87図55～118：98B区、第87図125～130：97A区) SD201大溝とはほぼ平行に伸びる溝で、この溝の東側に古墳時代中期の集落が広がると考えられ、集落の外周を囲う溝と想定される。須恵器（55～72・125）が蓋杯・高杯を中心とした他の遺構より多くみられるのが特徴である。土師器も煮炊具より高杯の方が目立つ印象がある。

須恵器蓋杯は5世紀中葉～後半の資料(55・56・61)、6世紀前半の資料(57～59・62～64・125)、6世紀後半の資料(60・65)がある。一方他器種は5世紀中葉～後半の資料である。70は穿孔箇所が残存していないが甌である。72は壺胴部破片であるが、条縫紋叩きが確認できる。

土師器椀(73～75)は内湾志向。高杯脚部は全体的に退化が進んでいるが、内側に絞り痕があるものが少数ながら存在する(76・82・93・94)。他は横方向ヘラ削り。杯部は箱形のもの(76・77)と、椀形外反志向のものが存在する。91は杯部下端に断面三角突帯が付く大形高杯。106はミニチュア土器。甌は口縁く字甌で、長胴化傾向のある甌(113～115)がある。胴部外面は短いハケメ調整後継方向にナデ。内面は頸部に指頭圧痕がある他は横方向指ナデ。130のような球胴形もみられる。118は瓶か。

共伴する須恵器から比較的の長期間にわたる土器廃棄が想定されるが、土師器がどのように対応するのかは明確ではない。杯部箱形の高杯やミニチュア土器・球胴形甌から外反椀形高杯・甌の長胴化を経て内湾志向の椀へと移っていくのではないだろうか。

SD207(第87図119～124) 須恵器のうち、120は6世紀中葉。121は6世紀前半。

SD209(第88図131～144) 須恵器の出土がなかった遺構である。131は椀としたがミニチュア土器か。132の椀は外反志向で比較的丁寧な作り。133はミニチュア土器。134～138の高杯は杯部箱形、脚部内側横方向ヘラ削り。139の高杯は杯部内外面にハケメ、脚接合部は指頭圧痕があるなど、他とは異質である。140・141の脚部内側には絞り痕がある。甌は口縁く字で球胴形を呈する。143は130と同様、胴部中程に成形時の粘土接合痕を明瞭に残す。

SD208(第88～90図145～172) 須恵器高杯(145)は土師器の椀形屈折脚高杯を模倣したのであるか。全体的に厚手なつくり。脚先端を下方に若干尖らせる点は、これが須恵器工人の作であることを証しともいえる。杯部に波状紋を施すなど、須恵器であることを主張しているかのようである。

土師器高杯は、杯部が箱形(146～148)、椀形(149)、下端に稜を有する外反形(150～152)に分けられる。146は内外面に粗雑なヘラ磨きが施される。159は小壺丸底甌。160は直口甌。甌は166～168のような球胴形がある一方、171のような長胴化傾向もみられる。169は横ハケ目が特徴的。172の台付甌は胴部半ばよりやや下方に横ハケメを最後に入れているのが特徴。台付甌(52)や球胴形甌(166)を問わず、表面調整の最後に胴部下方に横ハケメを入れる特徴が散見される。

SB18(第90図173～175) 175の土師器甌は頸部のくびれがほとんどなく、7世紀代に下る可能性がある。

SB21(第91図176～187) 須恵器蓋(176)は5世紀後半。178は脚部に稜を有する土師器高杯である。

SB23(第91図188～190) 188は須恵器高杯で5世紀後半。190は須恵器甌の底部で、円形蒸気孔を多数有する型式である。年代については不明。

SB25(第91図191) 191は、カマドが確認された地点から出土している。そこに据えられていたものか。長胴形ハケメ甌で、内面はハケ目調整後、横方向の板ナデ。頸部付近に煤の付着がある。175と同じく7世紀に下る可能性がある。

SB29(第91図 192～195) 須恵器蓋（192）は東山61号窯式期で6世紀中葉。無蓋高杯（193）は5世紀後半であるが、共伴する土師器（194・195）の様相からすると混入の可能性が高い。

SB31(第91図 196・197) 杯部下端に稜を有する外反高杯（196・197）が2点出土した。

SB32(第91図 198・199) 198は内湾志向の椀形高杯。199は小型平底甕かと思われる。内面に煤の付着が認められた。

97A区 SK1107(第92図 200～212) 須恵器（200）は高杯と推定され、5世紀後半。不明瞭であるが体部下半に波状紋がある。土師器高杯は内湾志向椀形（201・203）があり、203の脚部は八字形に開き、内側に絞り痕を残している。同様の脚部（205～207）は203のような椀形高杯であったと考えられる。204は大形高杯の杯部。下端は断面三角突帯と考えられるが、やや大きめな作りである。

SD210(SZ01)(第92図 213～219) 98C区の古墳周溝の可能性がある溝であるため、その他の遺構として扱った。須恵器杯（213）は6世紀前半か。217は須恵器甕。時期は不明である。217は脚部有稜高杯。178と同類のものであるが、よりしっかりととした作りである。

SX39・40(第92図 220～227) SD210などを壊す洪水による擾乱。古墳時代から戦国時代までの遺物が混在しているが、ここでは古墳時代の土器のみ提示する。須恵器蓋（220・223）はいずれも5世紀中葉～後半。須恵器杯（221）は東山111号窯式期で、5世紀中葉～後半。226は丸底の小型甕。底部内面に煤が付着する。227は平底の小型甕。内面はハケメ調整後ナデ。

(2)まとめ

以上、明確な分類基準を提示しないまま雑駁な解説に終始してしまった。須恵器の導入と土師器小型丸底甕の全体に占める割合が低下し始める5世紀後半からほぼ6世紀後半までの資料、とくに6世紀前半を中心とする時期の資料が提示できたと思うが、分類や系譜関係を示せる段階に至っていない。今回提示した資料のうち特にSD203は6世紀代全般にわたっており、今後検討を続けていく必要があろう。現状では、矢作川中流域の集落遺跡では6世紀代の資料が少ないという問題点がある。近隣の台地上に展開する神明遺跡も6世紀代は集落の衰退～断絶期にあたり、良好な比較資料がない。見方を変えれば、郷上遺跡と神明遺跡の盛衰は表裏一体の関係だったことが明らかになったといえる。

SD201大溝については、完掘できなかった箇所がいくつかあり、遺物の出土量を他の遺構と単純に比較できない面もあるが、SD203よりはるかに少ない印象があるのは否めない。SD203のように生活域に接していないこともあろうが、その規模にも関わらず、開削目的や機能が明らかにできるほどの遺物量ではなかった。このような大溝は、郷上遺跡の北東方向段丘上に位置する水入遺跡においても、当センターの調査で確認されているが、ここからは5世紀後半を中心とする土器が大量に出土している（永井邦仁2000）。今後水入遺跡の大溝を検討する際に再考する機会をもちたい。

（永井邦仁）

註

1)須恵器については城ヶ谷和広氏に御教示いただいた。

参考文献

赤塚次郎編1994『松河戸遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 (財)愛知県埋蔵文化財センター

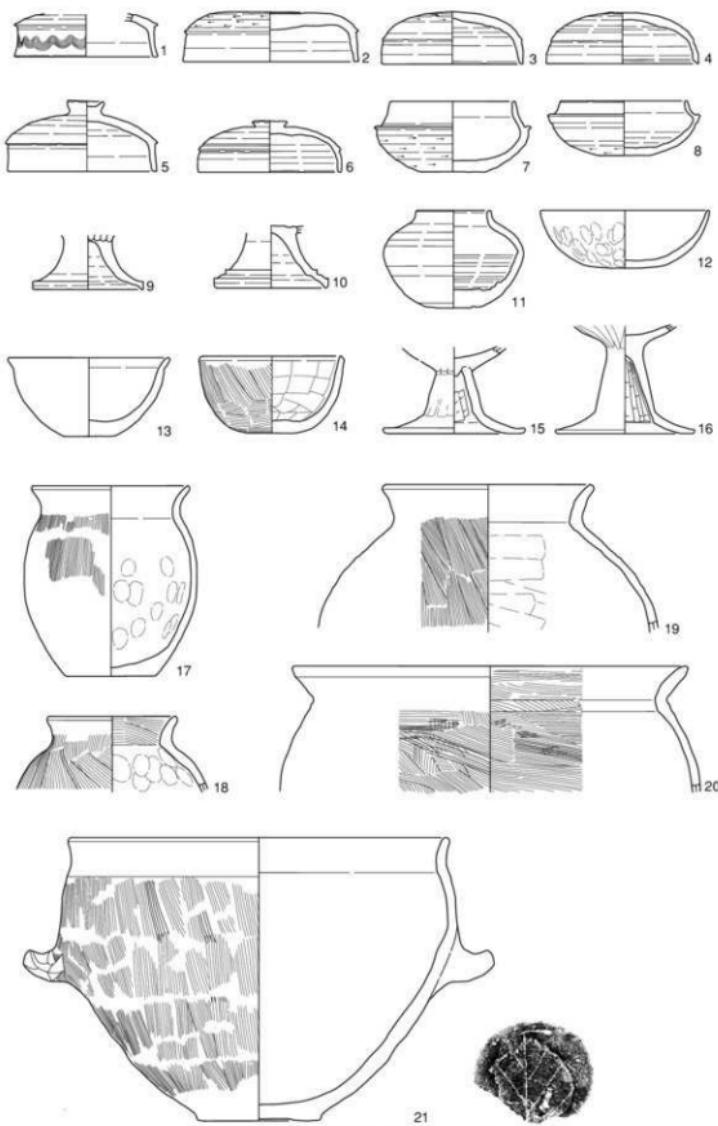
齊藤孝正1995「東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編Ⅰ』 雄山閣出版

川崎みどり1996「神明遺跡再報告」「神明遺跡」農田市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 農田市教育委員会

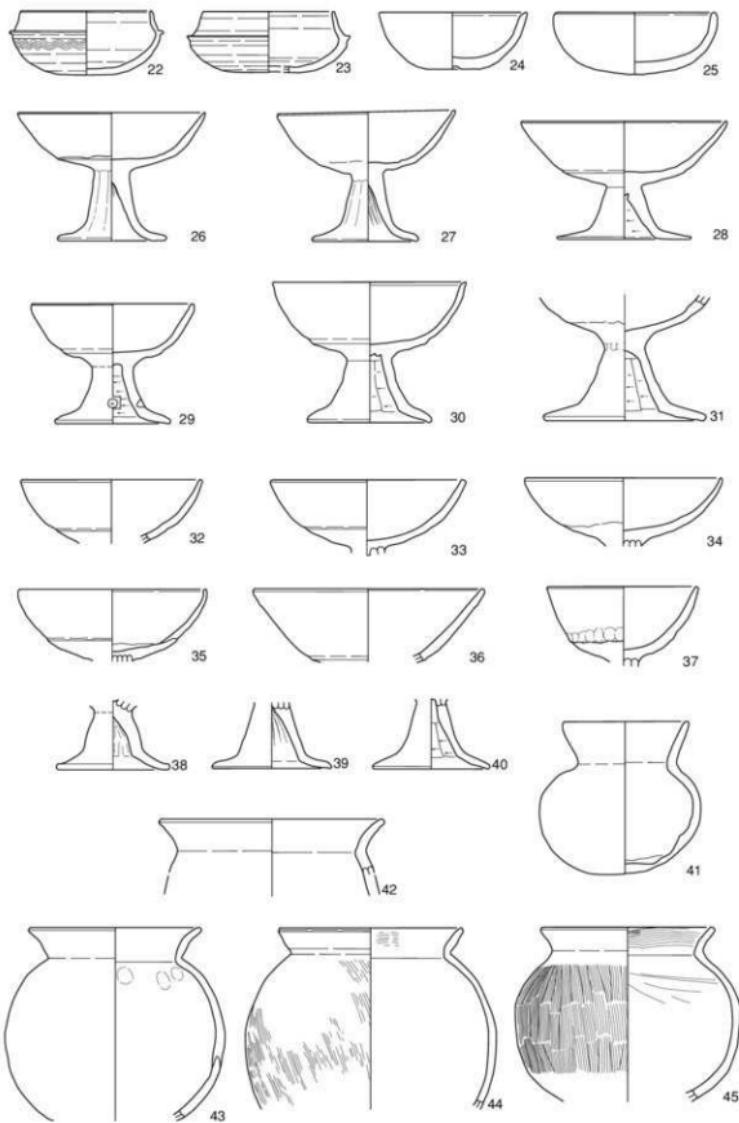
森 泰通編1996「神明遺跡」農田市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 農田市教育委員会

永井邦仁他2000「水入遺跡」「年報 平成11年度」(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

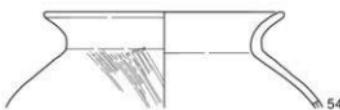
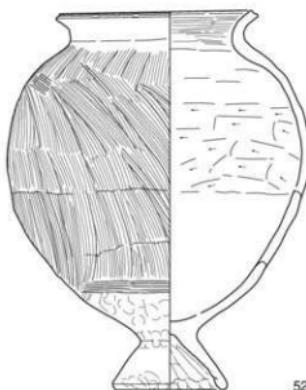
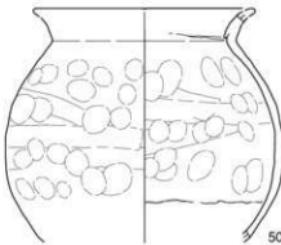
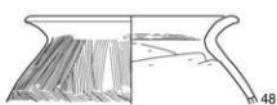
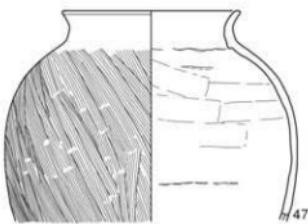
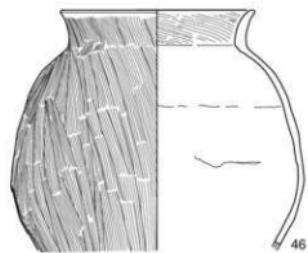
森 泰通 2001「古墳時代中・後期土器の編年試案」「神明遺跡Ⅱ」農田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集 農田市教育委員会



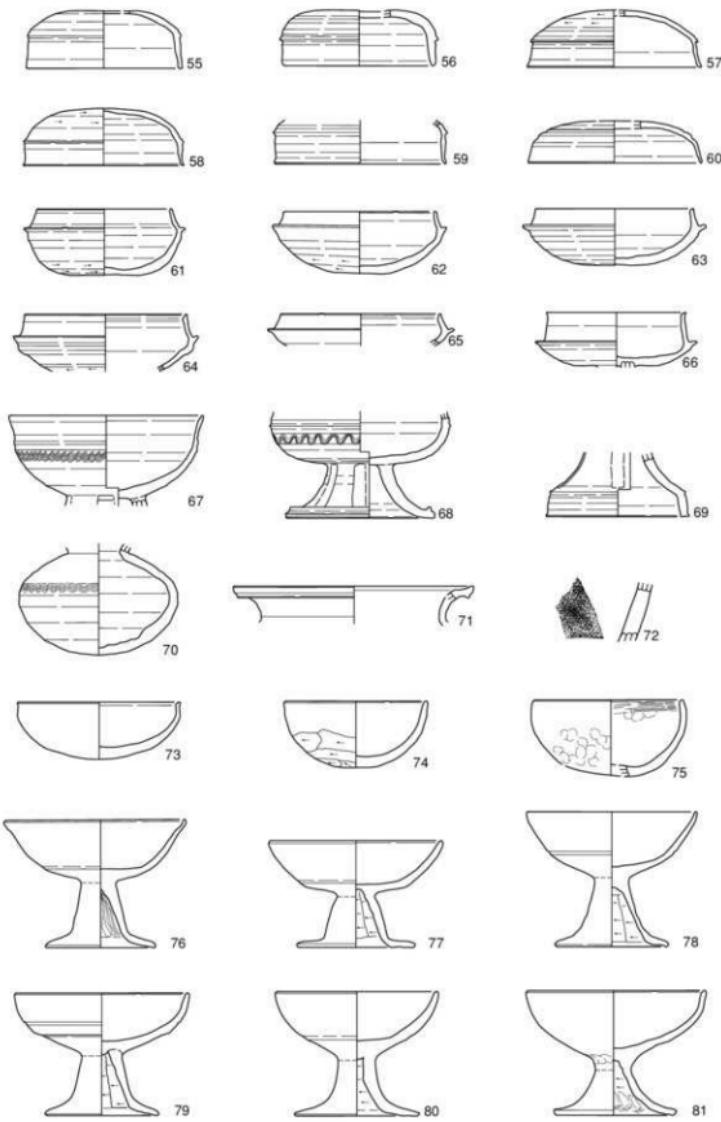
第 82 図 古墳時代の遺物(1/4) (1)
SD201



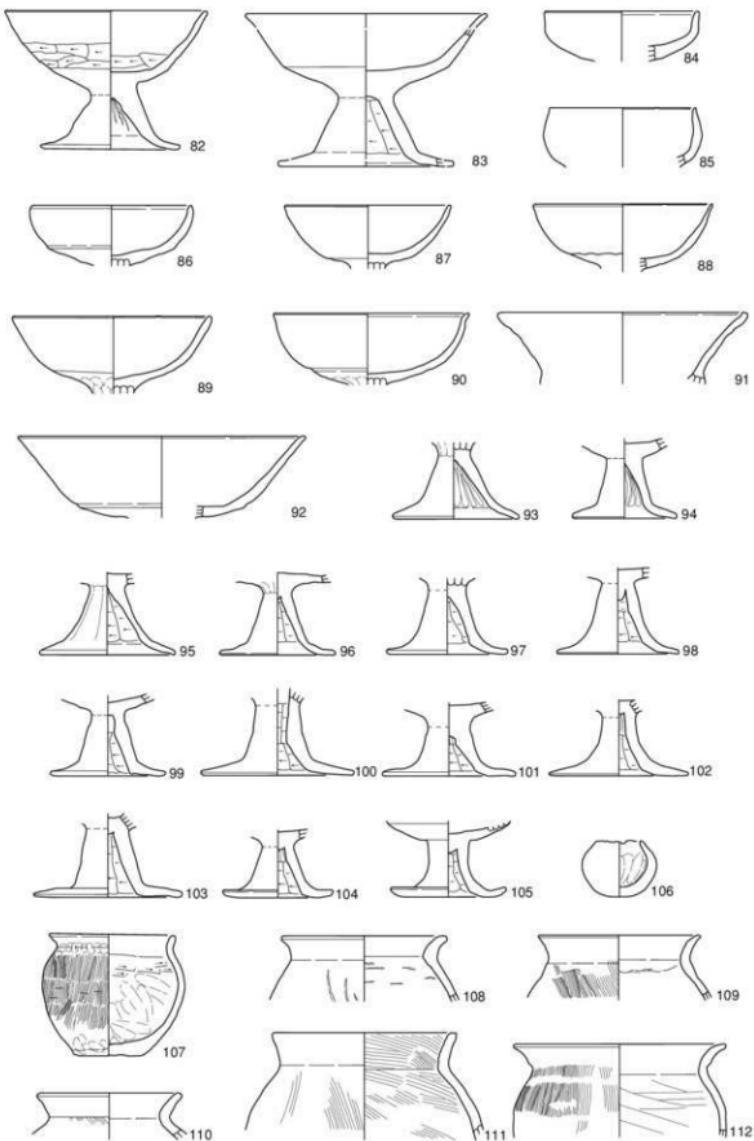
第83図 古墳時代の遺物(1/4) (2)
SD205



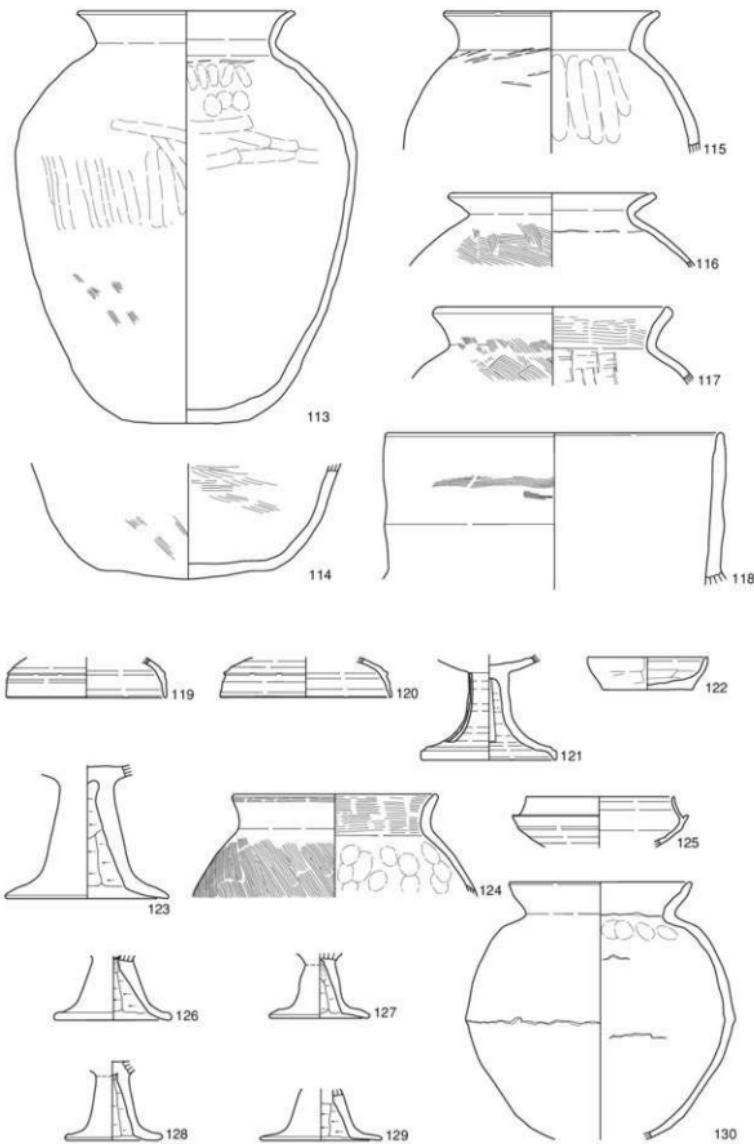
第 84 図 古墳時代の遺物(1/4) (3)
SD205



第85図 古墳時代の遺物(1/4) (4)
SD203



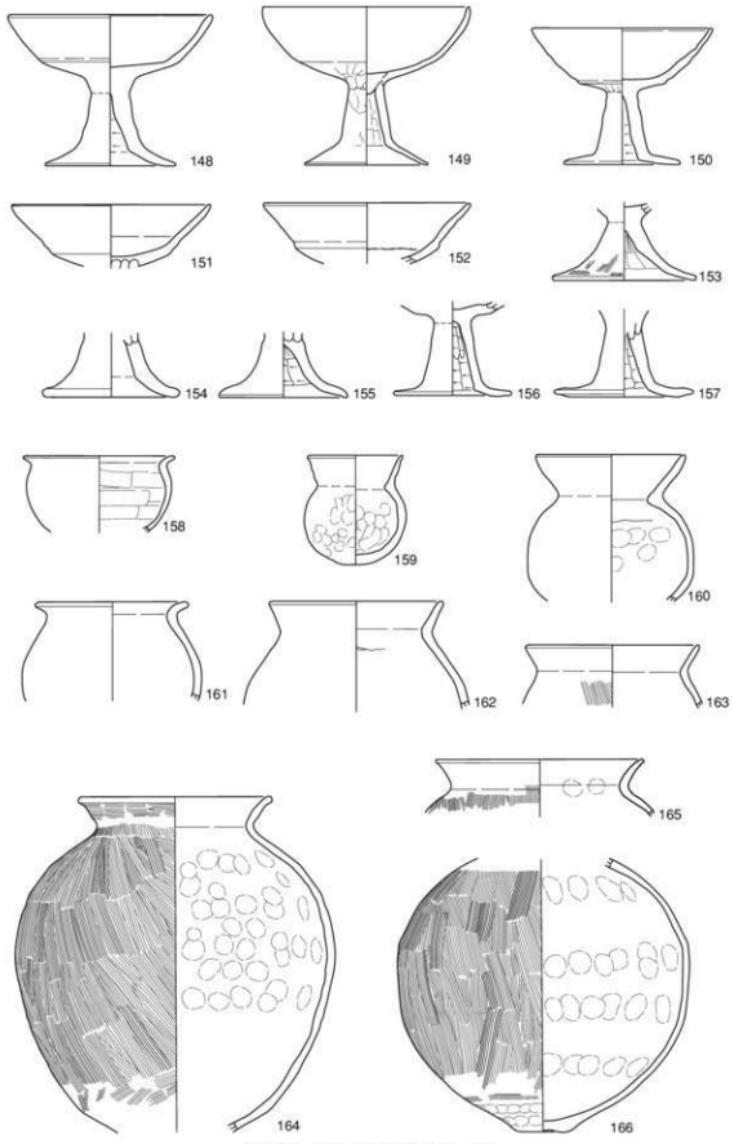
第86図 古墳時代の遺物(1/4) (5)
SD203



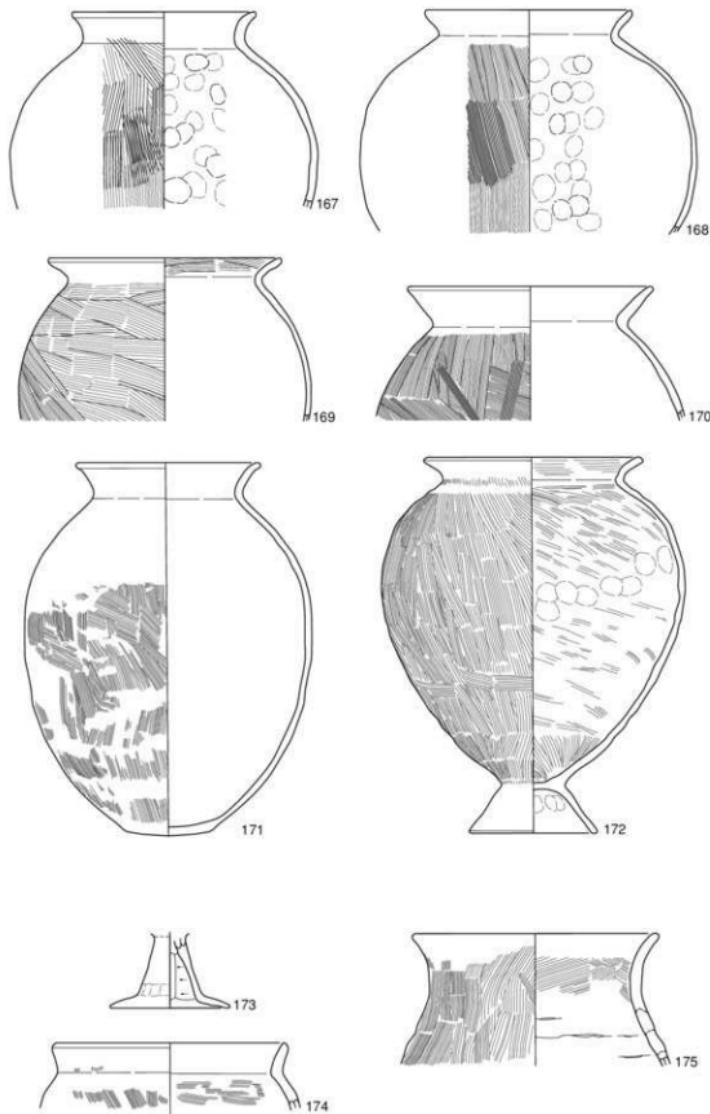
第87図 古墳時代の遺物(1/4) (6)
SD203-207



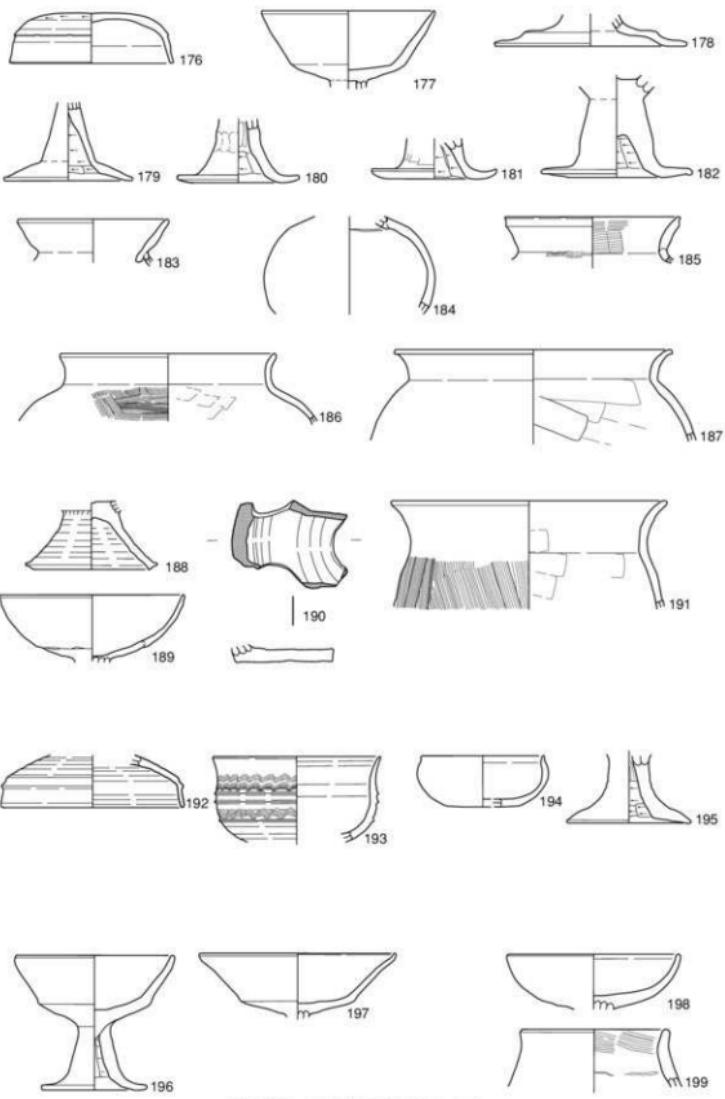
第88図 古墳時代の遺物(1/4) (7)
SD208・209



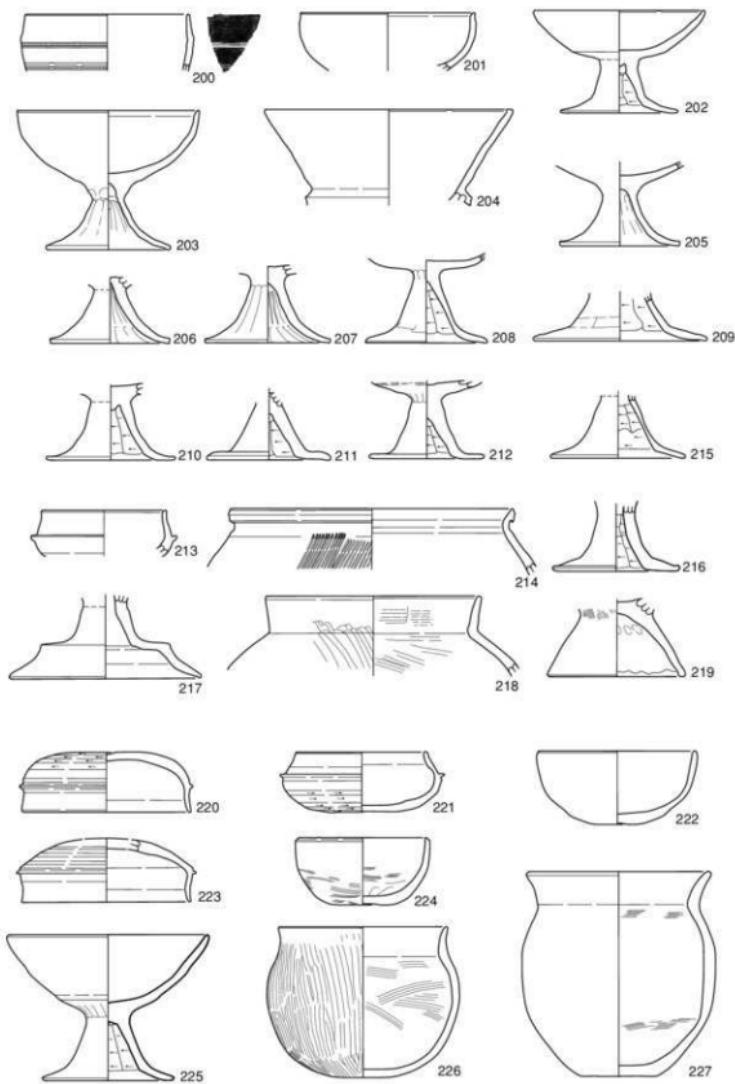
第89図 古墳時代の遺物(1/4) (8)
SD208



第90図 古墳時代の遺物(1/4) (9)
SD208-SB18



第91図 古墳時代の遺物(1/4) (10)
SB21・23・25・29～32



第92図 古墳時代の遺物(1/4) (11)
97A区 SK1107・SD210・SX39・40

2. 古代

古代の土器として、7世紀代から10世紀代の須恵器、灰釉陶器、土師器が検出された。これらの遺物について、記述の煩瑣を避けるため主要器種についてあらかじめ分類整理を行う。

註1)・2)

須恵器

蓋 A 丸い天井部で、口縁が立ち上がり境界に稜がはいる。頂部に宝珠を有するもの

B Aと同じ形状で、宝珠を有しないもの

C 扁平な天井部で口縁が短く屈曲する。頂部に宝珠を有するもの

D Cと同じ形状で頂部に宝珠を有しないもの

杯 A 丸底で蓋受けのかえりを有するもの

B 体部が直線的に立ち上がり、底部との境界に稜がはいるもの

C Bに高台が付いたもの

D 深く、丸い体部のもので、底部を回転糸切りするもの

E 深く、丸い体部のもので、底部をヘラ削りするもの

F 体部が深く円筒状に立ち上がり、高台を有するもの

高杯 丸い体部に脚の付いたもの

盤 A 浅い体部で、口縁が屈曲して短く立ち上がるもの

B Aに高台が付いたもの

C 口縁が屈曲せず、扁平な皿状の体部で高台を有するもの

D Cと同じ形状で脚の付くもの

鉢 A 丸底で短い頸部を有し、杯と同様の小形のもの

B Aより大形で短い頸部のもの

C 体部が直線的に開いて立ち上がり、擂鉢と称されるもの

壺 A 頸部が長く、口縁が開くもの

B 短頸壺で体部が丸いもの

甌 A 体部に注口を有する丸底のもの

B 体部に注口を有し、高台をもつもの

横瓶 A 短い頸部で砲弾型の体部のもの

B 小形で扁平な体部のもの

提瓶 扁球形の体部の側面に口頸部がつくもの

壺 A 口縁部が直線的に開いて立ち上がる大形のもの

B 口縁部が短く外反するもの

C 頸部が大きく開き、強く外反する短い口縁部のもの

瓶 A 直線的な体部のもの

B 丸みのある体部で短い口縁部を有するもの

灰釉陶器

椀 体部が丸みをもって立ち上がるもの

皿 A 浅く、直線的な体部のもの

B 内面に段を有するもの

長頸瓶 頸部が長く、口縁部が開くもの

土師器

甕 A やや外傾する口縁を有するもので、外面ハケ調整痕を明瞭に残すもの

B 口縁部が外反ぎみに水平方向に開くもので、長胴形のもの

C A類より口縁部が短く、やや直線的に水平方向に開くもの

D B類より短く、厚い口縁部で、やや斜め上方に開くもの

E C類の口縁部の傾斜が緩やかになり、直線的に開くもの

F D類の口縁端部が肥厚し、外傾する端面を有する。体部は球形に近くなるもの

G E類より口縁部が肥厚し、外傾する端面を強くなるものの

瓶 丸みのある体部で、短く外反する口縁部を有するもの

当該期の遺物は、遺構に伴わないものと遺構出土のものを含めると全調査区で出土した。遺構に関してはこの時期はa～c期の3時期に分けられ、遺物についても各々に該当する時期のものが検出されている。97E区では、b期の堅穴住居検出時に包含層中よりまとまって遺物が出土している。古墳時代に属すSD201は、遺構成立期の遺物以外に7世紀代から埋没する平安時代前期までの各時期の遺物が検出されている。

(1) SD201

遺構は、98B区から97C区までの4調査区にわたっている。連続した調査区単位に記述する。

98B・97A区(第93図)

7世紀前半から10世紀代の遺物が出土している。7世紀代の須恵器として杯A(228)・E(236)、蓋A(229)・B(230)、鉢A(231～233)、越A(234)、高杯(235)がある。228・234は7世紀前半の時期に属し、これら以外は後半の時期に属する。228は古墳時代通有の杯身で内面の蓋受けは矮小化している。234は下半を欠失するが、丸底のものと考える。蓋Aは、立ち上がりの高いもので肩の稜は緩やかである。宝珠は欠失しており、壺類の蓋と考える。230は、古墳時代に通有な杯蓋である。231は口縁部下がくびれ、口縁が内弯しながら外反する器形である。232・233は小形丸底で直立する口縁を有するもので、杯に近い形態のものである。236は、厚い器壁で口縁が外反する器形である。底部を静止状態でヘラ削り調整する。8世紀代は杯B(237)、C(238・239)、鉢C(240)がある。237が8世紀前半、他は後半の時期に属する。240は底部が厚く、底面に20ヶ所の刺突がある。228・229・231・232・234・235は遺構の下層より出土し、他は中・上層からの出土である。

9世紀から10世紀の遺物としては、灰釉陶器碗(243～248)皿、A(241・242)、長頸瓶(249・250)、土師器甕(253～257)があり、特殊な遺物として香炉の蓋(251・252)がある。241～245は刷毛による灰釉の塗り掛け、246～248は灰釉の漬け掛けである。241は角高台を有するもの、242～245は高い三日月高台を有するもの、246～248は低い高台を有するものである。241・244は口縁がやや屈曲して伸びる。249・250は同一個体の可能性がある。外面に灰釉を塗り掛けしている。241は9世紀前半、242～245は9世紀後半、246～250は10世紀前半の時期に属する。これらの時期に属する土師器としては、甕E(253)・F(254・256)・G(255・257)がある。これらの甕は器壁を内外面ナデ調整するもので、全形のわかるものは検出されなかった。

甕Eは9世紀後半で、甕F・Gは10世紀代と考えられる。

97B・C区(第94・95図)

7世紀代から10世紀代および一部11世紀代の遺物が出土している。

7世紀代の遺物は、須恵器蓋A(275)・B(266～274・283～285)、杯A(258～265・281・282)、高杯(276・291)、鉢A(286・287)、壺A(278)・B(288)、題A(276)、提瓶(280)、甕A(277)がある。258～280は7世紀の前半までの時期に属し、281～288・291は後半の時期のものである。杯Aのうち258～261は体部が比較的深く、かえりの立ち上がりも高い。7世紀初頭の時期に属するものである。262～265は体部が浅くなり、かえりの立ち上がりも弱い。281・282は体部が扁平化しかえりがより低いもので、前者は前半H-50号窯式、後者はI-17号窯式の時期に属するものである。これに対応する蓋についても、7世紀初頭の蓋B(266～270)、H-50号窯式の蓋A(275)・B(271～274)、I-17号窯式の蓋B(283～285)がある。高杯の276は7世紀前半、291はI-17号窯式の時期に属する。鉢Aは7世紀後半に属し、杯に近い形態のもので、287の底部には沈線による窯印がある。壺Bはほぼ完形のもので、7世紀末あるいは8世紀初頭のI-41号窯式の時期に属するものである。題は、古墳時代に通有の丸底のもの(279)である。提瓶は、H-50号窯式の時期のものである。8世紀代の遺物については、蓋D(295)、杯D(292・293)・C(294)、盤B(296・297)、瓶B(301)、甕A(302)、題B(289・290)がある。題は8世紀前葉C-2号窯式の時期で、他は8世紀後半の時期に属する。蓋Dは、頂部に回転糸切り痕を残し、盤を上下逆転させた形態のものである。杯Bは、椀形態のもので底部回転糸切り痕を残す。杯Dは体部の立ち上がりの高い形態で、回転ヘラ削りが認められる。盤Bは、底部回転ヘラ削りが認められる。甕Aは肩より上部が遺存していて、外面は叩き目、内面はナデ調整を行っている。瓶Bは、底部の大部分が欠失しているため、底部の孔については不明である。矮小化した把手を有する。題Bは、肩部が緩やかなもの(289)と張るもの(290)がある。292～297はO-10号窯式、301はNN-32号窯式の時期に並行するものである。

9世紀代から10世紀代の遺物は、須恵器杯D(298・299)、壺A(300)、灰釉陶器碗(306・307・309・310)、皿A(303～305)、長頸瓶(311)がある。308は須恵器の椀である。須恵器杯は、いずれも薄手で口縁部がやや外反する形態である。底部回転糸切り痕を残す。298～300は、9世紀初頭IG-78号窯式の時期に属する。灰釉陶器碗は、306・307が深い体部で口縁部が強く外反する形態である。角高台を有する。309は、やや低く直線的に開く体部で低い三日月形高台を有する。306・307は灰釉塗り掛け、309は濁け掛けである。310は無釉で、口縁部に輪花を有する。308は、306・307と形態的に同一の須恵器で角高台を有する。灰釉陶器碗を模したものと考えられる。灰釉陶器皿については、303・304は低く直線的な体部で口縁部がやや屈曲してのびる形態の角高台を有するものである。305は、高い三日月形高台を有する。これらは、刷毛による灰釉塗り掛けである。長頸瓶は、口頭部を失する。303・304・306～308・311は9世紀前半K-14号窯式、305は9世紀後半K-90号窯式、309は10世紀H-72号窯式のものである。310は、11世紀代の百代寺窯式である。これらに伴う土師器が検出されている。312～317は土師器甕C類で、内外面ナデ調整、器壁に一部押圧痕を残すものである。8世紀後葉から9世紀初頭の時期に属するものと考えられる。

(2)堅穴住居

北群堅穴住居

SB11(第96図) 須恵器杯A(318・319)、壺B(320)、土師器壺A(321)、瓶(322)が検出された。杯Aは体部の低い蓋受けのかえりの退化したもので、319が著しい。320は口縁部が欠失するが、壺Bと考える。土師器壺A、瓶はいずれも外面粗いハケ目を残し、内面はハケ調整後丁寧なナデ調整を行う。321は、口縁部のみで全形は不明である。322は、底部が欠失しているが瓶と考えられる。外面に粗い縱方向のハケ調整を行うが、下部は横方向に調整を行っている。内面は横方向のハケ調整を行っているが、丁寧なナデ調整によりハケ目をほぼ消している。胴部の中央より少し下に、水平方向やや上向きの大形の把手をもつ。体部は球形に近い形態で、頸部がくびれ短く直線的に伸びる口縁部を有する。口縁部は横方向のナデ調整によりハケ目をナデ消している。把手部分は、粗いヘラ削り調整を行う。須恵器はいずれもI-17号窯式の時期に属し、これらは7世紀後半のものと考える。

SB10(第96図) 須恵器高杯(323)、鉢B(324)、土師器壺D(325)が検出された。323は、丸い体部の杯部の高杯である。鉢Aは、低い体部にやや外反する短い口縁部を有するものである。323は古墳時代後半の時期、324は7世紀前半H-50号窯式の時期であるが、325は9世紀前半の時期まで下がることから、古代の遺構と考える。

SB01(第96図) 須恵器杯D(326)、鉢B(327)が検出された。杯は8世紀後葉O-10号窯式の時期に属す。

SB05(第96図) 須恵器杯D(328)、盤A(329)が検出された。盤は、底面を回転ヘラ削りし、中央がやや突出した平坦面をなす無高台の盤である。これらは、8世紀後半O-10号窯式の時期に属す。

SB06(第96図) 須恵器杯B(330・331)、蓋C(333)、盤B(332)が検出された。杯・盤は、底面回転ヘラ削り調整が明瞭に認められる。これらは、8世紀後半NN-32号窯式からO-10号窯式の時期に属すものである。

SB08(第96図) 須恵器杯B(335)が検出された。丸い体部であるが、底面は回転ヘラ削り調整を施す。8世紀後葉NN-32号窯式の時期に属す。

SB14(第96図) 須恵器杯C(336)、蓋C(337)が検出された。いずれもO-10号窯式の時期に属すものである。

SB15(第96図) 土師器壺C(338)が検出された。8世紀後葉の時期に属すと考える。

SB16(第96図) 灰釉陶器椀(339~342・345・346)、皿A(343)・B(344)、土師器壺F(347)が検出された。339~342は、高い高台で三日月形高台のもの(339・340)がある。341のみ、灰釉塗り掛けが確認できる。345・346は低い高台で、345は無釉、346は灰釉漬け掛けである。343・344はいずれも丸い高台の皿で、灰釉漬け掛けである。344は、内面に幅の広い段部を有する。土師器壺は、肥厚した端面のなす稜がやや不明瞭であり、F類の可能性がある。339~342は9世紀後半K-90号窯式に、343・344は10世紀前半O-53号窯式に、345・346は同後半H-72号窯式の時期に属する。347は10世紀代の時期と考えられる。

南群竪穴住居

SB33(第97図) 須恵器杯B(348)・D(349～354)、蓋C(358)・D(357)、盤B(359)・C(360)・D(361)、横瓶B(364)、壺A(365)、瓶(366)、灰釉陶器碗(355・356)、皿A(362・363)、土師器壺C(367・368)が検出された。須恵器杯Bは、体部が開く形態で腰部の棱もやや弱い。杯Dは、底部回転糸切り痕を残す。354は、底部に窯印と「#」に類似した墨痕がある。口縁部は、外反しないもの(354)があるが、外反する形態が主である。蓋Cは、頂部の平坦面に回転糸切り痕を残し、中央部分は欠失している。蓋Bは、口縁端部のかえりが丸く退化した形状で、頂部を欠失しているが、宝珠を有するものと考える。359は、比較的大形の盤で、底面全体をヘラ削りしている。360は、皿の部分が単純に開き、屈曲する口縁部を有しない形態である。脚杯の盤の脚を高台にかえた形態である。361は、脚付きの盤であるが、脚を欠失している。横瓶は、体部が偏平で角張った形態で注口部などは欠失している。壺Aは、内面青海波文を部分的にナデ消す。瓶Aは、体部上半と底部の一部が出土したのみで、把手の有無および底部の孔の形状などは不明である。灰釉陶器碗は、低い角高台を有する灰釉塗り掛けのものである。皿は低い角高台を有し、灰釉塗り掛けである。口縁部がわずか屈曲して口縁が伸びる形態である。須恵器については、348・359は8世紀後葉、他は9世紀初頭の時期に属す。灰釉陶器は、9世紀前半K-14号窯式の時期に属する。これらに伴って検出された土師器壺は8世紀後半の時期のものと考える。

SB34(第97図) 須恵器蓋C(369)、盤B(370)、土師器壺B(371・372)が検出された。369は宝珠を有するものと考える。370は、高台を有する。壺Bは、口縁部が強く外反するものである。これらは8世紀中～後葉の時期に属す。

SB35(第98図) 須恵器蓋C(373)、土師器壺C(374・375)が検出された。壺Cはいずれも小形のものである。須恵器はNN-32号窯式、土師器壺は8世紀後葉の時期に属す。

SB36(第98図) 須恵器杯B(376)・C(378)・D(377・379・380)、灰釉陶器碗(381・382)、土師器壺C(384・385)・E(383)が検出された。376の底部には窯印と解読不明の墨痕がある。杯Cは小形のものである。杯Dは直線的に開く体部で口縁がわずか外反する。灰釉陶器碗は、高い三日月形の高台を有するもので、灰釉塗り掛けである。口縁が外反する。土師器壺C・Eはいずれも小形のものである。376は、8世紀後葉O-10号窯式、377・378は9世紀初頭IG-78号窯式、379～382は9世紀後半K-90号窯式の時期に属する。土師器壺は384・385が8世紀後葉、383が9世紀後半の時期に属す。

SB37(第98図) 須恵器蓋C(386)、盤B(387)が検出された。盤は、口縁の屈曲が緩やかな形態である。388は、壺Aのミニチュアである。8世紀後葉O-10号窯式の時期に属す。

SB38(第98図) 須恵器杯E(389～391)、蓋C(392)が検出された。杯Eは、静止状態で底部をヘラ削りする調整を行うもので、丸底で口縁部が若干外反する器形である。8世紀中葉NN-32号窯式に属する。

SB41(第98図) 須恵器杯B(393)、盤B(394)、蓋C(395～397)、土師器壺C(398)が検出された。393は底部回転ヘラ削り調整を明瞭に残す。395は、やや立ち上がりの高い形態である。壺Cは、口縁の外反がやや強いものである。395・396は8世紀中葉NN-32号窯式、393・394は同後葉O-10号窯式の時期に属す。土師器も同時期である。

SB42(第98図) 須恵器杯D(399・400)、蓋B(401・402)、土師器壺C(403・404)が検出された。400は口縁の外反が強く器壁が薄い。回転糸切り痕を残す。401は体部が深く、やや丸い器形である。土師器壺は、口縁の外反が強い。400は9世紀初頭IG-78号窯式、他は8世紀後葉O-10号窯式の時期に属す。

包含層出土遺物(第99図) 97E区の竪穴住居南群を検出時にSB33周辺で出土した遺物である。須恵器杯B(405・406)・D(407・408)・F(416)、蓋B(413)、壺C(417)、灰釉陶器碗(409～412)、皿A(414・415)、土師器壺C(418・419)・D(421)が検出された。405は底面全体を回転ヘラ削り調整を施す。杯Dはいずれも薄い器壁で体部が大きく開き、口縁部が外反し、灰釉陶器碗の形態に近い。杯Fは1点のみの出土である。わずかに開いて立ち上がる円筒形の器形で、底部の縁は突出する。底部は回転ヘラ削り調整を施す。壺Cは外面に叩き目、内面は横方向に連続する押圧痕を有する。丸みを帯びた胴部で頸部は大きく開き、短い口縁部は強く外反する。灰釉陶器碗は410～412が深い丸い体部で口縁が外反する形態で、409は小形で口縁の外反が弱い。いずれも低い角高台である。皿Aは、直線的に開く体部で口縁部が屈曲して伸びる。低い角高台を有する。碗・皿とともに灰釉塗り掛けである。414の底面には「万」の墨書がある。405・406・413・417は8世紀後半NN-32-O-10号窯式の時期、407・408は9世紀初頭IG-78号窯式の時期に属す。灰釉陶器は、9世紀前半K-14号窯式の時期である。土師器壺は418・419が小形のものである。8世紀後半から9世紀前半の時期に属す。

(3) 滝

97E区の竪穴住居南群に近接するSD211から、同時期の遺物が比較的まとまって出土している。

SD211(第100図) 須恵器杯C(424～427)・D(422・423)、蓋C(431・432)、蓋B(428～430)、壺A(435)、横瓶A(433)、壺B(434)、皿A(436)、土師器壺C(437～442)が検出された。杯Cは、いずれも直線的に体部が開く器形で、底面回転ヘラ削り調整である。杯Dは、いずれも底部に回転糸切り痕を残すが、422は底部縁辺を円形に静止状態でヘラ削り調整を施す。蓋Cはいずれも宝珠部分が遺存する。蓋Bは、いずれも底部のみの出土である。壺Aは、体部下半が遺存し、底部が胴径に比べ小径の器形である。横瓶は口頸部のみ遺存する。皿は体部上半のみ遺存し、底部形態と把手は不明である。土師器壺は、口縁部のみが遺存しているものが多く、全形のわかるものはない。内外面ともにナデ調整を施すが、内面に指押圧痕を明瞭に残すものがある。422・427は8世紀中葉NN-32号窯式、他は8世紀後半O-10号窯式の時期である。土師器壺は、8世紀後葉の時期と考える。

(4) 土坑

97E・F区の土坑出土のもので、遺構に伴う遺物が出土している。

97E区 SK301(第101図) 須恵器杯B(456)・C(457)・E(455)、蓋C(458・459)、土師器壺C(460)が検出された。456は、底部は平坦面をなさない。457は、体部の立ち上がりが高く深めの器形である。杯E類の455は静止状態でヘラ削り調整を行っている。土師器壺は小形のもので、内面に指押圧痕を残す。須恵器は8世紀後葉のO-10号窯式の時期に属し、土師器も同時期と考える。

97E区 SK404(第101図) 須恵器杯C(461)・E(462)が出土している。杯Cは底部全面を回転へ

ラ削り調整を施す。杯Eは、手による回転で底部のヘラ削り調整を行う。462は8世紀中葉NN-32号窯式、461は同後半O-10号窯式の時期に属す。

97F区 SK843(第101図) 須恵器杯E(463)、蓋C(464)、土師器甕C(465)が出土した。杯Eは、やや厚い器壁で半球形の器形である。底部に粗い横方向のヘラ削り調整を施す。蓋Cは、口縁部がやや矮小化した形状である。土師器甕は小形のものである。463は、8世紀中葉NN-32号窯式、464は同後半O-10号窯式の時期に属す。土師器甕は8世紀後葉の時期である。

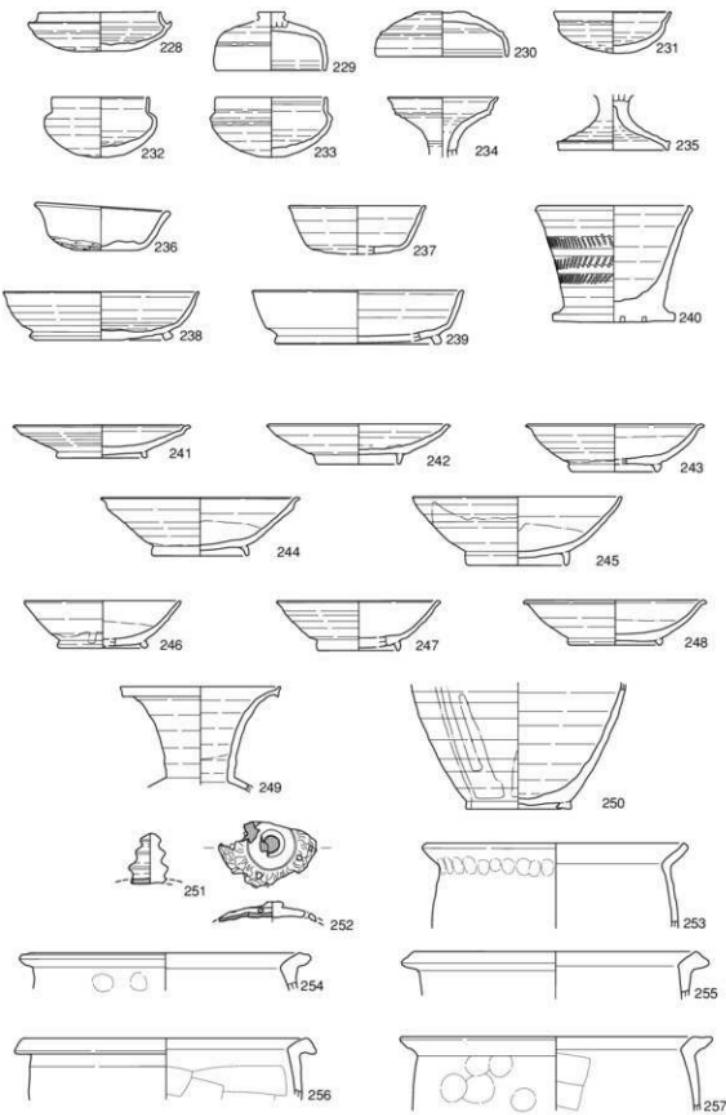
97F区 SK844(第101図) 須恵器蓋C(443)が出土している。8世紀後葉O-10号窯式の時期に属す。

97F区 SK849(第101図) 製塙土器(444~454)がまとめて検出された。土器の上半の楕の部分のみが検出され、図示できないものも含めて口縁部のみで20数点が出土している。粗砂を多量に含む胎土で若干のナデ調整が施されるが、粗い未調整に近い器壁である。直線的に開く体部で、わずか内湾あるいは外反するものがある。これらは少量伴出した須恵器より8世紀後半代と考える。

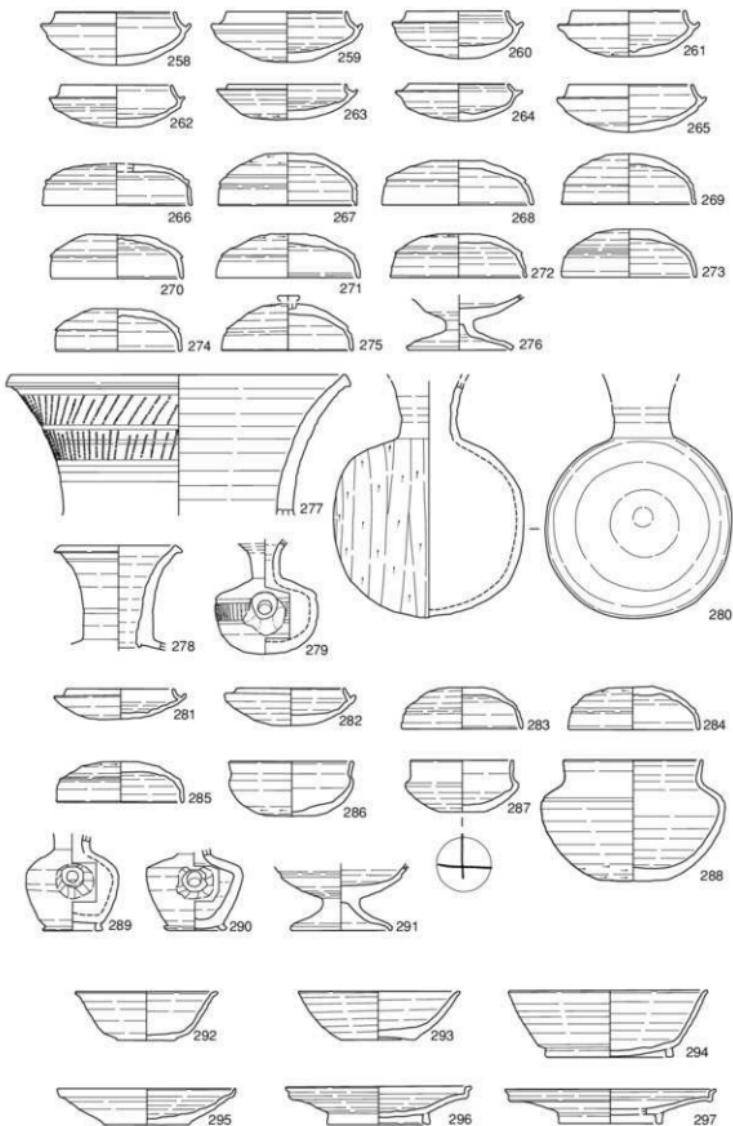
(酒井俊彦)

註

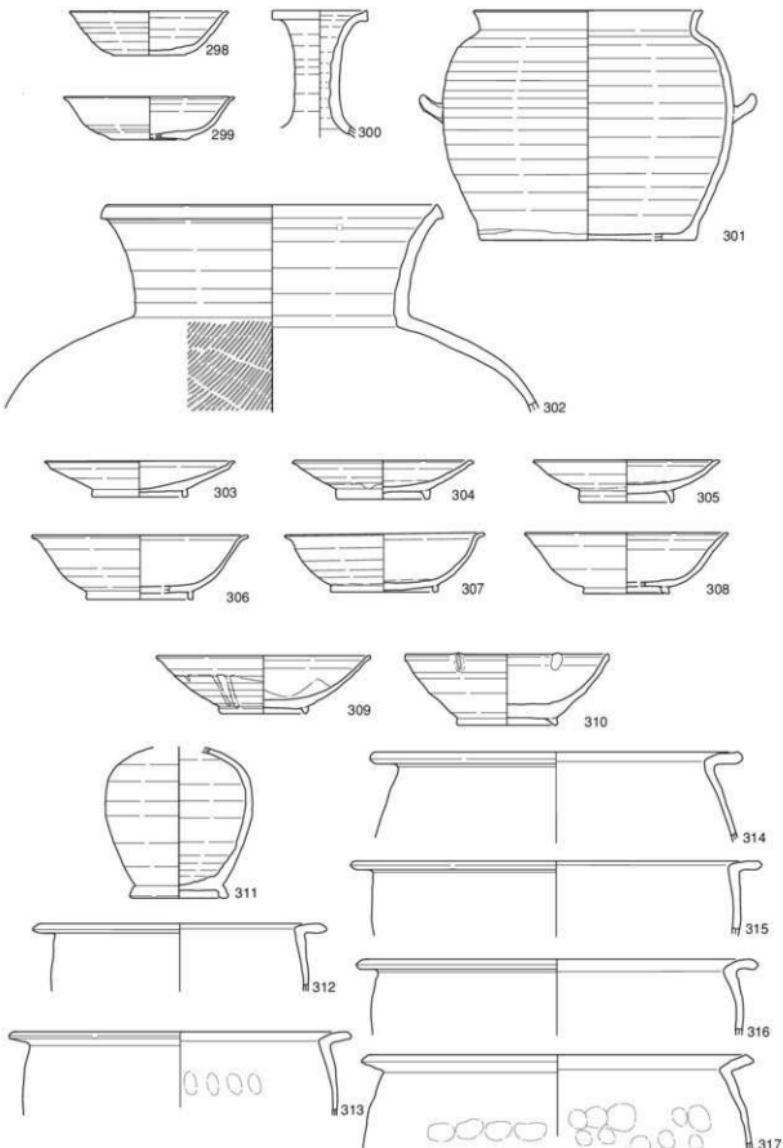
- 1)須恵器の分類・編年については、「愛知県古窯跡群分布調査報告(III)」愛知県教育委員会などに基づく。
- 2)土師器甕の分類・編年については、北村和宏「古代「三河型甕」考」「研究紀要」第3号(財)愛知県埋蔵文化財センターなどに基づく。



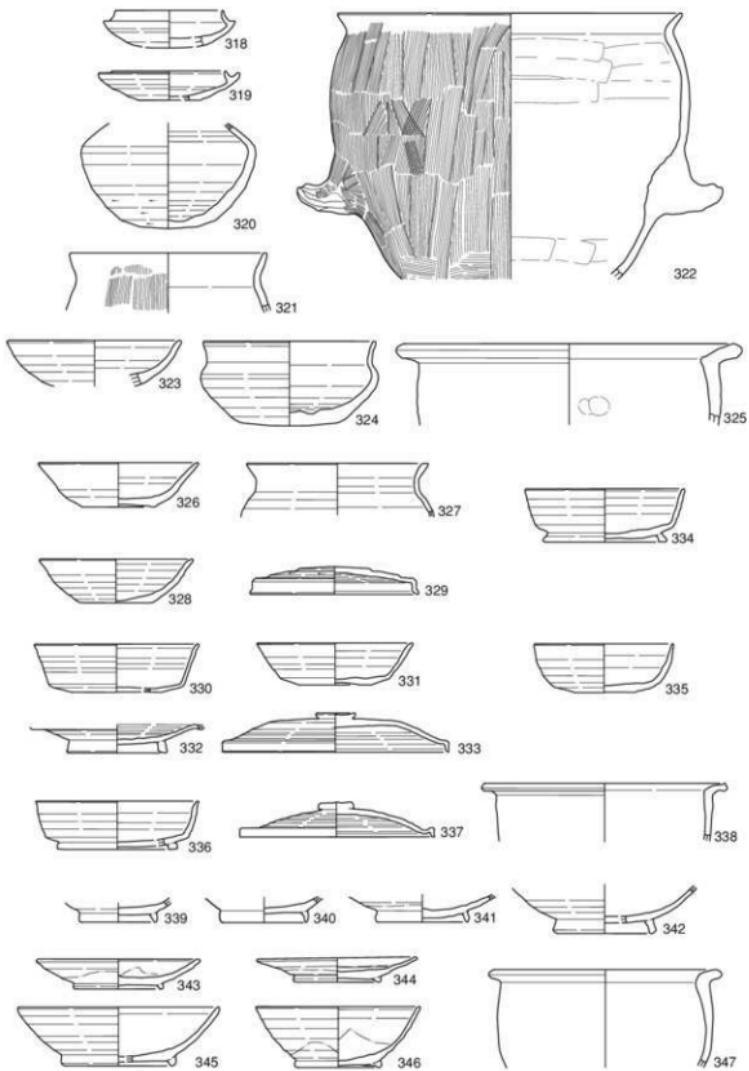
第93図 古代の遺物(1/4) (1)
SD201



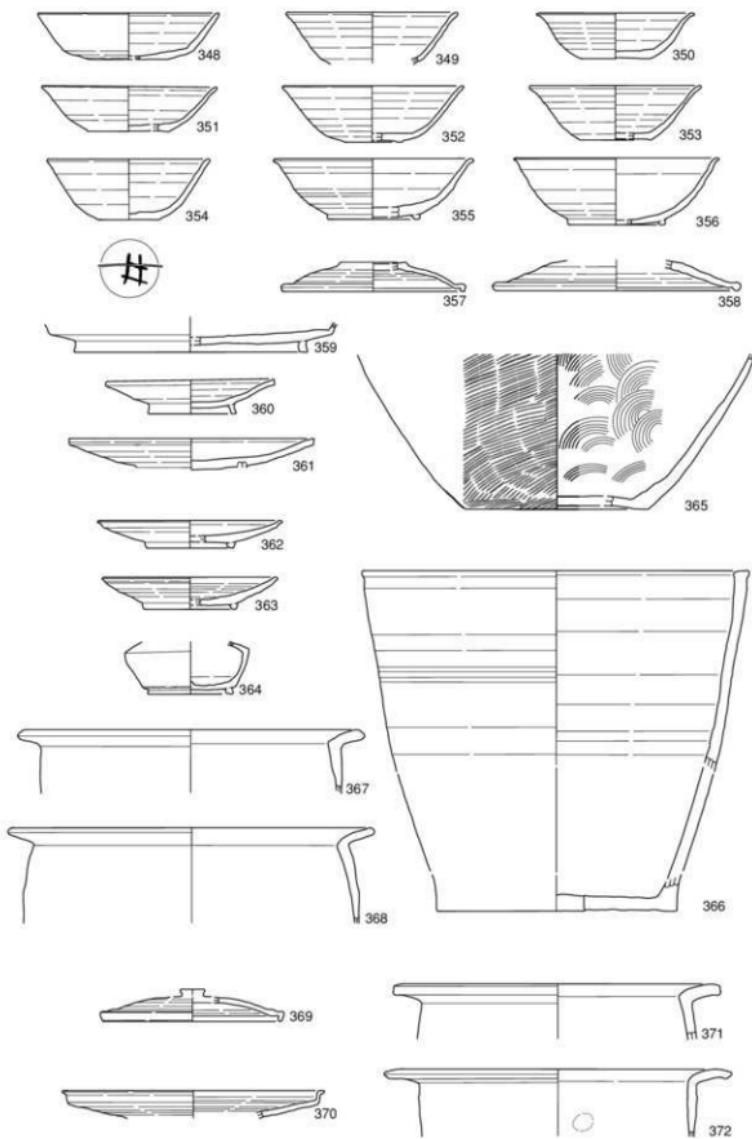
第94図 古代の遺物(1/4) (2)
SD201



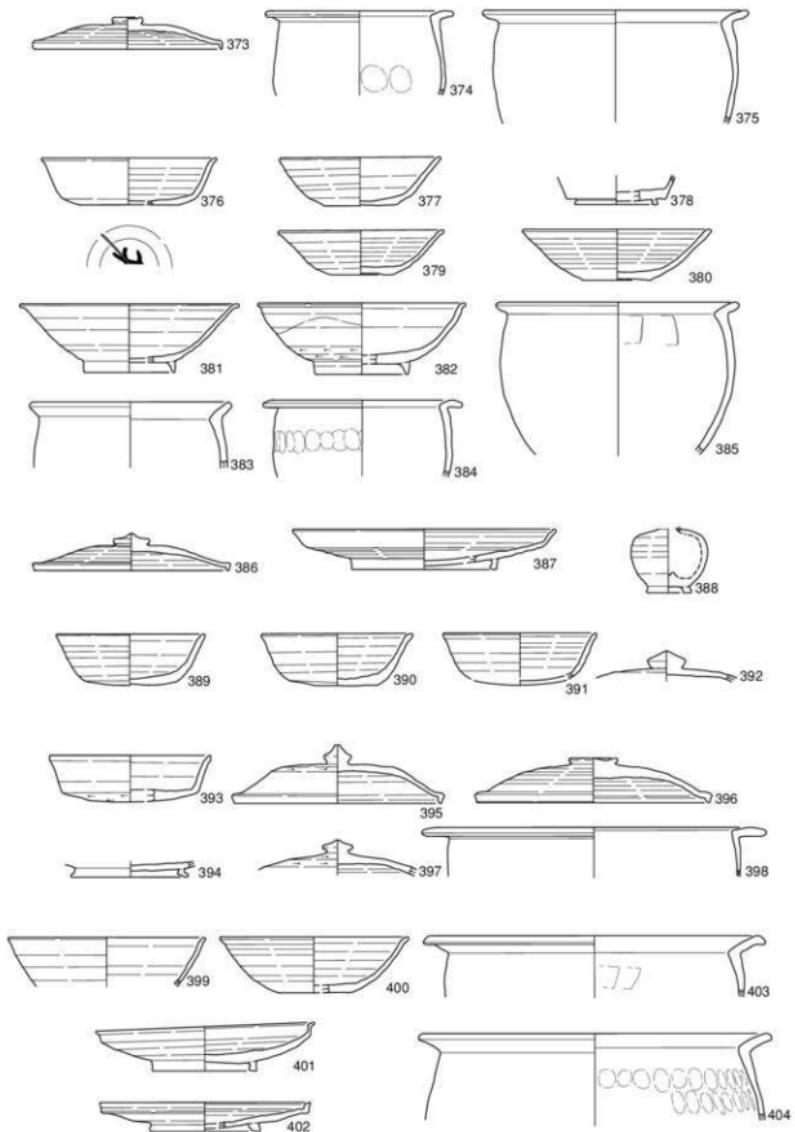
第95図 古代の遺物(1/4) (3)
SD201



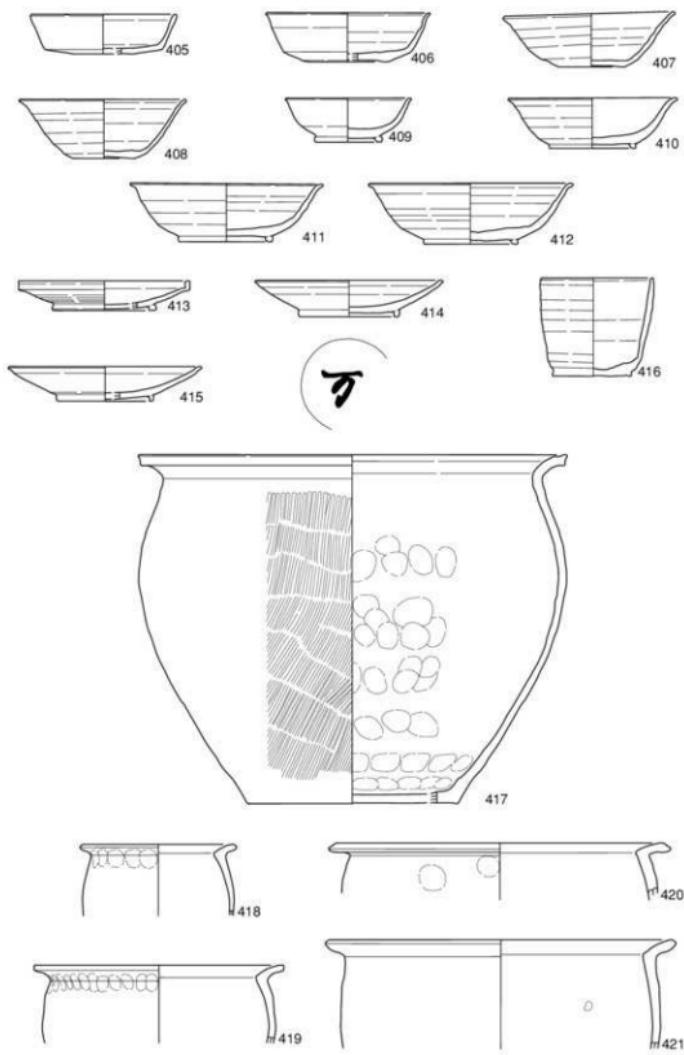
第96図 古代の遺物(1/4) (4)
SB01・05・06・08・10・11・14・15・16



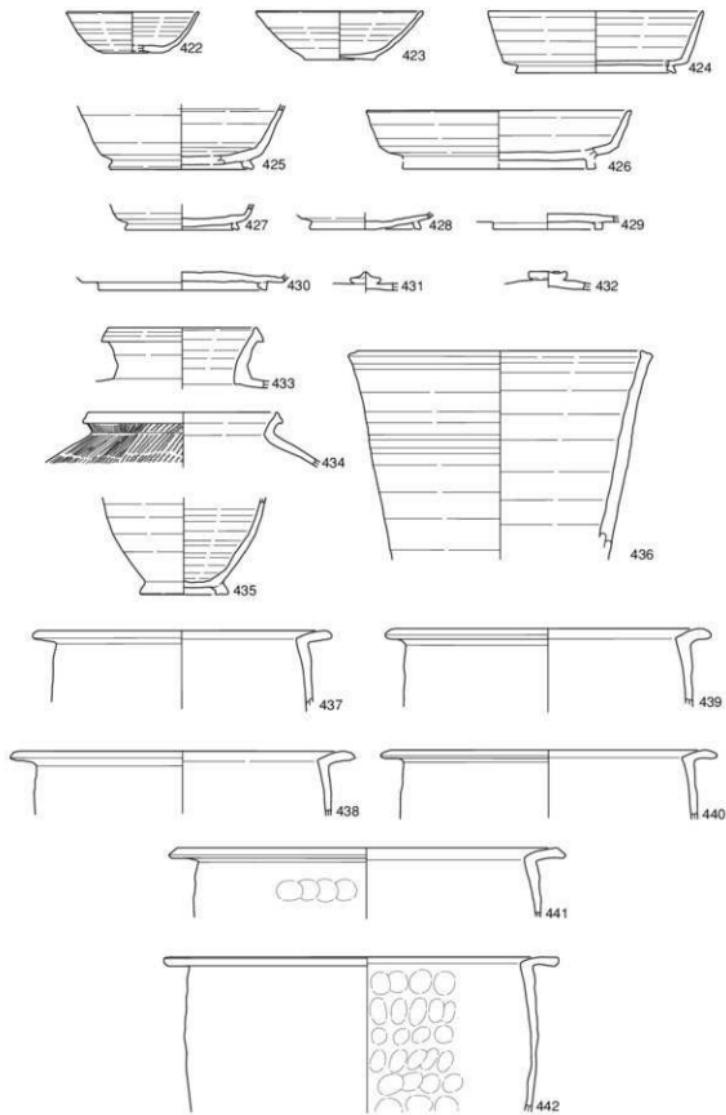
第97図 古代の遺物(1/4) (5)
SB33・34



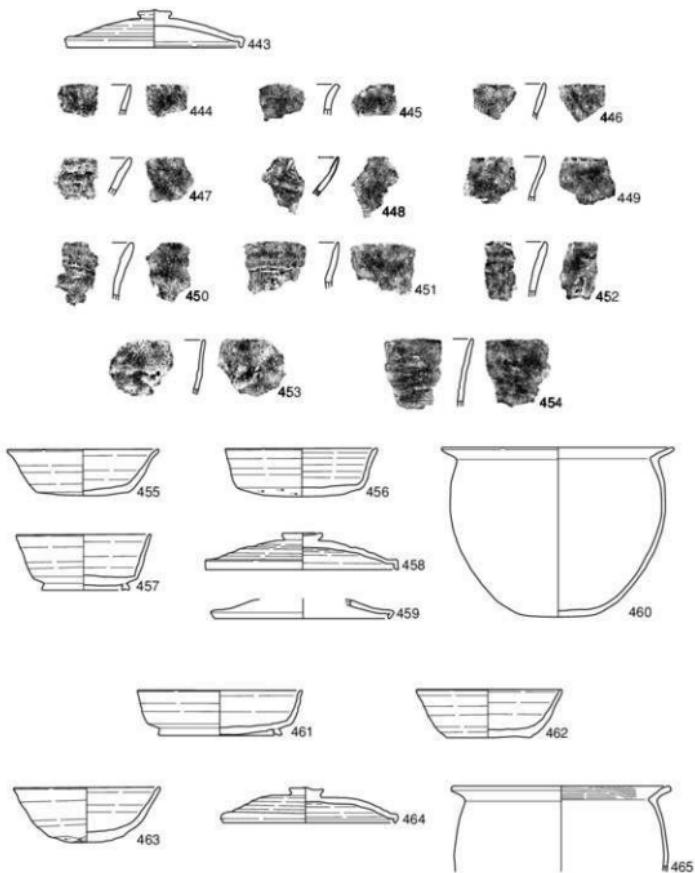
第98図 古代の遺物(1/4) (6)
SB35 ~ 38・41・42



第99図 古代の遺物(1/4) (7)
包含層出土遺物



第100図 古代の遺物(1/4) (8)
SD211



第101図 古代の遺物(1/4) (9)
97E区 SK301-404 97F区 SK843-844-849

3. 中世

ここでは12世紀から14世紀代の遺物を対象とし、出土遺物について分類を行う。註1)

灰釉系陶器

- 山茶椀 A 胎土の荒いもので高台を有するもの
B Aと同じ胎土で高台を有しないもの
C 比較的精製された胎土で、薄い器壁のもの

- 山皿 A やや内湾しながら開く器形のもの
B 直線的に開き、器高が高いもの
C 偏平な器形で、器高の低いもの

土師器

- 皿 A 鞍轆成形のもの
B 非鞍轆成形のもの
鍋 A いわゆる伊勢型鍋
B 口縁部に「羽」を有するもの

(1) 土坑

97D区 SK304(第102図) 山茶椀A(466～481)・B(482・483)、山皿C(484～507)、片口鉢(508)、常滑窯産陶器甕(509)、土師器皿A(510)・B(511～514)、鍋A(515～517)が検出された。山茶椀は、尾張南部系である。直線的に八の字に開く体部で口縁端部がやや角張り、端面をなすものが多い。山茶椀Aの高台は矮小化の進んだもので、粗痕を有する。472・478は高台が剥離している。山茶椀BはAよりやや厚手の器壁である。山皿Cは体部に棱が入り、短く偏平に開く器形のものである。口縁端部が角張り、端面をなすものが多い。片口鉢は、山茶椀・山皿と同じ胎土で砂粒を多量に含むものである。注ぎ口部分は欠失する。509は、常滑窯産の甕の口縁部である。466～472、484～495は南部系山茶椀6型式、473～481、496～502は同7型式、503～507は同7～8型式、482・483は同8型式である。片口鉢は、同6～7型式である。灰釉系陶器は、大部分瀬戸窯の製品である。509は、口縁部形態から13世紀後半の時期である。土師器皿Aは小形の低い器形で、内面中央に強い押圧痕を有する。皿Bは3種類あり、低い器形の全体が押圧痕でゆがむもの(512・513)、底面のみに押圧痕があり口縁部は横ナデ調整するもの(511)、同じ調整で薄手の体部の立ち上がるものの(514)がある。伊勢型鍋は、口縁部の屈曲がやや強いもの(516)と緩やかなもの(515・517)がある。底部近くまで残存するものでは胴下半と内面底部に削り調整が認められる。

(2) 井戸

SE22(第103図) 山茶椀A(518～524)・C(525・526)、山皿A(527・529)・B(528・530～532)・C(533～535)、片口鉢(537)、渥美窯産甕(536)、常滑窯産羽釜(538)、土師器皿(539～541)、鍋A(542)が検出された。山茶椀Aは、直線的に開く器形のものが多い。口縁部に端面をつくるものは1点のみである。山茶椀Cは、2個体のみ検出された。全形のわかる525は底径はやや小さく、丸みのある体部である。526は精良な胎土のもので、直線的に開く器形で外外面に丁寧な横ナデ調整を施す。山皿Aは、B・Cより若干口径は大きい。山皿BはCに近い器高のものがあるが、比較的器高の高いものである。536は、渥美窯産の袈裟襷文甕の肩部である。2条

の沈線を横方向に3条廻らせ、その間に同様の沈線で区画する文様を施す。537は、片口鉢である。直線的に開く体部で、下半を横方向へラ削り調整を施す。538は、羽釜の口縁部である。粗砂・細礫を含む荒い胎土である。518・519・527～532は南部系山茶椀5型式、520～524・533～535・537は同6型式、525・526は北部系山茶椀5型式である。南部系山茶椀は瀬戸窯産がほとんどである。北部系山茶椀は、東濃地域のものである。536・538は12世紀後半の時期に属す。土師器皿は、押圧痕を底部に残し、口縁部に横ナデ調整を施す。鍋Aは、内面にハケ調整痕を残す。

SE21(第103図) 山茶椀A(543)・C(544)、山皿B(546)・C(545)、渥美窯産壺(547・548)、土師器皿A(549)・B(550・551)が検出された。山茶椀Aは南部系山茶椀5～6型式の時期で瀬戸窯産である。山茶椀Cは、直線的に開く体部で胎土精良、内外面に丁寧な横ナデ調整を施す。東濃地域産のものである。山皿は、南部系山茶椀6型式の時期のものである。渥美窯産壺は、袈裟襷文壺の口縁部(547)と肩部(548)で、SE22検出のもの(536)と同一個体の可能性が大きい。土師器皿Aは、器高の低い器形で体部は短く直線的に伸びる。皿Bは、低い器形の丸い体部のもので口縁横ナデ調整を施す。

SE54(第104図) 山茶椀A(552～558)、山皿B(559・560)・C(561)、鉢(566)、常滑窯産鉢(562)、土師器皿A(563)、B(564・565)、鍋A(567・568)が検出された。山茶椀Aは、直線的に開く体部のものが多く、552・555は器高に比して開きが大きい。山皿560は焼成が不良で酸化焼成の色調を帯びる。566は片口鉢と考えられるが、注ぎ口を欠失している。やや丸い体部で口縁部がわずか外反し、胴部下半を横方向へラ削り調整を施す。559・560・566は南部系山茶椀5型式、552～557・561は同6型式、558は同7型式の時期である。553・554・558・566瀬戸窯産、他は猿投窯産である。562は暗褐色の色調で、比較的精良な胎土である。土師器皿Aは丸い体部であり、底面に糸切り痕を明瞭に残す。皿Bは、偏平で小径のものである。鍋Aは口肩部のみ遺存し、胴部の調整は不明である。

SE53(第104図) 山皿C(569～573)が検出された。南部系山茶椀6～7型式の時期で瀬戸窯あるいは猿投窯産のものと考えられる。

SE70(第104図) 山皿C(574)を検出した。南部系山茶椀7～8型式の時期である。

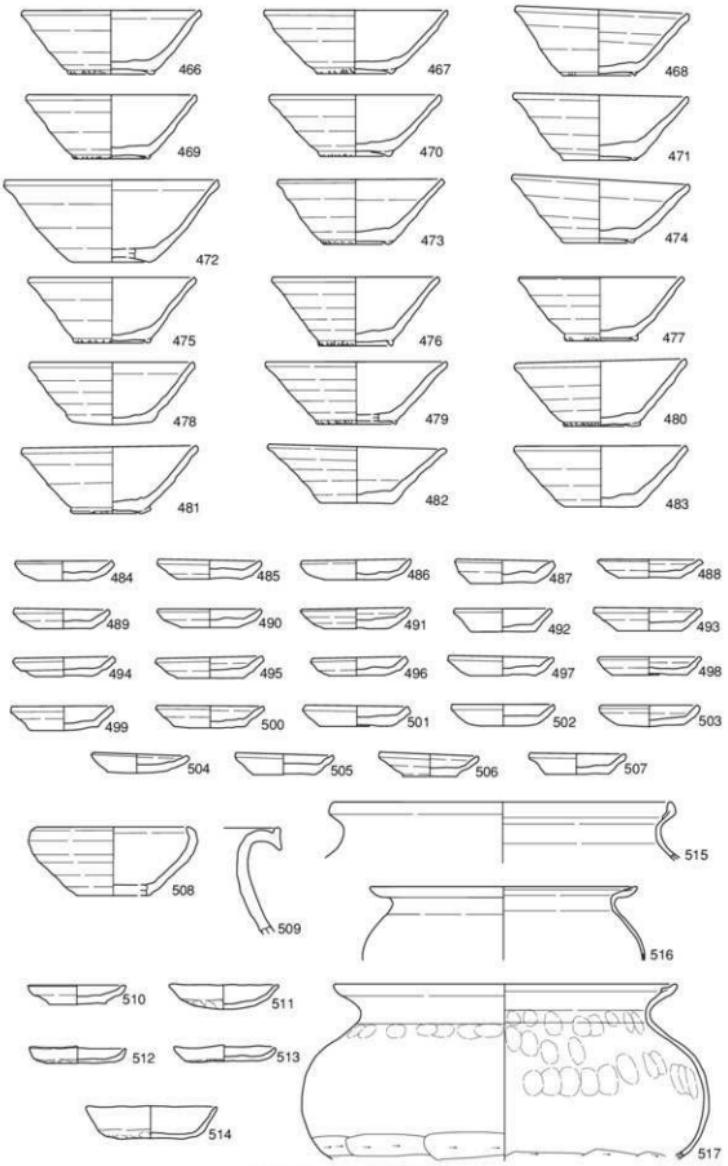
SE76(第104図) 土師器皿B(575)を検出した。体部は胴上半が大きく内傾し、口径に対して器高が低く偏平な器形である。内面は丁寧なナデ調整を施し、外面は粗いハケ調整痕を残す。器壁は薄く、焼成の硬いものである。14世紀後半から15世紀前葉の時期に属す。

SE96(第104図) 土師器皿A(578)、瀬戸窯産施釉陶器壺(583)が検出された。施釉陶器壺は、肩部2ヶ所に3条一組の沈線を廻らす。古瀬戸前III期の梅瓶である。13世紀後半の時期に属す。SE100(第104図) 山茶椀A(577・579・581)・B(576)・C(580)、山皿C(582)が検出された。山茶椀はいずれも直線的に開く体部で厚い器壁のものである。576は、高台が剥離した可能性がある。580は、薄い器壁で砂粒をほとんど含まない精良な胎土である。580は、東濃地域産で北部系山茶椀5型式である。579・581・582は南部系山茶椀6型式、576・577は同7型式の時期に属す。

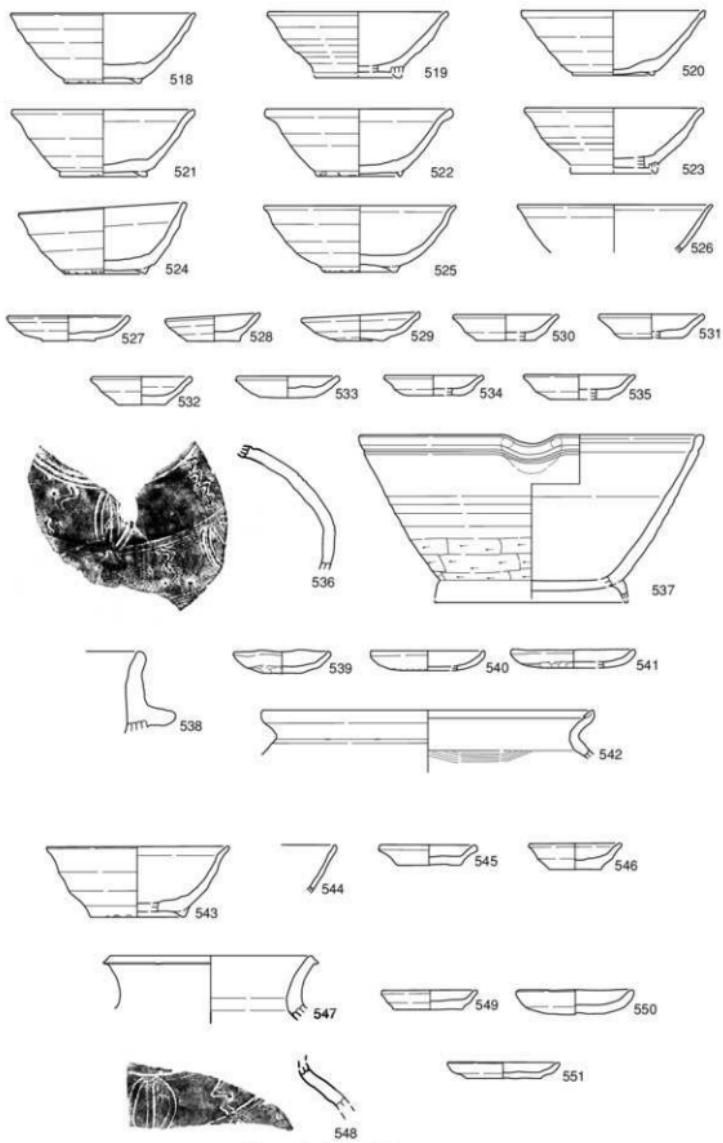
(酒井俊彦)

註

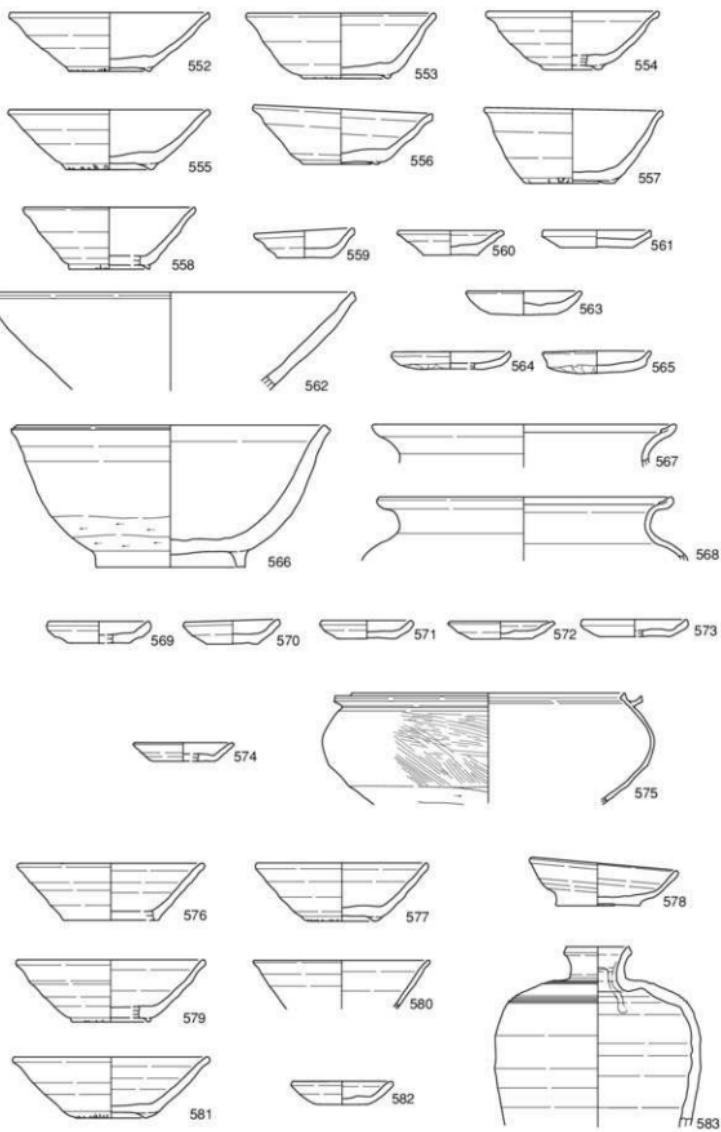
1)灰釉系陶器の山茶椀、山皿及びその他の器種については藤沢良祐氏の編年・分類に基づく。藤沢良祐「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要3』三重県埋蔵文化財センターなど。



第102図 中世の遺物(1/4) (1)
97D区 SK304



第103図 中世の遺物(1/4) (2)
SE21・22



第104図 中世の遺物(1/4) (3)
SE53・54・70・76・96・100

4. 戦国時代・近世

この時期の遺物として、15世紀から18世紀代のものをとりあげる。調査区全体より多量の遺物が検出され、時期的に幅広く、種別、器種ともに各種のものが出土している。記述の煩瑣を避けるため、主要な遺物についてあらかじめ分類を行っておく。陶器類については特定の記述がない限り瀬戸美濃窯産の陶器についての分類である。註1)・2)

陶器

椀 A 体部は内弯しつつ立ち上がる。口縁部が屈曲してたちあがる、あるいは外反するもの
(天目茶椀)

B 体部は内弯しつつ立ち上がり、丸みを帯びた器形のもの(丸椀)

C ハの字状に体部が広がるもの(平椀)

皿 A 口縁部のみに釉薬が掛かるもの(緑釉皿)

B 体部は内弯して立ち上がり丸みを帯びる器形のもの(丸皿)

C 口縁部が外反するもの(端反皿)

D 腰部が屈曲し、口縁部にかけて大きく外反するもの(腰折皿)

E 体部が直線的に開いて立ち上がり、口縁部が外反するもの(稜皿)

F 高台を有し、口縁部が外反するもの。内面に輪状の無釉部分があるもの(輪禿皿)

鉢 A 体部は大きくハの字状に開き、内面に摺り目のあるもの(摺鉢)

B 口縁部に注口を有するもの(片口)

C 体部は円筒状あるいは胴下半が膨らむ器形で、3つの脚を有するもの(香炉)

D 体部は大きくハの字状に開き、3つの脚を有するもの(直線大皿など)

E 丸く開く体部で、口縁部が屈曲するもの(黄瀬戸鉢など)

F 厚い器壁で、直線的に開く体部のもの(常滑窯産の鉢)

甕 A 短い口縁部を有する大形のもの

B 厚い器壁で、口縁部を外に折り返すもの(常滑窯産の甕)

壺 A 口径が大きく、双耳を有するもの(口広有耳壺)

B 袋状の体部で肩部に耳を有するもの(四(三)耳壺)

C 厚い器壁で口縁部を折り返して肥厚するものなどがある(常滑窯産の壺)

土師器

皿 A 輪轆による成形のもの。

B 輪轆による成形でないもの。

鍋 A 頸部がくびれ、口縁部が屈曲するもの(くの字形内耳鍋)

B 頸部がくびれ、口縁部が内弯して立ち上がるもの(内弯形内耳鍋)

C 半球形の体部のもの。半球形内耳鍋。

D 半球形の体部のもので、口縁部に「羽」を廻らす大形のもの(羽付鍋)

(1) 区画溝

遺物の大部分は、屋敷地の区画溝より出土した。区画単位で溝の遺物を記述する。

区画 01

SD001(第105～107図) 陶器椀A(584～590)、皿C(593・594)・D(591・592)・F(595)、鉢A(598)

～601)・C(596)・E(597)、土師器皿A(602～625)、鍋A(644)・B(636・637)・C(626～635)・D(638～643)・羽付釜(645)が検出された。陶器碗Aは古瀬戸末期(584)のほかは大窯第1～4段階のものである。585・588は腰錫を有する。皿Cは大窯第1段階、皿Dは古瀬戸末から大窯初期、皿Fは削り出し高台17世紀後半の時期である。鉢Aは、大窯期のもの(599・600)と17・18世紀のもの(601・598)がある。鉢Cは、古瀬戸後IV期古の筒型香炉。鉢Eは、17世紀前半黄瀬戸鉢で内面に緑色釉を流し掛ける。土師器皿は、小形で短く直線的に開く体部のもの(602)のほかは、口径10～12cmの内弯しながらハの字状に開く体部のものが多い。618は口縁部が大きく外反する。鍋Aは、底部を欠失する。底部と内面下半を削り調整を施し、外面斜方向ハケ目と内面横方向ハケ目を明瞭に残す。鍋Bは、頸部のくびれがわずかなもので、内面の稜も不明瞭である。内外面ともハケ調整を丁寧になで消す。鍋Cは、体部が(ほぼ直線的に開くもの)(635)と、口縁部が内弯するもの(635以外)がある。635は体部と底部に明瞭な棱線をもち、丸みをもちつつ直線的にハの字状に開く。一部ナデ調整で消されるが、外面に縱方向のハケ目が明瞭に残る。底部には強固な脚を有する。鍋Cは、内面上部に横方向のハケ調整痕を残すほかは調整痕をナデ消す。外面はナデ調整で、沈線を上部に廻らせるものがある。鍋Dは底部と体部の境界にわずか稜がはいり、口縁部が内傾して立ち上がる半球形の器形である。内面にハケ調整痕が残るものがあるが、口縁部以外は基本的にナデ消される。外面に縱方向のハケ調整痕を残すものがあるが、体部はナデ調整が施され、底部は横方向の削り調整が施される。羽付釜は、偏球形の体部に直立する口縁部がつく。底部の内面にハケ調整痕、外面にヘラ削り調整痕を残し、他はナデ調整で消す。土師器皿は16世紀代と考えられる。鍋は635が15世紀後半の時期に属し、他は16世紀代から17世紀初頭までの時期に属するものである。

SD002・003・004・006(第108～112図) 陶器碗A(646～651)、皿A(652)・B(653)・C(654)、鉢A(656～661)・D(655)・F(662)、甕A(665)、水指(664)、釜(663)、土師器皿A(667～680)・B(681)、鍋A(682～684)・B(689・693～698)・C(685～688・690～692)・D(699～711)、瓦質の鉢(666)が検出された。陶器碗Aは、SD004、006のもので古瀬戸末～大窯第2段階のものである。皿Aは古瀬戸IV期である。Bは基筈底で全面施釉。Cは全面施釉である。B・Cは大窯第1・2段階のものである。鉢Aは、大窯第3段階(661)のほかは古瀬戸後IV期～大窯第1段階のものである。鉢Dは、折縁深皿で内面屈曲部が突出する。底部中心に回転糸切り痕を残し、体部下半に回転ヘラ削り調整を施す。鉢Fは、直線的にハの字に開く器形で口縁部端部が角張る。甕Aは内外面施釉で口縁部を外側に折り返し、幅広の縁帯部をつくる。水指は、口縁部がくびれる形態である。釜は、内外面サビ釉を全面に施す。鉢D、甕A、釜は古瀬戸後IV期、水指は大窯第3段階である。土師器皿はSD002とSD006で主に出土する。皿Aは、小径で直線的に体部の開くものと数種の径のやや大きめのものがある。680は、底部中心に回転糸切り痕を残して周辺を静止状態でヘラ削りする。皿Bは大径の皿で、底面に板目状の圧痕を有する。鍋Aは内面上部に横方向ハケ調整痕、外面に斜方向ハケ調整痕を残す。683は、外面体部下半に横方向から底部縦方向のヘラ削り調整を行う。鍋Bは、内面ハケ調整後ナデ調整を行う。外面はナデ調整で底部は横方向のヘラ削り調整を基本とするが、698は一部斜方向に調整する。鍋Cは底部と体部の境に稜がはいって体部が開かず直線的に立ち上がるもの(686)、わずか開いて直線的に立ち上がるもの(687・691)。体部が内弯するもの(688・690・692)がある。687

は、角状の三足を有する。鍋Dは、体部の上部がわずか内弯するものを基本に、内弯が強いもの(702・707～710)、内弯しないもの(703・704)がある。内面は全面横方向ハケ調整を施した後ナデ調整を行うが、上部にハケ調整痕が残ることが多い。外面はナデ調整が主であるが、ハケ調整痕を残すもの(699)がある。705は、縦方向のハケ調整痕の深い部分が外面に残る。底部は横方向へラ削り調整である。口径40～50cmを中心であるが、30cm前後の小径のもの(700・702)がある。706は内耳を2ヶ所に有するもので、やや小径のものである。土師器皿は、15世紀後半から16世紀代前半の時期の可能性が大きい。鍋Aは、15世紀中葉の時期に属す。686は15世紀後半に属し、他の鍋類は15世紀後葉から16世紀中葉までの時期に属すと考える。瓦質の鉢は、内外面に丁寧なナデ調整を施す。全面に煤が付着し、火鉢と考える。

区画02・03

SD010・016・024(第113図) 陶器椀A(712～717)・B(716・717)、皿A(718・719)・B(721)・C(720)、土師器鍋B(724～726)・C(722)・D(727・728)、羽付釜(723)が検出された。陶器椀Aは712が古瀬戸後IV期古、713・714が大窯第2・4段階、715が17世紀後半の時期に属す。椀Bは美濃窯産で、18世紀初頭の時期に属す。716は、外面が灰釉に綠釉が掛かる。皿Aは体部が直線的に開く体部で、古瀬戸後IV期古のもの。皿Bは志野丸皿、皿Cは志野皿で、17世紀前半の時期に属す。721の底部外面の墨痕は不明である。土師器鍋Bの724は頸部のくびれが強く、短く直立する口縁部がやや強く内弯するもので類例は少ない。鍋Cは、口縁部がわずかに内弯するほん半球形のものである。羽付釜は、口縁部がほぼ直立する形態である。土師器鍋は15世紀後葉から16世紀代、土師器釜は15世紀後半の時期に属す。

区画06

SD025・028・031・032(第114図) 陶器椀A(729～731)、鉢A(736～740)・B(732)、壺A(735)、壺(733)、釜(734)、土師器皿A(743・745)・B(741・742・744)、鍋C(746)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期新から大窯第1段階の時期である。鉢Aは、古瀬戸後IV期新から大窯第2段階のものである。739は、内底面の磨耗が著しい。鉢Bは、美濃窯産で外面底部を除いて鉄釉を施す。18世紀初頭の時期である。壺Aは、外面底部を除いて鉄釉を施す。壺733は、付高台で内外面に鉄釉を体部下部まで施す。詳細な器種は不明である。土師器皿Aの745の底部には墨書がある。皿B741・742は、小径で底部に押圧痕を残し、口縁部横ナデ調整である。744も同様の調整であるが、押圧痕は明瞭ではない。鍋Cは、半球形で内弯するものである。土師器類はSD025出土のもので、16世紀代と考える。

SD030(第115～118図) 陶器椀A(747～756)・B(757・758)・C(759・760)、皿A(761～765)・B(766)・C(767)、鉢A(768～775)、壺B(781)、壺A(776～778)、筒形容器(780)、釜(779)、土師器皿A(782～792)・B(793～797)、鍋A(803)・B(804～807)・C(808～826)・D(827～831)、羽付釜(801・802)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期(747～749)、大窯第1段階(750～753)、同2段階(754・755)、同3段階(756)のものがある。754～756は内反り高台、腰銷が施される。椀B757は、外面に櫛描きによる縦方向の沈線文を施す。757は大窯第1段階、758は大窯第3段階の時期に属する。椀Cは、体部が直線的に開きながら口縁部がわずかに屈曲するもの(759)と、やや内弯気味に立ち上がるもの(760)がある。古瀬戸後IV期古の時期に属する。皿Aは、直線的に開く体部のもの(761～763)と、口縁部が外反するもの(764・765)があり、前者は古瀬

戸後IV期古、後者は大窯第1段階の時期に属する。皿B・Cは、削り出し高台である。767は、外底面を除いて灰釉を施釉する。鉢Aは、古瀬戸後IV期(768～770)、大窯第1段階(770～771・774・775)、同3段階(772・773)のものがある。壺Bは、外面上半に縦方向の削り痕が明瞭である。口縁部の形態より15世紀後半から16世紀前半の時期と考えられる。壺Aは、頸部がくびれ肩部を有するもの(776・777)と肩部が不明瞭なもの(778)がある。前者は古瀬戸後IV期、後者が大窯第1段階のものである。筒形容器はほぼ円筒形の鉄釉を施すもので、古瀬戸後IV期新の時期である。釜は全面にサビ釉を施すもので、古瀬戸後IV期古の時期に属す。土師器皿Aは小径(782～784)、中径(785～789)、大径(790～792)のものがあり、小・中径のものは直線的にハの字状に開く器形が多く、大径のものはわずかに内弯するものである。皿Bは小径もの(793・794・796)と大径のもの(795・797)があり、圧痕が明瞭に残るものと丁寧に横ナデするものがある。鍋Aは、外面に横～斜方向のハケ調整痕を残す。鍋Bは内外面ナデ調整であるが、内面にハケ調整痕を残すものがある。鍋Cは体部上半があまり内弯しないもの(808～810)は少なく、大部分は内弯する半球形の器形のもので、内弯の強いもの(822～826)もある。内面はハケ調整後にナデ調整で消すが、底部と体部の境界と体部の上半にハケ目を残すものが多い。外面は体部ナデ調整で押圧痕を残す。底部は横方向削り調整であるが、体部下半から部分的に斜方向に削り調整を行うもの(826)がある。体部中央の横方向の沈線は体部の内弯の強いものには認められない。鍋Dは、出土量は少ない。口縁部が内傾するものが多い。827は、やや小径で内面に内耳を有する。羽付釜は直立する短い口縁部のもので、縦方向の双耳を有する。土師器皿は15世紀後半から16世紀前半、鍋Aは15世紀中葉、鍋B・C・Dと釜は15世紀後葉から16世紀後葉の時期に属す。

SD029(第119図) 陶器椀A(833)・B(832・834～837)、皿B(838)・C(842・843)・F(839)、鉢A(845・847)・E(844)、向付(840)、蓋(841)、土師器鍋C(848～852)、磁器椀(846)が検出された。陶器椀Aは付高台で、連房式登窯第3小期の時期に属す。椀Bは、832・834・837が美濃窯産、835が瀬戸窯産端反椀である。832が17世紀前半、834・836が同後半、835・837が18世紀後半の時期に属す。皿Bは志野丸皿、皿Cの843は美濃窯産、皿Bは17世紀前半、皿C・Fは同後半である。鉢Aは、845は17世紀代、847は17世紀末の時期である。鉢Eは、内面に綠釉を流し掛ける。17世紀前半の時期である。向付は17世紀初頭、蓋は同中葉の時期である。鍋Cは、器高が低く体部の内弯が強い偏平な半球形の器形である。852は底部から体部が開いて立ち上がり、体部上半が強く内弯する。土師器鍋は、17世紀代の時期と考える。

区画07

SD036(第120・121図) 陶器椀A(853～856)・B(857～863)、皿B(865・866)・C(867)、鉢A(871～879)、鉢E(869)、壺B(881・882)、壺C(880)、筒形容器(864)、耳付水注(868)、建水(870)、土師器鍋C(883・884)・D(887)、羽付釜(885・886)が検出された。陶器椀Aは、16世紀末～17世紀前半(853～855)と18世紀前半のもの(856)がある。椀Bは、17世紀後半(857～860)、18世紀前半(861・862)と同後半(863)のものがある。857は、美濃窯産である。皿Bは、志野丸皿で17世紀前半(865)と同後半(866)のものがある。皿Cは、美濃窯産連房式登窯第3小期のものである。鉢Aは、古瀬戸後IV期から大窯第1段階(871・872・877)、17世紀後半(873)と18世紀前半(874～876・878・879)のものがある。鉢Eは鉄絵鉢で、内面に鉄釉流し掛けが施される。壺

Cは、17世紀代と考える。筒形椀は大窯第4段階、耳付水注は17世紀後半、建水は大窯第3段階である。土師器鍋Cは、体部上半が内弯する。鍋Dは内面口縁部端が突出して内弯する。羽付釜は口縁部が直立するもので、885はわずかに外反し、886は比較的短い。外面上半に斜方向のハケ調整痕を残す。土師器類は、16世紀後半から17世紀前半の時期に属す。

SD038(第121図) 陶器皿C(889)、小椀(891)が検出された。皿Cは、志野皿である。いずれも17世紀前半の時期に属す。

区画 08

SD041(第121図) 陶器皿B(888)、壺C(890)が検出された。皿Bは、志野丸皿で連房式登窯第1小期、壺Cは17世紀代のものと考える。

SD149(第121図) 陶器椀A(892)・B(893～897)、皿B(898)、鉢D(899)が検出された。椀Aは、17世紀後半の時期である。椀Bの896は御室茶碗、897は腰錆茶碗である。17世紀前半(893)、同後半(894)、18世紀前半(895・896)、同後半(897)の時期のものがある。皿Bは志野丸皿で、大窯第4段階である。鉢Dは、古瀬戸後IV期古の直縁大皿である。

区画 09

SD045・046・048・049・050・052(第122図) 陶器椀A(900～903)、皿A(904)・B(906・909・910)・C(905)・E(907)・F(908)、鉢A(911)、壺B(912)、土師器皿A(913～916)・B(917)、鍋C(918～923)・D(924)が検出された。陶器椀Aは大窯第1～2段階(900～902)、17世紀代のもの(903)がある。皿Aは古瀬戸後IV期新。皿B906は付高台で大窯第2段階、909・910は志野丸皿で、910は17世紀中葉、909は18世紀前半の時期である。皿Cは大窯第1段階、皿Eは同2段階、皿Fは付高台で連房式登窯第4小期である。鉢Aは、連房式登窯第4小期でサビ釉を施す。壺Bは、15世紀後半の時期と考える。土師器皿Aは小径(913・914)と大径(915・916)の2種類があり、直線的に開く形態である。皿Bは体部を横ナデ調整し、底部に押圧痕を残す。鍋Cは底部との境界に稜をもち、体部が直線的に開くもの(918)、わずかに内弯するもの(919・921)、内弯するもの(920・922・923)がある。鍋Dは、体部上半が直立する。土師器皿AはSD045のもので、大窯第1段階の時期に伴う。鍋は918が15世紀後半で、他は16世紀代から一部17世紀初頭と考える。

区画 10

SD054・059(第123図) 陶器椀A(925・926)、鉢A(929)、壺A(927・928)、土師器鍋B(930・931)・C(932～938)・D(939)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期新の時期である。鉢Aは、大窯第1段階。壺Aは古瀬戸後IV期新(927)と大窯第1段階(928)のものである。土師器鍋Cは底部との境界に稜があり、体部があまり内弯しないもの(932)、内弯が強いもの(934・937・938)がある。鍋Dは、体部上半がほぼ直立するものである。土師器鍋については、932は15世紀末から16世紀初頭、内弯が強いものは17世紀にはいる可能性があり、他は16世紀代の時期と考える。

区画 11

SD068・071・150(第124図) 陶器椀A(940)、皿A(941)、鉢A(944・945)、壺A(943)、火入れ(942)が検出された。陶器椀Aは連房式登窯第4小期、皿Aは大窯第1段階である。鉢Aは、いずれも連房式登窯第5小期で同一個体の可能性がある。壺Aは、大窯第1段階の時期である。

942は美濃窯産の火入れで、内外面に灰釉を施す。連房式登窯第7小期の時期である。

区画13

SD076(第124～127図) 陶器椀A(946～949)・B(950～953)、皿A(954～957)・B(963～967)・C(961・962)・F(968)、鉢A(977～983)・B(973)・C(971)・D(960)・F(985・985・987・988)、壺B(986)、壺A(943)・B(989)、鉢皿(958)、折縁中皿(959)、土瓶(972)、内耳鍋(974～976)、蓋(969・970)、土師器皿A(991～994)・B(990)、鍋B(997)・C(998～1010)・D(1011・1012)、羽付釜(995・996)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期(946・947)と連房式登窯第4小期(948・949)のものがある。椀B950は大窯第1段階の時期で、外面に櫛描きによる縱方向の沈線文が施される。951は美濃窯産で17世紀後半、952・953は18世紀前～中葉の時期である。皿Aは、古瀬戸後IV期(954・955)と大窯第1段階(956・957)の時期のものがある。皿Bは、志野丸皿で連房式登窯第3・4小期のものである。皿Cは、961が灰釉を施すもの、962は志野皿で17世紀前半の時期に属す。皿Fは、18世紀初頭の時期である。鉢Aは、古瀬戸後IV期(977～979)、大窯第2段階(980・981)、連房式登窯第1・5小期(983・982)のものがある。鉢Bは、17世紀後半の時期で鉄釉を施す。鉢Cは大形筒形香炉で鉄釉を施し、古瀬戸後IV期である。鉢Dは直縁大皿で、15世紀前～中葉の時期である。鉢Fは底径に比して器高の低いもので、体部は直線的にハの字状に開く。985・987は、口縁部端を丸くなれ、内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。987の内面にはヘラ状具による陰刻がある。984・988は、口縁部を強くなれて端部を角張らせる。内面はナデ調整を施すが、外面の押圧痕は明瞭に残る。壺Bは、16世紀代の時期である。壺Aは、大窯第1段階である。壺Bは、古瀬戸後IV期の時期である。鉢皿は体部の直線的に開くもので、古瀬戸後IV期古の時期である。折縁中皿は、古瀬戸後IV期古の時期である。土瓶は、内外面にサビ釉を施す。古瀬戸後IV期である。内耳鍋は内外面にサビ釉を施し、古瀬戸後IV期古(974・976)と同新(975)のものがある。蓋は土瓶あるいは釜の蓋で、古瀬戸後IV期のものである。土師器皿Aは小径で、体部が直線的に開くものである。皿Bは、押圧痕を内外面に残す。鍋Cは、体部が直線的でわずか開くもの(1000)と強く内弯するもの(1010)のほかは底部と体部の境界に稜が入り、わずかに内弯して開くものが多い。また、外面に横方向の沈線を有するものがほとんどである。鍋Dは、体部上半がほぼ直立するものである。羽付釜は、やや内傾する直線的な口縁部のものである。土師器皿・鍋は1010を除いて、15世紀後半から16世紀前半の時期に属すと考える。

SD081(第128図) 陶器皿A(1013・1014・1016)、壺B(1023)、双耳小壺(1018)、蓋(1015)、内耳鍋(1019～1022)、釜(1017)、土師器皿A(1024～1028)、鍋A(1029～1031)・C(1032・1033)が検出された。陶器皿Aの1016は縁釉挿皿で大窯第1段階、他は古瀬戸後IV期に属す。壺Bは、15世紀後半から16世紀前半の時期である。双耳小壺は、古瀬戸後IV期である。蓋は折縁皿の器形であり、内底面の摘みが剥落している。古瀬戸後IV期で内外面に鉄釉を施す。内耳鍋は、いずれも古瀬戸後IV期古の時期である。1019は、小形品である。土師器皿Aは、小径で体部が直線的に開くものと、大径でやや丸みのあるものがある。鍋Aは外面に斜方向のハケ調整痕を残すが、1029は丁寧なナデ調整で消す。鍋Cは、直線的に開く体部のものと、わずかに内弯するものがある。土師器皿・鍋は、15世紀中葉から後葉の時期に属すものと考える。

区画14

SD082・083(第129・130図) 陶器椀A(1034)・B(1035)、皿A(1040)・B(1041)・D(1036～1039)、鉢A(1046～1054)、双耳小壺(1042)、高盤(1045)、内耳鍋(1043)、釜(1044)、土師器鍋A(1055)・B(1056)・C(1059～1063)・D(1064～1067)、羽付釜(1057)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期新の時期である。椀Bは、大窯第1段階で体部に連弁文風の印花文が施される。皿Aは、古瀬戸後IV期新である。皿Bは、大窯第1段階で内底面に印花文が施される。皿Dは、古瀬戸後IV期新の時期である。鉢Aは、古瀬戸後IV期から大窯第1段階のものである。双耳小壺は、全面鉄釉を施す。内耳鍋、釜は全面サビ釉を施す。高盤は、脚部内面を除いて鉄釉を施す。これらは、古瀬戸後IV期の時期に属す。土師器鍋Aは、外面に斜方向ハケ調整痕を残す。羽付釜は、長い口縁部が直立する形態である。鍋Cは、体部が若干内弯する形態である。鍋Dは、口縁部が直立するもの(1066・1067)と内弯するもの(1064・1065)がある。1058は緩やかな肩部から短い口縁部が内傾する形態で、内外面にハケ調整痕を残す。外面は横方向の粗い調整痕である。土師器鍋は、15世紀中葉から16世紀前半までの時期に属すと考える。

区画15

SD086・087・161(第131・132図) 陶器椀A(1068～1072)、皿A(1073・1074)・B(1076)・C(1077・1078)・E(1075)、鉢A(1080～1082)・F(1083)、向付(1079)、土師器皿B(1084～1091)、鍋B(1095～1098)・C(1099～1102)・D(1092～1094)が検出された。陶器椀Aは、大窯第1段階(1068・1069)と連房式登窯第2・3小期(1070～1072)のものがある。皿Aは、大窯第1段階の時期である。皿Bは、志野丸皿連房式登窯第1小期である。皿Cは18世紀前半の志野皿で、1078は付高台で内底面に印花文を施す。皿Eは、大窯第2段階で全面鉄釉を施す。鉢Aは、古瀬戸後IV期から大窯第1段階のものである。鉢Fは口縁部端面が角張り、直線的に開く体部のものである。向付は、連房式登窯第1小期である。土師器皿Bは、底面に押圧痕を残し、体部を横方向にナデ調整する。1091は、底部に板目状の圧痕を有す。鍋Bは、内外面をナデ調整するのを基本とする。鍋Cは、体部がやや内弯するものである。鍋Dは口縁部がわずか内弯するものである。土師器類は、16世紀代の時期と考える。

区画16・17

SD088(第132～135図) 陶器椀A(1103～1108)・C(1112)、皿A(1110)・D(1109)、鉢A(1116～1123)・堺B(1124～1127)、桶(1113)、水指(1114)、花瓶(1115)、磁器椀(1111)、土師器皿A(1128～1134)・B(1135・1136)、鍋A(1137・1138)・B(1139～1142)・C(1143～1150)・D(1151～1157)、羽付釜(1158～1160)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期新から大窯第1段階の時期に属す。1108は大窯第3段階である。椀C、皿A・Dは、古瀬戸後IV期のものである。鉢Aは1120は大窯第3段階で、他は古瀬戸後IV期新から大窯第1・2段階のものである。堺Bは、15世紀後半から16世紀前半の時期である。桶は古瀬戸後IV期、水指と花瓶は大窯第3段階のものである。磁器椀は、中国製白磁椀である。土師器皿Aは、直線的に体部が開く小径のもの(1128～1132)と大径のものがある。1133は、対で2ヵ所に焼成後の穿孔がある。皿Bは底部に押圧痕を残し、体部は横ナデ調整を施す。鍋A1137は、斜方向と横方向の粗いハケ調整痕を残す。鍋Bはナデ調整を基本とし、外面底部は横方向削り調整である。鍋Cは体部上半がわずか内弯するもの(1148・1149)以外は、内弯がやや強いものである。鍋Dは、口縁部が直立するものと内弯するものがある。口径40～50cmと30cm前後のものがあり、内耳を有するもの(1151)

は後者である。羽付釜は口縁部がほぼ直立するもので、1160は体部下半に縦方向ハケ調整痕を残す。土師器皿、鍋、釜は大部分を16世紀代の時期と考える。

SD090(第136図) 陶器椀A(1161・1163)・B(1162)、皿A(1164・1165)、鉢A(1168)・D(1167)、甕B(1166)、土師器皿A(1171・1172)・B(1170)、鍋B(1179)・C(1173～1178)・D(1180)、羽付釜(1181)、瓦質の鉢(1169)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期新(1161)と大窯第2段階(1163)のものがある。椀Bは、大窯第1段階のもので灰釉を施す。皿Aは、古瀬戸後IV期新のものである。鉢Aは、古瀬戸後IV期古である。鉢Dは御目付大皿で、古瀬戸後IV期新である。土師器皿Aは、小径で直線的に体部が開くものである。皿Bは底面に押圧痕を残し、体部に横方向ナデ調整を施す。鍋Bは、胴部下半まで横方向削り調整を施す。鍋Cは、体部のやや内弯するものと内弯が強いもの(1178)がある。羽付釜は、口縁部がやや内傾する。土師器類は、15世紀末から16世紀前半の時期と考える。

区画18

SD093(第137～140図) 陶器椀A(1183)・B(1182・1184～1186)、皿A(1187・1188)・B(1190・1191・1193・1196～1199)・C(1189・1192・1194・1195)、鉢F(1204)、甕A(1202)・B(1203)、壺(1201)、匣鉢(1200)、土師器皿A(1205・1206・1209・1210)・B(1207・1208)、鍋B(1214・1215)・C(1216～1224)・D(1225～1233)、羽付釜(1211～1213)が検出された。陶器椀Aは、連房式登窯第1小期の時期である。椀Bは、大窯第1段階(1182)、17世紀後半(1184・1185)、18世初頭(1186)の時期のものである。1184は、内外面灰釉の流し掛けが行われる。皿Aは、古瀬戸後IV期の時期である。皿Bは1189が付高台で、大窯第1段階、1193・1196が大窯第3段階の内禿皿、1197～1199が18世紀前半鉄絵皿である。皿Cは、1186が大窯第1段階、1192が同3段階、1194が同4段階の志野皿、1195が18世紀前半の時期である。鉢Fは体部が直線的に開くもので、内外面に丁寧なナデ調整を施し、脚を有する。甕Aは口縁部を折り返して縁帯部をなすもので、内外面に鉄釉を施す。古瀬戸後IV期の時期に属す。甕Bは、15世紀後半から16世紀前半の時期である。壺は、古瀬戸後IV期で外底面を除いて鉄釉が施される。1200は、大窯期の匣鉢である。土師器皿Aは直線的に体部が開くもので、小径(1205・1206)と大径(1209・1210)のものがある。皿B1208は、底部に板目状圧痕を有する。鍋B1215は頸部に2条の沈線を廻らせ、内面は体部上部と底面周縁にハケ調整痕を残す。底部は横方向削り調整である。鍋Cは、やや直線的に体部の開くもの(1216～1219)のはかに内弯がやや強いものである。鍋Dは、1226がやや小径の他は口径40cm前後のものである。羽付釜は、口縁部が直線的に直立するものである。1213は、体部下半に横方向ヘラ削り調整が施される。土師器類は、16世紀代から一部17世紀前半の時期に属する。

SD094(第141・142図) 陶器鉢D(1235・1236)、鉢皿(1234)、内耳鍋(1237～1240)、土師器皿A(1241～1248)、鍋A(1251～1265)・D(1250)、羽付鍋(1249)が検出された。陶器鉢Dは1235が直線大皿で三足を有しないもので、1236は詳細な器種は不明である。鉢皿は口縁部端を内側に折り返しわざかな段を有する。鉢D、鉢皿とも古瀬戸後IV期である。内耳鍋は、古瀬戸後IV期古(1237・1239)と同新(1238・1240)のものである。土師器皿Aは、体部が直線的あるいは若干外反して開き口径12cmほどのものが多い。鍋Aは、内面はハケ調整を行った後ナデ調整を施すが、体部上部などにハケ調整痕を残すものが多い。外面は、体部上半にハケ調整痕を残す。斜

方向を基本とし、上部は横方向にもハケ調整が行われているものがある。底部は横方向へラ削りである。1258・1263は、体部下半からヘラ削り調整が施される。鍋Dは、ほぼ半球形の体部の器形で体部上半はほぼ直立する。内面にわずかハケ調整痕を残す。外面は体部はナデ調整、底部は横方向へラ削り調整を施す。1249は口縁部に羽を廻らし、体部が強く内弯する鍋である。外面に粗い横方向ハケ調整痕を残す。土師器類は、15世紀中葉から後葉の時期に属する。

SD092・095・151(第143・144図) 陶器椀A(1266～1272)、皿A(1274)・B(1275～1277・1280～1287・1289)・C(1288)・E(1278)、重圓皿(1279)、鉢A(1294～1298)・C(1290)、壺A(1291・1292)・B(1293)、山茶椀(1273)、土師器皿A(1311～1317)・B(1318・1319)、鍋B(1299・1300)・C(1301～1305)・D(1308～1310)、羽付釜(1306・1307)が検出された。陶器椀Aは、大窯第2段階(1266)、同4段階(1267・1268)、連房式登窯第1小期(1269)、同3・4小期(1270～1272)のものがある。皿Aは、大窯第1段階である。皿Bは1275・1276が削り出し高台、1277が付高台で、いずれも大窯第2段階のものである。他は連房式登窯第1～3小期の志野丸皿である。1280・1281・1289は鉄絵皿である。皿Cは志野皿で、内底面に印花文を有する。皿Eは、大窯第2段階の時期である。重圓皿は大窯第2段階の時期で、無釉で暗灰色、底面に回転糸切り痕を残す。鉢Aは、大窯第1・2段階(1295・1296)と連房式登窯第1・2小期(1294・1297・1298)のものがある。鉢Cは袴腰型香炉で、連房式登窯第5小期の時期である。壺Aは、古瀬戸後IV期古(1292)と同新(1291)のものである。壺Bは短い口縁部で、外面縱方向のヘラ削り調整である。山茶椀は大きく直線的に広がる体部のもので、北部系11型式で15世紀中葉の時期である。土師器皿Aは大径(1317)と小径のもので、体部は直線的に開く。皿Bは、底面に押圧痕を残す。鍋Cは、体部上半が内弯するものである。鍋D1310は口径が小さく、内耳を有する。羽付釜は口縁部が直立するもので、内外面にナデ調整を施す。土師器類は、16世紀後半から17世紀前半の時期に属すと考える。

区画19

SD097・098(第145～150図) 陶器椀A(1320～1334)・B(1335～1343)、浅椀(1344)、山茶椀(1346～1347)、仏龕具(1345)、皿A(1349～1353)・B(1354・1356～1358・1360～1374)・C(1359)・F(1375～1377)、折縁皿(1355)、鉢A(1393～1408)・B(1387～1389)・C(1390・1391)・E(1378・1379)・F(1412)、直縁中皿(1348)、甕B(1409・1410)、壺A(1386)、祖母懐壺(1392)、筒形容器(1384・1385)、小椀(1380・1381)、蓋(1383)、磁器小椀(1382)、土師器皿A(1418～1428)・B(1417)、鍋B(1436～1441)・C(1443～1450)・D(1451～1454)、羽付釜(1429・1430・1432・1433)、羽無釜(1431・1434・1435)、三足鉢(1413・1414)、瓦質の鉢(1415・1416)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期古(1320)・新(1321・1322)、大窯第1段階(1323・1324)・3段階(1325～1327)・4段階(1328)、連房式登窯第2小期(1329～1331)・3小期(1332)・4小期(1333)・5小期(1334)のものがある。椀Bは、連房式登窯第3・4小期(1335～1337)、同5・6小期(1338～1343)の時期がある。1336・1337は鉄釉を施し、灰釉の流し掛けである。1339は灰釉を施し、鉄釉を流し掛ける。1342・1343は御室茶椀である。浅椀は、古瀬戸後IV期古の時期である。山茶椀は、南部系山茶椀第12型式である。仏龕具は古瀬戸後IV期新で、鉄釉を施す。皿Aは、古瀬戸後IV期古(1349～1352)と大窯第1段階(1353)がある。1350は、鉄釉を施す。皿B1354は付高台で、大窯第3段階である。1356～1358・1360・1365～1367・1371～1374は、志野丸皿であ

る。1361～1364・1368～1370は、鉄絵皿である。連房式登窯第1小期(1356～1364)、同2小期(1365～1371)、同3小期(1372～1374)がある。皿Cは、志野で連房式登窯第1小期の時期である。皿Fは、連房式登窯第3～5小期のものである。折縁皿は、大窯第4段階である。鉢Aは、古瀬戸後IV期～大窯第1段階(1393～1395・1397・1399～1401)、大窯第1・2段階(1398・1402・1403)、同3段階(1396)、連房式登窯第3・4小期(1406・1404)、同6小期(1405・1407)、同8小期(1408)のものがある。1394は、内面上部に横方向の摺り目を有する。鉢Bは、連房式登窯第3・4小期(1387・1388)と同5小期のものがあり、いずれも鉄釉が施される。鉢Cは、1390が連房式登窯第3・4小期の筒形香炉、1391が同4小期の袴腰形香炉である。鉢Eは、1378が連房式登窯第2小期の黄瀬戸鉢、1379が同5小期の鉄絵鉢である。1378は、縁釉と鉄釉による流し掛けが施される。鉢Fは直線的に体部が開く器形で、口縁部端部をなでて丸くする。直縁中皿は、古瀬戸後IV期古の時期である。甕Bは、15世紀代のものである。壺Aは、大窯第3段階の時期である。祖母懐壺は、古瀬戸後IV期である。筒形容器は、古瀬戸後IV期古(1384)と大窯第3段階(1385)のものである。小壺1380は小天目茶碗で、大窯第1段階の時期である。1381は丸壺で、長石釉が施される。蓋は合子の蓋で、古瀬戸後IV期である。磁器小壺は肥前産で、17世紀代の時期である。土師器皿Aは、短い口縁部の小径のもの(1418・1419)のほか、小径(1420・1421)、中径(1422～1425)、大径(1426～1428)のものがあり、わずか外反するか直線的に体部が開くものが多い。皿Bは、外面に押圧痕を残す。鍋B1437・1438は頭部のくびれが緩やかで、1438は口縁部が長いものである。1442は口縁部が内弯するもので、口縁部端部外面が強くなられる。鍋Cは、体部が強く内弯するものが多い。鍋Dは、口縁部がやや内弯するものと、内弯が強いもの(1453・1454)がある。1455～1457は内耳を有するもので、1456・1457は羽が口縁部の上部に付けられる。羽付釜は、口縁部が直立するものとやや内傾するものがある。羽無釜は、口縁部が短く耳が口縁部に平行に付くものである。三足鉢は、口縁部がくの字に外反するものである。内面はハケ調整の後ナデ調整が施され、外面はナデ調整で底部は横方向へラ削り調整が施される。瓦質の鉢は、内弯する丸い体部のもの(1415)と体部が直線的に立ち上がるもの(1416)がある。1415の口唇部には印花文が施される。土師器類及び瓦質の土器は大部分16世紀から17世紀代のもので、18世紀代のものを若干含むと考えられる。

SD098(第150図) 土師器羽付釜(1459)が検出された。16世紀代の時期に属すと考える。

区画20

SD100・101・102・106・152・163(第151図) 陶器椀A(1460・1461・1463)・B(1462・1464)、皿B(1465・1466)・C(1469)・E(1467)、折縁皿(1468・1470)、鉢A(1473～1475)・C(1472)、練り鉢(1471)、土師器皿A(1476～1482)、鍋C(1483)・D(1484)が検出された。陶器椀Aは、いずれも大窯第3段階の時期のものである。椀Bの1462は小壺で、連房式登窯第5・6小期、1464は同3・4小期である。皿Bは大窯第3段階で、1466が内壳皿である。皿Cは、連房式登窯第1小期の志野皿である。皿Eは、大窯第3段階の時期である。折縁皿は、大窯第3段階(1468)と連房式登窯第1・2小期(1470)のものである。鉢Aは、古瀬戸末から大窯第1段階(1473)、大窯第3段階(1474)、連房式登窯第5小期(1475)の時期のものがある。鉢Cは、連房式登窯第8小期の袴腰形香炉である。練り鉢は、18世紀後半の時期である。土師器皿Aは口径に3種あり、直線的に開く体部のものが多い。鍋Cは、体部が内弯するものである。鍋Dは、「羽」

が矮小化したもので偏平化した器形のものである。土師器類は、鍋Dは17世紀後半から18世紀代のもので、他は16世紀後半から17世紀前半の時期のものと考える。

区画 21

SD100(第152～154図) 陶器椀A(1485～1488・1494)・B(1489～1493・1495～1500)、山茶椀(1501)、皿B(1502・1505・1507・1508)・C(1503・1504)、折縁皿(1506)、鉢A(1516～1520)・B(1510・1512・1513)・C(1515)・F(1521・1522)、練り鉢(1509)、甕A(1511)・B(1523)、汁注ぎ(1514)、磁器椀(1524・1525)、皿(1526・1527)、土師器皿A(1541～1563)・B(1564)、鍋B(1531～1533)・C(1534～1536)・D(1537～1540)、羽付釜(1530)、三足鉢(1528・1529)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期古(1485)、大窯第4段階(1486)、連房式登窯第3小窓(1487・1488)・5小窓(1494)の時期のものがある。椀Bは、連房式登窯第3・4小窓(1489～1492)・5小窓(1493)・6小窓(1495・1496)・8小窓(1497～1500)のものがある。1493は、摺絵碗である。1496～1500は、腰錆茶碗である。山茶椀は、北部系山茶椀第11型式で15世紀中葉の時期である。皿Bは、1502が大窯第2段階、1505が17世紀前半志野丸皿、1507が連房式登窯第3小窓鉄絵皿、1508が同6小窓摺絵皿である。折縁皿は、連房式登窯第2小窓である。鉢Aは、古瀬戸後IV期(1516・1517)、大窯第1段階(1519)、連房式登窯第1・5小窓(1518・1520)の時期のものがある。鉢Bは、連房式登窯第6小窓(1510・1512)・8小窓(1513)がある。1510は瀬戸窯産で、鉄釉を施す。鉢Cは、筒形香炉で連房式登窯第6小窓である。鉢Fは、1521は口縁部をなでて丸くし、直線的に開く体部のものである。1522は、小径で体部が内弯する。練り鉢は、連房式登窯第8小窓のものである。甕Aは、外底面を除いて鉄釉を施す。甕Bは、15世紀後半から16世紀前半の時期である。汁注ぎは、18世紀後半の時期で灰釉を施す。磁器椀は、1524が肥前窯産小椀、1525が瀬戸窯産小杯である。磁器皿は、1526が瀬戸窯産、1527が肥前窯産である。磁器類は18～19世紀のものである。土師器皿Aは小径(1541～1552)と大径(1552～1563)のものがある。大径のものは器高の低いもの(1552・1553)がある。皿Bは底面に押圧痕を残し、体部に横ナデ調整を施す。鍋Bは、内面上部にハケ調整痕を残す。鍋Cは、体部がやや内弯するものである。鍋Dは、1539・1540が「羽」が矮小化したものである。羽付釜は、口縁部がほぼ直立する。三足鉢は、1528が小径で体部の開きが大きく、口縁部の屈曲が緩やかである。土師器類は鍋Dの1539・1540が18世紀代で、他は16世紀から17世紀代のものと考える。

SD102・164(第155図) 陶器椀B(1565)、皿B(1566)、鉢A(1567)、土師器皿A(1569～1596)・B(1597)、瓦質の鉢(1568)が検出された。陶器椀Bは、連房式登窯第8小窓である。皿Bは、志野丸皿で大窯第4段階の時期である。鉢Aは、連房式登窯第1小窓である。土師器皿Aは、小径(1569～1579・1587～1593)と大径(1580～1586・1594～1596)のものがある。いずれも体部が直線的かやや外反する器形のものが多い。皿Bは底部に押圧痕を残し、体部が外反して開くものである。瓦質の鉢は体部が強く内弯し、火鉢と考える。

区画 22

SD100(第156・157図) 陶器椀A(1598～1604)・B(1605～1609)、皿A(1610)・B(1611)・E(1612)・F(1613)、鉢A(1618～1623)・C(1615・1616)・F(1624)、甕B(1625)、壺A(1617)・C(1626)、向付(1614)、土師器皿A(1627～1648)・B(1649～1651)、鍋C(1652～1657)・D(1657・1658)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期(1598～1601)、大窯第3・4段階(1603・1604)と連房式登

窯第3小期(1615)の時期のものである。椀Bは、連房式登窯第1・2小期(1605)、同3・4小期(1606)、同5・6小期(1607～1609)の時期のものである。1608は腰錫茶碗、1609は御室茶椀である。皿Aは、古瀬戸後IV期古の時期である。皿Bは、志野丸皿で連房式登窯第2小期である。皿Eは、大窯第3段階の時期である。皿Fは、連房式登窯第5小期である。鉢Aは、大窯第1・3段階(1618・1619)と連房式登窯第5～7小期(1620～1623)のものがある。鉢Cは、連房式登窯第5・8小期(1615・1616)の時期である。鉢Fは口縁部端部を丸くなれて、体部が直線的に開く器形である。壺Bは、16世紀代のものである。壺Aは、古瀬戸後IV期古の時期である。壺Cは、小形で外面に縱方向の削り調整痕を有する。向付は、大窯第4段階のものである。土師器皿Aは、小径(1627～1635)と大径(1636～1648)のものがあり、後者は体部が内弯するものと直線的に開くもの(1647・1648)がある。皿B1657は底部に板目状の圧痕を有する。鍋Bは体部が内弯するもので、1656は浅い偏球形の体部である。鍋D1658は口縁部が内傾するもので、1657は矮小化した「羽」を有する。土師器類は、16世紀後半から18世紀代のものと考える。

区画23

SD109・111(第158図) 陶器椀A(1659～1661)・B(1662～1665)、鉢B(1666)、鬢盟(1667)、磁器椀(1668～1670)、土師器鍋D(1671・1672)が検出された。陶器椀Aは、連房式登窯第2小期(1659)、4小期(1660・1661)である。椀Bは、連房式登窯第3小期(1663)と同5～7小期(1662・1664・1665)の時期である。鉢Bは、連房式登窯第6小期である。鬢盟は、連房式登窯第5小期である。磁器椀は1668が小椀で、いずれも肥前窯産18世紀代のものである。土師器鍋Dはいずれも「羽」が矮小化したもので、18世紀代のものと考える。

区画24

SD113・115(第158図) 陶器椀A(1673・1674)・B(1675～1677)、皿B(1678)、黄瀬戸盤(1679)、鉢A(1680)、壺B(1681)、土師器皿A(1682・1683)・B(1684)、鍋B(1686)・C(1687・1688)、羽付釜(1685)が検出された。陶器椀Aは、大窯第2段階(1673)と連房式登窯第2小期(1674)である。椀Bは、1675が腰錫茶碗、1676が尾呂茶碗、1677が御室茶椀で、いずれも連房式登窯第7小期である。皿Bは、大窯第3段階鉄絵皿である。黄瀬戸盤は、連房式登窯第1・2小期である。鉢Aは、連房式登窯第6小期である。壺Bは、15世紀代のものと考える。土師器皿Aは、体部が直線的に開くものと口縁部が内弯するものがある。鍋C1687は、体部上半が内弯する。羽付釜は、口縁部がやや短いものである。土師器類は、16世紀後半から17世紀代のものと考える。

区画25

SD117・118・119・120(第159図) 陶器椀A(1695)、皿A(1696・1698)・B(1697・1698)、鉢A(1689～1693)、壺B(1700)、双耳小壺(1694)、土師器鍋B(1701)・C(1703～1706)・D(1708)、羽付釜(1707)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期の時期である。皿Aは、いずれも古瀬戸後IV期新の時期である。皿Bは、1697が大窯第1段階で付高台、内底面に印花文を有する。1699は、大窯第4段階の鉄絵皿である。鉢Aは、古瀬戸後IV期新(1689・1691・1693)、大窯第2・3段階(1690)、連房式登窯第4小期(1692)の時期のものがある。壺Bは、16世紀代のものである。双耳小壺は、大窯第3段階の時期である。鍋Bは、口縁部外側端部をなでる。鍋Cは、体部上半の内弯が弱いものである。鍋Dは、口縁部がほぼ直立する。羽付釜は口縁部が長く、直立するものである。

区画 26

SD125・162(第160・161図) 陶器椀A(1709～1710)・B(1711～1714)、皿A(1716)・B(1717～1718)・F(1719)、梅文皿(1715)、鉢A(1722)・B(1721)・E(1720)、甕B(1723)、土師器皿A(1724)、鍋B(1735～1736)・C(1728～1734・1737)・D(1738～1740)、羽付釜(1725～1727)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期新(1709)、大窯第1段階(1710)の時期である。椀Bは、1711～1713が連房式登窯第1・2小期、1713が同7小期の腰錆茶碗である。皿Aの器形は皿Dであり、梅文皿は18世紀後半の時期である。鉢Aは連房式登窯第7小期、鉢Bは連房式登窯第1・2小期の時期である。鉢Eは鉄絵鉢で、連房式登窯第3・4小期である。土師器皿Aは、小径で焼成後の穿孔を有する。鍋Cは、1728～1730は体部上半がやや内弯するもので、1731は口唇を強くなで口縁部端部内側に張り出す。1731は、内弯の強いものである。1733・1734は、偏平な器形で焰格である。鍋D1738・1740は「羽」が矮小化しており、1738もやや短く退化したものである。羽付釜は、口縁部が直立するものである。土師器類は鍋C1728～1730、羽付釜などが15世紀後半から16世紀前半の時期で、他は17世紀から18世紀代と考える。

SD128(第162・163図) 陶器椀A(1742～1744)・B(1741)、皿A(1745～1748)・C(1751)・皿D(1746・1747・1749)・E(1752)、灯明皿(1750)、鉢A(1755～1757)、壺A(1753)、仏龕具(1754)、土師器皿A(1758～1761)、鍋B(1765～1767)・C(1768～1775)・D(1762～1764)が検出された。陶器椀Aは、古瀬戸後IV期新(1742・1743)と連房式登窯第2小期(1744)の時期である。椀Bは大窯第1段階である。皿Aは古瀬戸後IV期新、皿Cは大窯第1段階、皿Dは古瀬戸後IV期新、皿Eは大窯第3段階である。灯明皿は無釉で、内面と外底面に煤が付着する。大窯第1段階である。鉢Aは、古瀬戸後IV期新(1755・1756)と大窯第2段階(1757)の時期のものがある。壺Aは、大窯第1段階である。仏龕具は、大窯第1段階で全面サビ釉を施釉する。土師器皿Aは、小径と大径のものがある。鍋C1769は、体部が内弯せずほぼ直線的に開く。その他は内弯するものでやや内弯の強いものがある。鍋Dは、口径約40cmで口縁部が直立する。土師器類は、15世紀後半から16世紀代を中心に、鍋Cの一部が17世紀代の可能性がある。

SD126・129(第164・165図) 陶器椀A(1776～1778)・B(1779)・C(1782)、皿A(1780)・D(1781)、鉢A(1789～1794)、甕B(1786～1788)、蓋(1784)、桶(1785)、山茶椀(1783)、土師器鍋C(1796～1805)・D(1806～1810)、羽付釜(1801)が検出された。陶器椀Aは大窯第1段階、椀Bは大窯第5・6小期の時期である。椀Cは体部がわずか内弯して開くもので、古瀬戸後IV期古の時期である。皿Aは古瀬戸後IV期古、皿Dは同IV期新の時期である。鉢Aは、古瀬戸後IV期新と大窯第1段階のものである。甕Bは、15世紀後半から16世紀前半の時期に属すと考える。蓋は、内面の摘みが剥落している。古瀬戸後IV期で全面サビ釉を施す。桶は、付高台で古瀬戸後IV期である。山茶椀は体部が内弯して開く器形で、北部系山茶椀第12型式である。土師器鍋Cは、体部が直線的に開くもの(1802・1803)とやや内弯するものがある。鍋Dは、体部上半がやや内弯する。羽付釜は、口縁部が長くほぼ直立する。土師器類は、15世紀後半から16世紀代のものと考える。

区画 29

SD141(第166～171図) 陶器椀A(1811)・B(1812・1813)・C(1815～1817)、皿A(1818～1820)・D(1821～1823)・E(1824)、仏龕具(1814)、鉢A(1829～1832)・C(1825)・F(1833)、甕B(1834・1836)、

壺B(1828)・C(1835)、桶(1826)、内耳鍋(1827)、瓦質の鉢(1837)、土師器皿A(1838～1857)・B(1858)、鍋A(1862)・B(1863)・C(1864～1876)・D(1877～1891)、羽付釜(1859～1861)が検出された。陶器椀A・Bは、大窯第1段階の時期である。皿Aは、古瀬戸後IV期古(1818・1819)と大窯第1段階(1820)がある。皿Dは、古瀬戸後IV期新のものである。皿Eは、稜花皿で全面灰釉を施す。内底面には印花文を有する。仏龕具は、サビ釉を施すもので鉢状の浅い椀の形態である。古瀬戸後IV期の時期である。鉢Aは、古瀬戸後IV期から大窯第1段階の時期である。1813は、内面の磨耗が著しい。鉢Cは、袴腰形香炉である。器高の低い器形で、三足は粗雑なつくりである。古瀬戸後IV期古で鉄釉を施す。鉢Fは直線的に大きく開く体部のもので、口縁部端部は角張る。内面はナデ調整で磨耗する。甕B1836は、口縁部の形態より14世紀後半から15世紀前半のものと考える。壺Bは、古瀬戸後IV期の時期である。壺Cは小形の壺で、15世紀前半の時期と考える。桶は古瀬戸後IV期、内耳鍋は同IV期古の時期である。瓦質の鉢は直立する装飾のある口縁部を有するもので、体部に透かしがはいる。土師器皿Aは、口径によって3種に別れる。皿Bは底面に押圧痕を残し、体部を横方向にナデ調整する。鍋Aは、外面粗いハケ調整を施す。鍋Bは、内面上部にハケ調整痕を残す。鍋C1864は、体部が直線的に開き、内面にも沈線を1条廻らす。1865～1876は、体部が内弯するものである。鍋Dは、口径30cm前後の小径のもの(1877～1880)と同40cmを越えるものがあり、口縁部が若干内弯するものが多い。小形のものには体部の内弯が強いものがある。1877・1878・1880は内耳を有し、1877は3ヶ所にあるものと考える。1879は、口縁部が長い形態で内耳を有する可能性がある。外面はナデ調整で押圧痕を残し、底部は横方向削り調整である。1888・1891は、外面に縱方向のハケ調整痕を残す。内面は横方向ハケ調整の後ナデ調整を施すが、上部にハケ調整痕を残すものが多い。羽付釜は口縁部が直立するもので、口縁部のやや短いもの(1860)がある。土師器類は、15世紀後半から16世紀前半に属するものと考える。

SD139・142(第172図) 陶器皿A(1892)・B(1895)、甕B(1896)、土師器皿A(1897～1907)、鍋A(1909)・C(1910～1914)、羽付釜(1908)が検出された。陶器皿A・Dは、古瀬戸後IV期新の時期である。壺Bは、15世紀後半の時期と考える。土師器皿Aは、小径のもので体部が直線的に開くものである。鍋Bは、胴部に斜方向から横方向のハケ調整を施してナデ調整を行う。また、口唇部に強い横方向のナデ調整を施し、鍋Aと共に成形技法を行っている。鍋D1887は内耳を有し、小径で口縁部が長く内弯するものである。羽付釜は、口縁部がほぼ直立するものである。土師器類は、15世紀後葉から16世紀前半のものである。

区画31・32

SD146・147(第173図) 陶器椀A(1915)・C(1916)、双耳小壺(1917)、桶(1918・1919)、土師器皿A(1920～1925・1927・1928)・B(1926)、鍋(1929)が検出された。陶器椀Aは古瀬戸後IV期新、椀Cは同古である。双耳小壺は、15世紀前～中葉の時期のものである。桶は、1918が古瀬戸後IV期、1919が大窯第1段階である。土師器皿Aは、小径(1920～1924)と大径のものがある。鍋Dは、口縁部が直立する形態である。土師器類は、15世紀後半から16世紀前半の時期に属すと考える。

(2)井戸

SE07(第174図) 陶器鉢C(1933)・F(1934)、尿瓶(1932)、磁器皿(1930・1931)が検出された。陶

器鉢Cは、17世紀後半の時期である。鉢Fは、体部がハの字状に開くもので口縁部端部にナデ調整を行い丸くする。17世紀代と考える。尿瓶は、17世紀後半の時期である。磁器皿1930は、中国産染付け皿で16世紀末から17世紀初頭の時期である。1931は、中国産丸皿で内面に蛟龍文を有する。16世紀後半の時期である。

SE05(第174図) 陶器椀A(1935)、皿B(1936)が検出された。椀Aは、連房式登窓第2小期である。皿Bは志野丸皿で、大窓第4段階である。

SE09(第174図) 陶器皿B(1938)・C(1937)が検出された。陶器皿Bは大窓第4段階、皿Cは大窓第3段階である。

SE06(第174図) 陶器鉢B(1939)が検出された。17世紀前半の時期である。

SE11(第174図) 土師器羽付釜(1940)が検出された。口縁部が直立するもので、体部下半に横方向の削り調整が施される。15世紀後半の時期である。

SE45(第174図) 陶器皿B(1942・1943)、磁器椀(1941)が検出された。陶器皿B1942は志野丸皿で大窓第4段階、1943は鉄絵皿で連房式登窓第1小期である。磁器椀は、肥前産で17世紀代の時期である。

SE46(第174図) 陶器椀A(1945)が検出された。大窓第4段階のものである。

SE42(第174図) 陶器椀A(1946)が検出された。古瀬戸後IV期新の時期のものである。

SE83(第175図) 陶器椀A(1947・1948)、皿B(1949)、折縁皿(1950)、鉢A(1951)、土師器皿B(1952)が検出された。陶器椀Aは、連房式登窓第2・3小期である。皿Bは志野丸皿で大窓第4段階である。折縁皿は大窓第4段階で、内面に削ぎがある。鉢Aは、大窓第3段階である。

SE72(第175図) 山茶椀(1953)が検出された。北部系山茶椀11~12型式で、15世紀中~後葉の時期である。

SE94(第175図) 陶器椀C(1956)、鉢A(1957)、擂鉢型小鉢(1955)が検出された。陶器椀Cと鉢Aは古瀬戸後IV期新である。擂鉢型小鉢は、古瀬戸後IV期古の時期である。

SE95(第175図) 陶器椀A(1958)、大皿(1961)、建水(1959)が検出された。いずれも大窓第3段階である。

SE93(第175図) 陶器浅椀(1960)が検出された。古瀬戸後IV期新の時期である。

SE101(第175図) 土師器皿A(1962)が検出された。伴出遺物より15世紀中葉の時期と考える
SE99(第175図) 土師器皿A(1963)が検出された。伴出遺物より15世紀後半と考える。

(酒井俊彦)

註

1)瀬戸美濃窯産陶器類に関しては藤沢良祐氏の分類・編年によるものである。

藤沢良祐 1986 「瀬戸大窓発掘調査報告」「研究紀要」V 瀬戸市歴史民俗資料館

藤沢良祐 1987 「本業焼の研究(1)」「研究紀要」VI 瀬戸市歴史民俗資料館

藤沢良祐 1988 「本業焼の研究(2)」「研究紀要」VII 瀬戸市歴史民俗資料館

藤沢良祐 1989 「本業焼の研究(3)」「研究紀要」VIII 瀬戸市歴史民俗資料館

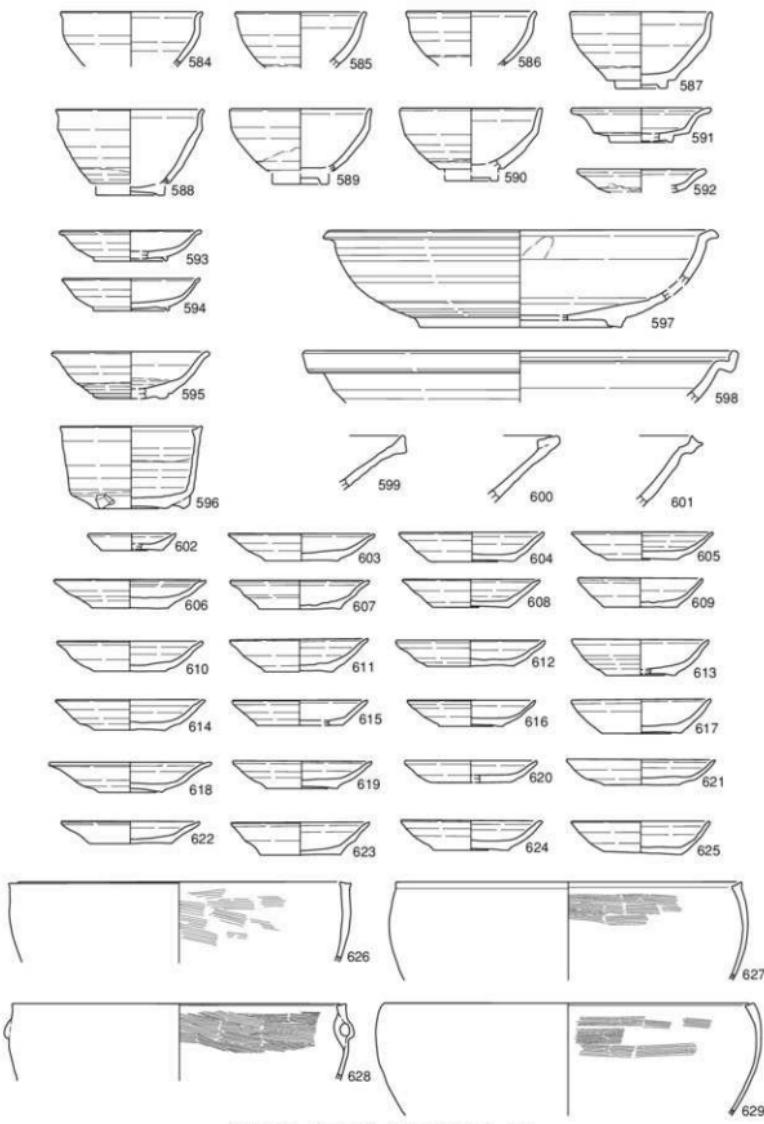
藤沢良祐 1991 「瀬戸古窯址群II - 古瀬戸後期様式の編年」「研究紀要」X 瀬戸市歴史民俗資料館

2)土師器鍋に関しては、鈴木正貴氏の三河地域の編年・分類によった。

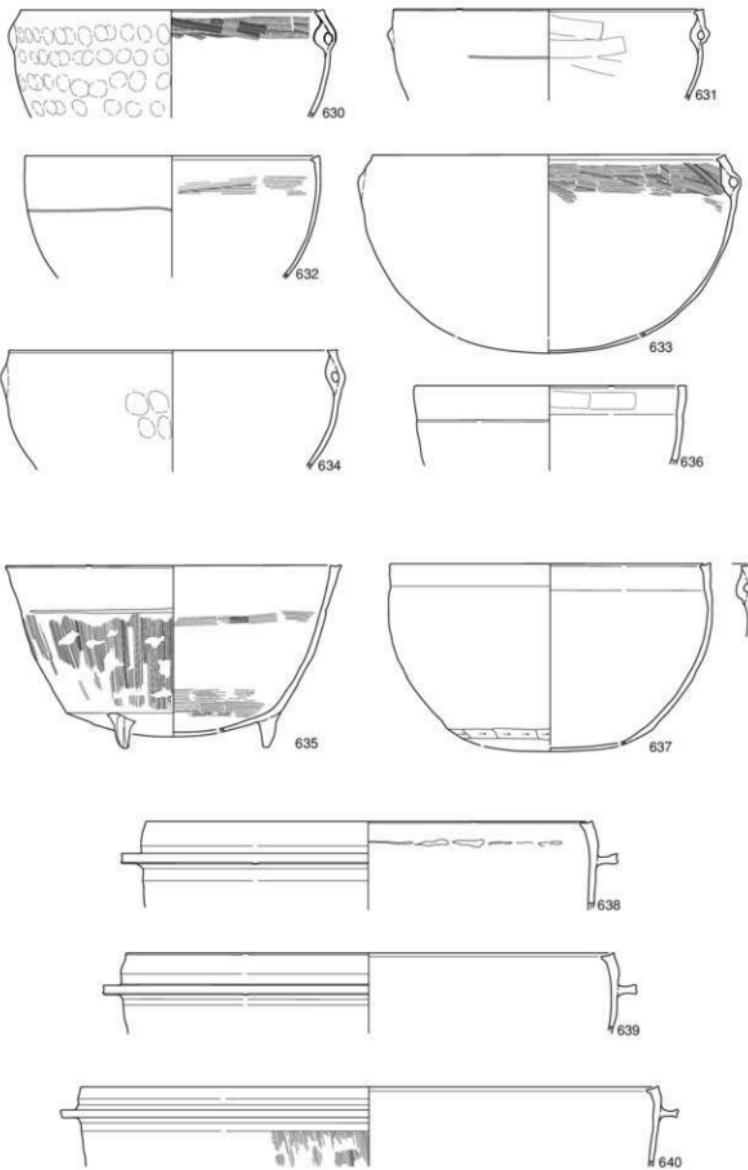
鈴木正貴 1996 「東海地方の土師器内耳鍋の生産について」「鍋と壺そのデザイン」第4回東海考古学

フォーラム

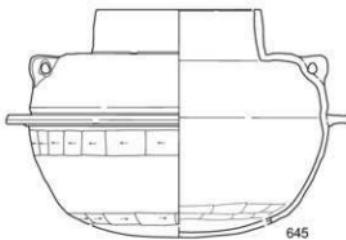
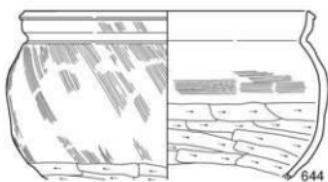
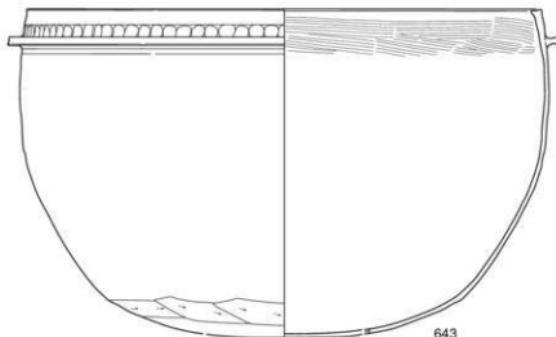
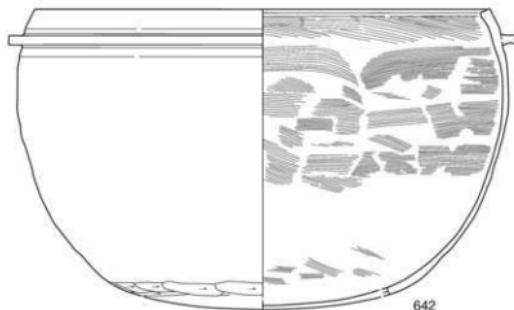
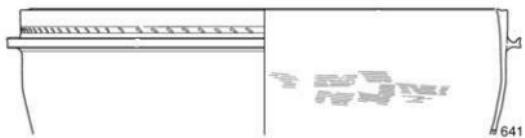
鈴木正貴 1998 「豊田市郷上遺跡出土の土師器煮炊具に関する予察」「年報」愛知県埋蔵文化財センター



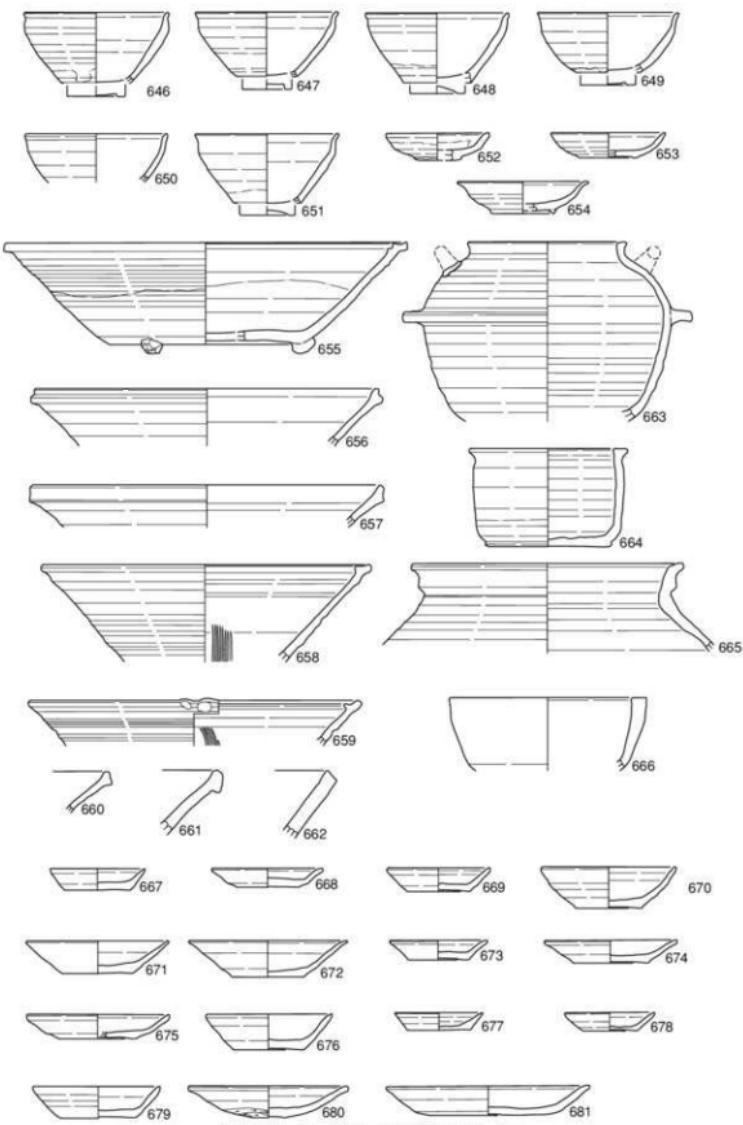
第105図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (1)
SD001



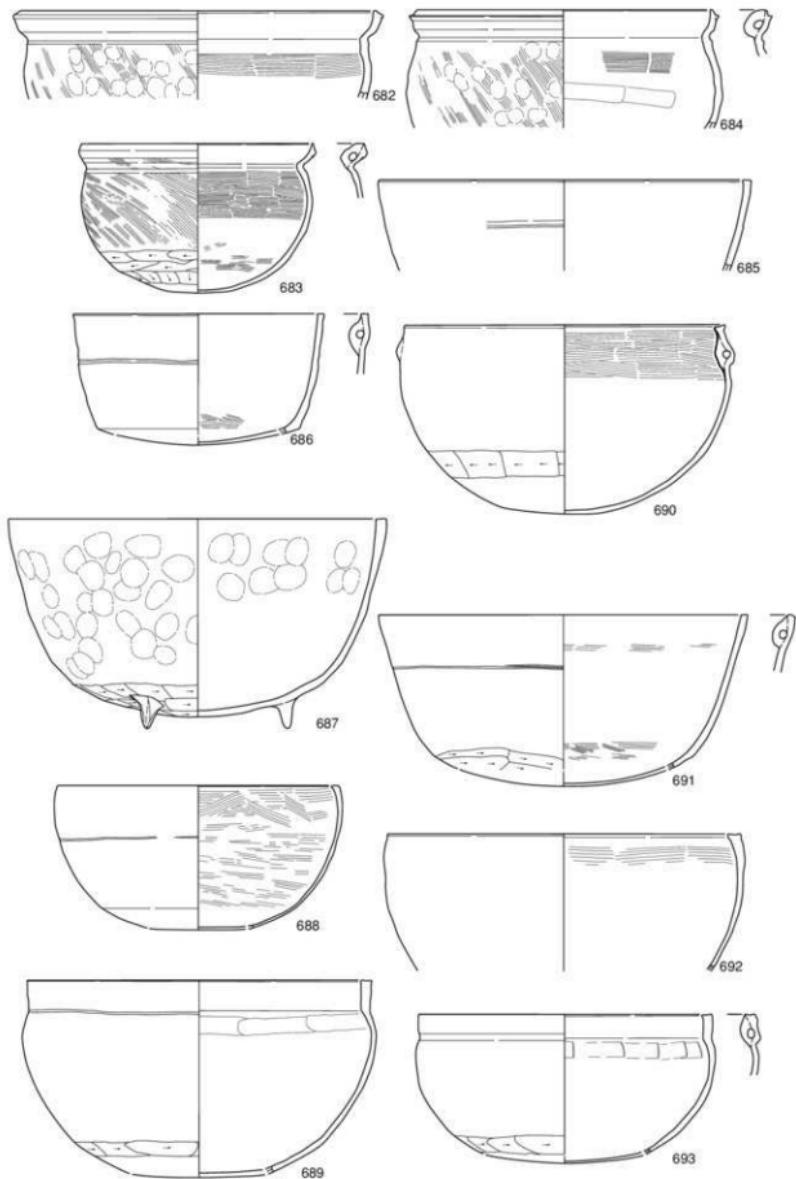
第106図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (2)
SD001



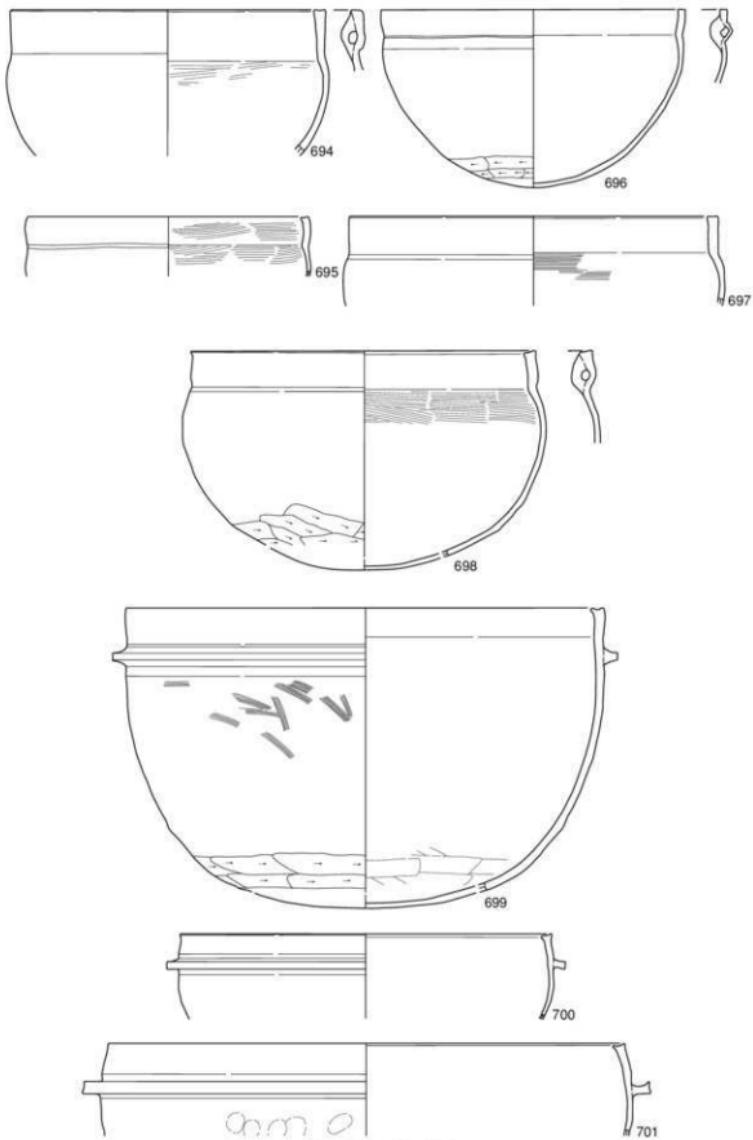
第107図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (3)
SD001



第108図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (4)
SD002-004-006



第109図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (5)
SD002・004・006



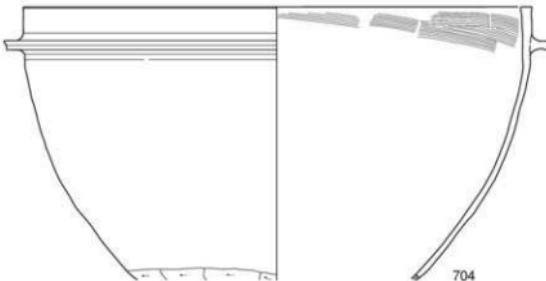
第110図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (6)
SD003-004-006



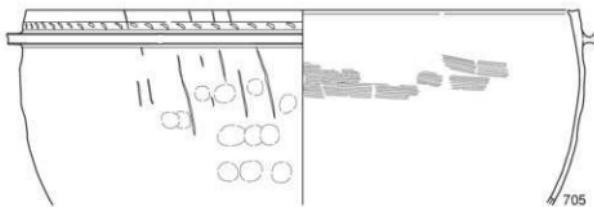
702



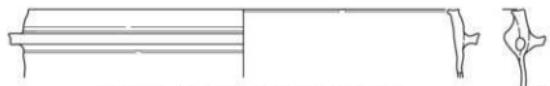
703



704

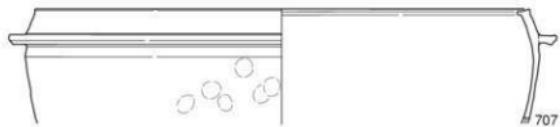


705

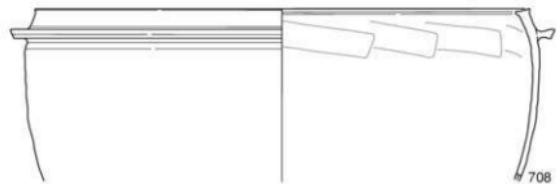


706

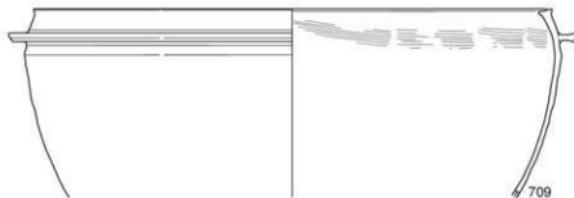
第111図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (7)
SD004



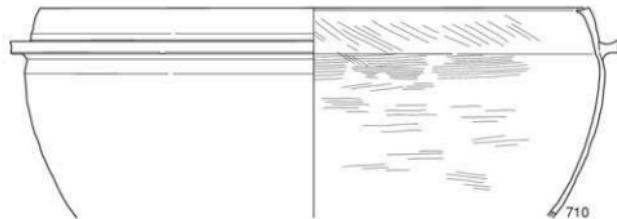
707



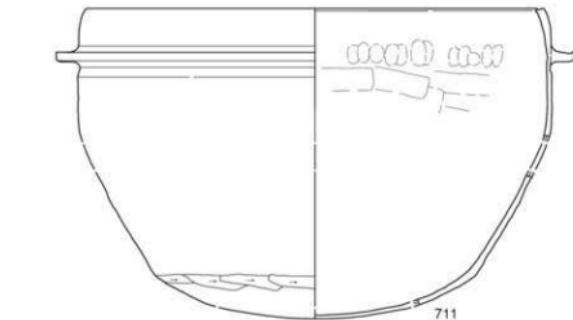
708



709

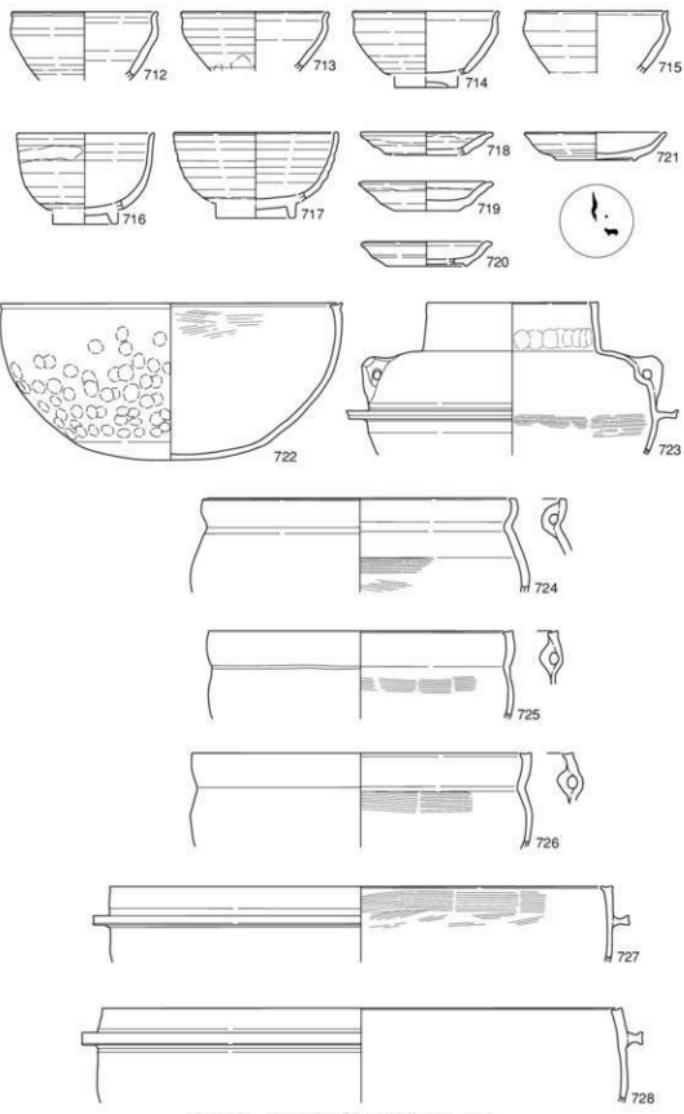


710

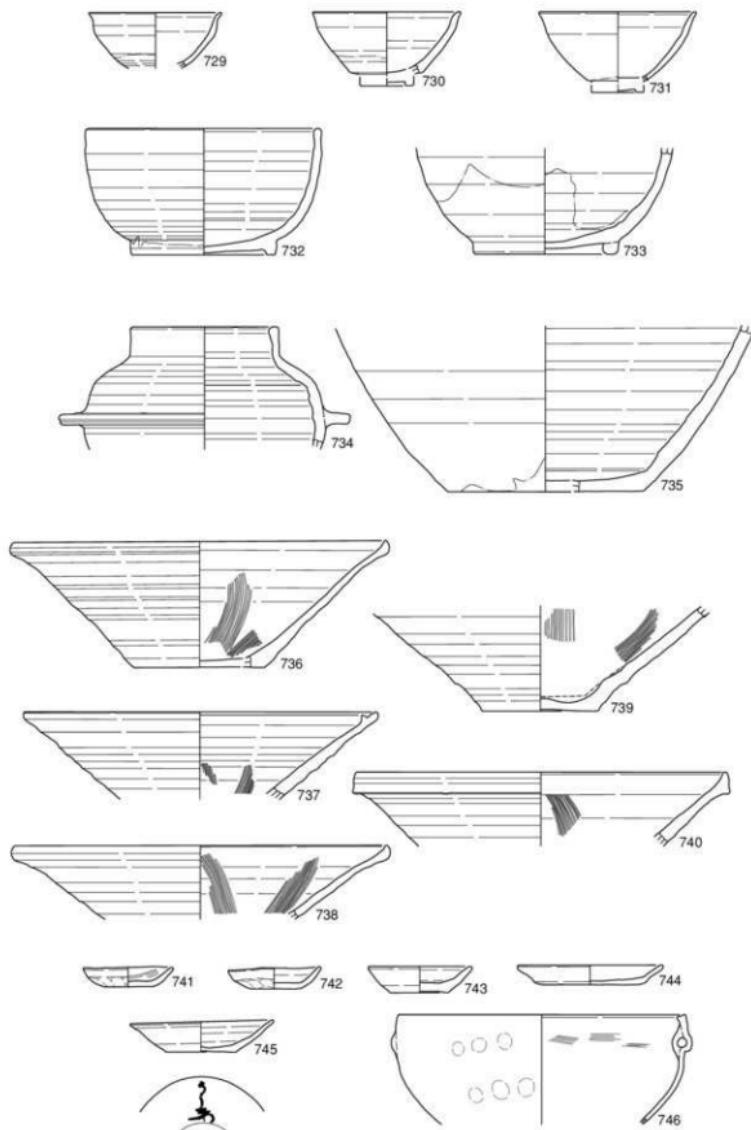


711

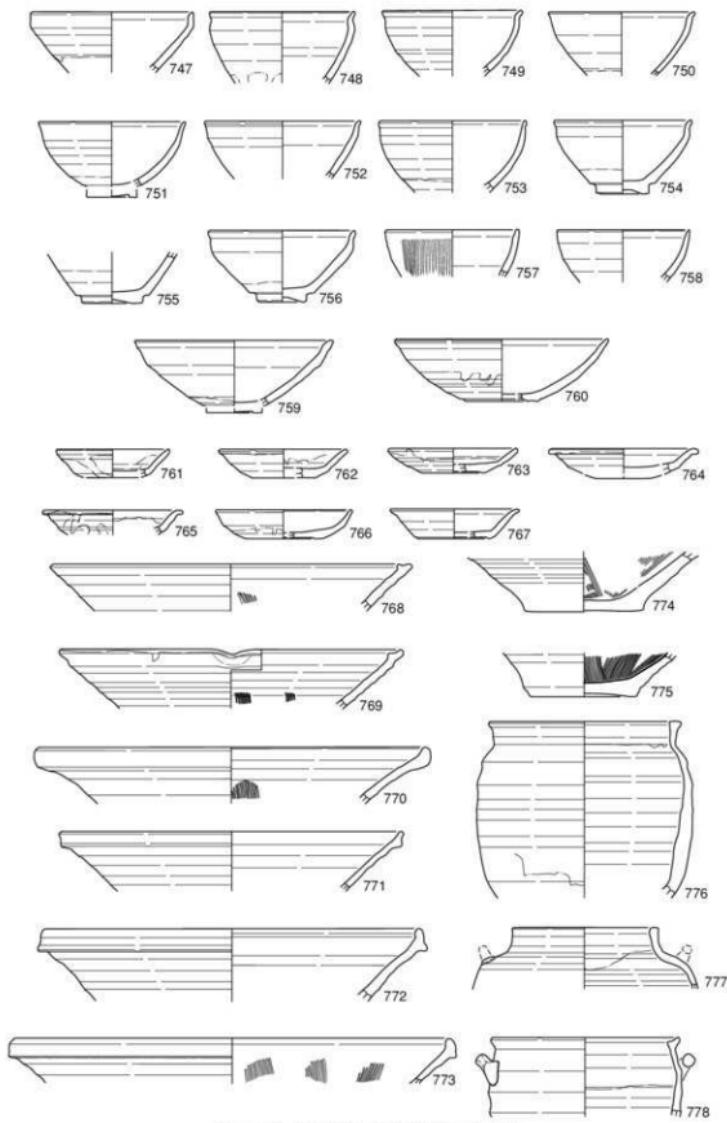
第112図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (8)
SD006



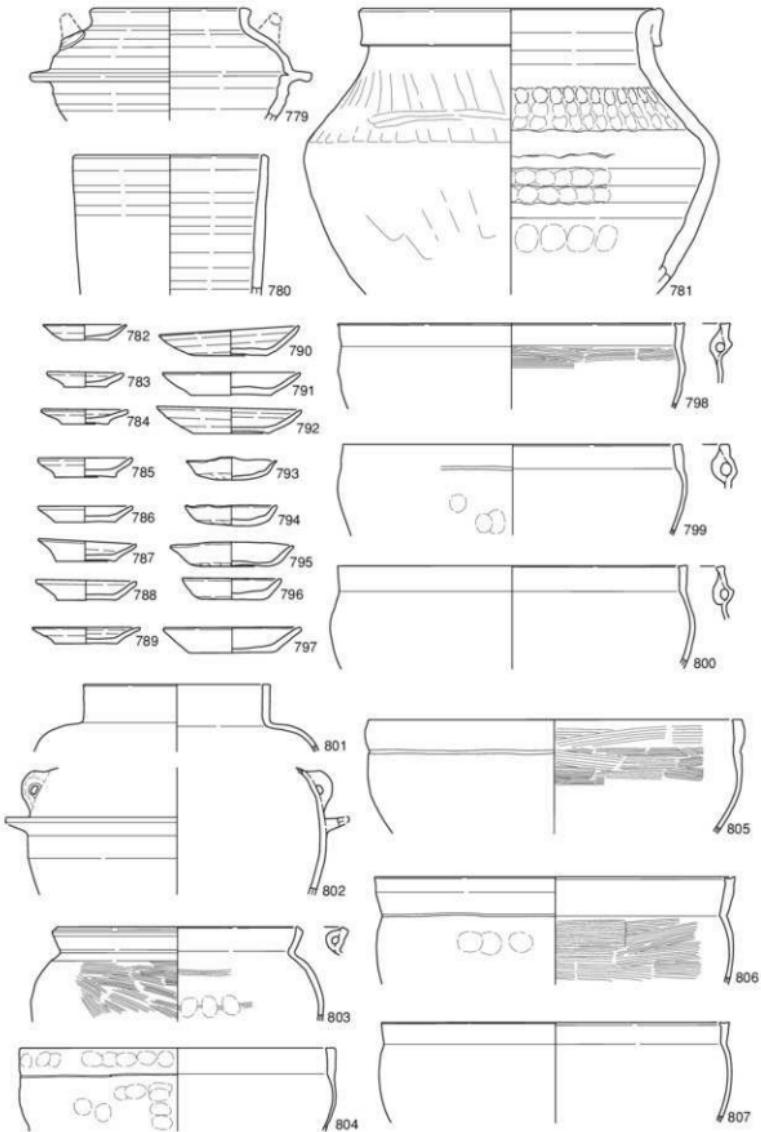
第113図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (9)
SD010-016-024



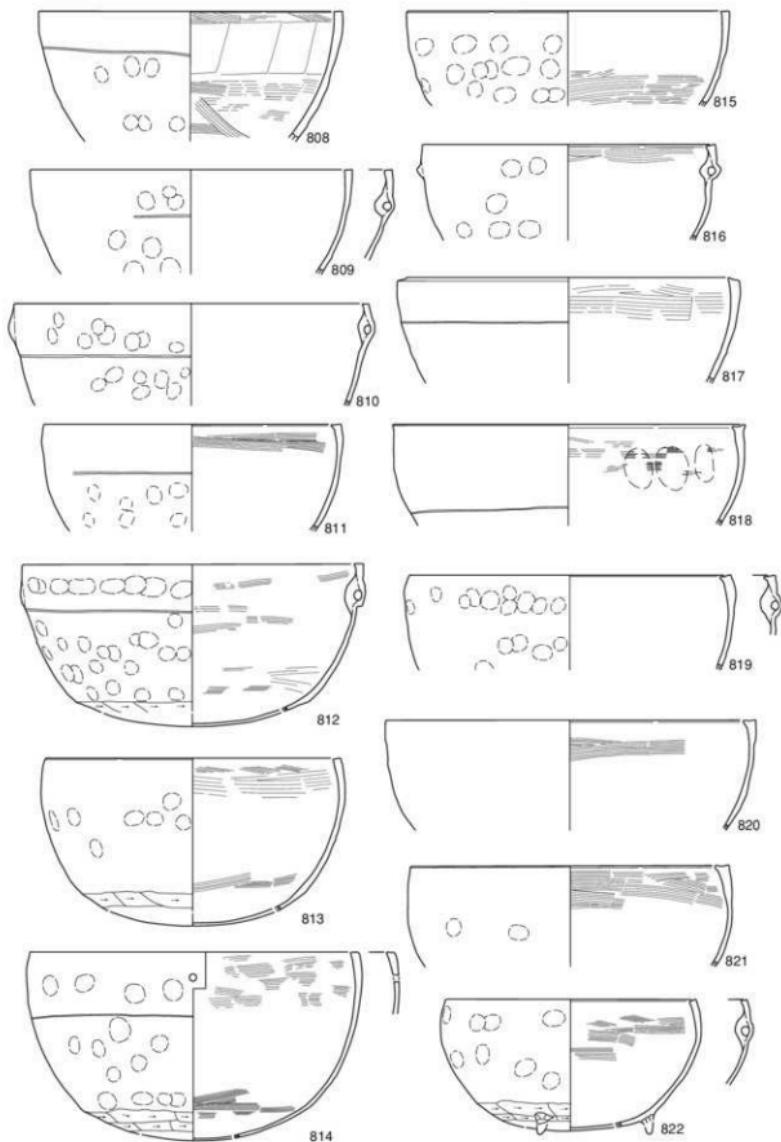
第114図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (10)
SD025・028・031・032



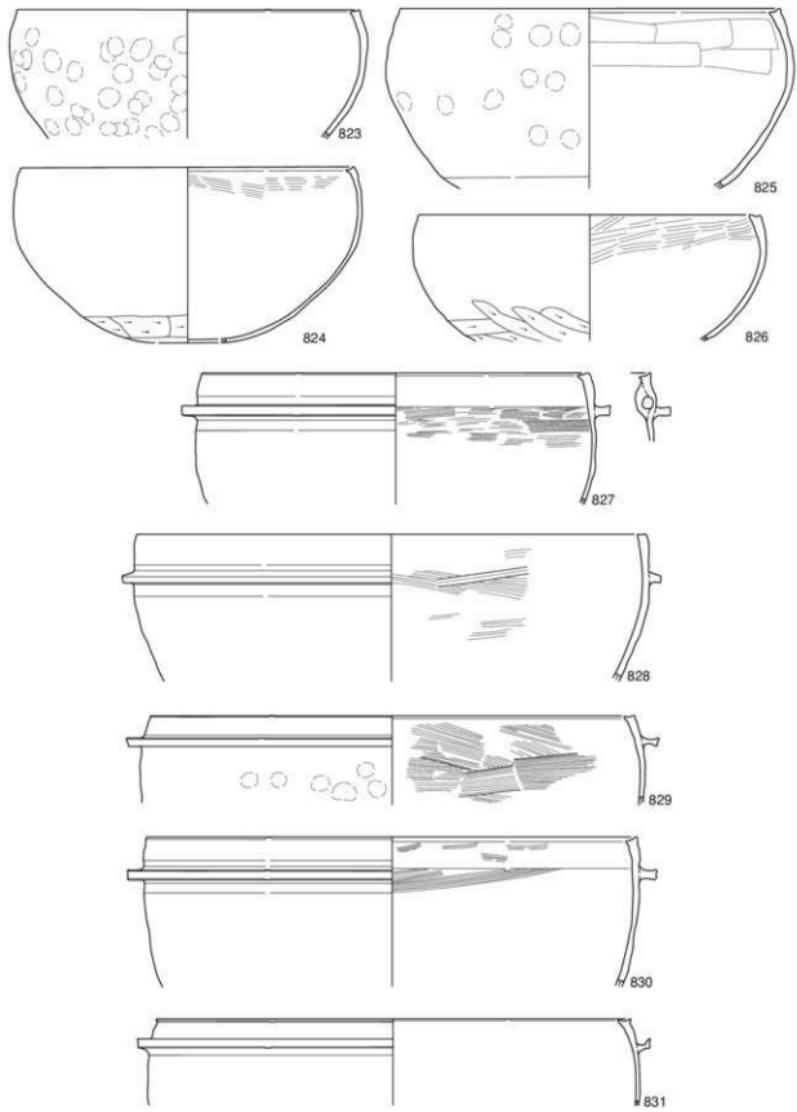
第115図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (11)
SD030



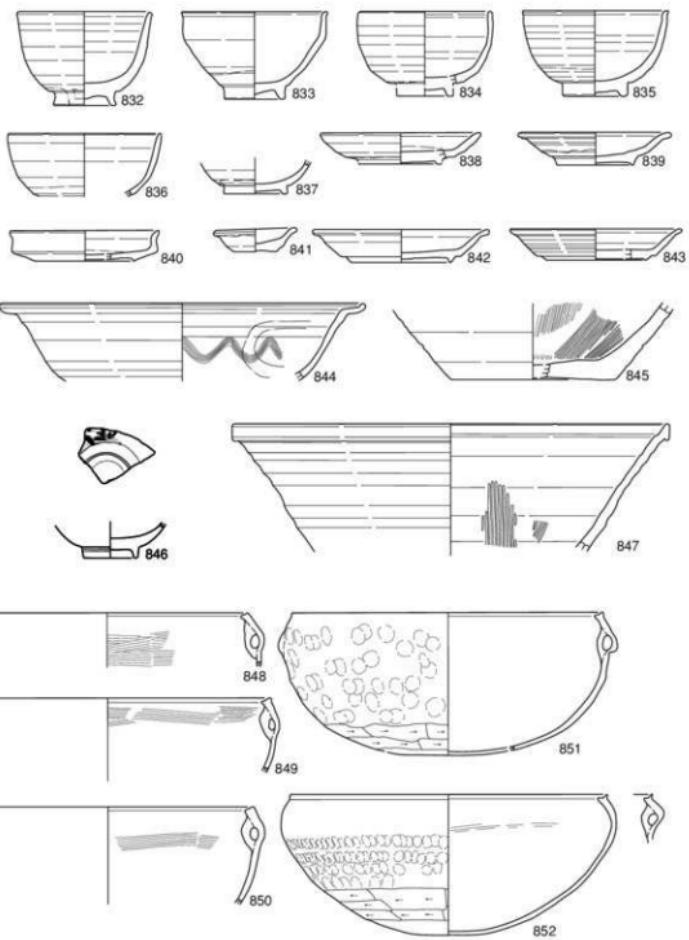
第116図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (12)
SD030



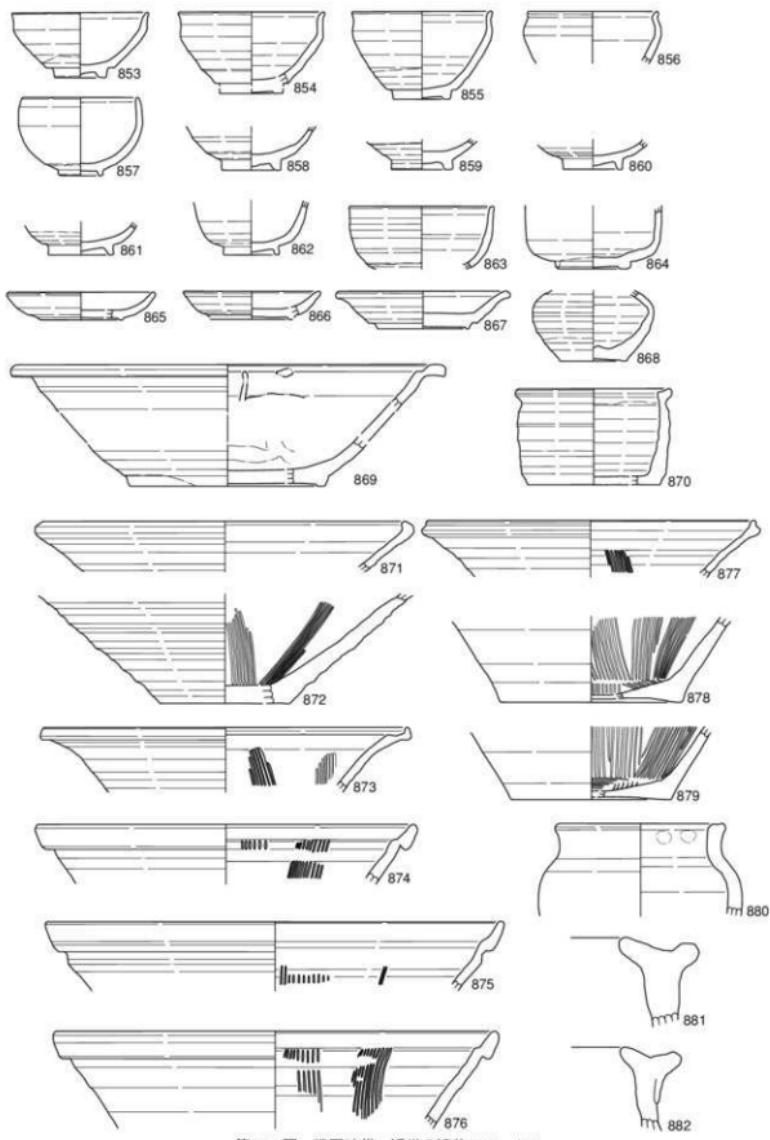
第117図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (13)
SD030



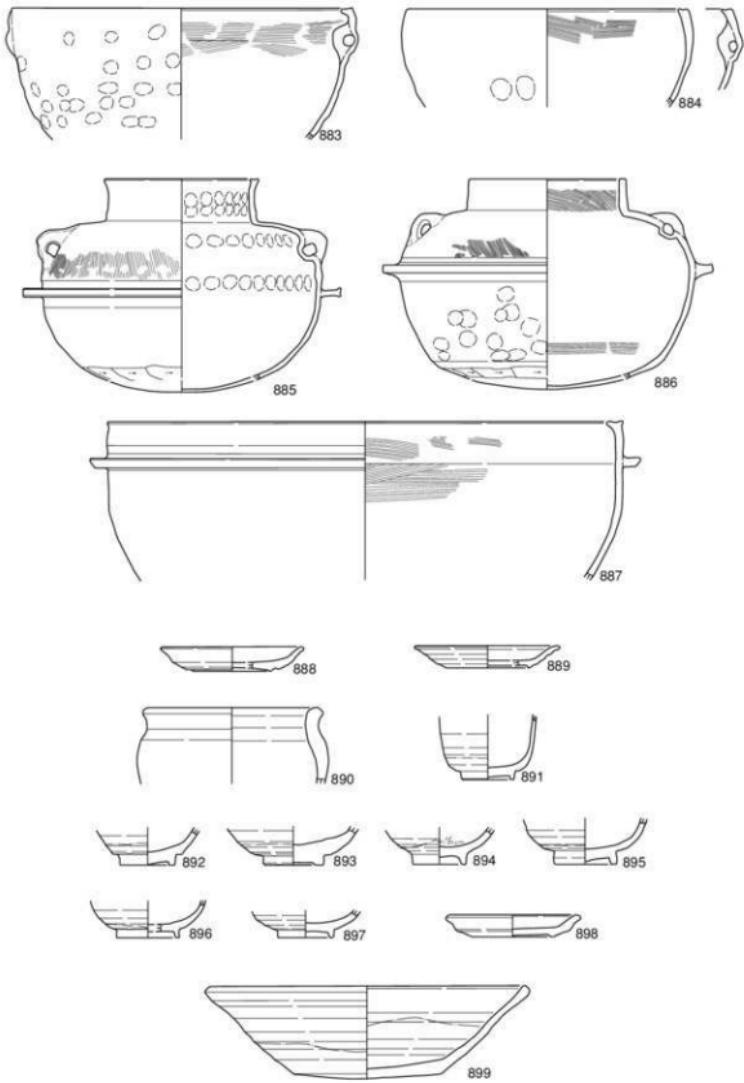
第118図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (14)
SD030



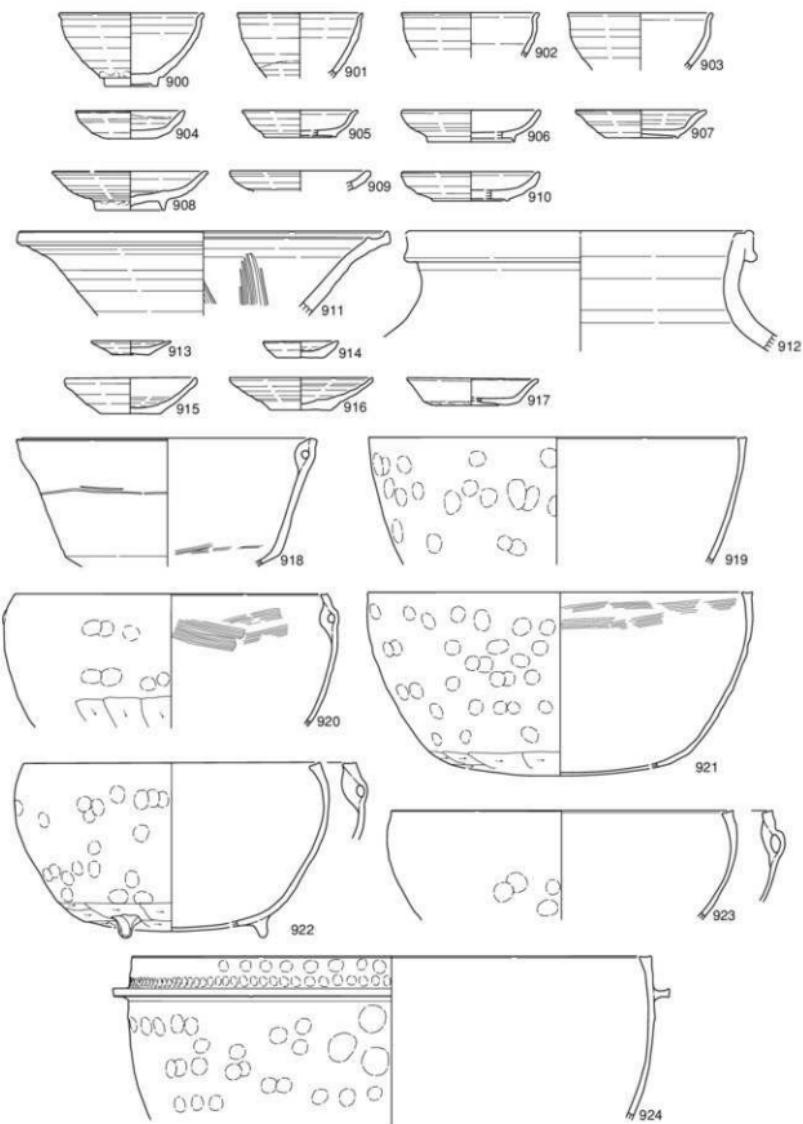
第119図 戰国時代・近世の遺物(1/4) (15)
SD029



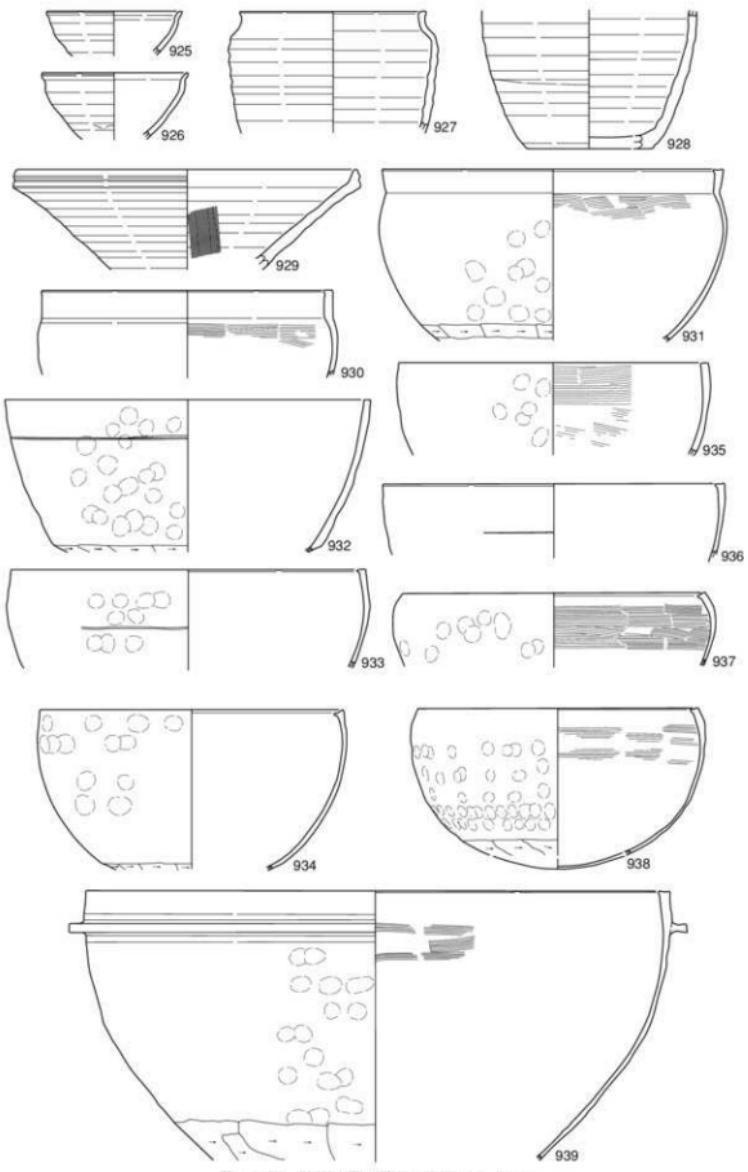
第120図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (16)
SD036



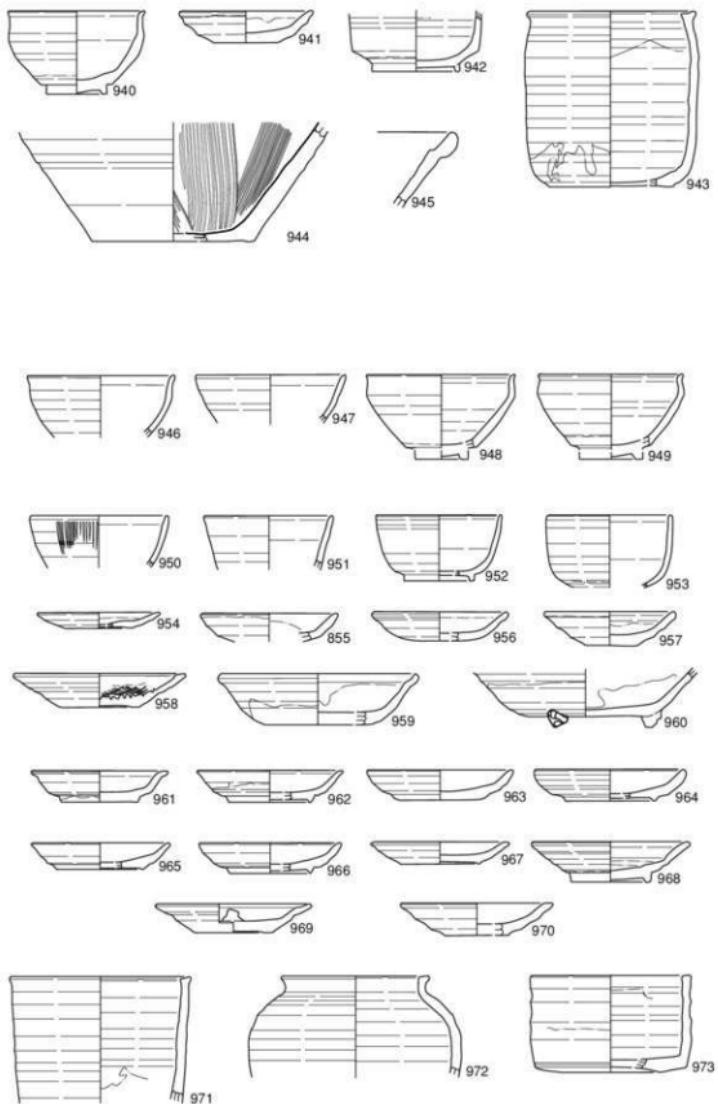
第121図 戰国時代・近世の遺物(1/4) (17)
SD036・038・041・149



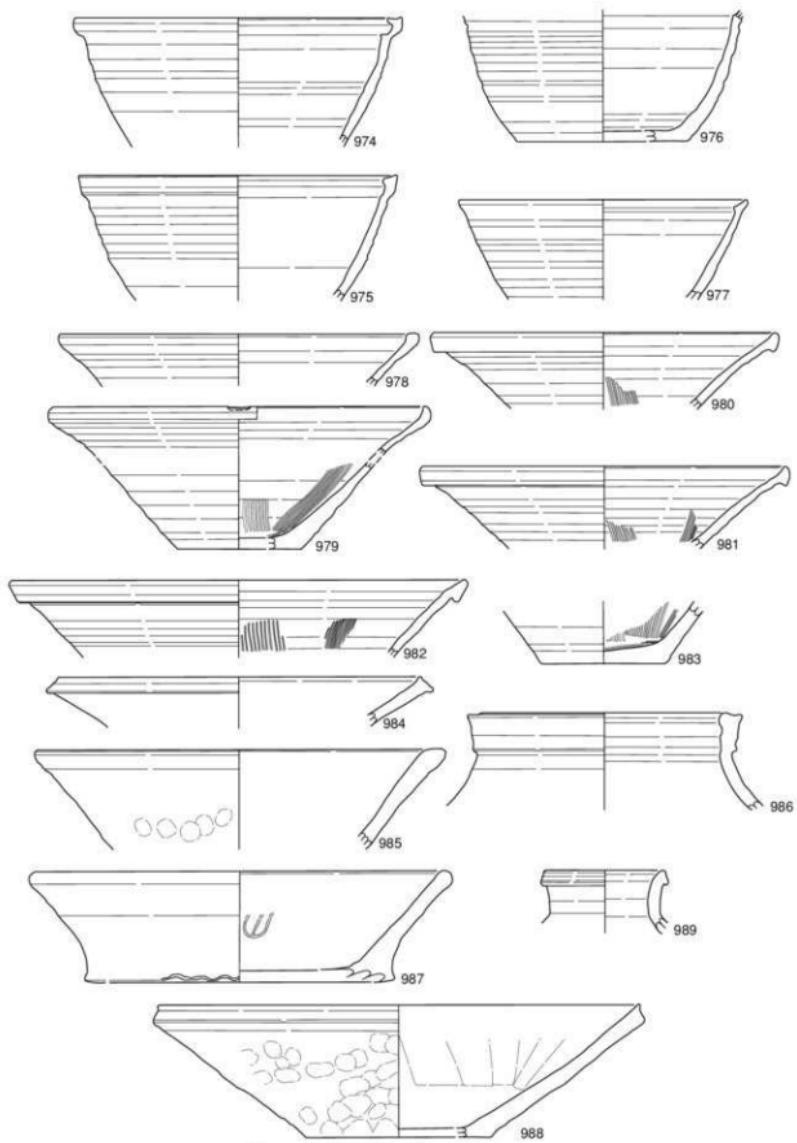
第122図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (18)
SD045-046-048 ~ 050-052



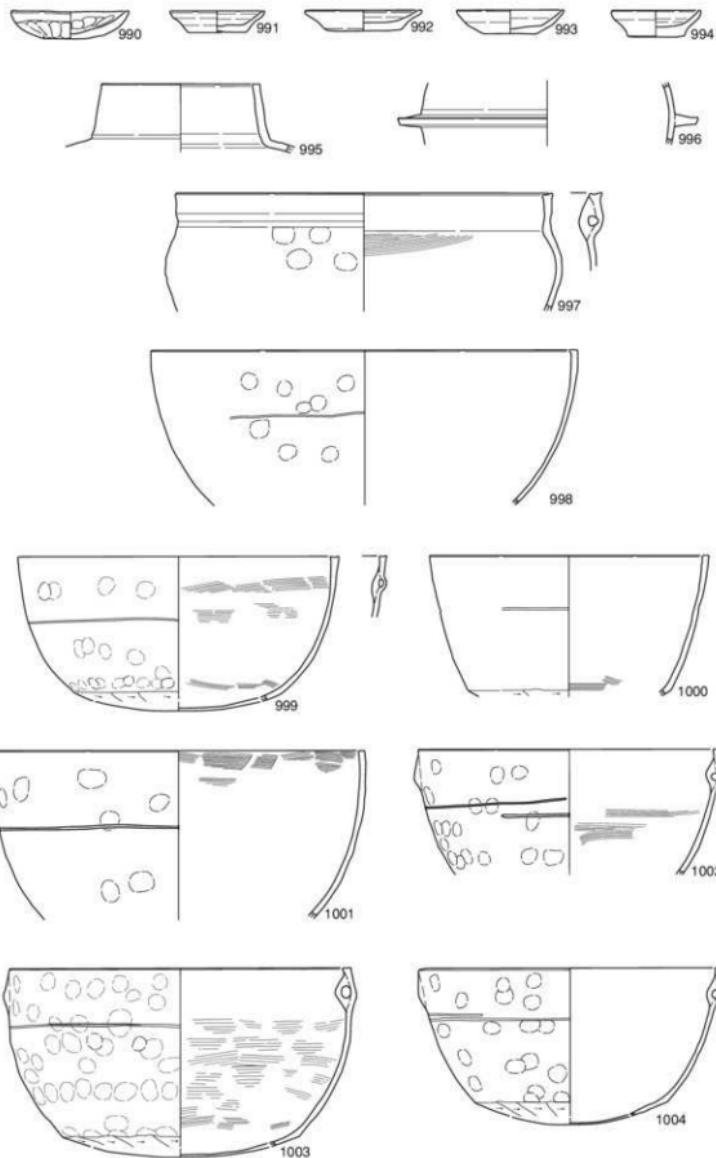
第123図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (19)
SD054-059



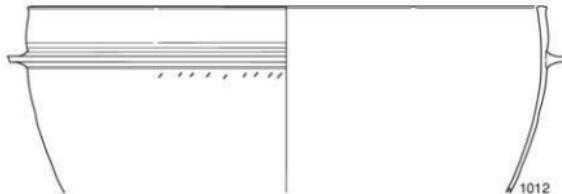
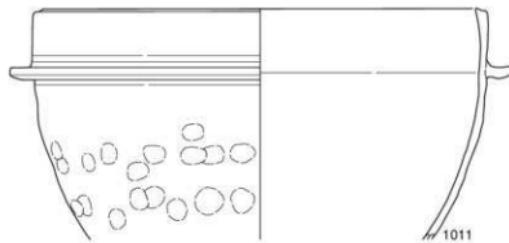
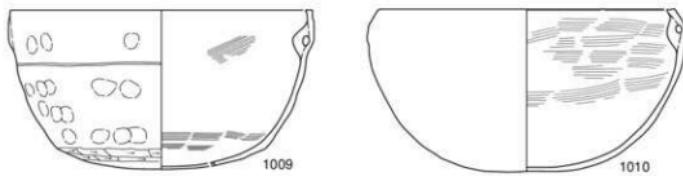
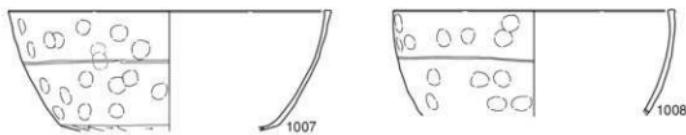
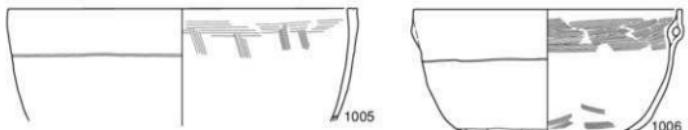
第124図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (20)
SD068-071-076-150



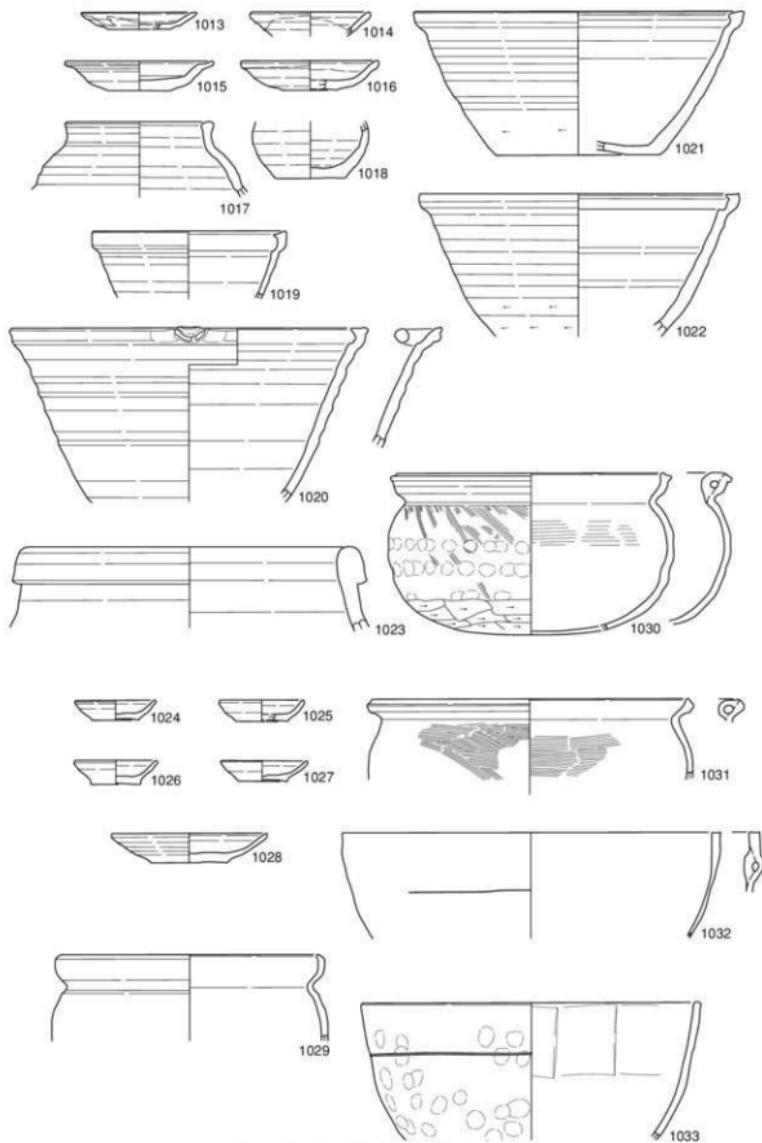
第125図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (21)
SD076



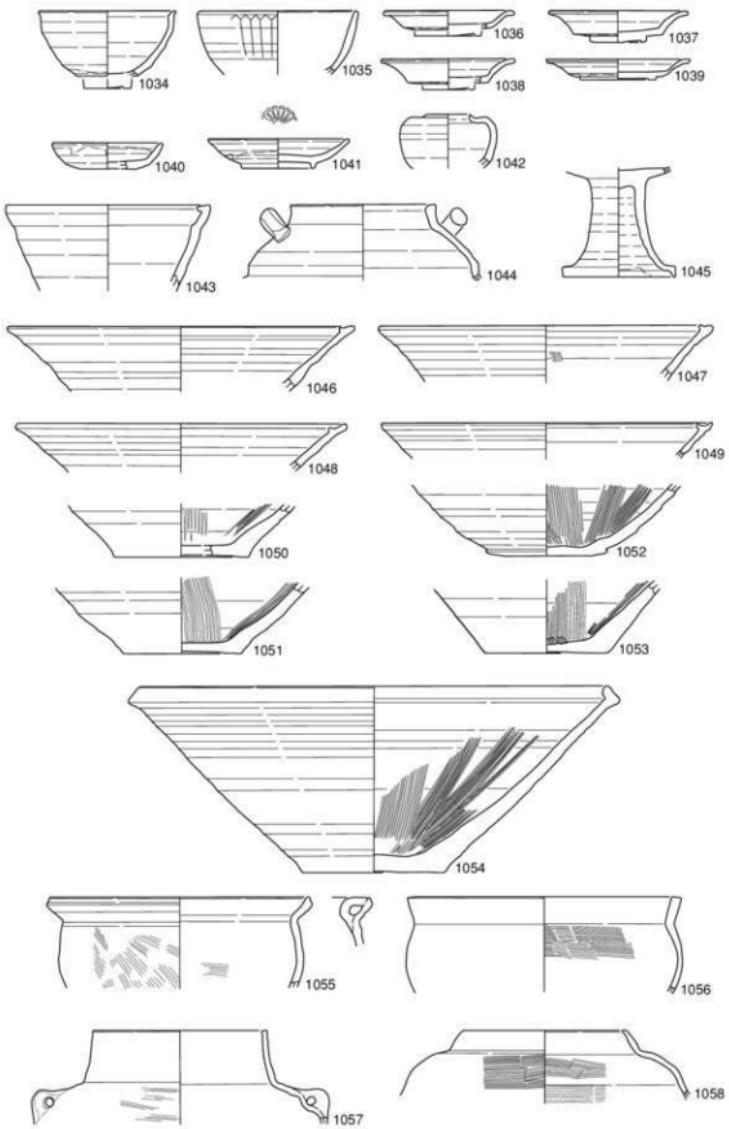
第126図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (22)
SD076



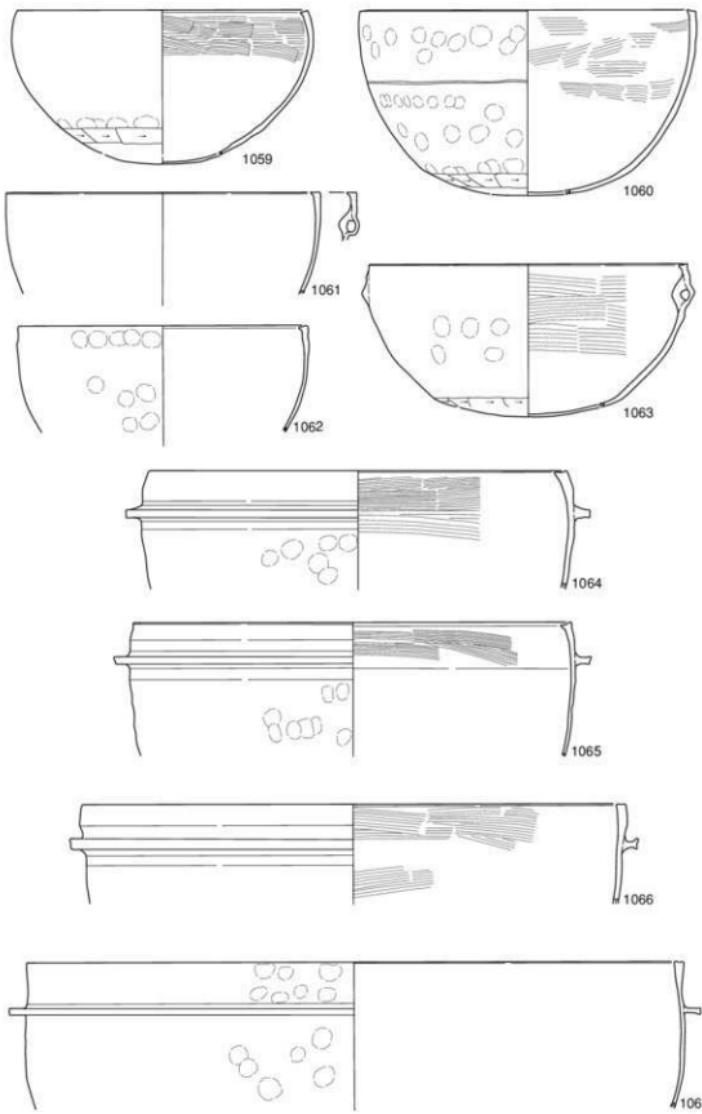
第127図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (23)
SD076



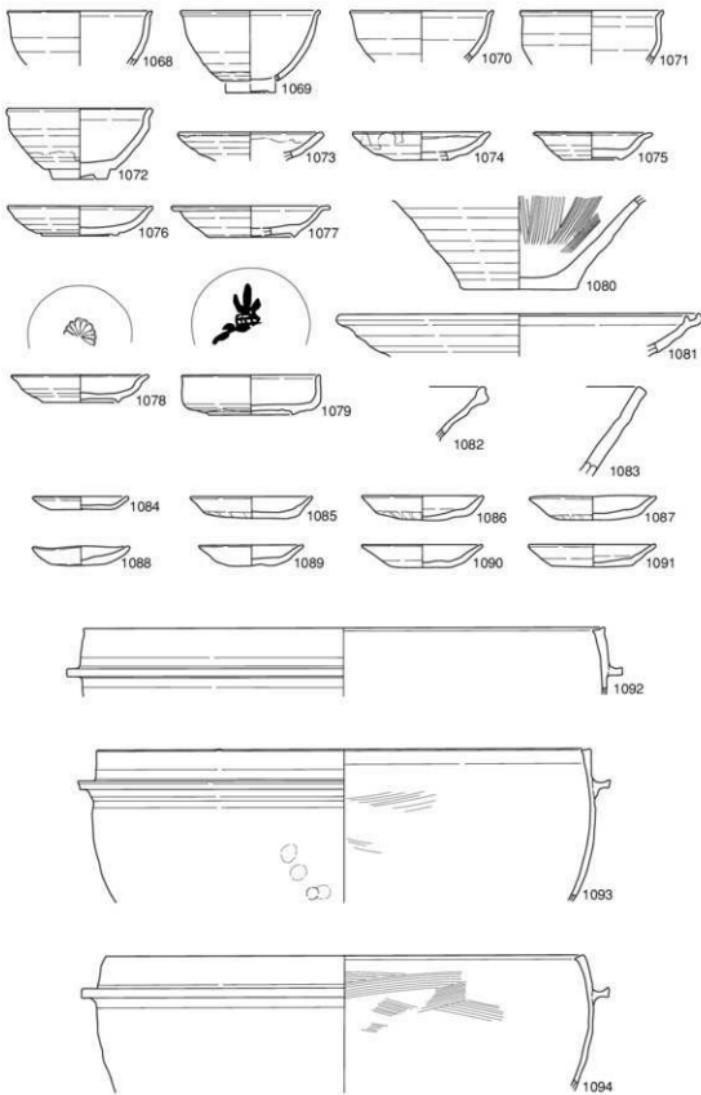
第128図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (24)
SD081



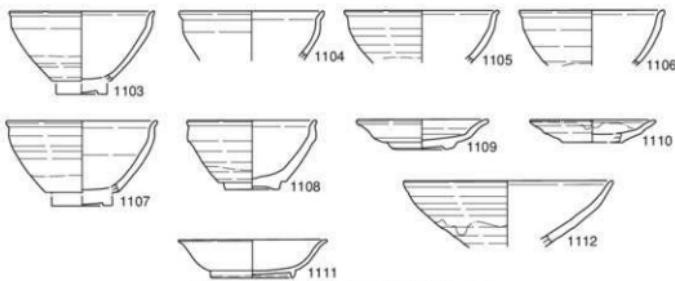
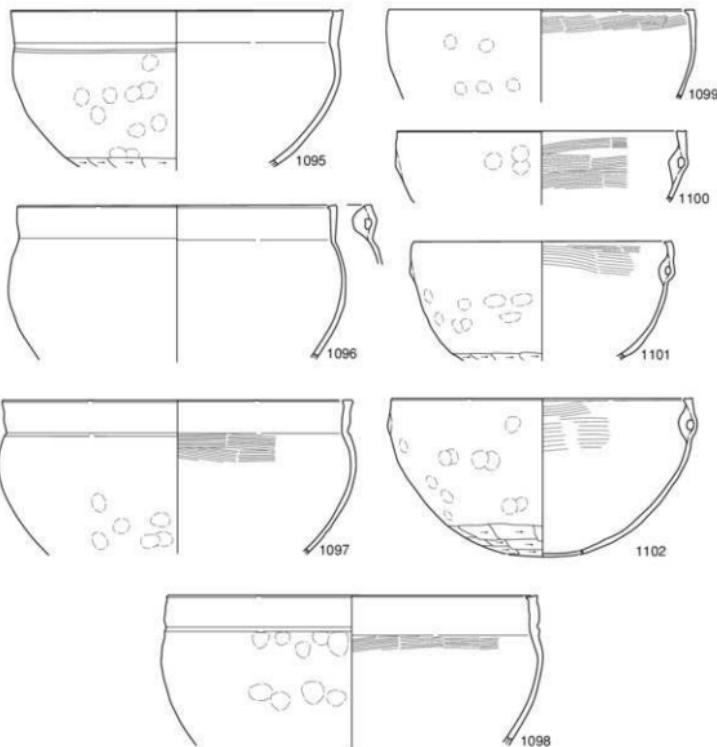
第129図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (25)
SD082-083



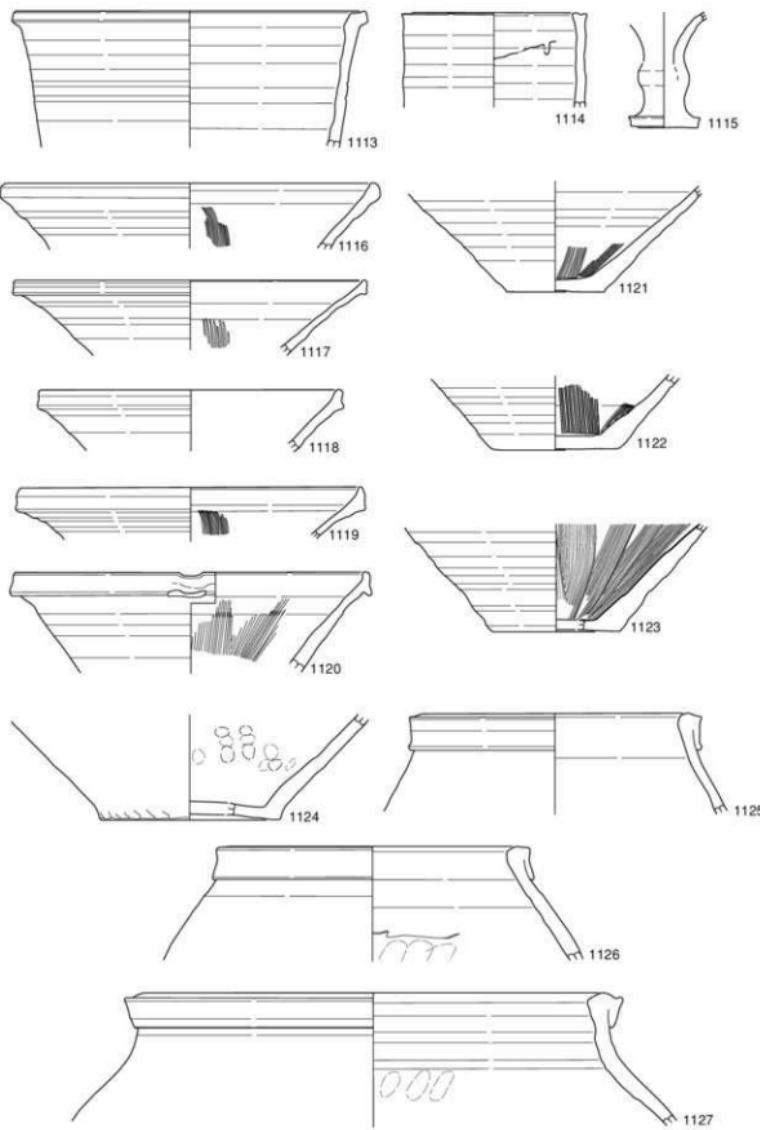
第130図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (26)
SD082・083



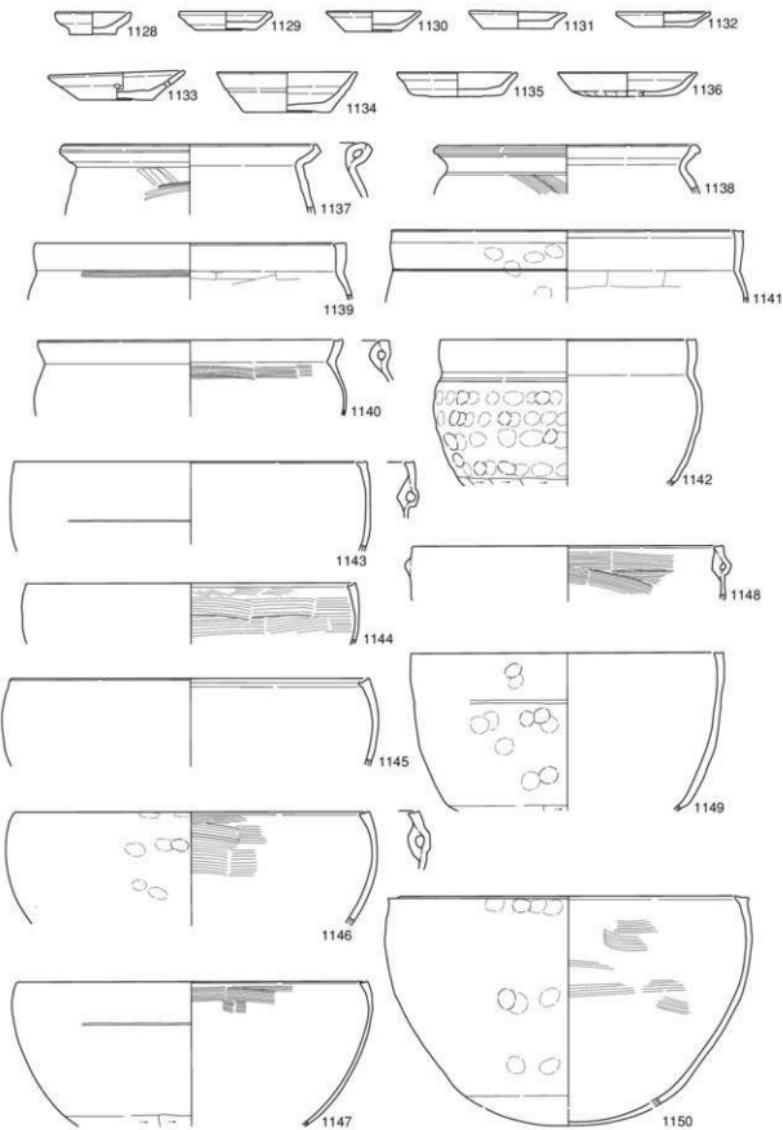
第131図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (27)
SD086-087-161



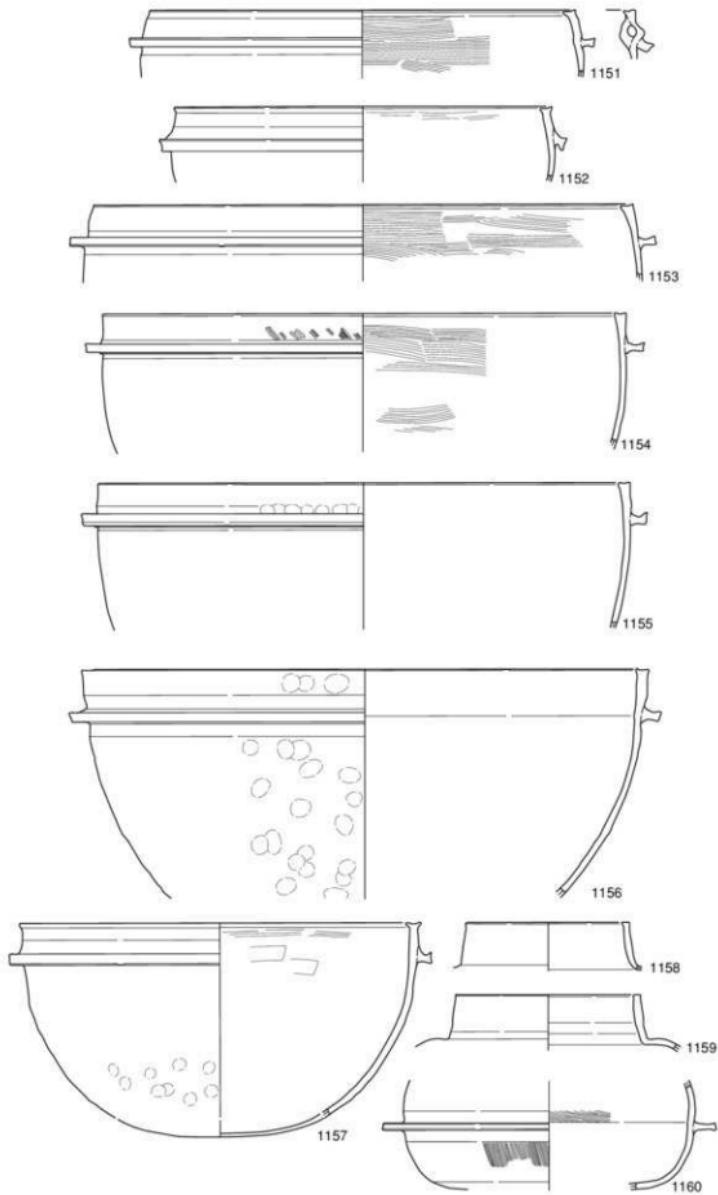
第132図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (28)
SD086 ~ 088・161



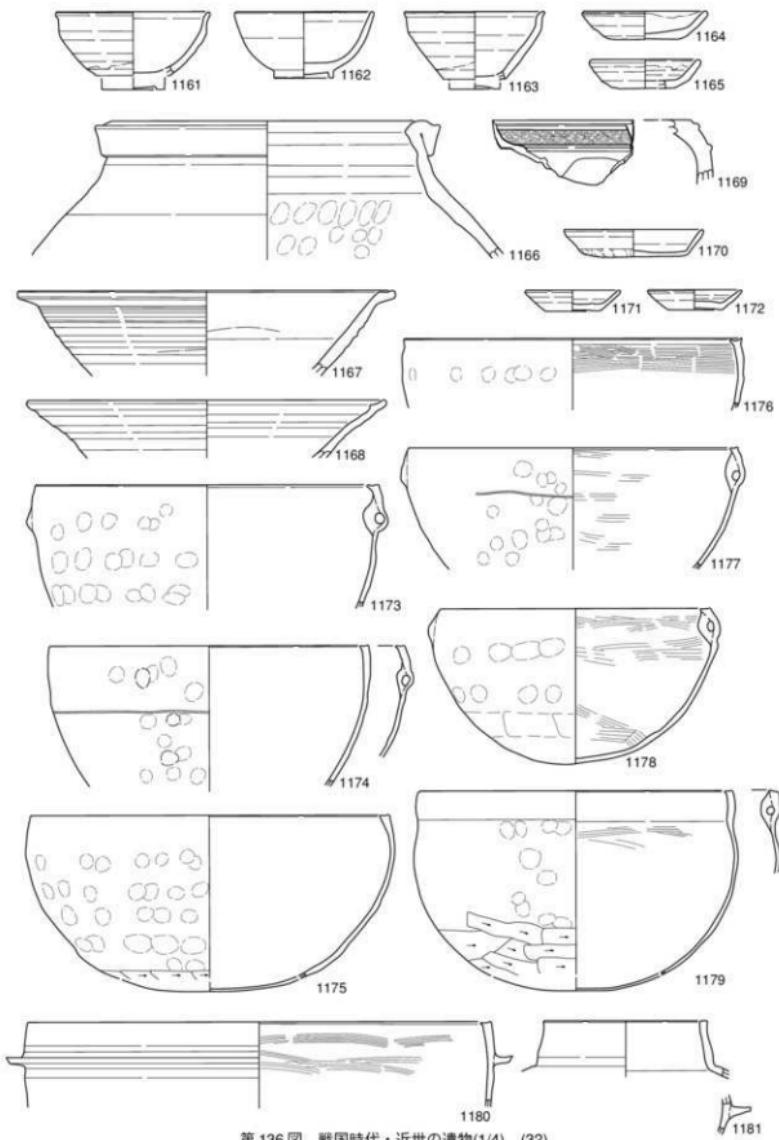
第133図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (29)
SD088



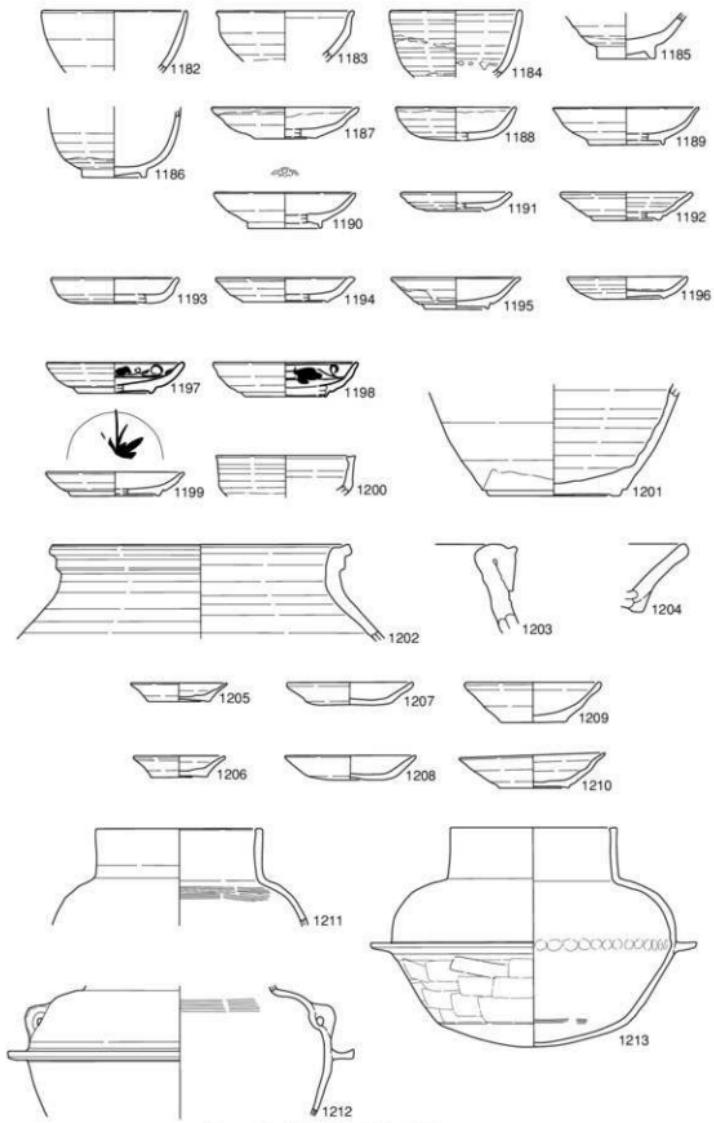
第134図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (30)
SD088



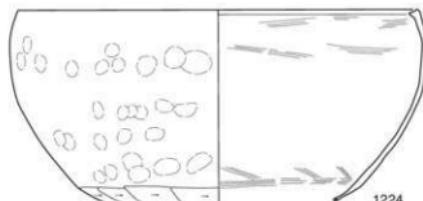
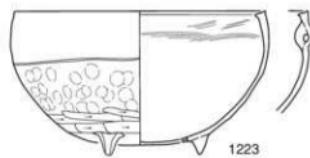
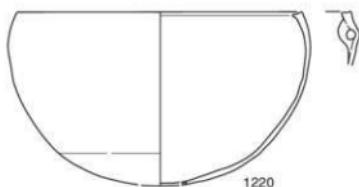
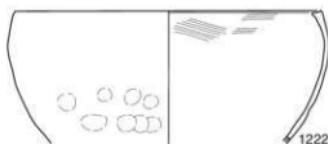
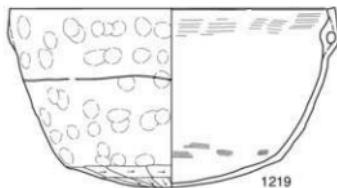
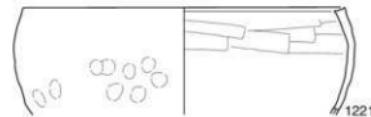
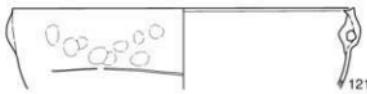
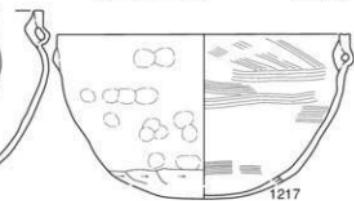
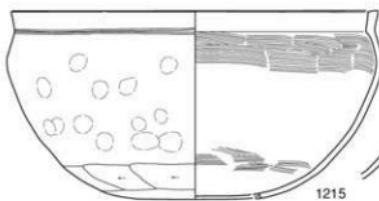
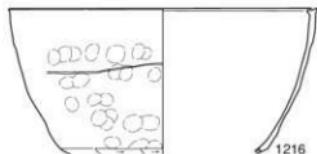
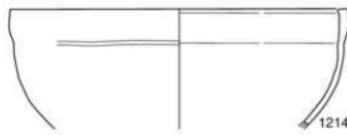
第135図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (31)
SD088



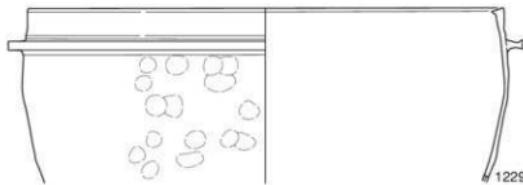
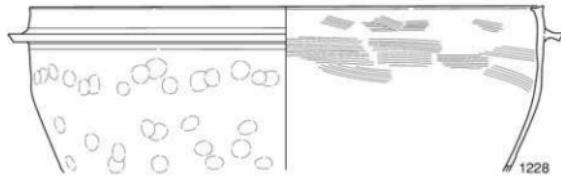
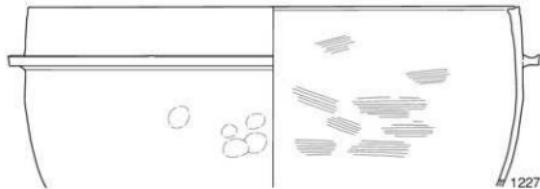
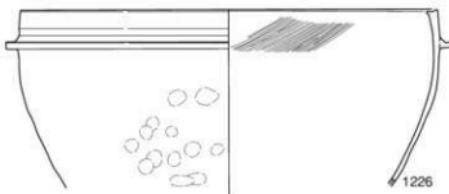
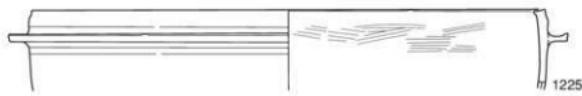
第136図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (32)
SD090



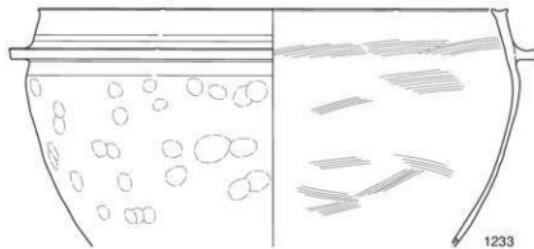
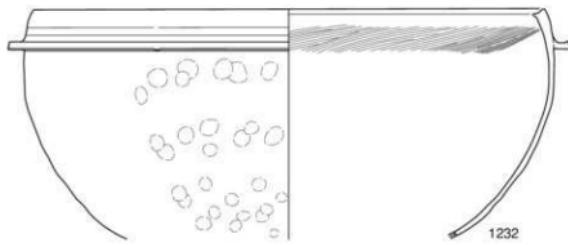
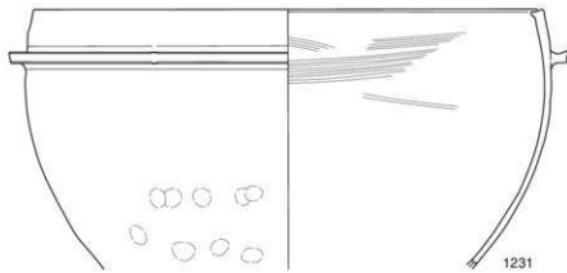
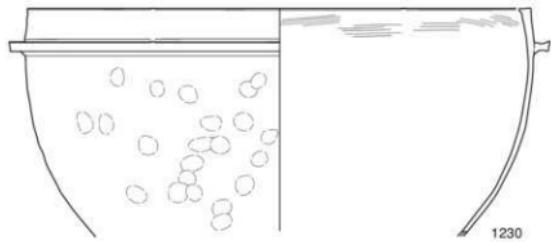
第137図 戰国時代・近世の遺物(1/4) (33)
SD093



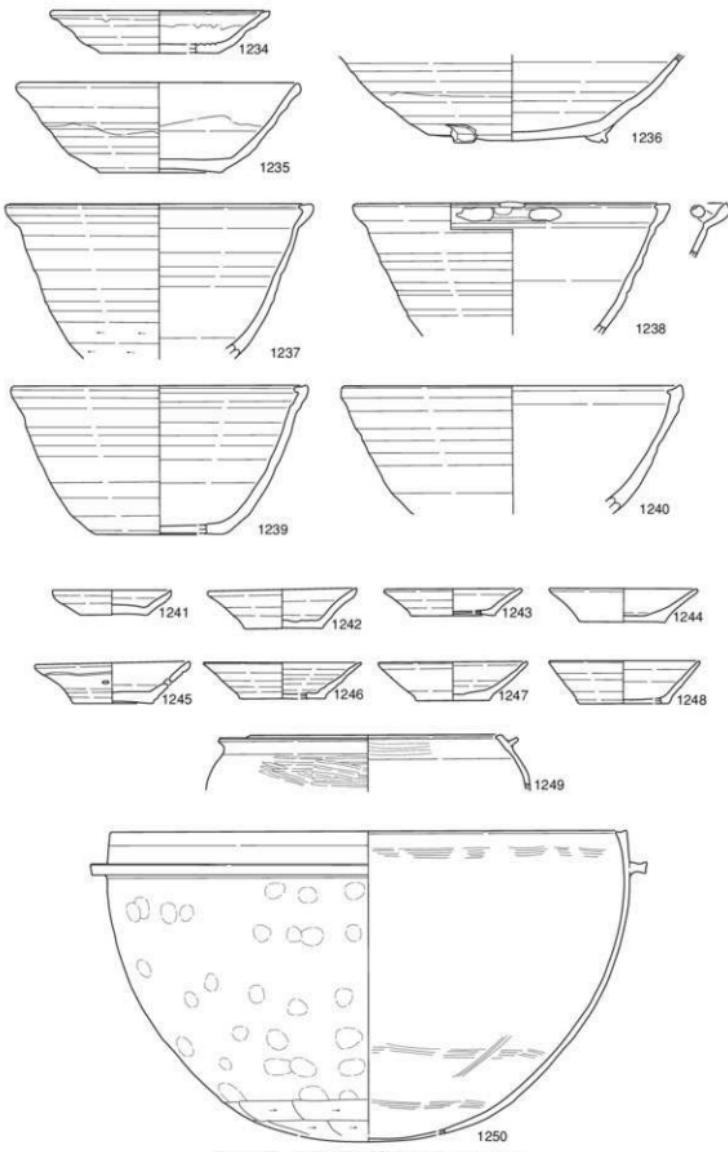
第138図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (34)
SD093



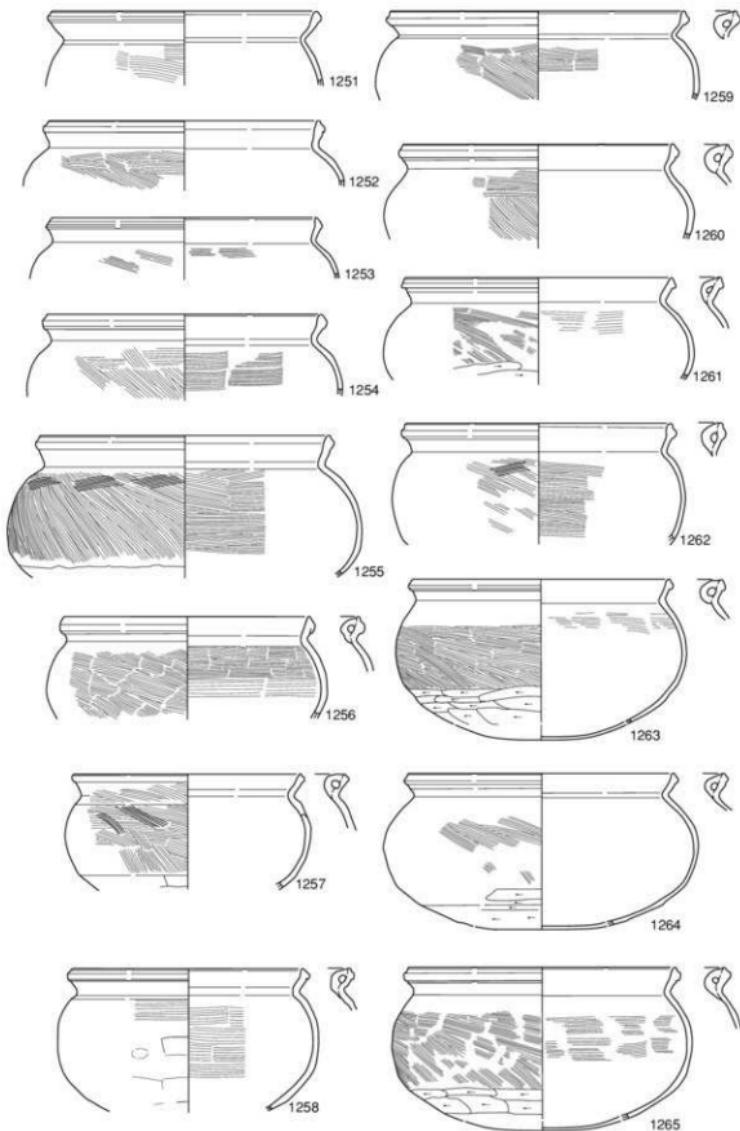
第139図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (35)
SD093



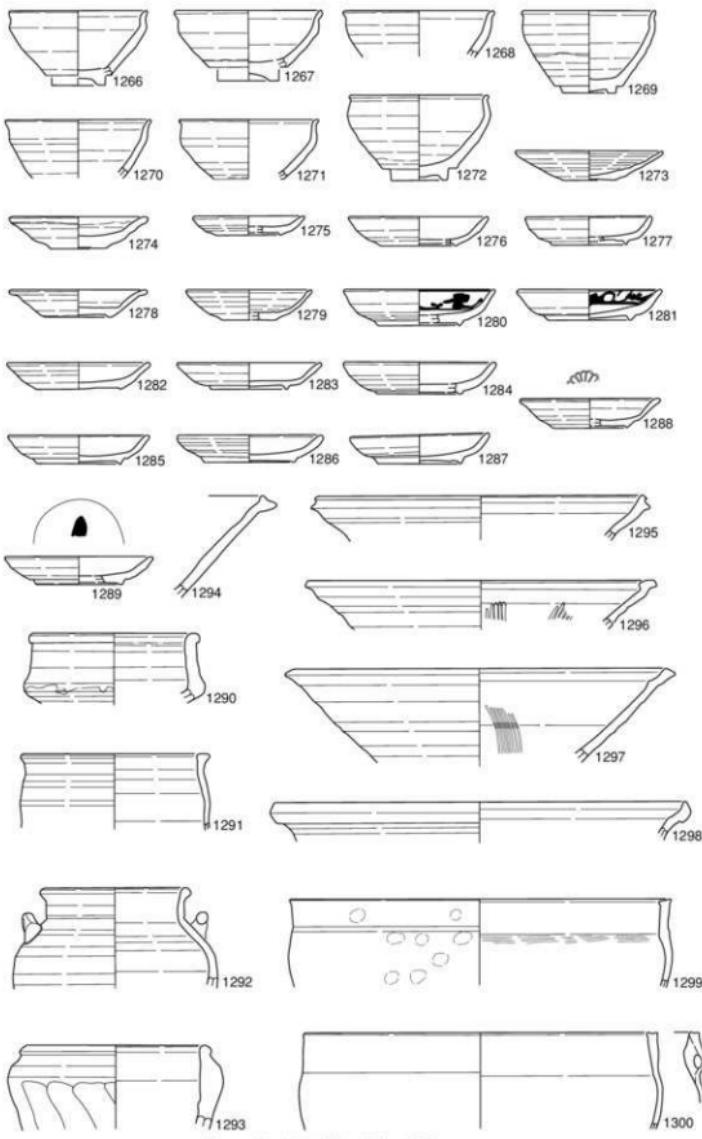
第 140 図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (36)
SD093



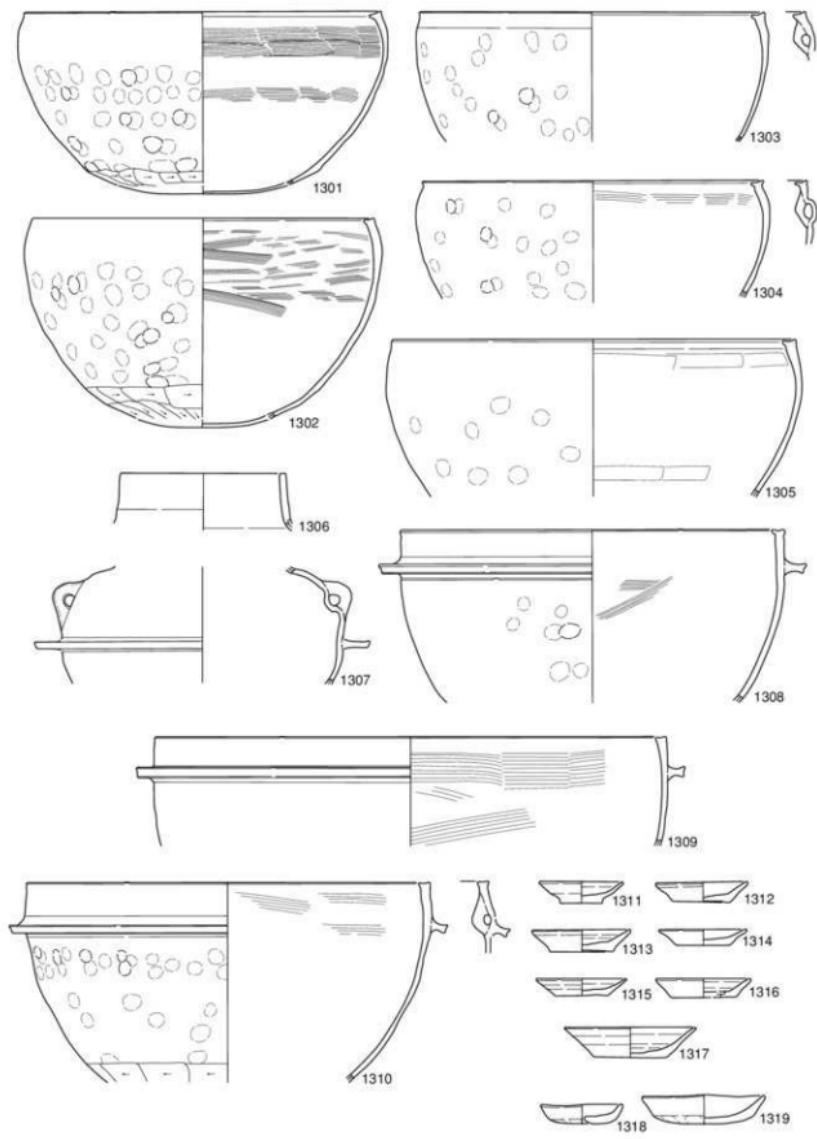
第141図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (37)
SD094



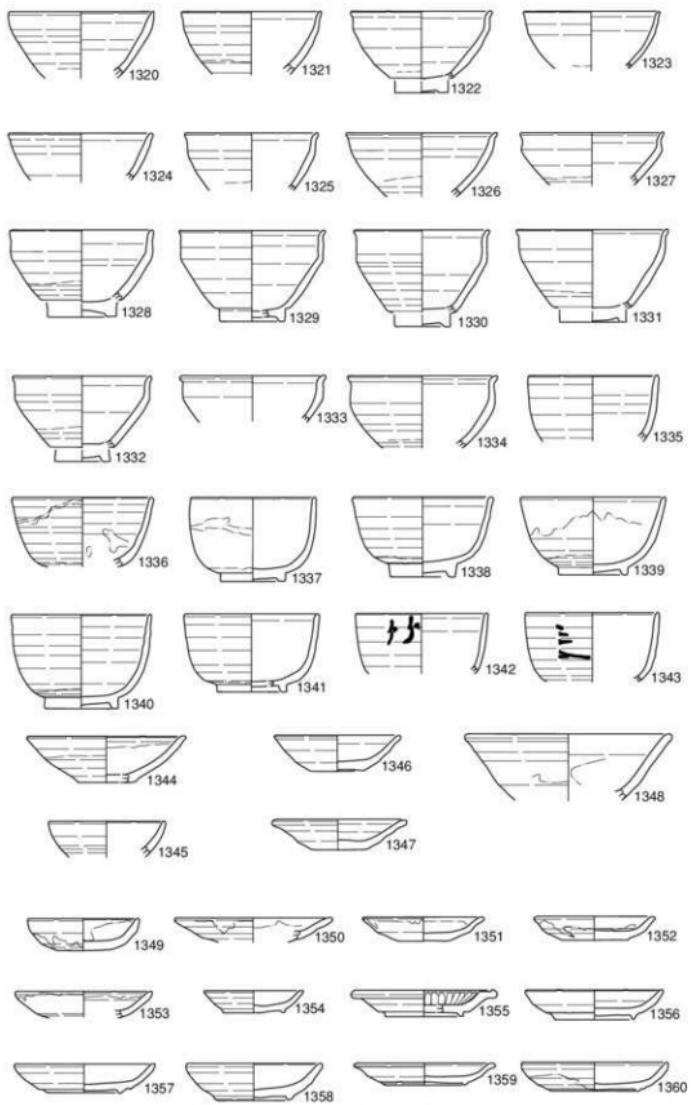
第142図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (38)
SD094



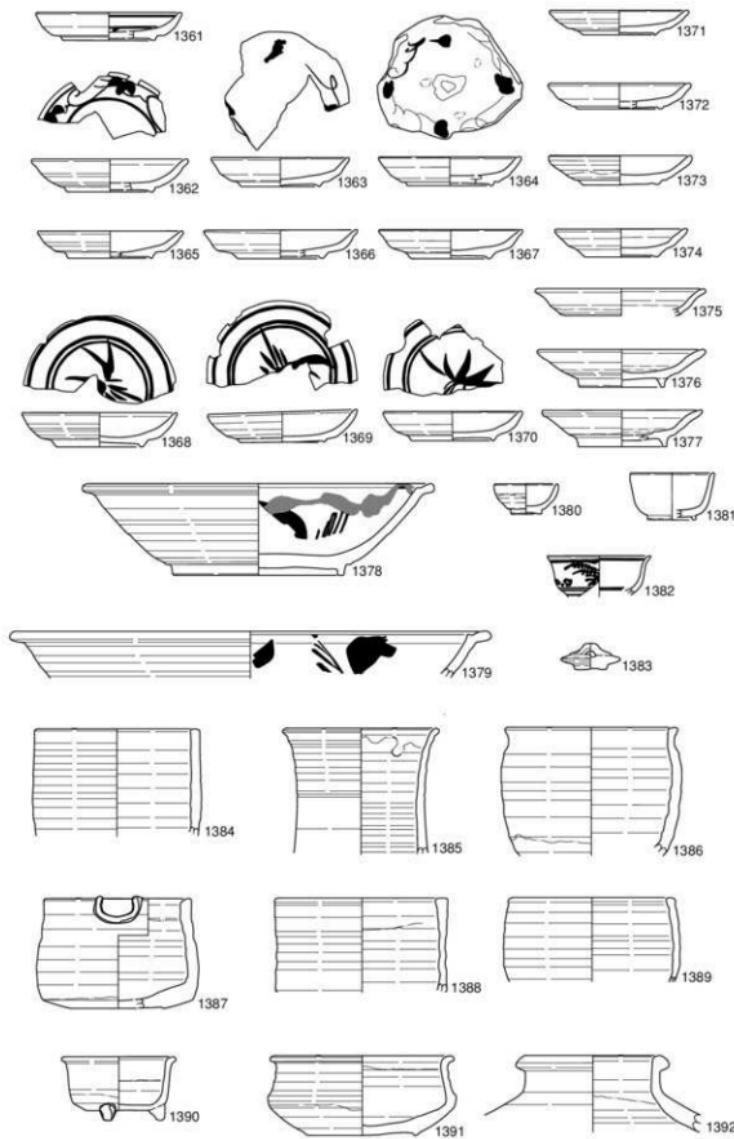
第143図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (39)
SD092-095-151



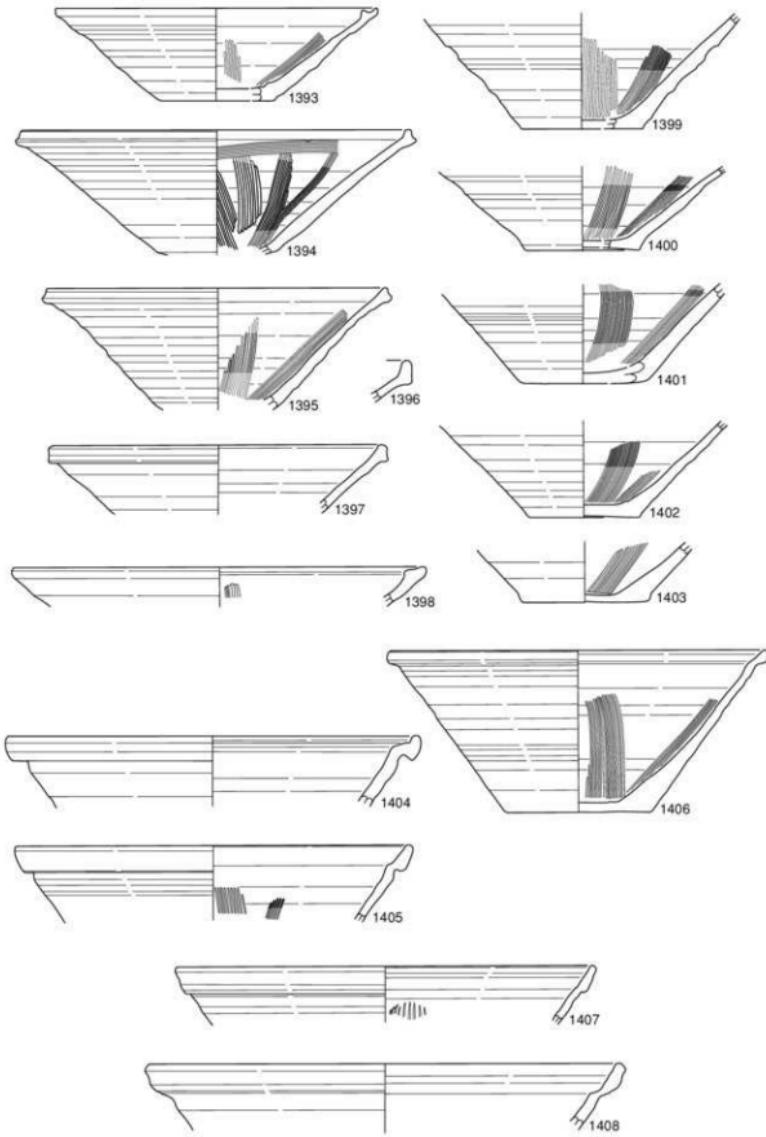
第144図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (40)
SD092-151



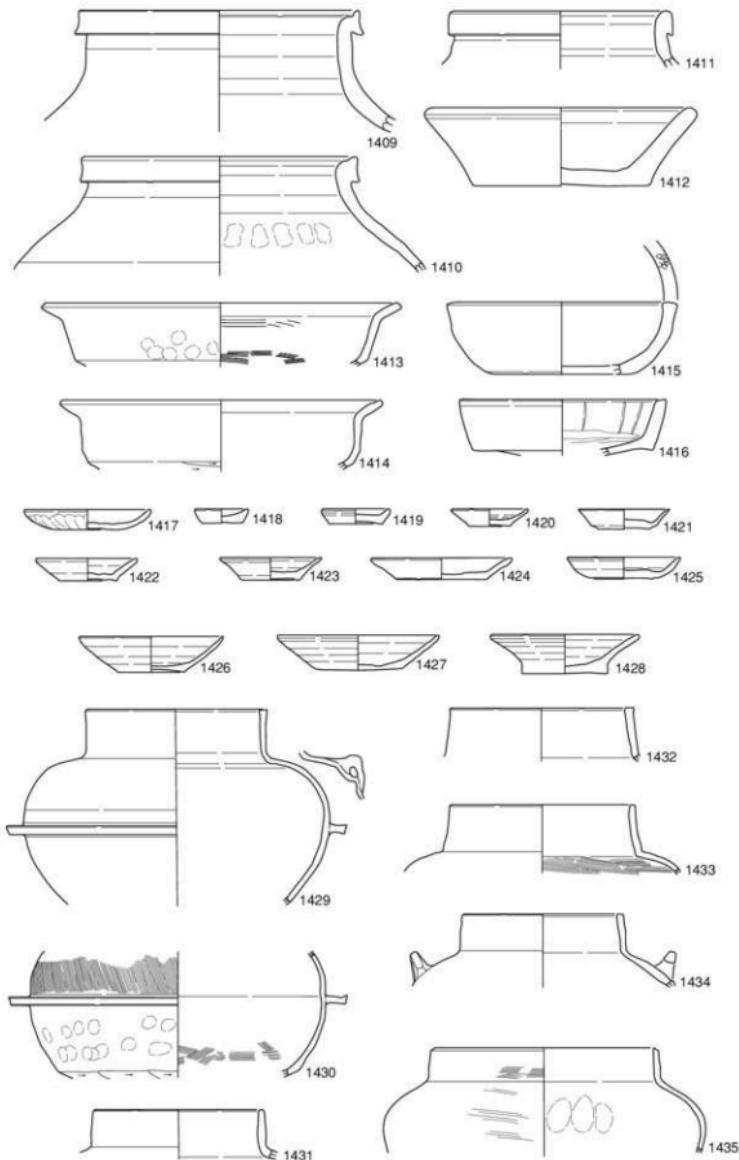
第145図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (41)
SD097



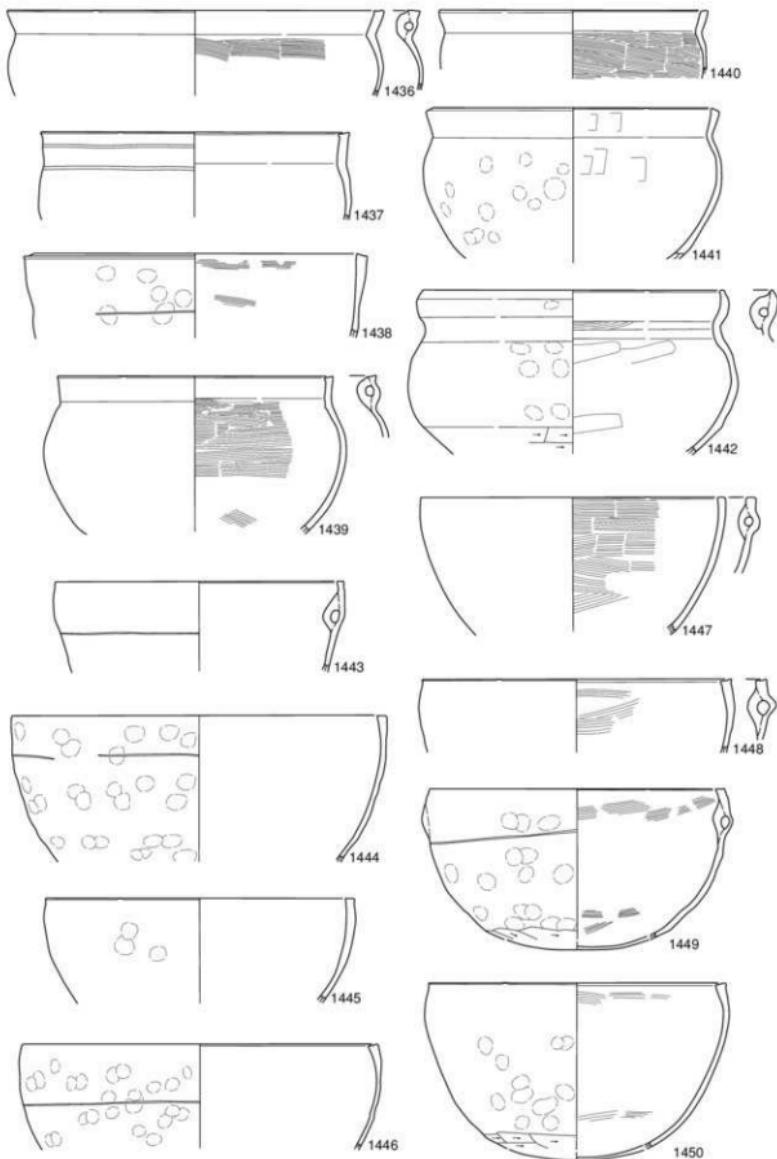
第146図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (42)
SD097-098-099



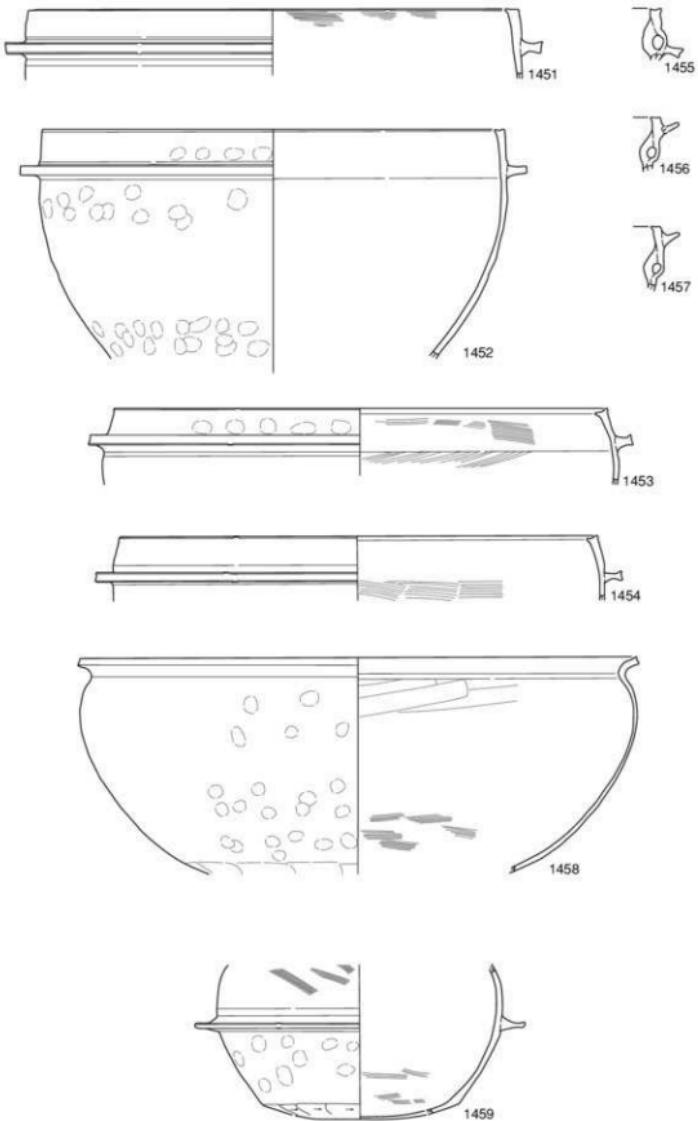
第147図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (43)
SD097



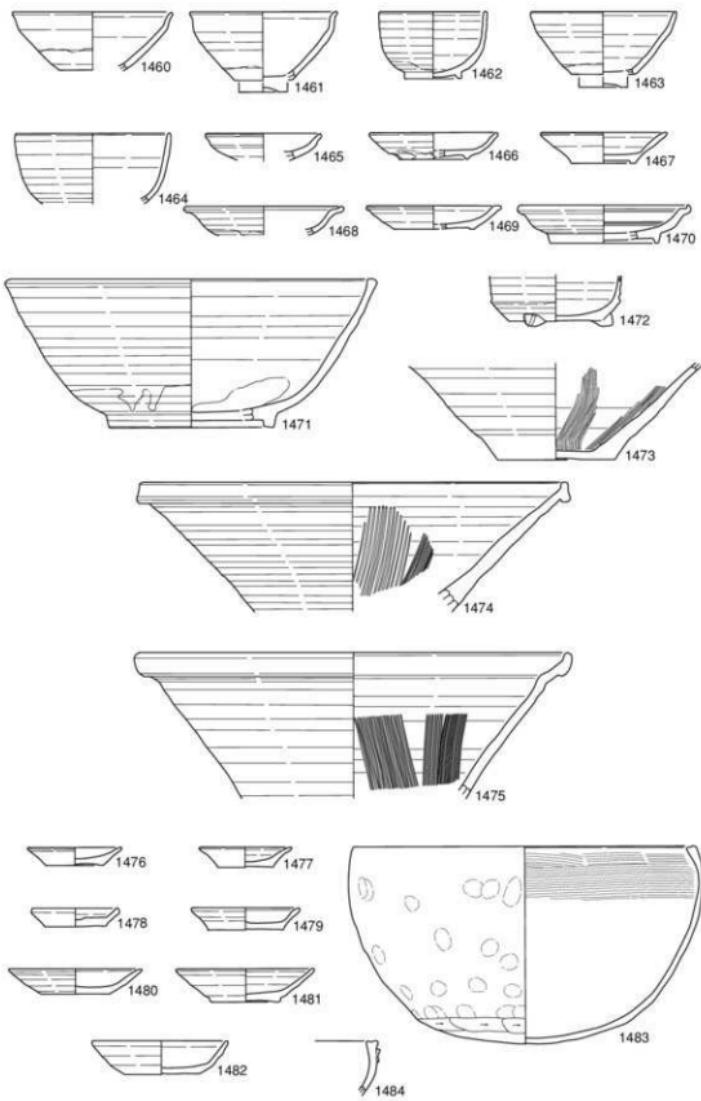
第148図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (44)
SD097



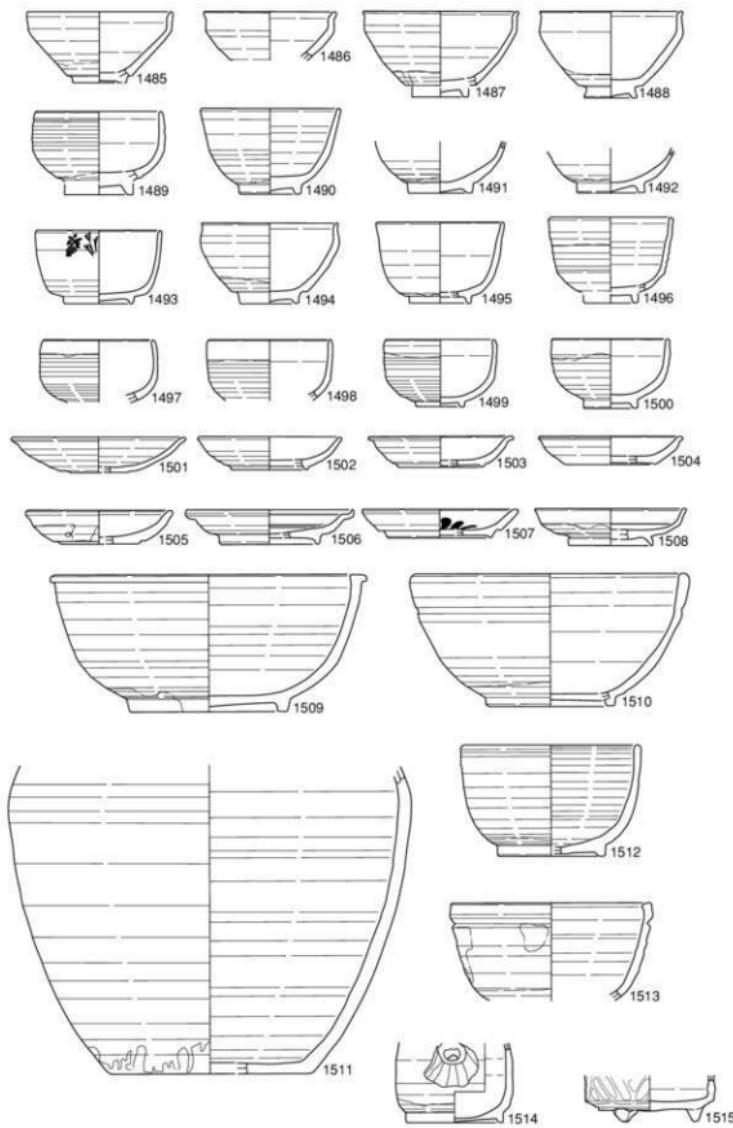
第149図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (45)
SD097



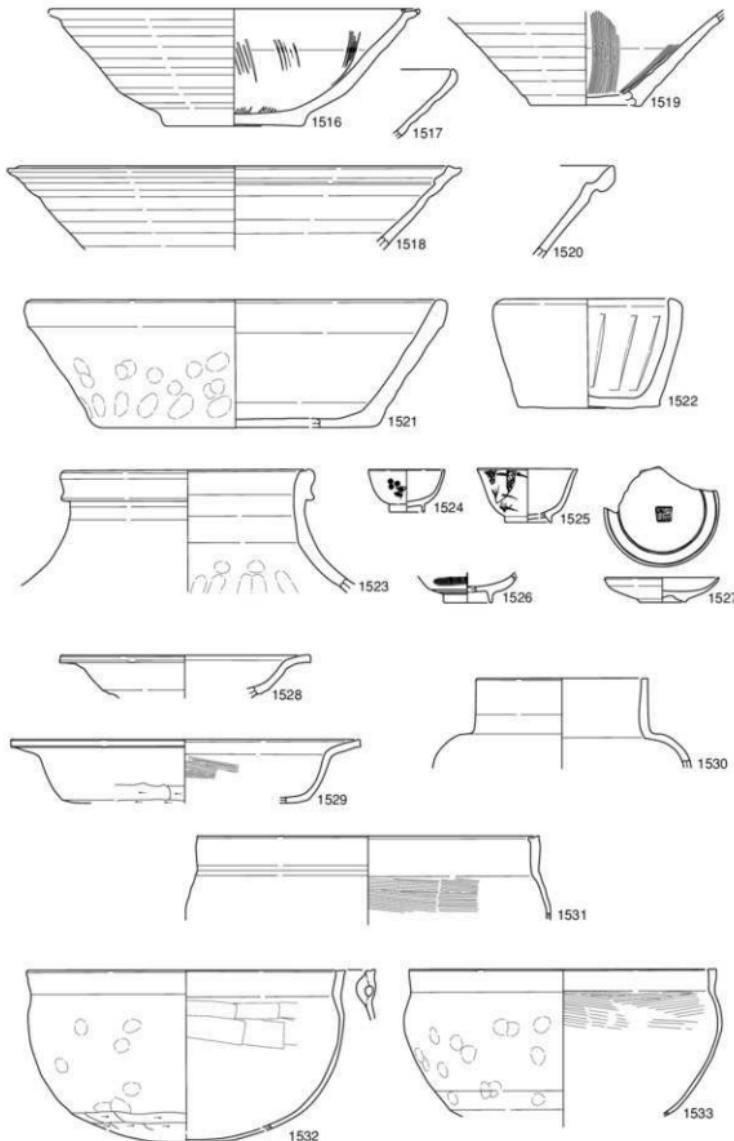
第150図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (46)
SD097-098



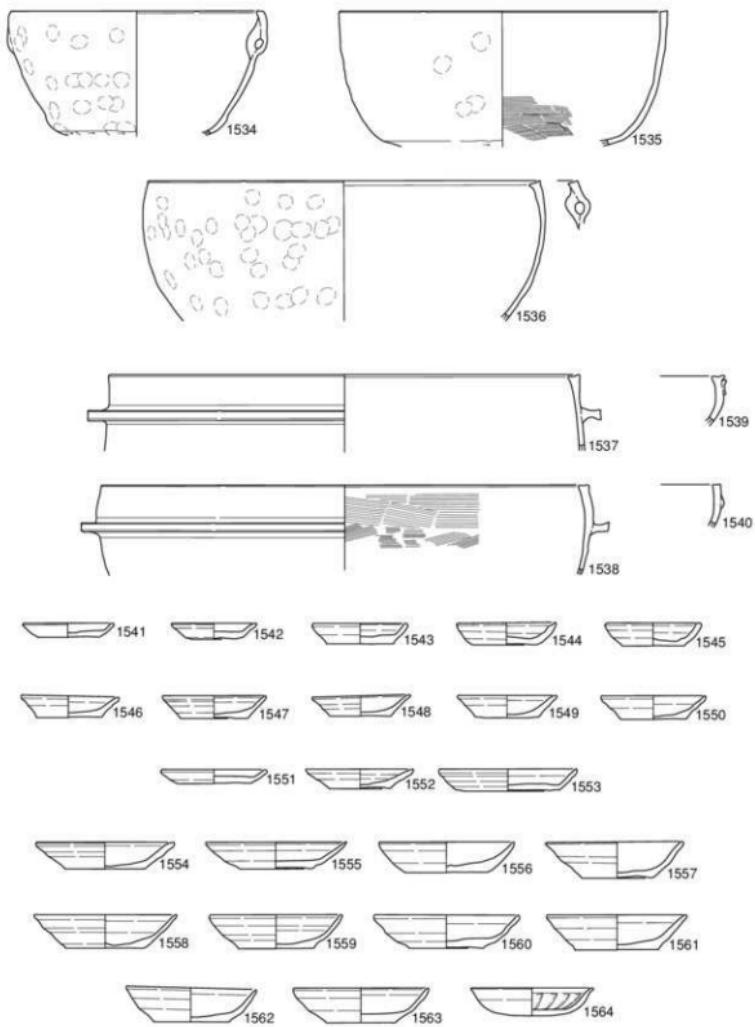
第151図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (47)
SD100 ~ 102・106・152・163



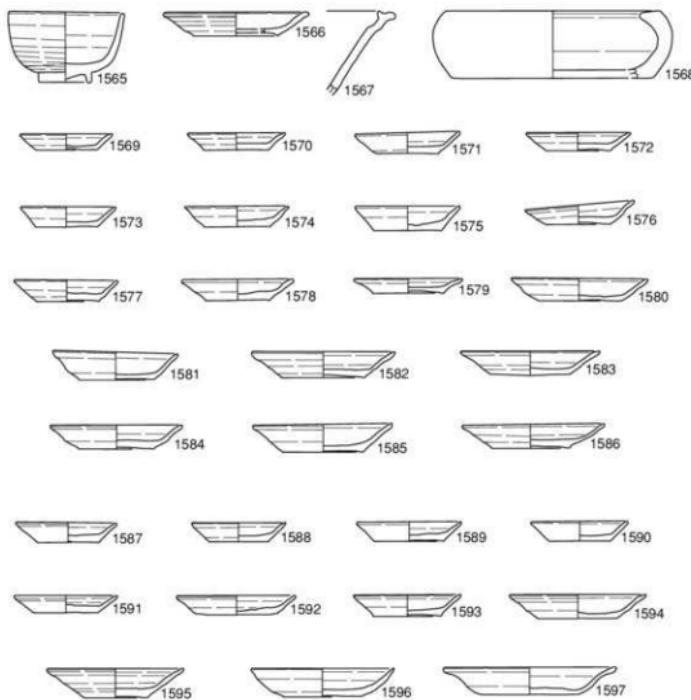
第152図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (48)
SD100



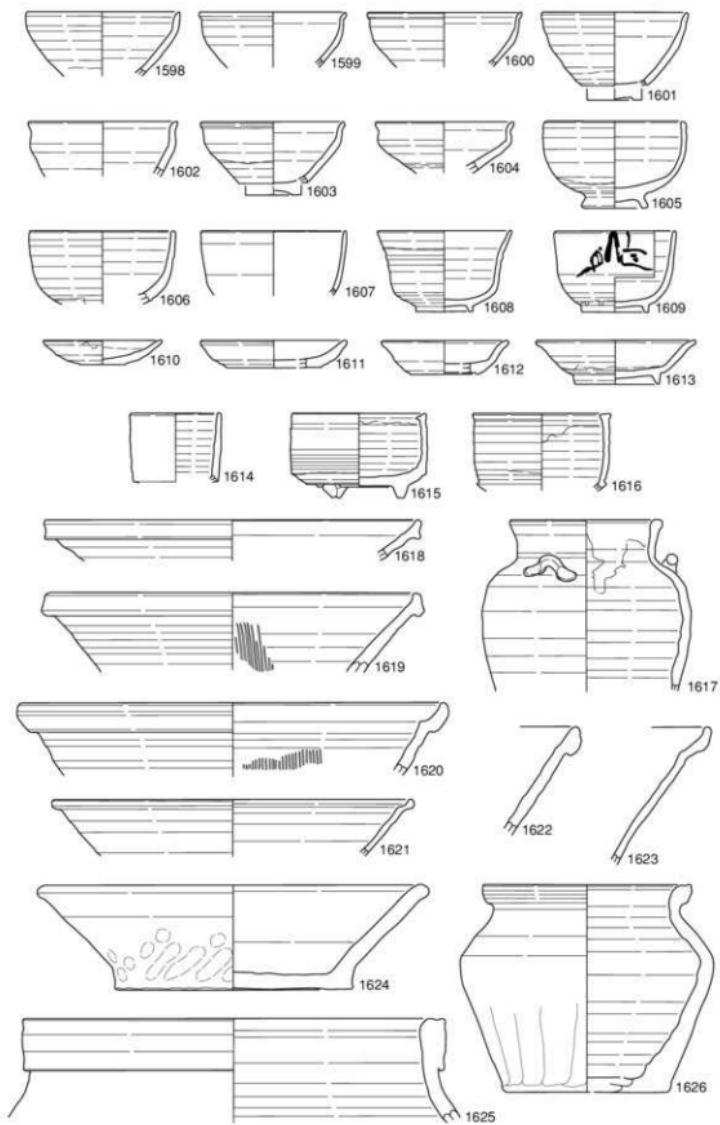
第153図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (49)
SD100



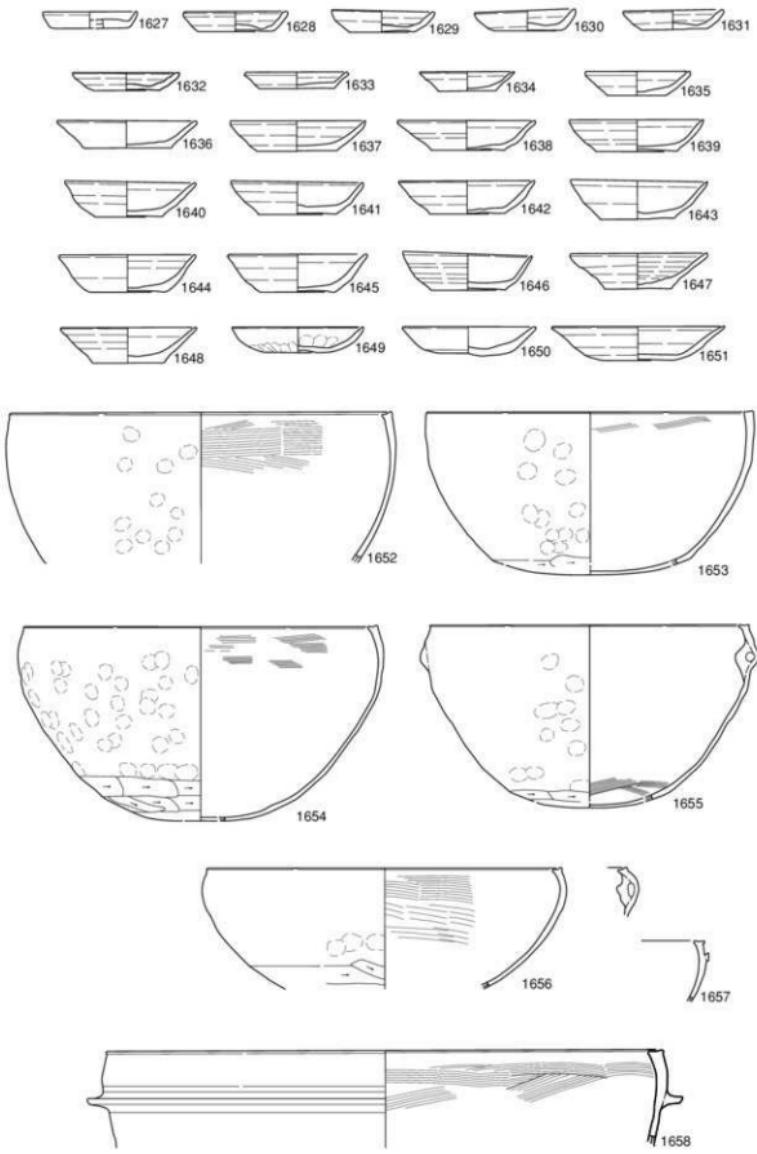
第154図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (50)
SD100



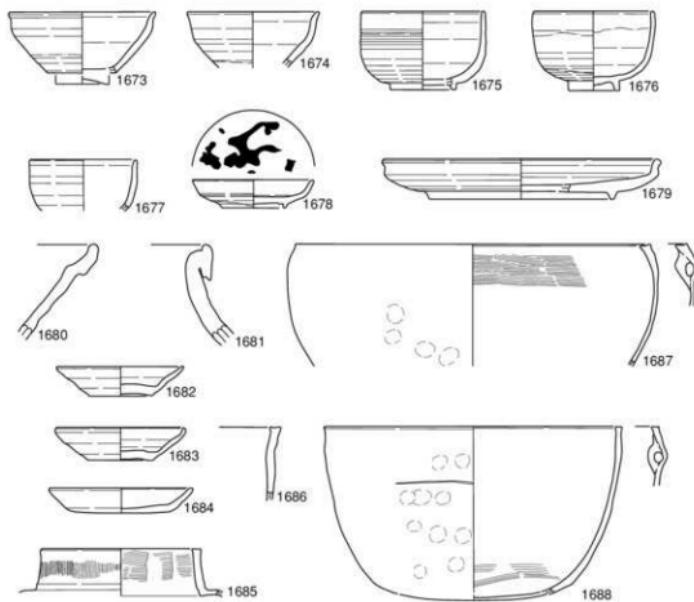
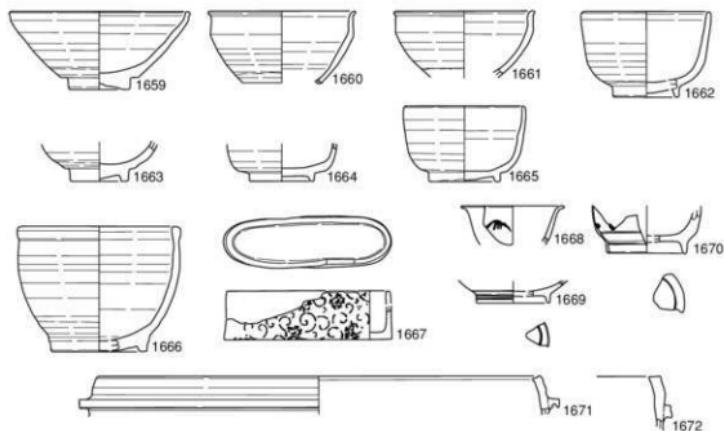
第155図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (51)
SD102-164



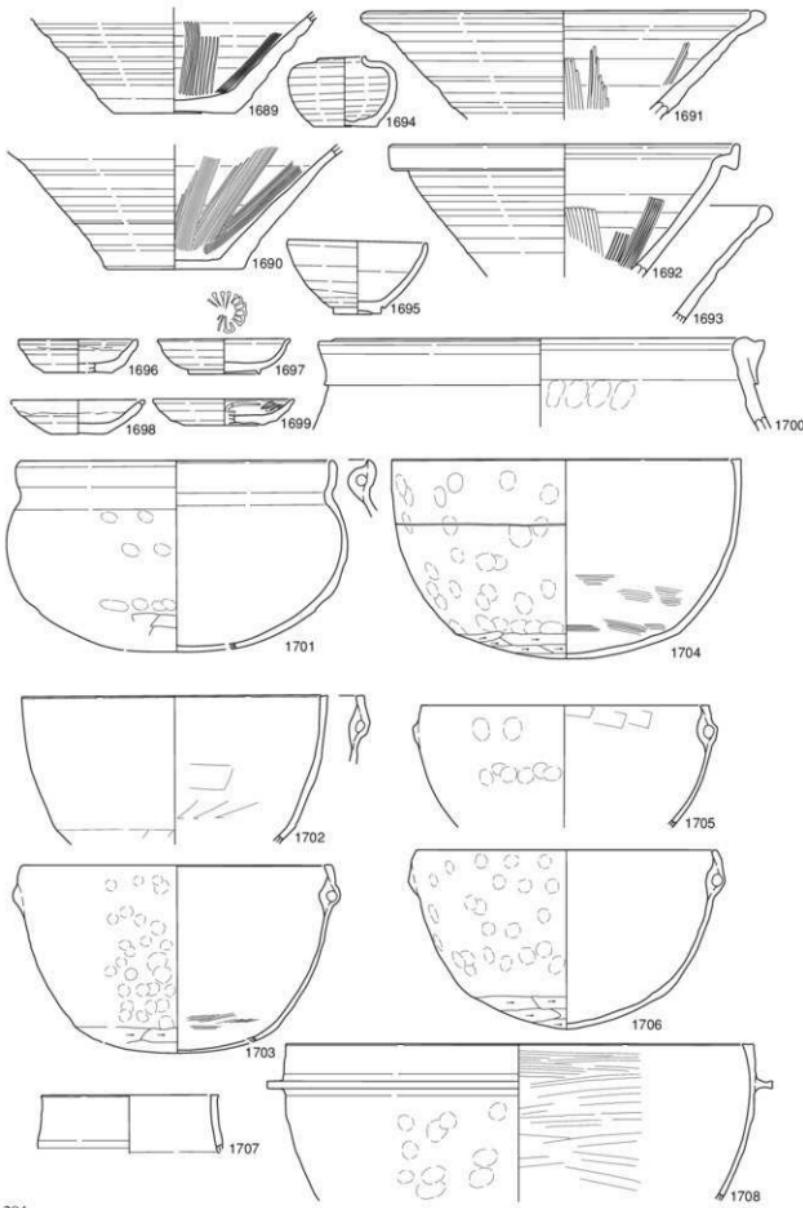
第156図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (52)
SD100



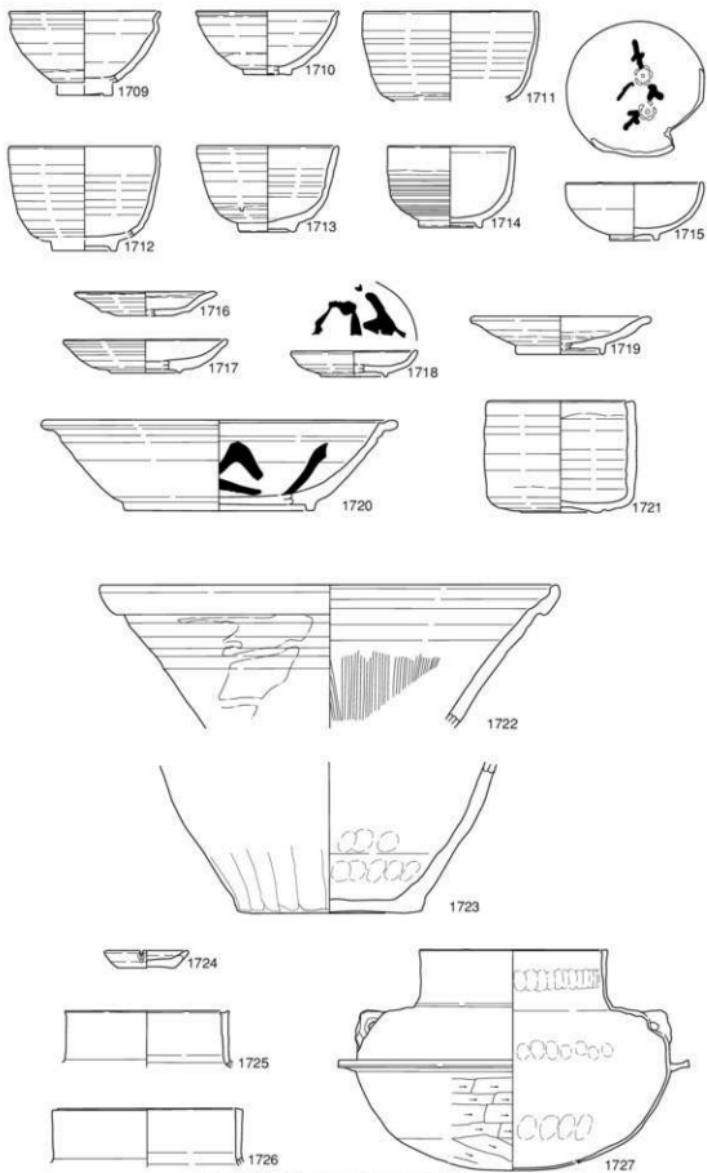
第157図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (53)
SD100



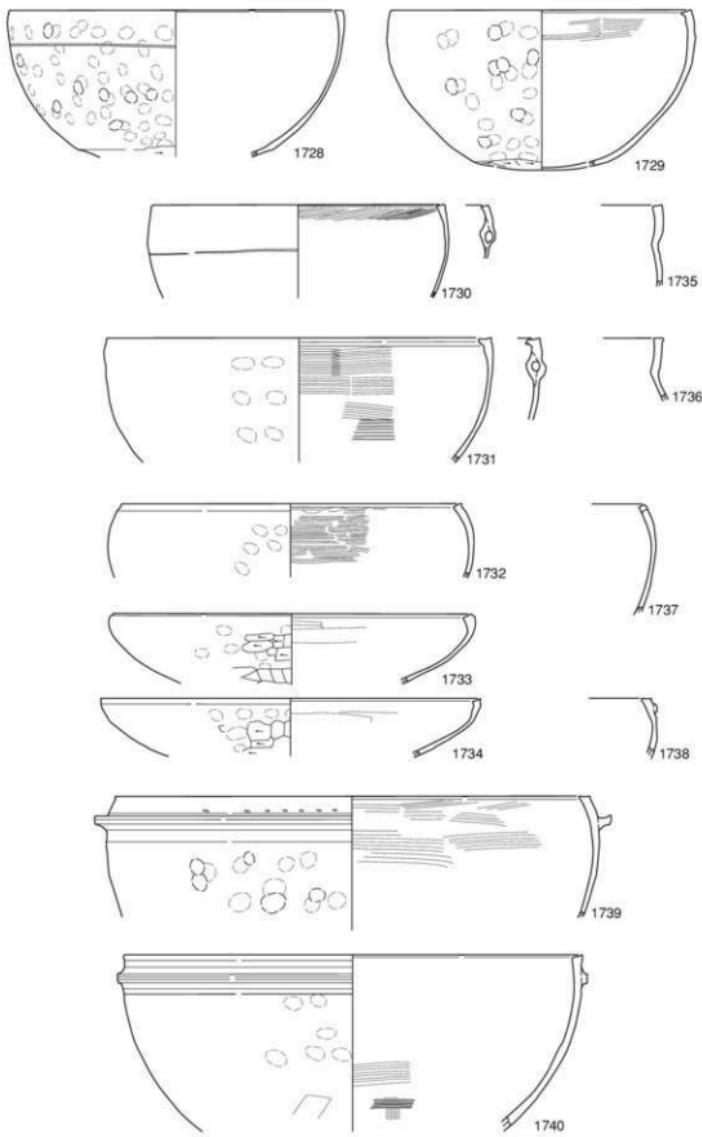
第158図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (54)
SD109・111・113・115



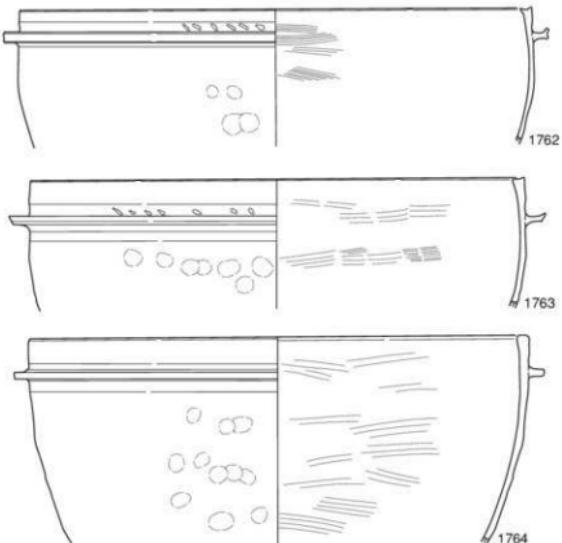
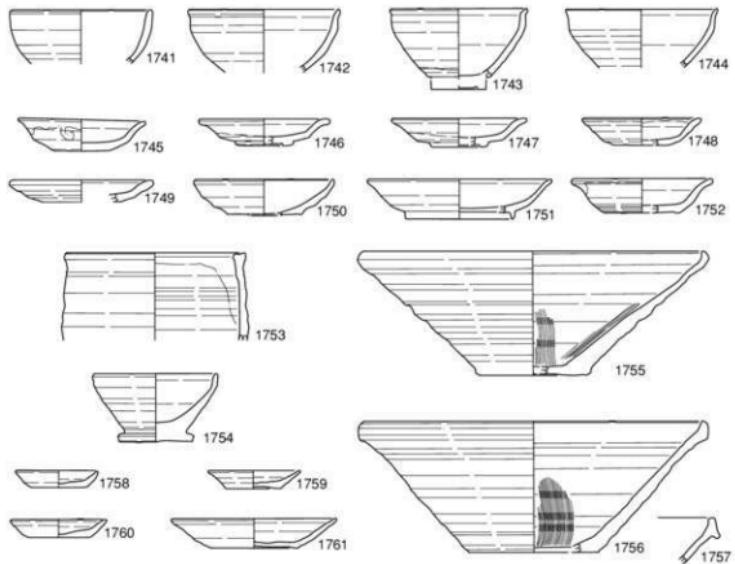
第159図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (55)
SDII17~120



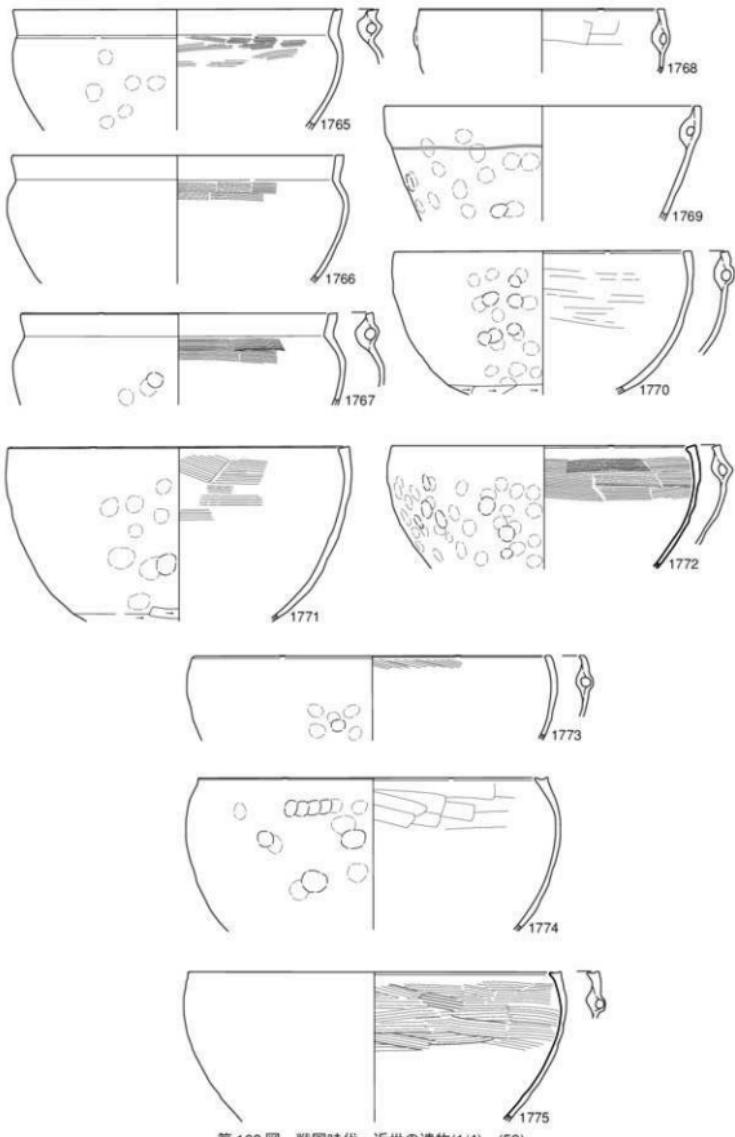
第160図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (56)
SD125・162



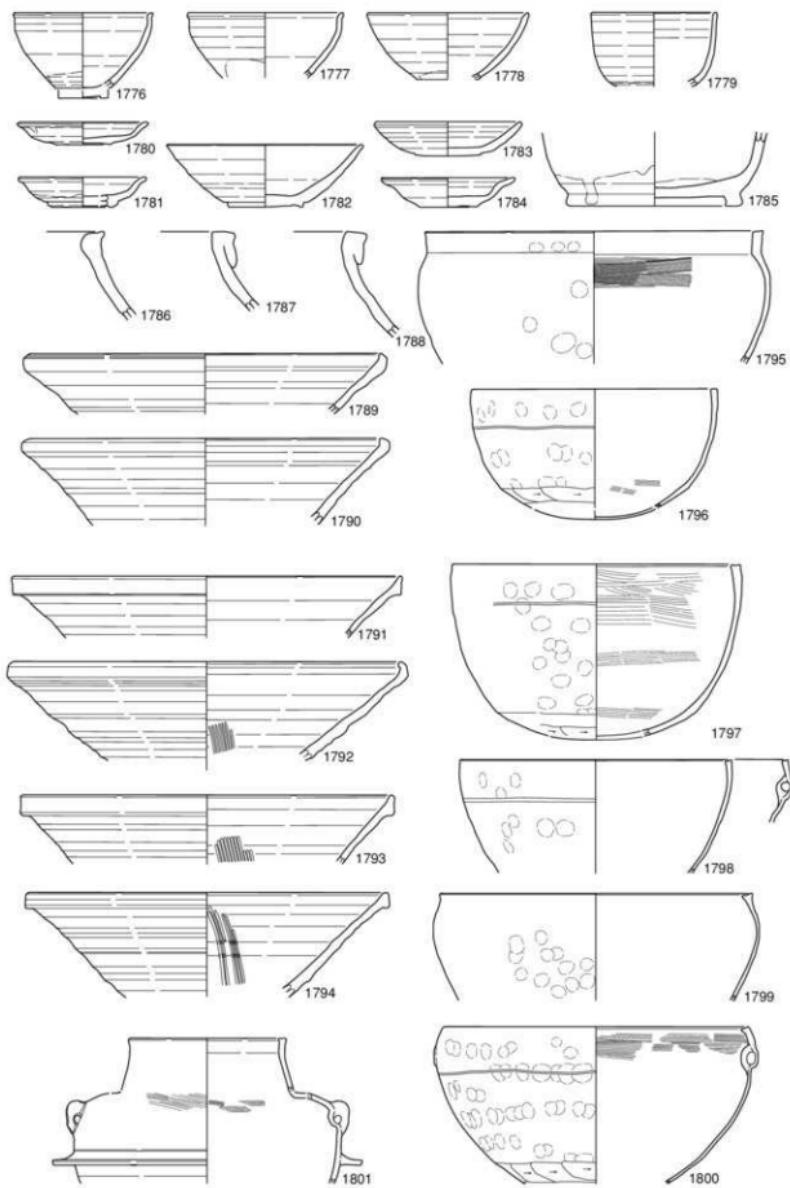
第161図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (57)
SD125-162



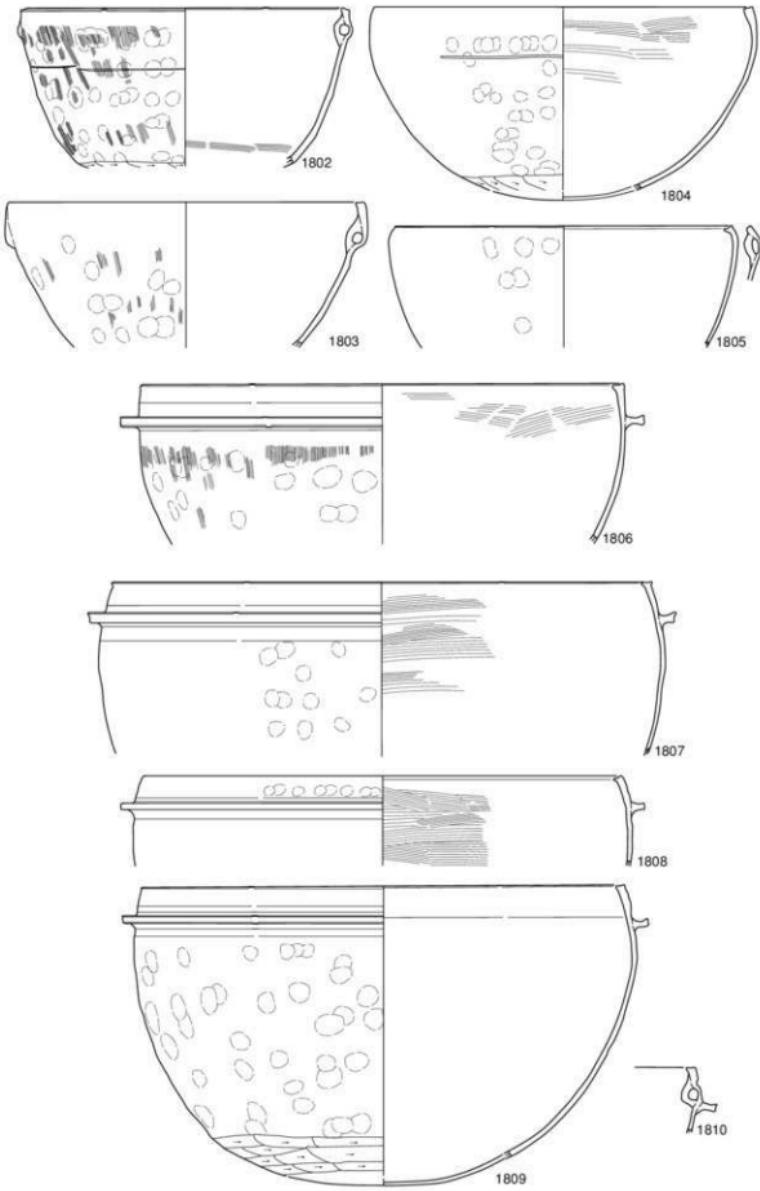
第 162 図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (58)
SD128



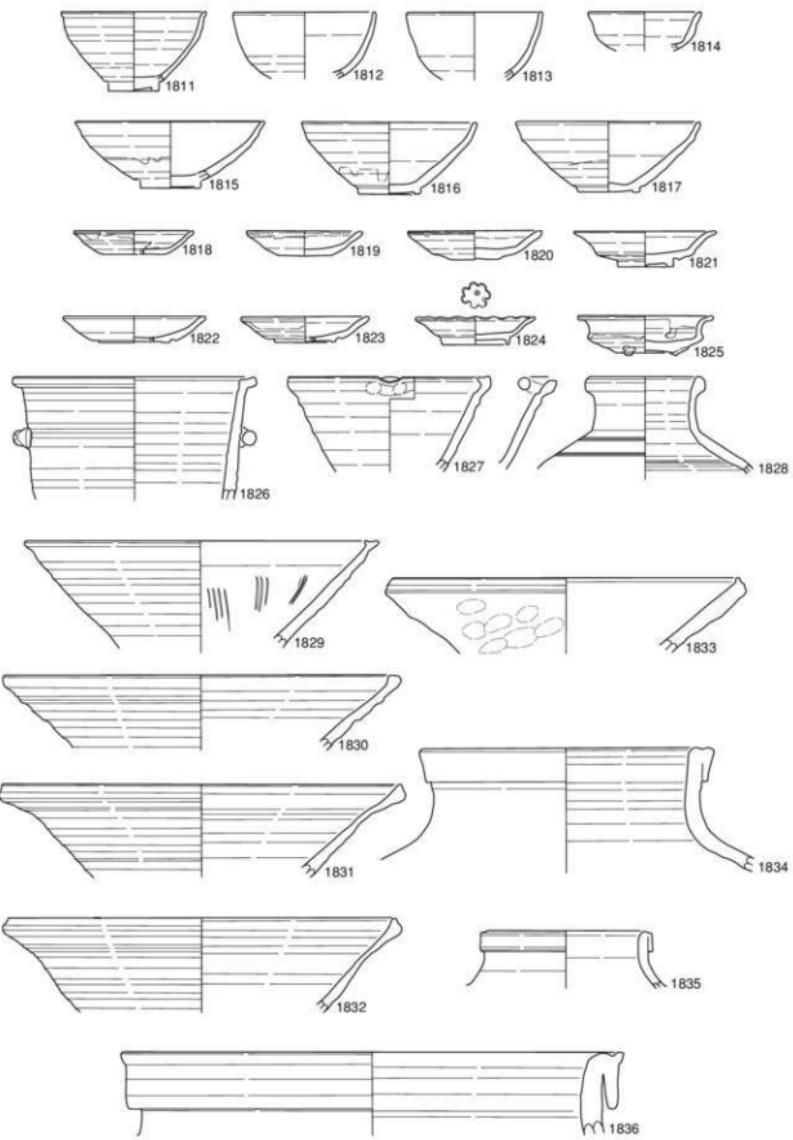
第163図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (59)
SD128



第164図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (60)
SD126・129

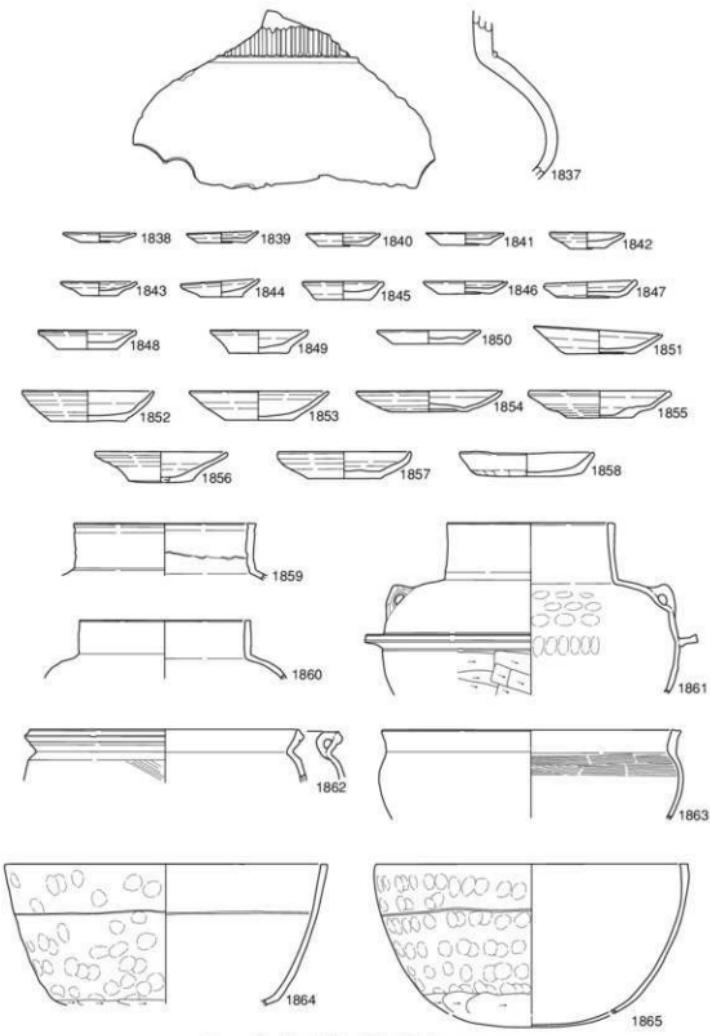


第165図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (61)
SD126

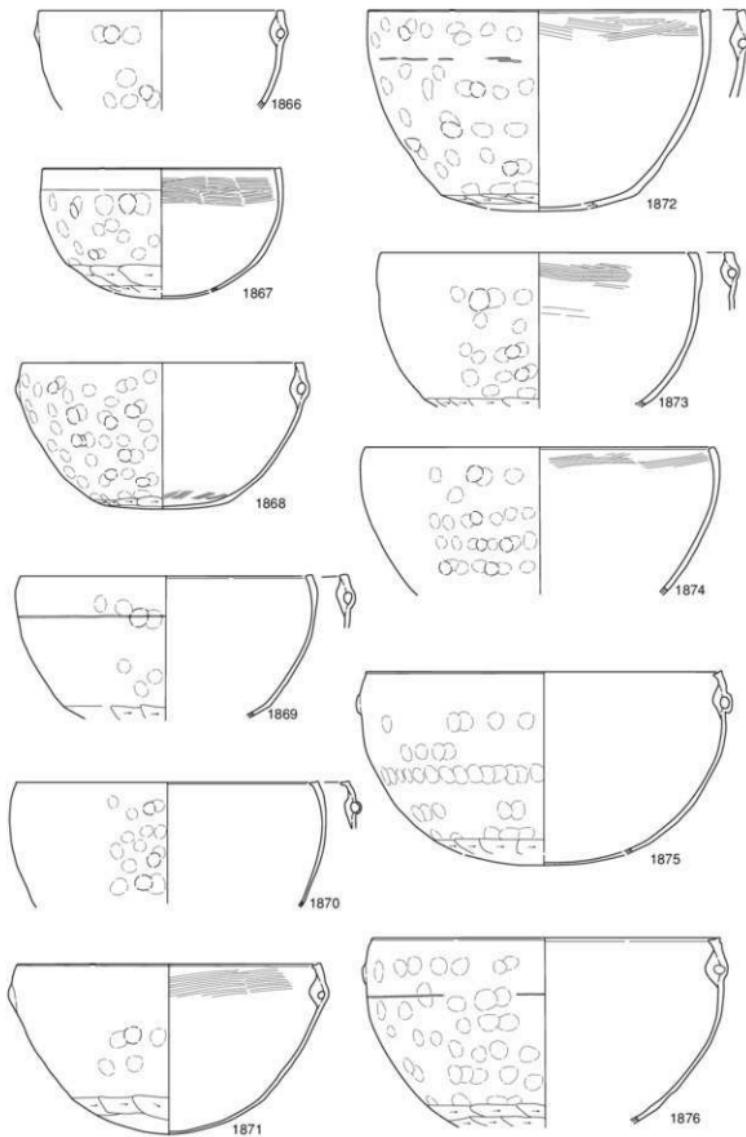


第166図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (62)

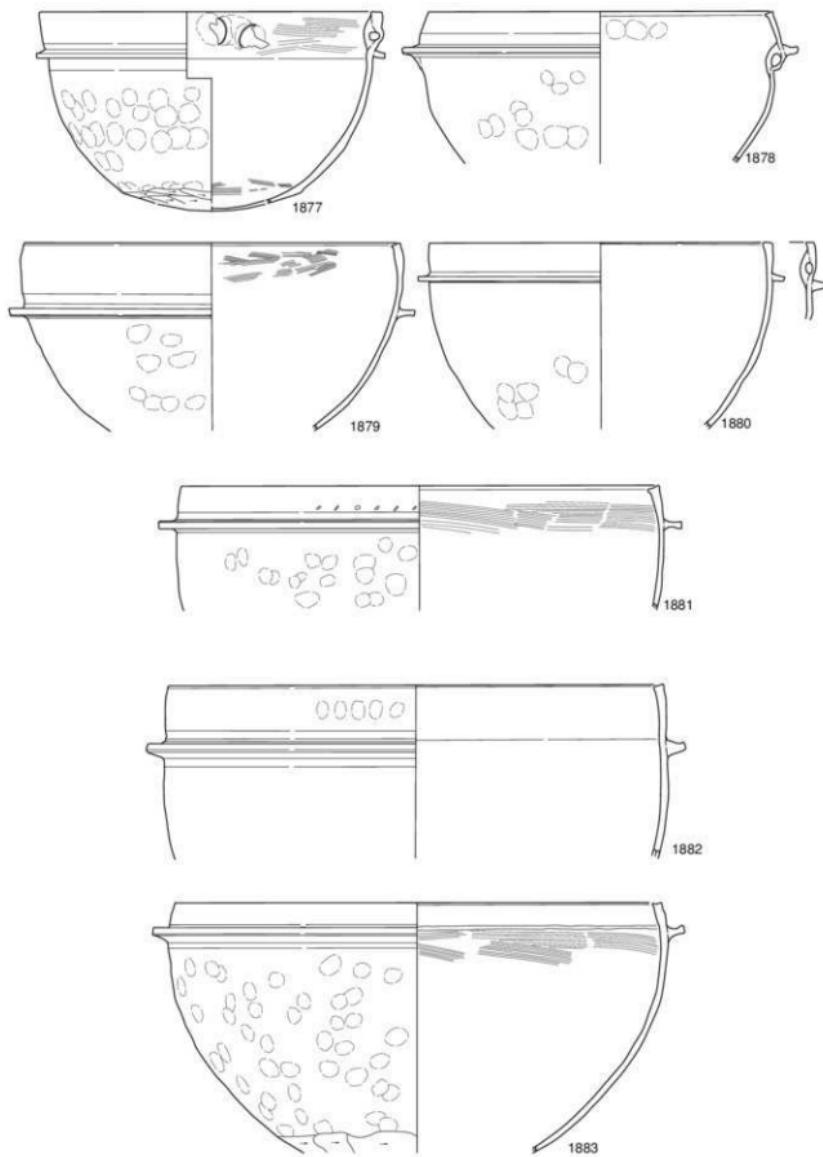
SD141



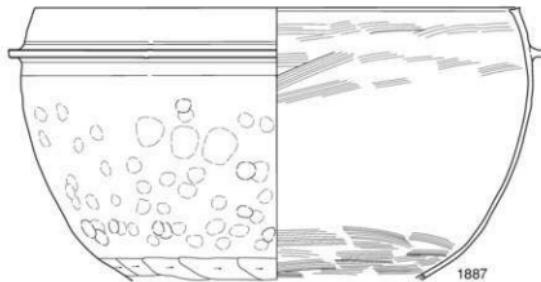
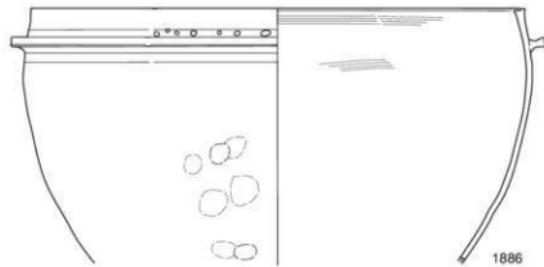
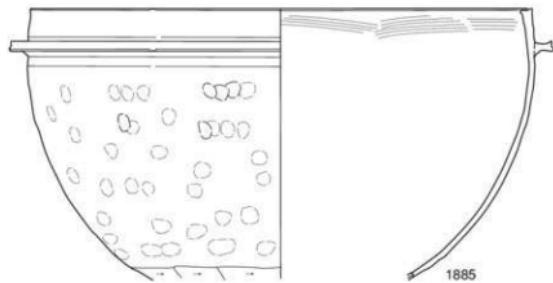
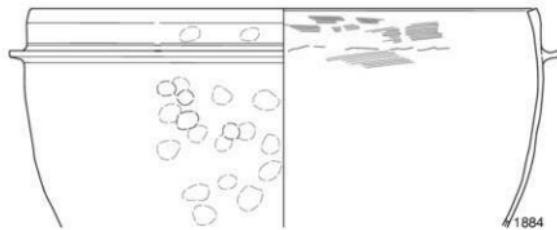
第167図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (63)
SD141



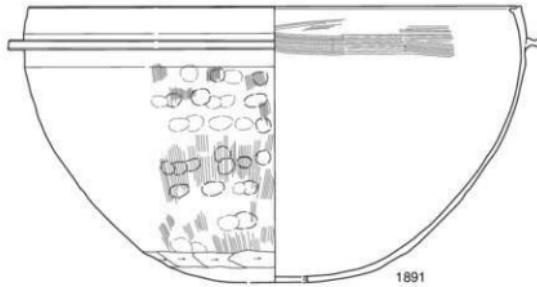
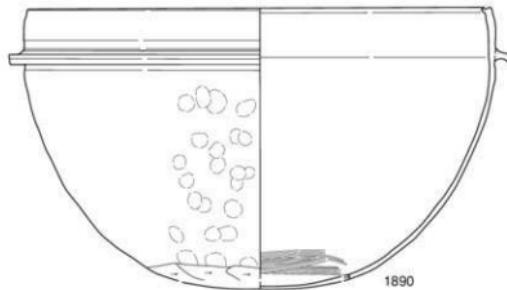
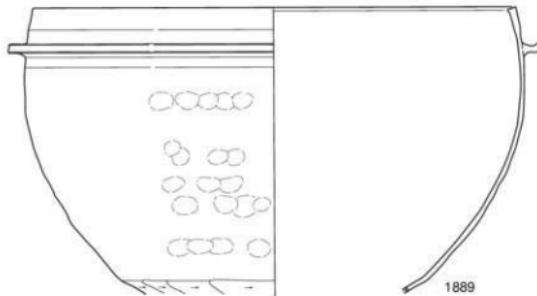
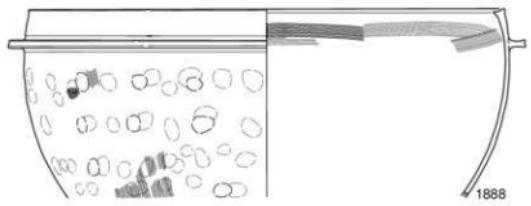
第168図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (64)
SD141



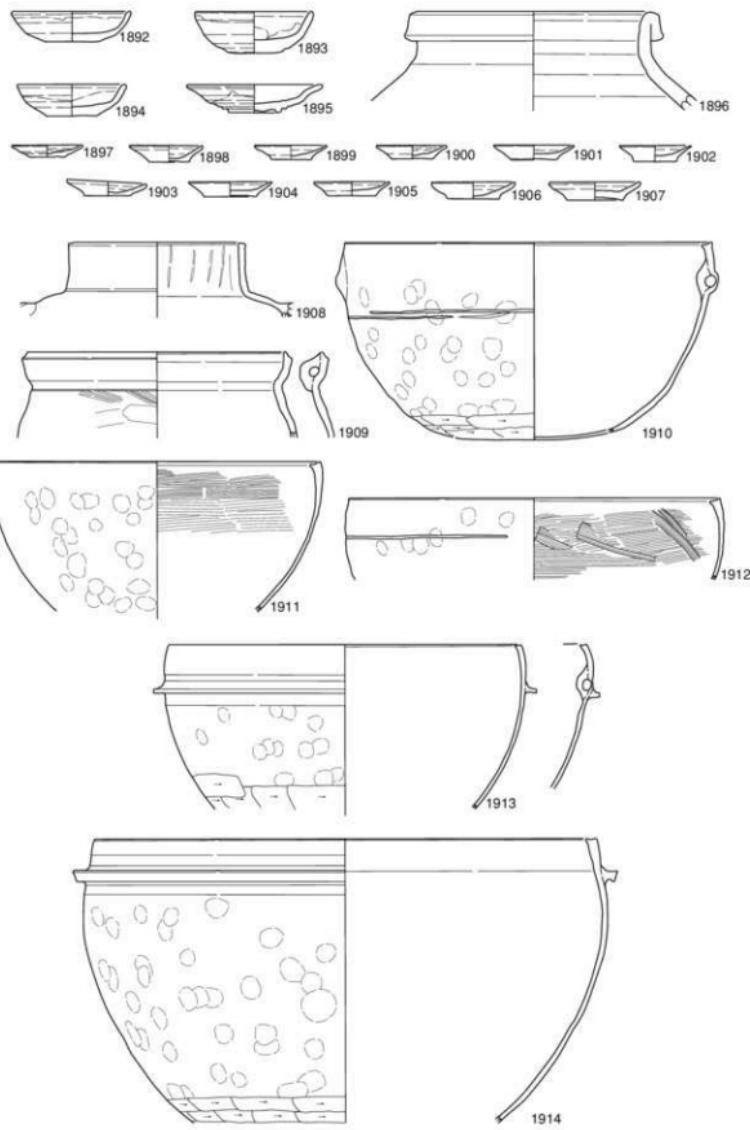
第169図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (65)
SD141



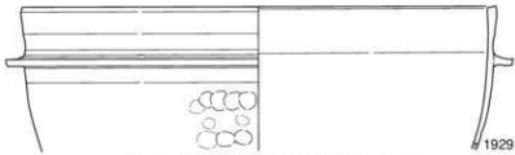
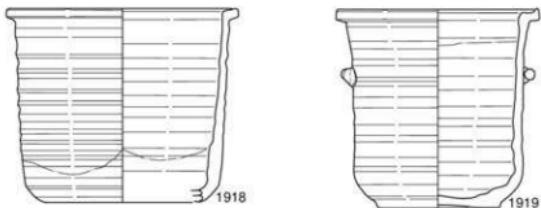
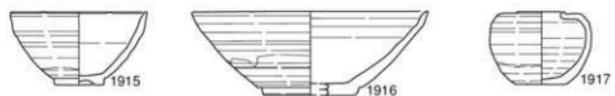
第170図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (66)
SD141



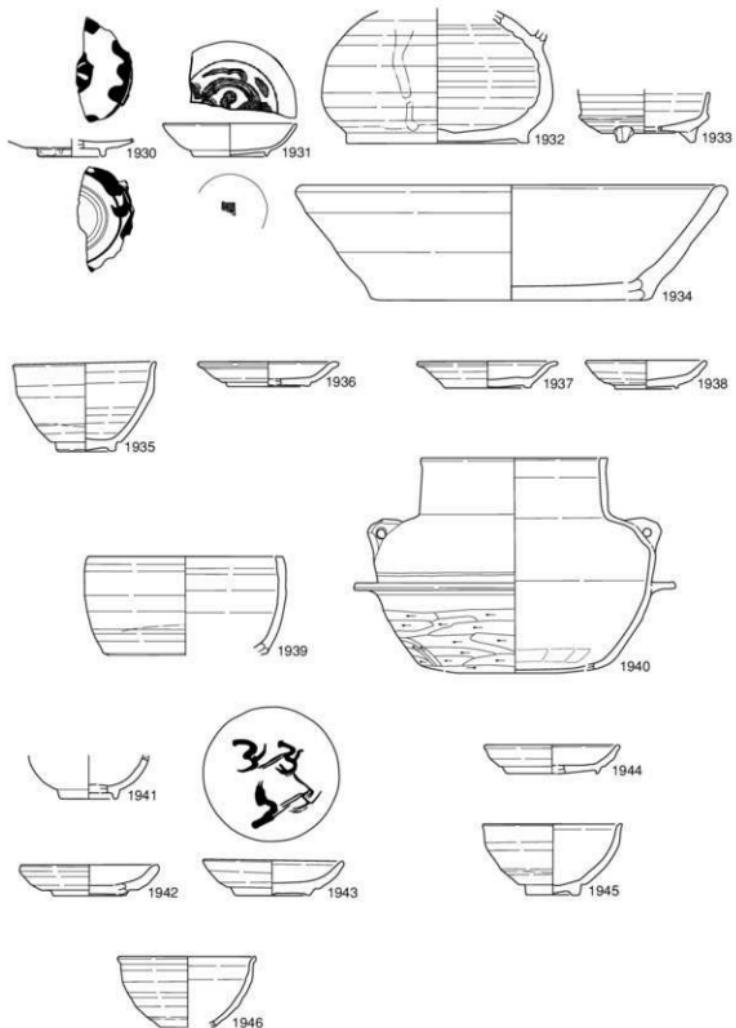
第171図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (67)
SD141



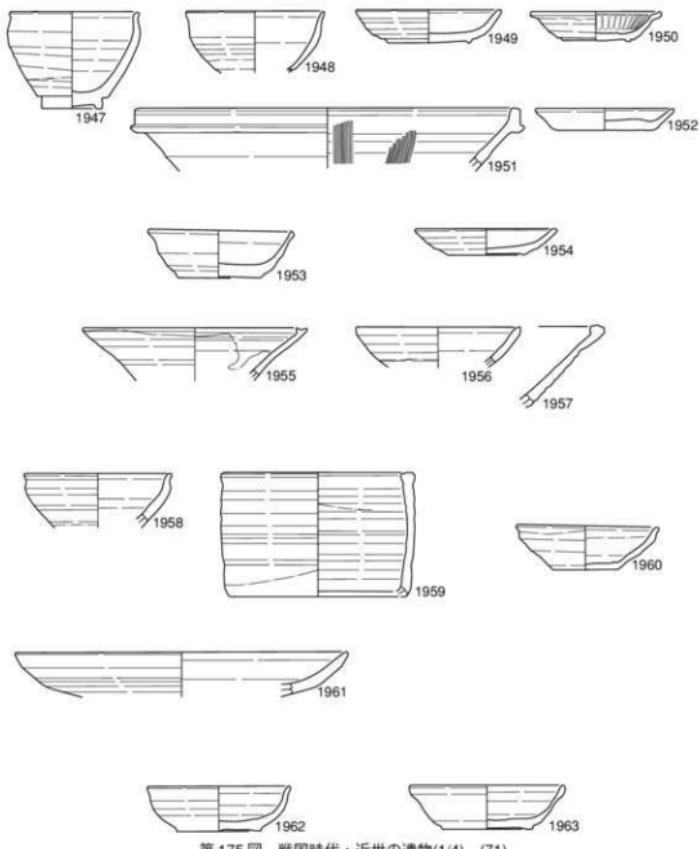
第172図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (68)
SD139・142



第173図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (69)
SD146-147



第174図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (70)
SE05 ~ 07・09・11・42・45・46



第175図 戦国時代・近世の遺物(1/4) (71)
SE72-75・83・93～95・99・101

第2節 石製品

石製品は破片数にして289点出土し、そのうち概ね種別できたのは260点で、多くは戦国時代から近世にかけてのものと推定される。内訳は別表の通りである。なお、石材については、堀木真美子(当センター)の肉眼観察の結果による。

石臼類(第176図1~7) 1~4は茶臼。1が武節花崗岩製、2・3が凝灰岩製、4が砂質凝灰岩製。1の上臼は下面の目が認められず、2の上臼は著しく斜めに磨り減っていて、下面の目も本来のものではないようである。3・4は下臼の受皿の部分で、3は下面に整形痕が見られる。茶臼では、圓化した以外にも、受皿の部分の破片が5点と、径20cmほどになる上臼が出土した。いずれも凝灰岩製である。5~7は粉挽臼。5・6が武節花崗岩製、7は伊奈川花崗岩製。5は下臼で、上面に6分画の目が残存するが、下面にも目が刻まれている。6は上臼で、下面の目は認められなかった。7は上臼で、下面の「ものくぱり」から反時計回りで使用されたことがわかる。側面には孔ではなく縫の凹みがあり、挽木を凹みに充ててタガなどで固定していたと考えられる。圓化しなかったが、同じくくらいの径の伊奈川花崗岩製の下臼が97E区のSK234から出土していて、目は不明瞭ながら3分の1ほど残存し8分画と推定される。下臼の側面にも縫の凹みがあり、5にも見られる。

石塔類(第176図8~11) 全て武節花崗岩製。8・9は相輪部片で、同一個体の可能性も考えられる。10は笠部で、8・9との組合せも考えられる。軒上に4段、軒下に2段あり、西三河式宝篋印塔と推定される。11は一石五輪塔の火水地輪部片。水輪部の断面形から、直方体の石材から加工したと推測される。圓化した以外に、一石五輪塔の水地輪部片と、五輪塔の地輪と思われる一辺約19cmのほぼ立方体のものが2点と、水輪の一部と思われる破片が1点出土した。

緑色凝灰岩製砥石(第177~179図12~46) 個体数で89点を数える。ほぼ直方体の一面を研ぎ面とするA類、縦断面形が三角形を呈するB類、縦断面形が菱形を呈するC類に分類し、概ね大別できたが、使用状況や厚さの点で他と異なり分類不能のものもあった。12~24はA類としたが、14・24はB類ともとりうる。よく使用されて磨滅の著しい方を下面としたが、上面も下面と同程度に使用されたと考えられるもの(12・17・20)もある。13は、両側面と上面に櫛歯状の整形痕が認められる。25~35はB類。三角形の三辺のうち一番長い辺を背とし他の二辺を腹とした場合、大体は腹の二辺が主要な研ぎ面となっているが、26・31・32は背も同程度に使用された痕跡が認められる。横断面は腹の方が幅広になるも概ねほぼ長方形を呈するが、30は極端に腹の方が多い。33・35は、両側面と背に櫛歯状の整形痕が認められる。36~41はC類。菱形の四辺にあたる面はどれもほぼ同程度に磨滅していて、同程度に使用されたと考えられる。A類B類に比べて途中で折れているものは少ないが、全体に短いものが多い。42は縦断面形からA類に分類することもできるが、側面にあたる面がよく磨滅していて他と異なる。43~46は厚みがない点が他と異なる。このほか圓化しなかったものの内訳は、A類が13点、B類が27点、C類が8点、その他または不明が6点である。

その他の凝灰岩製砥石(第179~180図47~62) 個体数で48点を数える。47~50は平面形、側面形が台形で、全面を使用している。特に48~50は、側面の湾曲の具合など共通した特徴が見られる。50は古代の溝SD201の下層からの出土。53は緑色凝灰岩製のB類、62は同じくC類に、それぞれ形態が似ている。そのほかは、大きさは様々だが、ほぼ直方体を呈し、概ね全

面を使用している。55は破面に赤変が見られる。

泥質凝灰岩製砥石(第180図63～70) 70以外は小型。67は特に小型で、小口面も含めて全面を使用している。70は古代の住居址SB34からの出土である。67・70以外は短冊形。

凝灰岩質泥岩製砥石(第180図71～75) 72以外は短冊形。泥質凝灰岩とほぼ同じように使われていたと考えられる。

その他の石材の砥石(第180・181図76～84) 76・77は泥岩製。79～81は結晶片岩製。82・83は武節花崗岩製。84は濃飛流紋岩製。これらの石材は全体に大型のものが多く、形は角柱状のものと不整形なものがある。

その他の石製品(第181図85～99) 87～92は硯。87は孔があくまでよく使用されている。90は孔をあけていて、二次的に砥石として使用したと考えられる。小振りの91は、あまり使用されていないようで、拂帶用と考えられる。硯は、石製品のほかに瓦質のものが2点出土した。93～97はホルンフェルス製で、碁石の黒と考えられる。碁石の白として、緑色凝灰岩製の98と武節花崗岩製の99を図示したが、厚さと大きさに疑問がある。86は笏谷石製で、推定底径が30cm近い容器と考えられ、外底面にススの付着が認められる。85はホルンフェルス製で、古墳時代の管玉と推定される。そのほか図化しなかったが、石鎚など弥生時代以前の石器も出土した。

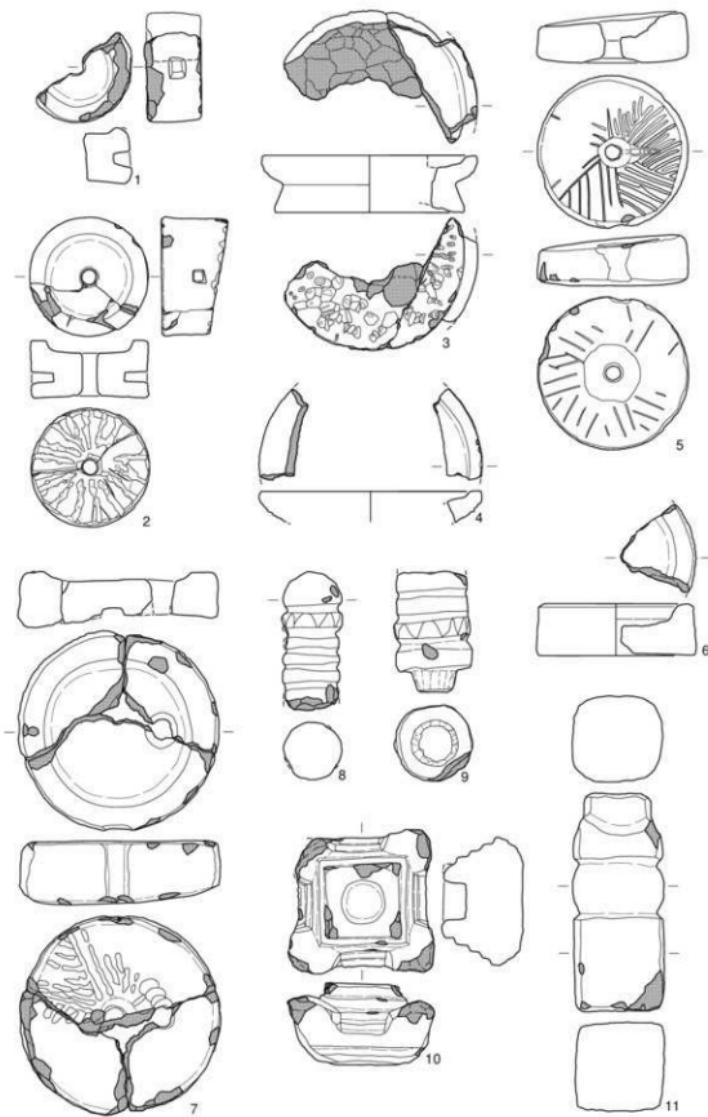
(水野多栄)

参考文献

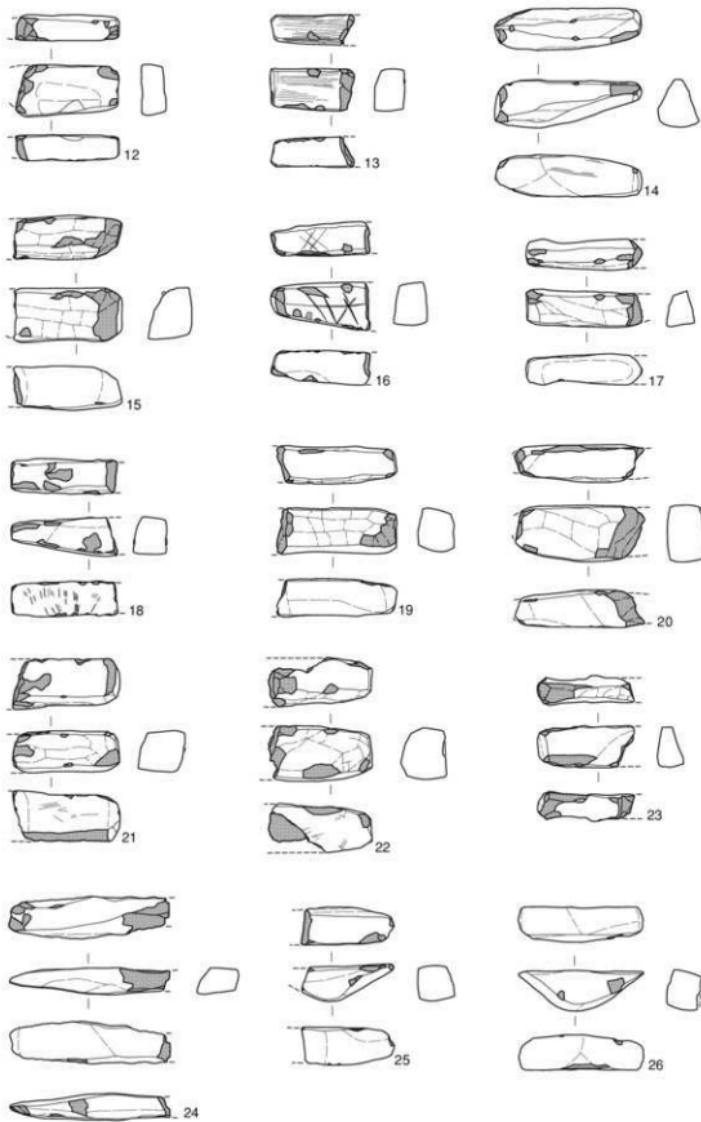
北村和宏 1999「石製品」『大脇城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第86集

	98A	97F	97E	97D	97C	97B	97A	98B	98C	合計	
石臼類	茶白	0	1	0	3	1	0	6	0	2	13
	粉挽臼	1	0	1	0	0	0	4	0	0	6
石塔類		2	3	0	0	0	0	2	1	0	8
砥石	緑色凝灰岩	9	13	19	9	18	5	18	4	3	98
	凝灰岩	5	5	4	11	14	4	9	2	2	56
	泥質凝灰岩	0	0	2	2	3	2	0	1	1	11
	凝灰岩質泥岩	0	1	1	2	1	0	7	0	0	12
	泥岩	0	2	0	1	1	0	1	0	1	6
	結晶片岩	0	1	1	3	5	0	2	0	0	12
	武節花崗岩	1	0	0	1	2	0	3	1	0	8
	濃飛流紋岩	0	0	0	0	1	0	2	0	0	3
	ホルンフェルス	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
硯		0	0	2	0	1	0	3	0	2	8
碁石		2	2	1	1	0	1	0	0	0	7
その他		0	2	4	1	1	0	1	2	0	11
合計		20	30	35	34	48	12	58	12	11	260

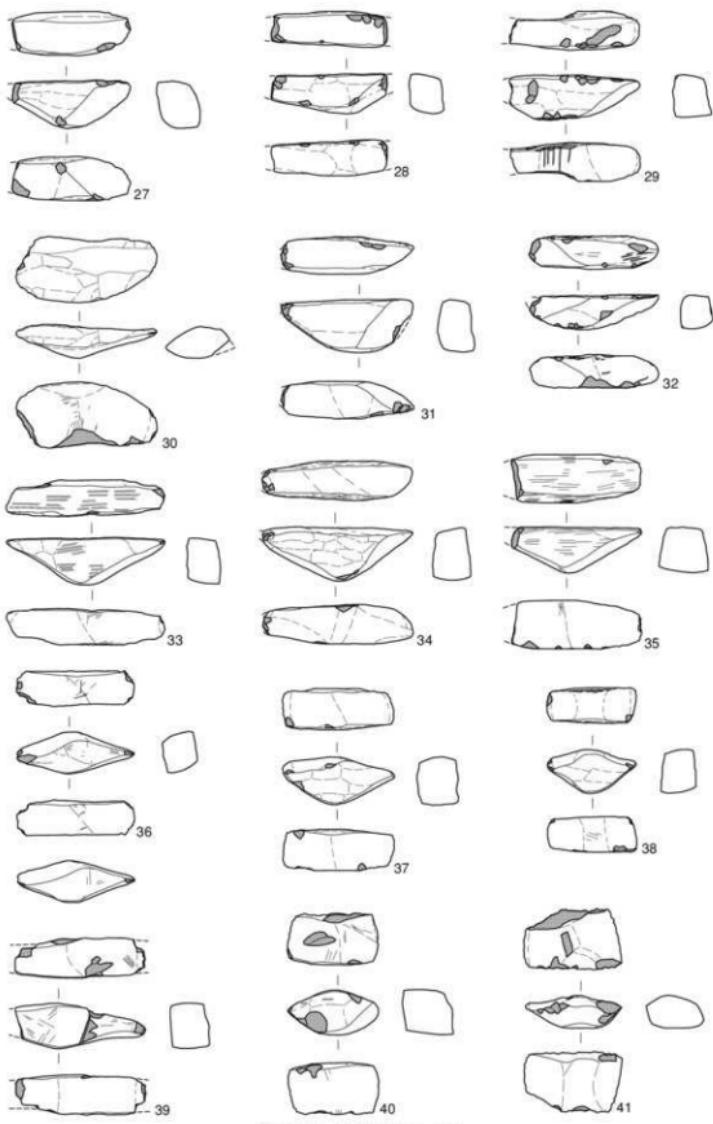
第2表 石製品組成



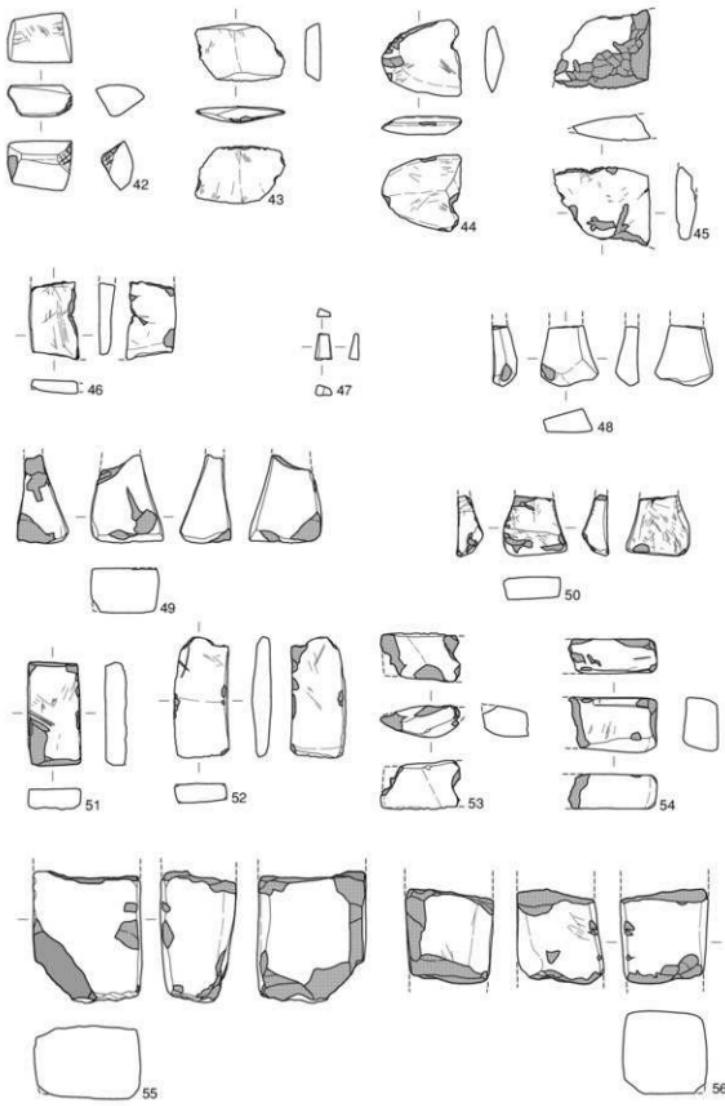
第176図 石製品(1/8) (1)



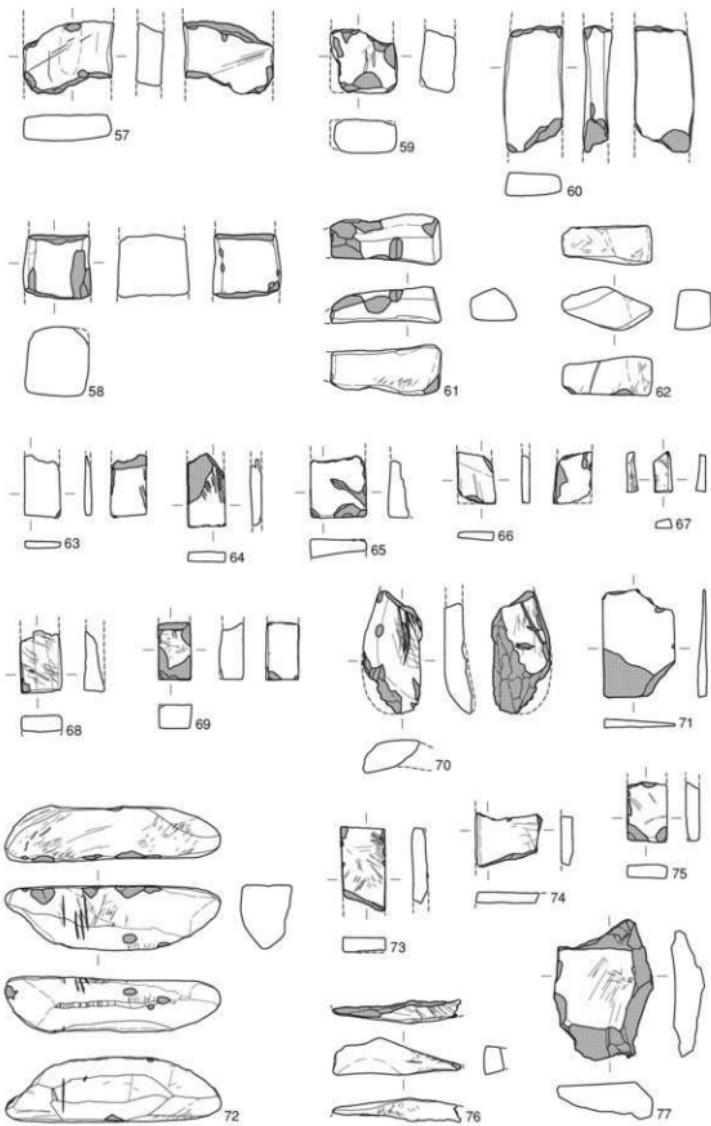
第177図 石製品(1/4) (2)



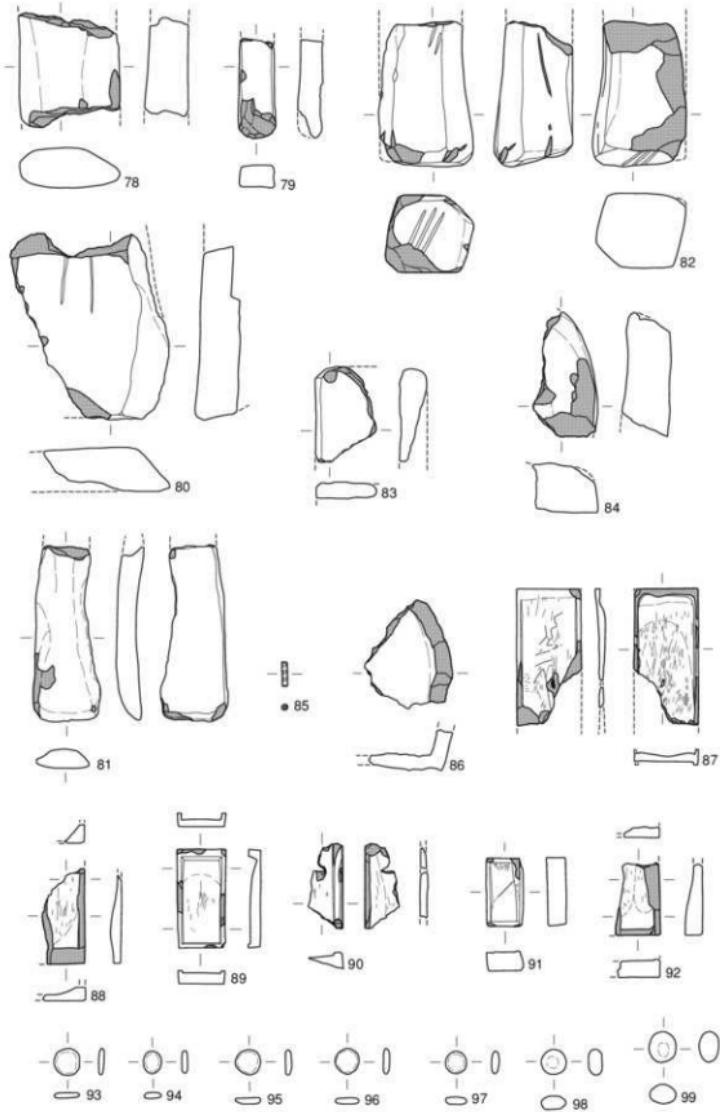
第178図 石製品(1/4) (3)



第179図 石製品(1/4) (4)



第180図 石製品(1/4) (5)



第181図 石製品(1/4) (6)

第3節 木製品

1. 木器類

戦国時代から近世にかけての遺構から木製品が検出された。

SD029(第182図) 漆椀(1・2)、曲物底板(3・4)、下駄(5・6)、箸(7)が検出された。6は内面赤色漆、外面黒色漆が施される外面に赤色と金色の漆で花紋が描かれる。7は内面赤色漆、外面黒色漆である。外面は赤色漆で文様が施されるが、剥落し詳細は不明である。3・4は小型の曲物の底板である。5・6はいずれも歯が台部を貫通する差歎下駄である。5は台部の平面形が楕円形で、6は本来方形に近いものと考えられ、いずれも断面下部が狭い逆台形をなす。箸は、断面方形で一方の先端に煤が付着する。

SD036(第182図) 漆椀(10)、箸(8)が検出された。漆椀は内面赤色漆、外面黒色漆で赤色漆の文様が描かれた痕跡がある。箸は大型で、先細りする先端に近い部分に貫通する小孔が穿孔される。

SD022(第182図) 下駄(9)が検出された。一本から台部と歯を作りだす連歎下駄である。平面形は前部がやや広い台形、縦断面は下部の狭い逆台形である。台部の摩耗から右足用と考えられる。後歎部が比較的摩耗する。

SD076(第183図) 下駄(11)、漆椀(12・13)、曲物底板(14)が検出された。下駄は連歎下駄で、前部が破損する。平面形は楕円形で台部は薄い板状である。後歎部が比較的摩耗する。漆椀12は内面赤色漆、外面黒色漆である。外面は赤色漆で文様が描かれるが、詳細は不明である。13は内外面黒色漆で、外面赤色漆による文様があるが、剥落著しく詳細不明である。高台部は摩耗して欠失している。曲物底板は小型で、全面黒色漆が施される。側面に3つの穿孔がある。

SD082(第183図) 漆椀(15・16)、曲物桶柄杓(17)が検出された。漆椀15は内外面黒色漆を施し、内底面に赤色漆で文様を描く。16は内面が暗褐色漆で、外面黒色漆で赤色漆による文様がわずか遺存する。柄杓は、柄と底板を欠失している。

SD097(第183図) 下駄(20)、羽子板(18)、木錘(19)が検出された。下駄は連歎下駄で、平面方形になる。歎部は摩耗する。羽子板は、片面に擦痕がわずか認められる。木錘は自然木を切断したもので、中央に刻み目を入れる。

SD088(第183図) 漆椀(21)が検出された。内面赤色漆、外面黒漆である。

SD173(第183図) 漆椀(22)が検出された。内面赤色漆、外面黒色漆に赤色漆による文様があるが、剥落著しく不明である。

SD174(第183図) 楪(23)が検出された。欠損が著しい。

SD091(第184図) 漆椀(24)、曲物底板(25)が検出された。漆椀は内面赤色漆、外面黒色漆である。外面は赤色漆で花紋を施される。25は、小型の曲物底板である。

SD092(第184図) 漆椀(26～28)、木槌(29)、羽子板(30)、箸(31～36)、下駄(37)が検出された。漆椀27は高台が高く、底が厚い椀である。26は、底面が摩耗している。漆椀は内面赤色漆、外面黒色漆である。木槌は横槌で、敲打部を面取する。羽子板は、片面に墨痕を有する。箸は完存するもので、長28cm前後のものである。37は連歎下駄で、平面形は本来方形である。台部は板状で、後の歎は欠失する。台部裏面には刻み目などの成形痕がのこり、踵の部分には十

字の連続する刻み目が遺存する。

SD128(第184図) 曲物底板(40)が検出された。小型のものである。

SD175(第184図) 漆椀(38)が検出された。内面赤色漆、外面黒色漆である。

SD102(第184図) 下駄(39)が検出された。連歯下駄で大半を欠失する。

SE07(第185図) 曲物底板(41)が検出した。内外面黒色漆を施す。中心に穿孔がある。

SE22(第185図) 曲物桶(42)、曲物底板(43～45)が検出された。42は、釣瓶と考えられる。43～45は、釣瓶の曲物桶の底板である。43の片面には刃物痕が遺存する。

SE32(第185図) 曲物底板(46)が検出された。釣瓶の曲物桶の底板と考える。

SE34(第185図) 曲物底板(47)が検出された。小型で中心に方形の穿孔がある。

SE38(第186図) 曲物底板(48)が検出された。板材を2枚つなぎあわせている。釣瓶の曲物桶の底板と考える。

SE46(第186図) 漆椀(49)、櫛(50)が検出された。漆椀は、内面赤色漆で外面褐色漆に花紋が描かれる。

SE55(第186図) 曲物底板(55)が検出された。比較的厚く、2枚の板を中心でつなぎあわせている。両面に刃物痕が遺存する。

SE83(第186図) 漆椀(52)が検出された。高い高台で、底部器壁が厚いものである。内面赤色漆、外面黒色漆である。

SE79(第186図) 櫛(53)が検出された。

SE71(第186図) 曲物底板(54)が検出された。釣瓶の曲物桶の底板と考える。

SE86(第186図) 曲物底板(55)が検出された。釣瓶の曲物桶の底板と考える。

SE89(第186図) 約子(56)が検出された。柄を欠失する。皿部の裏面に荒い削り痕を残す。

SE90(第186図) 曲物底板(57)、横櫛(58)が検出された。曲物底板は2枚の板をつなぎあわせている。櫛は、黒色漆を施す。

97A区 SK915(第187図) 曲物底板(59・60)が検出されている。59は2枚の板材をつなぎあわせている。60は両面に刃物痕が遺存する。

SE95(第187図) 曲物桶柄杓(61)が検出された。底板を欠失する。

SE101(第187図) 曲物桶柄杓(62)が検出された。底板と柄を欠失する。

SX11(第187図) 下駄(63)、曲物底板(64)が検出された。下駄は連歯下駄で、小型のものである。台部平面形は方形で子供用のものと考えられる。歯の摩耗は少ない。64は小型の曲物桶底板である

SX12(第187図) 下駄(66)が検出された。連歯下駄で、大部分欠失する。

SX36(第188図) 下駄(67)、漆椀、皿(68・69)が検出された。下駄は差歛下駄で、台部平面形は方形である。歯の摩耗は少ない。漆椀は内面赤色漆、外面黒色漆である。皿は内面赤色漆、外面黒色漆で草花文が描かれる。

SX15(第188図) 曲物底板(70)が検出された。径1cmの穿孔を有する。

97F区 SK1021(第188図) 漆椀(71・72)が検出された。71は内面赤色漆で、外面黒色漆に鶴亀文が描かれる。72は内面赤色漆、外面黒色漆で底面に赤漆による文字が描かれる。

97B区 SK118(第188図) 曲物底板(75)が検出された。片面に刃物痕が遺存する。

97F区SK102(第188図) 羽子板(73)、漆椀(74)が検出された。羽子板は文様等が無く、白木のものである。漆椀は内面赤色漆、外面は黒色漆で赤色と黄色による花文が描かれる。

97D区包含層(第188図) 約子(79)が検出された。本体部分は大半が欠失し、裏面は削り痕が残る。

97A区包含層(第188図) 漆椀(76)が検出された。内面赤色漆、外面黒色漆が施される。

97F区包含層(第188図) 漆椀(77・78)が検出された。77は皿で内外面赤色漆、外底面黒色漆が施される。78の内外面は赤色漆、外底面は黒色漆であり赤色漆で文字が描かれるが、欠失していくと判読できない。
(酒井俊彦)

2. 井戸材

郷上遺跡では井戸が全部で101基確認されており、これらは全て土坑を掘削し地下水を汲み取る掘り抜き井戸で、地盤が軟弱な冲積低地に立地するため井戸側に木組や石組の構造を伴っている。郷上遺跡の井戸については既に伊藤秀紀や筆者らによって概要が整理されている(伊藤1998、鈴木2002)。また、全国的に見れば、井戸側の構造については古くから研究を進められており、豊富な成果が存在する。ここでは、井戸側構造に着目した宇野隆夫の論考(宇野1982)と北村和宏の考察(北村1997)を参考にして、郷上遺跡の井戸について次のように形式分類を行った。

A類(木組側式井戸)：木製の板材や曲物、結物などを井戸側に使用した井戸を一括する。木製構造物には多様な種類が認められ、井戸側の構造を基準に以下の5類に分類できる。

A 1類(方形縦板側隅柱横桟式井戸)：四隅に配置した隅柱に横桟を渡し、その外側に板をたて並べて側板とする形式の井戸である。水溜部には底板を抜いた円形曲物筒が設置されていた。宇野分類のB IV類縦板組隅柱横桟どめ井戸、北村分類の方形縦板組隅柱横桟式井戸に該当する。

A 2類(方形縦板側横桟支柱式井戸)：方形に組んだ横桟の外側に板をたて並べて側板とする井戸の中で、上位の横桟が下位の横桟との間に支柱を入れて支えられている形式の井戸である。水溜部には底板を抜いた円形曲物筒が設置されていた。宇野分類のB III類縦板組横桟どめ井戸、北村分類の方形縦板組横桟式井戸に該当する。

A 3類(方形縦板側横桟式井戸)：方形に組んだ横桟の外側に板をたて並べて側板とする形式で、A 2類のように支柱を持たない井戸である。ただしこのA 3類はA 2類の上位が欠損したものに過ぎない可能性が高く、宇野と北村も両者を区分していない(宇野分類のB III類縦板組横桟どめ井戸、北村分類の方形縦板組横桟式井戸に該当する)。ここでは、遺跡の報告としてあえて区分して記述を進めたい。なお、水溜部には底板を抜いた円形曲物筒が設置されていた。

A 4類(方形横板側隅柱横桟式井戸)：四隅に配置した隅柱に横桟を渡し、その外側に幅広い横板を方形に積み上げて井戸側とする形式の井戸である。宇野分類のB V b類横板組隅柱どめ井戸に該当する。

A 5類(円形結物側式井戸)：底板や蓋板を持たない結物筒を積み上げて井戸側とする形式の井戸である。宇野分類のB IX類桶積上げ井戸、北村分類の円形桶側式井戸に該当する。

B類(竹材側式井戸)：竹材を縦に配列して井戸側に使用した井戸である。木製の板材を縦板

の補助として用いるか否かで 2 類に分類が可能である。

B 1 類（竹材側式井戸）：方形に組んだ横桟の外側に竹材のみを縦に配列して井戸側とする形式の井戸である。本遺跡では 1 例が確認されたが、隅柱を持つか否かは不明である。水溜部には底板を抜いた円形曲物筒が設置されていた。

B 2 類（竹材縦板併用側式井戸）：方形に組んだ横桟の外側に竹材と縦板の両者を用いて井戸側とする形式の井戸である。本遺跡では 2 例が確認された。うち 1 基については隅柱が存在しそこに横桟を設けて内枠としているものである。水溜部の構造物については遺存せず、構造物を持っていなかった可能性が考えられる。

C 類（石組側式井戸）：石を組んで井戸側とする形式の井戸である。加工していない自然石を円筒形に積み上げて作られたものが確認されており、水溜部に結物筒や底板を抜いた曲物筒が用いられている。宇野分類の C I 類石組円筒形井戸、北村分類の石組側式井戸に該当する。

D 類（形式不明井戸）：井戸側に使用された木材や石材などが残存しない井戸をこの類に含める。検出状態としては素掘り井戸に該当するが、土層断面を観察すると大きく掘り込まれているケースが多いため、井戸廃絶時に構造物が抜き取られたものと考えられる。このため、最下層の水溜部に円形曲物筒や円形結物筒が残存している場合も認められる。従って、本来は上記 3 類のいずれかに属していたものと推測されよう。

これらの井戸を構築した部材としては木材や竹材や石材が存在するが、本項では人為的に加工を加えた木製井戸側部材について遺物として報告する。

SE94 井戸側部材(第189図80～82) A 1 類（方形縦板側隅柱横桟式井戸）の井戸である。井戸側のみが出土し、水溜部の側構造は確認することができなかった。古瀬戸後Ⅳ期の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する遺構である。この井戸の井戸側部材には、隅柱と横桟と縦板の 3 種類が存在する。80 は井戸側本体を構成する縦板のうちの 1 枚である。残存長 89.0cm、最大幅 21.2cm、最大厚 2.2cm の板目板材で、上端部は腐食して遺存していない。下端部は外側が削り込まれ先端が鋭利に加工されている。材は井戸の内面に相当する面は腐植が著しく表面の遺存状況は不良であるが、外面に当たる面にはヤリガンナ状の工具による加工痕が残存していた。81 は四隅に配置された隅柱のうちの 1 本で、残存長 89.2cm、最大幅 8.0cm、最大厚 6.0cm の規模を持つ。材は芯を外した辺材が用いられた断面長方形の角材で、上端部は折損していたと思われる。下端部は各面を削り取って先端を尖らせており、横桟をはめ込むためのほぞ加工が 3 箇所に 2 方向ずつ施されている。結果として、横桟は隅柱の外側にはめ込まれるようになっている。82 は横桟のうちの 1 本で、大きさは残存長 64.0cm、最大幅 4.8cm、最大厚 3.0cm を測る。材は芯を外した辺材が用いられた断面長方形の角材である。両端部が隅柱のほぞ穴にはめ込まれたために、この部分のみが遺存状態が良好で、本来露出していた部分は表面が腐食していた。両端部には釘穴が 1 箇所ずつ残存し、やや中央寄りの部分では節が抜け落ちて穴が空いてしまっている。

SE23 井戸側部材(第189図83) A 2 類（方形縦板側横桟支柱式井戸）の井戸である。井戸側のみが出土し、水溜部の側構造は確認することができなかった。この井戸は山茶椀第 8 型式が共伴し、井戸側部材には横桟と縦板が存在する。特に縦板は全長が 2m 近くに及ぶ大規模な材が使用されており、この縦板を紹介する。83 は井戸側本体を構成する縦板のうちの 1 枚であ

る。残存長182.5cm、最大幅28.0cm、最大厚3.5cmの規模を持つ板目板材で、下端部は外側がチョウナ状の工具で削り込まれて先端が鋭利に加工されている。材は井戸の内面に相当する面は腐食が進むが、内外面とも割裂法による製材の後チョウナ状の工具による加工痕が部分的に残存していた。

SE80 井戸側部材(第190図84～87) A 2類 (方形縦板側横桟支柱式井戸) の井戸である。井戸側と水溜部の両者の側構造が確認され、このうち井戸側部材には、横桟と縦板の2種類が存在する。時期は山茶椀第7型式が共伴する段階と考えられる。84は井戸側本体を構成する縦板のうちの1枚である。残存長58.6cm、最大幅36.3cm、最大厚3.5cmの規模を持つ板目板材で、上端部は腐食して遺存していない。下端部はチョウナによって外側が削り込まれている。材の表面の遺存状況は不良であるが、ヤリガンナ状の工具痕らしき削り痕が残存していた。85は残存長38.4cm、最大幅8.1cm、最大厚5.0cmの規模を持つ楔状木製品である。86と87は横桟であり、この2種類が組み合さって方形の枠材を構成する。86は残存長84.0cm、最大幅7.5cm、最大厚2.7cmを、87は残存長83.2cm、最大幅6.2cm、最大厚5.6cmを測り、材は芯を外した辺材が用いられた断面長方形の角材である。86の両端部にはほぞが、87の両端部にはほぞをはじめ込む溝が各々設けられている。材の表面はチョウナ状工具痕が残存していた。

SE40 井戸側部材(第190図88～91) A 3類 (方形縦板側横桟式井戸) の井戸である。井戸側のみが出土し、水溜部の側構造は確認することができなかった。この井戸の井戸側部材には、横桟と縦板と支柱の3種類が存在する。共伴遺物からは時期を特定することはできなかった。88は井戸側の縦板のうちの1枚である。残存長86.5cm、最大幅19.5cm、最大厚1.9cmの規模を持つ板目板材で、ほぼ完全に残存している。製材は割裂法によってなされヤリガンナ状の工具痕が表面に認められる。端部を鋭利に尖らせる加工は認められない。89は横桟を支えるために四隅に配置された支柱のうちの1本で、残存長59.2cm、最大幅5.2cm、最大厚3.2cmの規模を持つ。材は断面長方形の角材で、芯を外した辺材が用いられた。両端部がやや細く狭められている他は特に目立った加工は認められない。90と91は横桟であり、この2種類が組み合さって方形横桟を構成する。90の大きさは残存長67.0cm、最大幅5.0cm、最大厚4.0cmを、91の大きさは残存長67.5cm、最大幅5.6cm、最大厚4.1cmを測る。材は断面長方形の角材で、芯を外した辺材が用いられた。両者とも材表面はチョウナによる加工痕が残存し、両端部にはほぞ加工が施されており、「かね相欠き継ぎ」で接合され鉄釘留めされていた。

SE32 井戸側部材(第191図92～96) A 1類 (方形縦板側隅柱横桟式井戸) の井戸である。井戸側と水溜部の両者の側構造が確認され、古瀬戸後III期の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。井戸側部材には、隅柱と横桟と縦板と曲物筒の4種類が存在するが、ここでは隅柱と縦板と曲物筒を紹介する。92は四隅に配置された隅柱のうちの1本である。残存長93.2cm、最大幅7.2cm、最大厚7.0cmの規模を持つ丸太材で、上端部は腐食して遺存していないものである。下端部は先端が鋭利に削り込まれており、表面は部分的にチョウナ状工具によって削り取られ、結果として多角柱状の製品となっている。残存する最も上位の部分ではぞ穴加工が認められそこに横桟がはめ込まれていた。93～95は井戸側本体を構成する縦板として用いられた材である。94は残存長54.7cm、最大幅12.7cm、最大厚1.4cm規模を持つ板目板材で、上端部の遺存状況は不良である。表面はヤリガンナ状工具による加工痕が残存しているもので、縦板として通常に

用いられたものである。一方、93は残存長38.1cm、最大幅9.3cm、最大厚0.8cmの板目板材で、円形曲物桶の底板の一部が縦板に転用されたものと理解される。また、95は残存長71.7cm、最大幅15.6cm、最大厚1.1cmの規模を持つ板目板材で、側面に竹釘などの釘穴が設けられていた。形状からみて、これも折敷底板の一部が縦板に転用されたものと考えられる。これらの製品からみて、SE32の縦板には様々な材を転用しながら構築されたものといえる。96は曲物筒で、推定口径50.6cm、器高21.5cmを測る。本体は内面にケビキを施した柾目板材を一重巻にして桜皮で綴じ合わされていた。本体の外側には幅約5.5cmのタガを1条回しており、その（下）端部には多数の孔が穿たれていた。

SE01 井戸側部材(第192図97～99) B1類（方形竹側横桟式井戸）の井戸である。井戸側と水溜部の両者の側構造が確認され、隅柱と横桟と縦板の3種類が存在する。古瀬戸後Ⅳ期新段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。97は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径52.4cm、残存高26.2cmを測る。本体は内面の一部にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものを2枚重ねて桜皮で綴じ合わされていた。本体の外側には幅約6.0cmのタガを1条回しており、その（下）端部には数箇所に孔が穿たれていた。98は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径40.8cm、残存高12.1cmを測る。本体は柾目板材を一重巻にして桜皮で綴じ合わされており、その外側には幅約7.5cmのタガを1条回している。99は水溜部に設置された曲物筒である。推定口径40.1cm、器高7.2cmを測るもので、これ自体は曲物筒の本体ではなくタガの部分と推定される。

SE02 井戸側部材(第192図100・101) 上位の構造物が抜き取られ形式を特定できない井戸であるが、水溜部から曲物桶が2つ出土している。これが側構造を構成するか否か検討の余地が残されている。この井戸からは大窯第1段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴して出土した。100は東側の水溜部から出土した曲物桶で、推定口径20.3cm、器高26.2cmを測る。上部が一部欠損しているが、ケビキが施されない柾目板材を二重に巻いて桜皮で綴じ合わせて側を作っている。底板は柾目板を円形に切り取ったもので、特に釘などで側との接合を強化してはいないものである。101は西側の水溜部から出土した曲物筒で、推定口径20.0cm、器高12.1cmを測る。ケビキが施されない柾目板材を二重に巻いて桜皮で綴じ合わせて側を作り、更に上位にタガを巻いている。底板は板目板を円形に切り取ったもので、特に釘などで側との接合を強化してはいないものである。

SE79 井戸側部材(第193図102) A3類（方形縦板側横桟式井戸）の井戸である。井戸側と水溜部の両者の側構造が確認され、古瀬戸後Ⅱ期の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。井戸側部材には隅柱と横桟と縦板の3種類が、水溜部材には曲物筒が各々存在するが、ここでは曲物筒のみを紹介する。102は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径39.2cm、器高28.0cmを測る。本体は内面の一部にケビキが施された柾目板材を一重巻にして桜皮で綴じ合わされていた。本体の外側には幅約8.0cmのタガを1条回している。

SE66 井戸側部材(第193図103) A1類（方形縦板側隅柱横桟式井戸）の井戸で、井戸側と水溜部の側構造共に確認できた。水溜部の側構造は曲物筒が設置されていたことが確認されるが、共伴遺物からは時期を特定することはできなかった。103は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径53.5cm、器高45.0cmを測る。内面にケビキが施された柾目板材を一重巻にして桜皮

で綴じ合わされて作られていた。タガは残存せず下部に孔がいくつか穿たれている。

SE67 井戸側部材(第193図) A 3類 (方形縦板側横桟式井戸) の井戸で、井戸側と水溜部の側構造共に確認された。この井戸は古瀬戸後II期の瀬戸美濃窯産陶器が共伴している。ここでは水溜部の側構造の曲物筒のみを紹介する。104は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径48.6cm、器高20.0cmを測る。本体は内面の一部にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものを作り、それを2枚重ねて桜皮で綴じ合わせていた。本体の外側には幅約4.5cmのタガを1条回しており、その(下)端部には数箇所に孔が穿たれていた。

SE76 井戸側部材(第193図105・106) A 3類 (方形縦板側横桟式井戸) の井戸である。井戸側と水溜部の両者の側構造が残存し、水溜部の側部材には曲物筒が2つ存在した。この遺構は山茶椀第9型式が共伴する井戸である。105は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径45.8cm、器高21.0cmを測る。本体は内面の一部にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものを作り、それを2枚重ねて桜皮で綴じ合わせていた。その(下)端部には数箇所に孔が穿たれていた。106は水溜部に設置された曲物筒である。推定口径39.1cm、器高13.4cmを測る。本体は内面の一部にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものを作り、それを2枚重ねて桜皮で綴じ合わせていた。本体の外側には幅約5.5cmのタガを1条回していた。

SE70 井戸側部材(第194図107・108) A 2類 (方形縦板側横桟支柱式井戸) の井戸である。井戸側と水溜部の側構造の両者が確認された。ここでは水溜部の曲物筒のみを紹介する。なお、SE70は山茶椀第7・8型式が共伴する井戸である。107は水溜部の上位に設置された曲物筒で、推定口径42.0cm、残存高8.0cmを測る。本体は内面にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたもので、その外側には幅約7.8cmのタガを1条回していた。108は水溜部の下位に設置された曲物筒で、推定口径52.0cm、器高34.0cmを測る。本体は内面全面にケビキが施された柾目板材を一重巻にして桜皮で綴じ合わせたもので、その外側には幅約9.0cmのタガを3条回した製品である。(下)端部には数箇所に孔が穿たれている。

SE49 井戸側部材(第194図109) A 3類 (方形縦板側横桟式井戸) の井戸である。井戸側とともに水溜部の側構造は確認されたが、ここでは水溜部の曲物筒のみを紹介する。なお、この井戸は古瀬戸後IV期古の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。109は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径52.7cm、器高23.0cmを測る。本体は内面全体にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものを作り、それを2枚重ねて桜皮で綴じ合わせていた。

SE26 井戸側部材(第194図110) A 3類 (方形縦板側横桟式井戸) の井戸で、井戸側と水溜部の両者の側構造が確認された。古瀬戸後IV期新から大窯第1段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する遺構で、ここでは水溜部の曲物筒を紹介する。110は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径52.5cm、器高28.0cmを測る。本体は内面の一部にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものを作り、それを2枚重ねて桜皮で綴じ合わせていた。本体の外側には幅約5.5cmのタガを1条回していた。

SE20 井戸側部材(第195図111～114) A類 (方形不明側横桟式井戸) の井戸で、井戸側の横桟と水溜部の側構造のみが検出された。水溜部の側部材には曲物筒が4点出土した。古瀬戸後IV期新から大窯第1段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。111は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径52.0cm、器高25.0cmを測る。内面にケビキが施された柾目板材を一重巻にして桜皮

で縫じ合わされたもので、その（下）端部には多数の孔が穿たれていた。112は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径59.2cm、残存器高17.0cmを測る。本体は内面にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものを2枚重ねて桜皮で縫じ合わされており、外側には幅約17.0cmのタガを1条回していた。その（下）端部には数箇所に孔が穿たれていた。113は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径58.0cm、器高23.4cmを測る。内面にケビキが施された柾目板材を一重巻にし桜皮で縫じ合わされたものである。114は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径51.9cm、器高6.0cmを測る。ケビキが施されない柾目板材を一重巻にしたもので、これはタガの一部と想定される。（下）端部には多くの孔が穿たれている。

SE16 井戸側部材(第196図115・116) A4類（方形横板側隅柱横桟式井戸）の井戸で、古瀬戸後IV期新段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。井戸側と水溜部の両者の側構造が確認され、ここでは、水溜部に設置された曲物筒のみを紹介する。115は推定口径38.8cm、残存器高12.0cmを測る曲物筒で、内面にケビキが施された柾目板材を一重巻にした本体の外側に幅約10.5cmのタガを1条回したものである。116は推定口径35.4cm、器高29.0cmを測る曲物筒である。内面にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものが桜皮で縫じ合わされており、その外側には幅約7.0cmのタガを1条回している。

SE17 井戸側部材(第196図117) 上位の構造物が抜き取られ形式を特定できない井戸であるが、水溜部の側構造のみを確認することができた。大窯第1段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する井戸である。117は水溜部に設置された曲物筒で、推定口径40.3cm、器高25.2cmを測る。本体は内面にケビキが施された柾目板材を一重巻にしたものを2枚重ねて桜皮で縫じ合わされており、外側には幅約7.5cmのタガを1条回していた。

SE05 井戸側部材(第197図121～123) C類（円形石組側式井戸）の井戸である。水溜部の側構造として結物筒が3段用いられていた。大窯第4段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する遺構である。3点の結物筒は内面に底板がはめ込まれた痕跡がないため全て井戸側専用に作製されたと考えられるもので、底径よりも口径の方が狭い。実測図は残存する材を図上で復元したもので若干本来の直径と異なる場合があることをあらかじめ断っておく。121は下から3段目の結物筒の井戸側で、推定口径53.8cm、器高59.4cmを測る。側板は割裂法で製材されており、下端部内面と上端部外面を薄く削り取っている。122は下から2段目の結物筒の井戸側で、推定口径56.2cm、器高39.1cmを測る。121と同様に側板は割裂法で製材されており、下端部内面と上端部外面を薄く削り取っている。123は最下段の結物筒の井戸側で、推定口径48.0cm、器高124.6cmを測る。121と122とは異なり下端部の削り込みが認められない。

SE95 井戸側部材(第196図118 第197図124・125) 大窯第3段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴するC類（円形石組側式井戸）の井戸である。水溜部の側構造に結物筒が2段重ねられて出土した。両者の結物筒は井戸側専用に作製されたと考えられ、側板は割裂法で製材されており、3箇所にタガの痕跡が残存する。124は上から1段目の結物筒の井戸側で、推定口径57.4cm、器高76.4cmを測る。下端部内面を薄く削り取っており、上部には結い合わせ部の補強のための木製？の合わせ釘が用いられていた。125は最下段の結物筒の井戸側である。推定口径64.8cm、器高77.4cmを測る。下端部外面を薄く削り取っており、下部には結い合わせ部の補強のための木製？の合わせ釘が用いられていた。内面はヤリガンナ状工具による加工痕が残存

する。側板のうち1枚には線刻で文様が描かれていた。118は125の側板どうしを接合するための合わせ釘である。残存長5.8cm、最大幅0.6cm、最大厚0.6cmの規模を持つ材で、両端が尖っている。

SE74 井戸側部材(第196図119 第198図126) A 5類(円形結物側式井戸)の井戸で、大窓第3段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。水溜部と井戸側の側構造は連続しており、井戸側の結物筒のみが出土した。126は最下段の結物筒の井戸側で、推定口径66.0cm、器高63.2cmを測る。井戸側専用に作製されたと推定され、上部には補強のための木製?の合わせ釘が用いられていた。側板は削り法で製材されており、外面にはチョウナ状工具、内面にはヤリガンナ状工具による加工痕が各々残存していた。側板側面(接合面)には板材の木目が不順な部分を中心にして斜方向に傷が施されていた。119は126の側板どうしを接合するための合わせ釘である。残存長5.7cm、最大幅0.5cm、最大厚0.5cmの規模を持つ材で、両端が尖っている。

SE73 井戸側部材(第198図127) A 5類(円形結物側式井戸)の井戸で、大窓第2～3段階の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。井戸側の結物筒のみが出土した。127は最下段の結物筒の井戸側で、推定口径53.8cm、器高51.6cmを測る。内面に底板がはめ込まれていた圧痕が残存していたことから、結桶の底を抜いて井戸側に転用した製品と考えられる。側板の表面は丁寧に削られており、具体的な調整痕を識別することが難しいが、内面にはヤリガンナ状工具による斜方向に削った痕跡が残されていた。外面には結桶として使用されていた際に付いたと想定される細かな傷がランダムに残存している。

SE75 井戸側部材(第198図128) A 5類(円形結物側式井戸)の井戸で、井戸側の結物筒のみが出土した。連房式登窯第1小期の瀬戸美濃窯産陶器が共伴する。128は最下段の結物筒の井戸側で、推定口径42.2cm、器高44.3cmを測る。127と同様、内面に底板がはめ込まれていた圧痕が残存していたことから、結桶を転用したものと考えられる。側板の表面は丁寧に削られているが、内面にはヤリガンナ状工具による斜方向に削った痕跡が残されていた。

SE90 井戸側部材(第198図129) A 5類(円形結物側式井戸)の井戸で、共伴遺物からは時期を特定することはできない。井戸側の結物筒のみが出土した。129は最下段の結物筒の井戸側である。推定口径65.3cm、器高88.4cmを測り、内面の状態からみて井戸側専用に作製されたと推定される。上部には補強のための木製?の合わせ釘が用いられていた。遺存状態は決して良好とはいえないが、内外面には無数の斜方向に平行する細かな傷が残存しており、側板は縦挽き鋸で製材されていたと考えられる。円筒状に整形するために部分的に内外面にヤリガンナ状工具による加工痕が残存している。

SE92 井戸側部材(第196図120・第198図130) A 5類(円形結物側式井戸)の井戸である。共伴遺物からは時期を特定することはできない。130は最下段の結物筒の井戸側で、推定口径62.2cm、器高60.2cmを測る。遺存状態は極めて不良で、内外面の表面は加工痕がほとんど分からぬが、材に数多く認められる節付近で斜方向に平行する細かな傷が残存していることからみて、側板は縦挽き鋸で製材されていたと考えられる。おそらく井戸側専用に作製されたと推定される。上部には補強のための木製?の合わせ釘が用いられており、下端部は内面が薄く削り取られている。120は130の側板どうしを接合するための合わせ釘である。残存長4.3cm、最大幅0.5cm、最大厚0.5cmの規模を持つ材で、両端が尖っている。

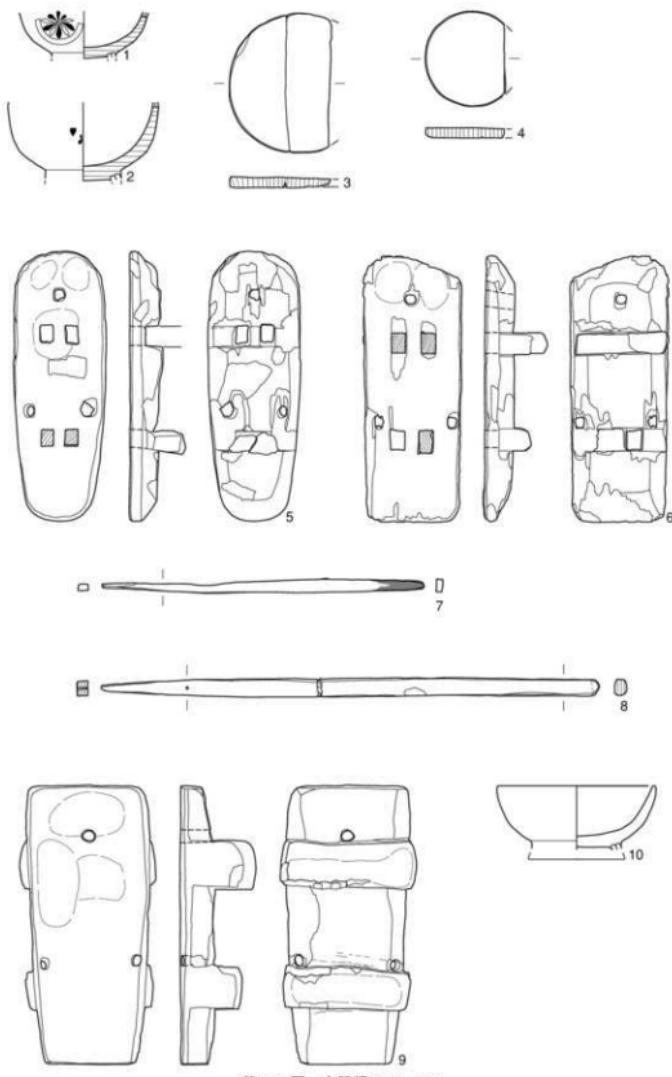
小結

井戸の構造の変遷を概略すると大きく2期に区分される。井戸1期は山茶椀第5型式期から古瀬戸後IV期まで（12世紀末～15世紀中頃）で、A2類方形縦板側横棟支柱式井戸（A3類方形縦板側横棟式井戸）が主体となり、部分的にA1類方形縦板側隅柱横棟式井戸やA4類方形横板側隅柱横棟式井戸が存在する。2期は古瀬戸後IV期以降（15世紀中頃以降）で、一部でA2類方形縦板側横棟支柱式井戸が継続するものの、A5類円形結物側式井戸とC類石組側式井戸が主体となる。各期は細分が可能であるが、特に井戸2期については主要井戸側構成材である結物筒の加工痕からみて、割裂法によって製材された側板を用いるもの（井戸2-1期）から縫挽鋸によって製材された側板を用いるもの（井戸2-2期）への変化が予想される（鈴木1989）。なお、縫挽鋸によって製材された側板はいずれも遺存状態が不良で大きく歪みひび割れてしまっているものが多い。また、これを井戸側の主要板材（縦板や結物筒）の大きさに着目すると、井戸1期では幅20cm前後の板材が結構存在するのに対し、井戸2期においては幅（結物筒側板）は10cm以下のものが多くなり、長さと厚さも小さくなる傾向を読み取ることができる。

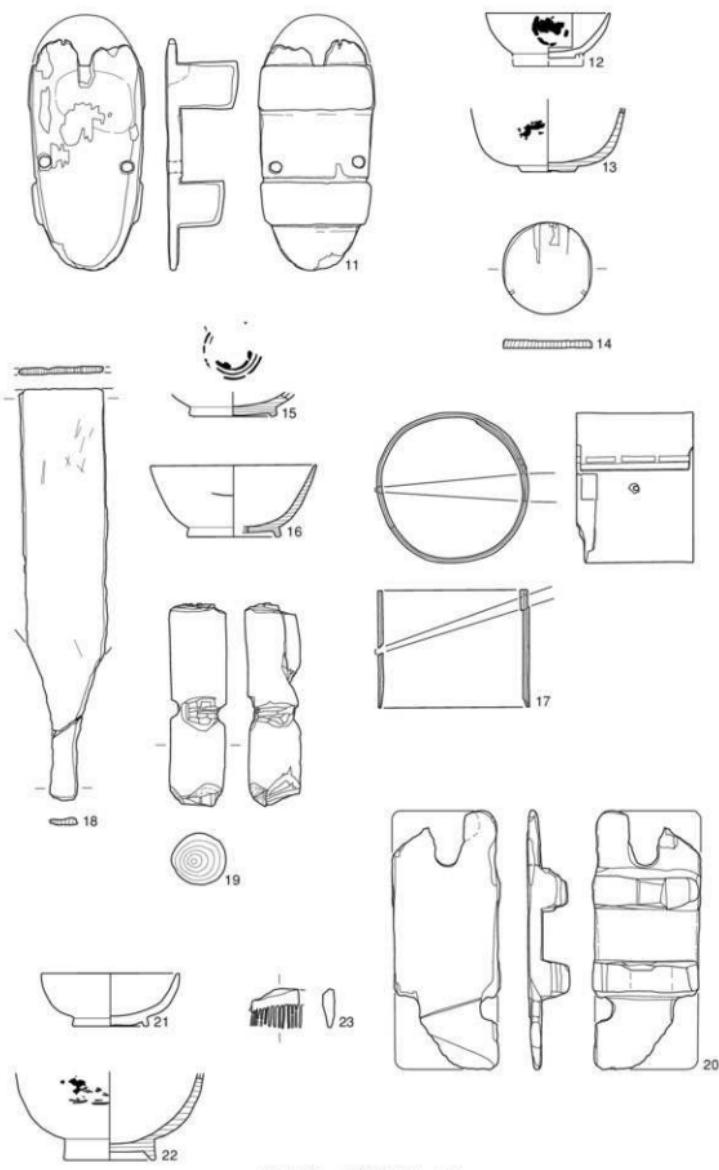
（鈴木正貴）

参考文献

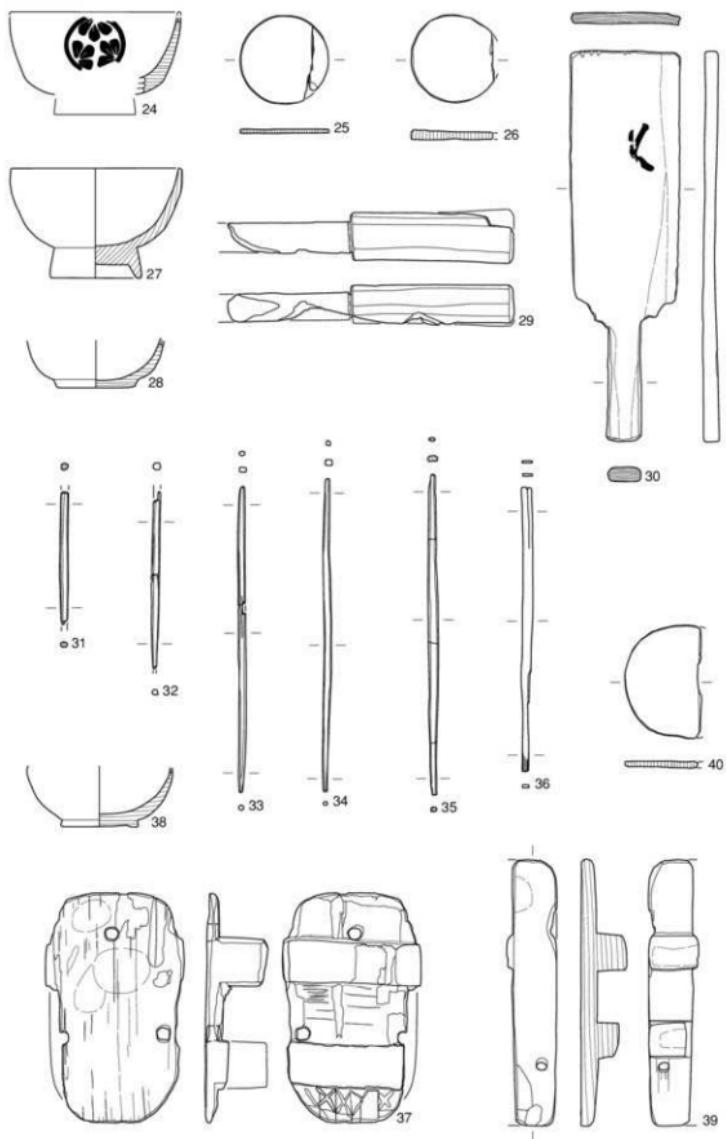
- 伊藤秀紀 1998 「三河の井戸—豊田市郷上遺跡を中心に—」『考古学フォーラム定例会 no.27 発表資料』
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林第65巻第5号』史学研究会
- 北村和宏 1997 「尾張平野における中世井戸の構造とその変遷に関する観察」『年報平成8年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 1989 「清洲城下町遺跡出土井戸桶に関する考察」『年報昭和63年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 2000 「井戸桶と旱桶」「桶と樽 脇役の日本史」法政大学出版局
- 鈴木正貴 2002 「中世井戸についての若干の考察—愛知県下の事例を中心として—」『東海の中世集落を考える—考古学から中世のムラをどう読み解くか—』第9回東海考古学フォーラム実行委員会
- 長島広 1985 「朝日西遺跡の井戸について」『年報昭和60年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター



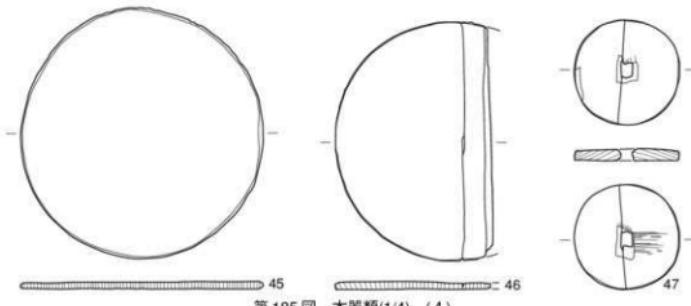
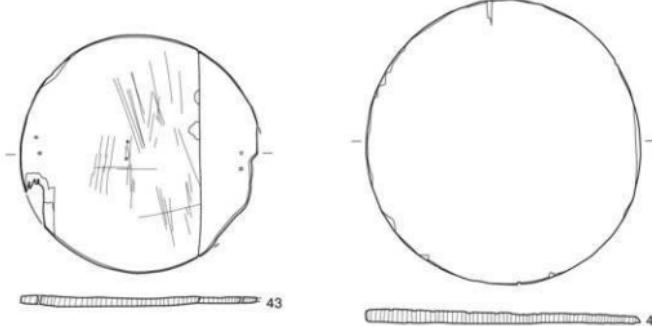
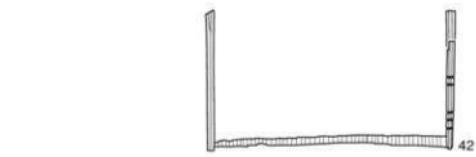
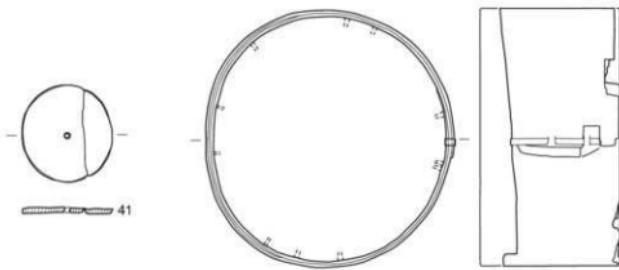
第182図 木器類(1/4) (1)



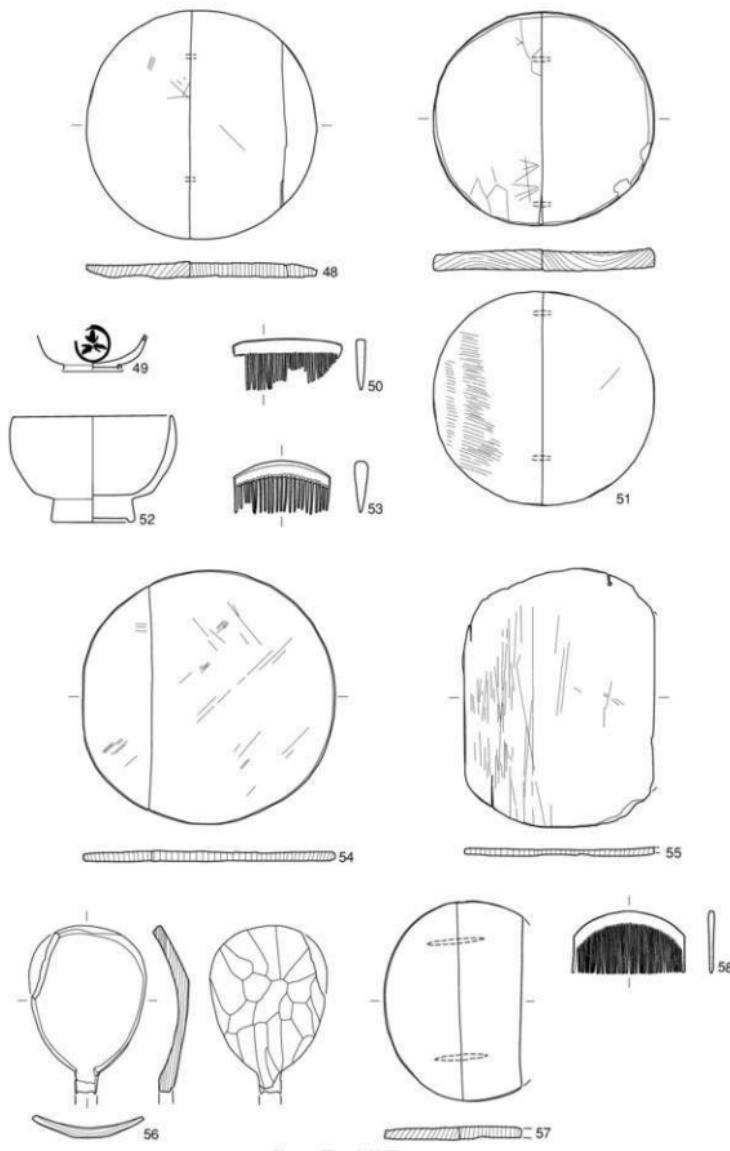
第183図 木器類(1/4) (2)



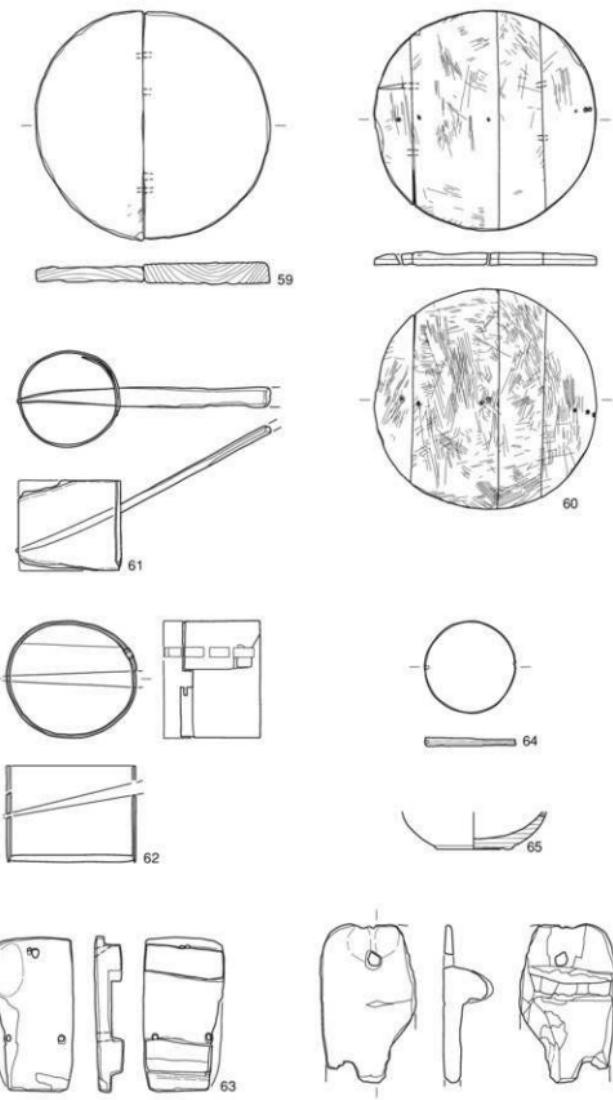
第184図 木器類(1/4) (3)



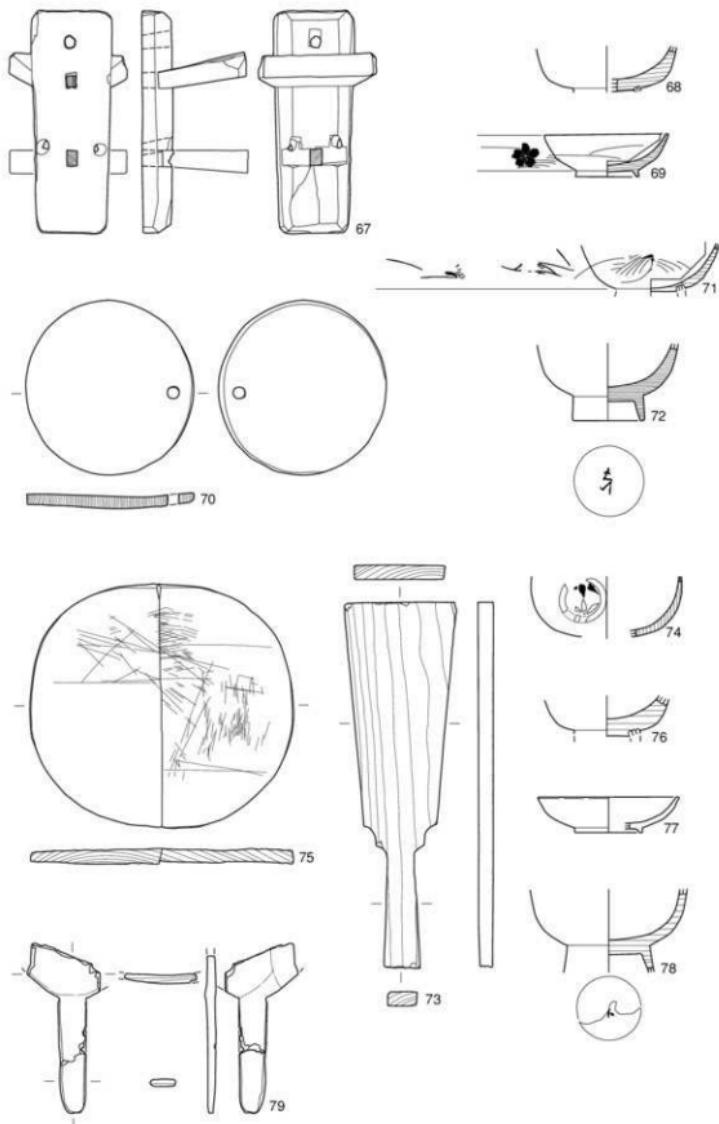
第185図 木器類(1/4) (4)



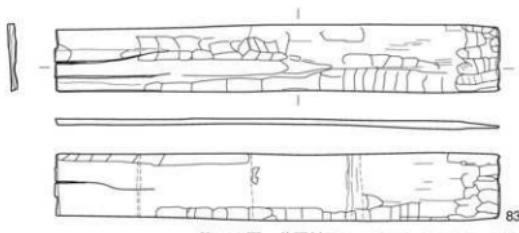
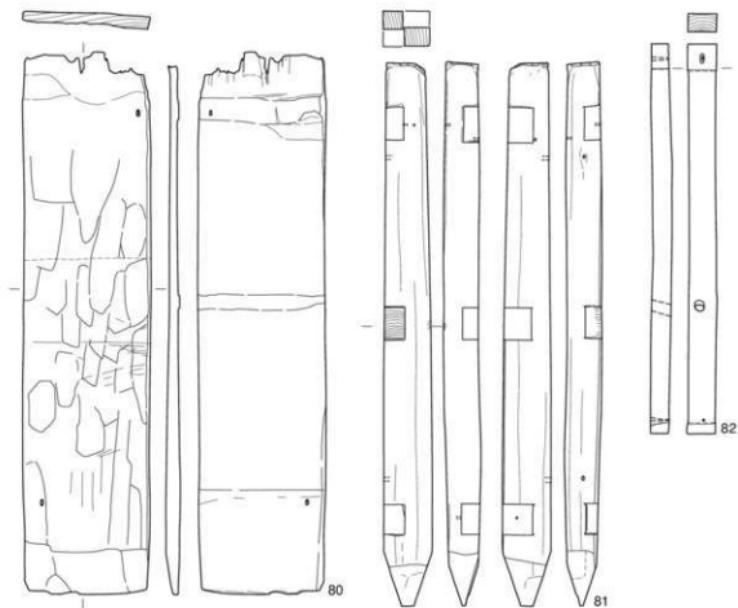
第186図 木器類(1/4) (5)



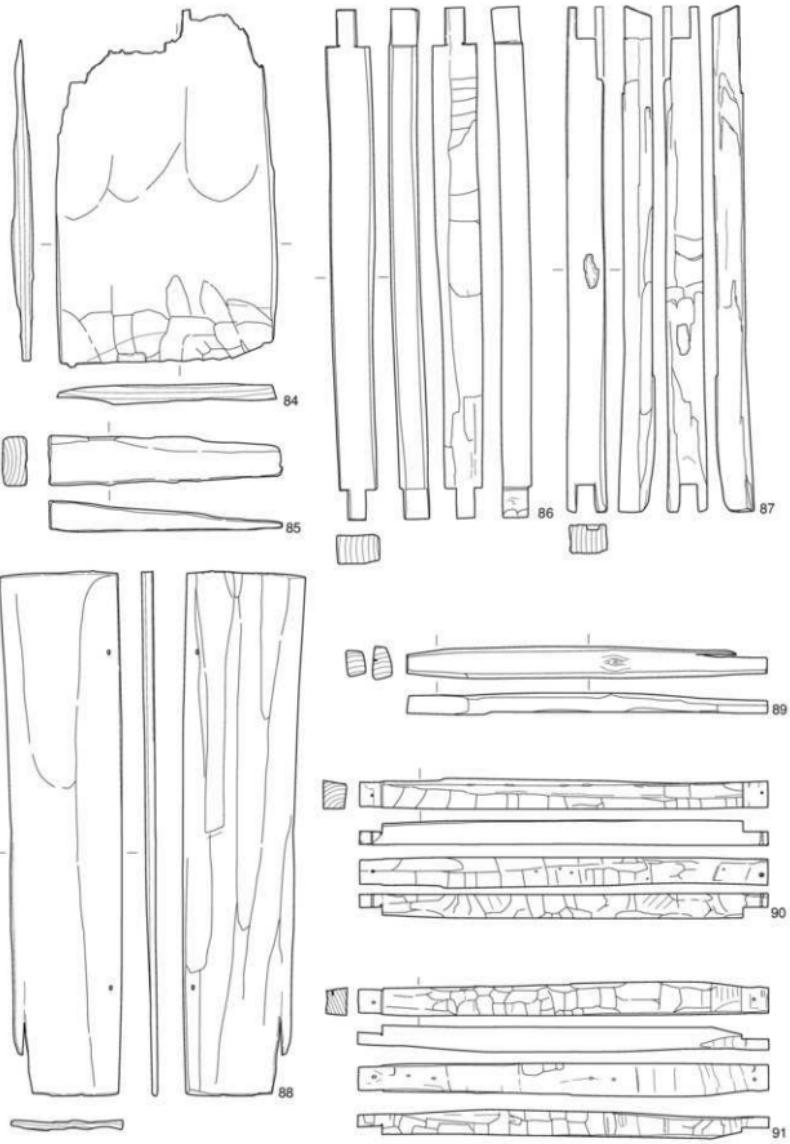
第187図 木器類(1/4) (6)



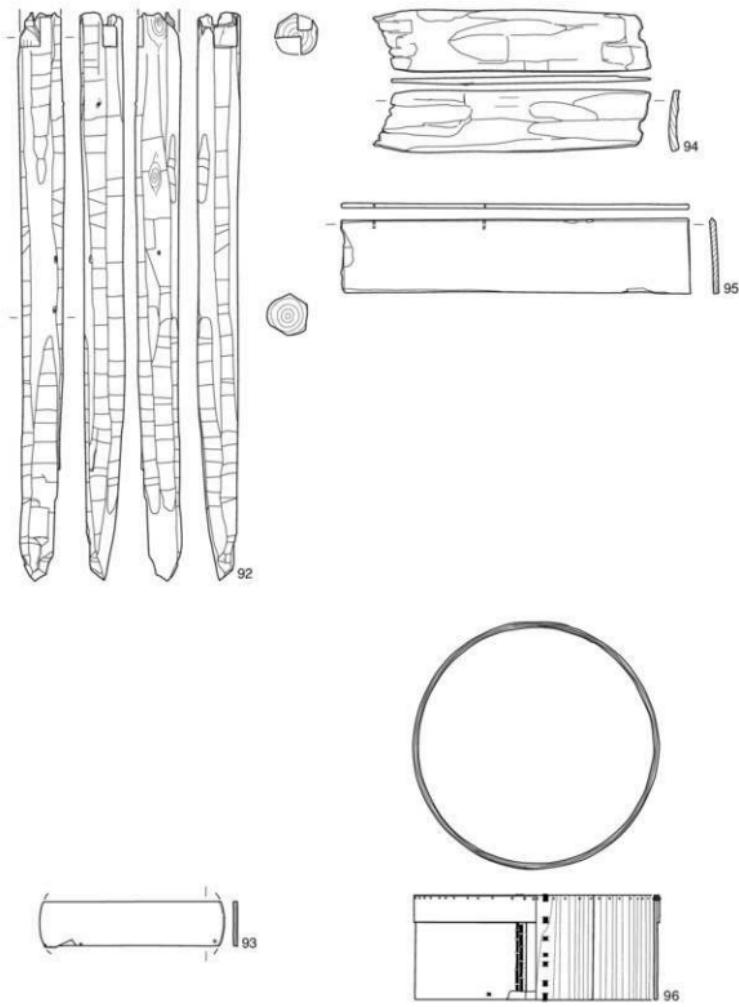
第188図 木器類(1/4) (7)



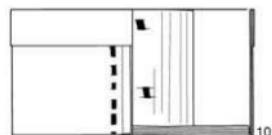
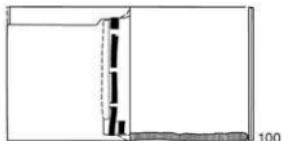
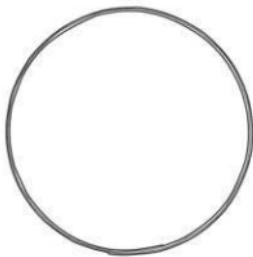
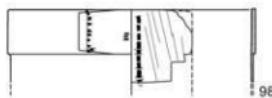
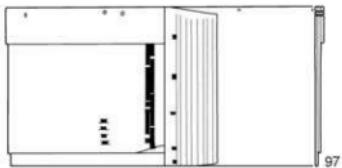
第189図 井戸材(80～82 1/8, 83 1/20) (1)
SE23-94



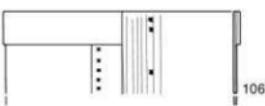
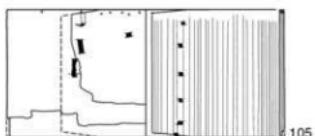
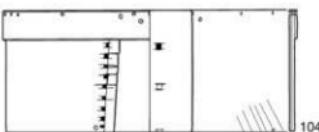
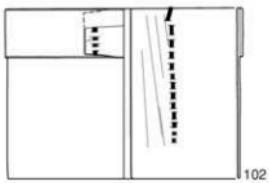
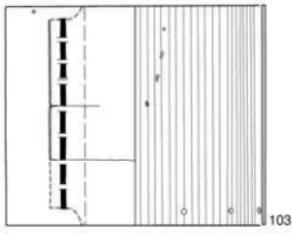
第190図 井戸材(1/8) (2)
SE40・80



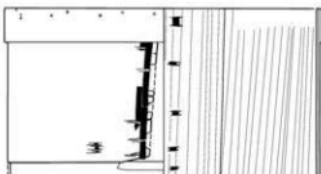
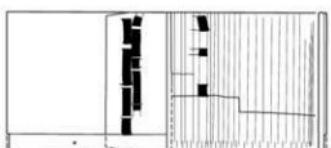
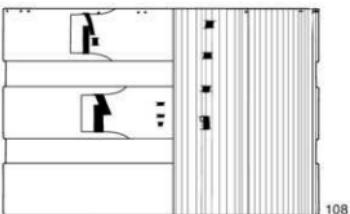
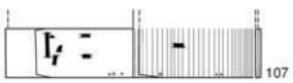
第191図 井戸材(1/8) (3)
SE32



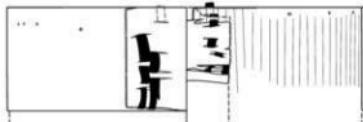
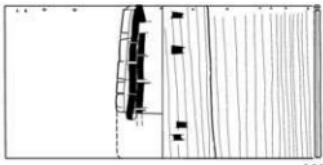
第192図 井戸材(97~99 1/8, 100~101 1/4) (4)
SE01・02



第193図 井戸材(1/8) (5)
SE04・12・13・76

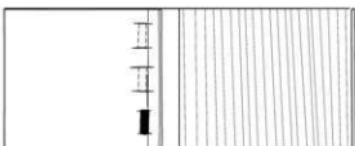


第194図 井戸材(1/8) (6)
SE26-49-70



111

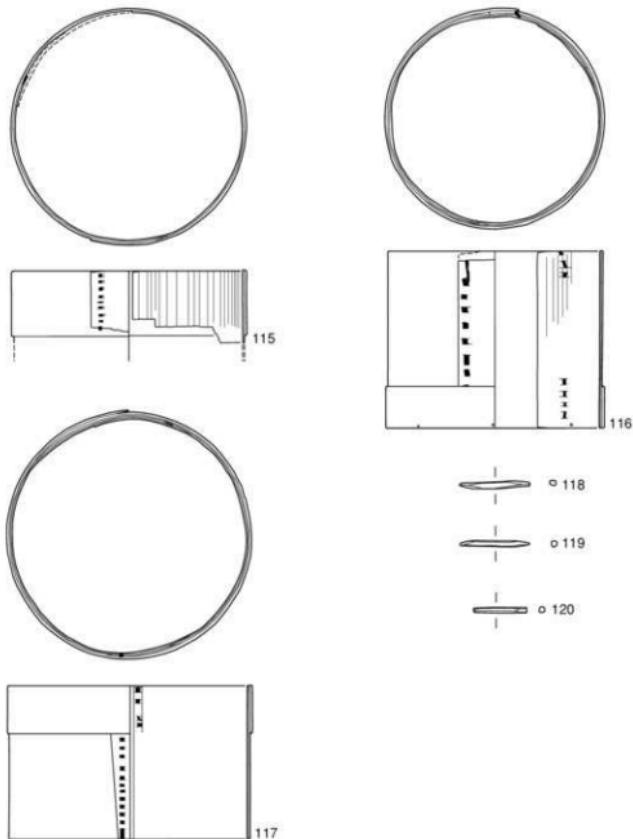
112



113

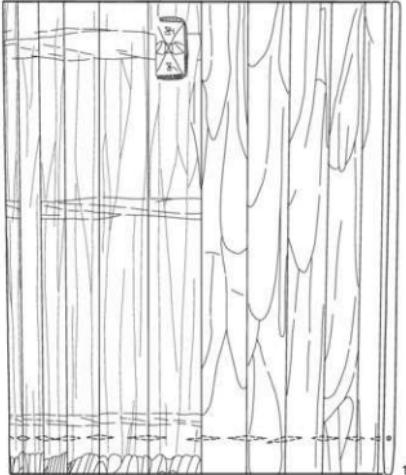
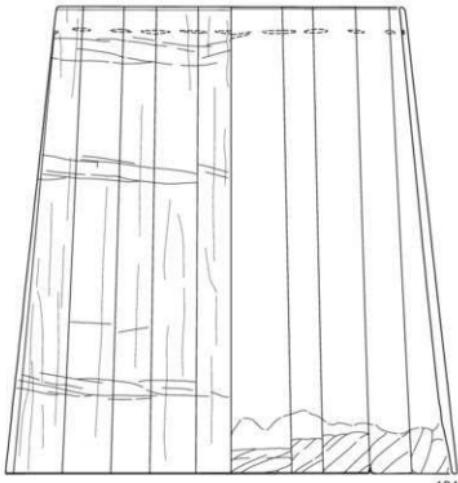
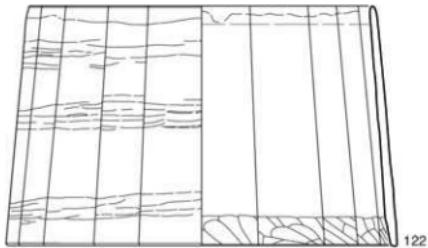
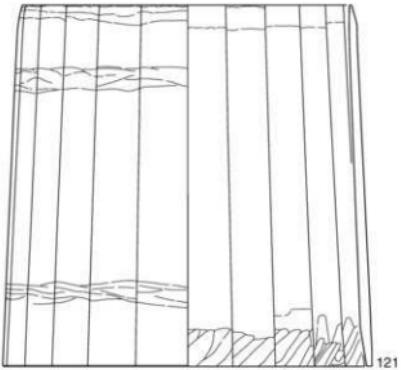
114

第195図 井戸材(1/8) (7)
SE20



第196図 井戸材(115~117 1/8, 118~120 1/4) (8)

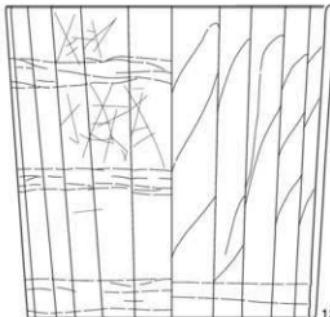
SE16-17-74-92



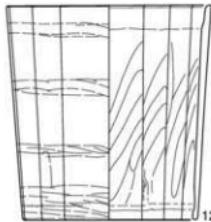
第197図 井戸材(1/8) (9)
SE05-95



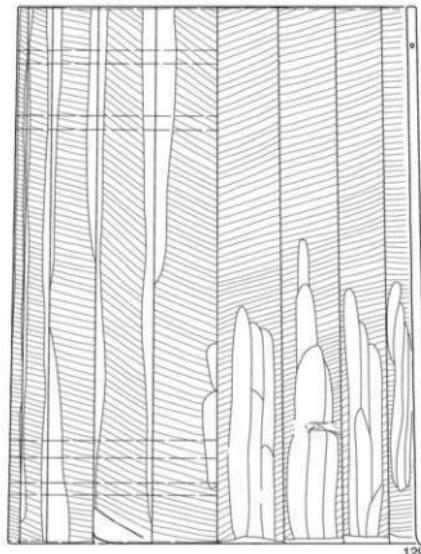
126



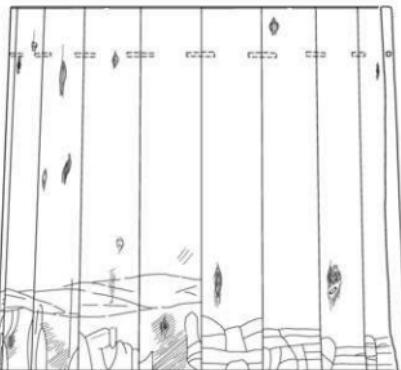
127



128



129



130

第198図 井戸材(1/8) (10)
SE73 ~ 75-90-92

255

第4節 金属製品

1. 金属器

戦国時代から近世の時期を中心に金属製品が検出されている。

煙管(第199図) 雁首(1～3)、吸口(4～7)が検出された。3・4・7は包含層からの出土遺物である。遺構内出土遺物では、他の出土遺物から6は18世紀代と考えられる。

笄(第199図) 畿(8・9)が、97F区で検出された。8はほぼ完形のもので、包含層中より出土した。

分銅(第199図) 分銅(10)及び錘状の金属製品(11)が検出された。分銅は、17世紀以降の土坑より出土した。11は装飾のある錘状のもので青銅製である。

小柄(第199図) 小柄の鞘(12・13)が包含層及び井戸から検出された。11は出土遺構から17世紀代のものと考えられる。

刀子(第199図) 刀子の刃部(14・15)が検出された。出土遺構より、15は15世紀中葉の時期の可能性がある。

包丁(第200図) ほぼ完形に近いもの(16)である。97F区SE35の井戸側内の砂層中で検出されたもので、遺構より17世紀前半の時期と考えられる。

鎌(第200図) 97A区で鎌の刃部(19・20)が検出された。19は曲刃鎌で、柄の装着部を折り曲げる形状である。20は刃部と柄の装着部が緩い角度で屈曲する形状である。近世以降の時期と考えられるが、詳細は不明である。

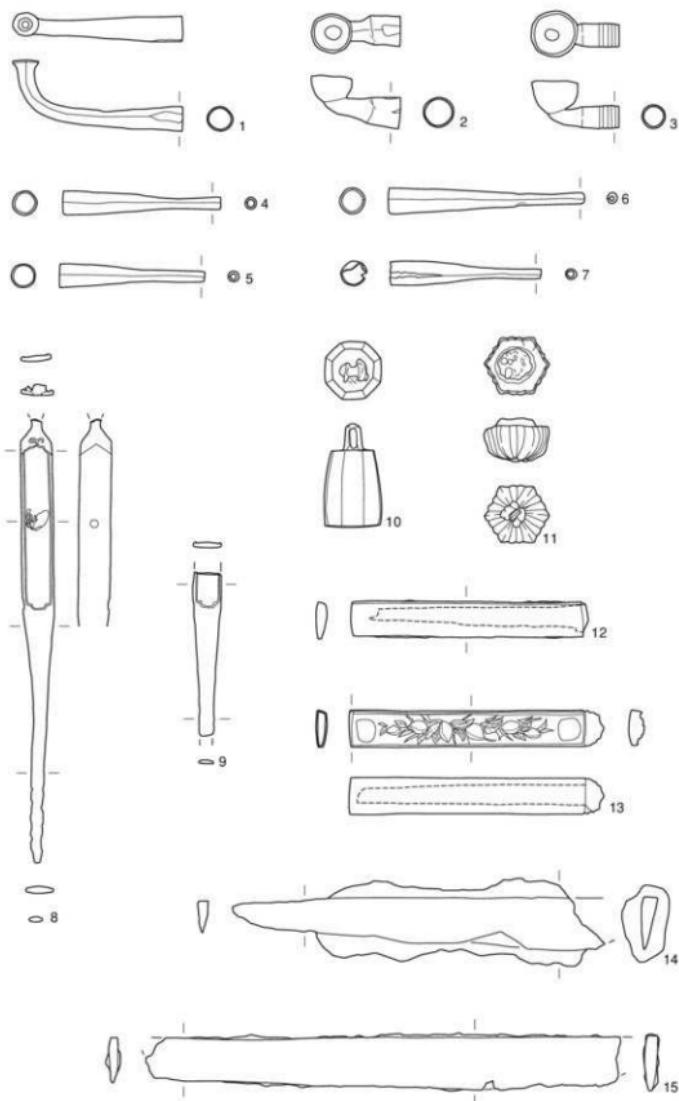
釘(第200図) 丸釘(21)と角釘(22)が検出された。

不明(第200図) 棒状の不明鉄製品(17・18)が検出された。17は断面台形で一方の端部を丸く肥厚する。18は棒状で内部が中空である。遺構より17は17世紀代、18は14世紀代と考える。

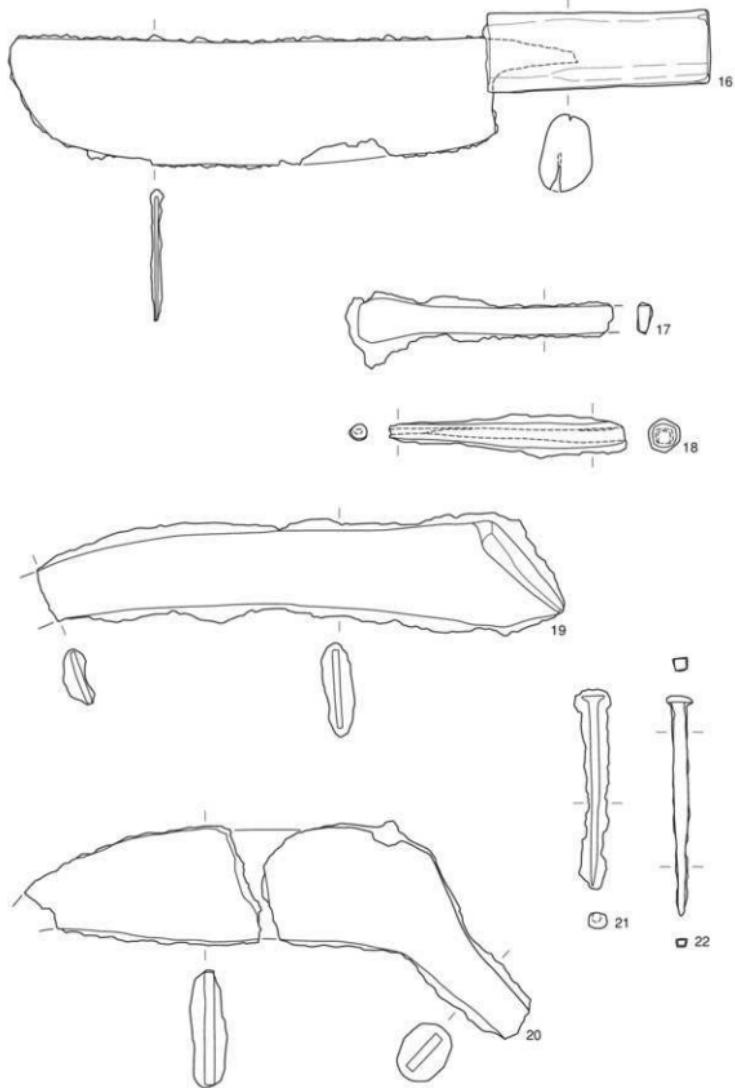
2. 銭貨

銭貨(第201図)は、総数50枚出土している。種別の確認できるものでは、開元通宝3点(23・24)、淳化元宝(25)、祥符元宝3点(26)、天聖元宝(27)、元豐通宝4点(28・36・37)、政和通宝(29)、嘉泰通宝(30)、皇宋通宝4点(31～33)、嘉祐通宝(34)、熙寧元宝(35)、聖宋元宝(38)、大觀通宝(39)、洪武通宝2点(40・41)、永樂通宝5点(42～44)、古寛永通宝7点(45～50)、新寛永通宝(51～53)があり、その他図示できないが、至和元宝、文久永宝が検出された。銭貨は、大部分が包含層及び15世紀中葉以降の遺構より出土している。中世以前に流通していた銭貨については遺構にともなうものは確定できない。寛永通宝など近世に鋳造され、流通したものについては18世紀までの溝より検出され、遺構に伴うものが多い。

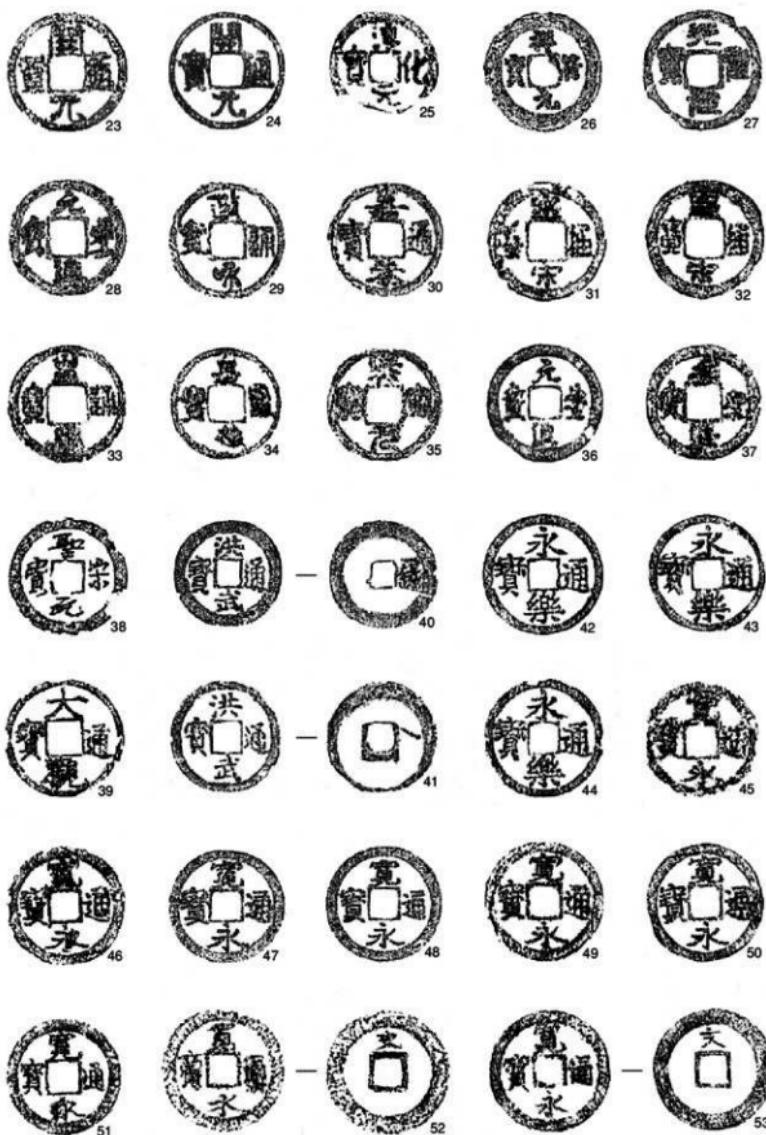
(酒井俊彦)



第199図 金属器(1/4) (1)



第200図 金属器(1/4) (2)



第201図 錢貨(1/1)

第5節 その他の遺物

1. 貿易陶磁

調査区全体より中世から戦国時代にかけての貿易磁器が検出された。総点数72点で、白磁24点、青白磁2点、青磁45点、不明1点がある。種別ごとに構成をみる。註1)

白磁(第202図)

椀(1～13) 1～12は福建省窯産、13は広東省潮州窯産である。1～7は玉縁口縁の椀である。11～12世紀代の時期である。8～10は12世紀代のものである。11は内面に割花文を有するもので、12～13世紀代である。12は内面の段に沿って無釉部分を有する蛇の目の釉剥の椀である。13世紀代の時期に属する。13は11～12世紀代のものである。

皿(14～23) 14～19は太宰府における分類のC群とされるものである。15世紀後半～16世紀前半の時期に属する。22・23は口禿の皿の底部で大宰府の分類によるIX類である。福建省窯産、13世紀～14世紀前半の時期に属する。

壺(24) 四耳壺の体部である。13世紀代の福建省窯産のものである。

青白磁(第202図)

椀(25・26) 25は12～13世紀前半の景德鎮窯産である。26は14世紀代の景德鎮窯産系の枢府手タイプの椀である。

青磁(第202・203図)

椀(27～53) 全て龍泉窯産である。27～37は蓮弁文椀である。太宰府分類でI-5b類で、13世紀後半の時期に属する。38～43は12世紀後半から13世紀前半の割花文椀である。44は小椀で13世紀代のものである。45・46は14世紀後半から15世紀前半の印花文椀である。47～53は龍泉窯系とされる14世紀代のものである。51・53は割花文を有する。

盤(54～57) 54は龍泉窯産13世紀後半～14世紀初頭の時期に属す。55・56は龍泉窯系とされるもので、14世紀代のものである。57は福建省産の龍泉窯産の盤の写しで、14世紀から15世紀前半の時期に属す。

香炉(58) 龍泉窯産で14～15世紀代の時期に属す。

馬上杯(59) 龍泉窯産の馬上杯の脚部で、14世紀代に属する。

花瓶(60) 龍泉窯産13世紀から14世紀代に属する。

染付(第203図)

椀(66～69) 66～68は大宰府の分類による染付椀E群の假頭心タイプの椀である。16世紀後半の時期に属する。

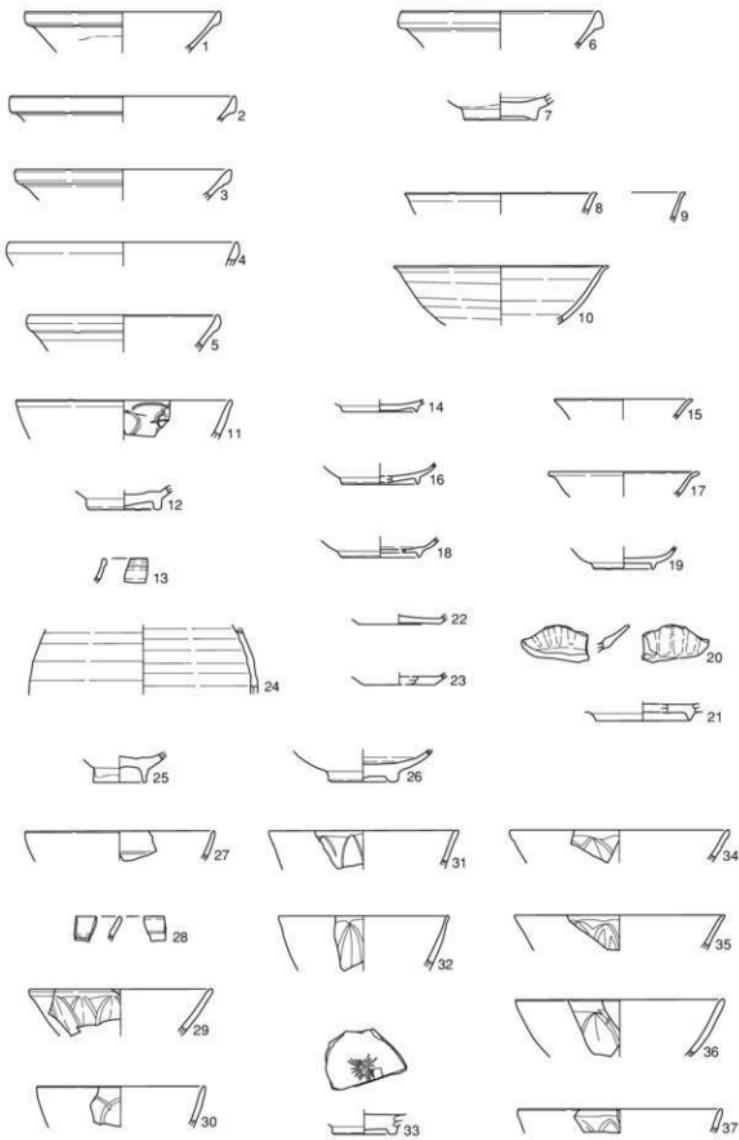
皿(61～65) 61は太宰府の分類皿B1群で15世紀後半から前半、62・63は同じくB2群で16世紀後半の時期に属す。64・65は同じくC群で、15世紀後半から16世紀前半の時期に属す。65は基筒底の皿である。70・71は椀あるいは皿であるが、詳細は不明である。

検出された中世の貿易陶磁器で確実に遺構に伴うものは5点で、井戸より出土している。土坑などで遺構に伴う可能性のあるものは6点である。その他は遺構外および戦国時代以降の溝より検出されたものである。15世紀から16世紀代の戦国時代の時期に属す染付等で屋敷地の区画溝より出土したものは、遺構に伴う可能性がある。

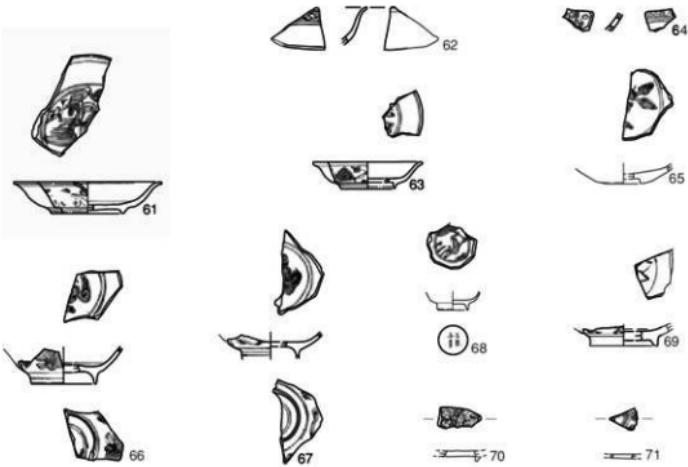
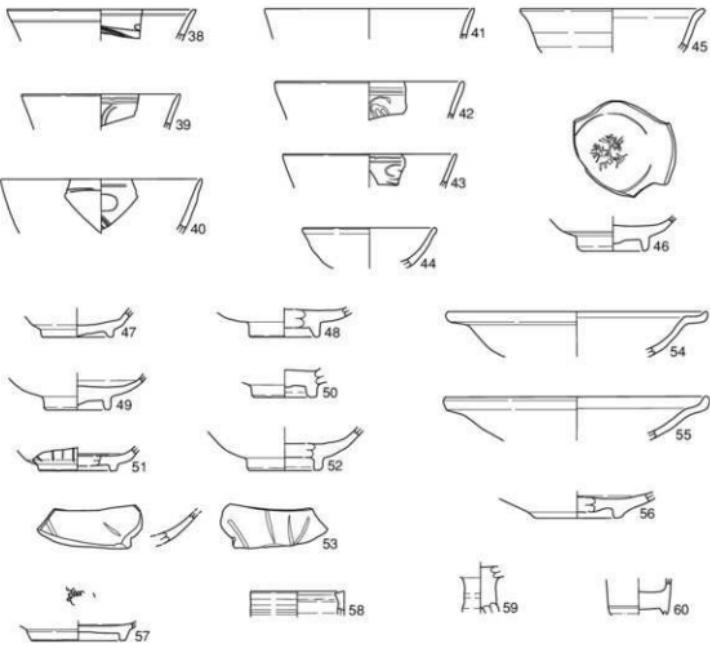
(酒井俊彦)

註

1)本項については、愛知県陶磁資料館学芸員森達也氏の御教示を受けた。



第202図 貿易陶磁(1/4) (1)



第203図 貿易陶磁(1/4) (2)

2. 墨書・刻書のある土器・陶器

文字等の墨痕あるいは沈線による刻書のある土器、陶器類をまとめて取り上げる。

古代(第204図)

1は97A区包含層出土で8世紀後半の須恵器杯である。底部外面の中心より外れた部分に「長」の墨書を有する。2はSD201下層出土の灰釉陶器碗でO-53号窯式である。外底面に「西」が墨書される。3は97A区包含層出土の灰釉陶器碗でO-53号窯式である。内底面にヘラ状器具による印刻があるが、判読不能である。

中世(第204図)

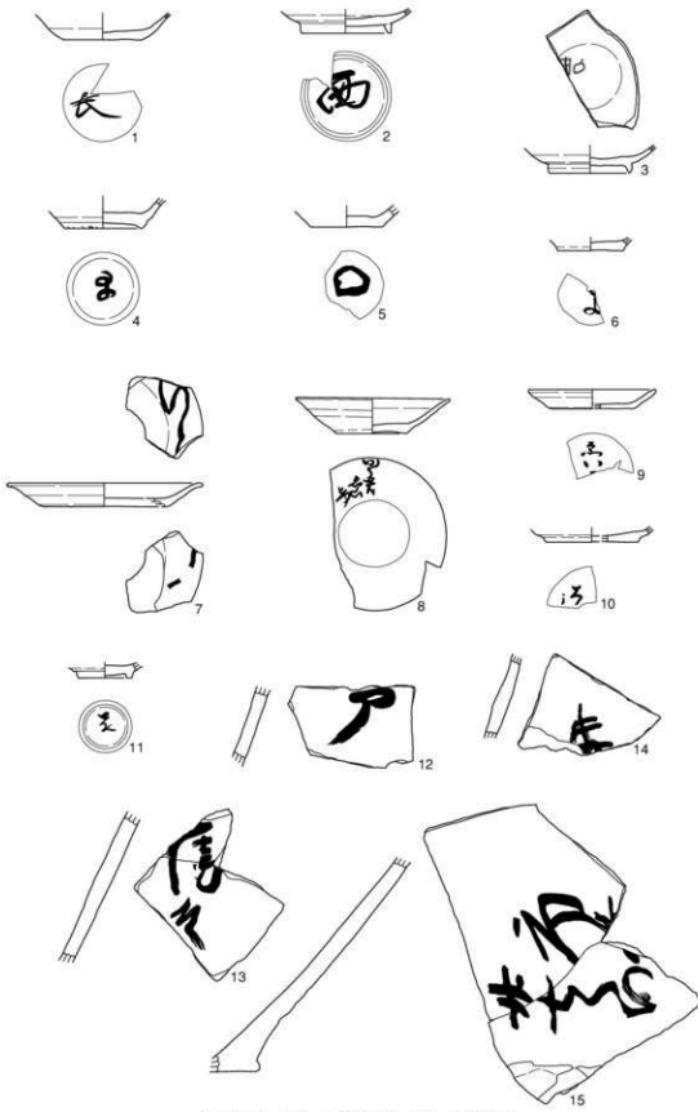
4はSE54出土の南部系山茶碗第6型式である。外底面に墨書されるが、判読不能である。5はSE24出土の南部系山茶碗第8型式である。外底面に「○」が墨書される。

戦国時代(第204図)

6～10はいずれも15～16世紀のロクロ成形の土器器皿である。6は97E区SK130出土で外底面に墨書されるが、判読不能である。7はSD031出土で体部の外面に一本線で墨書される。大部分が欠失しているため全体は不明である。8はSD025・026の出土で、体部外面に墨書されるが判読不能である。9はSD025出土で外底面に「恵い」の墨書があり、以下欠失する。10はSE34出土で外底面に「御」の墨書があり、以下欠失する。

近世(第204図)

11はSD093出土の18世紀代の天目茶碗である。外底面に「苑」が墨書される。12～15は常滑窯産の壺であり、体部外面に墨書される。12・13は97D区SK206出土で同一個体である。12は「部」が墨書される。13は上部が欠失し、「衛殿」が墨書される。14はSD100出土で判読不能である。15はSD097出土で「市」とその左に「廿七之内」が墨書される。(酒井俊彦)



第204図 墓書、刻書のある土器・陶器(1/4)

3. 製塙土器

古代の製塙土器が出土している。いずれも脚部のみで、先の尖る棒状の形態のものである。若干の分類を行う。

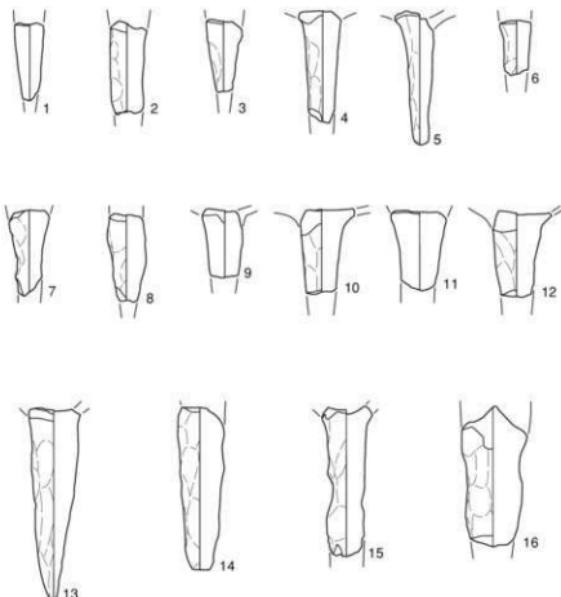
A類(第205図1~12) 全体に細身で先端に向かって細くなるものである。丁寧なナデ調整のもの(1・3・5)と、指圧痕を残すものがある。遺構に伴うものでは、8世紀後半から9世紀前半の時期に属す。

B類(第205図13・14) A類と同じ形状で、やや杯部の接合部の径が大きく全体に太いものである。指圧痕が比較的明瞭に残る。

C類(第205図15・16) 成形の圧痕が明瞭に残る。A類に比べ全体に脚部の径が大きいものである。

B・C類はいずれも遺構に伴うものではないため時期を確定できないが、9世紀から10世紀代の時期と考える。

(酒井俊彦)



第205図 製塙土器(1/2)

4. 土錘・陶錘

土錘 84 点、陶錘 1 点が出土した。(第 206 図) 全て管状で、孔径の大小によって 0.5cm 未満の I 類(1 ~ 62) と、0.5cm 以上の II 類(63 ~ 69) に大別され、I 類が陶錘を含めて 78 点、II 類が 7 点という内訳になる。I 類の重さは概ね 20g 未満におさまるが、57 と 62 は重めである。II 類は 40g 前後が多く、I 類は刺網、II 類は小規模な地曳網に使われていた可能性が高い。

I 類の中で、端部を平坦に調整した痕跡の認められるもの(1 ~ 30)と、認められないもの(31 ~ 52)に分けられるが、10・11・17・23・29 は、調整痕はあるものの明瞭ではない。また、3 と 33、14 と 45、15 と 42 など、調整の有無にかかわらず、全体の形や大きさ・胎土が似通うものもあり、さほど調整に意識を持っていなかったようにも思われるが、調整面が広く明確に平坦にしてあるものには、高温で焼き上げられたものが多い。

胎土を見ると、II 類は全て 1mm 大程の石粒が含まれており、I 類でも 1.5cm 前後以上の幅広なものに石粒が少量含まれていることが多い。陶錘である 30 は、中央部が膨らみ幅広であるが、石粒は認められず、緻密な胎土である。一方、陶錘に形・大きさとも似ている 5・6 は、石粒が少量含まれている。陶錘を意識してつくり、何か意図して石粒を混入したという可能性も考えられる。

なお、出土状況から時期を推定できるものは少ないが、SB40 出土の 3 が 8 世紀後半、SB33 出土の 1・2・32 が 9 世紀前半、SB07 出土の 7 が 8 世紀後半~9 世紀前半と考えられる。

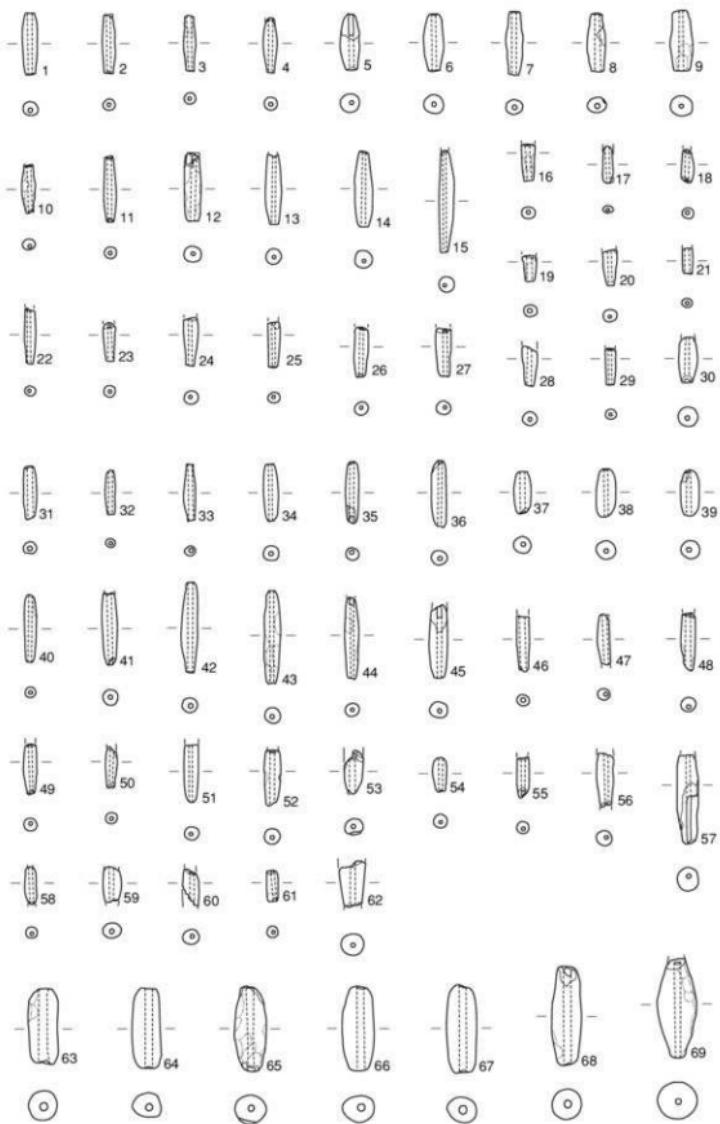
(水野多榮)

参考文献

杉浦裕幸 1990 「豊田市梅坪遺跡出土管状土錘の分類」『三河考古 第 3 号』

宮腰健司・吉橋佳子 1991 「大瀬遺跡出土の土錘について」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 18 集
一宮市博物館 1994 「漁の技術史—木曽川から伊勢湾へ—」平成 6 年度企画展図録

久保楨子 1996 「土錘」「大毛沖遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 66 集



第206図 土錘・陶錘(1/4)

5. 金属関連遺物

郷上遺跡から出土した金属関連遺物には、椀型鉄滓、流動滓、炉壁、羽口、瓶炉破片、鋳型片と推定される粘土塊等が存在し、今回報告の対象とした資料は全部で1967点を数える。この他に最大径が1cm以下の小形の椀型鉄滓片や鍛造潤片などの微細な資料が多量に出土しているが、ここではその存在を示す程度にとどめておくことにし後考に委ねたい。今回は資料が膨大な上に十分な調査整理期間を確保できなかつたため、従来行ってきた資料の基礎的なデータの採取をせず（鈴木・藤山1999他）、資料の大雑把な分類を行つた上でその代表的な資料の図化と出土個数および重量の測定を行つた。なお、後日分析を行いやすいように重量を計測した資料については通番を付している。

(1) 椭型鉄滓（第207図2～5）

椀型鉄滓は全部で1206点（約100.3kg）が存在するが、非常に細かく分割された椀型鉄滓についてはその数に含めていないために、実際にはもっと多くの資料が出土している。大半の調査区において椀型鉄滓は出土しているが、このうち9割以上の1127点（約96.3kg）が97D区から出土したものである。大半の資料は破割りされたもので、この状況は他の愛知県下の中世から近世までの集落遺跡と同様である。

ここでは、資料が最も多く出土した97D区出土椀型鉄滓を取り上げて報告したい。97D区から出土した椀型鉄滓を遺構別にその出土量を見ると、SD076、SX38、97D区SK154、97D区SK206、97D区SK244、97D区SK278、SX14などから多くの資料が出土した。これらの椀型鉄滓を色調や質感そして含有物などから5類に分類した。

A類 漚自身に砂粒を多く含有して固着したような状態で質感は軽いものである。ガラス質は重い感じで色調は灰色から灰黒色を呈し、発泡はほとんど認められない。97D区では椀型鉄滓A類は300点（12206.2g）と比較的多く出土した。2はA類の4分の1分割椀型鉄滓である。上面と下面ともに少し盛り上がり凹凸は少なく下面には炉材が付着する。

B類 砂粒を若干包含する鉄滓で質感は軽いものであるが、発泡はあまり存在しない。B類は14点（3428.2g）しか存在せず、今回は特に図示しなかった。

C類 質感が非常に軽いもので、ガラス質は灰色から灰黒色で光沢が認められる。発泡が著しく上下面ともに凹凸が激しく認められ、白色の石などが多く付着している。C類は97D区では16点（668.4g）が出土しておりB類と同様あまり数量は多くない。3はC類の4分の1分割椀型鉄滓である。下面是比較的に凹凸が少なく炉材が付着しているが、上面は凹凸が激しく認められる。

D類 質感が重い椀型鉄滓である。灰黒色から黒色のガラス質を持ち発泡は小さく数も少ない傾向が認められる。97D区では74点（16246.9g）が出土している。4はD類の2分の1分割重複椀型鉄滓である。下面是比較的に凹凸が少なく炉材が付着しているが、上面は少し盛り上がっている。

E類 質感が重くも軽くもない普通の椀型鉄滓である。おそらく密度は2.0～3.0付近に分布すると推測される。灰黒色から黒色のガラス質を持ち発泡はやや小さい傾向が認められる。97D区では723点（63750.6g）が出土した。5はE類の2分の1分割重複椀型鉄滓である。上下面ともに凹凸が比較的激しく下面には炉材が付着していた。

これらの分類をもとに主要な遺構別各類組成を求めるに、SD076と97D区SK206と97D区SK278ではE類が大部分を占めておりD類はこれに次ぐ量で出土している（SD076はC類1点:D類18点:E類132点、97D区SK206はD類8点:E類56点、97D区SK278はD類1点:E類38点）のに対して、SX38と97D区SK154と97D区SK244と97D区SX02ではA類とE類が拮抗する形で出土している（SX38はA類185点:D類24点:E類194点、97D区SK154はA類31点:D類4点:E類が46点、97D区SK244はA類16点:E類が35点、97D区SX02はA類30点:B類14点:C類1点:D類5点:E類46点）。こうした組成の相違が何を意味するのかは今後の検討を経なくてはならないだろう。

(2) 流動滓（第207図1）

流動滓は全部で24点出土している。97A区・97E区・97F区・98C区の各調査区で出土したが、点数は非常に少ない。ただし97D区のように小形の資料をあえて分析の対象にしなかった地区もあり、こうした地区で流動滓が全くなかったとはいえないことをあらかじめ念頭に置いておきたい。選別された流動滓はすべて質感が軽く灰色から灰黒色の色調を呈するいわゆる流動滓Bに属するものである。1は97D区SX38から出土した流動滓で、上面の凹凸が激しい流動滓Bである。

(3) 鋳型片と推定される粘土塊（第207・208図6～19）

鋳型片と推定される粘土塊は全部で262点出土している。出土地点は98A区から97C区までのほぼ全調査区にわたって分布しているが、このうち8割以上の226点が東西両端の調査区である98A区と98C区から出土している。全て大きく破損しており原形を推測できない細片の状態となっていて、鋳型片か否かも確定的ではない。特に被熱された面が存在するとか、特定の部分に真土がみられるといったような状態が認められないため甚だ資料的には怪しい一群である。しかし、一方で破損していてもその形状を分類してみると一定の特徴や傾向もまた認められることから、暫定的にこの項目で報告することとした。

鋳型片と推定される粘土塊は胎土の状態と形状から大きくA類（内型？）とB類（外型？）の2類に分類でき、さらに残存する部位の形状などから細分が可能である。

A類 胎土が黄灰色から淡褐色の比較的緻密な粘土で焼成されているもので、大部分のものは被熱痕などが認められないものである。残存する部位の形状などから4類に区分できる。

A 1類（第208図8～10） 形状が角柱状に想定復元できるものである。破損されているため正確な形状を復元することはできないが、表面の一部に直線状の稜線が残り、横断面形が四角形以上の多角柱状となっていたと思われる。表面は平滑な面を作っている。8は横断面で観察すると4分の1以下に破損したもので大きく屈曲する稜線は1条認められる。9は横断面でみると半分以上が欠損した内型で、現状で推定復元すると横断面形は扁平な六角形となるものである。10は大部分が欠損した資料で形状の復元は困難であるが、表面に直線的な稜線を1条認めることができる。

A 2類（第208図11～13） 形状が円柱状に想定復元できるものである。破損されているため正確な形状を復元することはできないが、表面には直線的な稜線が基本的には残存しない点がA 1類と異なっている。ただ、表面にはモザイクのような細かい平坦面を見て取ることができ、部分的に横断面は多角形となるものが大半を占める。11は横断面で観察すると半分に破損し

たもので、円柱の直径は約7cmと想定される。12は横断面でみると3分の1程度残存したもので、円柱の直径は約8cmと復元される。13は横断面では半分に破損したもので、円柱の直径は約9cmと想定されるものである。

A 3類（第208図15～17） 形状が円頭状に想定復元できるものである。A 1類およびA 2類の先端部に相当する部材と考えられ、A 2類と同様に表面にはモザイクのような細かい平坦面が観察される。15は裁頭円錐状に成形されたA 3類で、横断面形は円形と思われる。16は粘土塊を3～4個つなぎ合わせて成形されたものである。

A 4類（第208図14） A 1類からA 3類までの形状に当てはまらない形状を呈するもので、小破片となっているため形状の推定復元が極めて困難なものである。14はその一例で断面形が隅丸三角形状に見ることができるが全体の形状は詳らかではない。

B類 胎土が灰色から暗灰色の比較的荒い砂粒を含む粘土で焼成されているもので、部分的に被熱が認められるものである。形状は扁平な直方体（板状）を呈するものが多い。ここでは板状の粘土塊の厚さで2類に細分した。

B 1類（第208図18～19） 薄い扁平な形状に想定復元できるものである。破損されているため正確な形状を復元することはできないが、遺物自体は直方体の形状を呈するものと考えられ、これらが組み合わさって利用されたものではないかと想像されるものである。18は厚さが約8cm、19は厚さが3cm強を測るもので、両者とも裏面は破損している。

B 2類（第207図6～7） 比較的厚い扁平な直方体に想定復元できるものである。破損されているため正確な形状を復元することはできない。6は残存する部分で厚さが4cmを超えるもので、7は厚さが約8cmを測る製品である。

以上の分類から、調査区ごとに各々の出土量を見ると、97D区ではA類が259.8gおよびB類が1492.5gとなっておりB類が多い。これに対して98A区ではA類が7957.3gおよびB類が971.9g、98C区ではA類が15527.1gおよびB類が6480.9gとなっており、両調査区ではA類の方が多いことが判明した。またA類の内訳をみると、98A区ではA 1類4100.3g:A 2類1381.2g:A 3類921.7g:A 4類1056.9g、98C区ではA 1類3116g:A 2類1547.5g:A 3類1219.7g:A 4類467.7gであり、両調査区とも類似した組成となっている。

(4) 羽口（第209図20～22）

羽口は全部で361点（41042.3g）存在する。出土地点は97A区から97F区までの調査区に分布しているが、このうち8割以上の296点（36044.5g）が97D区から出土している。全て破損した状態であり、完形品は存在しない。全体の形状は直径がおよそ10cmの円筒形を呈しているものが大半を占めており、羽口の先端には滓が付着しているものが多い。胎土は砂粒を多く含むものが大半を占める。

20は97D区SK154から出土した羽口で、外径が9.9～10.2cm、内径が1.8～2.4cmを測る。先端部には灰黒色を呈する滓が付着し、その付近は熱を受けて胎土が灰白色などに変色している。滓が付着した痕跡から炉に差し込まれていた角度を推定復元すると約5°となっている。21はSD076から出土した羽口で、外径は8.4～8.6cm、内径は約2.2cmを測る。先端部には灰黒色を呈する滓が付着するがその量は比較的少ない。滓が付着した痕跡から炉に差し込まれていた角度を推定復元すると約7°となっている。22はSX38から出土した羽口で、外径は9.4～

10.3cm、内径は約2.3cmを測る。先端部には灰黒色を呈する滓や白色の石などが付着している。その附近では熱を受けて胎土が灰白色から淡褐色などに変色しており、炉壁内に相当する胴部は部分的に欠損している。滓が付着した痕跡から炉に差し込まれていた角度を推定復元すると約10°となっている。

(5) 甑炉片（第209図23・24）

甑炉片は全部で70点出土している。大半の資料（63点）は97A区から出土しており、一部隣接する97B区でも若干量の出土が認められるが、他の調査区では全く認められない。資料は小破片に破損しており正確な甑炉の規模などは明らかにできないが、状況から見て、円筒形の土製品を複数積み重ねて炉の体部を作っていると復元できる。炉の底部についてはやはり部材らしき資料が存在しており、土製品で構成されたと推測されるが形状までは判明しなかった。炉本体の胎土は黄白色から灰白色の比較的緻密なもので内面に滓がほぼ全面に付着していた。滓は黒灰色の光沢のあまりないもので表面に白色の石が部分的に付着していた。

97A区で出土した甑炉は、その残存部位から甑炉部材間の接合部、口縁部、体部、底部、不明の5部位に分けることができる。円筒形の甑炉部材を積み重ねた接合部に相当すると思われる資料は18点（2237.9g）が出土しており、24はその一例である。24は比較的大きな破片で残存した炉の体部で上端部は接合部に相当すると考えられる。口縁部とみなされる資料は2点（99.7g）存在するが、口縁部に近い部分の内面には滓があまり付着していない。体部に相当する遺物は17点（365.1g）出土した。底部と思われる資料は25点（715.4g）あるが、黒灰色の重い質感のガラス質を持つ滓が溜った状態で認められる。部位を特定できない不明甑炉片は1点存在する。

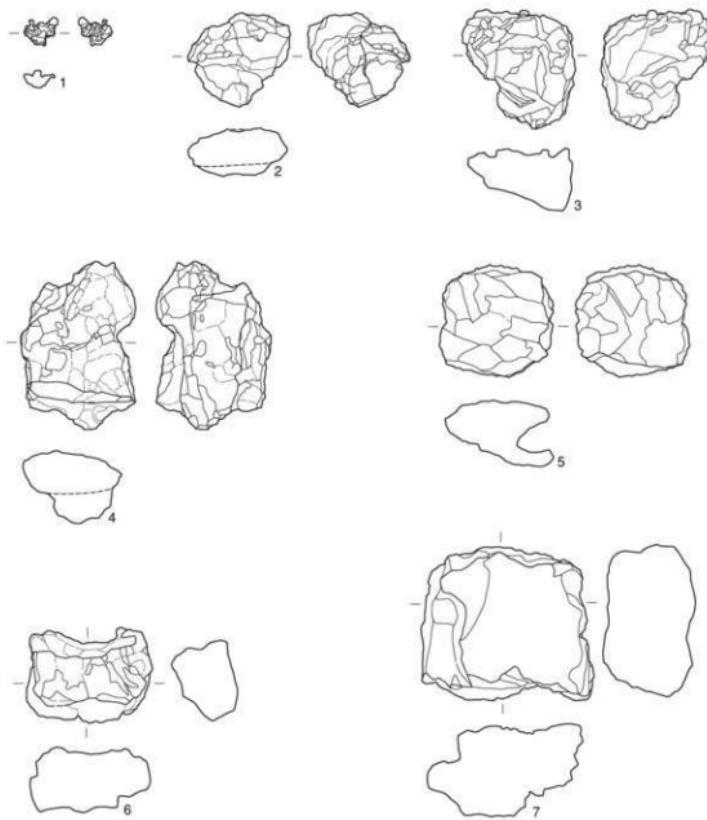
(6) 炉壁

炉壁は全部で8点出土しているが、本稿では図示しなかった。ここで分類した炉壁は、基本的には熱を受けて溶融し発泡した小片を指している。97C区で最も多く出土している。

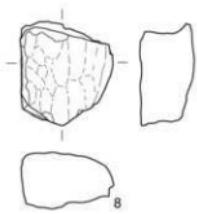
小結

これらの資料について調査区別に出土数を検討する。羽口と椀型鉄滓は97D区で非常に多量に出土しており、97A区、97C区、98A区でも一定量が認められる。このうち97D区については遺構ごとに検討すると、SD76などの特定遺構に集中していることが判明している。このように一調査区で1000点を超える椀型鉄滓が出土する事例は、愛知県下では一宮市江森遺跡出土の椀型鉄滓量を上回る非常に珍しい事例であると言える。今回は具体的に事例報告ができなかつたが、椀型鉄滓が多量に出土した遺構の埋土からは多数の鍛造剥片が出土していることが明らかになっているので、97D区では恒常に鍛造鍛冶工程が行われていたことが予想される。ただし微細な流動滓や鍛造剥片の詳細な分析を待ってなお検討を加えていく必要があるだろう。一方、甑炉破片は97A区とその附近で非常に多く見られることから甑炉を用いた金属生産が行われていたことが予測される。さらに、鋳型片と推定される粘土塊については、調査区両端部（郷上遺跡の両端部でもある）の98A区と98C区で各々100点以上が出土している。これらが本当に鋳物生産に関連するものと仮定すれば、このような工程は集落の縁辺部で行われていたことになる。

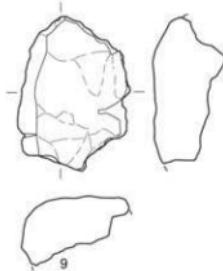
以上のように金属関連遺物は種別で分布状況が異なっており、郷上集落の中で金属器加工の様々な工程が各々の屋敷で分担して行われていたことが推測されるのである。（鈴木正貴）



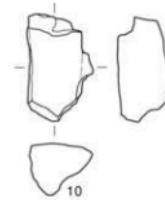
第207図 金属関連遺物(1/4) (1)



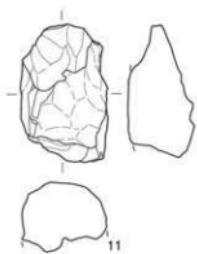
8



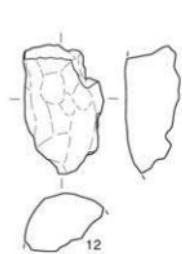
9



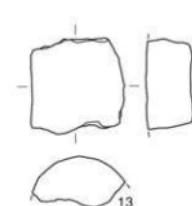
10



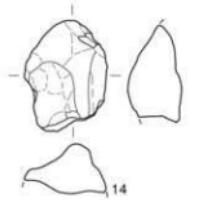
11



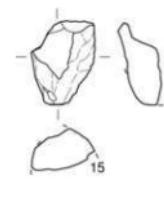
12



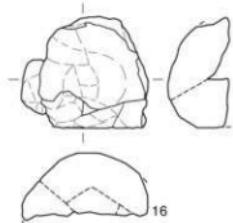
13



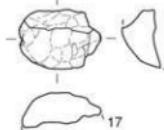
14



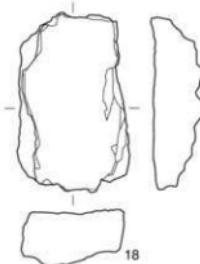
15



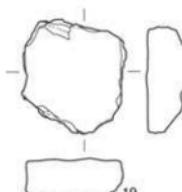
16



17

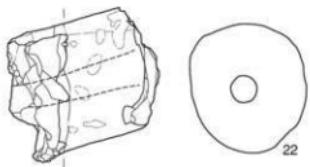
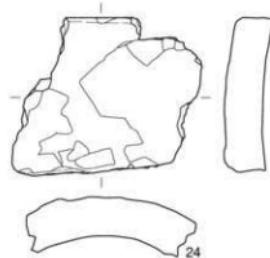
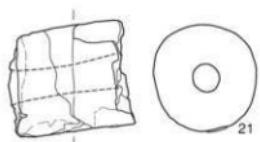
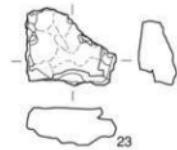
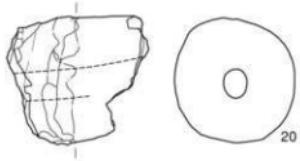


18



19

第208図 金属関連遺物(1/4) (2)



第209図 金属関連遺物(1/4) (3)

6. 瓦

瓦は總破片点数で 55 点出土し、成形技法や胎土・焼成による色調の違いなどから判断して古代瓦と中世瓦とに大別したが、判断できないものが 4 点あった。

古代瓦(第 210・211 図 1~16) 古代瓦は破片点数で 32 点出土し、丸瓦・平瓦で構成される。区別できたものは丸瓦 8 点、平瓦 22 点である。軒先瓦はない。胎土に砂粒混入が少なく、色調が褐色を呈する点が共通する。丸瓦の成形技法では、平瓦の成形技法であるいわゆる桶巻き作り痕跡に類似する側板連結模骨の痕跡が認められる。凸面は継または横方向ナデ。叩き具は不明である。3 以外の資料では、凹面は広縁部と側縁部はヘラ削りして面取りする。平瓦は全て、いわゆる桶巻き作りである。凸面は横方向ナデがほとんどであるが、斜格子叩き(10)、繩叩き(11・15)が確認できるものもある。凹面側縁部をヘラ削りするものが主体であるが、調整を加えていないもの(11・16)がある。後者 2 点は反りがほとんどなく、熨斗瓦の可能性もある。

中世瓦(第 211 図 17~26) 中世瓦は破片点数で 19 点出土し、丸瓦・平瓦・鬼瓦で構成される。丸瓦 6 点、平瓦 12 点である。色調は灰色系統で、古代瓦より硬質である。丸瓦は全て円筒模骨による成形で、凹面に布目・糸切痕、凸面に横方向ナデが認められる。凹面側縁部を若干ヘラ削りするもの(18・20)もあるが、概ね側縁部は円筒裁断後調整を加えない。21 は玉縁部分の資料で、穿孔がなされている。平瓦は全て一枚作りで、凹面に糸切痕・布目、凸面に離れ砂の付着が認められる。凸面に叩き具痕のあるものを図示したが、いずれも斜格子状のものである。26 は鬼瓦の一部と推定される。表面には突帯のような文様が表現され、表面と裏面を貫通する穿孔も確認できる。

小結

古代瓦の年代について参考となるのが、郷上遺跡北方に位置する神明瓦窯跡出土瓦である(森 1996)。当該瓦窯は岡崎市北野庵寺所用の軒丸瓦と同范瓦が出土しており、その供給地であったと考えられている(稲垣・齊藤 1991)。出土丸瓦に玉縁がなく平瓦に一枚作りが認められないことから、北野庵寺創建からそれほど下らない時期、7 世紀中葉から 8 世紀初頭の間に操業していたと考えたい。その神明瓦窯跡からは側板連結模骨を用いて成形された丸瓦が出土しており、郷上遺跡の古代瓦もここから供給されたと考えられる。

次に、瓦の出土分布から若干提示しておきたい。古代瓦は 98A・97F 区を中心に遺跡南部に分布しており、これとは対照的に中世瓦は 98B・C 区を中心とする遺跡北部に分布する。古代の瓦に関していえば、神明瓦窯に近い郷上遺跡北部に古代瓦がほとんどみられないことは、出土瓦が単なる流れ込みあるいは輸送時の落下ではないことを示している。ただある程度の分布は確認されたものの数量が少なく、その地点に瓦葺建物が存在したことを示す根拠は遺構・遺物とともに乏しい。可能性として、遺跡東側の微高地に瓦葺きでなくとも一部が瓦葺きという建物が想定できないだろうか。一方中世瓦の分布地点は北接する天神前遺跡の中世遺物が多く分布する地域(鈴木 2001)に近い。ただこちらも瓦葺建物の存在については、調査区内で遺構が確認されたわけでもなく、その付近に可能性があるというだけにとどめておきたい。

(永井邦仁)

参考文献

- 稲垣晋也・齊藤嘉彦編 1991 「北野庵寺」 岡崎市教育委員会
鈴木正貴編 2001 「天神前遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 96 集 (財)愛知県教育サービ
スセンター 愛知県埋蔵文化財センター
森 泰通編 1996 「神明遺跡」 豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集 豊田市教育委員会

7. 瓦塔

97A・C区の大溝とその付近から須恵質の陶製多層塔が出土している。この名称についてはさまざまであるが、ここでは最もよく用いられる瓦塔という名称(柴田1931)を採用する。なお、本遺跡出土の瓦塔については以前報告したことがある(永井1999)が、本報告をもって最終的なものとする。

瓦塔は屋蓋部・軸部・相輪部などの部品から成り立っており、組み立てると、五重塔の場合約2mの高さになる。郷上遺跡出土の瓦塔はことごとく小片と化しており、出土した総破片からは瓦塔全体を復元するには遠く及ばない。出土地点は97A区の南端に集中しており、調査区外にも分布域が広がっていると思われる。なお総破片点数は52点で、うち屋蓋部23点、軸部22点が分類でき、軸部に含まれる斗拱部分は11点確認できた。なお、相輪部はみられなかつた。色調灰白色で表面が粉を吹いたような破片が主体で、5・6は明褐色で比較的堅緻である。部品ごとに焼成具合が異なっているか、その後の磨耗の進行具合によるものであろう。以下では各部品ごとに記述する。

屋蓋部(第212図) 多層塔の屋根を表現した部品である。その軒先部分の瓦・垂木表現は、瓦塔分類の主要な要素である。1・2は軒丸瓦表現が残る軒先部分である。瓦当文様は省略されている。3は降棟の一部か。4も軒先部分である。5・6・8・9は屋蓋の半ばあたり二重軒の表現であり、軒先ではない。註1) この点先の報告を訂正し、2基の瓦塔が存在したとする見方を取消しておきたい。10は降棟部分で、隅垂木を貫通する穿孔がある。11・13も隅棟部分。11は1点だけ離れて97C区で出土している。降棟の傾斜から屋蓋全体の傾斜が想定できる。13ではベースとなる粘土板に粘土紐を貼付して熨斗瓦と隅垂木としているのがわかる。12は瓦屋根の上端部分にあたり、裏面は下方の軸部を受けるために垂木表現が省略されている。7も同様の部分。

屋蓋部丸瓦表現は粘土紐貼付後管状工具ナデの可能性が高いが、粘土紐貼付が明瞭に確認できる箇所はない。なお、垂木表現はベースとなる粘土板に切込線を入れてから削り出すことで現出している。

軸部(第213図) 多層塔の壁および組物を表現した部品である。郷上遺跡出土の瓦塔は、この壁表現に組物である斗拱の表現が取り付けられる。まずは斗拱表現の特徴について述べる。

斗拱部分(14～19)は、14で明らかのように、軸部本体壁の上端に取り付く構造になっており、上から見ると、本体壁の外周を斗拱部分が廻っているように見える。斗拱部分は本体壁に取り付けた粘土帶・塊にヘラ状工具で切り込んでいて肘木部分などを成形しているが、かなり簡略化された表現である。斗は凸形をした型を押して表現する。凸形型には大小2種類がある。15・17の凸形がやや大きく、軸部でも大きめに作る傾向のある最下層に位置する初軸の斗拱表現であったかと思われる。18は1cmに満たない短い尾垂木が確認できるが、隅で本来3方向に出ているはずの尾垂木のうち、中央のそれは省略されている。

本体壁は粘土板4枚を組み合わせて四角い筒形を作り、扉口部を切り抜き、扉口の柱と内法長押を屋蓋部垂木同様に周囲を削り落とすことで現出している。従って外面は全面削り痕がみられ、一方内面は指ナデ痕が観察される。20は扉口部上端で、直径5mm程の柱擦り穴が穿孔されている。扉口が開口するのは通常初層軸部に限られる。提示した本体壁資料のほとんどが

扉口に関わる部分であり、かつこれらが比較的の残存状況が良好であったことを考えると、本瓦塔は初層を中心に出土しているものと考えられる。

本瓦塔の製作年代については現状では確たる根拠がない。出土層位にみる廃棄年代も、戦国時代以降の遺物が混入する SD201 大溝上層であり、概ね平安時代以降に大溝に廃棄されたものとしか捉えられない。窯跡資料から狼投窯での瓦塔生産のピークは 8 世紀後半とみられるが、さりとて本瓦塔の年代が決まるわけでもない。^{註 2)} 瓦塔の種々多様な形態が単純な年代比定を妨げているからである。東海地方出土の瓦塔については系譜関係を整理していく作業が必要であり、今後の課題としたい。
(永井邦仁)

註

1) 池田敏宏氏の御教示。

2) 狼投山西南麓古窯跡群において、瓦塔が出土した須恵器窯跡のうち、鳴海 32 号窯(齋藤 1959)と NN-286 号窯(名古屋市教育委員会 1986)は鳴海 32 号窯式期、折戸 80 号窯(斎藤 1978)と黒並 31 号窯(三好町教育委員会 1986)は折戸 10 号窯式期と考えられている。

参考文献

柴田常忠 1931 「瓦塔」「瑠璃史談」2-4

池田敏宏 1999 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討」『研究紀要 第 7 号』(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

永井邦仁 1999 「郷上跡遺跡出土の瓦塔」『年報 平成 10 年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター

齋藤彰一 1959 「愛知県狼投山西南麓古窯址群」愛知県教育委員会

名古屋市教育委員会編 1986 「NN-286 号窯跡発掘調査概要報告書」

斎藤孝正編 1978 「愛知県日進町折戸 80 号窯発掘調査報告書」日進町教育委員会

三好町教育委員会編 1996 「県営北部畠地帯総合土地改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」

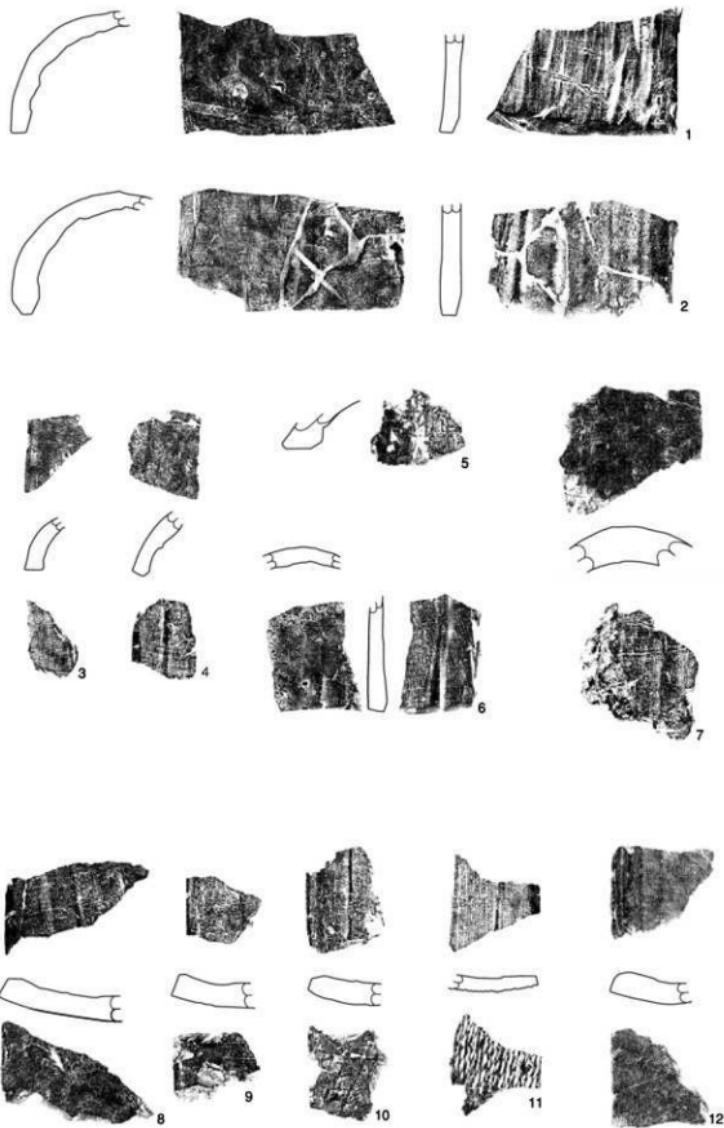
8. 塗輪

98C 区では円筒埴輪片と家形埴輪の一部が出土している。(第 214 図) 5 世紀後半から 6 世紀前半と推定される。

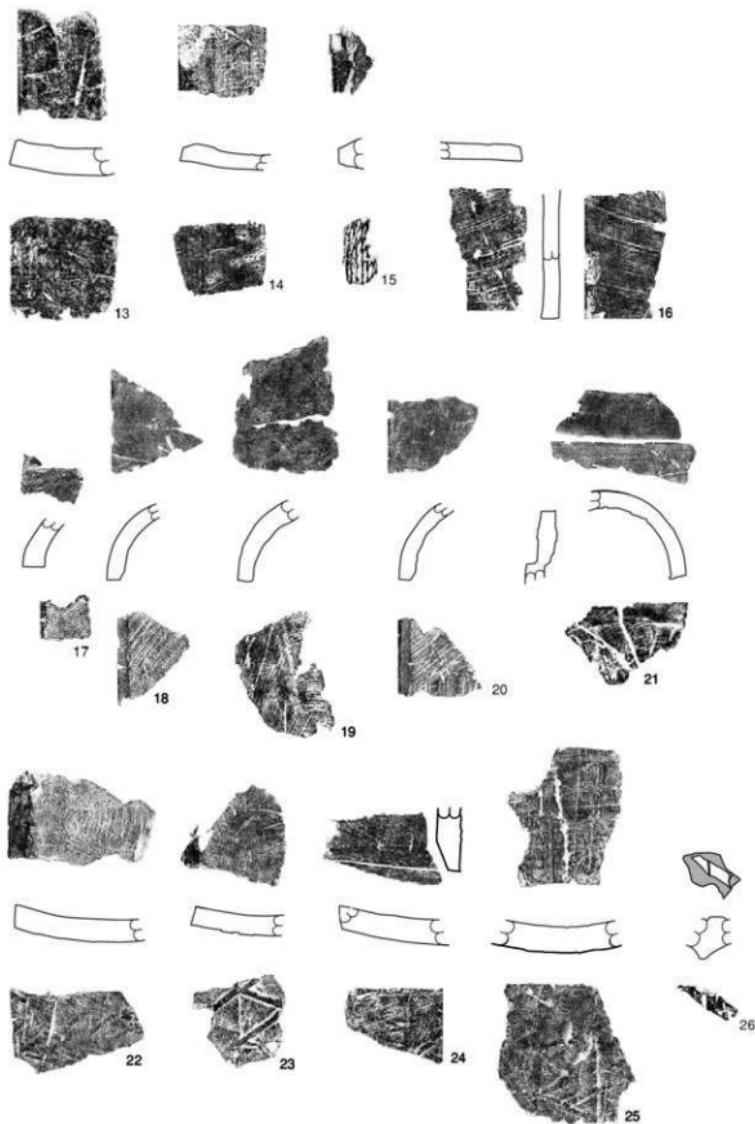
円筒埴輪(1)は、厚さ 1cm、表面には縱方向ハケメ調整がなされ、裏面は横ナデである。表面は明黄褐色を呈し、胎土中に土器よりはやや大きい金雲母片が入っている。表面左下方には焼成時の黒斑が認められる。直径は復元できていないが、厚さなどからやや大きめのものが想定できる。戦国時代以降の洪水による擾乱(SX40)から出土した。

家形埴輪(2)は、塗木の部分が 1 点出土している。全長 6.9cm、手捏ね成形で、全体に指頭圧痕がある。戦国時代の溝から出土した。

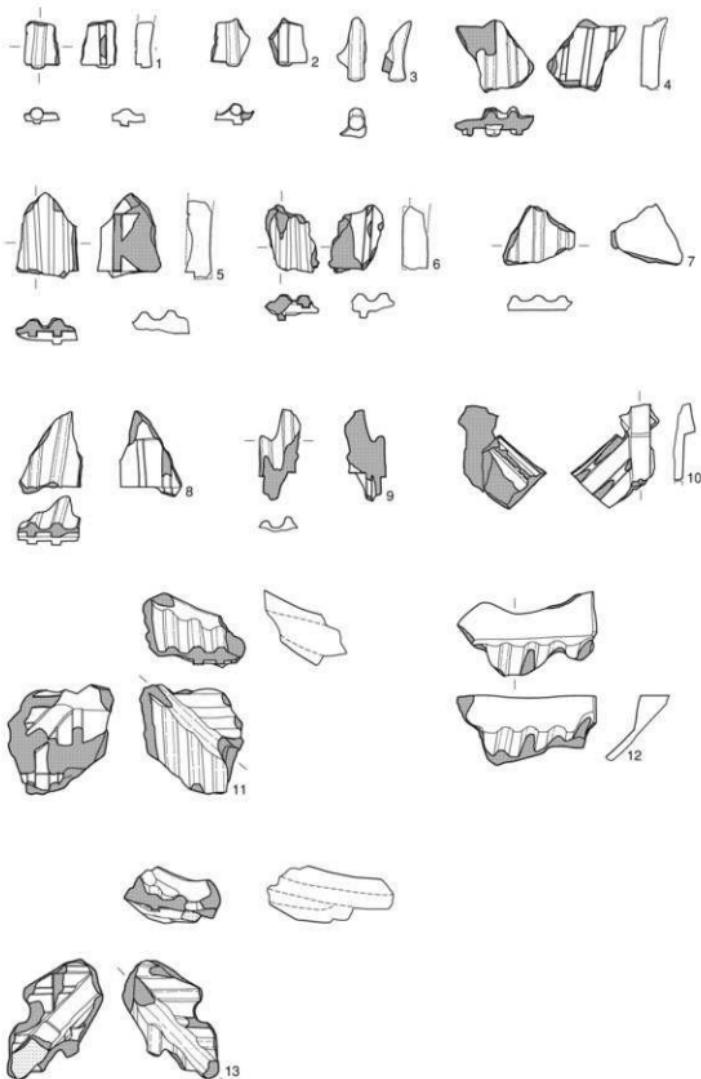
いずれも小片でしかも戦国時代以降の遺物と共に出土している。古墳に一度に多数樹立されるという本来の目的からすると、唐突な出土という印象がある。しかし両者ともに顕著な摩滅がみられないことから、はるか遠方より流されてきたものではないことは確かで、現状では性格不明の古墳時代中期の溝とした SD210 を周溝とする古墳(ただし SD210 からは埴輪の出土はない)、もしくは付近に当該期古墳が存在した可能性を指摘するにとどめたい。(永井邦仁)



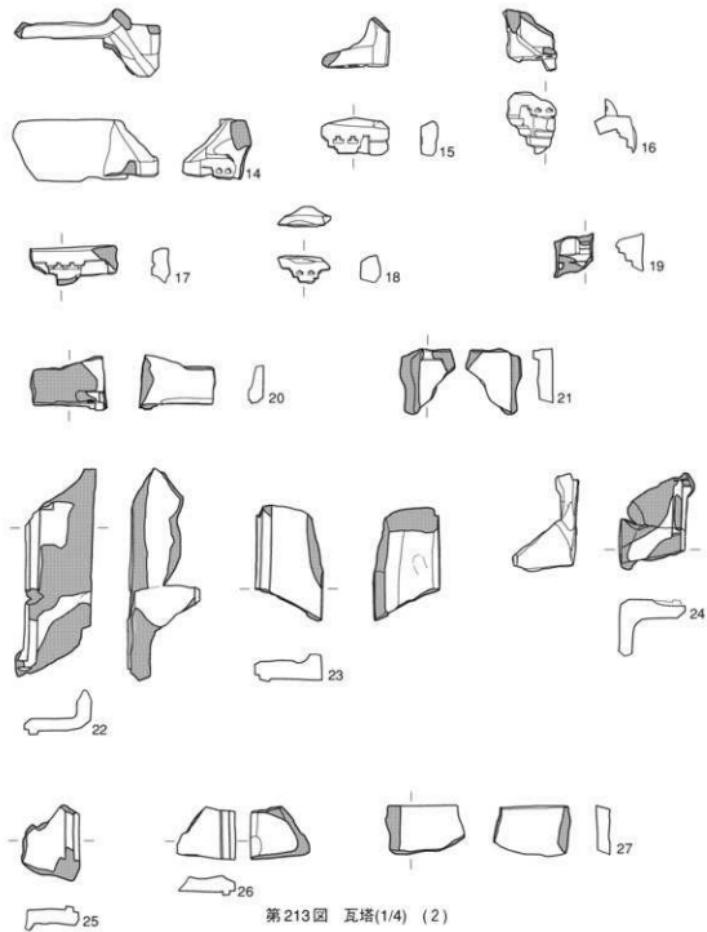
第210図 瓦(1/4) (1)



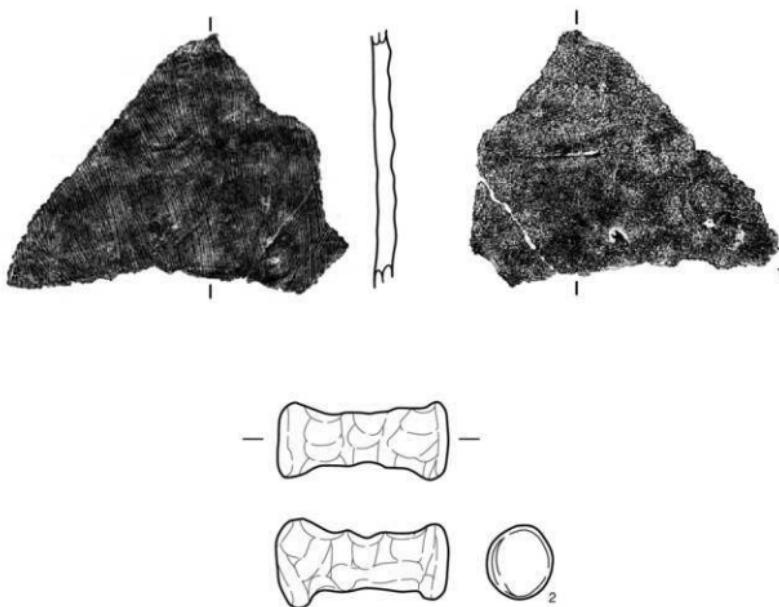
第211図 瓦(1/4) (2)



第212図 瓦塔(1/4) (1)



第213図 瓦塔(1/4) (2)



第214図 塗輪(1 1/8, 2 1/4)

第4章 自然科学的分析

第1節 郷上遺跡出土山茶椀の胎土分析

—X線回折試験及び化学分析試験—

(株)第四紀 地質研究所 井上 嶽

1. 実験条件

1-1. 試料

分析に供した試料は第3表胎土性状表に示す通りである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2. X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

1-3. 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は、加速電圧: 15 kV、分析法: スプリント法、分析信率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

2. X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第3表胎土性状表に示す通りである。第3表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

2-1. 組成分類

1) Mont, Mica, Hb 三角ダイヤグラム

第215図に示すように三角ダイヤグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。モンモリロナイトは $Mont/(Mont+Mica+Hb) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の1~4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第215図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイヤグラム

第216図に示すように菱形ダイヤグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記

載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、a)3成分以上含まれない、b)Mont,Chの2成分が含まれない、c)Mica,Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものであるMont-Ch,Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch=100と計算し、Mica,Hb,Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイヤグラム内にある1~7はMont,Mica,Hb,Chの4成分を含み、各辺はMont,Mica,Hb,Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第216図に示すとおりである。

3)化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO₂-Al₂O₃図、Fe₂O₃-MgO図、K₂O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3.X線回折試験結果

3-1. タイプ分類

第3表胎土性状表には郷上遺跡より出土した土器のX線回折試験結果が記載してある。

Aタイプ: Mont,Mica,Hb,Chの4成分に欠ける。

高温で焼成されているため、鉱物はガラスに変質し、4成分は検出されない。分析した土器は高温で焼成されているため鉱物がガラスに変質し、すべてAタイプである。

3-2. 石英(Qt) - 斜長石(Pl)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。第217・218図Qt-Pt図に示すように、Qt(石英)の強度が低い領域から高い領域にかけてA~Cの3グループに分類した。第217・218図は郷上遺跡出土土器と瀬戸窯跡の土器を対比した図と郷上遺跡出土土器と水無瀬窯跡の土器を対比した図の2種類を作成した。

Aタイプ: Qtが1500~3000、Ptが70~120の領域に集中する。

Bタイプ: Qtが2600~2300、Ptが50~110の領域に集中する。

Cタイプ: Qtが4000~6000、Ptが40~80の領域に集中する。

4. 化学分析結果

第4表化学分析表に示すように、郷上遺跡より出土した土器を化学分析した。分析結果に基づいて第219・220図SiO₂-Al₂O₃図、第221・222図Fe₂O₃-MgO図、第223・224図K₂O-CaO図を作成した。各図は郷上遺跡出土土器と瀬戸窯跡の土器を対比した図と郷上遺跡出土土器と水無瀬窯跡の土器を対比した図の2種類を作成した。

4-1. SiO₂-Al₂O₃の相関について

第219図SiO₂-Al₂O₃図に示すように、郷上遺跡の土器と瀬戸窯跡の土器はSiO₂が低い領域から高い領域に須恵器I~IIIの3グループと“その他”に分類された。

I タイプ：S i O 2 が $66\sim72\%$ 、A l 2 O 3 が $20\sim25\%$ の領域に集中する。

II タイプ：S i O 2 が $72\sim75\%$ 、A l 2 O 3 が $16\sim23\%$ の領域に集中する。B タイプの胎土の 13 世紀後期の椀と皿が集中する。水無瀬窯跡の椀・瓶類と共に存する。

III タイプ：S i O 2 が $75\sim80\%$ 、A l 2 O 3 が $12\sim17\%$ の領域に集中する。B タイプの胎土の 13 世紀中期の皿、13 世紀後期の椀が集中する。水無瀬窯跡の山茶椀・皿と共に存する。

“その他”：郷上-1 と 7 は S i O 2 が 80% 以上と高く、異質である。

4-2. F e 2 O 3 -M g O の相関について

第221図 F e 2 O 3 -M g O 図に示すように、郷上遺跡の土器と瀬戸窯跡の土器は M g O が 0% と低く、F e 2 O 3 が低い領域から高い領域に向かって分布する。

1) M g O が高い領域には水無瀬窯跡の椀・瓶類が分布し、他の瀬戸窯跡の土器とは明らかに異質である。

2) F e 2 O 3 が $1.2\sim3.2\%$ 、M g O が 0% の領域には郷上遺跡の土器と瀬戸窯跡の土器が集中する。

3) F e 2 O 3 が 3% + 、M g O が 0% の領域には広久手と椿窯跡の土器が集中する。

4-3. K 2 O -C a O の相関について

第223図 K 2 O -C a O 図に示すように K 2 O が低い領域から高い領域に向かって 3 グループと“その他”に分類される。

椿・広久手：K 2 O が $2\sim3\%$ 、C a O が $0\sim0.15\%$ の領域に土器が集中する。

水無瀬：山茶椀・皿：K 2 O が $2.6\sim4.2\%$ 、C a O が $0.05\sim0.3\%$ の領域にある。水南中、八床、塩草 B の各窯跡の土器が集中する。

郷上遺跡：K 2 O が $3\sim5\%$ 、C a O が $0.1\sim0.4\%$ の領域に郷上遺跡の土器と水無瀬窯跡：椀・瓶類が集中する。

“その他”：K 2 O が $3.5\sim4\%$ 、C a O が $0.5\sim0.6\%$ の領域にあり、C a O の値が高く、異質である。

5.まとめ

瀬戸窯跡より出土した土器との比較対比により、郷上遺跡出土土器の生産窯跡を検討した。(大府市の海陸庵窯跡や森岡窯跡の山茶椀などと比較対比したが該当するものは検出されなかつた。) X 線回折試験と蛍光 X 線分析による土器胎土の分析結果に基づく分類では、郷上遺跡出土土器と瀬戸窯跡の土器は大きく I ~ III の 3 タイプと“その他”に分類され、Q t - P 1 の相間から A タイプ～C タイプの 3 タイプに細分された。その結果を取りまとめたものが第 5 表土器分類表である。

1) 郷上遺跡出土土器の胎土は高温で焼成されているためにすべて A タイプである。

2) 第 5 表による分類では I タイプ+A タイプ、II タイプ+B タイプ、III タイプ+B タイプ+C タイプ、不明の 4 種類に分類された。

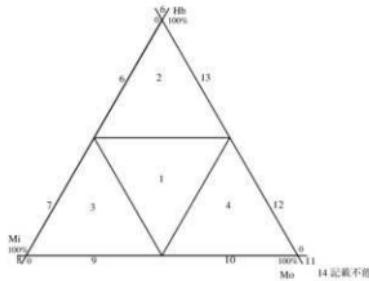
2-1：I タイプ+A タイプは 13 世紀中期の椀で構成され、該当する瀬戸窯跡は見当たらぬ。

2-2：II タイプ+B タイプは 13 世紀後期の椀と皿で、水無瀬窯跡の椀・瓶類と近い関係にある。

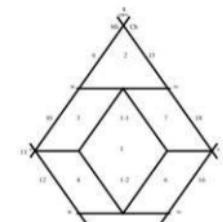
2-3: IIIタイプ+Bタイプ+Cタイプは13世紀中期の皿と13世紀後期の碗で構成され、水無瀬窯跡の山茶碗・皿と近い関係にある。

2-4: 不明は郷上-1と7でSiO₂が80%以上と高く、異質である。

3) 水無瀬窯跡の碗・瓶類と山茶碗・皿では明らかに胎土が異なり、分類される。しかし、郷上遺跡の土器と水無瀬窯跡の山茶碗・皿では郷上遺跡の土器はK2Oの値が低く、同じ領域ではない。しかし、水無瀬窯跡の碗・瓶類はK2Oの値が高く、郷上遺跡の土器と同じ領域にある。また、水無瀬窯跡の山茶碗・皿は郷上遺跡の土器と同じ領域にある。このことから判断して、郷上遺跡の土器は水無瀬窯跡の土器胎土と近い関係にあるが組成的に微妙に異なるところがあり、水無瀬窯跡に近いところで、郷上遺跡の土器と組成が一致するものが他にあるかもしない。



第215図 三角形ダイヤグラム位置分類図



第216図 菱形ダイヤグラム位置分類図

試料 No.	タイプ	組成分類		胎土物および焼成物							器型	器種	時期	山茶窯年形式				
		MnO	MnO ₂	Mo	Mo ₂ O ₃	Mo	Mo ₂ O ₃	Mo	Cr ₂ O ₃	Cr ₂ O ₃	SiO ₂	SiO ₂	K ₂ O	P ₂ O ₅	Al ₂ O ₃			
郷上-1	A	14	20	3727	108	154	124	112	112	112	112	112	112	112	112	112	13世紀中期	第6型式後半
郷上-2	A	14	20	3412	91	165	111	340	106	106	106	106	106	106	106	106	13世紀中期	第6型式
郷上-3	A	14	20	3232	93	615	140	122	122	122	122	122	122	122	122	122	13世紀中期	第6型式
郷上-4	A	14	20	2582	93	544	178	159	159	159	159	159	159	159	159	159	13世紀中期	第6型式
郷上-5	A	14	20	2424	84	969	172	137	137	137	137	137	137	137	137	137	13世紀中期	第6型式後半
郷上-6	A	14	20	2188	106	158	198	178	178	178	178	178	178	178	178	178	13世紀中期	第6型式
郷上-7	A	14	20	3739	91	894	136	108	108	108	108	108	108	108	108	108	13世紀中期	第6型式
郷上-8	A	14	20	3379	85	385	128	125	125	125	125	125	125	125	125	125	13世紀中期	第6型式
郷上-9	A	14	20	3832	89	676	118	104	109	109	109	109	109	109	109	109	13世紀中期	第6型式
郷上-10	A	14	20	3891	88	789	135	122	122	122	122	122	122	122	122	122	13世紀中期	第6型式
郷上-11	A	14	20	3161	90	693	138	115	126	126	126	126	126	126	126	126	13世紀中期	第6型式
郷上-12	A	14	20	3948	92	143	118	104	104	104	104	104	104	104	104	104	13世紀後期	第7型式
郷上-13	A	14	20	3868	88	177	112	111	104	104	104	104	104	104	104	104	13世紀後期	第7型式
郷上-14	A	14	20	4596	82	395	118	112	109	109	109	109	109	109	109	109	13世紀後期	第7型式
郷上-15	A	14	20	3986	83	518	115	97	97	97	97	97	97	97	97	97	13世紀後期	第7型式
郷上-16	A	14	20	4117	91	250	126	107	107	107	107	107	107	107	107	107	13世紀後期	第7型式
郷上-17	A	14	20	3645	97	226	126	112	112	112	112	112	112	112	112	112	13世紀後期	第7型式
郷上-18	A	14	20	2373	106	194	173	163	163	163	163	163	163	163	163	163	13世紀後期	第7型式
郷上-19	A	14	20	3905	90	150	124	117	117	117	117	117	117	117	117	117	13世紀後期	第7型式
郷上-20	A	14	20	3838	74	243	134	117	117	117	117	117	117	117	117	117	13世紀後期	第7型式
郷上-21	A	14	20	3615	94	405	144	116	116	116	116	116	116	116	116	116	13世紀後期	第7型式
郷上-22	A	14	20	4015	68	102	117	95	95	95	95	95	95	95	95	95	13世紀後期	第7型式
郷上-23	A	14	20	2751	101	515	153	147	147	147	147	147	147	147	147	147	13世紀後期	第7型式
郷上-24	A	14	20	3960	93	128	125	105	105	105	105	105	105	105	105	105	13世紀後期	第7型式
郷上-25	A	14	20	5053	76	204	119	116	116	116	116	116	116	116	116	116	13世紀後期	第7型式
郷上-26	A	14	20	4419	70	416	132	101	101	101	101	101	101	101	101	101	13世紀前半	第8型式
郷上-27	A	14	20	4775	85	521	121	105	105	105	105	105	105	105	105	105	13世紀前半	第8型式
郷上-28	A	14	20	4825	73	140	130	106	106	106	106	106	106	106	106	106	13世紀後半-末期	第7-8型式
郷上-29	A	14	20	3210	101	411	133	144	144	144	144	144	144	144	144	144	13世紀中期-後期	第6-7型式
郷上-30	A	14	20	2128	112	1133	139	115	115	115	115	115	115	115	115	115	13世紀中期-後期	第6-7型式

Mont: モンモリオナイト Mica: 黒母岩 Ch: 角閃石 Ch-Mg: 角閃石・磁鐵石 (一次反射) Qt: 石英石 Py: 錫鉄石 Crst: クリストバライト
Mullite: マルライト K-felds: カリ長石 Halloysite: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 鉄鉱石 Au: 鎌鋼輝石 Pb: 鉛輝石

第3表 胎土性状表

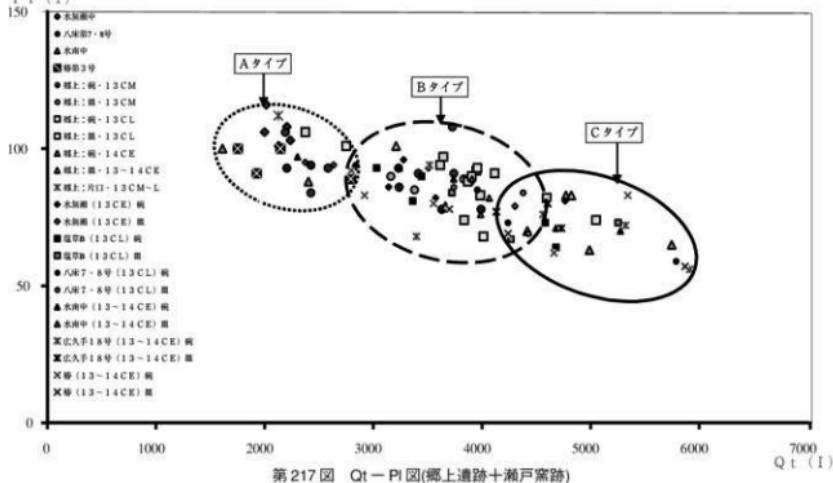
試料番号	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MoO3	Fe2O3	NdO	Total	酸素	電極	環境	時期	山形朝鮮半島式
峨J-1	0.65	0.00	13.30	80.80	3.00	0.15	0.67	0.15	1.81	0.00	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式後半	
峨J-2	0.67	0.00	16.14	79.16	3.00	0.25	0.65	0.93	2.00	0.07	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-3	0.69	0.00	17.07	79.04	4.00	0.14	0.63	0.80	2.17	0.05	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-4	0.47	0.00	21.55	68.98	3.27	0.80	0.95	0.12	4.27	0.14	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式後半	
峨J-5	1.47	0.00	20.73	69.75	3.77	0.11	0.49	0.49	2.76	0.02	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-6	1.34	0.00	20.79	68.32	3.74	0.15	0.80	0.23	3.83	0.01	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-7	0.27	0.00	33.55	83.85	2.63	0.09	0.40	0.40	2.18	0.29	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-8	0.23	0.00	36.64	79.48	4.01	0.17	0.88	0.40	2.05	0.08	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-9	0.29	0.00	14.70	77.82	3.28	0.08	0.87	0.06	2.78	0.06	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-10	0.16	0.00	15.26	77.46	3.80	0.22	0.81	0.03	2.44	0.01	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-11	0.24	0.00	14.07	79.24	4.00	0.14	0.40	0.29	1.87	0.01	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-12	0.35	0.00	17.11	73.43	4.30	0.18	0.94	0.05	2.95	0.11	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-13	0.67	0.00	16.40	72.55	4.38	0.18	0.68	0.06	4.82	0.51	200.00	0.00	酸J・施設	13世紀中期	第7型式	
峨J-14	0.53	0.00	16.24	75.88	3.66	0.16	0.92	0.16	2.83	0.08	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-15	0.35	0.00	12.98	77.97	3.47	0.23	1.03	0.19	2.60	0.00	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-16	0.18	0.00	18.01	74.21	4.30	0.23	1.06	0.00	1.93	0.00	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-17	0.45	0.00	14.48	77.96	3.38	0.21	0.65	0.29	1.93	0.01	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-18	1.31	0.00	32.04	67.66	3.75	0.18	0.70	0.54	3.49	0.00	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-19	0.34	0.00	18.10	73.13	4.46	0.20	0.74	0.74	0.26	0.26	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-20	0.44	0.00	17.28	73.98	4.00	0.19	1.07	0.23	2.49	0.31	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-21	0.35	0.00	16.23	75.81	4.34	0.17	0.96	0.10	2.04	0.20	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-22	0.44	0.00	15.61	78.82	4.17	0.30	0.78	0.43	2.53	0.37	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-23	0.40	0.00	17.46	74.39	4.42	0.20	0.80	0.46	2.49	0.25	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-24	0.52	0.00	17.93	73.80	4.00	0.20	0.62	0.63	2.53	0.18	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-25	0.43	0.00	19.23	72.21	3.51	0.21	1.31	0.44	2.93	0.00	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第7型式	
峨J-26	0.30	0.00	15.10	76.55	3.70	0.10	1.08	0.18	2.76	0.00	200.00	0.00	酸J・施設	14世纪初期	第8型式	
峨J-27	0.40	0.00	15.19	77.46	3.64	0.20	0.98	0.87	2.00	0.00	200.00	0.00	酸J	14世纪初期	第8型式	
峨J-28	0.18	0.00	16.53	76.30	3.39	0.03	0.58	0.25	2.17	0.00	200.00	0.00	酸J	14世纪初期～中期	第7-8型式	
峨J-29	0.39	0.00	15.88	79.44	4.51	0.23	0.81	0.08	2.85	0.12	200.00	0.00	酸J	14世纪初期～中期	第7-8型式	
峨J-30	0.19	0.00	15.54	77.01	3.69	0.16	0.92	0.10	1.97	0.23	200.00	0.00	酸J・施設	13世紀中-後期	第6-7型式	

第4表 化学分析表

試料番号	標上	標下	SiO2	Al2O3	K2O	CaO	TiO2	MoO3	Fe2O3	NdO	Total	酸素	電極	環境	時期	山形朝鮮半島式
標上： 鋼 - 13CM																
峨J-1	0.60	鋼戸	13世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式							
峨J-2	0.60	鋼戸	13世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式							
峨J-3	0.60	鋼戸	0.8, 0.9	13世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-4	0.6	鋼戸	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-5	0.60	鋼戸	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-6	0.60	鋼戸	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
峨J-7	0.60	鋼戸	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第6型式	
標上： 鋼 - 14CM																
峨J-8	0.60	鋼戸	13世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第8型式							
峨J-9	0.60	鋼戸	13世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第8型式							
峨J-10	0.60	鋼戸	13世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第8型式							
峨J-11	0.60	鋼戸	13世紀中期	1.3世紀中期	200.00	0.00	酸J	13世紀中期	第8型式							
標上： 鋼 - EC1																
峨J-12	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-13	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-14	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-15	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-16	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-17	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-18	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-19	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-20	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-21	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
標上： 鋼 - FCL																
峨J-22	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-23	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-24	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-25	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
標上： 鋼 - 14CL																
峨J-26	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-27	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-28	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-29	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	
峨J-30	0.60	鋼戸	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	1.3世紀後期	200.00	0.00	酸J	13世紀後期	第6型式	

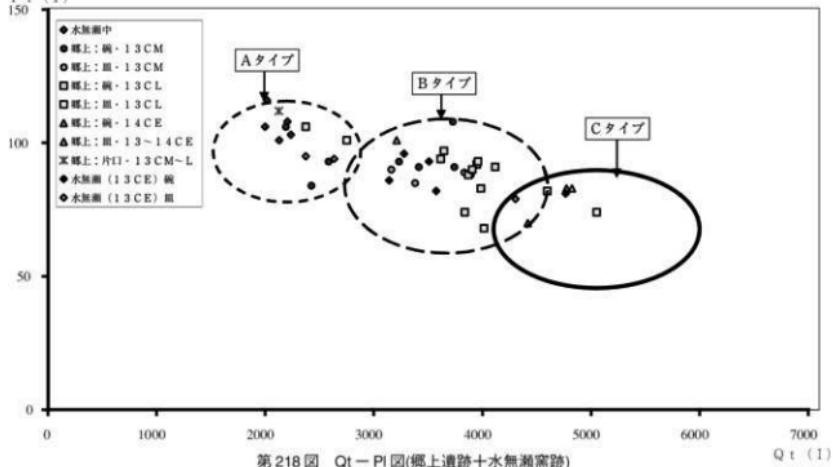
第5表 土器分類表

P 1 (1)



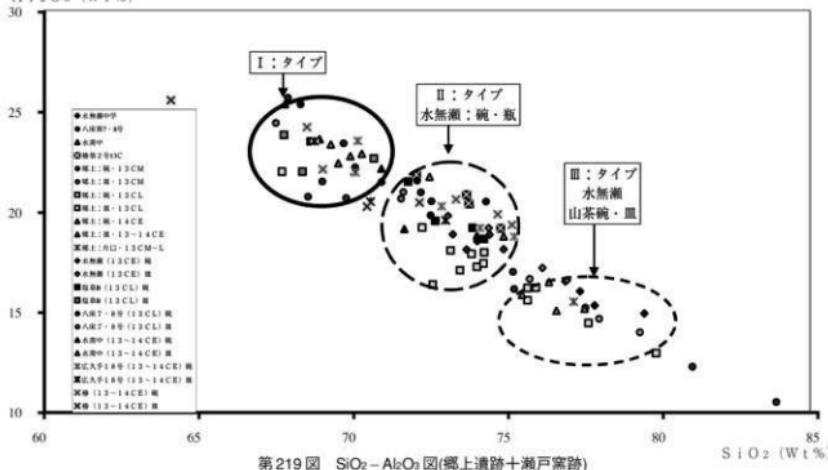
第217図 Qt - PI図(郷上遺跡十瀬戸窯跡)

P 1 (1)



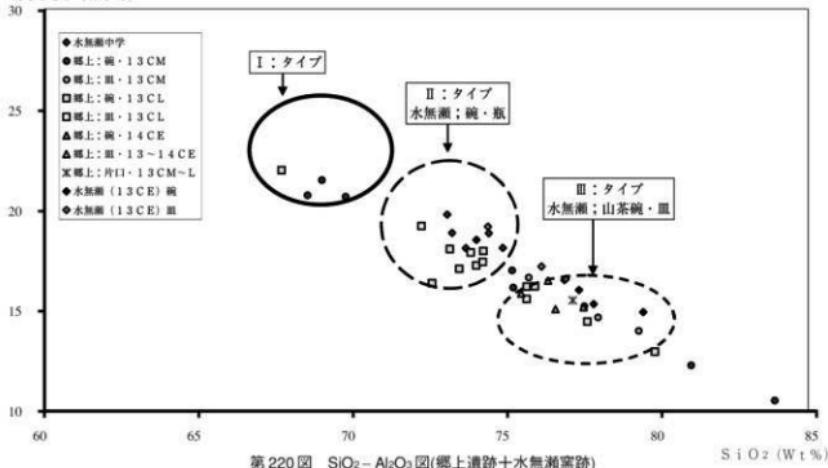
第218図 Qt - PI図(郷上遺跡十水無瀬窯跡)

Al₂O₃ (Wt %)

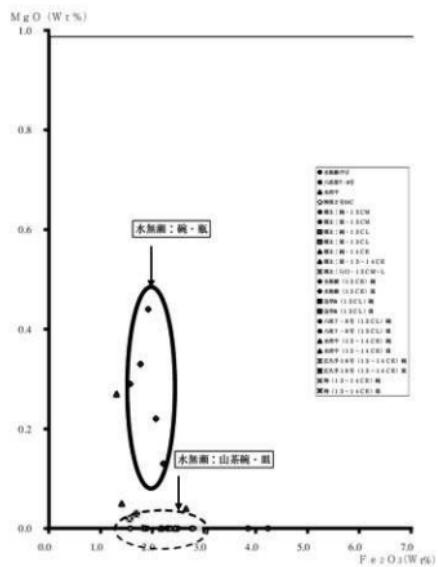


第219図 SiO₂-Al₂O₃図(郷上遺跡十瀬戸窯跡)

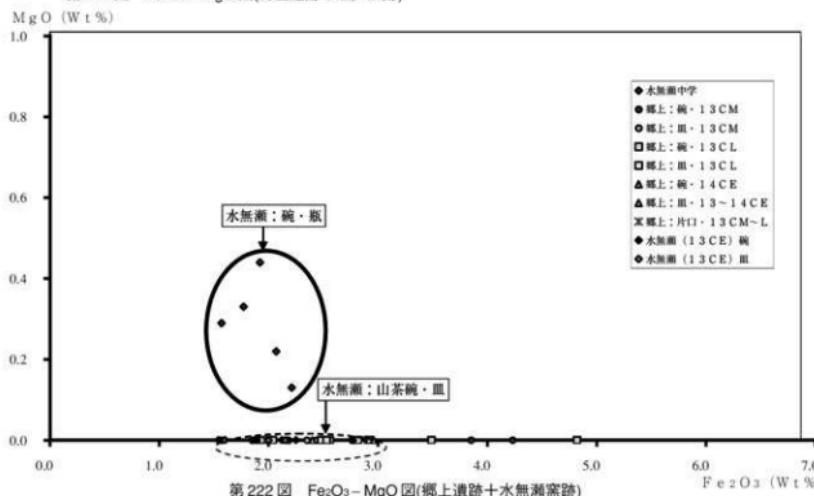
Al₂O₃ (Wt %)

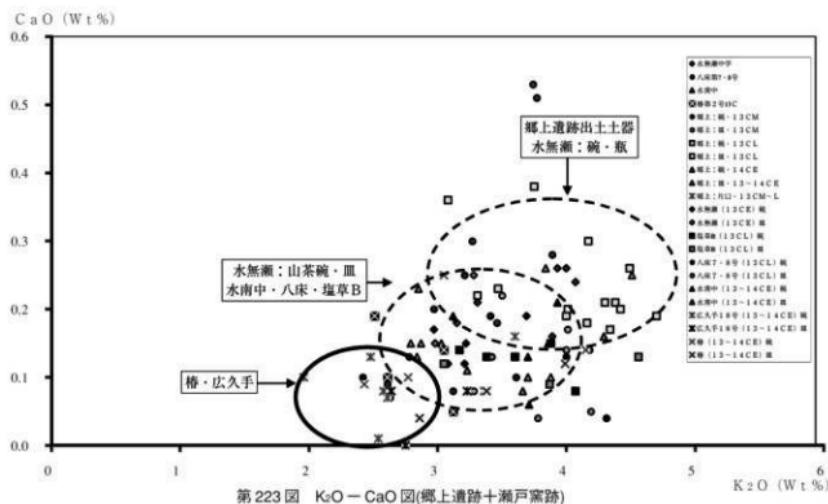


第220図 SiO₂-Al₂O₃図(郷上遺跡十水無瀬窯跡)

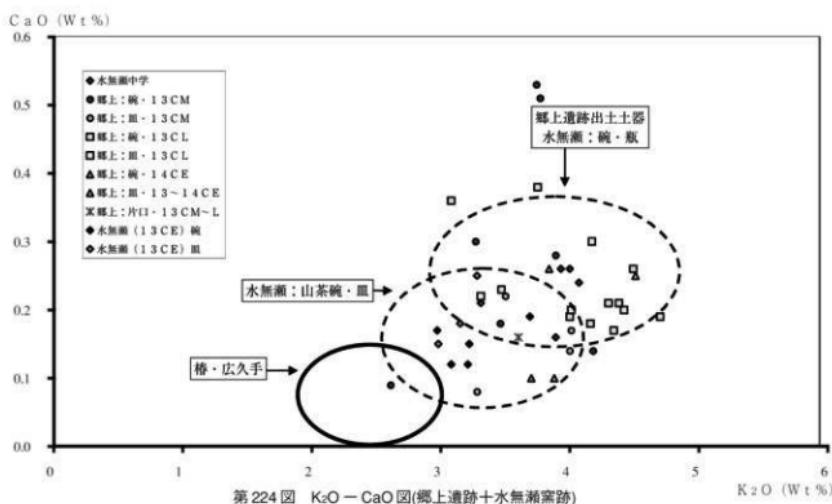


第221図 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ 図(郷上遺跡十瀬戸窯跡)





第223図 $K_2O - CaO$ 図(郷上遺跡十瀬戸窯跡)



第224図 $K_2O - CaO$ 図(郷上遺跡十水無瀬窯跡)

第2節 戦国時代土師器鍋の胎土分析

1.郷上遺跡および関連遺跡出土土器の胎土分析

(株)パリノ・サーヴェイ

はじめに

東海地域における中世の土師器は、特に鍋・釜類の形態において地域性とその地域独自の変遷が指摘されている。これらの事象について鈴木(1996)は、旧国単位よりも狭い範囲での在地性と模倣による地域間の影響およびその模倣には社会的要請があったと考えている。ここでは、様々な形態と地域型に分類されている鍋類を中心として、他に皿や焰烙なども含めてその材質(胎土)の特徴を捉え、上述のような中世の土師器研究に有意義な資料の作成を目的とする。

(1)試料

試料は、中世の鍋、釜、皿および焰烙の合計103点である。試料の出土遺跡は、岡崎平野とその周辺域に分布する計14遺跡ある。試料には出土遺跡別にまとまって1~103までの試料番号が付けられている。その内訳は、試料番号1~16は西尾市の西尾城跡、17~20は同じ西尾市の上道目記遺跡、21~25も西尾市の清水遺跡、26~30は幸田町の東光寺遺跡、31~35は安城市の安祥城跡、36~41は知立市の草香城跡、42は豊田市の川原遺跡、43は同じ豊田市の伊保東古城跡、44も豊田市の矢追遺跡、45~72までは豊田市郷上遺跡、73~91は豊明市の大脇城跡、92~96は豊田市の伝猿田館跡、97~99は豊田市上の鷹見城址、99~103が豊田市の寺部城跡である。試料の器種の内訳は、南伊勢系鍋1点、戦国型羽付鍋21点、半球型内耳鍋27点、内弯型内耳鍋14点、西三河型くの字形内耳鍋8点、東三河型くの字形内耳鍋5点、内耳鍋(C類)2点、新器種の鍋1点、羽付釜4点、羽無釜2点、釜2点、火鉢1点、ロクロ調整皿10点、非ロクロ調整皿3点、焰烙2点である。

各試料の情報については、重鉱物組成を示した第225~226図に併記する。

(2)分析方法

当社では、これまでに愛知県内遺跡出土の土器について重鉱物分析による胎土分析を継続的に行っている。したがって、これら分析例との比較も考慮し、本分析でも重鉱物分析を行う。以下に処理手順を述べる。

試料は、適量をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm~1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物のプレバラートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

(3)結果

分析結果を第6・7表に示し、それを棒グラフにして図1に示す。なお、今回の分析では、同定粒数が100個に満たない試料が非常に多く、全体の6割以上の68点あった。これまでの愛

知県における土器の胎土分析例では、弥生土器や古墳時代の土師器などで試料の分量が1点につき10g程度あれば充分な重鉱物量を得ることができた。今回の試料もほとんどが10g以上あり、中には30gを超えるものもある。したがって、今回の試料に共通する胎土の特徴として、重鉱物の少ないことがあげられる。同定粒数100個未満の結果は、グラフ化することはせずに多い傾向のある鉱物を提示するに留めたが、分析結果表により組成の特徴は概ね把握することができる。ここでは、分析結果表から、器種別あるいは地域別の胎土を考える。第6・7表を器種別に並べ替えて第8・9表に示す。以下に器種別に胎土の特徴を述べる。

1)南伊勢系鍋

郷上遺跡出土の試料番号71の1点のみである。角閃石と酸化角閃石が多い傾向にあり、ジルコンや黒雲母などを伴う。

2)戦国型羽付鍋

おそらく全点ともに角閃石、ジルコン、ザクロ石を主要鉱物とするいわゆる「西三河タイプ」の胎土重鉱物組成であるとみることができる。この「西三河タイプ」の土器胎土は、愛知県下の分析例では、岡崎平野とその周辺域に分布する遺跡から出土した縄文土器、弥生土器、古墳時代や古代の土師器に非常に多く認められていることから設定した胎土である。共通して西三河タイプであるが、地域別に若干異なる点も認められる。点数が多いのは、碧海郡、幡豆郡、知多郡の試料であるが、これらのうち幡豆郡の試料は主要3鉱物の他に黒雲母と電気石の多い傾向があり、知多郡の試料は黒雲母の多い傾向がある。一方、碧海郡の試料は主要3鉱物以外で多い傾向がみられる鉱物はない。

3)半球形内耳鍋

上記の戦国型と同様にほぼ全点が西三河タイプの胎土である。碧海郡、幡豆郡、知多郡の試料はともに主要3鉱物以外の鉱物に特徴は認められないが、加茂郡の試料は電気石および紅柱石がやや多い傾向がみられる。

4)内湾形内耳鍋

これも基本的には、ほとんどが西三河タイプの胎土になる。ただし、川原遺跡の試料番号42と郷上遺跡の試料番号45の2点はザクロ石を含まず緑レン石の多い傾向があることから、西三河タイプとは異なる胎土である可能性がある。また、他の碧海郡の試料は、幡豆郡の試料に比べて電気石の多い傾向がある。さらに、その碧海郡の試料の中でも安城市の遺跡の試料は酸化角閃石が多い傾向が読み取れる。

5)西三河型くの字形内耳鍋

器種で西三河型とあるが、胎土でも西三河タイプである。全体的に電気石の多い傾向も見られるが、さらに碧海郡の試料と幡豆郡の清水遺跡の試料に黒雲母の多い傾向も認められる。

6)東三河型くの字形内耳鍋

基本的には西三河タイプの胎土であると考えられるが、郷上遺跡（碧海郡）の試料も東光寺遺跡（額田郡）の試料も共通して斜方輝石を伴うことが特徴といえる。これは他の形の内耳鍋にはない特徴になる可能性がある。

7)内耳鍋（C類）

西尾城遺跡の試料2点のみであるので、この器種の胎土の特徴は現段階ではいえない。な

お、2点ともに西三河タイプの胎土である。

8)新器種の鍋

郷上遺跡の試料番号70の1点のみである。同定粒数が非常に少ないが、おそらく東三河型くの字形内耳鍋に認められた斜方輝石を伴う西三河タイプの胎土である可能性がある。

9)羽付釜

郷上遺跡の試料2点と寺部城跡および上鷹見城址の試料各1点ずつの4点のみである。やはり4点ともに西三河タイプの胎土であると考えられるが、郷上遺跡の試料は斜方輝石を伴う組成である可能性がある。

10)釜

安祥城跡および西尾城遺跡の試料各1点ずつの2点のみである。安祥城跡の試料については西三河タイプの胎土であるとみることができると、西尾城遺跡の試料については今回の結果からは特徴を捉えることはできない。

11)火鉢

大脇城跡の試料番号89の1点のみである。おそらく西三河タイプの胎土になる。

12)ロクロ調整皿

碧海郡、幡豆郡、加茂郡の試料各3点ずつと知多郡豊明市の大脇城跡の試料1点からなる。これらのうち、碧海郡と加茂郡の試料は概ね西三河タイプの胎土になる。の中でも碧海郡の郷上遺跡の試料1点と加茂郡の試料3点は黒雲母の多い傾向がある。幡豆郡の試料3点については同定粒数が少なすぎるため組成を推定することはできないが、西尾城遺跡の試料番号15では西三河タイプの傾向が窺える。大脇城の試料は、斜方輝石が非常に多く、少量の单斜輝石と角閃石を伴うといわゆる「両輝石タイプ」の胎土である。このタイプの胎土は、これまでの分析例から、濃尾平野における在地土器の特徴と考えている。

13)非ロクロ調整皿

碧海郡豊田市の郷上遺跡、幡豆郡西尾市の西尾城跡、知多郡豊明市の大脇城跡の試料各1点ずつの3点であるが、これらはともに西三河タイプの胎土である。

14)焙烙

郷上遺跡の試料2点のみであり、ともに西三河タイプの胎土である。

(4)考察

上記の結果総括すれば、今回の試料のはほとんどがいわゆる西三河タイプの胎土であるということである。正確にいえば103点の試料の中で、特徴のつかない試料5点（郷上遺跡半球形内耳鍋試料番号66、西尾城遺跡釜試料番号5、西尾市の遺跡出土のロクロ調整皿3点）と西三河タイプ以外の胎土である試料4点（郷上遺跡南伊勢系鍋、郷上遺跡内彎形内耳鍋試料番号45、川原遺跡内彎形内耳鍋試料番号42、大脇城跡ロクロ調整皿試料番号90）の計9点を除いた94点の試料が西三河タイプの胎土を示す。このことは、鈴木1996が述べた「15世紀中葉以降の土師器煮炊具は旧国よりも狭い範囲で在地生産され、云々」ということを補強する結果であるといえる。今回の分析では、煮炊具に限らず皿や焙烙までも西三河タイプの胎土であったことから、これらの土師器も西三河地域内で作られた可能性が高い。問題は、西三河地域内のさらに狭い範囲での胎土の地域性の識別である。今回の結果では、西三河タイプとした胎土の

中にも、1)主要3鉱物以外の鉱物は微量である典型的な組成、2)斜方輝石をやや多く伴う組成、3)黒雲母をやや多く伴う組成、4)電気石をやや多く伴う組成、5)黒雲母と電気石をやや多く伴う組成、6)紅柱石をやや多く伴う組成の最低6種類程度の多様性があるよう見える。それぞれの胎土が西三河地域内での生産地域の違いを表している可能性がある。ただし、上記の多様性と試料表に示された遺跡の所在地の郡との対応関係は現時点では見出せない。むしろ、器種との関係が強いようにも思える(例えば東三河型くの字形内耳鍋と加茂郡の遺跡のロクロ調整皿とに認められる上記2)のタイプの胎土)。いずれにしても今後の類例の蓄積により検討が可能である。

さて、今回の試料の中で西三河タイプではない胎土の試料については、現時点では次のようなことが指摘できる。試料番号71の南伊勢系鍋は、これまでの愛知県内における発掘調査例とその研究成果および若干の胎土分析(例えば矢作1994など)により、南伊勢地域からの搬入品がほとんどであることが知られており、今回の結果もそれを支持する。内弯形鍋の2点の組成は、これまでの分析例では、上述の南伊勢系鍋に比較的多く認められ、また大毛沖遺跡では伊勢地域の影響を受けて成立したと考えられている分類の古代の土師器壺にも多く認められている(愛知県埋蔵文化財センター、1996)。今回の試料の場合、その形態に関するこれまでの考古学上の研究例から、伊勢地域からの搬入という可能性はないと思うが、伊勢地域でなければ、伊勢地域の中でも南伊勢地域と共通の地質学的背景を有する東三河地域からの搬入を示唆する可能性もある。今後、東三河地域の分析例をもって確かめたい。大脇城跡のロクロ調整皿は、前述のように尾張地域からの搬入品である可能性が非常に高いといえる。

今回の分析の成果は、試料のほとんどが西三河地域内で作られた可能性が高いことを示した点である。今後の課題は、上述のように西三河地域内でのさらに狭い範囲での地域性の推定である。これには、今回と同様の方法による分析例の蓄積も必要であるが、薄片観察など別の手法による胎土の特徴把握も必要であると考えられる。また、同時期の尾張地域や東三河地域の試料も分析することができれば、胎土の地域性がより明瞭となるとともに、愛知県における中世土師器生産について重要な資料を作成することができると思われる。

参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 1996 「大毛沖遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集、 260p.
鈴木正貴 1996 「東海地方の土師器内耳鍋の生産について」『鍋と 壺そのデザイン』 第4回東海考古学
フォーラム、 p.326-331.
矢作健二 1994 「伊勢型鍋胎土重鉱物分析」「松河 戸遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48
集、 p.60-66.

試料番号	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石族	角閃石	黒雲母 (緑色)	黒雲母 (褐色)	ジルコン	ザクロ石	碌レン石	電気石	紅柱石	不透明鉱物	その他	合計
1	-	-	3	-	-	1	-	2	6	-	-	-	12	47	71
2	-	3	23	-	1	-	-	22	17	11	12	7	33	23	152
3	1	-	35	-	-	-	3	6	3	-	4	1	13	8	74
4	-	-	1	-	-	-	1	4	2	-	1	-	2	13	24
5	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2	11	16
6	-	-	7	-	-	-	1	1	1	-	-	2	-	26	38
7	1	1	44	-	-	-	-	9	10	4	3	2	14	18	106
8	-	-	3	1	-	-	2	3	4	-	1	-	4	49	66
9	-	-	-	-	-	-	-	4	4	2	1	1	44	37	93
10	-	-	2	2	-	-	1	4	13	-	2	1	1	52	78
11	2	-	10	3	-	-	-	4	6	-	1	-	8	26	60
12	2	-	14	-	-	-	2	6	8	1	2	-	44	15	94
13	2	-	37	9	-	-	18	27	5	8	1	21	122	250	
14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	3
15	-	-	-	1	-	-	4	2	1	-	-	-	-	16	24
16	1	-	4	-	-	-	1	4	12	2	8	-	1	20	53
17	1	-	7	-	-	-	1	4	4	1	4	-	17	5	40
18	-	-	13	-	-	-	-	5	2	-	4	1	13	4	42
19	1	-	3	19	-	-	11	14	2	3	3	2	1	41	100
20	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	5	-	7	14	
21	-	-	82	-	-	-	28	28	13	6	1	6	57	29	250
22	-	-	13	9	-	-	54	7	4	1	5	4	13	39	169
23	-	-	7	-	-	-	2	13	7	1	5	-	6	18	59
24	3	-	5	1	-	-	1	6	6	-	4	1	56	8	91
25	-	-	14	34	-	-	69	29	6	-	16	2	5	75	250
26	9	1	32	7	-	-	-	7	9	5	11	1	7	94	183
27	13	1	13	2	-	-	-	3	2	1	1	-	8	67	111
28	1	1	1	3	-	-	-	3	2	-	-	-	-	239	250
29	-	1	6	-	-	-	15	24	3	-	8	7	20	66	148
30	-	-	5	5	-	-	2	-	2	-	2	-	-	18	34
31	-	-	29	14	-	-	2	17	5	-	1	1	13	65	147
32	-	-	3	1	-	-	22	16	1	2	3	20	39	107	
33	-	-	7	10	-	-	1	9	8	-	4	-	3	47	89
34	1	-	34	7	-	-	-	-	4	1	1	1	2	29	80
35	2	-	3	-	-	-	-	1	4	1	-	1	1	28	41
36	1	-	9	3	-	-	2	1	2	-	2	-	2	13	35
37	5	1	18	2	-	-	-	4	6	1	75	4	1	47	164
38	2	6	10	6	-	-	2	3	13	2	5	3	14	27	87
39	-	-	4	2	-	-	2	6	3	4	-	2	30	53	
40	2	-	4	1	-	-	-	5	3	3	1	-	-	39	58
41	-	-	2	9	-	1	-	6	1	-	1	-	8	102	130
42	-	-	26	4	-	-	-	2	-	1	-	-	1	16	50
43	1	-	10	1	-	-	2	6	13	3	1	4	4	47	92
44	-	-	4	-	-	-	-	5	7	-	2	-	16	4	38
45	1	-	132	15	-	-	2	9	-	13	-	-	2	30	204
46	3	-	2	1	-	-	1	1	5	2	2	-	-	63	80
47	2	-	7	1	-	2	-	1	-	-	-	-	-	15	28
48	3	-	5	-	-	-	-	1	6	4	3	-	1	48	71
49	2	-	10	7	-	-	150	2	2	-	-	-	-	77	250
50	1	-	30	-	-	-	15	9	8	3	3	1	31	25	126
51	-	-	1	-	-	-	-	5	3	-	2	1	7	5	24
52	-	-	38	2	-	-	3	4	13	2	6	3	10	21	102

第6表 胎土重鉱物分析結果 (1)

試 料 番 号	斜 方 輝 石	單 斜 輝 石	角 閃 石	酸 化 角 閃 石	角 閃 石	黑 雲 母 (褐色)	ジ ル コ ン	ザ ク ロ 石	綠 レ ン 石	電 氣 石	紅 柱 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	合 計
53	-	-	2	1	-	-	4	6	2	3	-	1	25	44
54	1	-	5	-	1	1	2	-	-	-	-	1	17	28
55	-	-	2	-	-	-	2	4	12	2	1	-	3	27
56	1	-	16	4	-	-	1	11	16	5	2	-	2	84
57	-	-	3	3	-	-	-	6	17	-	-	1	6	74
58	-	-	9	1	-	-	3	18	14	1	3	-	8	66
59	-	-	23	-	-	-	3	3	2	1	11	3	24	8
60	-	-	4	-	-	-	-	3	11	1	-	-	5	27
61	3	-	3	-	-	-	1	7	7	-	2	-	8	69
62	-	-	4	-	-	-	-	7	3	-	1	-	1	39
63	1	-	24	2	-	-	4	-	1	1	2	-	4	29
64	1	-	12	1	-	-	-	-	3	1	1	1	5	17
65	-	-	3	2	-	-	1	2	4	-	3	-	1	6
66	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	6
67	-	-	10	1	-	-	-	12	8	1	4	-	1	59
68	-	-	9	1	-	-	2	6	2	-	2	-	2	21
69	1	-	28	12	-	-	-	11	15	2	3	-	8	51
70	4	-	-	1	-	-	-	1	2	-	-	-	8	16
71	1	-	19	11	-	-	1	1	-	-	-	-	23	56
72	2	-	4	4	-	-	-	7	18	-	4	-	6	98
73	1	-	5	3	-	-	-	1	2	-	1	-	12	25
74	1	-	6	4	-	-	11	5	-	-	4	1	3	32
75	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	2	1	9	11
76	-	-	1	1	-	-	-	3	1	1	1	-	10	2
77	-	-	2	-	-	2	-	1	1	-	-	-	13	19
78	2	-	12	3	-	-	1	1	7	-	1	-	-	22
79	-	-	-	-	-	-	2	4	7	-	6	-	-	28
80	-	-	3	4	-	-	-	2	15	-	3	1	2	34
81	-	-	7	1	-	-	5	13	1	1	3	-	2	41
82	-	-	18	-	-	-	4	18	30	4	3	3	1	55
83	-	-	13	-	-	-	3	27	7	2	2	-	20	41
84	-	-	2	-	-	-	3	5	2	-	1	-	-	33
85	-	-	8	-	-	-	1	4	10	1	1	-	2	24
86	-	-	2	1	-	-	-	4	9	-	1	1	2	20
87	-	-	1	-	-	-	-	1	3	-	1	-	2	7
88	-	-	2	1	-	-	2	7	14	-	-	-	-	53
89	-	-	2	-	-	-	-	1	2	-	3	11	11	
90	115	10	4	13	-	-	-	1	-	-	-	5	49	197
91	-	-	10	1	1	-	-	3	1	1	-	-	1	13
92	-	-	2	1	-	-	-	7	-	-	1	-	4	85
93	-	-	1	4	1	-	-	11	20	1	-	2	2	89
94	-	-	7	-	-	-	-	19	1	2	16	7	31	167
95	1	-	3	3	-	-	11	21	29	3	7	7	1	154
96	7	2	67	9	-	-	7	2	2	1	2	2	7	32
97	-	-	6	-	-	-	1	16	8	-	2	3	23	80
98	-	1	3	-	-	-	1	4	-	-	-	-	5	35
99	13	-	11	30	-	-	12	4	2	-	2	-	2	37
100	-	-	1	5	-	-	1	4	6	-	2	1	1	29
101	-	-	9	1	-	-	-	3	13	-	2	-	8	10
102	-	-	4	-	-	-	-	4	9	4	4	1	5	38
103	7	-	76	9	-	-	28	6	4	4	1	-	1	45

第7表 胎土重鉱物分析結果 (2)

第8表 胎土重鉛物分析結果(分類別) (1)

第9表 胎土重鉱物分析結果(分類別) (2)

遺跡名	所在地	調査区	グリッド	遺構	日付	部種	実測面 No.	面積
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SD02(2)	内奇形内耳溝		9.9		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SD02/SD05(複合部)	西三河型くの字形内耳溝		18.4		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SD02(2)	内耳溝(C型)		25.2		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SD02(2)	半球形内耳溝		7.8		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SD02/SD05(複合部)	金		19.8		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SD04	内奇形内耳溝	10428	西三河型くの字形内耳溝	11.3	
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	1BNH	SD04	西三河型くの字形内耳溝	10428	西三河型くの字形内耳溝	39.8	
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	1BNH	SD01	内耳溝(C型)	10428	内耳溝(C型)	17	
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	1BNH	SD04	半球形内耳溝	10428	半球形内耳溝	16.4	
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	1BNH	SD04(3)	戦国型羽付溝	10428	戦国型羽付溝	17.4	
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	西城東 D2(3)	第2層下(第14-図5.6)	840723	半球形内耳溝	25.5		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SK01	内奇形内耳溝		24.7		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SK01	戦国型羽付溝		38.6		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SD02/SD05(複合部)	ロクロ調整皿		9.1		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SK21(Na3)	940712	ロクロ調整皿	10.1		
西尾城遺跡	西尾市(幡豆郡)	6NN	SK04	非ロクロ調整皿		16.9		
上道記遺跡	西尾市(幡豆郡)	試掘	T14			西三河型くの字形内耳溝	T14-1	15.2
上道記遺跡	西尾市(幡豆郡)	試掘	T14			西三河型くの字形内耳溝	T14-3	14.9
上道記遺跡	西尾市(幡豆郡)	試掘	T14			戦国型羽付溝	T14-8	20.6
上道記遺跡	西尾市(幡豆郡)	試掘	T14			ロクロ調整皿	T14-11	6
清水遺跡	西尾市(幡豆郡)	89Cb	北壁トレンチ西平	891208	西三河型くの字形内耳溝	25.2		
清水遺跡	西尾市(幡豆郡)	89Cb	北壁トレンチ西平	891208	西三河型くの字形内耳溝	22.7		
清水遺跡	西尾市(幡豆郡)	89Cb	壁B4b	焼土(内耳溝)	891208	半球形内耳溝	25.3	
清水遺跡	西尾市(幡豆郡)	89Cb	壁B4c	焼土	891211	半球形内耳溝	27.9	
清水遺跡	西尾市(幡豆郡)	89Cb	壁B4d	焼土	891228	戦国型羽付溝	38.7	
東光寺遺跡	半田市(額田郡)	90B	II G2a	SD04	900829	東三河型くの字形内耳溝	10.8	
東光寺遺跡	半田市(額田郡)	90B	I H19b	焼土	900730	東三河型くの字形内耳溝	16.4	
東光寺遺跡	半田市(額田郡)	89B	I E20a	SD05	890830	東三河型くの字形内耳溝	31.2	
東光寺遺跡	半田市(額田郡)	90B	II G2	焼土(新しい溝上)	900726	内奇形内耳溝	34	
東光寺遺跡	半田市(額田郡)	90B	II G2	焼土	900806	戦国型羽付溝	17.3	
安井城跡	安城市(碧海郡)	AJ		風呂井C4 破壊土	880327	内奇形内耳溝	29.3	
安井城跡	安城市(碧海郡)	AJ	E 北	灰青	880326	内奇形内耳溝	25.1	
安井城跡	安城市(碧海郡)	AJ		風呂井D2 中層	880326	半球形内耳溝	20.1	
安井城跡	安城市(碧海郡)	AJ		風呂井C2	880211	新	13.2	
安井城跡	安城市(碧海郡)	AJ		風呂井D2 粘土直上高層部	880328	ロクロ調整皿	10.6	
善香城跡	安城市(碧海郡)	A区	SX07(NE)			内奇形内耳溝	11.5	
善香城跡	安城市(碧海郡)	A区	SX3			内奇形内耳溝	14.5	
善香城跡	安城市(碧海郡)	A区	SK02(SX01)			半球形内耳溝	42	19.5
善香城跡	安城市(碧海郡)	A区	SK08		961216	半球形内耳溝	60	23
善香城跡	安城市(碧海郡)	A区	SD02b 上層	970214		戦国型羽付溝	27	20.3
善香城跡	安城市(碧海郡)	A区	SX1-W			ロクロ調整皿	16.9	
川原遺跡	豊田市(加茂郡)	97E	表土は基	971203		内奇形内耳溝	7	
伊保塚古墳跡	豊田市(加茂郡)	97E	表面輪 Ns(95%+5A)	810904		半球形内耳溝	14.6	
矢追遺跡	豊田市(碧海郡)	97	火	890122		半球形内耳溝	9.9	

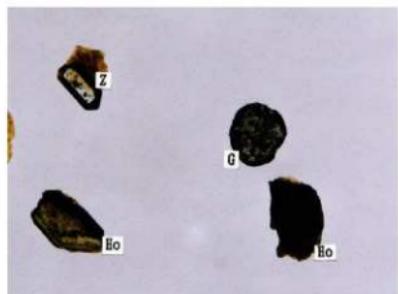
■ 斧削輝石 ■ 黒雲母 ■ 電気石
 ■ 斧削輝石 ■ ジルコン ■ 和柱石
 ■ 角閃石 ■ バシリクス ■ 不透明鉱物
 ■ 極細粒石 ■ 緑レンズ ■ その他

第225図 胎土重鉱物組成 (1)

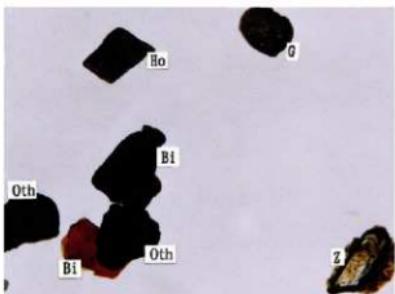
地名	所在地	調査番号	グリッド	地層	日付	器種	実測図 No.	重量
55 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VIA10	SD07-B/SD48 下層	970825	内弯曲内耳鏡	SD48-14	18.1
45 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VIA11	SD07-B/SD48 下層	970825	東三河型くの字形内耳鏡	SD48-13	18.9
46 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VIA10	SD07-B/SD48 下層	970825	東三河型くの字形内耳鏡	SD48-11	11.1
47 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VIA10	SD07-B/SD48 下層	970825	羽付釜	27.7	
48 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VIA10	SD07-B/SD48 下層	970825	ロクロ調整瓶	25.4	
50 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97A	VB10	SD011	970821	西三河型くの字形内耳鏡	SD11-6	22.4
51 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97A	VB17g	SD11 基底部	970714	半球形内耳鏡	SD11-7	10.7
52 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97A	VB15.6b	SD011	970714	内弯曲内耳鏡	SD11-12	16.9
53 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH10q	SD05	970724	半球形内耳鏡	SD05-9	22.7
54 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH10q	SD05	970602	半球形内耳鏡	SD05-18	14.6
55 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH8q	SD05	970602	内弯曲内耳鏡	15.2	
56 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH10q	SD05	970530	戰国壓羽付鍋	25.5	
57 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH10q	SD05	970530	戰国壓羽付鍋	11.1	
58 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH10q	SD05	970530	戰国壓羽付鍋	26.5	
59 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH9	SD12	970703	西三河型くの字形内耳鏡	SD12-8	18.8
60 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH9	SD12	970630	内弯曲内耳鏡	SD12-11	15.8
61 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH9	SD12	970630	半球形内耳鏡	SD12-10	20.7
62 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VIA10b	SD12	970707	戰国壓羽付鍋	SD12-13	22.9
63 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VJH9	SD12	970703	羽付釜	SD12-9	22.4
64 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97A	VB17d	SD003	970618	始釜	SD03-9	10.5
65 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97A	VB17d	SD003	970618	始釜	SD03-10	12
66 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VB16	SD003	970617	半球形内耳鏡	SD03-12	5.9
67 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VB14g	SD03 上層	970707	半球形内耳鏡	SD03-11	21.3
68 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VB10e	SD03	970617	戰国壓羽付鍋	SD03-8	21.4
69 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97A	VB17	SD020 上層(特)	970703	戰国壓羽付鍋	25.6	
70 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VB15f	SD019 上層(同アリ)	970701	新伊勢系鍋	11.8	
71 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97A	VBS.6b	SD011	970724	南伊勢系鍋	6.8	
72 郡上遺跡	農田市(碧海郡)	97C	VIA18a	SD02	970529	赤ロクロ調整瓶	21.4	
73 大庭城跡	農明市(知多郡)	96A	VIC17g	SD17 上野一居 E	960913	半球形内耳鏡	11.2	
74 大庭城跡	農明市(知多郡)	96A	VIC17g	SD17 上野一居 A	960913	戰国壓羽付鍋(丸孔)	17.2	
75 大庭城跡	農明市(知多郡)	96A	VIC17g	SD17 上野一居 C	960913	半球形内耳鏡	12.7	
76 大庭城跡	農明市(知多郡)	96A	VIC17g	SD17 上野一居 G	960913	半球形内耳鏡	10.3	
77 大庭城跡	農明市(知多郡)	97B	VIC19	SD014 第4号 No58	970961	半球形内耳鏡	13.3	
78 大庭城跡	農明市(知多郡)	97B	VIC19	SD014 第3号 No155	970909	半球形内耳鏡(浅)	16.6	
79 大庭城跡	農明市(知多郡)	97B	VIC19	SD014 第2号 No131	970907	半球形内耳鏡	13.2	
80 大庭城跡	農明市(知多郡)	97A	VIC16	SX24N0123	970808	半球形内耳鏡	13.4	
81 大庭城跡	農明市(知多郡)	96D	SD023	SD025 上層化物屋	97020	戰国壓羽付鍋 A	15.8	
82 大庭城跡	農明市(知多郡)	96D	SD03a	SD005 上層化物屋	970203	戰国壓羽付鍋 A	25.5	
83 大庭城跡	農明市(知多郡)	96D	SD03a	SD005 上層化物屋	970203	戰国壓羽付鍋 A	39.3	
84 大庭城跡	農明市(知多郡)	96D	SD03a	SD005 上層化物屋	970203	戰国壓羽付鍋 A	21.1	
85 大庭城跡	農明市(知多郡)	96E	SDC7a	SD005 上層化物屋	970203	戰国壓羽付鍋 B 桥子マークス	11.6	
86 大庭城跡	農明市(知多郡)	96E	SDC7a	SD13 第2号 No170	970225	戰国壓羽付鍋 B 桥子マークス	12.4	
87 大庭城跡	農明市(知多郡)	96B	VIC20m	SD08N0334	961203	羽無釜	13.6	
88 大庭城跡	農明市(知多郡)	97B	VIC15m	SD01 第3号 No36	970425	羽無釜	16	
89 大庭城跡	農明市(知多郡)	97B	VIC15m	SD01 第4号 No3	961217	火鉢	13	
90 大庭城跡	農明市(知多郡)	97B	VIC14	SD01 第3号 No213	970703	ロクロ調整瓶	14.7	
91 大庭城跡	農明市(知多郡)	96E	VIC6	SD13 第1号 No213	970225	赤ロクロ調整瓶	11.4	
92 佐田田耕跡	農田市(加茂郡)	IIa 区	L42	赤裸屋	880929	戰国壓羽付鍋	35.6	
93 佐田田耕跡	農田市(加茂郡)	IIa 区	L42	赤裸屋	880929	半球形内耳鏡	29.7	
94 佐田田耕跡	農田市(加茂郡)	IIa 区	L42	赤裸屋	880929	ロクロ調整瓶	15.4	
95 上妻見城址	農明市(加茂郡)	IIa 区	L22.97(L22.99)合	810213	半球形内耳鏡	16.1		
96 上妻見城址	農明市(加茂郡)	IIa 区	L22.87	810213	羽付釜	15.4		
97 上妻見城址	農明市(加茂郡)	IIa 区	L22.93	810213	ロクロ調整瓶	11.7		
98 上妻見城址	農明市(加茂郡)	IIa 区	L20.4.5	レンチ	半球形内耳鏡	17.7		
99 上妻見城址	農明市(加茂郡)	IIa 区	L20.4.5	レンチ	内弯曲内耳鏡	15.3		
100 今部城跡	農明市(加茂郡)	IIa 区	L20 表	羽付釜	ロクロ調整瓶	14.5		
101 今部城跡	農明市(加茂郡)	IIa 区	L20 表	羽付釜	ロクロ調整瓶	9.5		



第226図 地質重鉱物組成 (2)



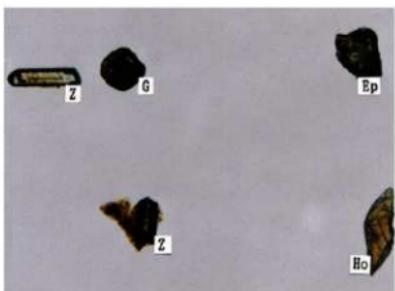
1. 西尾城遺跡 西三河型くの字形内耳鍋



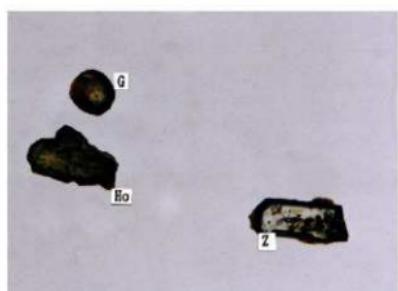
2. 清水遺跡 西三河型くの字形内耳鍋



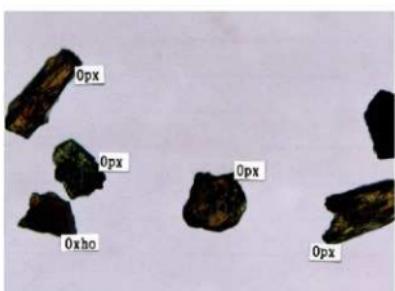
3. 草香城跡 内弯形内耳鍋



4. 大脇城跡 戦国型羽付鍋 A



5. 大脇城跡 戦国型羽付鍋 A



6. 大脇城跡 ロクロ調整皿

Opx : 斜方輝石, Ho : 角閃石, Oth : 酸化角閃石, Bi : 黒雲母, Z : ジルコン, G : サクロ石.

Ep : 緑レン石, T : 電気石, Opx : 不透明鉱物, Oth : その他.

0.5mm

2. 愛知県内各遺跡から出土した15～16世紀の土師器煮炊具の胎土分析

(株) パリノ・サーヴェイ

はじめに

東海地域における中世遺跡から比較的豊富に出土する土師器煮炊具は、金子2000や鈴木2000などによれば、出土状況は当時の政治的、宗教的、経済的その他の社会的因素を反映している可能性があるものとして、詳細な形態・型式分類や編年および分布などが提示されている。しかし、その生産地や流通事情については、不明な点も多いとされている。

このような状況にあって、土器の材質を岩石学および地質学の視点から解析する胎土分析は、これら土器の生産や流通に関わる有意な情報が得られる可能性を持つ。今回の分析調査では、特に尾張地域と東三河地域に所在する中世遺跡より出土した、主に15～16世紀の土師器煮炊具について胎土重鉱物分析を行い、各遺跡、各器種における胎土の様相から、その生産や流通について検証を行う。

(1) 試料

試料は、尾張地域の6遺跡（大毛池田、岩倉城跡、清洲城下町、名古屋城三の丸、弥勒寺、岩作城跡）と東三河地域の3遺跡（真弓山城跡、吉田城跡、田原城跡）より出土した、主に15世紀および16世紀のものとされる土師器煮炊具（半球形内耳鍋、内湾形内耳鍋、東三河型くの字形鍋、戦国型羽付鍋、釜、ほうろく）とロクロ成形および非ロクロ成形の土師器皿の土器片合計55点である。各試料には、資料番号1～55までが付されている。試料の一覧は、分析結果を示した第228図に併記する。

(2) 分析方法

これまで当社では、胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴とする方法により、愛知県および三重県内の遺跡から出土した数多くの試料を分析してきた。これらの結果との比較参照も考慮して、本分析でもこの方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片をアルミナ製乳鉢により粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm～1/8mmの粒子をボリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉱物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに、多いと判断される鉱物を表示するにとどめる。

(3) 結果

a. 胎土の分類

55点の試料のうち、同定粒数100個未満の試料は全体の約半数に相当する27点であった（第11表）。これらの試料の処理した分量（重さ）は、同定粒数100個以上を得られた他の試料に比べて必ずしも少ないものばかりではないが、概ね分量が少ないとによる傾向がある。ここではこれらの試料の重鉱物組成をグラフにはしないが、比較的多いと考えられる鉱物の種類を考慮し、さらに同遺跡同器種の他試料の組成傾向から、後述する胎土の分類も行った。

今回の分析結果を概観する（図228）と、全体的には「その他」とした焼成変質粒が多いが、それを除くと、ほとんどの試料に斜方輝石、角閃石、ジルコン、ザクロ石、電気石、不透明鉱物などの鉱物が認められる。これらの鉱物の量比関係から、今回の試料の胎土について以下のような分類を行った。

1) a類

概して「その他」とした変質粒の量比が高く、50%以上を占めるものが多い。「その他」を除いた主な鉱物組成は、斜方輝石、角閃石、ジルコン、ザクロ石、不透明鉱物であり、試料によっては電気石も主要な鉱物となる。今回の試料のうち、39点までがa類に分類される。これらの中、斜方輝石と角閃石および不透明鉱物の量比から、a1～a3類に細分した。なお、同定粒数100個未満の試料において、組成の判断のつかないものについては、a1-2のように表す。

a1類：斜方輝石をほとんど含まない組成。「その他」が多いことを除けば、これまで愛知県における土器の胎土重鉱物分析で「西三河型」とした組成に類似する。

a2類：斜方輝石と角閃石が同量程度の組成。

a3類：不透明鉱物が比較的多い組成。

2) b類

角閃石が非常に多く、斜方輝石とザクロ石を伴う組成。今回の試料では10点の試料がこれに分類される。全て吉田城跡、または真弓城跡出土の試料である。なお、斜方輝石とザクロ石が微量な組成をb1類とし、両者が少量である組成をb2類とする。

3) c類

「その他」が非常に多いが、それを除くと主な鉱物は斜方輝石であり、他の鉱物は微量にしか含まれない。弥勒寺遺跡出土の試料2点のみが、これに分類される。

4) d類

「その他」が非常に多いが、それを除くと主な鉱物は角閃石であり、他の鉱物は微量にしか含まれない。田原城跡出土の試料4点のみがこれに分類される。

b. 各器種の胎土の状況

今回の試料では、各遺跡の点数が数点であり、また時期区分の幅も一定でないために、土器の器種と胎土との対応関係はあまり明瞭ではなく、むしろ遺跡による胎土の違いすなわち地域により異なる傾向のある可能性がある。以下に各器種ごとの、胎土の状況を述べる。（第10表）

1) 半球形内耳鍋

a1類およびa1-2類の胎土が、ほぼ時期と地域にかかわらず認められる。これに加えてa2類が15世紀の尾張地域に、a3類が16世紀の清洲城下町遺跡に認められる。さらに、16世紀の東三河地域の遺跡にb1類およびb2類が認められる。

2) 内湾形内耳鍋

16世紀の東三河地域の試料4点のみであり、いずれもb1類である。

3) 東三河型くの字形鍋

15世紀末の田原城跡の試料2点のみであり、いずれもd類である。

4) 戦国型羽付鍋

尾張地域の試料は、15世紀も16世紀もa 1-2類またはa 2類が多く、16世紀の岩作城跡の試料1点にa 1-3類が認められ、16世紀の東三河地域の吉田城跡試料1点はa 1類である。

5)釜

尾張地域の試料では、15世紀の試料はa 1類およびa 2類であるのに対し、16世紀の試料はa 3類とa 1-3類である。また、16世紀の東三河地域の吉田城跡試料1点はb 1類である。

6)ほうろく

16世紀の清洲城下町遺跡の試料1点はa 3類、近世の弥勒寺遺跡の試料1点はa 1-2類である。

7)ロクロ成形土師器皿

16世紀の東三河地域の真弓城跡の試料2点は、ともにb 1類であり、戦国時代の尾張地域の弥勒寺遺跡試料2点は、ともにc類である。

8)非ロクロ成形土師器皿

15世紀の東三河地域の田原城跡試料2点は、ともにd類である。

(4)考察

a. 胎土の地域性について

愛知県下の遺跡から出土した縄文時代から近世に至るまでの素焼きの土器の胎土重鉱物組成については、弥生土器の分析例（一色青海遺跡：矢作、1998など）や古代の土師器の分析例（大毛沖遺跡：矢作、1996）および河川砂の分析例（矢作ほか、1997）などを通じて、愛知県およびその周辺域の地質との比較から、地域性を把握しつつある。今回認められた胎土のうち、a類は、尾張地域東部または西三河地域に分布する遺跡から出土した弥生土器に多く認められる組成である。特にa 2類およびa 3類は、上記の一色青海遺跡の弥生土器胎土分析においてC型とした胎土に類似する。C型の胎土は、木曾川水系と矢田川および庄内川の各河川流域の地質が混在した重鉱物組成を表している可能性があるとし、尾張地域東部にその由来する地域を推定した。したがって、a 2類およびa 3類の地域性は尾張地域東部に想定される可能性がある。a 1類については、前述のように「その他」を除くと西三河型の胎土に相当するとした。しかし、弥生土器などの分析例で認められる「西三河型」の胎土は、地域的には岡崎平野とその周辺域に分布する遺跡の試料から想定されたものであり、また、これらの試料には今回ほど「その他」の多い組成はあまり認められないことを考慮すると、a 1類の胎土もa 2類およびa 3類と同様に、その地域性は尾張地域東部に想定される。

一方、b類、c類およびd類については、それらの試料の出土地域および器種が限定される（特に在地性が強いと言わされている土師器皿に認められている）ことから、その遺跡の所在する地域が胎土の地域性を示すと考えてよい。すなわち、b類は東三河地域であり、c類は尾張地域でも知多半島北部地域、d類は渥美半島地域を示すと考えられる。なお、b類に類似した組成は、これまでの分析例では、S字状口縁台付壺に特徴的に認められた組成に類似する。矢作ほか（1997）では、この組成の由来を南伊勢地域の雲出川流域に求めたが、今回の場合は、雲出川流域と同様の地質学的背景（領家花崗岩および領家変成岩の分布）を有する東三河地域の地質学的背景が反映されていると考えることができる。

b. 胎土からみた土師器煮炊具の生産について

上記した胎土の地域性に従えば、15～16世紀における尾張地城の半球形内耳鍋と釜、ほうろくは、ほぼ全てが尾張地城東部で生産されたものである可能性が高く、それは大毛池田遺跡のような尾張北西部から弥勒寺遺跡のある知多半島にまで及んでいるといえる。これまでの弥生土器や古代の土器における胎土分析例では、尾張地城産の特徴として斜方輝石・單斜輝石および角閃石の3鉱物を主体とする「両輝石型」の胎土を示した。今回の分析結果では、これに類似する組成としてc類があげられるが、これは前述のように土師器皿にのみ認められており、煮炊具には認められない。このことは、尾張地城における煮炊具の産地が、東部地域に限定される可能性のあることを示唆する。

一方、東三河地城における半球形内耳鍋は、おそらく東三河地城内で生産されたものと尾張東部地域から搬入されたものとが、混在している状況が明らかになった。今回の分析試料でみれば、その比率はおおよそ半々ぐらいとなる可能性がある。これは、東三河地城における半球形内耳鍋の生産を考える上で注目すべき結果といえる。なお、東三河地城のくの字型鍋、内湾形鍋および釜の煮炊具と土師器皿は、全て東三河地城産である可能性が高い。

今回の分析結果は、時期や地域ごとに見ると数点ずつの試料によるものであることから、今後も分析例の追加による検証が必要と考えられる。また、今回は試料がなかった岡崎平野とその周辺地域の西三河地城における同時期の煮炊具胎土の様相も、調べることが望まれる。

参考文献

- 矢作健二 1996 「重鉱物分析」「大毛池田遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書66集 p.223～230.
 矢作健二 1998 「一色青海遺跡出土の土器胎土重鉱物分析」「一色青海遺跡自然科学・考察編」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書79集 p.109～114.
 矢作健二・服部俊之・赤塚次郎 1997 「東海地城におけるS字状口縁台付壺の産地について－胎土分析による予察－」日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p.126～127.

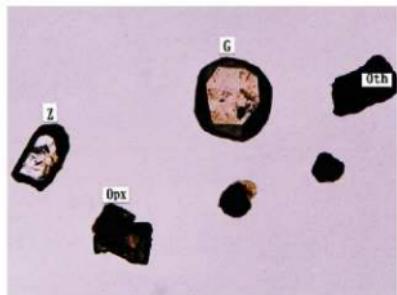
胎土 組成 分類	15世紀		16世紀		17世紀		18世紀		19世紀		20世紀		21世紀		22世紀		23世紀		24世紀		
	新	中古																			
日韓 組成	新	中古																			
x-1	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	
x-1.1																					
x-1.2			1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	
x-2			1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	
x-3									1(1)	1(1)									1(1)	1(1)	
x-3.1									1(1)	1(1)									1(1)	1(1)	
x-3.2																				(1)	(1)
x-4																				2(2)	2(2)
胎土分析結果	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21

第10表 各器種の胎土

試料番号	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉱物	その他	合計
1	6	0	9	0	0	14	21	1	3	0	8	85	147
2	3	0	3	1	0	4	6	0	1	1	4	25	48
3	3	1	3	4	0	11	23	3	2	4	1	85	140
4	2	0	6	4	0	17	21	5	4	4	4	86	153
5	1	0	12	10	0	25	17	3	5	2	3	116	194
6	3	1	4	0	6	3	1	0	1	0	19	11	49
7	12	0	8	2	0	30	23	3	2	3	5	162	250
8	4	0	4	0	0	4	0	0	0	1	6	35	54
9	1	0	2	1	2	7	5	1	0	1	3	43	66
10	0	0	1	4	0	10	16	0	0	1	5	64	101
11	6	2	6	0	0	7	17	0	13	1	50	27	129
12	12	1	12	3	5	5	14	1	2	1	6	57	119
13	15	0	5	0	0	14	15	3	1	2	26	86	167
14	0	1	1	0	0	2	2	0	0	0	10	0	16
15	2	0	15	0	1	11	11	0	4	2	42	24	112
16	1	0	5	0	0	5	2	0	0	1	3	18	35
17	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
18	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	2	6	11
19	1	0	6	0	0	3	3	0	1	1	2	24	41
20	1	0	1	0	0	2	3	0	0	0	1	10	18
21	5	0	177	0	10	11	16	1	4	7	6	23	250
22	2	0	30	5	0	22	14	1	3	0	11	122	210
23	3	0	17	0	0	9	5	1	5	0	33	41	114
24	6	0	173	48	0	2	3	0	1	1	1	15	250
25	36	1	29	95	0	1	36	0	2	5	2	43	250
26	26	1	148	8	1	0	27	1	3	4	3	28	250
27	10	1	120	2	0	0	15	0	3	1	2	10	164
28	0	0	10	1	0	0	1	0	2	1	7	0	22
29	1	0	21	0	0	3	12	0	1	2	10	62	112
30	0	0	6	0	0	0	3	0	0	1	5	5	20
31	3	0	8	0	0	2	7	0	1	1	4	19	45
32	0	0	7	0	0	0	7	0	0	0	3	0	17
33	5	0	21	0	0	1	5	0	0	1	4	10	47
34	5	0	20	1	0	3	9	0	0	1	2	17	58
35	1	0	3	0	0	0	0	0	1	0	5	3	13
36	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3	2	7
37	2	0	5	0	0	11	11	0	1	0	12	20	62
38	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	2	5	
39	66	4	5	0	0	0	0	0	0	0	8	11	94
40	35	3	1	5	0	1	0	0	0	0	3	202	250
41	1	0	3	0	0	2	0	1	0	0	1	2	10
42	2	0	36	1	0	11	11	1	2	5	20	39	128
43	2	0	9	1	0	0	0	1	3	2	10	191	219
44	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7	9
45	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	3
46	4	0	2	0	0	0	0	0	2	0	1	3	12
47	3	0	18	0	0	24	16	3	0	5	6	84	159
48	0	0	2	8	0	24	9	0	1	4	2	85	135
49	3	0	3	0	0	6	11	0	3	2	16	15	59
50	1	0	1	3	0	9	5	0	6	0	77	44	146
51	3	0	2	0	0	4	0	2	3	3	23	29	69
52	3	0	3	0	0	5	2	0	1	2	51	146	213
53	8	0	15	2	1	14	10	1	3	2	9	65	130
54	8	4	13	0	0	12	10	4	3	1	1	68	124
55	10	1	13	0	0	9	6	1	1	2	13	50	106

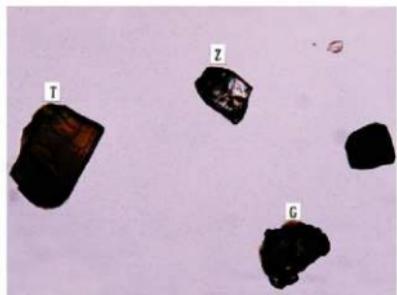
第11表 胎土中の重鉱物

第228図 胎土重鉱物組成



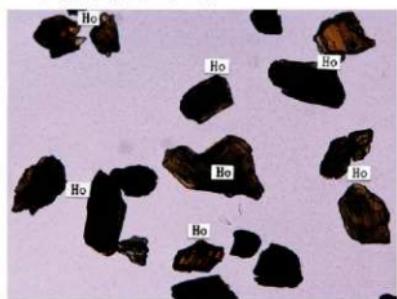
1. 名古屋城三の丸遺跡（II）88区 SD09

半球形内耳鍋；7 (a 2類)



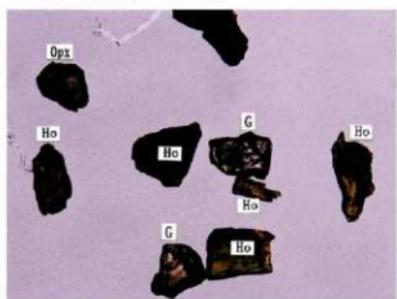
2. 名古屋城三の丸遺跡（IV）91区 SK418

戦国型羽付鍋；11 (a 2類)



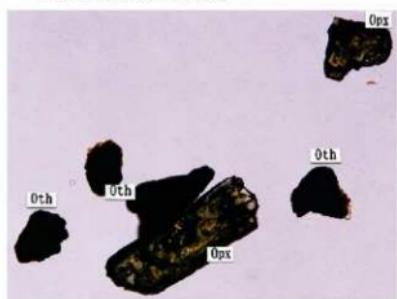
3. 吉田城遺跡 90区 SD102

半球形内耳鍋；24 (b 2類)



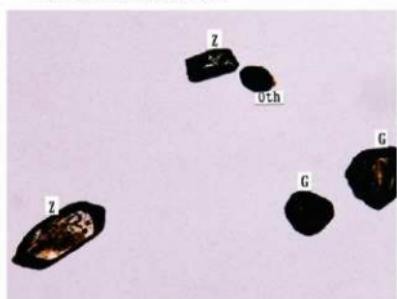
4. 吉田城遺跡 90区 SD102

内弯形内耳鍋；26 (b 1類)



5. 弥勒寺跡 III区 中央東地山上

ロクロ成形土器皿；40 (c類)



6. 清洲城下町遺跡 97B区 IV G 10b NR02 下層

半球形内耳鍋；48 (a 1類)

Opx : 斜方輝石, Ho : 角閃石, Z : ジルコン, G : ザクロ石, T : 電気石, Oth : その他.

0.5mm

第229図 胎土中の重鉱物

第3節 郷上遺跡出土の鉄器・鉄滓および羽口等の分析・調査

(株)川鉄テクノリサーチ 分析・評価センター

埋蔵文化財調査研究室 岡原正明 伊藤俊治

1.はじめに

本遺跡より出土した鉄滓、鉄製品及び羽口について化学成分分析を含む調査を行う。

調査の観点として、鉄滓については、a. 製鉄原料の推定、b. 製鉄工程上の位置付け、c. 觀察上の特記事項など、鉄製品については、a. 残存金属の確認、b. 金属鉄成分の分析、c. 加工状況や観察上の特記事項など、また、羽口については、a. 耐火度、b. 粘土成分、c. 觀察上の特記事項など、を中心に調査した。その結果について報告する。

2.調査項目および試験・検査方法

(1)調査項目

No.	資料 番号	調査区	資料性格	重量 g	粗着度	MC反 応性	機械 写真	成分 分析	組織 写真	X線 回折	EPMA	X線 透過 観察	耐火 度
1	1/97A	流動溶=製鍊溶		44.4	稍弱	なし	○	○	○	○	○	○	
2	4/97A	楕形溶=楕形鍊鉢溶		205.3	稍強	あり	○	○	○	○	○	○	
3	5/97A	流動溶=製鍊溶		46.7	稍弱	なし	○		○				
4	6/97A	鐵塊=遺物		44.3	強	あり	○	○	○M	○	○		
5	7/97A	流動溶=精鍊鉢溶		95.0	中	なし	○	○	○	○	○		
6	9/97A	楕形溶=精鍊鉢溶		154.2	中	なし	○	○	○	○	○		
7	11/97A	楕形溶=精鍊鉢溶		139.7	稍強	なし	○	○	○	○	○		
8	14/97A	流動溶=鍛鉢溶		336.3	中	なし	○	○	○	○	○		
9	15/97A	流動溶=精鍊鉢溶		61.9	弱	なし	○	○	○	○	○		
10	16/97A	流動溶=精鍊鉢溶		37.9	稍強	なし	○	○	○	○	○		
11	26/97A	流動溶=鍛鉢溶		59.2	中	なし	○	○	○	○	○		
12	27/97A	流動溶=精鍊鉢溶		101.3	弱	なし	○	○	○	○	○		
13	29/97A	流動溶=鍛鉢溶		63.8	稍強		○	○	○	○	○		
14	32/97A	流動溶=製鍊溶		11.3	弱	なし	○	○	○	○	○		
15	46/97A	打		4.8	強	あり	○	○M	○L,C	○	○L,C	○	
16	47/97A	流動溶=精鍊鉢溶		35.3	稍弱	なし	○	○	○	○	○		
17	49/97A	楕型溶=製鍊溶		72.5	弱	なし	○	○	○	○	○		
18	50/97A	羽口		92.8	弱	なし	○	○				○	
19	51/97A	合鍛遺物⇒現代の鉄片		76.0	強	あり	○	○	○M		○		
20	55/97C	楕形溶=楕形鍊鉢溶		646.5	稍強	なし	○	○	○	○	○		
21	56/97C	楕形溶=楕形鍊鉢溶		326.6	中	なし	○	○	○	○	○		
22	57/97C	楕形溶=製鍊溶		372.8	中	なし	○	○	○	○	○		
23	58/97C	楕形溶=精鍊鉢溶		212.7	稍強	なし	○	○	○	○	○		
24	59/97C	流動溶=鍛鉢溶		145.9	稍強	なし	○	○	○	○	○		
25	60/97C	楕形溶=楕形鍊鉢溶		322.9	稍強	なし	○	○	○	○	○		
26	61/97C	楕形溶=精鍊鉢溶		374.5	中	なし	○	○	○	○	○		
27	62/97C	流動溶=精鍊鉢溶		129.3	稍強	なし	○	○	○	○	○		
28	64/97C	流動溶=精鍊鉢溶		34.1	稍強	なし	○	○	○	○	○		
29	66/97C	羽口		237.6	弱	なし	○	○				○	
30	71/97C	流動溶=精鍊鉢溶		50.2	稍強	なし	○	○	○	○	○		
31	72/97C	鐵滓	精鍊鉢溶	45.3	稍強	なし	○	○	○	○	○		
32	91-1	炉壁		203.3	弱	なし	○	○					
33	91-2	鐵滓	精鍊鉢溶	92.3	中	なし	○	○	○	○	○		

註:a. 調査区、資料の性格は発掘調査記録に依る。

b. 資料の性格の⇒の後は、調査・考察の結果に基づくものである。

c. MC反応とは金属探知機による残存金属の有無を言う。

d. Mは残存金属部分を指す。

e. L, Cとは残存金属部分の長手方向、断面方向を表わす。

(2)重量計測と着磁度調査

計重は電子天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入した。また、着磁度の調査は、直径30mm・1300ガウス(0.13テスラ)のリング状フェライト磁石を使用し官能検査で「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで個別調査結果の文中に表示する。

(3)外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、資料の両面をmm単位まであるスケールを同時写し込みで撮影した。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行う。

(4)化学成分分析

化学成分分析はJISの分析法に準じて行った。分析方法および分析結果は57～59頁の一覧表に示してあるので、参照下されたい。

この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行う。また、羽口に使用されている粘土も特別に選択使用していたのかの判断用に分析する。

分析項目は、鉄滓18成分、残存金属鉄14成分、粘土12成分である。

(5)顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上)する。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、溶融状況や介在物(鉱物)の存在状態等から加工状況や材質を判断する。鉄滓の場合にも同様に処理・観察を行い、製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにする。原則として100倍と400倍で撮影を行う。

(6)X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれ固有の反射(回折)されたX線が検出されることを利用し、試料中の未知の化合物を観察・同定する。

多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。装置の仕様や測定条件、測定結果は91頁以降に添付する。なお、測定チャートのサンプル・は資料番号(「総上」)は略である。

(7)EPMA(X線マイクロアナライザー)による観察

高速電子線を $200\mu\text{m}$ 程度に絞って、分析対象試料面に照射し、その微小部に存在する元素から発生する特性X線を測定するもので、金属鉄中の介在物や鉄滓の成分構成を視覚から確認するため、二次元の面分析を行う。

(8)X線(放射線)透過試験

X線発生装置を用い最適のX線強度を選択して、写真撮影を行う。同一のX線強度と照射時間の場合には、照射される物質の質量が重い程、また寸法が厚い程X線が吸収され写真上では黒くなり、その反対ではX線が簡単に透過する関係上白く写る。したがって、凹凸や異種金属が共用されているとか錆で金属部分が薄くなっている場合でも状況が濃淡で判別できる。

(9)耐火度試験

製鉄に使用された炉壁や羽口について、どの程度の耐火性のある粘土を使用していたのかを判断するために試験する。この調査も J I S 規格『耐火れんがの耐火度の試験方法』に準じて行う。

3. 調査および考察結果

次に調査および考察結果を代表的なものに関して抜粋して報告する。(第12表)

1) 資料番号: 郷上 9 梶形溝→精錬溝

長さ 70mm 幅 60mm 厚さ 45mm の水酸化鉄と植物繊維痕の多い、凹凸が激しい資料である。泥水中にあった様相を呈する。着磁度は中程度であるが、MC 反応はない。重量は 154.2g である。

化学成分分析の結果によると、T.Fe は 52.6% で、FeO も 50.4% が多い。Fe₂O₃ は 18.4% と相対的に少ない。また、M.Fe の値は 0.58% 造溝成分は 26.0% である。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ が 0.70%、V も 0.068% と比較的多く存在する。Cu の値は 0.002% で、非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値は 1.34% なので、酸化第二鉄と水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄が少々存在するものと推定される。

薄断面の顕微鏡組織には、灰白色崩状のウスタイト結晶と短冊がやや崩れた形状のファイヤライトの結晶が観察される。他の鉱物質たとえばチタニウム系の結晶は特に認められず酸化鉄主体の溝と観察される。

X 線回折チャートからは主としてウスタイトとファイヤライトの強いピークが検出されている。この他中程度のマグネタイトとゲーサイトやレビッドクロサイトなどのオキシ水酸化鉄のピークおよび少量の鉱物質の存在が認められる。なお、金属鉄の存在は認められない。

以上の結果を総合すると、精錬溝と推定できる。鉄源には砂鉄が使用されたと考えられる。

2) 資料番号: 郷上 29 梶形溝→鍛錬鍛冶溝

径 50mm 厚さ 20mm の小型梶形溝完形品で、上部は平坦でやや中凹をなし、底部は木炭痕がある。水酸化鉄や付着土も少なく清浄な資料である。着磁度はやや強いが、MC 反応はない。重量は 63.8g である。

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 55.8% とやや多く、FeO は 49.9% であった。Fe₂O₃ は 23.5% と相対的に少ない。また、M.Fe は 0.60% で、造溝成分は 23.3% である。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ が 0.19%、V も 0.003% であり、一方鉱石に含有される成分の一つである Cu の値は 0.003% で非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値は 1.05% なので、ゲーサイト等のオキシ水酸化鉄が若干存在するものと推定される。

薄断面の顕微鏡組織には、灰白色崩状のウスタイト結晶と樹枝状のマグネタイト結晶が認められる。また、幅広で短冊状のファイヤライト結晶が観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の溝と考えられる。

X 線回折チャートでは、ウスタイトとファイヤライトの強いピークが検出されている。この他少量のマグネタイトと鉱物質化合物の存在が認められる。同時にオキシ水酸化鉄のゲーサイトとレビッドクロサイトの存在が確認されたが、金属鉄は検出されない。

以上の結果を総合すると、この資料は鍛錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたものと考えられる。

3) 資料番号：郷上 49 梶形滓→製錬滓

長さ 55mm 幅 45mm 厚さ 30mm で上部は平坦で発泡が著しい。下部は中凸で割欠き面が 2 面ある。黒色粗鬆な滓である。着磁度は弱く、MC 反応もない。重量は 72.5g である。

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 40.0% とやや少なく、また FeO は 38.7% で、Fe₂O₃ も 13.1% と少ない。M.Fe は 0.78% である。滓中の造滓成分は 44.0% とやや多い。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ が 0.59%、V は 0.018% であったが⁶、一般に鉱石に含有される成分の一つである Cu の値は 0.001% で非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値は 0.91%、Fe₂O₃ の量も少ないので、ゲーサイト等のオキシ水酸化鉄の存在の可能性はない。

滓断面の顕微鏡組織には空孔が多く観察される。ウスタイトやマグネタイトの結晶は認められない。短冊状のファイアライト結晶のみが観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められない。ファイアライト結晶を埋める灰色の部分はガラス状の鉱物質である。

X 線回折チャートでは、主としてファイアライトの強いピークと鉱物質のピークが検出されている。製錬初期の滓と認められる。オキシ水酸化鉄と金属鉄は検出されない。

以上の結果を総合すると、この資料は製錬滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたものと考えられる。

4) 資料番号：郷上 56 梶形滓→梶形鍛錬鍛冶滓

長さ 80mm 幅 80mm 厚さ 50mm の二段滓で、下部の滓は 60 × 50mm でやや斜めになっている。凹凸があり黒色で発泡している。見かけの性状は上下同一と観察されたので、上部の滓について調査する。着磁度は中程度で MC 反応はない。重量は 326.6g である。

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 56.4% とやや多く、FeO は 47.4%、Fe₂O₃ は 24.7% と少ない。また、M.Fe の値は 2.29% で金属鉄が少々存在するものと推定される。造滓成分は 18.5% と少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ が 1.09%、V も 0.057% であり、一方鉱石に含有される成分の一つである Cu の値は 0.002% で非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値は 1.64% なので、ゲーサイト等のオキシ水酸化鉄が若干存在するものと推定される。

滓断面の顕微鏡組織には、灰白色蘭状のウスタイト結晶と短冊状のファイアライト結晶が観察される。金属鉄や他の鉱物質の結晶は認められなかった。

X 線回折チャートでは、ウスタイト、マグネタイトとウルボスピネルの強いピークが検出されている。この他に少量の鉱物質の存在が認められる。オキシ水酸化鉄のゲーサイト存在が確認されたが、金属鉄は残念ながら検出されない。

以上の結果を総合すると、この資料は形状を加味し梶形鍛錬鍛冶滓で、鉄源に砂鉄が使用されたものと考えられる。

5) 資料番号：郷上 57 梶形滓→製錬滓

長さ 110mm 幅 80mm 厚さ 40mm で凹凸があり、黒色発泡粗鬆な滓である。一段目上部との間に木炭片が多い。調査はこの上部について行う。着磁度は中程度で、MC 反応はない。重量

は 372.8g である。

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 46.2% とやや低いが、FeO は 46.5% と相対的に高い値であり、Fe₂O₃ は 13.4% と少ない。また、M.Fe は 0.70% である。造滓成分は 35.0% で多い。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ が 1.28%、V も 0.059% と多く、一方鉱石に含有される成分の一つである Cu の値は 0.001% で非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値は 0.65% なので、ゲーサイト等のオキシ水酸化鉄が存在するものと推定される。

滓断面の顕微鏡組織には、灰白色樹枝状のウスタイト結晶と短い樹枝状のマグネタイト結晶が観察される。形の崩れたファイヤライトと推定される結晶が存在する。

X 線回折チャートでは、ファイヤライトの強いピークが検出されている。この他中程度のウスタイトとマグネタイトの存在が認められる。同時にオキシ水酸化鉄のレピッドクロサイトと鉱物質が存在する。金属鉄は検出されない。

以上の結果を総合すると、この資料は製錬滓で、鉄源に砂鉄が使用されたものと考えられる。

6) 資料番号：郷上 60 梶形滓→楕形精錬鉱治滓

長さ 110mm 幅 90mm 厚さ 44mm の黄土色の水酸化鉄に覆われた、完全形状の楕形滓である。下部は径 90mm の円形で、上部は長径 90mm の梢円型になっている。着磁度はやや強いが、MC 反応はない。重量は 322.9g である。

化学成分分析の結果では、T.Fe の値は 50.1% とやや多く、FeO は 35.6% であり、Fe₂O₃ は 30.2% と相対的に多い。また、M.Fe は 1.33% である。造滓成分は 23.8% とやや少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ が 1.13%、V も 0.088% あり、一方鉱石に含有される成分の一つである Cu の値は 0.004% で非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値は 2.51% なので、ゲーサイト等のオキシ水酸化鉄が存在するものと推定される。

滓断面の顕微鏡組織には、灰白色樹枝状のマグネタイトと短冊状のファイヤライト結晶が観察される。また少量のウスタイト結晶も存在する。金属鉄や他の鉱物質の結晶は認められなかつた。

X 線回折チャートでは、ウスタイトの強いピークが検出されている。この他に中程度のマグネタイトとファイヤライトが存在する。また、少量のゲーサイトと鉱物質の存在が認められる。金属鉄は検出されない。

以上の結果を総合すると、この資料は形状を加味すると楕形精錬鉱治滓で、鉄源に砂鉄が使用されたものと考えられる。

7) 資料番号：郷上 61 梶形滓→精錬鉱治滓

一辺 80mm 厚さ 55mm の三角形をした肉厚の滓である。上面は凹で水酸化鉄の付着はない。他の 4 面は水酸化鉄に覆われている。肉厚部の内部から試料の採取を行う。着磁度は中程度であり、MC 反応はない。重量は 374.5g である。

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 50.6% とやや多く、FeO も 45.5% と相対的に多いが、Fe₂O₃ は 20.6% と少ない。M.Fe は 0.82% である。造滓成分は 22.3% とやや少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ は 6.85% と非常に多く、V も 0.260% と高い。一方、鉱石に含

有される成分の一つであるCuの値は0.001%で非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値は0.81%なので、ゲーサイト等のオキシ水酸化鉄はあまり存在しないものと推定される。

滓断面の顕微鏡組織には、灰白色繭状のウスタイトと幅広で形の崩れた短冊状のファイヤライト結晶が観察される。また多量の多角形で不定型のウルボスピニル結晶も存在する。金属鉄や他の鉱物質の結晶は認められなかった。

X線回折チャートでは、ウスタイトおよびチタニウムと鉄の酸化化合物のウルボスピニルの強いピークが検出されている。この他に中程度のファイヤライトが存在する。また、少量の鉱物質の存在が認められる。金属鉄は検出されない。

以上の結果を総合すると、この資料は精鍊鍛冶滓で、鉄源に砂鉄が使用されたものと考えられる。

8)資料番号：郷上 72 鉄滓→精鍊鍛冶滓

長さ60mm幅45mm厚さ15mmの中凹偏平な資料である。上部は黒色で発泡しているがやや滑らかで、下部は木炭片や灰色の火床材が付着している。着度はやや強いが、MC反応はない。重量は45.3gである。

化学成分分析の結果によると、T.Feの値は48.4%、FeOは40.1%、Fe₂O₃は21.9%である。また、M.Feは1.89%であり、造滓成分は30.2%とやや少ない。砂鉄に含まれていたと考えられるTiO₂は0.23%、Vは0.015%と低い値である。一方、鉱石に含有される成分の一つであるCuの値は0.004%で非常に少ない。しかし、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値は1.48%なので、ゲーサイト等のオキシ水酸化鉄が少々存在するものと推定される。

滓断面の顕微鏡組織には、数は少ないが灰白色繭状のウスタイトとマグネタイトと推定される結晶および短冊状のファイヤライトが観察される。組織の中に灰白色で角のない領域や100倍の写真左側の箇所にはオキシ水酸化鉄が存在する。金属鉄や他の鉱物質の結晶は認められなかった。

X線回折チャートでは、ファイヤライトの強いピークが検出されている。この他に中程度のマグネタイトが存在する。また、少量のオキシ水酸化鉄であるゲーサイトと鉱物質の存在が認められるが、金属鉄は検出されない。

以上の結果を総合すると、この資料は精鍊鍛冶滓で、鉄源に砂鉄が使用されたものと考えられる。滓生成時に包含された金属鉄塊部分は錆化しオキシ水酸化鉄になっている。

4.まとめ

全33資料の調査・考察結果をまとめると次のようになる。

4-1. 鉄塊系遺物

3 資料

- 1)郷上 6：製鍊過程の鉄塊で、鉄源は砂鉄である。
- 2)郷上 46：長手方向に鍛造加工された釘で、鉄源は資料の中で唯一鉱石である。
- 3)郷上 51：内ネジ付き鉄管の破断部で現代の鉄片であり、遺物ではない。

4-2. 鉄滓

- (1)鉄滓の分類基準は原則として、全鉄量と造滓成分量の含有範囲、滓の組織観察とX線回折結果により総合的に行つた。含有範囲は原則として次の通りとした。

含有範囲	全鉄	造滓成分
製鍊滓	47.5%未満	33%以上
精鍊鍛冶滓	55%未満～47.5%以上	25%以上～33%未満
鍛鍊鍛冶滓	55%以上	25%未満
(2) 製鍊滓		
郷上 1, 5, 32, 49, 57		5 資料
(3) 精鍊鍛冶滓		
郷上 7, 9, 11, 15, 16, 27, 47, 58, 61, 62, 64, 71, 72, 外－2		14 資料
(4) 梭形精鍊鍛冶滓		
郷上 4, 55, 60		3 資料
(5) 鍛鍊鍛冶滓		
郷上 14, 26, 29, 59		4 資料
(6) 梭形精鍊鍛冶滓		
郷上 56		1 資料
(7) 滋生成時に包含された金属鉄塊部分が錆化し、オキシ水酸化鉄に変化している資料は3資料（前記滓の内数）で、次の通りである。		
郷上 55, 72, 外－2		
(8) 化学成分分析で金属鉄存在の可能性が示唆されるような値の資料があったが、他の検討・調査からは認められなかった。		
(9) 鉄滓の鉄源		
鉄滓の鉄源は全て砂鉄である。		
4-3. 羽口		
郷上 50, 66		2 資料
耐火度はそれぞれ1,530°C、1,480°Cと非常に高い値を示した。粘土は選別して使用されたものと考えられる。		
4-4. 炉壁		
郷上外－2		1 資料

1. 鉄滓

資料名	C	MgFe	FeO	Fe2O3	C·W	SiO2	Al2O3	CaO	MgO	TiO2	MnO	P2O5	Cr2O3	Na2O	K2O	C	V	Cr
1	34.3	0.4	24.0	21.7	1.62	37.3	9.75	1.68	0.01	0.34	0.10	0.01	0.001	1.22	2.32	0.17	0.006	0.001
4	53.4	0.5	35.4	36.3	2.48	18.0	4.53	0.69	0.32	0.39	0.09	0.20	0.001	0.27	0.82	0.32	0.027	0.001
7	48.5	0.9	48.9	33.7	0.91	22.6	5.82	3.01	0.52	0.49	0.20	0.37	0.001	0.46	1.92	0.08	0.050	0.001
9	52.6	0.6	36.4	18.4	1.34	18.8	4.82	1.87	0.46	0.70	0.16	0.36	0.001	0.37	1.05	0.32	0.060	0.002
11	34.0	0.6	49.4	29.3	1.20	19.8	4.36	1.23	0.29	0.22	0.08	0.19	0.001	0.27	1.35	0.07	0.005	0.001
14	51.9	0.7	36.4	23.2	1.23	16.8	3.90	1.65	0.37	0.43	0.11	0.20	0.001	0.32	1.22	0.12	0.042	0.001
15	50.5	0.4	48.1	18.2	0.98	26.9	5.18	2.09	0.49	1.22	0.18	0.26	0.023	0.35	1.89	0.06	0.007	0.001
16	49.4	0.4	44.0	21.2	1.33	21.9	5.37	1.84	0.26	1.20	0.40	0.30	0.010	0.39	1.28	0.14	0.160	0.001
26	60.6	0.5	47.1	33.5	1.98	16.1	2.28	1.60	0.13	0.28	0.07	0.30	0.001	0.13	0.89	0.16	0.014	0.001
27	50.8	0.4	49.8	16.8	0.91	25.2	3.14	1.63	0.40	1.27	0.32	0.39	0.012	0.14	1.19	0.07	0.100	0.001
29	55.8	0.6	49.9	23.3	1.09	17.9	4.04	1.64	0.32	0.19	0.06	0.27	0.001	0.40	0.95	0.08	0.003	0.003
32	43.9	0.4	36.8	21.3	2.04	25.2	7.33	2.36	0.40	0.37	0.17	0.36	0.001	0.52	1.67	0.22	0.020	0.001
47	50.6	0.6	51.4	14.6	1.37	25.2	5.30	1.91	0.26	0.83	0.26	0.38	0.001	0.39	1.26	0.11	0.043	0.001
49	40.0	0.8	38.7	0.1	0.91	32.3	9.32	2.45	0.10	0.39	0.10	0.28	0.001	0.62	1.09	0.07	0.018	0.001
55	54.1	0.7	51.7	34.8	1.63	15.0	5.97	1.12	0.25	0.80	0.31	0.40	0.011	0.19	0.86	0.27	0.150	0.001
56	50.4	2.3	47.4	24.7	1.64	14.0	3.25	1.07	0.16	1.08	0.26	0.43	0.001	0.16	0.72	0.66	0.057	0.002
57	46.7	0.7	46.5	13.4	0.63	25.9	7.22	1.42	0.49	1.28	0.35	0.46	0.001	0.22	1.97	0.17	0.059	0.001
58	48.9	0.6	46.4	17.5	0.62	23.2	3.97	1.74	0.43	1.11	0.22	0.69	0.001	0.27	1.30	0.09	0.071	0.001
59	55.8	1.3	45.3	27.4	0.84	13.6	3.98	1.40	0.33	1.18	0.43	0.82	0.001	0.13	1.68	0.38	0.071	0.001
60	50.3	1.3	35.6	30.2	2.51	16.7	3.99	1.21	0.29	1.13	0.27	0.79	0.001	0.21	1.10	0.38	0.088	0.004
61	50.6	0.8	45.5	20.6	0.81	14.9	5.00	1.41	0.36	0.83	0.49	0.30	0.010	0.21	0.92	0.12	0.260	0.001
62	31.2	3.2	36.6	30.9	1.35	16.6	5.41	1.87	0.36	1.25	0.34	0.96	0.003	0.24	1.11	0.68	0.081	0.001
64	51.9	2.3	41.0	25.6	0.77	16.1	4.43	1.09	0.44	0.23	0.85	0.07	0.010	0.10	1.25	0.68	0.083	0.001
71	49.7	2.9	32.6	40.7	1.82	16.3	4.54	1.61	0.46	0.80	0.42	2.80	0.012	0.12	0.96	0.90	0.091	0.001
72	48.0	1.9	40.1	21.9	1.48	25.1	3.68	1.15	0.31	0.23	0.20	1.77	0.001	0.12	1.20	0.89	0.015	0.004
95-2	44.6	3.9	30.1	24.3	1.31	19.8	3.63	2.19	0.38	1.37	0.74	1.02	0.007	0.21	1.89	3.07	0.094	0.001

2. 粘土

資料名	C	SiO2	MnO	CaO	MgO	TiO2	Na2O	K2O	SiO2	CaO	Cr2O3	Fe	Al2O3	Cr	Si	Mn	P	Fe
30	0.26	72.5	0.03	0.13	0.01	0.62	0.23	1.89	2.27	1.89	3.15							
66	0.25	69.6	0.05	0.20	0.30	0.55	0.06	2.43	2.80	1.70	2.91							
外 1 a	0.25	74.2	0.05	0.13	0.01	0.60	0.34	2.06	1.71	1.87	3.10							
外 1 b	0.06	66.5	0.07	1.67	1.20	0.40	0.36	3.37	0.02	0.68	0.27							
外 1 c	0.13	65.7	0.05	1.47	0.18	0.36	1.25	4.41	6.77	0.80	0.74							

第12表 化学成分分析結果

第4節 郷上遺跡出土漆器資料の材質と製作技法

くらしき作陽大学 北野信彦

1.はじめに

郷上遺跡からは、戦国期～江戸時代を中心とした2時期（16世紀後半～17世紀前半、17世紀後半～18世紀頃）の集落屋敷跡を含む在郷地関連の遺構や遺物が多数検出されている。その内には漆器資料も含まれている。今回、(財)愛知県埋蔵文化財センターの御厚意により、これら漆器資料の材質と製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得た。本報ではこの調査結果について報告する。

2.出土漆器資料の調査

漆器資料は、陶磁器資料と比較して、木胎・塗り・加飾等、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法による調査で客観的にとらえやすい。そのためこのような漆器資料の材質と製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている。本稿では、これら漆器資料の形態、塗り面の状況を表面観察した後、(1)用材選択、(2)木取り方法、(3)漆膜面の塗り構造、(4)色漆の使用顔料、(5)蒔絵材料、等の項目別に自然科学的手法を用いた分析を行った。まず、その調査方法と調査結果を記す。

2.1 調査方法

2.1.1 用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体ができるだけ損傷しないよう、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サラニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

2.1.2 木取り方法

挽き物類である漆器の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時になった。

2.1.3 漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の塗り面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1mm×3mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイト GY1251JP、ハードナー HY837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行なった。

2.1.4 色漆の使用顔料および蒔絵粉材料の性質

色漆に用いられた顔料および蒔絵粉材料の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、日立製作所 S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所 EMAX-2000エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

2.1.5 分析結果の集計方法

個々の漆器資料からもっとも一般的な8つ（Aタイプ）もしくは9つ（Bタイプ）の材質や

製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結果をレーダーチャート方式で図化し、生産技術面（材質や製作技法）からみた一括の漆器資料の組成傾向を把握した。

（Aタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴を取り、それと対応する左側には、朱・サビ下地・ケヤキ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率（%）をそれぞれ配置した。この配置で示されるレーダーチャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

（Bタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・スズ（Sn）粉・石黄（As₂S₃）粉などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴を取り、それと対応する左側には、朱・サビ下地・金（Au）粉など優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられる銀（Ag）粉の占有比率（%）をそれぞれ配置した。

2.2 調査結果

今回調査を行った漆器資料は、椀・蓋・皿型を中心とした挽き物類である食器類と櫛等の器物の合計55点である。これらは、当時の基本的な飲食器である飯椀・汁椀・腰高・菜椀である壺・平椀およびそれとの蓋類等に対応するものであろう。本資料の帰属年代は、共伴陶器の編年観や出土状況および出土層位の観察から、大枠では戦国期～江戸時代前期（16世紀末～17世紀代初頭）および江戸時代中期頃（17世紀後半～18世紀頃：郷上集落が頻発する洪水を避けて現在の台地上の鶯鶴集落へ移転する時期を下限とおく）の2時期に分かれるが、実際にはこれら漆器資料は低湿地状の溝遺構などから一括で検出されている。そのため、個々の資料の年代観の分類は厳密には行うことができず、一括資料としてのみ認識した。以下、各項目別の調査結果を述べる（第13表）。

2.2.1 用材選択

本漆器資料の椀・蓋等の挽き物類の用材には、トチノキ科トチノキ23点、ブナ科ブナ7点、ブナ科クリ3点、ブナ科コナラ節11点、ニレ科ケヤキ1点、モクセイ科シオジ1点、カツラ科カツラ1点、エゴノキ科エゴノキ1点、ハンノキ等のカバノキ科2点、モクレン科ホオノキ1点、カエデ属1点、等の少なくとも広葉樹11種類が確認された。報告者のこれまでの調査では、近世初頭～江戸時代前期頃の資料にはコナラ節・クリ・シオジ材をはじめとする用材選択の多様性が見出され、江戸時代中期以降は、江戸市中や国元城下町などの大消費地を中心にもっぱらケヤキ・トチノキ・ブナの三樹種に出現比率が集約される傾向がみられる（第245図写真）。本資料の場合、前者のコナラ節・クリ・シオジ等の樹種もかなり含まれており、やは

り基本的な遺跡の年代観（戦国期～江戸時代前期頃）を反映しているものであろう。

次に、本資料の用材選択の傾向を各樹種の木材特性からみると、最良材であるケヤキ・シオジ材などと、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ・クリ・コナラ節材などの2つのグループに分類された。(第14表)註1)全体の中でこれらの出現比率を集計すると、前者のケヤキ・シオジ材が3.6%、後者のトチノキ・ブナコナラ節・クリ材が80.0%であり、後者が占める割合が圧倒的に高い。この結果から、本資料の多くは極めて実質的な在地系の日常生活什器類にあたるものと理解した。

2.2.2 木取り方法

本資料は、横木地と堅木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柾目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器資料では、堅木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、堅木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている。註2)

本資料の樹種と木取り方法との相関関連性をみると、トチノキ材の場合は横木地板目取りが極めて高い比率で、ブナ材の場合は横木地板目取り・柾目取り共にあるものの若干柾目取りの比率が高い傾向で見出された。一般にトチノキ材は、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味(心材)が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分(辺材)がある。シラタは、多く取れても四寸(約12cm)程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナ材は、芯に近いところまで利用が可能なので柾目取り・板目取りどちらも良いが、やや木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法が適しているという口承資料が知られている。(第230図)註3)この点からも、本資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれの材の性質を考慮に入れた可能性が指摘された。

2.2.3 漆膜面の塗り構造

本資料の漆器表面の塗り技術は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の2種類に分けられた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより、前者を炭粉を拂済などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地(堅下地もしくは本下地ともいう)であると認識したが、本資料の場合、1点(資料No.21)以外すべて炭粉下地であった。註4)次に、地の漆塗り層も基本的にはいずれも1層塗りであり、加飾は、地の上塗り層の上に描かれていた。以上の結果からは、本資料はいずれも簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心であると判断された。註5)(第231図)(第244図写真)

2.2.4 赤色系漆の使用顔料

赤色系漆の使用顔料を定性分析と顕微鏡観察で調査した結果、それぞれベンガラ(酸化第二鉄 Fe_2O_3)、朱(水銀朱 HgS)さらには朱とベンガラの混合の、の三種類に分類された(第232図)。ベンガラ・朱とともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の赤色顔料としては、近

世初頭期段階では朱の使用の占有比率が高いが、江戸時代中期以降は、朱が幕府朱座を中心とした統制物資となるに比較して、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となる。註6)本資料の場合、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を、また地内面にはベンガラを地外の家紋等の加飾部分のみに朱を使用する等の朱とベンガラの使い分け事例が確認されたが、他の近世遺跡出土漆器資料のそれに比較して比較的朱の出現比率が高かった。この傾向もやはり本資料の構成群の中に含まれる基本的な遺跡の年代観(戦国期～江戸時代前期頃)を反映しているものであろう。

2.2.5 金泥状および蒔絵粉材料の材質

本資料の表面観察では金粉(金箔)もしくは金泥(金彩)によるとみられる家紋や絵柄等の蒔絵加飾部分を定性分析した結果、Au(金)自体を用いる資料は見出されず、いずれもAs2S3(石黄・硫化砒素)やAg(銀)粉材料が用いられていた(第242図)。江戸期の文献史料からは、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体が、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたことや、これら金・銀・スズ等の材質別の蒔絵漆器に、明確な価格差が存在したこと等が知られる。註7)さらに、報告者によりこれまでの調査結果からは、近世出土漆器の代用金蒔絵粉材料は、石黄(江戸時代前期)～銀(中期以降)～スズ(後期以降)へと材質が変遷していた。(第233図)註8)本資料の場合、これら蒔絵材料は石黄粉もしくは銀蒔絵粉であり、スズ粉の使用は確認されていない。やはり基本的な遺跡の年代観を反映しているものであろう。

3.考察

以上、ここまででは本漆器資料の材質・技法の在り方を項目別に分けてみてきた。その結果、本資料は、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類が中心であった。報告者によるこれまでの各近世遺跡出土漆器資料の分析結果からは、簡素な素材からなる極めて一般的な資料から、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類される。このような漆器資料のグループ毎の違いは、①文化的背景を含むそれぞれの資料の製作年代、②これら什器を使用しさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景(生活様式)、③地域性、④什器類の使用目的や方法、⑤さらには個々の漆器生産地の製作技術、等さまざまな条件が反映されたものであろう。註9)本報では、これらの基本的な傾向を把握するために、最も一般的な8つ、もしくは9つの材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総出現数の中で集計した。そして、本資料と基本的には類似した性格を有する在郷性が強い村方社会に関する漆器資料のそれとの比較検討を試みた(第234図)。その結果、本資料の一般的な傾向は、基本的には極めて実用に即した生活什器類である飲食器類を中心としていること、そしてこの傾向は、その他の在郷地域における近世出土漆器資料のそれと比較してみても類似した範疇に含まれていた。

今後の課題は、陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討することである。この検討作業を行うことが、本出土漆器資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

(謝辞)

本調査を行なうにあたり、(財)愛知県埋蔵文化財センターの酒井俊彦氏および鈴木正貴氏をはじめとする多くの方には、大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

註

- 1)末沢 1975 の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが韧性がある材を適材であるとしている。
橋本鉄男 1979 「ろくろ ものと人間の文化史 31」 法政大学出版局
- 2)北野信彦 2000 「近世出土漆器碗の用材に関する一考察」『考古学と自然科学 日本文化財科学会誌 第38号』 p.47-66 日本文化財科学会等を参照されたい。
- 3)須藤 1982 の調査によると、近世以降の近江系(小椋谷)木地師による挽き物類の本取り方法の場合、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集團に受け継がれてきたとしている。
須藤 1983 「日本人の生活と文化、暮らしの中の木器」日本観光文化研究所編 ぎょうせい
- 4)一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地(堅下地・本下地より堅牢性に欠ける)の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。
北野信彦 1993 「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点—文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として—」『古文化財の科学 第38号』 p.65-79 古文化財科学研究会
- 5)このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗例の1つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器碗の製作技法に関する口承資料がある。それによると【上品】布着せ補強(椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く)～サビ下地(砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗り)～下塗り(生漆)～上塗り(生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆)の工程をふみ、一人代は持つ堅牢なもの。【下品】炭磨下地(柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地)～上塗り(生漆の使用量を節約するために偽1塗である不純物を多く混入している粗陋な漆)。【中品】下品とはほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗りしたりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い、などとしており、ランク別の工程をよく示している。
文化庁文化財保護部編 1974 「木地師の習俗 民俗資料選集2」 国土地理協会
- 6)江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍の相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。
北野信彦 2000 「朱・ベンガラ 項目」『日本民俗大辞典(下巻)』福田アジョ編吉川弘文館
- 7)江戸時代前期から徐々に定着化しつつあった雑道具類について、享保20年(1735)の尾張名古屋城下町の町衆に対する禁令には、「一、同諸道具、梨子地ハ勿論、蒔絵無用ニ可仕候、上之道具たりとも、黒塗ニ可仕候。(名古屋叢書第三巻)」という記述がみられる。又、武家社会内部でも、万治3年(1660)の紀州徳川家(御家中祝言道具達)では、藩士のランクを1万石から200石までの8段階に分け、道具桶や仕様を細かく規定している。その上で漆器である具桶は2400石以下の者には調達が認められておらず、諸道具の蒔絵仕上げも同様に許されていない。(南紀徳川史 法令制度第四)
- 8)寛延四年(1751)の「名古屋諸色直段集、寛延四末年小買物諸色直段帳」には、漆器の体漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蠟色塗(上品)：常滲塗(中品)：常拭漆塗(下品)の相対価格差は、約51:3.4:1と算定される。また、伊勢菰野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の漆物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18:6:1と算定される。いずれの事例からも生産技術面(ここでは材質や製作技法)の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解される。
北野信彦・肥塚隆保 2000 「近世出土蒔絵漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学 日本文化財科学会誌 第38号』 p.67-92 日本文化財科学会

9) 北野信彦 1993 「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』p.81-101 日本民具学会編 雄山閣出版

北野信彦 2000 「生産技術面から見た近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学 第9号』p.71-96 日本考古学協会 吉川弘文館等を参照されたい。

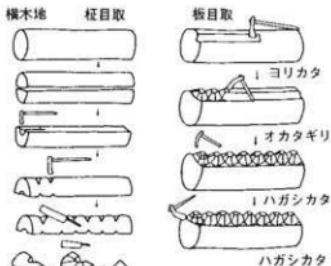
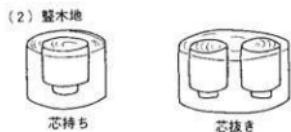
引用文献

沢口吾一 1966 『日本漆工の研究』 美術出版社

光芸出版社編 1978 『うるし工芸辞典』

No.	器型	側模	木取	表面塗り技法		漆塗構造		使用樹脂	備考
				内	外	支模	内		
1	椀	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
2	桶	不明	1.	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
3	桶	片	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
4	板鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
5	板鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
6	板鏡片	片付	1.	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
7	桶	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱+~
8	接物鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
9	桶	片付	1.	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
10	板鏡片	広輪孔	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
11	板鏡片	片付	1.	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
12	接物鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
13	板鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
14	接物鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
15	板鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
16	桶	片付	1.	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
17	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
18	接物鏡片	片付	1.	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
19	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
20	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
21	板鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	V	V	朱
22	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
23	板鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
24	桶	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
25	接物鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
26	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
27	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
28	板鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱+~
29	接物鏡片	広輪孔	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
30	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
31	桶	片付	A	漆	漆	内-輪-赤	1	1	朱
32	接物鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱
33	接物鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
34	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
35	桶	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
36	板鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
37	接物鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
38	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
39	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱+~
40	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
41	板鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
42	接物鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
43	板鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
44	板鏡片	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
45	桶	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
46	桶	片付	B	漆	漆	外-輪-赤	1	1	朱+~
47	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤-黄	1	1	~
48	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤	1	1	~
49	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤-黄	1	1	~
50	桶	片付	B	漆	漆	外-輪-赤-黄	1	1	~
51	接物鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤-黄	1	1	~
52	板鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤-黄	1	1	~
53	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤-黄	1	1	~
54	桶	片付	A	漆	漆	外-輪-赤-黄	1	1	~
55	接物鏡片	片付	A	漆	漆	外-輪-赤-黄	1	1	~

第13表 出土漆器資料観察表



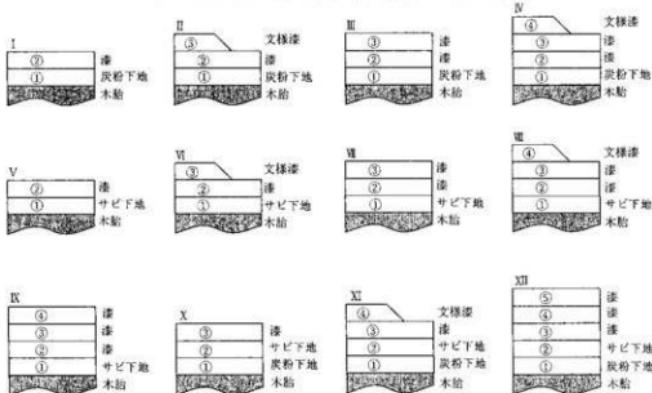
1 横木地と立木地の要領

(樺本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-より図面引用)

2 近世会津木漆器の木取りの方法

(須藤謙『日本人の生活と文化(木)』
暮らしの中の木器』-1982-より図面引用)

第230図 近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

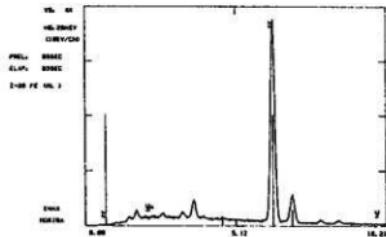


第231図 漆塗り構造の分類

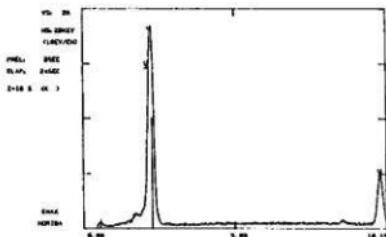
A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが韌性もあり、木組など薄手の物に適する。
B 數 孔 材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
C 孔 材	c. ブナ、トチノキ系 トナノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に人手できるので使用量は大である。
D 孔 材	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もしやすいので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

(樺本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-などを参考にして作成)

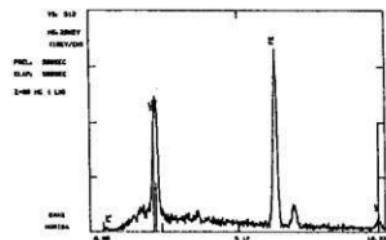
第14表 ろくろ挽き物の用材分類一覧表



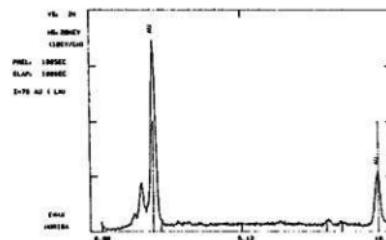
赤色系漆 ベンガラ (Fe_2O_3)



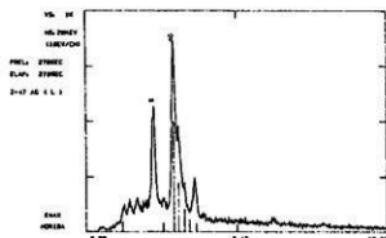
赤色系漆 朱 (HgS)



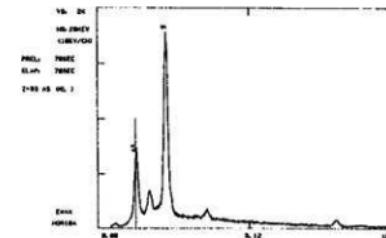
赤色系漆 朱+ベンガラ ($\text{HgS}+\text{Fe}$)



蒔絵加繪（金彩） 金 (Au)

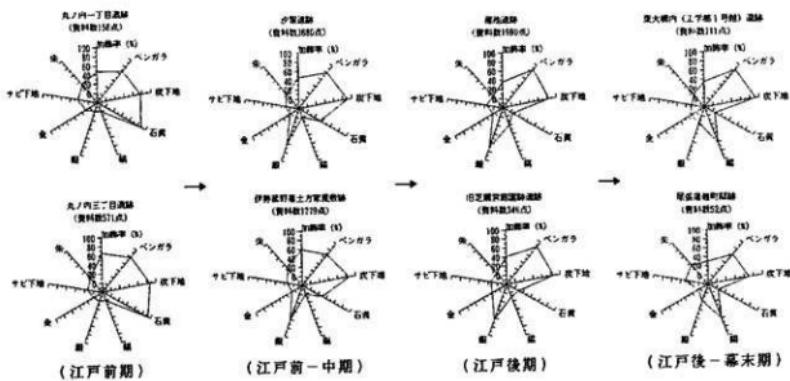


蒔絵加繪（銀彩） 銀 (Ag)

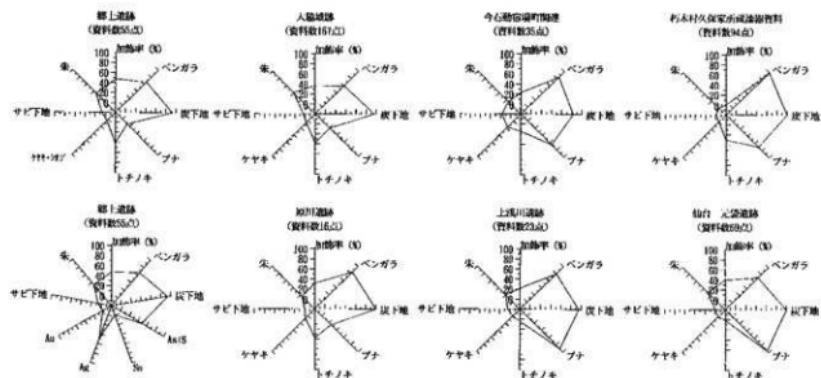


蒔絵加繪（銀彩） 石黃 (As_2S_3)

第232図 電子マイクロアナライザー（EPMA）分析結果

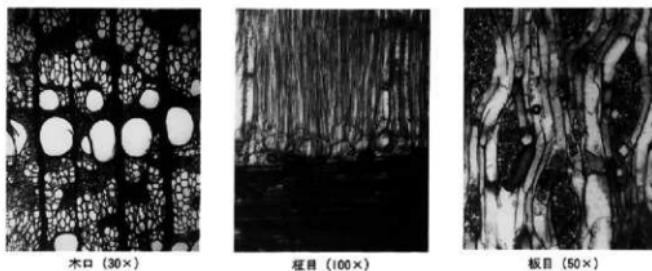


第233図 年代別蔵材料の変遷(集計例)

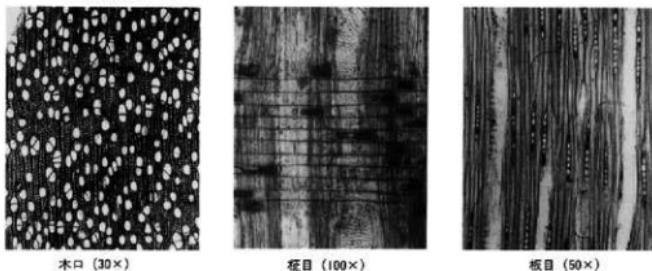


第234図 本遺跡を含む在郷性の強いと考えられる一括出土漆器資料の組成の傾向(集計例)

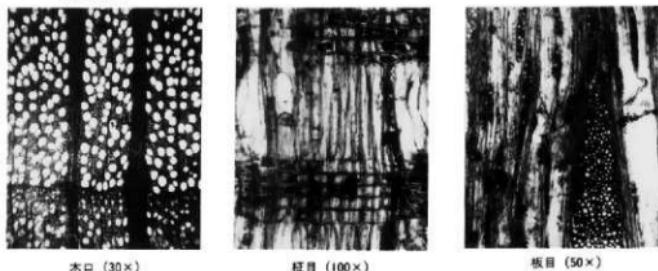
にれ科ケヤキ



どちのき科トチノキ



ぶな科ブナ



第235図 代表的な樹種同定写真



第236図 漆塗り構造の分類(断面観察写真)

第5節 郷上遺跡出土井戸材の樹種同定

堀本真美子・岩本佳子

1.はじめに

郷上遺跡では中世から近世にかけて大量の井戸が検出された。今回の分析では、大量の井戸材の中から、井戸ごとに器種を考慮しつつ数点の試料を選択し同定を行なった。

分析の試料総数は、73基256点である。

2.分析方法

材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて接線断面・放射断面・横断面を薄くはぎ取り、スライドガラスに上に並べ、ビオライト（応研商事）で封入し、永久プレパラートを作成し、光学顕微鏡下で観察し同定した。

3.結果

第17表に各試料の同定結果を示す。以下に材組織の観察結果を記載する。

(1)モミ属

垂直・水平樹脂道のある針葉樹材。樹脂細胞はないが、障害樹脂道が見られる。放射仮道管はない。放射柔細胞の壁は厚く、末端壁は数珠状をなす。分野壁孔はスギ型で、1分野に4個が存在する。

モミ属にはモミ、ウラジロモミ等が含まれる。モミは日本特産の針葉樹で本州・四国・九州に広く分布している。暖帯林の上部から温帯林の下部に広く見られる。ツガ・ヒノキ・コウヤマキ・カヤなどの針葉樹、イヌブナ・クリ・トチノキ・常緑カシ類などの広葉樹との混合林を作っている。常緑の高木で樹高30~40m、直径1~1.5m、時に樹高45m、直径2mに達する。材は加工しやすいが割列しやすく狂いやすい。材の耐久性、保存性は低い。

(2)マツ属（複維管束亞属）

垂直・水平樹脂道のある針葉樹材。樹脂細胞はないが、障害樹脂道が見られる。分野壁孔は窓状。放射仮道管の内面に鋸歯状突起がみられる。アカマツは暖帯から温帯の用地の生育する。コナラ・クリなどと混合林をつくる。樹高は30~35m、直径0.8~1m。材は耐水性がある。

(3)スギ

垂直・水平樹脂道のない針葉樹材。早材部と晚材部の移行はやや急である。樹脂細胞は早・晚材部の境界から晚材部に散在する。放射柔細胞の壁は薄く、分野壁孔はスギ型で1分野に2個が存在する。

日本特産の針葉樹で本州・四国に分布し九州にわずかに見られる。樹高は70m直径7mに達するものもあるといわれるが、普通の老大木で樹高40m、直径2m程度である。材の耐久性、保存性は中程度、割列しやすい。加工は容易。

(4)ヒノキ属

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晚材部は狭く、晚材部と早材部の移行は緩やかである。分野壁孔はヒノキ型で、斜めに細く開いている。1分野に2個の分野壁孔が整然と並んでいる。以上の特徴からヒノキ属であると判断した。

	総数	桟木	隅柱	縦板	桶	曲物底板・胴木
モミ属	2			2		
マツ属(複雑管束亜属)	19	14	1	2	2	
スギ	94	12	13	36	31	2
ヒノキ属	136	35	15	43	41	2
クリ?	4	3	1			
不明	7	2	1	3	1	
	262	66	31	86	75	4

第15表 井戸材に利用された樹種

(5)クリ?

材の保存状態が不良で、良好な断面試料を得ることができない試料である。横断面の観察から、孔圈道管が大型で1~3列に並んでいることが確認された。また放射細胞は短列同性で、道管は單穿孔であった。以上このとから、クリ材である可能性が高いと思われる。

(6)不明

材の保存状態が著しく悪く、切片を採取することが不可能であった試料である。

4. 利用樹種の構成と器種別の材利用

今回の試料262点のうち、ヒノキ属が136点と最も多く、次いでスギが94点、マツ属(複雑管束亜属)が19点、モミ属2点、クリ?4点、不明7点であった。

このうち、ヒノキ属とスギについては耐水性にも、加工性にも優れていることから、井戸材として広く利用されていたものと考えられる。ヒノキ属にはヒノキとサワラが含まれるが、そのうちヒノキは本州中部から屋久島まで広く分布している。スギは日本特産の樹種で本州北部から屋久島にかけて分布している。ヒノキは県内の弥生時代後期の坂戸遺跡(岡崎市)において、堅穴住居跡から出土している(山田 1993)。また濃尾平野においても、弥生時代中期の八王子遺跡(一宮市)の堅穴住居跡から出土している(堀川 2001)。このように、ヒノキの利用は弥生時代より始まっていたようである。一方スギは県内の資料においては、弥生時代より尾張地域では朝日遺跡において板材や橋などの木製品に利用されている。また三河地域の瓜屋遺跡(豊橋市)においても同様である(樋ほか 1993)。

第15表は今回分析を行なった試料を器種と樹種で一覧にしたものである。ヒノキ属とスギでは概ねどの部材にも利用されており、利用にあまり差は見られない。但し、桶ではヒノキ属が41点であるのに対して、スギは31点と、ややヒノキ属の割合が増大している。このことは、井戸の設営された時期の差であるのか、材の選択の差であるのか明らかではない。

次に井戸ごとに利用されている材の種類と部材の関係を第16表に示した。桶組の井戸で利用されている材を見てみると、ヒノキ属のみで作成されたものが17基、スギで作成されたものが12基、マツ属で作成されたものが1基であった。また97DSE08はヒノキ属とスギが利用されている。木組の井戸を見てみると、たとえば97A区SE05においては桟木2点・隅柱2点・縦板2点のすべてがスギで作られている(第16表)。また97B区SE02では桟木2点・隅柱3点・縦板2点のすべてがヒノキで作成されていた。以上のような3種類の部材をすべて同一の樹種で構成していた井戸は合計8基であった。そのうちスギだけで作成されていた井戸は3基、ヒノキ属の井戸は計5基であった。また2種類の部材を同一の材で作成していたものは10基

橋組井戸の部材樹種一覧

スギ	ヒノキ属	マツ属
97A SE002	97B SE03	97B SE05-B
97A SE01 1段目	97B SE04	
97A SE01 2段目	97C SE15	モミ
97A SX006	97D SE01	97C SE02
97B SE05-A	97D SE07B	
97B SE05-B	97D SE07C	
97B SE08	97D SE08	
97C SE20	97D SE09	
97C SE21	97E SE04 1	
97E SE10	97E SE04 2	
97F SE04	97E SE04 3	
97F SE04 2	97E SE04 4	
97F SE04 F	97E SE05 乾下層	
97F SE10	97E SE07	
98A SE05 1	97E SE12	
98A SE05 2	97E SK772	
	97F SE11	
	98A SE10 1	
	98A SE13	
16基	19基	2基

木組井戸の部材樹種一覧

	株木	支柱(脚柱)	規格
97C SE12	ヒノキ属	ヒノキ属	ヒノキ属
97B SE02	ヒノキ属	ヒノキ属	ヒノキ属
97C SE06	ヒノキ属	ヒノキ属	ヒノキ属
97C SE09	ヒノキ属	ヒノキ属	ヒノキ属
97F SE17	ヒノキ属	ヒノキ属	ヒノキ属
97C SE03	スギ	スギ	スギ
98C SE03	スギ	スギ	スギ
97A SE05	スギ	スギ	スギ
97E SE13	ヒノキ属	・	ヒノキ属
97F SE20	ヒノキ属	・	ヒノキ属
97D SE12	ヒノキ属	・	ヒノキ属
97F SE18	ヒノキ属	・	ヒノキ属
97C SE08	ヒノキ属	ヒノキ属	・
97C SE10	・	ヒノキ属	ヒノキ属
97F SE01	スギ	スギ	ヒノキ属
97F SE09	スギ	スギ	・
97E SE08	スギ	・	スギ
97C SE13	スギ	スギ	スギ
97F SE06	スギ	スギ	ヒノキ属
98A SE02	スギ。マツ属	ヒノキ属	スギ
97B SE07	ヒノキ属	クリ?	ヒノキ属
98C SE04	ヒノキ属	スギ	スギ
97C SE19	ヒノキ属	スギ	スギ
98C SE01	ヒノキ属	ヒノキ属	スギ
98B SE02	ヒノキ属、スギ	スギ	スギ
97E SE03	ヒノキ属、マツ属	ヒノキ属、マツ属	ヒノキ属
98B SE03	ヒノキ属	・	ヒノキ属、モミ属
97C SE04	クリ?	・	スギ
97C SE14	スギ	・	モミ属
97C SE16	マツ属	・	スギ
98A SE14	マツ属	・	スギ
97F SE16	マツ属	・	ヒノキ属
97E SE02	マツ属	・	ヒノキ属、スギ
97F SE08	ヒノキ属	・	・
97F SE14	クリ?。マツ属	・	・
97A SE04	スギ	・	・
97F SE22	スギ	・	・
98A SE01	マツ属	・	・

第 16 表 井戸毎の樹種構成

であった。

また97C区SE16では桟木3点はマツ、縦板3点はスギであるようによ多種類の部材を異なる材を用いて構成されていた井戸は15基であった。この桟木にはヒノキ属が、縦板にはスギが多く用いられているようである。

また97E区SE03のように同じ隅柱においてもヒノキとマツで構成されているものもあり、今後このような資料については、出土位置や加工技術や補修等の考古学検討を加えてゆく必要があると思われる。

今回の分析で器種ごとの試料が充分ではなく単一の器種のみの分析を行なった井戸が5基あった。

今回、樹種および材の器種の結果だけでは、木材利用の詳細な情報は得られなかったが、今後、井戸が帰属する時期や井戸枠の形状などの考古学的なデータとの参照および検証を進めることにより、より詳しい木材利用の実態が明らかにされることと思われる。

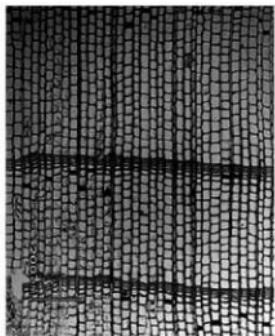
謝辞

今回の分析を進めるにあたり、名古屋大学農学部名誉教授 木方洋二氏、名古屋大学大学院生命農学研究科 吉田正人氏にはスギとヒノキの分野壁孔のSEM撮影を行っていただきました。また独立行政法人奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏、大山幹成氏にはスギ・ヒノキ属についてご指導いただきました。心よりお礼申し上げます。

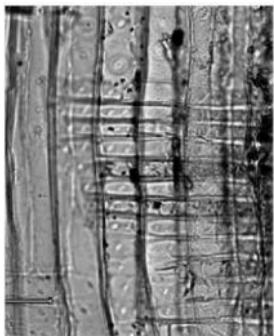
参考文献

- 山田昌久 1993『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史—植生史研究 特別第1号』
堀本真美子編 2001「樹種同定」「八王子遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 p.213-220.
堀真美子・中垣内薰・服部俊之 1993「自然科学分析データの活用 その1—花粉分析と樹種同定—」愛知県埋蔵文化財センター年報平成4年度 p.141-153.
矢頭誠一 1987『図説樹木学—針葉樹編』朝倉書院 p.189.

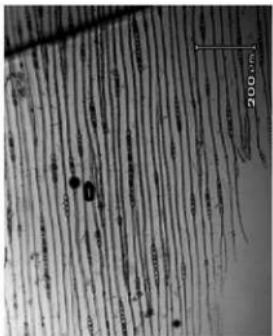
第17表 分析試料一覧



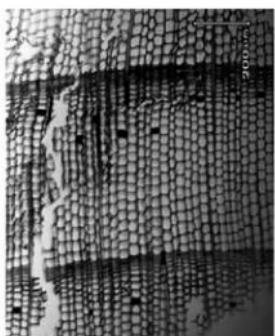
ヒノキ属 木口 SE88 上段



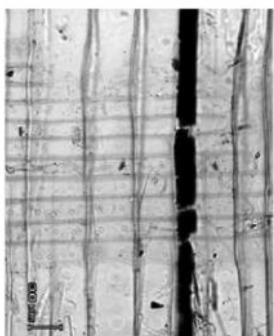
ヒノキ属 柱目 SE88 上段



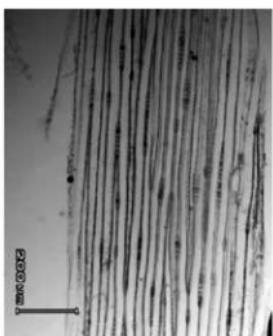
ヒノキ属 板目 SE88 上段



スギ 木口 SE31 栓木



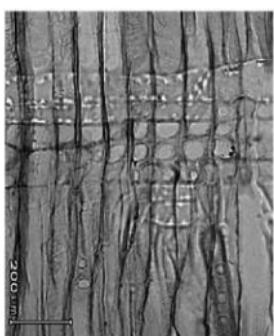
スギ 征目 SE31



スギ 板目 SE31



マツ属（複維管東亜属）木口
SE24 栓木



マツ属（複維管東亜属）板目
SE24 栓木

第237図 木材組織顕微鏡写真

第6節 矢作川沖積低地北部、郷上遺跡における古環境解析

鬼頭 剛・堀木真美子・上田恭子

1.はじめに

矢作川沖積低地北部、豊田市南部に位置する郷上遺跡において疊の解析および微化石分析を行なった。その結果のみを報告する。

2.試料および研究方法

97C区北壁トレーニングでは小チャネルを埋積する疊層が確認された。本疊層は16世紀～現世まで堆積したものと推定される。疊質堆積物について、50cm×50cmの方形枠内にかかる疊を奥行き50cmまで基質ごと採取した。ランダムに抽出した200個の疊をPettijohn(1975)に従い、長軸(a軸)・中軸(b軸)・短軸(c軸)の長さを測定した。併せて肉眼による疊種の分類、円磨度、衝撃痕の有無などの表面構造の観察を行なった。

微化石分析試料は、5世紀後半～平安時代初頭までの年代を示す97C区SD210および97A区SD210の大溝において採取した。なお、微化石分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに依頼した。分析方法を以下に記す。

珪藻分析は湿重7g前後を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理・自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。希釈後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。検鏡は光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、珪藻殻が半分以上残存するものを200個体以上同定・計数した。種の同定にはKrammer and Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)などを用いた。堆積環境の解析にあたって、汽水生種は小杉(1988)、淡水生種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性はAsai and Watanae(1995)の環境指標種を参考とした。

花粉分析は湿重約10g秤量し、水酸化カリウム処理・篩別・重液分離(臭化亜鉛・比重2.3)・フッ化水素酸処理・アセトリリス処理(無水酢酸:濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的処理を施して、花粉・胞子化石を分離・濃集した。残渣をゲリセリンで封入しプレパラートを作製後、光学顕微鏡下で走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行った。各種類の出現率は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基準とした百分率で算出した。

植物珪酸体は約5g秤量し、過酸化水素水・塩酸処理・超音波処理(70W、250kHz、1分間)・沈定法・重液分離法(ポリタングステイト・比重2.4)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集した。希釈後、カバーガラス上に滴下・乾燥させ、乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製した。400倍の光学顕微鏡下で全面走査し、出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、これらの珪酸体を包含する珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数した。

放射性炭素年代測定は試料をアルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、アセチレンに調整した後、ガス比例計数管法(GPC法)にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代値を算出した。¹⁴Cの半減期とし

て Libby の半減期 5568 年を使用した。歴年較正値の算出には Calib 3.0 を使用した。

3. 分析結果

(1) 縫径分布

理想的な縫の体積を梢円体と仮定し、縫の伸びている方向の両端を長軸 (a 軸)、長軸と直交して縫の表面を結ぶ線のうち最も長い線を中軸 (b 軸)、中軸に直角方向で長軸と直交する線のうち最も長い線を短軸 (c 軸) とした。それぞれの長さを長径・中径、短径とし、それらの積の 3 乗根 ($3\sqrt{a \cdot b \cdot c}$) を縫の径とした。径をファイ・スケール ($\phi = -\log 2d$) に換算し、全体の個数 (200 個) に占める割合 (個数%) で表わした。結果を第 238 図に示す。 $-4 \sim -5 \phi$ ($16 \sim 32$ mm) の中縫サイズが最も多く全体の 65% を占める。つぎに $-5 \sim -6 \phi$ ($32 \sim 64$ mm) の中縫サイズが 20.5%、 $-3 \sim -4 \phi$ ($8 \sim 16$ mm) の大縫サイズが 12.5% であった。 -3ϕ (8 mm) より小さいものと -6ϕ (64 mm) より大きいものは確認できなかった。

(2) 縫の形状分類

a 軸・b 軸・c 軸をもとに a 軸と b 軸の比 (b/a)、b 軸と c 軸の比 (c/b) を求め、Zingg (1935) の分類図上にプロットしたのが第 239 図である。全体にグラフ右上の領域に集中することから、球形に近いものから円盤状ないし棒状の形態を示す縫が多いことがわかる。

(3) 円磨度・表面構造

円磨度は Pettijohn (1975) の印象図をもとに肉眼で見比べながら 4 つのクラスに分類した。表面構造は衝撃痕の有無により 2 分した。結果を第 240・241 図に示す。円磨度では亜円縫が 43.0 %、円縫が 27.0%、亜角縫が 28.0% を占めた。角縫は少なく 2% であった。運搬・堆積過程の粒子どうしの衝突により縫の一部が欠けてしまうことがあるが、郷上遺跡では衝撃痕のないものが 65.5% と大半を占めた。

(4) 縫種構成

構成縫種を調べるために肉眼観察を行ない、個数頻度百分率で表わしたのが第 242 図である。花崗岩とチャートが全体の 74.0% とほとんどを占める。

遺構の微化石分析

97C 区 SD201

遺構を埋める堆積物は下位より 5 層に区分される。下位の 5 ~ 4 層 (標高 19.21 ~ 19.40 m) は黄褐色を呈する極粗粒砂～粗粒砂層からなる。3 ~ 1 層 (標高 19.40 ~ 20.46 m) は灰色を呈する粘土層と細縫との互層からなり、標高 19.74 ~ 19.90 m には細縫層が挟まる。下位より各層 1 試料の合計 5 試料を採取した。なお、同調査地点の深掘では標高 19.7 m に腐植質な黒褐色粘土層が確認され、含まれる植物遺体の ^{14}C 年代は 1440 ± 80 yrs BP (PLD-356) であった (第 18 表)。

調査区	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	層年代 (1σ)	コード No.
97A 区	17.7	中粒砂	植物遺体	1630 ± 80	交点年代値 AD 420 1σ 年代幅 AD 350 to 360 AD 370 to 540	PLD-355
97C 区	19.7	黒褐色腐植質粘土	植物遺体	1440 ± 80	交点年代値 AD 640 1σ 年代幅 AD 550 to 670	PLD-356

第 18 表 郷上遺跡における放射性炭素年代

a. 花粉分析

試料4以外は保存状態が悪く、検出個体数も少ない。試料4では比較的良好に花粉化石が検出され、木本花粉ではモミ属・マツ属が多産し、マキ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属などを伴う。草本花粉はイネ科・ヨモギ属などが検出されるものの出現率が低率であり、総花粉・胞子数に対して草本花粉の占める割合も極めて低い。

b. 植物珪酸体分析

試料5ではほとんど検出されず、試料3では機動細胞珪酸体の検出個体数が少ない。群集組成はタケ亞科が多産し、ヨシ属・ウシクサ族（コブナグサ属・ススキ属を含む）を伴う。また、試料1ではイネ属短細胞珪酸体が1個体のみ検出された。

c. 珪藻分析

検出された分類群数は25属99種で、完形殻の出現率は35～45%である。結果を第243図に示す。各試料について、試料5ではほとんど産出しない。試料4・3は全体的に貧塩不定性種が約90%、真・好アルカリ性種が約50%、流水不定性種が約50%を占める。優占する種はなく、*Gomphonema clevei*等の流水性種、*Cocconeis placentula*等の流水不定性種、*Aulacoseira ambigua*等の止水性種など様々な生態性の種が低率で産出する。試料2・1では全体的に貧塩不定性種が約90%、真・好アルカリ性種が約60%、流水不定性種が約50%を占める。また、乾燥に耐性のある陸生珪藻が約35%を占め、特に乾燥に耐性のある陸生珪藻A群（伊藤・堀内、1991）・汚濁した水域で生育する好汚濁性種（Asai, K. and Watanabe, T., 1995）の*Navicula mutica*が20～35%と多産する。その他は、真流水性種・上流性河川指標種（安藤、1990）の*Gomphonema sumatrense*が10%前後の割合で産出する。

97A区 SD201

遺構を埋める堆積物は下位より5層に区分される。下位の5～4層（標高19.71～20.21m）は灰色を呈するシルト層からなり、3～1層（標高20.21～21.30m）は中粒砂の混じる黄褐色～黄灰色のシルト層である。試料は5層で2試料（試料8・7）、4層で3試料（試料6～4）、3～1層で各層1試料の合計8試料を採取した。なお、本地点の深掘において標高17.71～19.71mに粗粒砂～中粒砂層を確認し、標高17.7mで採取した植物片の¹⁴C年代は1630±80 yrs BP(PLD-355)であった（第18表）。

a. 花粉分析

花粉・シダ類胞子の保存状態は悪く、表面に風化の痕跡がみられるものがほとんどである。

b. 植物珪酸体分析

各試料から植物珪酸体が検出されるが、概して保存状態が悪い。各試料ではタケ亞科の産出がめだち、ヨシ属やウシクサ族、イチゴツナギ亞科などが認められる（第244図）。なお、栽培植物のイネ属も認められ、試料3より上位で増加する。また、イネ属の初穀に形成される顆粒酸体や短細胞列などの珪化組織片も検出される。

c. 珪藻分析

各試料で200個体以上を産出し、検出される分類群数は27属139種である。試料8～4は

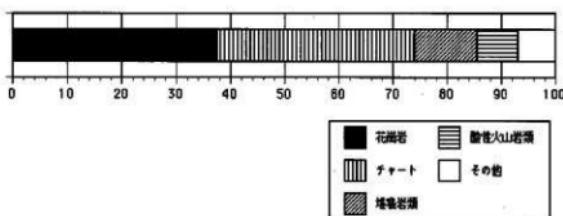
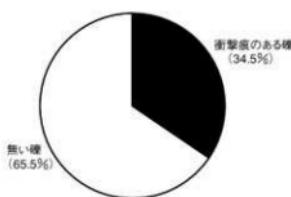
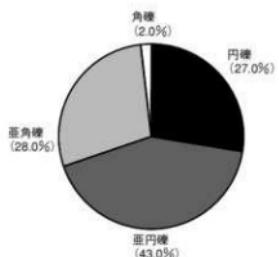
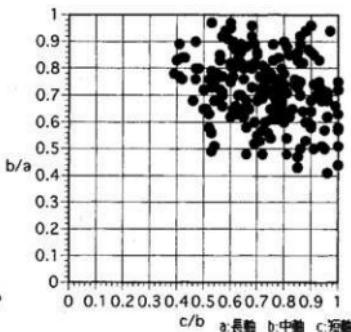
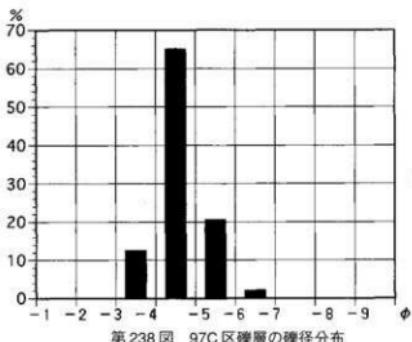
全体的に貧塩不定性種が約90%、真・好アルカリ性種が60~70%、流水不定性種が50~65%を占める。完形殻の出現率は50~65%である。また、流水不定性種の *Cocconeis placentula* が20~40%と多産する。試料3~1は全体的に貧塩不定性種が約90%、真+好アルカリ性種が50~60%、流水不定性種が65~90%を占め、完形殻の出現率は約35%である。また、乾燥に耐性のある陸生珪藻が試料3で約35%、試料2・1で約85%と多産する。特に乾燥に耐性のある陸生珪藻A群（伊藤・堀内、1991）の *Hantzschia amphioxys* が試料2・1で10~20%、陸生珪藻A群・汚濁した水域で生育する好汚濁性種（Asai and Watanabe, 1995）の *Navicula mutica* が試料3で15%、試料番号2・1で25~30%と多産する（第245図）。

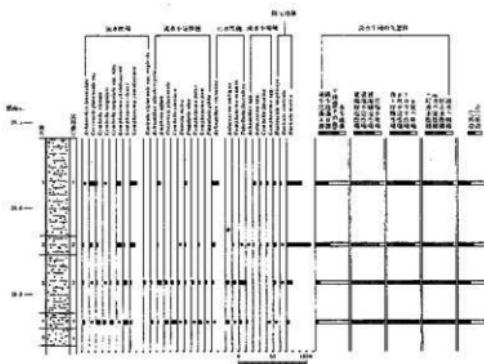
謝辞

本論を作成するにあたり、元愛知県埋蔵文化財センター調査研究補助員の尾崎和美氏には試料採取をお手伝いいただいた。愛知県埋蔵文化財センター整理補助員の宇佐美美幸氏、田中和子氏、山田有美子氏には縦横計測を、服部恵子氏、服部久美子氏・村上志穂子氏にはデータの入力をお手伝いいただいた。以上の方々に記してお礼申し上げます。

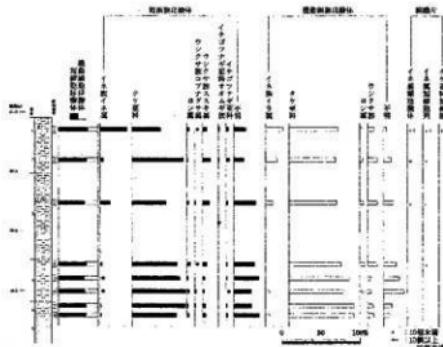
参考文献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88.
Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa, Diatom, 10, 35-47.
Fork, R.L. and Ward, W., 1957, Brazons river bar; a study in the significance of grain size parameters, J.Sed.Petrol., 27, 3-26.
伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 珪藻学会誌, 6, 23-45.
近藤鍊三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, 31-64.
小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 第四紀研究, 27, 1-20.
Krammer, K & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae, Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae, Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae, Teil 4, Achanthaceae, Kritsche Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
Pettijohn, F. J., 1975, Sedimentary Rocks(3rd ed), Harper & Row, New York.
Zingg, Th., 1935, Beiträge zur Schotteranalysen, Min., Petrog., Mitt., Schweiz., 15, 39-140.

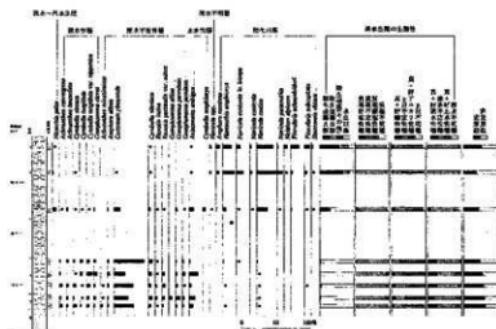




第243図 97C区 SD201の珪藻化石群集



第244図 97A区 SD201の植物珪酸体化石群集



第245図 97A区 SD201の珪酸化石群集

第5章 まとめ

今回の調査では、古墳時代から江戸時代にかけての遺構及び遺物が検出された。これらの資料の整理を通じて、遺跡や資料の性格に関して今後若干の課題が残ると考えられる。

1. 古墳時代・古代

本遺跡は矢作川右岸の沖積低地上に立地する。従来農田地域では洪積台地上あるいは丘陵、山地部での発掘調査が主体であり、沖積低地の遺跡はほとんど調査の対象とはならなかった。現在、矢作川は天井川化しており、人工的な堤防によらないかぎり集落や耕作地として機能することは難しい状況にある。しかし、このような状態になったのは近世の後半以降であり、それ以前においてはこの地域の矢作川の沖積低地は安定していて、集落を長期にわたって存続させることができたと考えられる。本遺跡では古墳時代から古代の集落址が検出された。古墳時代後半から集落は本格的に形成され、奈良時代にはより広い範囲に展開し、一部では平安時代前半まで存続することが認められる。これまで矢作川の段丘上のみの調査でこれらの時期の集落の動態を考えてきたが、沖積低地の集落の存在をも視野にいれて考える必要がある。また、98C区では古墳時代の埴輪片が出土しているが、再堆積による摩耗が認められず、古墳の周溝と推定することも可能な溝も確認されている。古墳のあり方を示す新しい知見と考えられる。

2. 中世・近世

調査前の遺跡台帳上では弥生時代の包含層が今回の調査範囲外に存在することが認識されている。しかし、地域に残されている文書や地域史の研究から江戸時代前半まではこの区域に旧鶯鶯集落が存在し、現在の台地上の集落はそれが移動してきたことがわかつており、地域でもそのことは理解されていた。近世の集落遺跡が存在することが推測されるべきであったが、調査が本格的に始まるまでそのような認識は無かった。近世まで沖積低地上に集落が存在し、江戸時代中期に頻発した大規模な洪水を避けるため18世紀以降、集落が台地上に移動してきた事例は矢作川流域では広範に認められ、一般的な現象である。本遺跡のように耕地化されてしまい近世までの集落の存在を推定できない部分がこの地域には数多くあるものと考えられる。また、洪積台地上の遺跡は比較的の調査がなされるが、沖積地上の遺跡はあまり調査が行き届かないという事情もあり、各種文書等で遺跡の存在が予想する事が可能でありながら、遺跡としての認定がなされない集落があるものと考えられる。の中にはまったく遺跡としての認識のがないまま開発によって消滅していくものがあると推測される。本調査の結果が、この時期の集落址のそのような状況を変えるための遺跡報告の事例になれば幸いである。

出土した遺物の大部分は中世から近世前半の時期に属する。中世に集落が成立し、中世末期15世紀中葉に溝によって区画される屋敷地で構成される大規模な集落が全域に展開する。中世の集落域はそのままその後の集落域と重なる。このため、柱穴などの多数の遺構が密集して切りあい、掘立柱建物等を認定し時期を特定することは大部分困難であった。15世紀中葉以降の区画溝は存続期間中に掘り返しが頻繁に繰り返されており、なおかつ新しい時期のものはほど大規模になるためかなりの部分古い時期の溝を削平している状況にある。13~14世紀代の井戸がほぼ調査区の全域で検出され、遺物が多量に出土しながらこの時期の溝は検出されてい

ない。該期の遺物が区画溝から相当量出土することから戦国時代以降に完全に掘り返されているとも考えられるが、推測の域に留まる。この時期の遺物のみを出土する柱穴と考えられる小土坑は多数検出されるが、該期の遺構と認定するのは困難であり、建物等を提示することはできなかった。近世の掘立柱建物は、比較的大規模で切り合いの明確なものについて少數ながら確定できた。このような状況で検出された遺構の調査方法、及び遺構の認定方法については今後の課題となる。

また、中・近世の遺構のあり方からこの時期の遺物はより新しい遺構に含まれた状況で検出される。遺物の大部分を出土した屋敷地の区画溝については、極端な例では集落の最末期の18世紀の溝に中世末の15世紀中葉から18世紀までの各時期の遺物が量的にあまり格差のない状況で検出された。一部を除いて区画溝は幅広い時期差のあるものを含み、特定の時期の遺物を純粋に出土するものはわずかしか存在しなかった。このため最終的な掘り返しの時期だけではなく、区画溝の埋土に含まれる各時期の遺物を区画単位で提示した。より詳細に検討すれば、溝単位に細かい遺物の編年関係、及び溝の変遷を示すことが可能かと考えられるが、今回の報告ではなしえなかった。今後の資料整理や同様な遺跡の調査を通じて検討すべき問題と考える。

(酒井俊彦)

図 版

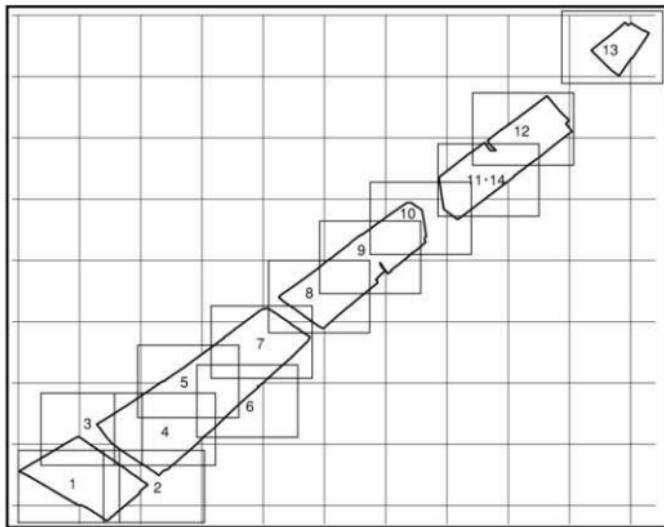
遺構図版(1/200)

1 ~ 14

(14 97A 区下面)

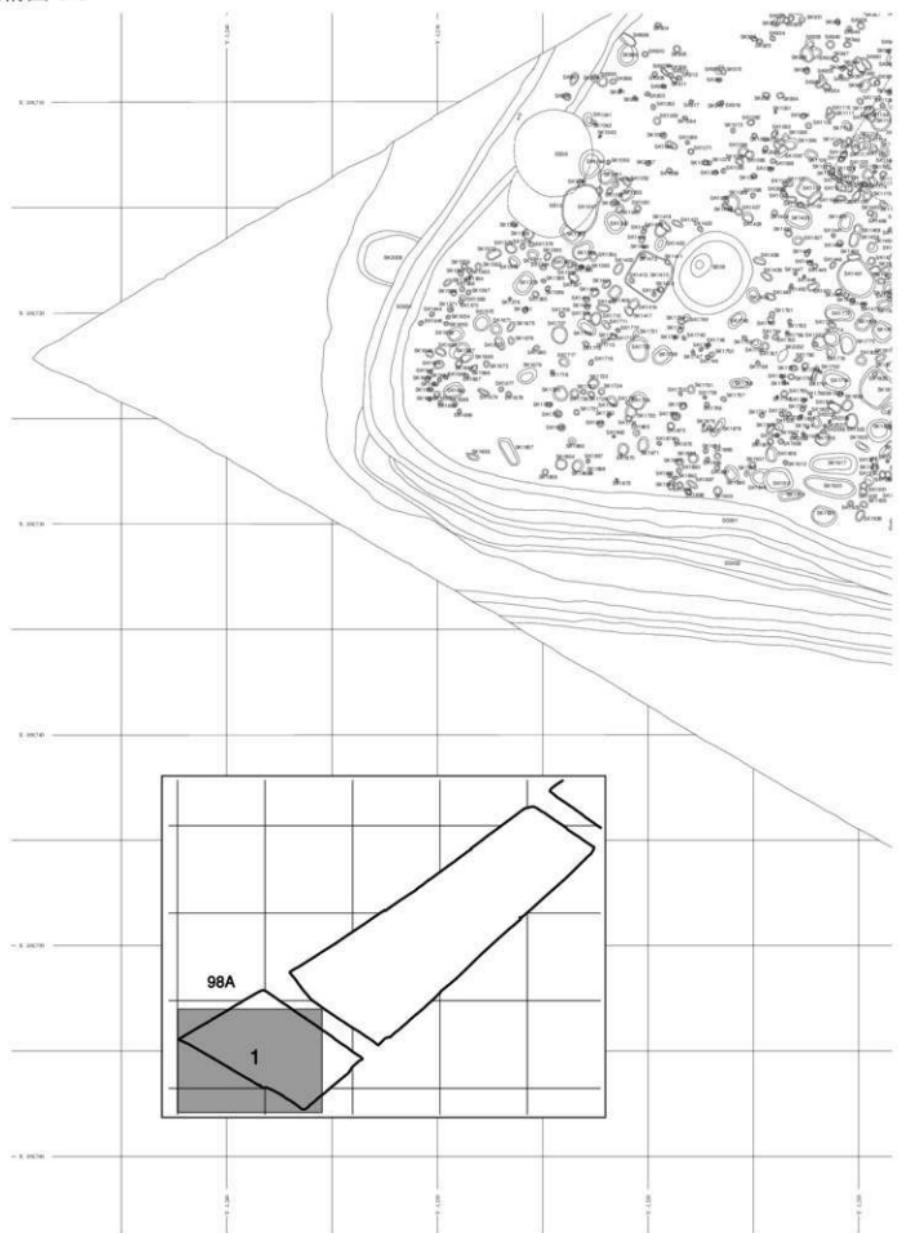
写真図版

PL1 ~ 60



遺構図版割付け図

遺構図 1-1



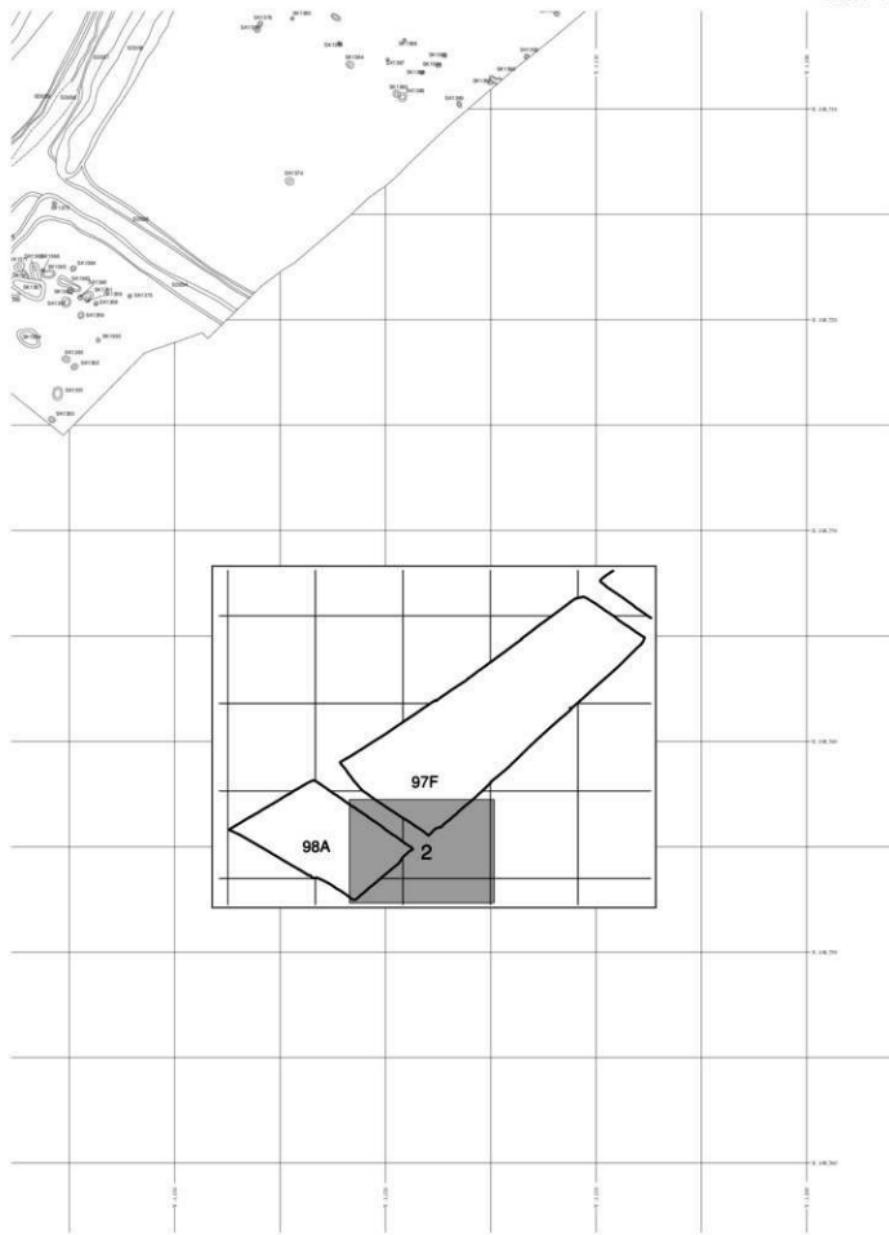
遺構図 1-2



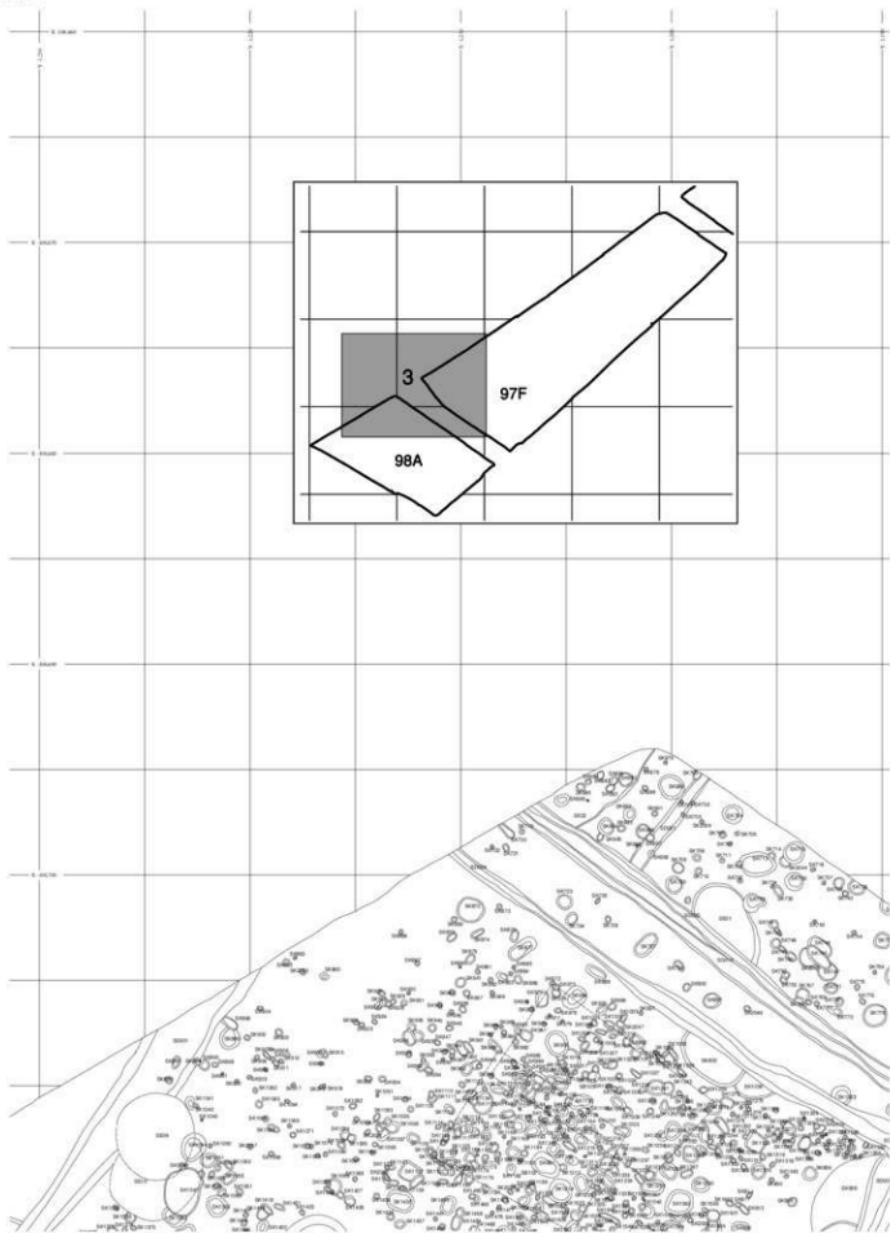
遺構図 2-1



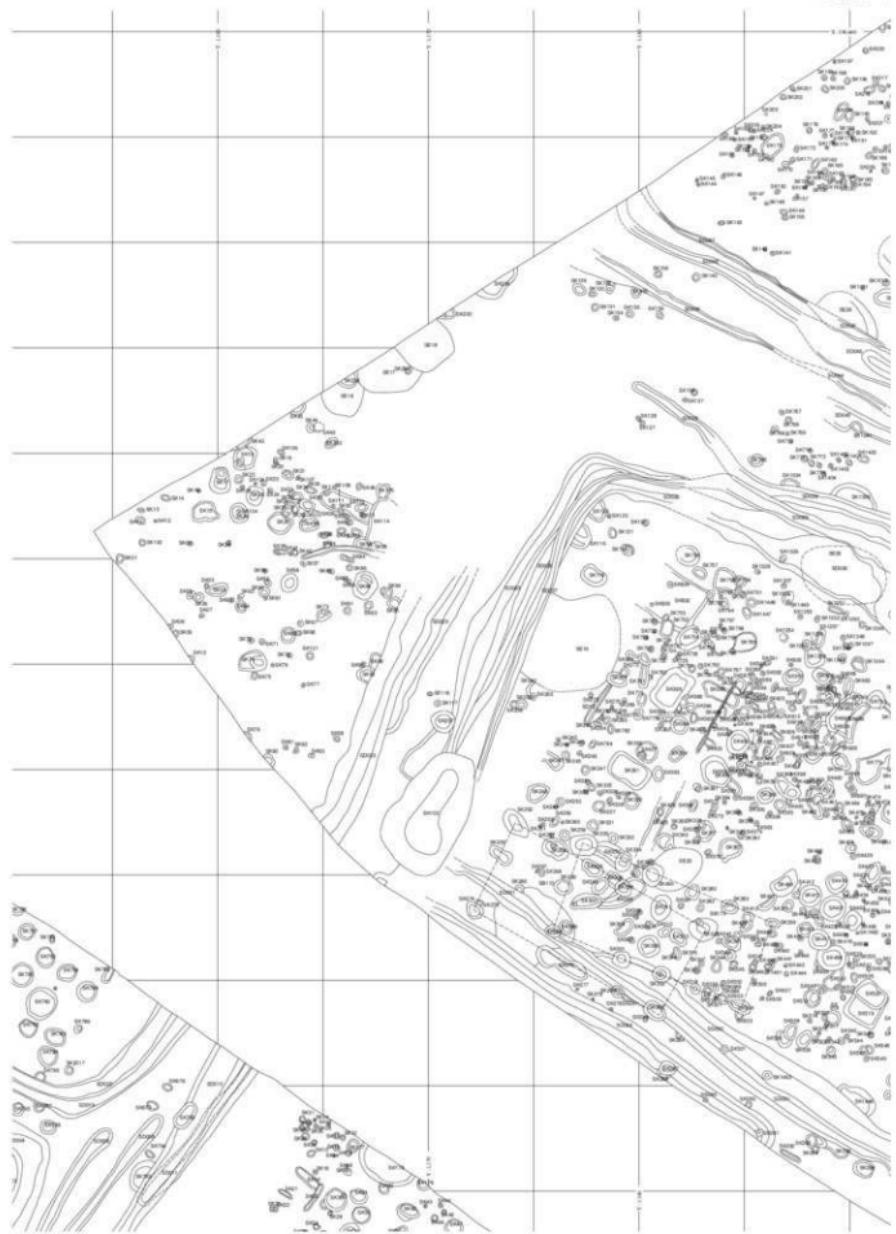
遺構図 2-2



遺構図 3-1



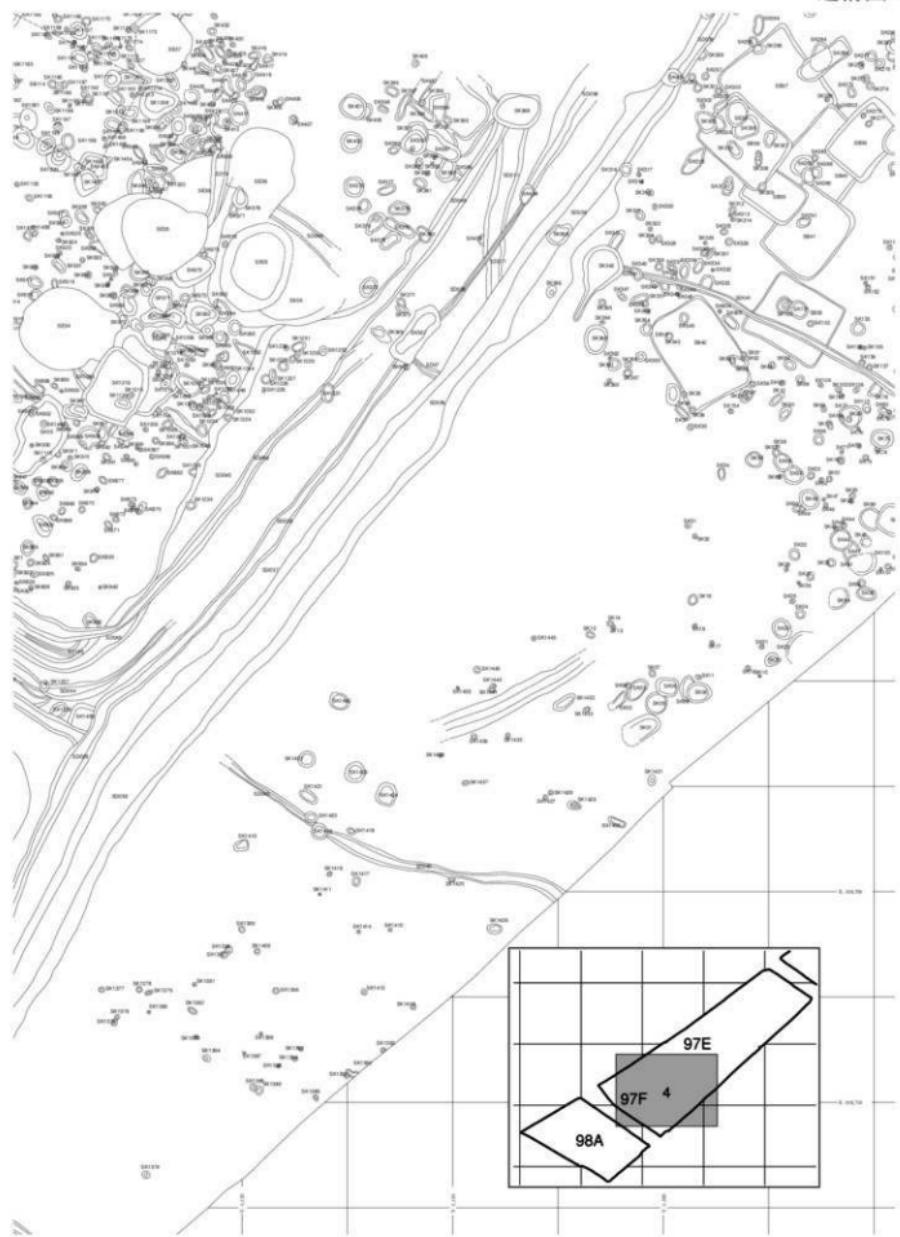
遺構図 3-2



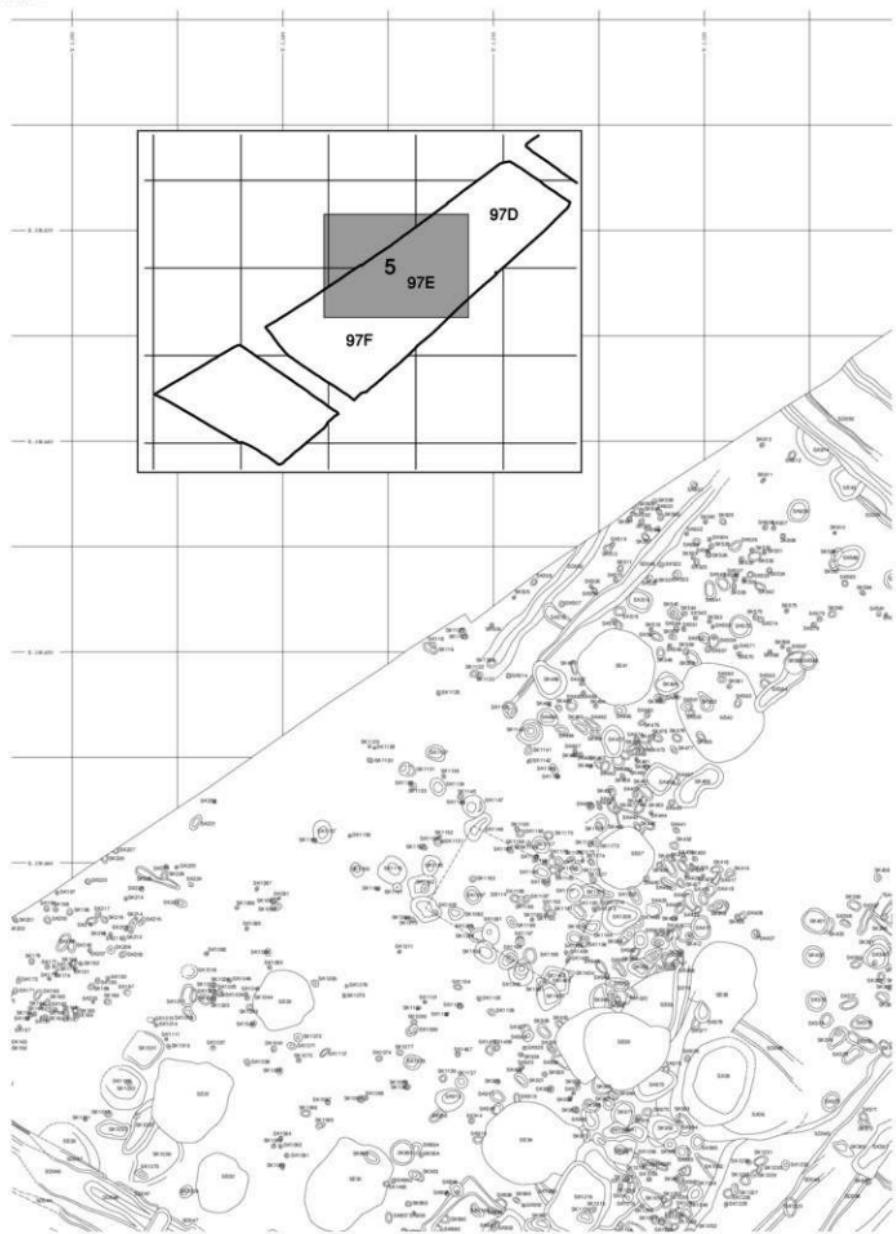
遺構図 4-1



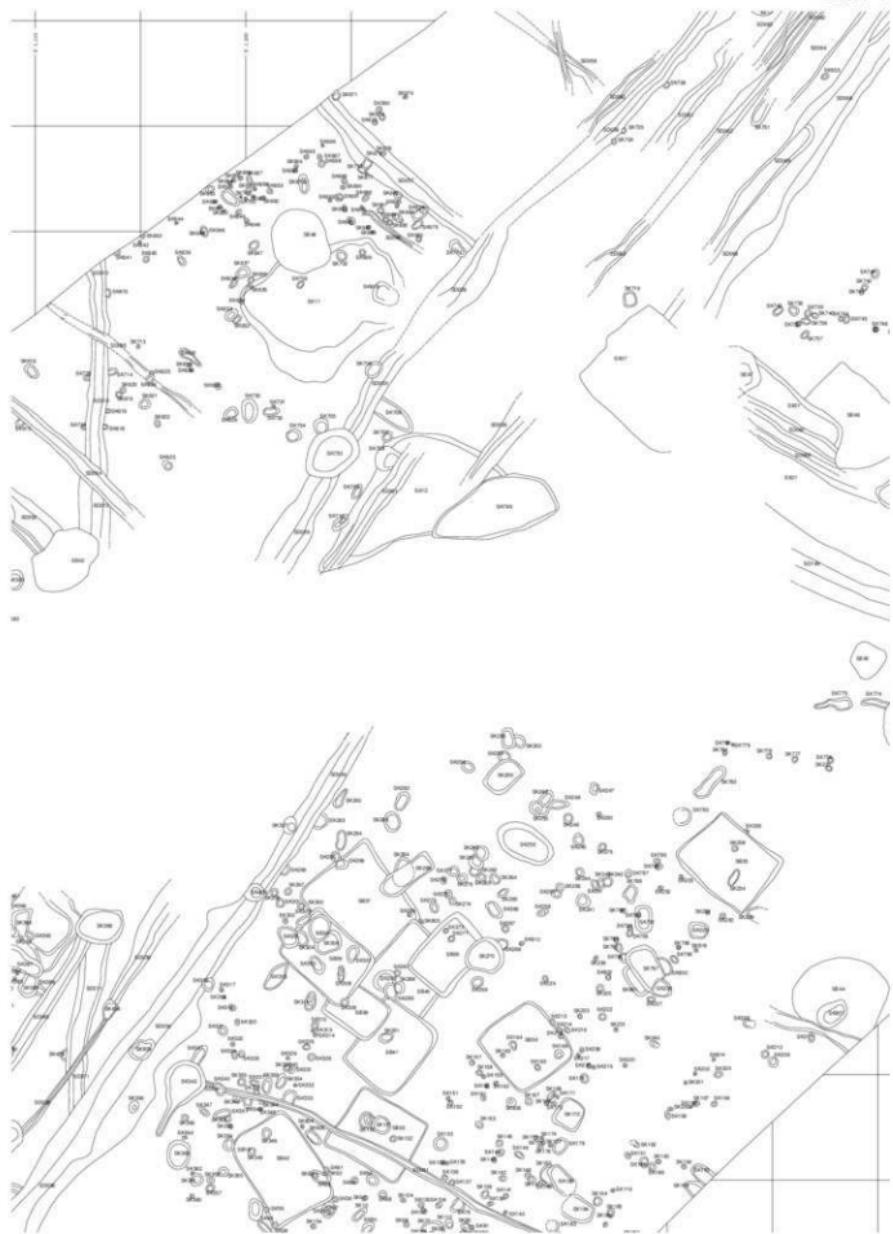
遺構図 4-2



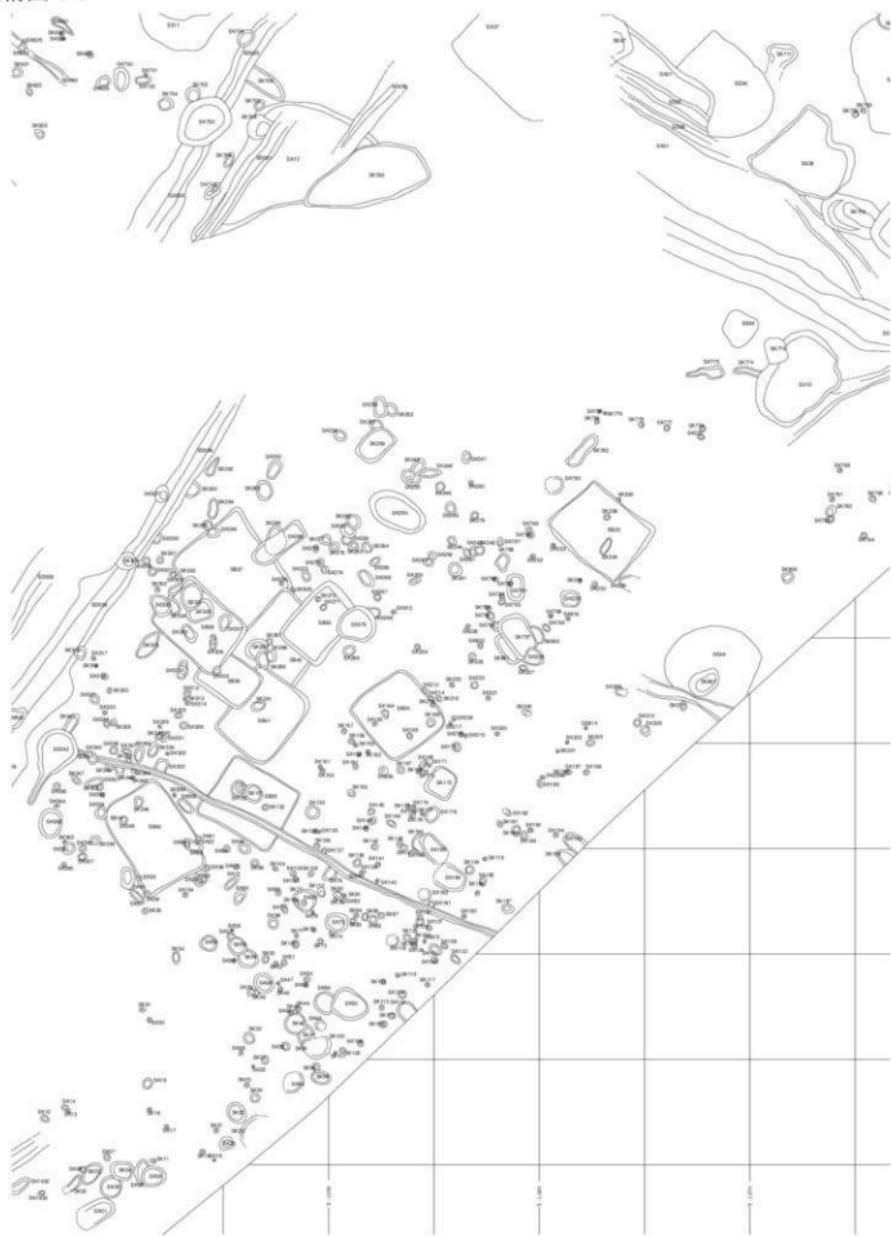
遺構図 5-1



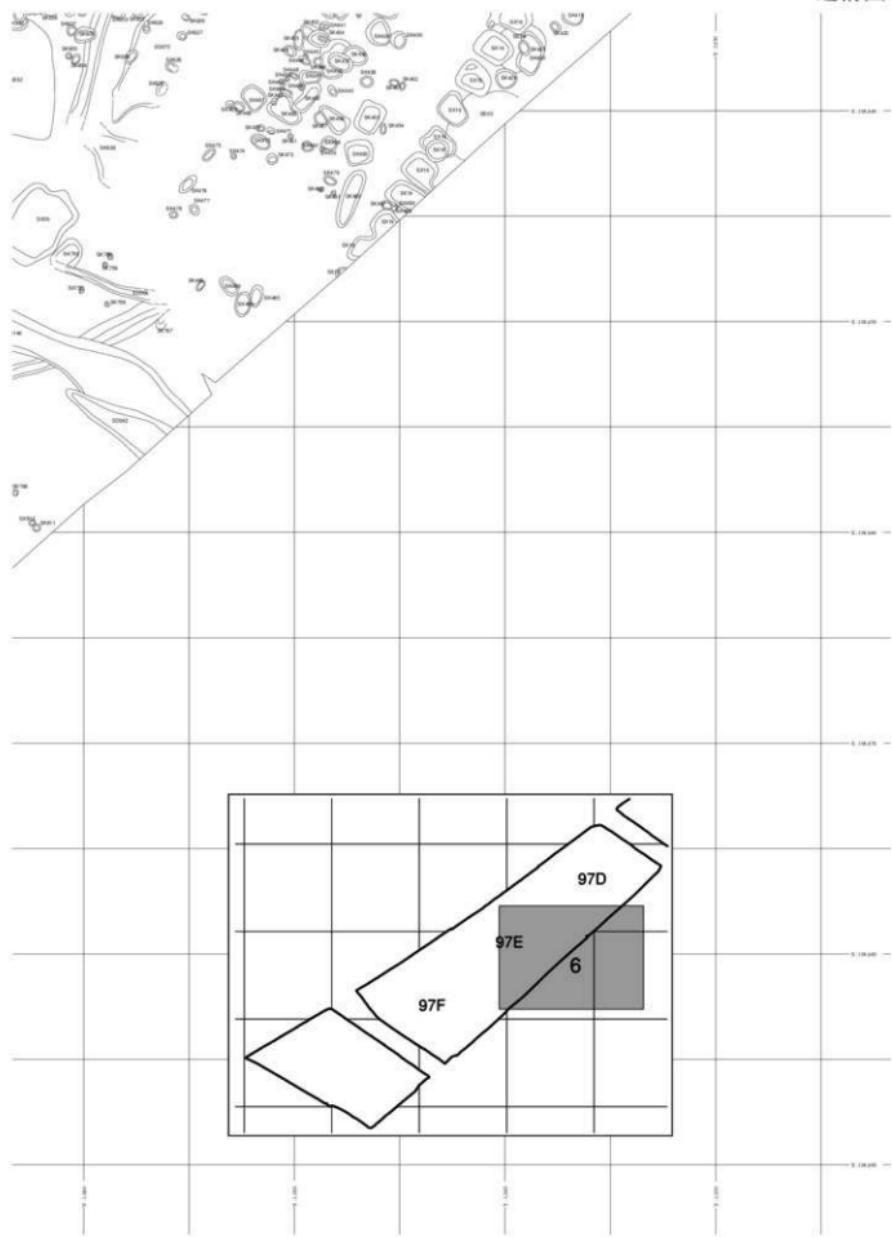
遺構図 5-2



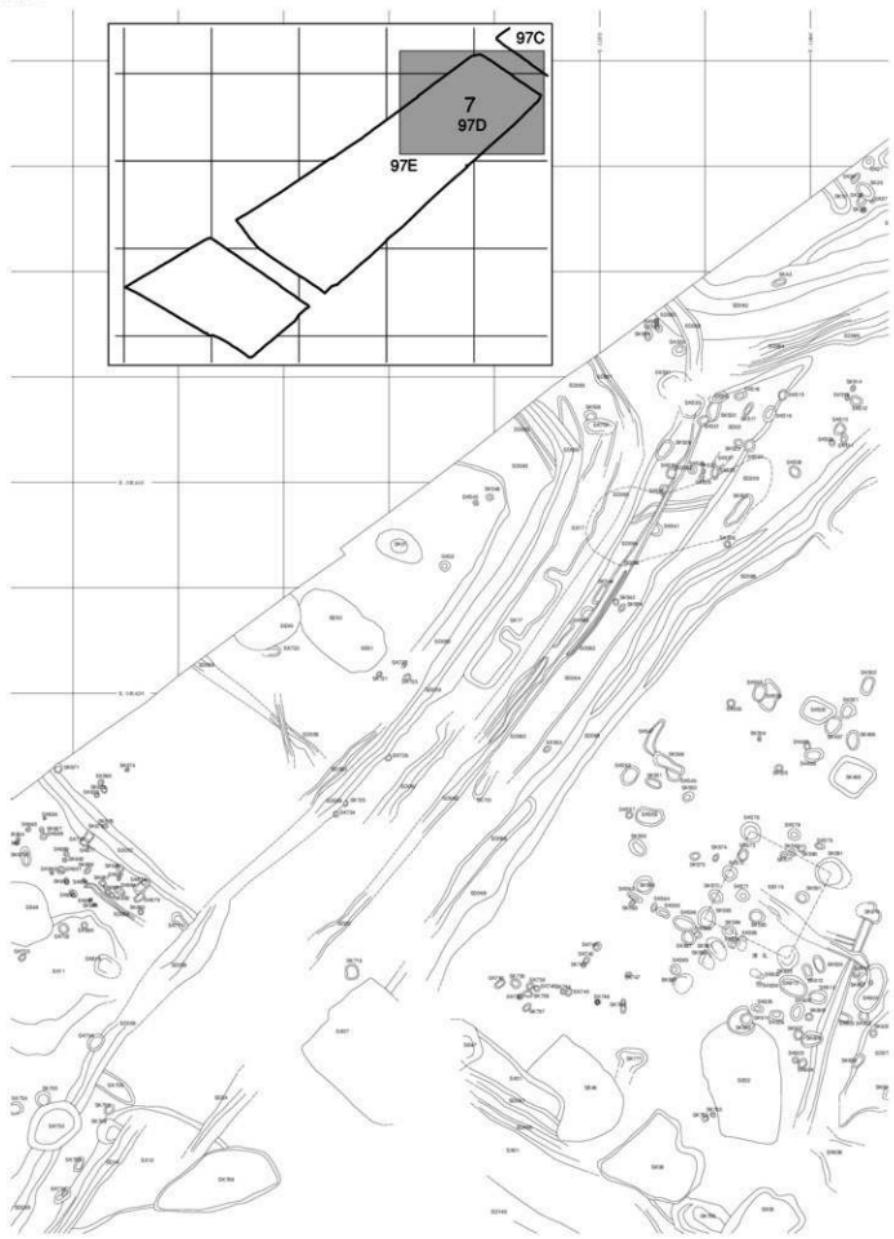
遺構図 6-1



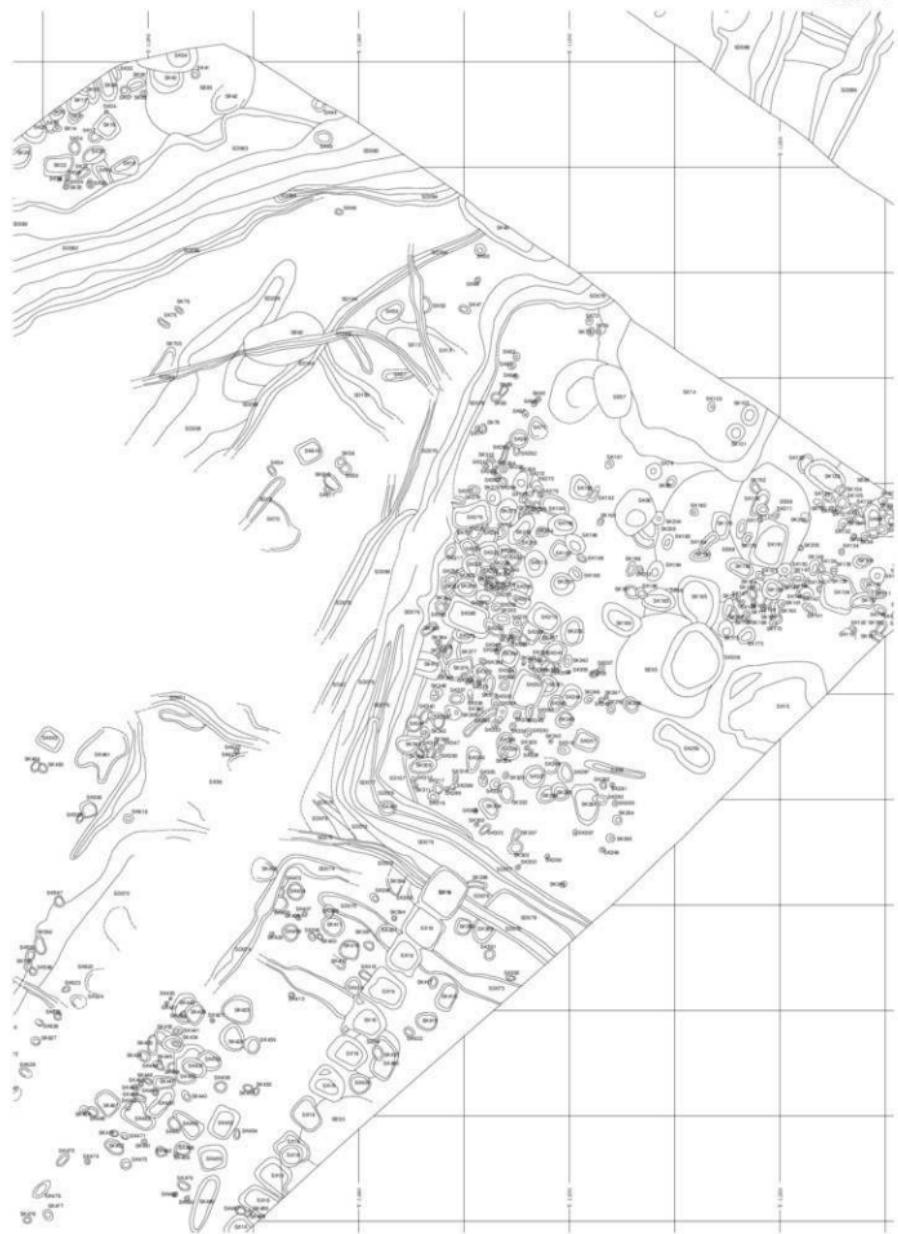
遺構図 6-2



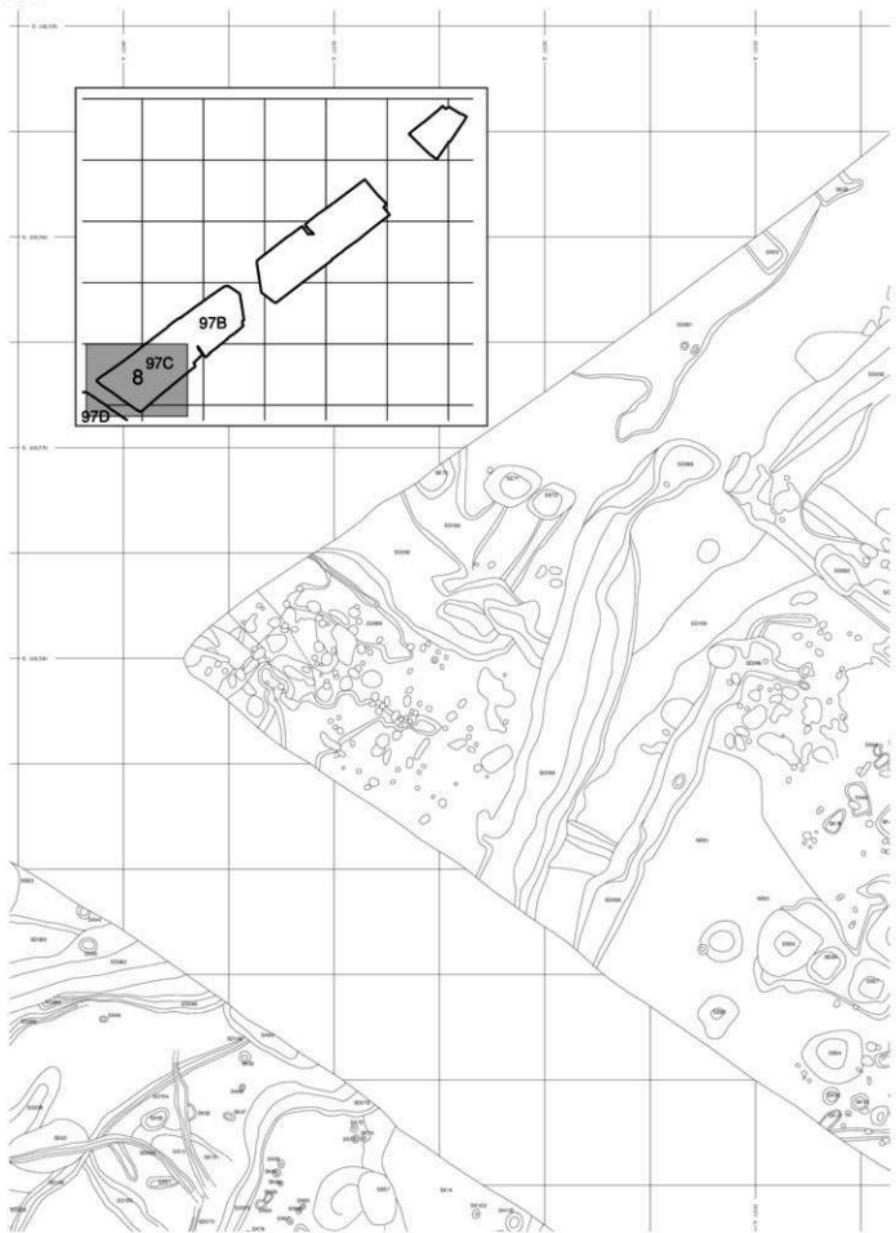
遺構図 7-1



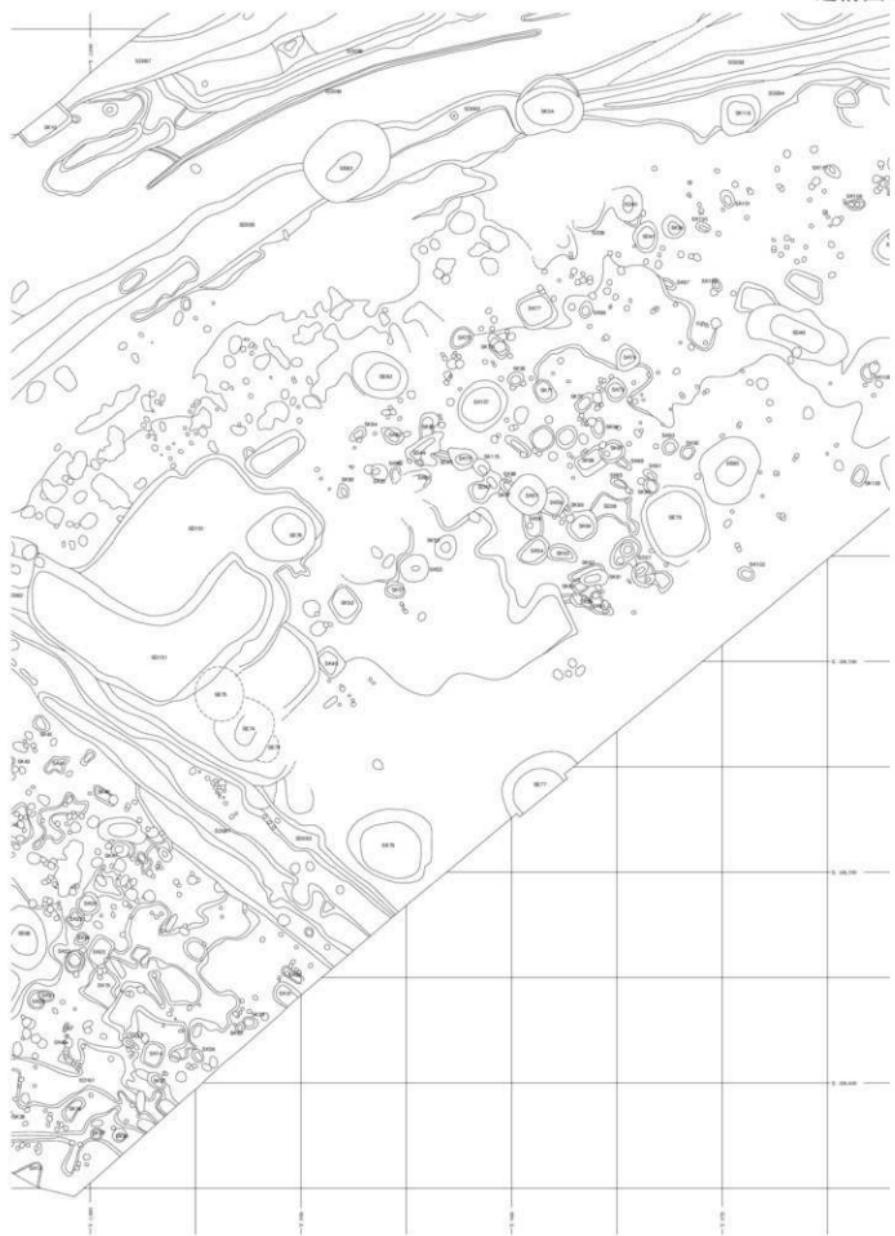
遺構図 7-2



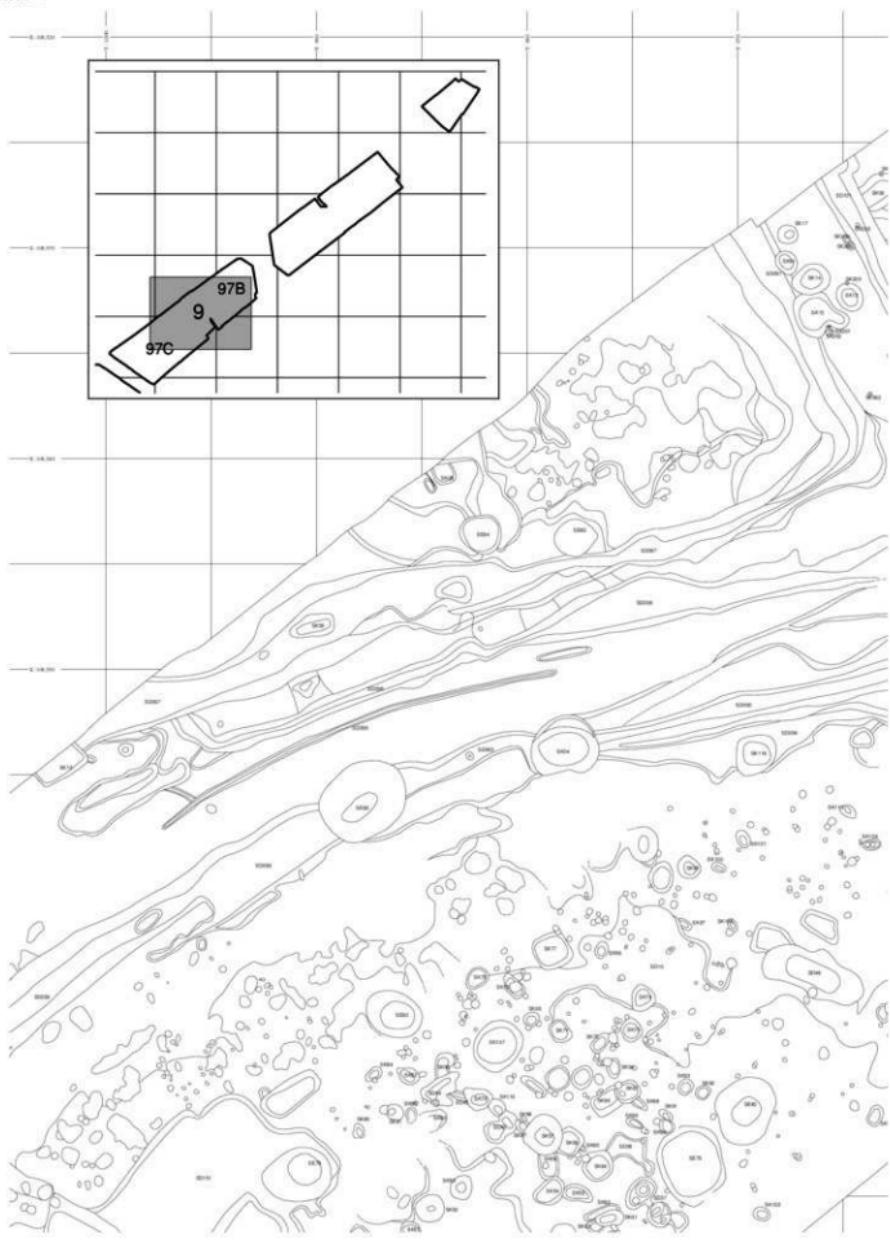
遺構図 8-1



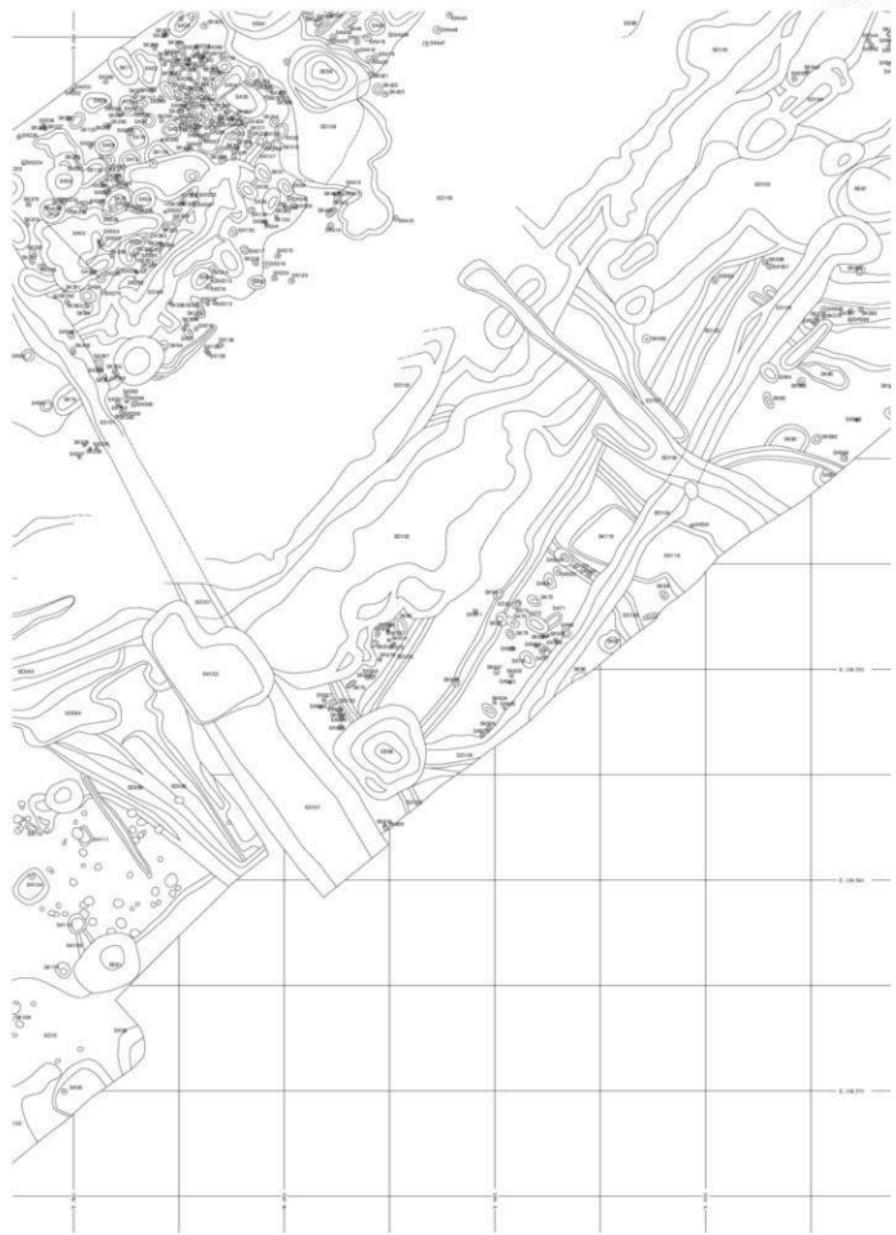
遺構図 8-2



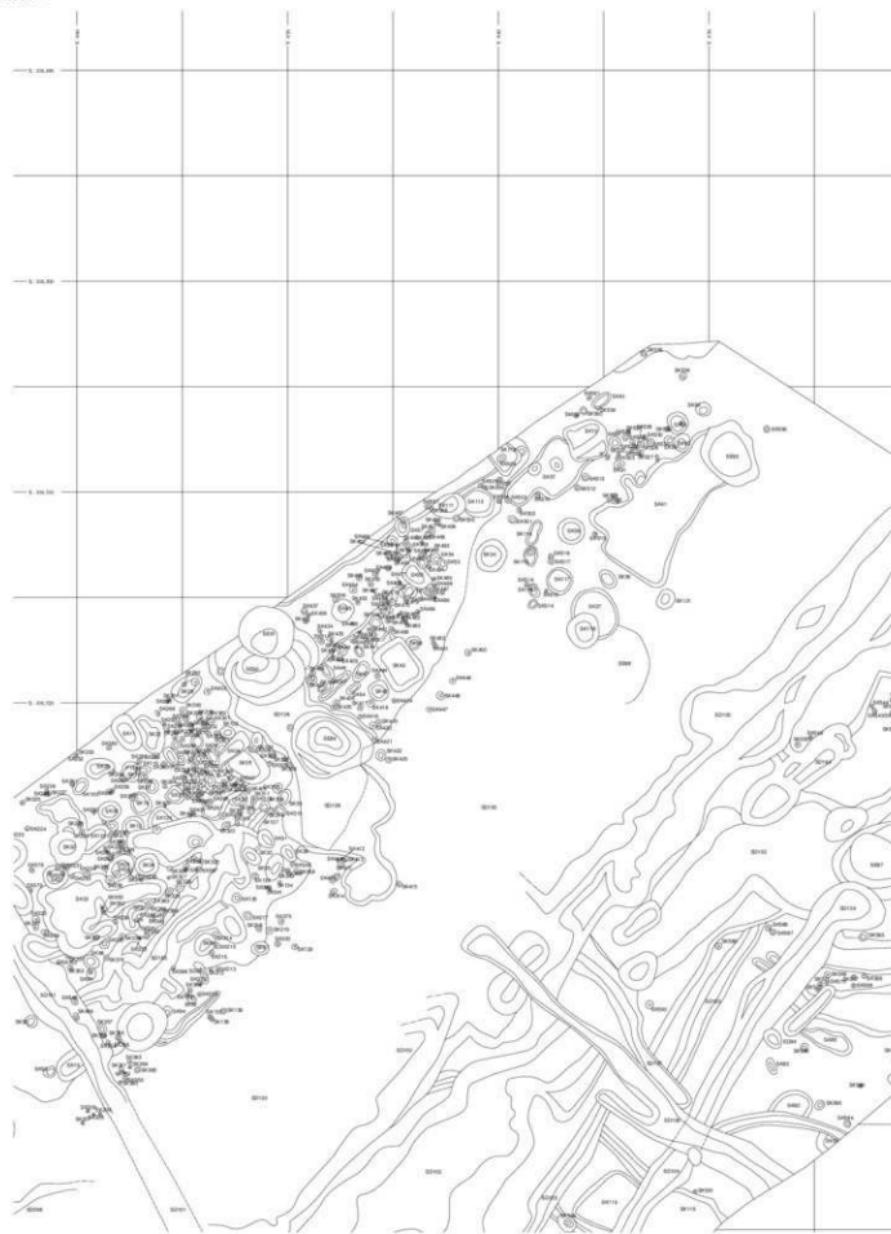
遺構図 9-1



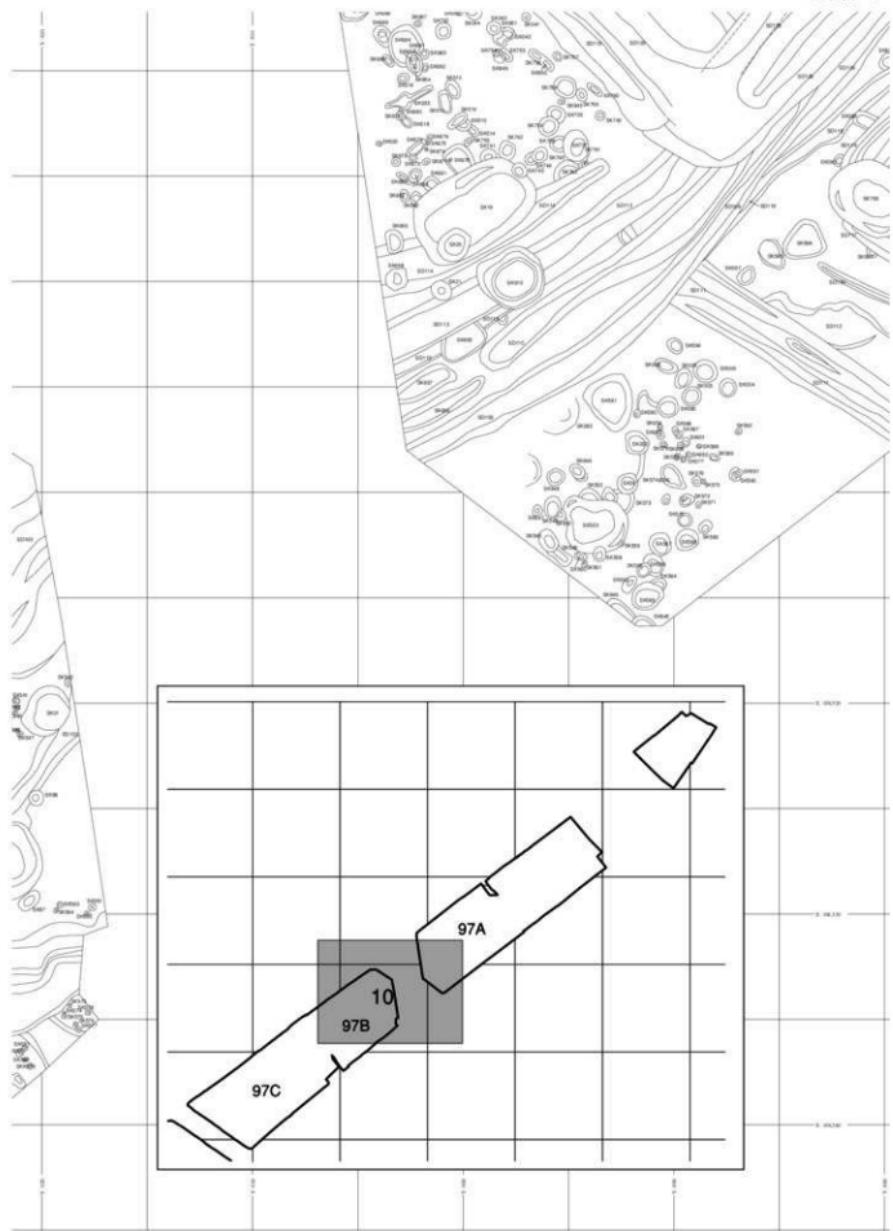
遺構図 9-2



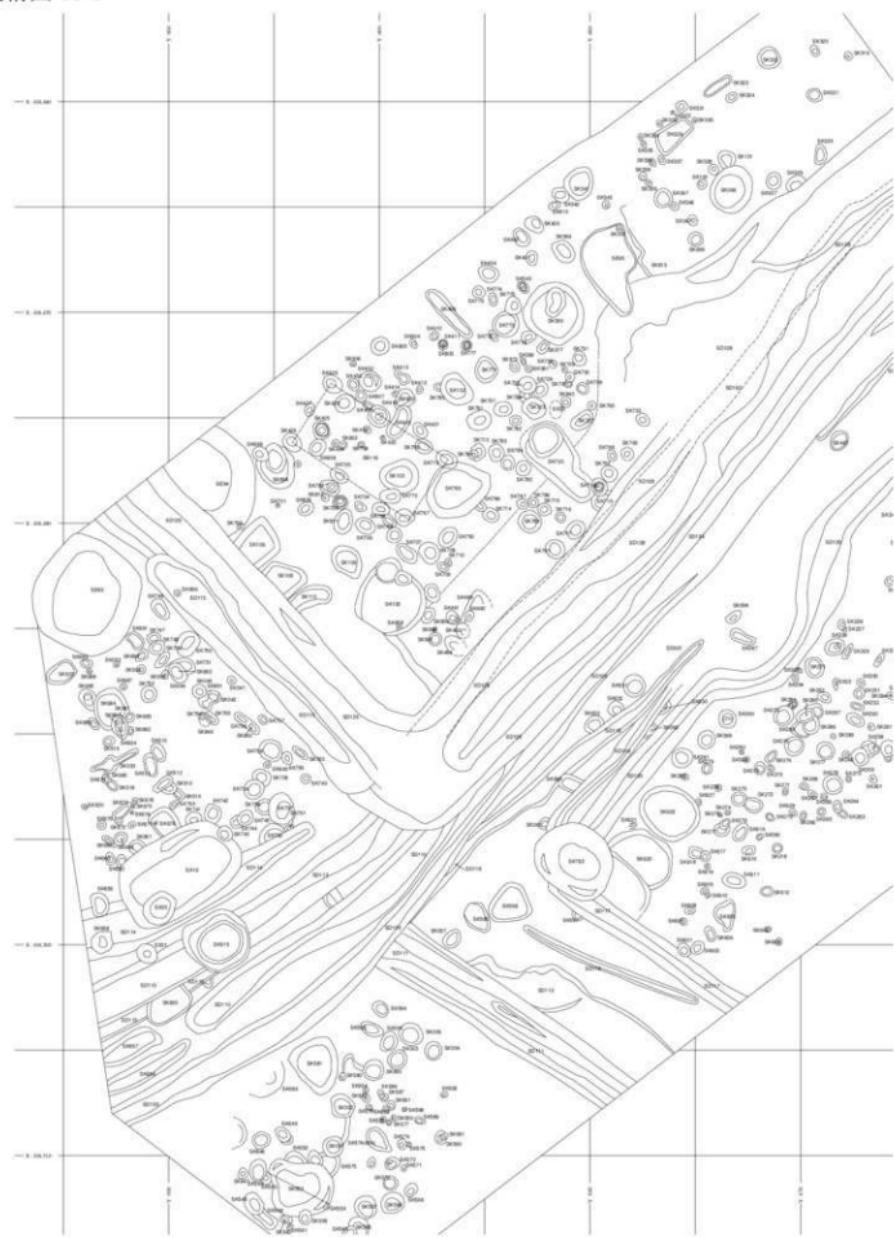
遺構図 10-1



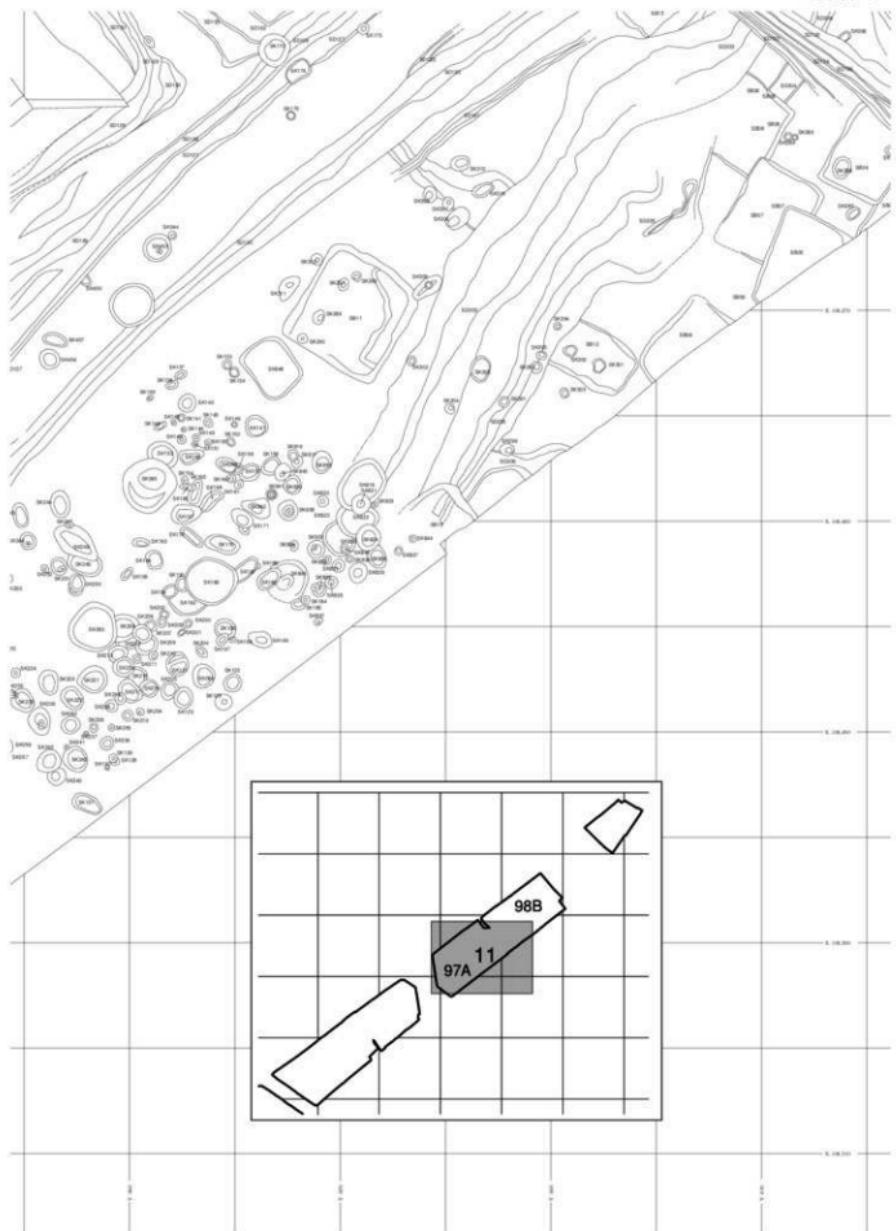
遺構図 10-2



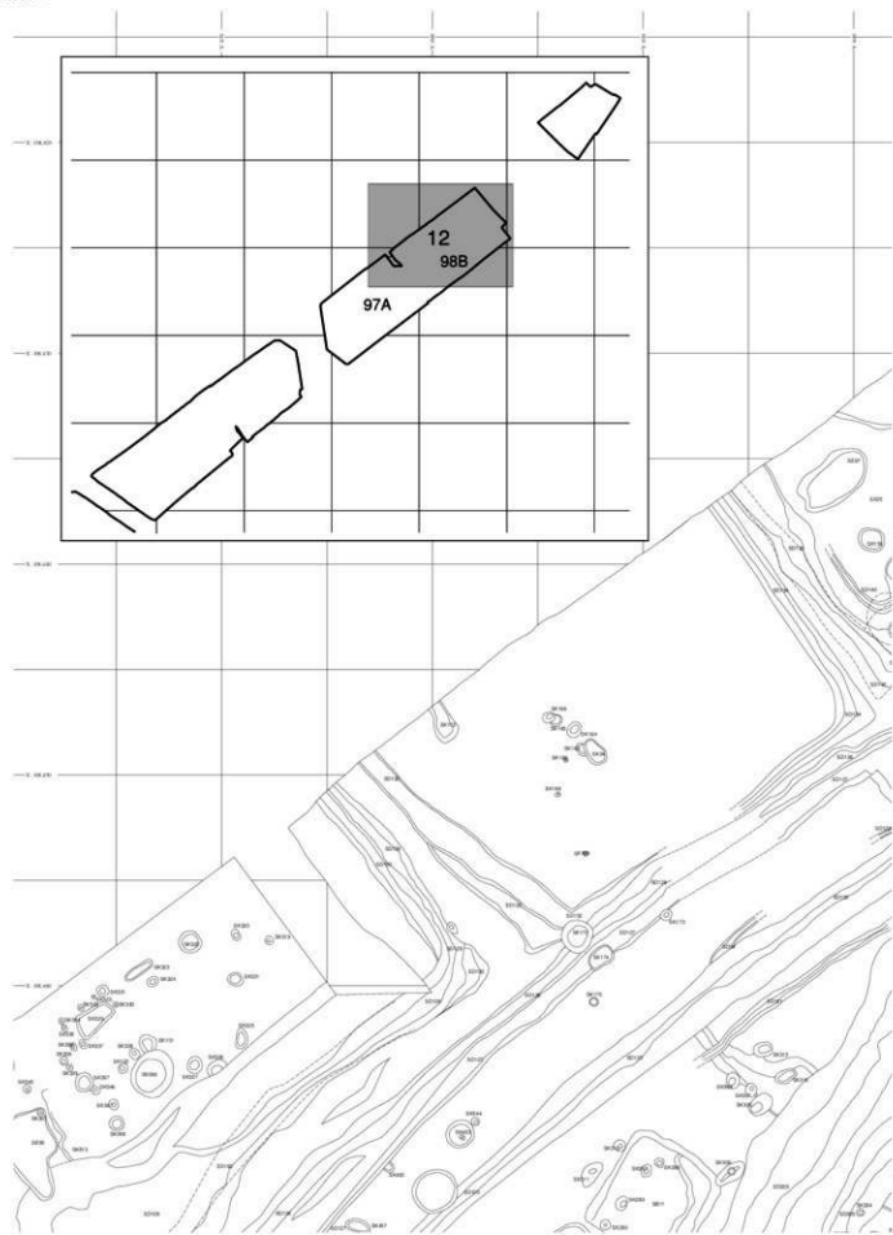
遺構図 11-1



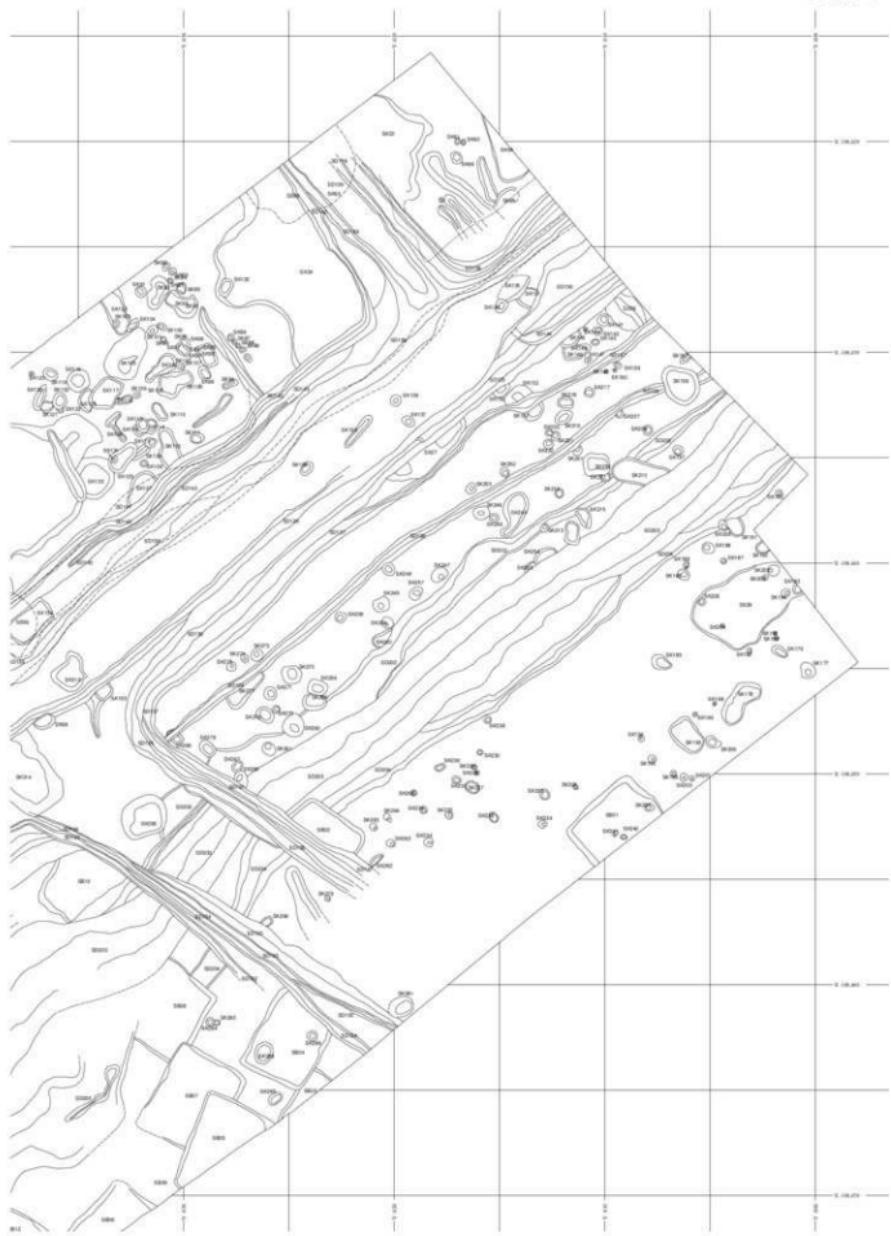
遺構図 11-2



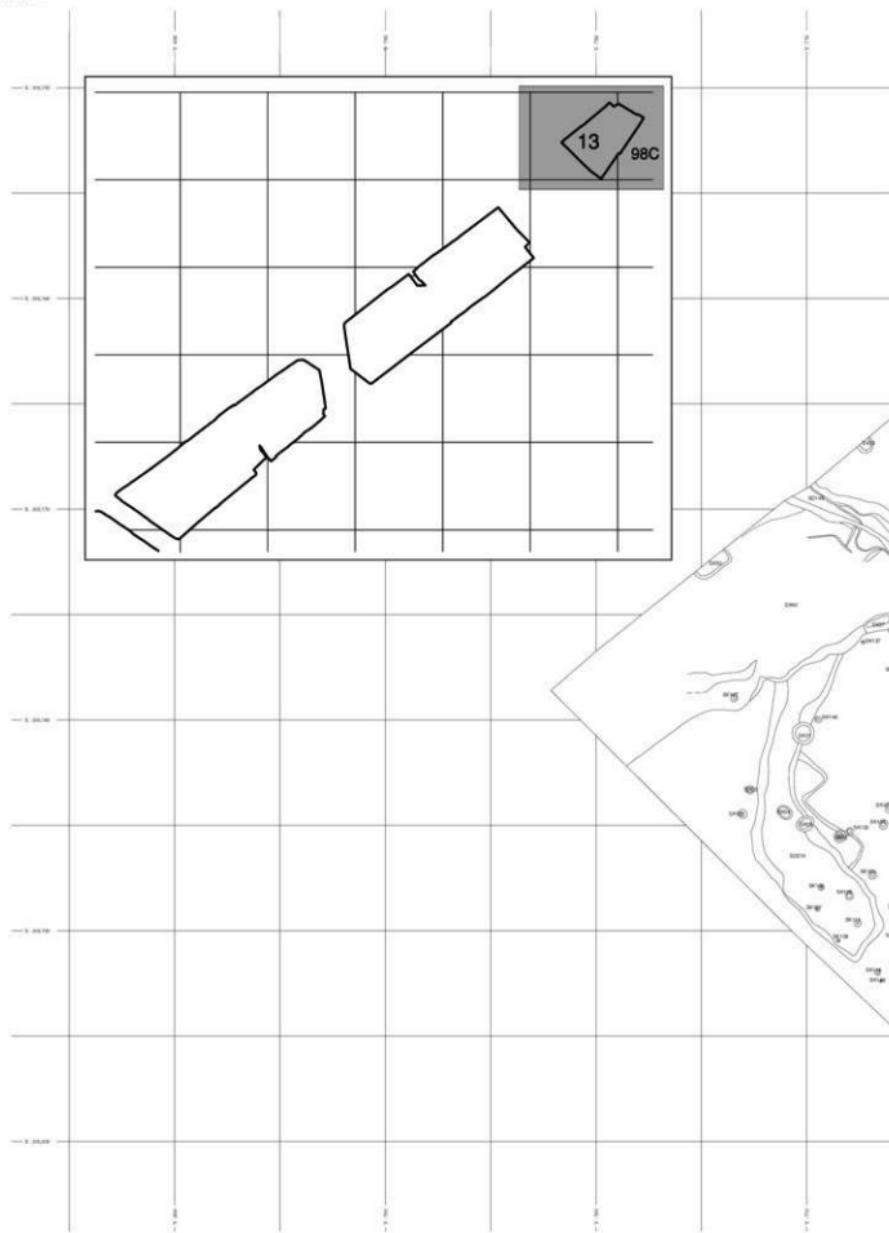
遺構図 12-1



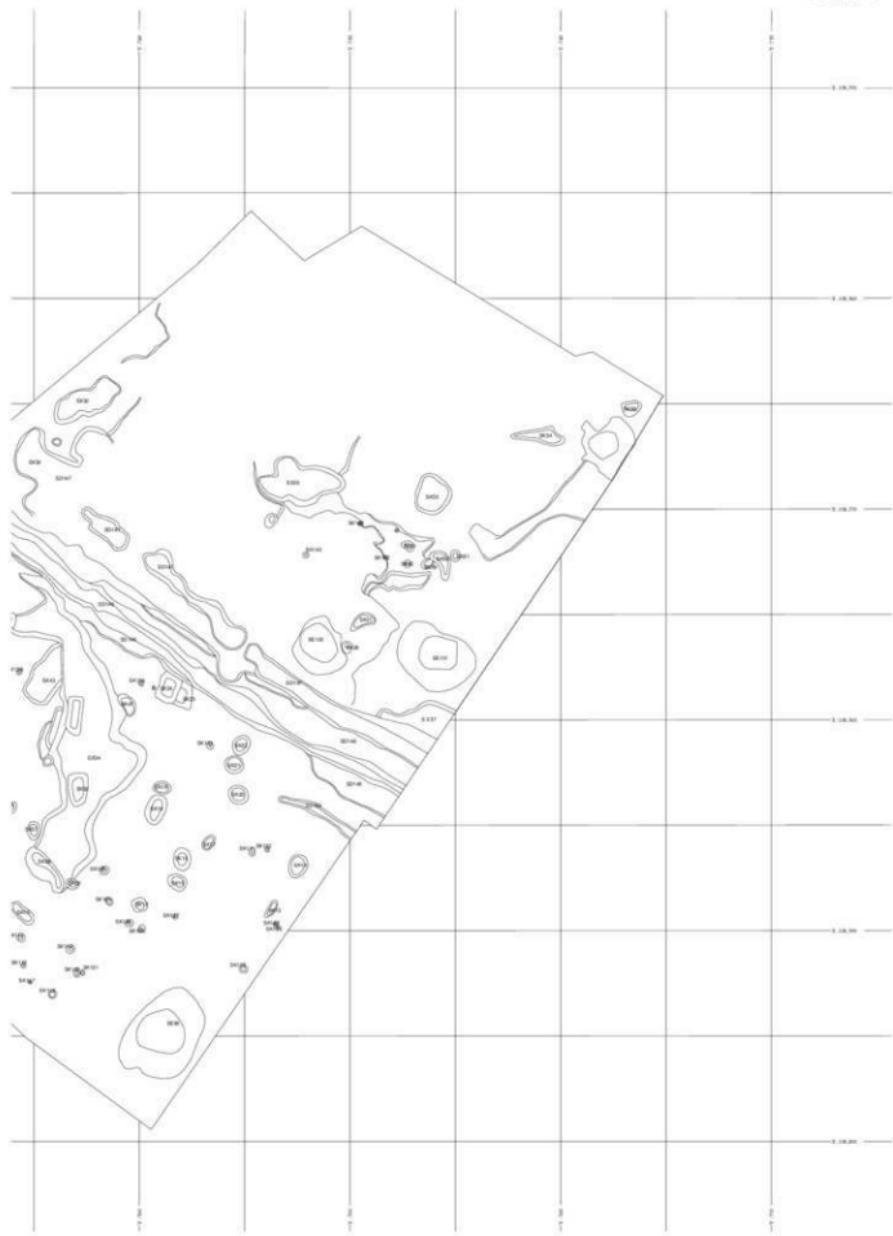
遺構図 12-2



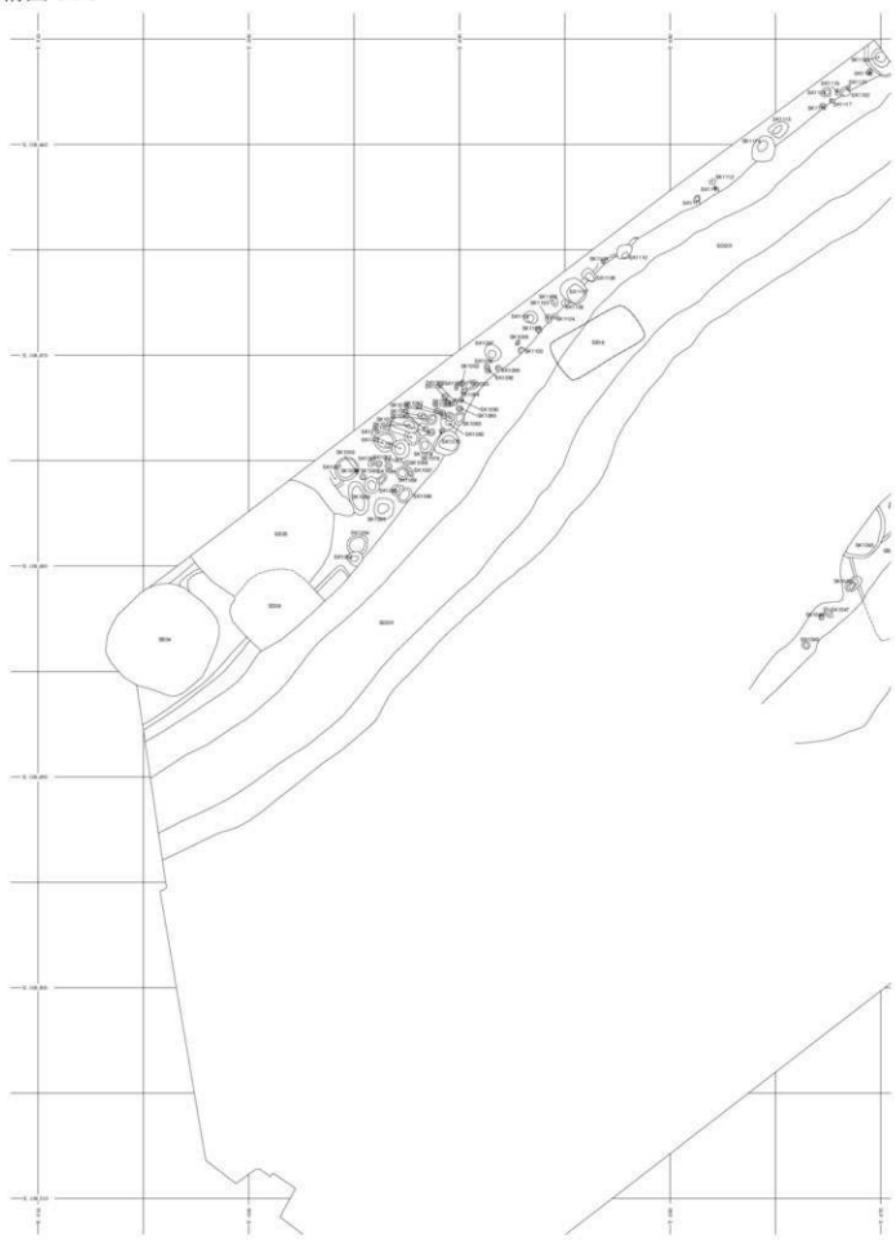
遺構図 13-1



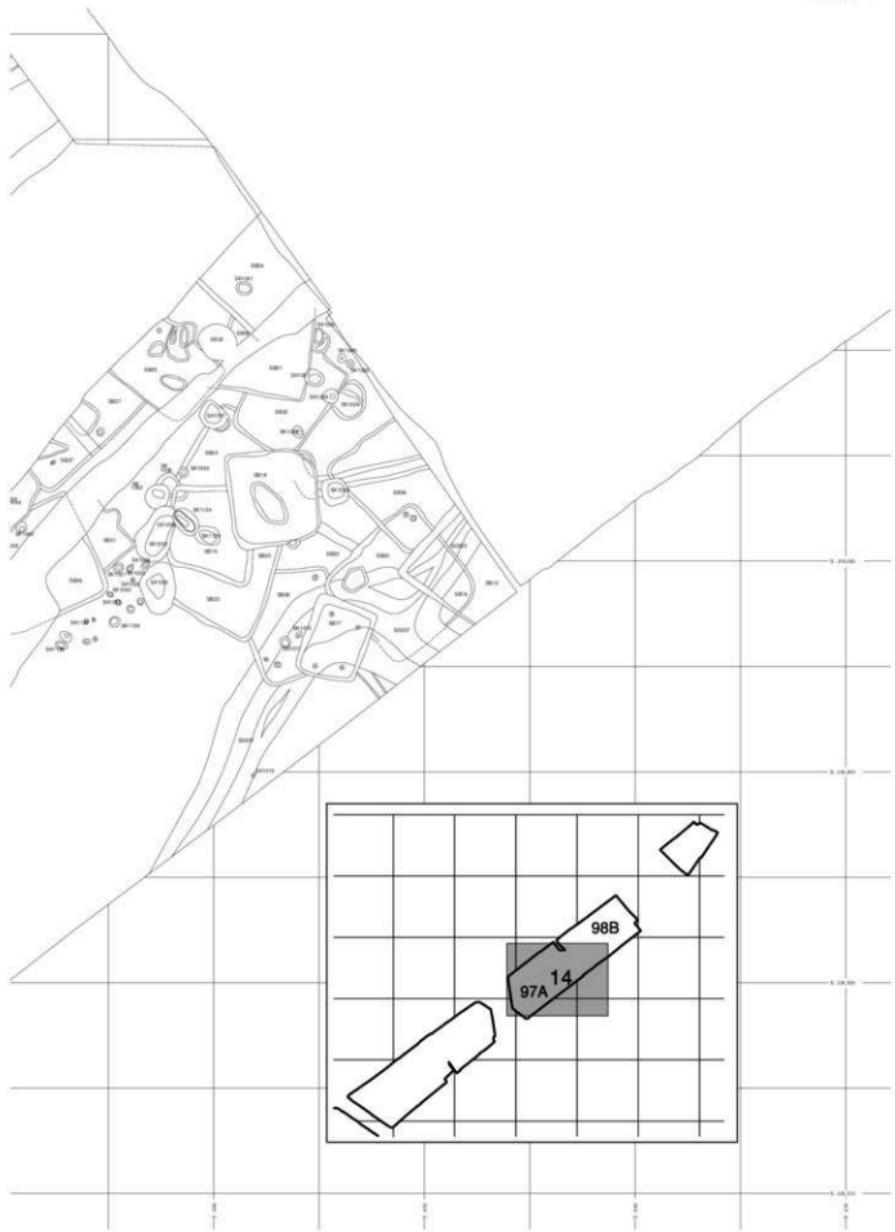
遺構図 13-2



遺構図 14-1



遺構図 14-2





1. SD201 97A区

2. SD201 98B区

3. SD201 97B区

4. SD201 97C区

5. SD201セクション 97A区



1. 古墳時代整穴住居群 97A区
2. 97A区下面造構



3. SB17
4. SD209

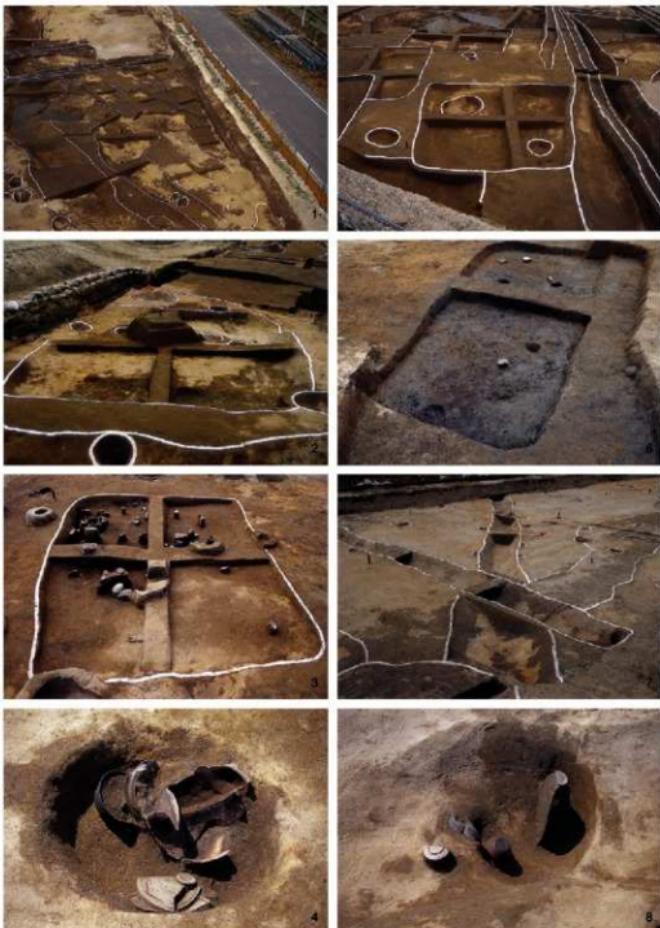


古墳時代溝群 9BB区



1. SD205
2. SD208

3. SD208
4. SD208



1. 古代聚穴住居群 98B区

2. SB11

3. SB33

4. 97E区 SK301

5. 奈良時代聚穴住居群 98B区

6. SB16

7. SD211

8. SK404

PL5



98A区



区画01



区画02・03



97F区



区画06



区画09



97E区



97D区



区画11～13



区画10・14



97C区



区画16・17・19

PL11



97B区



97A区



区画24・26



区画25



98B区



区画29・30



区画25・28



98C区



97D区 SK85



1



3



2



4

1. 97D区 SK85
2. 97D区 SK189

3. 97D区 SK179
4. 97D区 SK189



1. 97F区 SK302

2. 97F区 SK380

3. 97F区 SK669

4. 97F区 SK551

5. 97F区 SK353

6. 97F区 SK467

7. 97F区 SK684

8. 97F区 SK891



1. 97F区 SK333

2. 97F区 SK490

3. 97F区 SK1180

4. 97A区 SK851

5. 97F区 SK229

6. 97F区 SK1148

7. 97F区 SK1205

8. 97A区 SK855



SE02



1. SE01
2. SE16



3. SE11
4. SE20

PL19



SE20



SE22



1. SE22

2. SE25

3. SE24

4. SE23

5. SE22

6. SE25

7. SE24

8. SE23

PL21



SE23 • 24



SE23 • 24



1. SE30
2. SE32



3. SE32
4. SE32



SE32

PL23



SE34



SE34



1. SE34
2. SE34

3. SE35
4. SE36



SE35

PL25



SE36



SE36



SE37



SE37

PL27



SE46



SE46



SE52



SE53



1. SE54

2. SE55

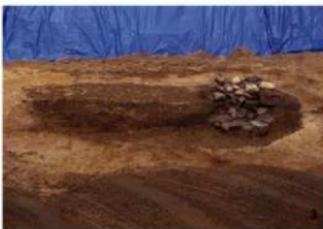
3. SE54

4. SE55

5. SE73~75

6. SE77

7. SE80



1. SE79
2. SE94
3. SE95

4. SE97
5. SE98

PL31



SE88



SE88



3



25



8



26



11



30



21



41



43



51



44



61



49



75



76



132



82



139



107



145



130



134



137



148



143



149



146



150







273



274



280



275



281



279



282



283



284



307



287



301



293



337



303



360



379



457



389



390



460



411



462



416



464









721



841



754



852



814



867



832



883



900



908



961



918



999



922



1002



940



1006



957



1009



1059



1213



1060



1219



1075



1233



1111



1178



1250



1263



1346



1264



1347



1265



1358



1283



1360



1287



1364



1368



1391



1369



1449



1380



1483



1383



1500



1527



1624



1565



1665



1613



1667



1617



1676



1678



1713



1694



1715



1695



1754



1697



1755



1800



1824



1809



1868



1819



1871



1820



1872



1823



1875



1887



1876



1910



1879



1914



1885



1919





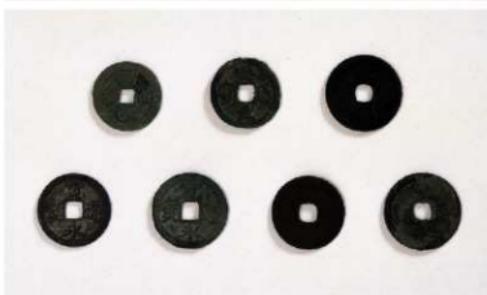
石製品・砥石



石製品 観・石臼他



金属制品



金属製品 銭貨



土錠



貿易陶磁



製塙土器



墨書き土器（古代）



墨書土器（中世）



墨書土器（近世）

報告書抄録

ふりがな	ごうがみいせき							
書名	郷上遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	酒井俊彦 鈴木正貴 永井邦仁 鬼頭剛 堀木真美子							
編集機関	財団法人 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦2002年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごうがみいせき 郷上遺跡	とよた し おじかもじょう 豊田市鶯鴨町 ごうがみ 郷上	23211	63430	35度 1分 24秒	137度 24分 30秒	19970401 ~ 19980930	27000m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
郷上遺跡	集落	古墳時代～平安時代 鎌倉時代～江戸時代	竪穴住居址42棟、溝11条、土坑など 屋敷地区画溝176条、井戸101基、土坑、掘立柱建物など	土師器、須恵器、灰釉陶器、製塙土器、埴輪など 山茶椀、土師器、瀬戸美濃窯産陶器、中国産磁器、石製品、木製品、金属製品など	戦国時代から近世前半の屋敷地			

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第98集

郷上遺跡

2002年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 サンメッセ株式会社